

池 中 高 之 山 橋 谷 遺 遺 遺 跡 跡 跡  
菊 川 市

平成24年度～令和元年度掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

静岡県埋蔵文化財センター



# 序

池之谷遺跡、中山遺跡、高橋遺跡は、静岡県の西部の菊川市に所在します。遺跡は菊川の支流である丹野川から枝流、牛淵川から分かれた小笠高橋川が形成した平地部分と周辺の丘陵部に位置しています。小笠高橋川の中流域、西側の丘陵上には池之谷遺跡、その東側の平地には中山遺跡、そこから南側の低地に高橋遺跡があります。

各遺跡とも周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていましたが、掛川浜岡線バイパスの整備に伴い、静岡県袋井土木事務所より埋蔵文化財の有無の照会を受け、平成24年に開始した試掘・確認調査で、遺跡の範囲が広がることがわかり、包蔵地の範囲が変更されることとなりました。

今回の発掘調査では、これまで大きな開発のなかった当地に、本格的な埋蔵文化財調査が行われ、具体的な遺跡の年代や様相が明らかとなりました。

中山遺跡は、小笠高橋川へ合流する河川近くの微高地で奈良時代から平安時代にかけての集落跡の一部が見つかり、その年代の土器が数多く発見されました。

高橋遺跡では中山遺跡とは異なる年代の弥生時代から古墳時代の集落の一部が発見されました。なかでも小笠高橋川の支流となる河川跡からは、おびただしい数の土器と石製品、木製品が見つかりました。

いずれも今回の調査で見つかった建物跡は、集落の中心域ではなく周辺域に過ぎません。しかし、この地区の歴史を解明していく上で、重要な遺跡群であり、今後この周辺における遺跡の所在を注視していく必要があります。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県袋井土木事務所掛川支所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2020年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長  
酒井敏明

# 例　　言

- 1 本書は静岡県菊川市高橋に所在する池之谷遺跡と中山遺跡、高橋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は（主）掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、静岡県文化・観光部文化局文化財課（平成30年度まで静岡県教育委員会文化財保護課）の指導のもと、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 池之谷遺跡、中山遺跡、高橋遺跡の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

## 試掘・確認調査

平成24年11月15～21日 実掘面積36m<sup>2</sup>（池之谷横穴群12m<sup>2</sup>、高橋遺跡隣接地24m<sup>2</sup>）

※試掘・確認調査は文化財保護課が実施。

## 本調査

平成25年12月17日～平成26年1月15日 調査対象面積100m<sup>2</sup> 実掘面積66m<sup>2</sup>（池之谷遺跡）

平成26年7月16日～平成27年3月26日 調査対象面積1,260m<sup>2</sup> 実掘面積940m<sup>2</sup>（中山遺跡）

平成27年7月17日～平成28年3月28日 調査対象面積730m<sup>2</sup> 実掘面積668m<sup>2</sup>（高橋遺跡）

平成28年8月26日～平成29年3月31日 調査対象面積340m<sup>2</sup> 実掘面積254m<sup>2</sup>（中山遺跡、高橋遺跡）

## 資料整理

平成26年9月12日～平成27年3月26日（池之谷遺跡）

平成28年8月26日～平成29年3月31日（中山遺跡、高橋遺跡）

平成29年5月2日～平成30年3月31日（中山遺跡、高橋遺跡）

平成30年5月18日～平成31年3月29日（中山遺跡、高橋遺跡）

令和元年5月17日～令和2年3月28日（池之谷遺跡、中山遺跡、高橋遺跡）

※資料整理には、保存処理期間、報告書刊行作業期間を含む。

- 4 調査体制は以下のとおりである。

## 平成25年度

所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治

総務課主幹兼事業係長 前田雅人 主幹兼総務係長 大坪淳子

総務課事業係 青木 修 橋野大輔

調査課主幹兼調査第一係長 及川 司 調査第一係主査 丸杉俊一郎

## 平成26年度

所長 赤石達彦 次長兼総務課長 長谷川明子 調査課長 中鉢賢治

総務課主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 大坪淳子

総務課事業係 青木 修 総務係 橋野大輔

調査課主幹兼調査係長 及川 司 調査係主幹 溝口彰啓

調査課調査係副主任 木崎道昭（資料整理担当） 調査係主査 大森信宏（保存処理担当）

## 平成27年度

所長 赤石達彦 次長兼総務課長 田中雅代 調査課長 中鉢賢治

総務課主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 大坪淳子

総務課事業係 青木 修 総務係 河合義治

調査課主幹兼調査係長 富樫孝志 調査係主幹 溝口彰啓

平成 28 年度

所長 堤 敏幸 次長兼総務課長 田中雅代 調査課長 中鉢賢治

総務課主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 土戸美樹

総務課事業係 磯部 望 総務係 河合義治

調査課主幹兼調査係長 富樫孝志 調査係主幹 中川律子 主査 岩崎しのぶ（資料整理担当）

平成 29 年度

所長 酒井敏明 次長兼総務課長 山本広子 調査課長 中鉢賢治

総務課総務班長 土戸美樹 総務班主査 磯部 望

調査課普及班長 藏本俊明 普及班主幹 中川律子 調査班主査 大森信宏（保存処理担当）

平成 30 年度

所長 酒井敏明 次長兼総務課長 山本広子 調査課長 中鉢賢治

総務課総務班長 土戸美樹 総務班主査 磯部 望

調査課普及班長 藏本俊明 普及班主幹 中川律子 調査班主査 大森信宏（保存処理担当）

平成 31 年度（令和元年度）

所長 酒井敏明 次長兼総務課長 中野克彦 調査課長 中鉢賢治

総務課総務班長 土戸美樹 総務班主査 島田真紀 総務班主事 杉村悠真

調査課普及班長 藏本俊明 普及班主幹 中川律子 調査班主査 大森信宏（保存処理担当）

5 本書の執筆は、東北大学名誉教授 鈴木三男氏、明治大学理工学部准教授 本多貴之氏、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社古環境研究所、木崎道昭、中川律子が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第 1～3、5～7 章 中川律子

第 4 章 木崎道昭

第 8 章 第 1 節 鈴木三男氏（東北大学名誉教授）

第 8 章 第 2 節 本多貴之氏（明治大学理工学部応用化学科准教授）

第 8 章 第 3 節 パリノ・サーヴェイ株式会社

第 8 章 第 4 節 株式会社古環境研究所

6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7 委託業務・委託研究については下記の期間に委託して実施した。

掘削等業務委託 沖開発株式会社

掘削等・遺跡測量等業務委託 株式会社イビソク

整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ（～平成 30 年度）

株式会社イビソク（平成 31 年度（令和元年度））

木製品樹種同定業務委託 東北大学名誉教授 鈴木三男氏

漆の自然科学的分析委託研究 明治大学理工学部応用化学科准教授 本多貴之氏

同定調査及び蛍光 X 線分析業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

石材分析調査業務委託 株式会社古環境研究所

8 発掘調査では以下の方々・機関に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

井鍋誉之 岩本 貴 鈴木三男 田村隆太郎 塚本和弘 本多貴之 松下徳男

丸杉俊一郎

（五十音順・敬称略）

- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VIII系を用いた国土座標、世界測地系（測地成果 2011）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。  
No. 29 地点 (X=-145910, Y=-36090) = (0, A)

遺構ごとの略号は下記のとおりである

S A 柵列・杭列 S B 掘立柱建物 S D 溝状遺構 S K 土坑 S P 小穴  
S R 自然流路 P 掘立柱建物・竪穴建物に伴う柱穴

- 3 出土遺物は3桁の通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた（遺跡略号：T I Y、T N K、T T H）。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構 1/50、土器 1/3、石器 1/3、木製品 1/2、1/4、1/8、1/10 を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 6 土層名は中山遺跡は第5章第1節の基本土層柱状図（第11図）、高橋遺跡は第6章第1節の基本土層柱状図（第50図）に表示した名称を用いる。
- 7 第3章第2節の周辺遺跡分布図（第3図）は国土地理院発行 1 : 25,000 地形図「掛川」、「御前崎」を複写し加工・加筆した。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法 .....	2
第2節 調査の経過 .....	4
第3章 地理的環境・歴史的環境	
第1節 地理的環境 .....	10
第2節 歴史的環境 .....	10
第4章 池之谷遺跡	
第1節 調査の方法と経過 .....	15
第2節 土層 .....	17
第3節 遺構 .....	19
第4節 遺物 .....	19
第5章 中山遺跡	
第1節 調査の概要 .....	22
第2節 遺構と遺物 .....	26
第6章 高橋遺跡	
第1節 調査の概要 .....	68
第2節 遺構と遺物 .....	71
第7章 まとめ	
第1節 遺跡周辺の調査と歴史 .....	203
第2節 出土木製品の樹種選択と製作 .....	205
第8章 自然科学分析の成果	
第1節 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材等の樹種 .....	209
第2節 高橋遺跡出土鞘尻および周辺遺跡出土柄頭他の漆の自然科学的分析 .....	235
第3節 高橋遺跡出土大型植物遺体・土器顔料蛍光X線分析 .....	253
第4節 中山遺跡・高橋遺跡出土石器・石製品の石材 .....	258

図版  
抄録・奥付

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第43図 1区包含層出土遺物実測図2	58
第2図 周辺地形図	3	第44図 2区包含層出土遺物実測図1	59
第3図 周辺遺跡分布図	12	第45図 2区包含層出土遺物実測図2	60
第4図 池之谷遺跡試掘確認調査・本調査区配置図	16	第46図 1区包含層出土遺物実測図3	61
第5図 土層断面図	18	第47図 2区包含層出土遺物実測図4	62
第6図 本調査区完掘状況図	18	第48図 3区包含層出土遺物実測図	62
第7図 出土土器実測図	19	第49図 高橋遺跡調査区配置図	69
第8図 出土ガラス製品実測図	20	第50図 基本土層図	70
第9図 出土鉄製品実測図	21	第51図 1・2区全体図	72
第10図 中山遺跡調査区配置図	23	第52図 1区拡大図1	73
第11図 基本土層図	24	第53図 1区拡大図2	74
第12図 1～3区全体図	25	第54図 1区拡大図3	75
第13図 1区全体図	27	第55図 1区拡大図4	76
第14図 1区拡大図1	28	第56図 2-1区拡大図1	77
第15図 1区拡大図2	29	第57図 2-1区拡大図2	78
第16図 1区拡大図3	30	第58図 2-1区拡大図3	79
第17図 1区拡大図4	31	第59図 2-2区拡大図	80
第18図 1区拡大図5	32	第60図 2-3区拡大図	81
第19図 2区全体図	33	第61図 1-1区SF1・2実測図	82
第20図 2区拡大図1	34	第62図 1-1区SF1・2出土遺物実測図	82
第21図 2区拡大図2	35	第63図 1-1区SD1実測図1	83
第22図 2区拡大図3	36	第64図 1-1区SD1実測図2	84
第23図 2区拡大図4	37	第65図 1-1区SD1実測図3	85
第24図 2区SH1実測図	38	第66図 1-1区土器集中箇所実測図	85
第25図 2区SX2・4、1区SX7・9、SP30出土遺物実測図	38	第67図 1-1区SD1・2・3、2-3区SD1出土遺物実測図	86
第26図 1区SF1実測図	39	第68図 1-2区SD1・2・3・4・5実測図	88
第27図 2区SD1・3・4実測図	40	第69図 2-1区SD10実測図	89
第28図 1区SD16・17実測図	41	第70図 2-2区SD15実測図	89
第29図 1区SD19実測図	42	第71図 1-1区SD5、2-1区SD10、2-2区SD14・15出土遺物実測図	90
第30図 2区SD3、1区SD20・24・25出土遺物実測図	43	第72図 1-1区SX2実測図	91
第31図 1区SD20・21実測図	44	第73図 1-1区SX1・2出土遺物実測図	92
第32図 1区SD23実測図1	45	第74図 1-1区SX3実測図	93
第33図 1区SD23実測図2	46	第75図 1-1区SX3・4・5・7出土遺物実測図	94
第34図 1区SD23出土遺物実測図	47	第76図 1-1区SX8実測図	95
第35図 1区SD24・25実測図	48	第77図 1-1区SX8出土遺物実測図1	96
第36図 3区全体図	51	第78図 1-1区SX8出土遺物実測図2	97
第37図 3区拡大図	52	第79図 1-1区SX8出土遺物実測図3	98
第38図 3区SD1実測図	53	第80図 2-1区SX13実測図	99
第39図 3区SD2・3実測図	54	第81図 2-1区SX13・15、3区SX19、1-2区SP9出土遺物実測図	99
第40図 3区SR1実測図	55	第82図 1-1区SX9実測図	100
第41図 3区SR1出土遺物実測図	55	第83図 1-1区SX10実測図	101
第42図 1区包含層出土遺物実測図1	57		

第84図 1-1・2-1区SD 8 実測図 1	101	第128図 3区拡大図 2	161
第85図 1-1・2-1区SD 8 実測図 2	102	第129図 3区拡大図 3	162
第86図 1-1・2-1区SD 8 実測図 3	103	第130図 3区拡大図 4	163
第87図 1-1・2-1区SD 8 実測図 4	104	第131図 3区SD15・17・18・19、SP36、SX17・19実測図	
第88図 1-1・2-1区SD 8 実測図 5	105		164
第89図 1-1区SX 9・10実測図	106	第132図 3区杭列 1 実測図	165
第90図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 1	108	第133図 3区杭列 2 実測図	166
第91図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 2	110	第134図 3区杭列 1・2 出土遺物実測図	167
第92図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 3	112	第135図 1-1区包含層出土遺物実測図 1	168
第93図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 4	114	第136図 1-1区包含層出土遺物実測図 2	169
第94図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 5	116	第137図 1-1区包含層出土遺物実測図 3	170
第95図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 6	118	第138図 1-1区包含層出土遺物実測図 4	171
第96図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 7	120	第139図 1-1区包含層出土遺物実測図 5	173
第97図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 8	122	第140図 1-1区包含層出土遺物実測図 6	174
第98図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 9	124	第141図 1-2区包含層出土遺物実測図 1	175
第99図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 10	126	第142図 1-2区包含層出土遺物実測図 2	176
第100図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 11	127	第143図 1-2区包含層出土遺物実測図 3	177
第101図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 12	128	第144図 1-2区土器集中箇所出土遺物実測図	178
第102図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 13	129	第145図 2-1区包含層出土遺物実測図	179
第103図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 14	130	第146図 2-2区包含層出土遺物実測図	180
第104図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 15	131	第147図 2-3区包含層出土遺物実測図	181
第105図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 16	132	第148図 3区包含層出土遺物実測図	182
第106図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 17	133	第149図 遺跡周辺の河川と主要街道	204
第107図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 18	134	第150図 掘立柱建物の扉部分模式図	206
第108図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 19	135	第151図 ED-XRF測定結果（ケイ素、硫黄、鉄、水銀）	
第109図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 20	136		239
第110図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 21	138	第152図 分析試料の全クロマトグラムと漆およびススに 関する抽出クロマトグラム	240
第111図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 22	140	第153図 漆のバイオマーカー部分のマススペクトル	240
第112図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 23	142	第154図 標準試料と今回の測定対象試料のm/z108の イオンクロマトグラム比較	241
第113図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 24	143	第155図 今回分析した試料の塗り工程イメージ図	242
第114図 1-1・2-1区SD 8 出土遺物実測図 25	144	第156図 ED-XRF測定結果（竪櫛、ケイ素、鉄）	248
第115図 1-2区SH 2 実測図	145	第157図 ED-XRF測定結果（大刀鞘尻、ケイ素、鉄）	249
第116図 1-2区SR 1 実測図	146	第158図 ED-XRF測定結果（盾（赤色）、ケイ素、硫黄、鉄、 水銀）	249
第117図 1-2区SR 1 出土遺物実測図	147	第159図 ED-XRF測定結果（盾（黒色）、ケイ素、鉄）	
第118図 1-2区SR 2 実測図 1	148		250
第119図 1-2区SR 2 実測図 2	149	第160図 八幡ヶ谷古墳のトータルイオンクロマトグラム	
第120図 1-2区SR 2 出土遺物実測図 1	150		251
第121図 1-2区SR 2 出土遺物実測図 2	151	第161図 八幡ヶ谷古墳のイオンクロマトグラム	252
第122図 1-2区SR 2 出土遺物実測図 3	152	第162図 赤彩土器（1-2区II層）の蛍光X線定性 スペクトル	254
第123図 1-2区SR 2 出土遺物実測図 4	154	第163図 赤彩土器（1-2区II層）の蛍光X線回析図	256
第124図 1-2区SR 2 出土遺物実測図 5	156		
第125図 1-2区SR 2 出土遺物実測図 6	157		
第126図 3区全体図	159		
第127図 3区拡大図 1	160		

## 挿写真目次

写真 1 中山遺跡調査状況	9	写真 20 反射光 200倍	237
写真 2 高橋遺跡調査状況	9	写真 21 透過光 500倍	237
写真 3 出土品復元作業	9	写真 22 反射光 500倍	238
写真 4 保存処理（後半作業）	9	写真 23 竪櫛 200倍 透過偏光	243
写真 5 出土木材顕微鏡写真 1	223	写真 24 竪櫛 500倍 透過光	244
写真 6 出土木材顕微鏡写真 2	224	写真 25 大刀鞘尻 透過光 200倍	244
写真 7 出土木材顕微鏡写真 3	225	写真 26 大刀鞘尻 透過光 500倍	245
写真 8 出土木材顕微鏡写真 4	226	写真 27 盾（赤色） 透過光 200倍	245
写真 9 出土木材顕微鏡写真 5	227	写真 28 盾（赤色） 透過光 500倍	246
写真 10 出土木材顕微鏡写真 6	228	写真 29 盾（黒色） 透過光 200倍	246
写真 11 出土木材顕微鏡写真 7	229	写真 30 盾（黒色） 反射偏光 500倍	247
写真 12 出土木材顕微鏡写真 8	230	写真 31 種実遺体	257
写真 13 出土木材顕微鏡写真 9	231	写真 32 石材同定試料写真 1	260
写真 14 出土木材顕微鏡写真 10	232	写真 33 石材同定試料写真 2	261
写真 15 出土木材顕微鏡写真 11	233	写真 34 石材同定試料写真 3	262
写真 16 出土木材顕微鏡写真 12	234	写真 35 石材同定試料写真 4	263
写真 17 200倍 透過光（木胎部存在時）	235	写真 36 石材同定試料写真 5	264
写真 18 500倍 透過光（木胎部存在時）	236		
写真 19 透過光 200倍	236		

## 挿表目次

第1表 池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡調査面積一覧表	4	第7表 遺構観察表	183
.....		第8表 出土遺物観察表	184
第2表 本調査工程表	6	第9表 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材の樹種	221
第3表 周辺遺跡分布図掲載遺跡一覧表	13	.....	
第4表 出土遺物観察表	21	第10表 種実同定結果一覧表	253
第5表 遺構観察表	63	第11表 中山遺跡・高橋遺跡石材一覧表	258
第6表 出土遺物観察表	64	第12表 中山遺跡・高橋遺跡石材同定結果	259

## 写真図版目次

図版 1 1 池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡遠景 (南西から)	2 池之谷遺跡 出土土器 1
2 池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡遠景 (南から)	3 池之谷遺跡 出土土器 2
図版 2 1 池之谷遺跡遠景 (南から)	4 池之谷遺跡 出土ガラス小玉
2 池之谷遺跡全景	5 池之谷遺跡 出土鉄製品
図版 3 1 池之谷遺跡 完掘状況 (北東から)	図版 4 1 中山遺跡遠景 (南東から)
	2 中山遺跡遠景 (北東から)

- 図版5 1 高橋遺跡遠景（北から）  
2 高橋遺跡遠景（北東から）
- 図版6 1 高橋遺跡 1-2区SR 2出土土器  
2 高橋遺跡 1-1区SX 8出土土器
- 図版7 1 高橋遺跡 1-1区・2-1区SD 8出土土器  
2 高橋遺跡 1-1区・2-1区SD 8出土  
木製品
- 【中山遺跡】**
- 図版8 1 1区 全景（北から）  
2 1区 全景（南から）
- 図版9 1 1区 全景  
2 2区 全景（北から）
- 図版10 1 2区 全景（北から）  
2 2区 全景
- 図版11 1 3区 全景（南から）  
2 3区 全景
- 図版12 1 2区 SD 1～4完掘状況（南から）  
2 2区 SD 1～4完掘状況（北から）
- 図版13 1 2区 SX 2完掘状況（南から）  
2 2区 SX 2土器出土状況  
3 1区 SX 7土器出土状況  
4 2区 包含層土器出土状況  
5 2区 包含層土器出土状況
- 図版14 1 2区南 完掘状況（南から）  
2 2区 SH 1完掘状況（北から）  
3 2区 SH 1全景（南から）
- 図版15 1 2区 SD 9～11完掘状況（南西から）  
2 1区 SD16・17完掘全景（西から）  
3 1区 SD19・20完掘状況（北西から）  
4 1区 SD21・22、SP20～27完掘全景（南東から）  
5 1区 SD19、SX 7完掘状況（南から）  
6 1区 SD20遺物出土状況
- 図版16 1 1区 SD23～25完掘状況（北西から）  
2 1区 SD23東端遺物出土状況（北から）  
3 1区 SD23東端遺物出土状況（西から）  
4 1区 SD23東壁土層断面  
5 1区 SD24・25付近完掘状況（北から）
- 図版17 1 3区 完掘状況（南から）  
2 3区 SR 1遺物出土状況  
3 3区 SR 1完掘状況（東から）  
4 3区 SD 1完掘状況（東から）  
5 3区 SD 2・3完掘状況（南から）
- 図版18 出土遺物 1
- 図版19 出土遺物 2
- 図版20 1 3区 SR 1出土土器  
2 出土遺物 3

- 【高橋遺跡】**
- 図版21 1 1-1区北上層 SD 1、SF 1・2完掘状況（南から）  
2 1-1区北上層 SD 1遺物出土状況（東から）  
3 1-1区北上層 SX 2遺物出土状況（西から）  
4 1-1区北上層 SF 1遺物出土状況  
5 1-1区北上層 SF 2遺物出土状況（東から）
- 図版22 1 1-1区北 完掘状況（南から）  
2 1-1区北 w29グリッド周辺完掘状況（南西から）  
3 1-1区北 SX 8周辺完掘状況（南西から）
- 図版23 1 1-1区北 完掘状況（北から）  
2 1-1区北 SD 5遺物出土状況（東から）  
3 1-1区北 SD 7完掘状況（南西から）  
4 1-1区北 SD 3遺物出土状況  
5 1-1区北 SP 7遺物（柱）出土状況（東から）
- 図版24 1 1-1区南 完掘状況  
2 1-1区南 w33グリッド杭周辺完掘状況（南西から）  
3 1-1区南 SD 9周辺完掘状況（南西から）  
4 1-1区南 完掘状況（北から）
- 図版25 1 1-1区南 SD 8周辺完掘状況（南から）  
2 1-1区南 SX 9（SD 8最上層）遺物出土状況（東から）  
3 1-1区南 SX10（SD 8最上層）遺物出土状況（西から）  
4 1-1区南 SD 8遺物出土状況（南西から）  
5 1-1区南 SD 8遺物出土状況（北東から）
- 図版26 1 1-1区南 SD 8遺物出土状況（東から）  
2 1-1区南 SD 8遺物出土状況（北東から）  
3 1-1区南 SD 8下層木製品出土状況（東から）  
4 1-1区南 SD 8下層木製品出土状況（西から）  
5 1-1区南 SD 8完掘状況（南西から）  
6 1-1区南 SD 8完掘状況（南東から）
- 図版27 1 1-2区・2-3区 遠景（南西から）  
2 1-2区・2-3区 全景
- 図版28 1 1-2区 完掘状況（北から）  
2 1-2区 完掘状況（南東から）
- 図版29 1 1-2区 SD 1～3完掘状況（東から）  
2 1-2区 SD 2土器出土状況  
3 1-2区 SD 4完掘状況（東から）  
4 1-2区 SD 4土器出土状況  
5 1-2区 SR 1完掘状況（東から）  
6 1-2区 SR 1土器出土状況  
7 1-2区 包含層土器出土状況  
8 1-2区 SX 1土器出土状況
- 図版30 1 1-2区 SH 2完掘状況（東から）

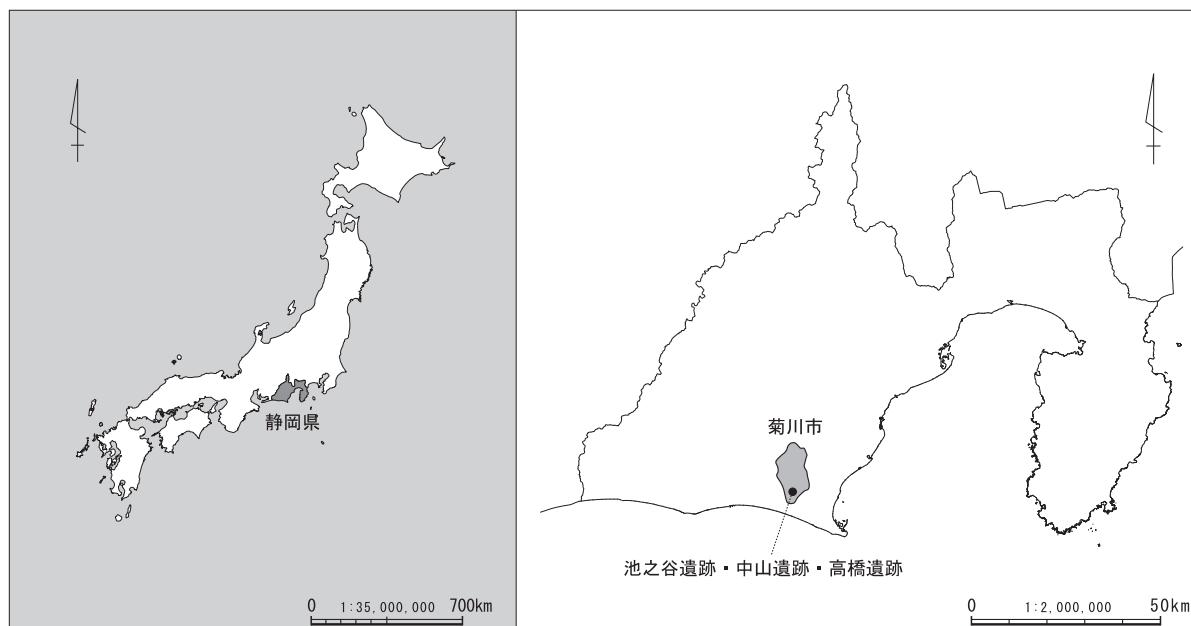
2	1-2区 SP 1 (SH 2) 完掘状況	4	3区北 杭列2検出状況（東から）
3	1-2区 SP 3 (SH 2) 完掘状況	5	3区南 中央部完掘状況（西から）
4	1-2区 SP 9 (SH 2) 完掘状況	6	3区南 南端部完掘状況（南西から）
5	1-2区 SP 2 完掘状況	図版41	遺構出土遺物1
図版31	1 1-2区 SR 2 土器出土状況（東から）	図版42	遺構出土遺物2
2	1-2区 SR 2 土器出土状況	図版43	遺構出土遺物3
3	1-2区 SR 2 土器出土状況	図版44	遺構出土遺物4
4	1-2区 SR 2 土器出土状況	図版45	遺構出土遺物5
5	1-2区 SR 2 完掘状況	図版46	遺構出土遺物6
図版32	1 2-1区北 全景（東から）	図版47	遺構出土遺物7
2	2-1区北 全景	図版48	遺構出土遺物8
図版33	1 2-1区北 完掘状況（南から）	図版49	遺構出土遺物9
2	2-1区北 SD 8付近完掘状況	図版50	遺構出土遺物10
3	2-1区北 t 35+4杭周辺完掘状況 (南西から)	図版51	遺構出土遺物11
4	2-1区北 SX13・14周辺完掘状況（南西から）	図版52	遺構出土遺物12
5	2-1区北 t 36杭周辺完掘状況（南西から）	図版53	遺構出土遺物13
図版34	1 2-1区北 SD 8木製品出土状況（北東から）	図版54	遺構出土遺物14
2	2-1区北 SD 8木製品出土状況（北西から）	図版55	遺構出土遺物15
3	2-1区北 SD 8土器出土状況（東から）	図版56	遺構出土遺物16
4	2-1区北 SD 8完掘状況（北東から）	図版57	遺構出土遺物17
5	2-1区北 SD10土器出土状況（西から）	図版58	遺構出土遺物18
6	2-1区北 SX13土器出土状況（南西から）	図版59	遺構出土遺物19
図版35	1 2-1区南 全景（南西から）	図版60	遺構出土遺物20
2	2-1区南 完掘状況（東から）	図版61	遺構出土遺物21
3	2-1区南 SD13完掘状況（南東から）	図版62	遺構出土遺物22
図版36	1 2-2区 全景（南から）	図版63	遺構出土遺物23
2	2-2区 SD14完掘状況（北東から）	図版64	遺構出土遺物24
3	2-2区 SD15土器出土状況（東から）	図版65	遺構出土遺物25
図版37	1 2-3区 全景（南から）	図版66	遺構出土遺物26
2	3区北 全景（北東から）	図版67	遺構出土遺物27
図版38	1 3区北 全景	図版68	遺構出土遺物28
2	3区北 完掘状況（北東から）	図版69	遺構出土遺物29
4	3区北 完掘状況（南西から）	図版70	遺構出土遺物30
図版39	1 3区南 完掘状況（北から）	図版71	包含層出土遺物1
2	3区南 完掘状況（南から）	図版72	包含層出土遺物2
図版40	1 3区北 杭列1・2検出状況（北東から）	図版73	包含層出土遺物3
2	3区北 杭列1・2検出状況（南西から）	図版74	包含層出土遺物4
3	3区北 杭列1検出状況（西から）	図版75	包含層出土遺物5
		図版76	包含層出土遺物6

# 第1章 調査に至る経緯

静岡県道掛川浜岡線（県道37号線）は、掛川駅前からJR東海道線にほぼ平行して菊川駅前を経由した後、菊川に沿う形で南下し、掛川と御前崎を結ぶ主要道路である。この道路は第1次緊急輸送路に指定され、地域の経済活動を支えるとともに、地域間交流にも極めて重要な役割を担っている。しかし、掛川浜岡線は道路際に人家が密集している上道幅が狭く、生活交通と通過交通が混在し、近年の大型車両の増加に伴い交通環境が悪化していた。このため静岡県では防災機能の強化、交通渋滞の緩和と歩道や右折レーンを設置し、渋滞の解消や安全性の向上を目的として、掛川浜岡線バイパスの道路整備事業を計画した。

この道路整備事業の一環として、池之谷横穴群の近接地や中山遺跡、高橋遺跡内に道路建設が予定されたため、静岡県袋井土木事務所と静岡県教育委員会文化財保護課（当時）は遺跡の取り扱いについて協議した。道路建設対象範囲には中山遺跡、高橋遺跡他、遺跡の存在が想定される箇所が多く存在することから、予定地内で試掘・確認調査を実施し、記録保存のための本発掘調査を実施する必要があるかどうかの取り扱いを決定することとした。この協議を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課が道路予定地内で試掘確認調査を実施したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地である中山遺跡と高橋遺跡、池之谷横穴群に近接する場所で新たに遺構・遺物を確認した。菊川市教育委員会と協議の結果、菊川市高橋地区の池之谷横穴群近接地で新たに確認した遺跡については「池之谷遺跡」とした。試掘確認調査の結果、3遺跡が路線内に該当することになったが、「池之谷遺跡」については、先行して記録保存のための本発掘調査を実施することとした。さらに、「中山遺跡」及び「高橋遺跡」については、やむを得ず遺跡が破壊されることとなったことから、記録保存のための本発掘調査（以下、本発掘調査）の実施を決定した。

本発掘調査は、静岡県教育委員会と袋井土木事務所の協議により、平成25年度から静岡県埋蔵文化財センターが本発掘調査を受託して実施することとした。



第1図 遺跡位置図

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

#### 1 試掘・確認調査の方法

試掘・確認調査は、（主）掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業対象箇所が広範囲に亘ること、その対象地周辺での調査例が少なく未周知の遺跡が存在する可能性が高いことから、対象範囲内におおむね50mに1箇所試掘坑を設けて試掘調査を実施し、周知の中山遺跡、高橋遺跡範囲内は20～30mに1箇所試掘坑を設けることとした。丘陵部の池之谷横穴群近接地は頂部にトレーンチを設定して試掘調査を行った（第4図）。

試掘・確認調査は、基本的に重機（バックホウ）を用いて、表土除去を実施した後で、人力にて遺構・遺物の確認を行う方法を採用した。遺構・遺物の有無に関係なく、調査箇所及び土層図の作成と、写真撮影を行い、遺構が確認された試掘坑については平面概略図を作成し、本発掘調査に備えた。

#### 2 現地調査

現地調査は、静岡県教育委員会の「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき、文化財保護審議会刊行の『発掘調査の手びき』（文化財保護委1966）及び文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』（文化庁2010）を手引きとしながら、現地調査を実施した。

**遺構掘削など** 表土等除去は、重機（バックホウ）を用いて実施した。包含層掘削・遺構検出・遺構掘削は発掘作業員の人力にて実施し、包含層掘削は出土する遺物に留意しながら慎重に掘削した。包含層の遺物については、グリッド別層位ごとに取り上げた。遺構検出は包含層掘削後土色や土質の違い、遺物の有無などを基準に人力にて精査した。遺構掘削は、遺構検出で確認した遺構について、大型のものについては十字に土層帯を残し、小型のものは一文字に土層帯を残し、遺物と土層に留意しながら掘削した。

**基準点** 調査の基準となる座標杭（以下、グリッド杭）の設置は、国土座標に基づき、近くの2級基準点から、遺跡近くに3・4級基準点・水準点を設置し、その基準点をもとに調査区内に国土座標に基づき、10×10mを単位としてグリッド杭を設置した。

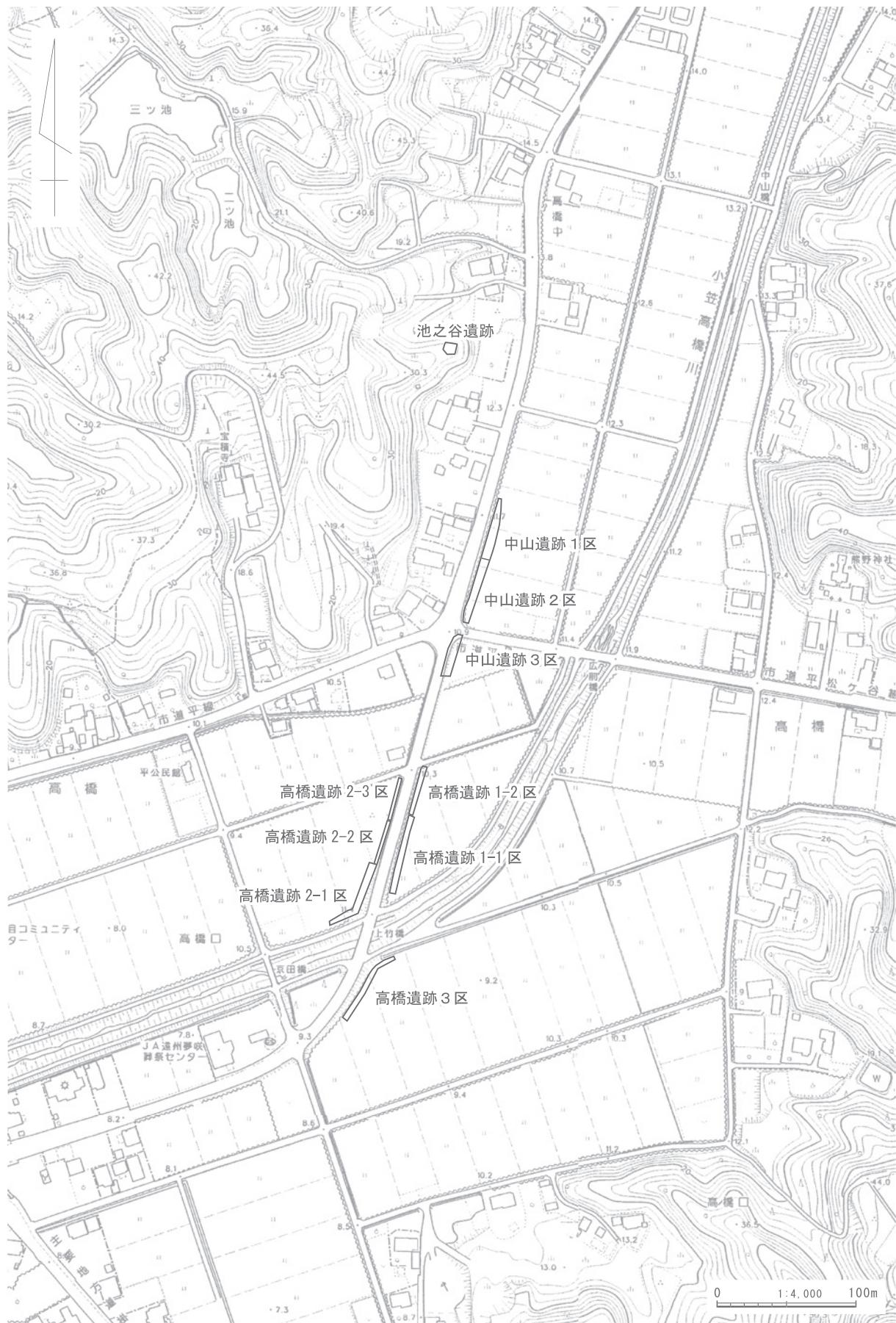
**実測** 遺構の実測は、株式会社イビソクに委託し、空中写真測量を主にして実施した。測量はグリッド杭を基準とし、トータルステーション（以下、TS）や手実測等で、遺跡に関する図面を作成した。

**写真撮影** 写真撮影は、調査区の全体写真については、調査区ごとにラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影（6×4.5カラーリバーサル・白黒フィルム他）と、ローリングタワー等を用いた大判カメラ（6×7カラーリバーサル・白黒フィルム）による写真撮影を併用した。

遺構の写真撮影は、中判カメラ（6×7カラーリバーサル・白黒フィルム）を中心撮影した。また、公開普及用として、デジタルカメラにて一部の遺構について撮影した。

**基礎整理** 基礎整理作業は、現地調査の中で実施した。出土した遺物の洗浄、台帳作成作業および記録類（実測図・写真）の整理収納と台帳作成を実施した。

**応急保存処置** 木製品の応急保存処理は、取上げ後洗浄を行った上で、シーラーパックまたは簡易な袋詰めで水没を行い、のちの保存処理作業に備えた。



第2図 周辺地形図

### 3 資料調査・報告書刊行作業及び保存処理

資料整理及び報告書刊行作業は、静岡県教育委員会の「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき、文化財保護委員会刊行の『発掘調査の手引き』（文化財保護委1966）及び文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』（文化庁2010）を手引きとしながら、現地調査を実施した。

**資料調査・報告書刊行作業** 出土品の整理作業は、注記後、分類・仕分を行った上で、時期ごと・種別ごとに分類し、その中で接合・復原が必要なものを選別した。接合・復原を行った後、実測・版組・トレース・観察表作成とともに、写真撮影を行い、写真の版組を行った。記録類の整理作業は、遺構編集図の作成、版組・トレース作業を実施し、一部の遺構については観察表を作成した。

なお、遺物の写真撮影については、個別遺物、集合写真ともに基本的に中判カメラ（6×7カラーリバーサル・白黒フィルム）を用いて撮影することとした。

これらの作業と並行して、報告書の原稿執筆を行い、原稿と図面・写真が出来上がった段階で、報告書刊行のための編集作業することとした。印刷製本は委託作業として実施し、業者決定後校正を行い、報告書を刊行することとした。

**保存処理** 保存処理については木製品の出土数が多いことから、3箇年の期間をかけて、前半処理（処理前記録～安定化処理）と後半処理（修理～梱包・収納）を交互に行うこととした。初年度は実測・写真撮影が終了した木製品を優先して実施した。保存処理前記録の作成後、PEG含浸・真空凍結乾燥を行い、遺物の形状を安定化し、修復を行った。修復終了後、保存処理後の記録の作成を行い、保存処理を終了することとした。

## 第2節 調査の経過

### 1 確認調査の経過

確認調査は、静岡県教育委員会文化財保護課（現・静岡県文化・観光部文化局文化財課）が実施した。

**池之谷横穴群・池之谷遺跡** まず、菊川市高橋地区で、平成24年11月15～21日に3本の試掘溝を設定し、人力で表土等除去を実施した後で、遺構の有無の確認を実施した。まず丘陵頂部には十字に試掘溝を配し、地表下0.4mで弥生土器が出土し、溝状遺構を確認した。遺構検出面でガラス小玉が出土したことから、当初、丘陵頂部に方形周溝墓が存在する可能性も示唆された。この他、丘陵斜面にはテラス状部分があったことから、ここにも試掘溝を設定し横穴の有無を確認した。地表下1.2mまで掘削し、近年による造成と判明した。また横穴を再利用している造作もなく、遺物もなかったことから、当該斜面地には横穴は存在しないと考えられた。この結果を受けて、静岡県教育委員会と菊川市教育委員会が

第1表 池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡調査面積一覧表

調査年度	遺跡名	調査区	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	面積 (四捨五入)
H25年	池之谷遺跡		平成25年12月17日～平成26年1月15日	66.123	66
H26年	中山遺跡	1区	平成27年1月5日～平成27年2月26日	460.04	460
		2区	平成26年7月16日～平成26年12月26日	480.025	480
H27年	高橋遺跡	1-1区	平成27年10月13日～平成27年12月19日	202.82	203
		2-1区	平成27年12月21日～平成28年2月9日	193.53	194
		2-2区	平成28年1月26日～平成28年2月9日	21.14	21
		3区	平成28年2月4日～平成28年3月7日	249.61	250
H28年	中山遺跡	3区	平成28年11月30日～平成29年3月7日	147.27	147
	高橋遺跡	1-2区	平成28年12月19日～平成29年3月7日	84.84	85
		2-3区	平成29年1月16日～平成29年3月15日	21.89	22
合計				1927.288	1928

協議し、遺構が検出され、遺物が出土することから遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地とすることとし、平成24年に「池之谷遺跡」と新規登録された。遺構が確認され、遺物も出土したことから、本調査対象となることが決定した。

**高橋遺跡近接地（中山遺跡）** 高橋遺跡周辺では、現掛川浜岡線から小笠高橋川の間の道路拡幅対象範囲内に4箇所の試掘坑を設定し、遺跡の有無、遺構の密度、遺構面数を確認するための調査を実施した。確認調査は池之谷横穴群と並行して平成24年11月15～21日に行った。人力にて表土除去を実施した後、遺構・遺物の確認を行った。水田部分に設定した4箇所の試掘坑のうち、試掘坑2～4において小穴、土坑、溝状遺構が認められた。遺物は同じく試掘坑2～4では複数の遺物包含層が認められ、土師器、須恵器、灰釉陶器等が出土した。遺構面は地表下0.4～0.8mで1面確認され、奈良～平安時代にかけての集落遺跡と推測された。一方、北側の試掘坑1では近現代の造成と丘陵の崩落土が堆積し、遺物も散漫な状況であった。確認調査の結果、地形が南西に向かって低く傾斜しており、標高の低い試掘坑4では複数の遺物包含層が認められた。遺構面はいずれも1面確認され、黄灰色粘土層上面で溝状遺構や小穴を検出した。遺構は水田部分一帯に広がっていることが推測された。静岡県教育委員会と菊川市教育委員会の協議により、今後、埋蔵文化財包蔵地の見直しも含みつつ、周知の高橋遺跡の範囲として、本調査対象となることが決まった。これにより調査対象は平成24年度に遺構が確認された箇所とし、順次調査を実施することとした。

**中山遺跡・高橋遺跡** 土地の買収が終了した平成25年度に4m四方の試掘坑を3箇所設定し、平成26年1月27日に確認調査を実施した。人力による表土等除去後、今回の試掘坑で遺構、遺物が確認されたのは試掘坑1、3であった。地表面から最大1.8mの深さまで掘削し、遺跡の広がりや内容を確認した。試掘坑1では地表下0.3mで、厚さ0.3mの遺物包含層が認められ、灰色粘土上面で溝状遺構を検出した。遺物は弥生土器が多く出土し、弥生時代の遺構と想定された。試掘坑3では地表下0.8mで、厚さ0.2mの遺物包含層が見られ、須恵器が少量出土した。この結果、試掘坑2を境に南側は弥生時代の遺跡、北側では古墳時代以降の遺跡が展開していると判断され、この範囲も本発掘調査対象とすることが決定した。

なお、これまでの確認調査の結果を受けて、静岡県教育委員会と菊川市教育委員会とで協議し、平成28年度に高橋遺跡と中山遺跡の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行った。

## 2 現地調査の経過

### (1) 調査の経過の概要

現地調査は、調査対象地が全長500mにわたること、事業該当地内の土地の買収状況や工事着手と並行していく工程等を考慮し、さらに3つの遺跡が関係することから、3遺跡10調査区に区分して、発掘調査を実施した。

第1年次調査は、平成25年度、平成25（2013）年12月17日～平成26年1月15日に池之谷遺跡の調査を実施した（第2図）。

第2年次調査は、平成26（2014）年度、平成26年7月16日～平成27年3月26日に中山遺跡1区と2区の調査を実施した。

第3年次調査は、平成27（2015）年度、平成27年7月17日～平成28年3月28日に高橋遺跡の1～1区、2～1区、2～2区、3区の4箇所の調査を実施した。

第4年次調査は、平成28（2016）年度、平成28年8月26日～平成29年3月31日に中山遺跡3区、高橋遺跡1～2区、2～3区の調査を実施した。

以下、第1年次調査から順に、調査の経過を報告する。

### (2) 第1年次調査（平成25年度）

第1次調査（平成25年度）は、平成25年12月17日～平成26年1月15日に実施した。

**池之谷遺跡** 池之谷遺跡は平成24年度に新規登録された。翌年の平成25年12月17日より人力による表土等除去を開始した。包含層掘削を経て、26日から遺構検出を行った。年末年始の休業期間をはさみ、平成26年1月6日に再開し、墓の主体部と想定した落ち込み（SX01と呼称）の調査を開始した。しかしこのSX01は後述するように極めて新しい時代の搅乱であることが調査中に判明した。その他の落ち込みも、調査の結果、新しい時代の搅乱であることが判明したため、全て掘り上げた。1月15日に空中写真撮影を行い、人力による埋め戻しを行って調査を終了した。

### (3) 第2年次調査（平成26年度）

第2次調査（平成26年度）は、平成26年7月16日に調査のための準備を開始した。

**中山遺跡2区** 1区に先行して、平成26年10月14日より調査区東側に防塵ネットを設置し、同15日から重機（バックホウ）による表土除去を開始した。重機による表土除去が終了したところから、人力で法面を整形し、排水溝を切り回した。10月30日に表土除去が完了した後、11月5日より人力による包含層掘削を開始した。11月13日にはグリッド杭を設置し、包含層掘削と、本格的な遺構検出を実施し、確認できた遺構から精査し、11月21日より遺構掘削を始めた。12月9日には南側にまとまっていた上層遺構の写真撮影をローリングタワー上から撮影し、引き続き測量（図化）を行った。翌日より再度、南半部の遺構検出と遺構掘削を進めた。12月19日に高所作業車による空中写真撮影と遺構測量等を実施し、同22日に基本土層図を作成した。12月24～26日に重機により埋め戻し、第1面の調査を終了した。

**中山遺跡1区** 2区の調査が終了した後、1区は平成27年1月5日午前に調査のための場内準備から開始した。同日午後より重機（バックホウ）による表土除去を実施した。重機による表土除去が終了したところから、人力で法面を整形し、排水溝を切り回した。ベルトコンベアを設置後、1月16日から発掘作業員による包含層の掘削を開始し、それが終了した後、同28・29日に遺構検出を行った。検出した遺構は北側から精査・掘削を開始した。調査の終了した遺構は2月4日より実測図作成、完掘状況の写真を撮影した。同13日に空中写真撮影・測量が完了し、同16日に土層図を作成して、1区の記録保存作業を終了した。2月18日から重機による埋め戻しに入り、同24・25日に導水管を復旧し、26日に現地詰所を撤去した。

第2表 本調査工程表

遺跡名	調査区	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
試掘・確認調査									
池之谷遺跡									
中山遺跡	1								
中山遺跡	2								
高橋遺跡	1-1								
高橋遺跡	2-1								
高橋遺跡	2-2								
高橋遺跡	3								
中山遺跡	3								
高橋遺跡	1-2								
高橋遺跡	2-3								
基礎整理									
資料整理・報告書刊行									

#### (4) 第3年次調査（平成27年度）

第3年次調査は、平成27年7月17日より調査に係る準備を始め、平成28年3月28日までの期間、事業を行った。

**高橋遺跡1-1区** 調査区内の除草等準備の後、10月13日より重機による1-1区北側の表土除去を開始した。近隣用地内で廃土置場が確保できなかつたことから、調査区の半分を発掘調査して、残る半分に廃土を仮置きする方法で行った。同20日はグリッド杭を打設し、人力による法面整形と周囲へ排水溝を切り回した。並行して同21日より包含層の掘削を開始した。11月5日に遺構を検出し、確認できた遺構から、順次、遺構掘削を実施し、同12・13日に写真撮影・図化を行つた。同16・17日に北側を埋め戻し、引き続き11月20日より南側の表土除去を取り掛かった。同24日にグリッド杭を設置し、法面整形と排水溝を切り回しながら包含層掘削を行つた。12月4日からは遺構検出・遺構掘削に入り、遺構掘削が終了した同9日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・平面図測量を実施した。合わせて高所作業車による撮影も実施した。補測調査が終了した12月15日から南側を埋め戻して、19日に1-1区の調査を終了した。

**高橋遺跡2-1区** 1-1区と同様、調査区を南北に分割して半分ずつ発掘調査する方法をとつた。まず2-1区北側の表土除去は12月21日から重機による表土除去を開始し、22日に終了した。法面整形と排水溝を切り回しながら、同25日にグリッド杭を打設した。年明け1月6日からは人力による包含層掘削を開始し、7日には遺構検出と遺構掘削を行つた。個々の遺構から出土した遺物を取り上げながら、出土状況等の写真撮影と図化を進めた。特に流路状の遺構から木製品が集中して出土したことから、位置を計測しながら出土状況の写真を撮影した。流路状遺構の掘削が終了してから、1月21日に北側の空中写真撮影を実施した。つづく南側の表土掘削は同25日より開始した。調査前準備の後、28日より包含層掘削を行つた。2月4日からは遺構検出・遺構掘削を行い、完全に掘り終わったところから完掘状況の写真を撮影した。同8日には2-1区南側と2-2区と、まとめて測量することとなつた。翌日9日には重機により埋め戻しを行い、2-1区南側の調査を終了した。

**高橋遺跡2-2区** 2-2区の表土除去は、2-1区の表土除去完了後の1月26日から引き続き行つた。調査区は狭小であることから、排水溝掘削は湧き水を処理する簡易な排水溝とした。2月2日には包含層掘削に入った。同5日には遺構検出・遺構掘削を行い、写真撮影等の記録を取つた後、8日には測量を実施した。翌日9日には重機による埋め戻しを行い、2-1区南側と同時に調査を完了した。

**高橋遺跡3区** 3区は2-1区や2-2区の調査と並行して、2月4日より北側の表土除去を開始した。8・9日には法面を保護し、排水溝を切り回し、終了したところから包含層を掘削し始めた。16日には遺構検出を行い、18日からは遺構掘削を開始した。22日はラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と完掘状態の測量を実施した。翌23日には遺物を取り上げ、基本土層図を作成し、午後から埋め戻しながら、3区南側の表土掘削を始めた。26日からは包含層掘削を行つた。遺構・遺物が希薄であったこともあり、3月2日には遺構検出と遺構掘削まで終了し、3日に完掘状況の写真撮影と測量を実施した。同日には埋め戻しを開始し、4日には南側の調査も完了した。

3月7日以降、現地事務所の撤収等を行い、平成27年度の現地調査を終了した。

#### (5) 第4年次調査（平成28年度）

第4次調査は、平成28年9月18日から調査に係る準備を開始し、平成29年3月25日までに事業を完了した。

**高橋遺跡2-3区** 除草等、調査区内の準備の後、平成28年11月30日より重機による表土等除去を開始し、12月5日まで実施した。排土は前年度に調査を完了した2-1区・2-2区へ仮置きした。表土等除去と並行して、簡易な排水溝を掘りながら、1月13日にグリッド杭を設置し、包含層掘削を進めた。

その後、期間をおいて1月31日に遺構検出を実施した。遺構検出の結果、遺構・遺物は希薄であったことから、1-2区の空中写真撮影と同時に行う予定で、一旦、作業を保留した。2月2日に1-2区と合わせて、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、遺構全体図の作成を行った。その後、遺構の完掘作業を行い、測量の後、2月14日にローリングタワーによる調査区の全景写真を撮影した。土層断面図については、3月3日に写真撮影し、3月3~7日に基本土層図の作成と土層観察を実施し、3月7日に重機による埋め戻しを完了した。

**高橋遺跡1-2区** 1-2区は2-3区の調査と並行しながら、除草等の調査準備を始め、平成28年12月19日から重機による表土等除去を開始した。1-1区以南は道路工事の範囲となっていたことから、1-1区北側だけでは排土置場が狭いため、袋井土木事務所と協議の上、排土は土量計測が終わつたものから工事側で場外へ搬出することとなった。21日より包含層掘削を開始したが、年末年始を挟んだため、本格的には年明けの1月5日から包含層掘削を実施した。包含層掘削と並行して1月6日から遺構検出を行った。確認した遺構はサブトレーンチを掘削して遺構の深さや広がりを確かめた。遺構面よりも上層に遺構が確認できたことから、主だった遺物が出土したところは出土状況の写真を撮影し、平面図の作成を行った。同月11日から遺構掘削を始め、13日には2-3区と同時にグリッド杭を打設した。1月19日からは完掘した遺構の写真を撮影し、さらに下層へ掘り下げた。調査区南側では土器が集中する自然流路が検出されたため、土器を残しながら慎重に掘り下げた。2月2日に2-3区と合わせて、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と平面図の測量を実施した。同月8日に自然流路の土器出土状況の写真を撮影した。写真撮影後、10日まで出土位置の計測をしながら土器の取り上げを行った。自然流路の掘削が終了した後、2月15日にローリングタワーを用いた全景写真と自然流路の完掘写真を撮影した。翌16日には北側からの調査区全景写真を撮影した。同日に菊川市教育委員会が発掘調査していた坊之谷古墳群の丘陵上より、中山遺跡・高橋遺跡の遠景写真を撮影した。3月1日に東壁土層断面の分層と写真撮影、土層観察を行い、同月3日に基本土層図を作成した。1-2区は調査後工事に入るため、埋め戻しを行わず、この土層堆積状況の調査をもって1-2区の調査を終了した。この後、3月7日まで応急保存処理と基礎整理作業を実施した。

**中山遺跡3区** 3区は排水状態が悪かったことから、南側の排土置き場と同時に、1月16日より除草等のほか、集水樹や排水溝を掘削して、調査の準備を進めた。同月25日から重機（バックホウ）による表土等除去とクローラーダンプによる排土運搬を開始した。2月6・7日に表土等除去後の水田側法面を整形し、排水溝を切り回した。13日に調査区内にグリッド杭を2本、16日には調査区内外にグリッド杭を3本打設した。表土等除去は15日に完了し、法面養生と集水樹の設置の後、人力による包含層掘削を行った。21日より遺構検出を始め、北側が自然流路であることが確認された。調査区中央は微高地状になっており、南側は再び、低地となっていた。22日は自然流路の全景をローリングタワー上から撮影した。28日には遺構掘削を完了し、ローリングタワーを南側に移動して、調査区全景写真を撮影した。3月7日には東壁の分層、写真撮影、土層観察を終えた。7日に現地詰所の撤収を行い、8~13日まで各作業の土量計測を実施した。最終的に、平成29年3月15日に中山遺跡3区の埋め戻し等を完了し、掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業に係る現地調査のすべてを終了した。

### 3 資料調査・報告書刊行作業及び保存処理の経過

#### (1) 資料調査・報告書刊行作業

平成26年度は、池之谷遺跡の資料整理を平成26年9月12日から開始し、平成27年3月26日まで実施した。

平成28年度は、現地調査と並行しながら基礎整理等作業等を実施した。期間は平成28年8月26日から

平成29年3月31日までである。

平成29年度は、一部、基礎整理作業と、出土品本整理作業の分類・仕分け作業及び接合、実測、復元、遺物写真撮影と写真整理、記録類本整理作業は図面編集、版組（図面）、トレースを実施した。

平成30年度は、出土品本整理作業全般、記録類本整理作業全般を実施した。

平成31年度（令和元年度）は、主に出土品本整理と記録類本整理のうち版組（写真）作業と、報告書を刊行するための編集作業を行い、合わせて記録類及び出土品の収納を行った。

遺物写真は6×7判（白黒・カラーリバーサル）を用いて撮影した。

## （2）保存処理

**木製品** 高橋遺跡出土の木製品については、保存処理が必要な点数が多かったことから、平成29～31（令和元）年度にかけて保存処理作業を実施した。平成29年度に65点の前半業務（処理前記録～安定化処理）、平成30年度に100点の前半業務（処理前記録～安定化処理）と、65点の後半業務（修理～梱包・収納）、平成31年度（令和元年度）に100点の後半業務（修理～梱包・収納）の保存処理を実施した。

また、PEG浸透作業や真空凍結乾燥作業に先立ち、木製品の実測・写真撮影後樹種同定のためのサンプリング採取を行い、樹種同定に備えた。このうち樹種同定は東北大名譽教授の鈴木三男氏に委託して実施した。

木製品の保存処理は、処理前記録の作成、写真撮影後、保存処理する木製品の種類や劣化度に応じてPEG含浸を行うものと、真空凍結乾燥を行うものに区分して実施した。その後修復作業を実施し、最終的に処理後の記録を作成し、保存処理を終えた。

**金属製品** 金属製品の保存処理は、平成27年度に6点を実施した。処理前記録の作成、写真撮影を行った後、X線写真撮影、クリーニング、修復の順で実施し、最終的に処理後の記録を作成し、金属製品の保存処理を終了した。

**種実他** 種実等の保存処理は、平成26年度に6点を実施した。保存処理は同定調査及び年代測定とともに分析業務委託とした。分析結果は第8章に掲載した。

上記作業はすべて当センターで行った。一連の作業を終えて記録図面、記録写真、出土品等を収納し、令和2年3月に発掘調査報告書を刊行した。



写真1 中山遺跡調査状況



写真2 高橋遺跡調査状況



写真3 出土品復原作業



写真4 保存処理（後半作業）

# 第3章 地理的環境・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡は、静岡県菊川市（合併前は小笠郡小笠町）高橋地区に位置する。各遺跡が所在する菊川市は、平成17年に小笠郡菊川町と同小笠町が合併し、菊川市となった。現在は北側から西側を掛川市、南側を御前崎市、東側を島田市と接している。菊川市は、八高山から延びる北部の丘陵地帯、西部の小笠山丘陵、東部の牧ノ原台地の丘陵、南部を遠州灘に囲まれた範囲の中央を牛淵川、西方川等を合流しながら菊川が貫流する。

池之谷遺跡は県道西側の小笠山丘陵から張り出した低い丘陵上の南東斜面側に立地する。中山遺跡・高橋遺跡は、菊川の支流である牛淵川の枝流、小笠高橋川と、牧ノ原台地西縁から南東に派生する低丘陵に挟まれた低地部に立地する。現在の小笠高橋川は低丘陵に挟まれた低地部の中央付近を北東から南西方向へ流れているが、高橋口の辺りで大きく西へ曲がって流れ、再び河東地区で南流し、牛淵川へと注ぐ。遺跡が立地していた当時の小笠高橋川は、高橋地区の狭い低地部を蛇行しながら流れていたことが想定される。そのため丘陵上や低丘陵沿いの僅かな微高地上に集落遺跡が展開する。

2kmほど上流にある赤土地区は、遠州灘から菊川を遡り、東海道に至り、それを東に進めば金谷や島田方面に、西に進めば掛川方面へ向かうことができる交通の要衝にあたる。特に菊川と牛淵川が合流する周辺は、小笠山から伸びる尾根と、牧ノ原台地から伸びる尾根によって平野部が最も狭まる場所であることなどから、陸上・水上交通の要衝であった可能性が高い。これを証明するように、古墳時代では遠江でも数少ない三角縁神獣鏡を有する上平川大塚古墳が築造されたり、弥生時代には嶺田遺跡が形成されたり、平安時代～戦国時代までは赤土荘園の政務をつかさどる「政所」が置かれたり、江戸時代には黒田代官屋敷が置かれるなど、菊川地域の重要な遺跡が多い。そういったことからも、弥生時代～現代まで菊川下流域の中心的な地域として考えられる。

その地域に南接する高橋地区も古来より、御前崎街道の経路となっている。御前崎街道は御前崎から東海道の日坂・金谷に通じる道で、県道が整備されるまでは南北を繋いでいた重要な交通路であった。街道筋には神社が多く存在し、高橋地区にも熊野神社がある。

遺跡周辺の現状は、丘陵際に人家があり、低地部は水田として利用されている。調査前の標高値は池之谷遺跡が25.2m、中山遺跡は11.1m、高橋遺跡は9.2mである。

## 第2節 歴史的環境

### 1 旧石器・縄文時代

菊川流域では、旧石器時代の遺跡は数少なく、市内北東部の長者原遺跡は散布地として知られ、三沢地区に所在する三沢西原遺跡（4）では槍先形尖頭器やナイフ形石器、剥片、石核、叩き石などが出土している（菊川町1985）。

縄文時代の遺跡は、前述の三沢西原遺跡でも縄文時代早期・中期の縄文土器が出土している。久保之谷遺跡では縄文時代中期の石囲炉を持つ竪穴建物が見つかっている。石畠遺跡（菊川町1983・1984）では後・晚期の遺跡であることが分かつており、竪穴建物6軒のほか、土坑などが確認された。出土遺

物には宮滝式土器など関西系のものが多いが、東北の亀ヶ岡式土器に類する精製土器なども出土している。当遺跡は浜松市蜆塚遺跡とともに遠江ひいては静岡県を代表する後・晚期の遺跡である。市内北西部に所在する白岩下遺跡では、縄文時代中期の土器が出土している。昭和50年代後半に発掘調査された赤谷遺跡では打製石斧等の石器が出土し、平成16年に発掘調査された祢宜屋敷遺跡では土坑などから縄文時代中期以前（早期？）の石器が見つかった（菊川市2006）。広原遺跡では遺構は見つかっていないものの、黒曜石片や土器、表面採集された打製石斧が出土している（菊川市2012）。このほか金太夫遺跡（32）で縄文時代の石器が表採されている。縄文時代の遺跡としては白岩西狭間遺跡や白岩段I遺跡、市ヶ原遺跡、長池遺跡等が登録されているが、詳細はわかっていない。

## 2 弥生時代

池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡のある旧小笠町域には、遠江の弥生土器の標識遺跡となっている嶺田遺跡（27）が所在するなど、古くから周知されていた重要遺跡がある。

嶺田遺跡は池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡から北西に2km程離れた位置で、丹野川と牛淵川、黒沢川が合流する付近にある（小笠町1982・1983）。弥生時代中期前半代の土器が出土する遺跡として知られており、それらの土器は菊川流域の弥生時代中期の標識である「嶺田式」と言われている。1981年（昭和56年）に一級河川丹野川の護岸工事を建設するため発掘調査が行われ弥生土器が出土しているが、それ以降、発掘調査歴がないことから、未だ遺跡の全容や性格については明らかになっていない。

さらに北側にある川田・東原田遺跡（28）は弥生時代中期～後期の集落遺跡である。1998年（平成10年）に平川土地区画整理事業予定地内で、17,000m<sup>2</sup>に及ぶ大規模な発掘調査が行われている（小笠町2001）。調査では弥生時代中期から後期にかけての竪穴建物や弥生時代後期の大型の掘立柱建物を検出した。特に掘立柱建物は県内最大級と言われる棟持ち柱を持つ建物跡が注目された。棟持ち柱のある建物の柱穴からは、マツの芯持ち材を使った巨大な柱根が出土している。出土した遺物も弥生土器、石器、骨角器、木製品などが数多く出土した。

2004年（平成16年）から始まった宮の西土地区画整理事業に伴う発掘調査は、2011年（平成23年）まで継続的に行われた。この調査は宮ノ西遺跡の第4次調査として行われ、弥生時代中期中葉（嶺田式）の集落跡と、弥生時代前期から中期の土器棺墓、弥生時代後期の方形周溝墓が見つかった。

西方川流域の中期後半の標識遺跡である白岩遺跡では、弥生時代中期後半期の土器が出土している。白岩遺跡より出土した土器は「白岩式」と呼ばれている。最も古い発掘調査は1951年（昭和26年）、静岡県立掛川西高等学校郷土研究部が八幡橋下流で河川改修工事に伴う発掘調査を実施した（田辺1972）。その後、1966年（昭和41年）に静岡大学が東名高速道路建設に伴って発掘調査が実施され、竪穴建物が発見された。1973・1974年（昭和48・49年）には西方川の旧流路と思われる溝から、ほぼ完形の柱が出土した（白岩遺跡調査団2015）。さらに1982年（昭和57年）にも西方川の改修工事に伴う発掘調査が町主体で行われている（菊川町1983）。2007年（平成19年）には西方川総合流域防災事業工事に伴う発掘調査が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（現県埋蔵文化財センター）により実施された（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010）。

菊川流域の祢宜屋敷遺跡、赤谷遺跡（菊川市2006）では後期の集落が確認されている。弥生時代後期の土器は「菊川式」土器とも言われ、やはりこの地域の標識となっている。

このほかの遺跡は表採資料により集落跡の包蔵地である可能性が期待されるところである。しかしこの地における沖積地の遺跡は未だ開発行為に伴う発掘調査の事例が少なく、その実態は明らかとなっていない。



第3図 周辺遺跡分布図

第3表 周辺遺跡分布図掲載遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	古川遺跡	23	堤城跡	44	川上城山遺跡
2	高田大屋敷遺跡	24	志茂組遺跡 黒田代官屋敷跡	45	作兵衛屋敷跡
3	山王裏遺跡	25	東嶺田遺跡	46	舟久保古墳
4	三沢西原遺跡	26	朝日神社古墳	47	寺ノ谷横穴墓群
5	興嶽寺原遺跡	27	嶺田遺跡	48	虚空蔵横穴墓群
6	猿田谷遺跡	28	川田・東原田遺跡	49	虚空蔵堂
7	赤峯屋敷	29	春日山横穴墓群	50	五丁池横穴墓群
8	上平川遺跡	30	春日神社古墳	51	高橋城山遺跡
9	城向遺跡	31	釜太夫横穴墓群 安興寺	52	糸田遺跡
10	猪森遺跡	32	釜太夫遺跡	53	高根山横穴墓群
11	上平川政所遺跡 上平川大塚古墳	33	八幡古墳	54	前岡横穴墓群
12	堤遺跡	34	赤土上ノ段遺跡	55	高橋城跡
13	大鹿横穴墓群	35	樋詰遺跡	56	平組横穴墓群
14	志味堂横穴墓群	36	一反田遺跡	57	池之谷遺跡
15	志味堂古墳群	37	赤土政所遺跡	58	中山遺跡
16	瑞泉寺古墳	38	赤土四反田遺跡	59	高橋遺跡
17	八幡ヶ谷古墳	39	八丁遺跡	60	下平川六反田遺跡
18	下平川神社西遺跡	40	榎田遺跡	61	青木前遺跡
19	下平川八幡谷遺跡	41	宮ノ前遺跡	62	寺の谷古墳群
20	八幡ヶ谷横穴墓群	42	市場A遺跡	63	坊之谷横穴
21	堤の城跡	43	市場B遺跡		坊之谷古墳
22	棚草横穴墓群				

### 3 古墳時代

古墳時代前期では、遠江の弥生時代後期末～古墳時代前期の標識遺跡となっている三沢西原遺跡で集落が検出され、古式土師器が伴っている。高橋遺跡から北に約2kmの位置にある宮ノ前遺跡（41）では前期から中期にかけての遺物が出土している。

菊川流域では菊川とその支流沿いの丘陵先端部に古墳が築かれている。最も早く築かれた古墳は上平川大塚1・2号墳であり、菊川と牛淵川の合流地点付近の平地に築造され、菊川流域で唯一の三角縁神獣鏡が出土している（大谷2010）。古墳時代中期以降は、大徳寺古墳（菊川流域）、舟久保古墳（小笠高橋川流域）、法明寺古墳（菊川流域）など、流域全体に中規模な古墳が散在的に築造されている。連続的に中規模の古墳が築造されることなく、50m以下の規模の墳丘を持つ古墳が多く見られる。こうした規模や立地から勘案すると、菊川流域では古墳時代を通じて大規模な集団ではなく、河川ごとに小首長が併存するような状況であったと考えられる。

菊川流域は、遠江でも横穴墓が採用される地域として知られ、横穴式石室はほとんど採用されず、横穴墓が多数を占めている。横穴墓も早い段階で導入され、6世紀前半には当地域に登場する。九州との関連が想定できるため、横穴墓の導入に当たっては、遠州灘から菊川流域へと直接伝播してきている可能性が高い。

遺跡から北西側の丘陵には高根山横穴墓群（52）や前岡横穴墓群（53）、平組横穴墓群（55）があり、北側には五丁池横穴墓群（49）、小笠高橋川を挟んで南側の丘陵上には、坊之谷横穴墓（62）が平成29年に菊川市教育委員会により発掘調査された。

高橋遺跡から1.5km北側に位置する赤土政所遺跡の第1次調査（菊川市2006）では、古墳時代後期（6世紀後半頃）の溝や土器溜りを検出し、土器が出土した。第2次調査（静岡県2016）では古墳時代中期の堅穴建物や、古墳時代前期末から古墳時代中期初頭の溝跡、古墳時代後期の自然流路等を検出し、

土器や木製品が数多く出土した。

#### 4 古代（奈良・平安時代）

高橋遺跡が所在する菊川市高橋地区は、城飼郡高橋郷と想定されている。古代の城飼郡は現在の行政区画で御前崎市の一部、菊川市、掛川市の一部を含む範囲であったと推測される。城飼郡は内田郷・赤土郷・川上郷など十二郷で構成されており、上郡に位置づけられていた。

この時代の遺跡としては、規格的な建物の配置が確認された宮ノ西遺跡（菊川市 2015）や宇藤遺跡群のほか、宮ノ西遺跡に近在する加茂廃寺などが確認されている。

高橋遺跡から 1.5km 北側に位置する赤土政所遺跡・一反田遺跡が所在する菊川市赤土地区は、比叡山延暦寺の「千僧供領赤土荘」が置かれていたと想定されている。荘園の成立がいつのことか明確ではないが、鎌倉時代初頭には荘園となっていることから、それ以前にはある程度開発が進んでいたと考えられる。奈良時代～平安時代の遺物も多数出土しており、「荘園」の成立時期を検討する資料と言える。中山遺跡でも奈良・平安時代の遺構と遺物が見つかっていることから、高橋郷に係わる資料として検討できるだろう。

#### 5 中世（鎌倉時代～戦国時代）

『倭名類聚抄』によると、小笠郡には加美郷、新井、荒木、河（川）上郷などの十一郷が存在していたことが判明し、高橋地区は赤土地区と同様に「河上郷」であった可能性が高い。

御領所遺跡、林光寺遺跡、土橋遺跡、西軒遺跡等の遺跡で集落遺構が確認されている。

遺跡から北側の丘陵上では、主要な街道が通っている。御前崎市（旧浜岡町）側からは御前崎街道が高橋地内を通り、棚草を経由して奈良野または日坂・金谷方面の東海道に至る。牧之原市（旧相良町）から信州に塩が運ばれた道は「塩の道」と呼ばれるが、相良から川上までに至る途中、ちょうど高橋地区の北側は「塩買坂」と呼ばれる。塩の道は、市場を経由して、棚草で御前崎街道と交差し、さらに秋葉街道から信州街道へと繋がっている。主要街道沿いには古い起源を持つ神社等が複数存在している。高橋地区には高橋熊野神社がある。御前崎市（旧浜岡町）門屋の高松山には高松神社があり、大宝年間（8世紀初）の創建とされる。

#### 6 近世

遺跡から 3 km 北西側には、旗本本多助久の代官であった黒田氏の居宅、「黒田代官屋敷」が位置している（24）。黒田家は永禄年間（1558～1569）に当該地へ縄張りして居住している。1973 年（昭和 48 年）に国の重要文化財に主屋と長屋門が指定され、「黒田家住宅」と呼ばれた。その後、米蔵や東蔵、宅地等が追加指定され、現在では屋敷地全体が整備・保存されている。

# 第4章 池之谷遺跡

## 第1節 調査の方法と経過

### 1 試掘確認調査

主要地方道掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業に伴う、菊川市高橋地区の試掘確認調査は、平成24年度に、静岡県教育委員会文化財保護課により行われた。試掘確認調査は、既に用地買収の終わった箇所のうち、丘陵上にトレンチ3本を、低地部分に4箇所のテストピットを設定し、11月に行った。このうち、本章では丘陵上の地区のみ記述する。ここは周知の遺跡である池之谷横穴群の近接地であるため、池之谷横穴群として試掘確認調査を行った。

調査地点は、東側に突き出す丘陵の先端部であり、丘陵の稜線部に古墳が存在する可能性があったため、古墳の検出を主目的に十字にトレンチを設定した（トレンチ1・2）。また、横穴墓の検出を目的に斜面のテラス部分にトレンチを1本設定し（トレンチ3）、各トレンチとも人力掘削を行った（第4図）。

調査の結果、丘陵頂部のトレンチにおいては表土層が約30cmあり、それを除去すると丘陵基盤層と思われる褐色土層（黄褐色ブロックを含む）が検出された。この褐色土層の上面を遺構面と想定し、遺構検出を行ったところ、トレンチの交差部付近から、不整な長方形ないし橢円形を呈すると思われる落ち込みが検出された。落ち込みは東北～西南方向に主軸を持つと思われ、長軸の長さは不明であるが、トレンチ掘削部分での最大幅が約130cmであった。覆土は黒褐色土層（粘性・しまりややあり）で、この覆土中より土器の出土が認められたが、全て弥生土器であった。また、土器の集中部分もあった。さらに、東西方向のトレンチ1では、この落ち込みの東側近接地から、丘陵基盤層直上よりガラス小玉1点が出土した。以上の成果から、この部分に弥生時代の方形周溝墓の存在が予想されるに至った。

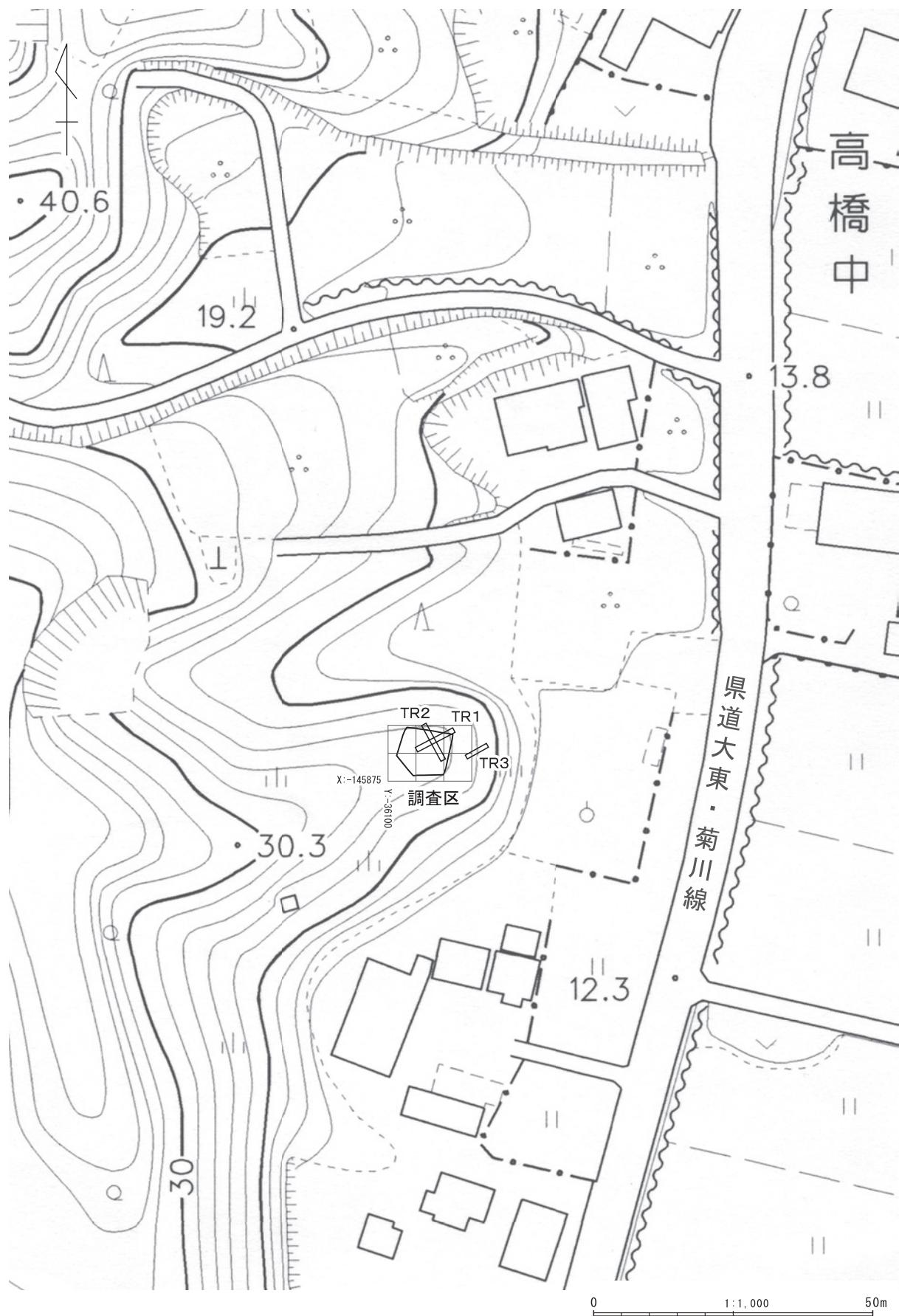
また、斜面テラス部分のトレンチ3であるが、こちらは最大で地表下約1mまで掘削を行ったが、表土下には、丘陵基盤層と思われる灰褐色土層（黄褐色ブロックを含む）に至るまで、暗褐色土層（粘性・しまりは弱い）が堆積していたが、この層には近現代の瓦片が含まれていた。また、遺物・遺構は全く発見されなかった。したがって、この箇所においては遺跡の存在は確認されなかった。

### 2 本調査の方法と経過

前述のとおり、試掘確認調査の結果、遺構・遺物が検出されたため、遺跡の範囲が道路建設予定地まで広がることが確認された。道路建設に伴って破壊されるのは明らかなるため、遺構が検出されることが予想される箇所に面的な本調査を行うことが必要であると考えられた。静岡県埋蔵文化財センター、静岡県教育委員会文化財保護課、静岡県袋井土木事務所で協議を行い、本調査の範囲と調査期間等を決定した。また、試掘確認調査で横穴墓の存在が確認できなかったため、池之谷横穴群とは別遺跡として、池之谷遺跡と命名され、埋蔵文化財包蔵地として登録された。

本調査の調査区は、試掘確認調査で遺構・遺物が検出され、遺構の拡がりが予想されるトレンチ1・2を中心に、その周囲に設定した。当初の設計では100m<sup>2</sup>の調査区であった。

調査にあたっては、平面直角座標第VIII系を用いた国土座標、世界測地系の軸線を基準に、5m×5mのグリッドを設定した。



第4図 池之谷遺跡試掘確認調査・本調査区配置図

試掘確認調査で確認された「遺構」検出面の深度は、地表面から「遺構」面までの想定深度が約30cmと浅く、また、重機を現地に入れるのに困難を伴うため、地表から全て人力で掘削し、地山であるIV層（次節参照）上面で遺構確認と遺構検出を行った。

遺物については、表土中の遺物は全て一括で取り上げた。当初、遺構と判断し、後に搅乱と判断された落ち込みの覆土に包含されていた遺物は、土器を除いては出土点を計測しながら取り上げた（土器は一括取り上げ）。遺跡に関する図面の作成は株式会社イビソクに委託して、空中写真測量を主にして実施した。遺構等の写真撮影は、6×7の中判カメラを主に使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。また、デジタルカメラを記録用として使用した。

本調査は、平成25年12月17日に人力による表土等除去により開始した。26日から遺構検出を行った。年末年始の休業期間をはさみ、平成26年1月6日に再開し、墓の主体部と想定した落ち込み（SX01と呼称）の調査を開始した。しかしこのSX01は後述するように極めて新しい時代の搅乱であることが調査中に判明した。その他の落ち込みも、調査の結果新しい時代の搅乱であることが判明したので、全て掘り上げた。1月15日に空中写真撮影を行い、埋め戻しを行って調査を終了した。

### 3 資料調査（整理作業）

平成27年1月から3月にかけて、埋蔵文化財センター本部にて本整理作業を実施した（池之谷遺跡の試掘確認調査、本調査のみ）。原稿執筆以外の整理作業を、株式会社パソナに委託し、1月後半から整理作業を開始した。遺構図面は、現地測量業務委託（試掘確認調査、本調査とも）の成果品である、株式会社イビソクの測量データを原図として用いた。遺構図・遺物図の編集、トレース、版組はAdobe Illustrator CS 3により行った。

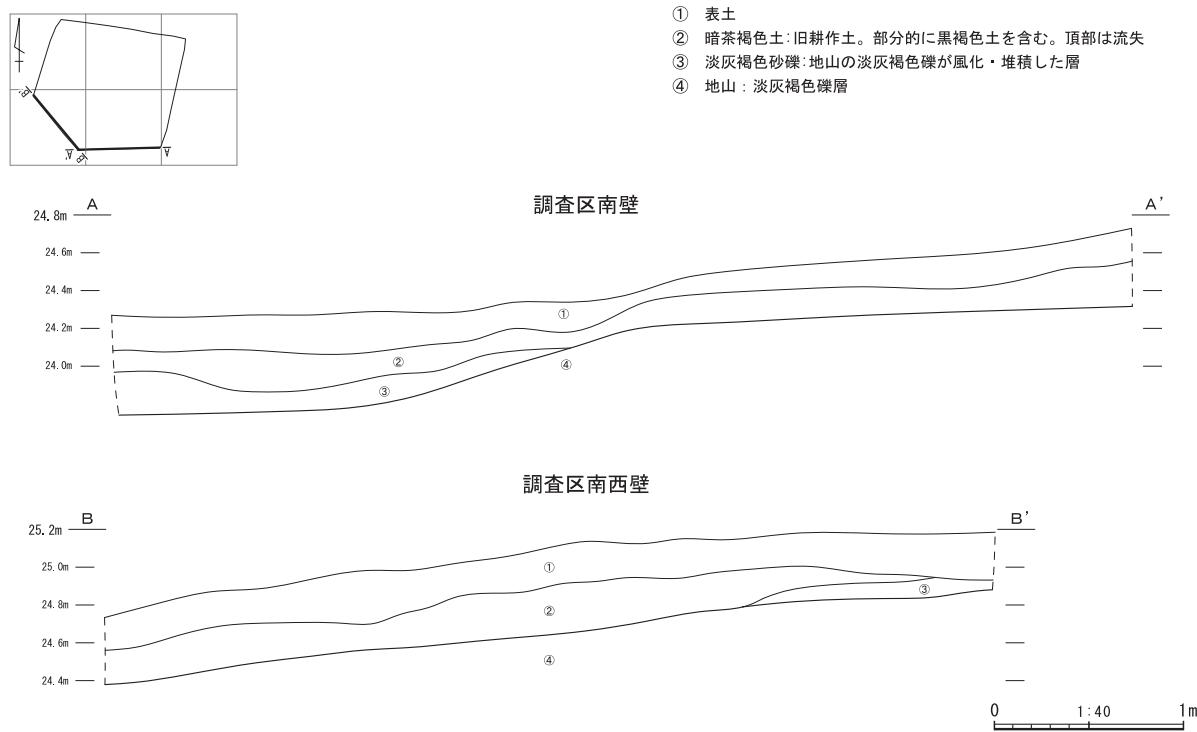
2月18日に遺物写真撮影を実施した。中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。

## 第2節 土層

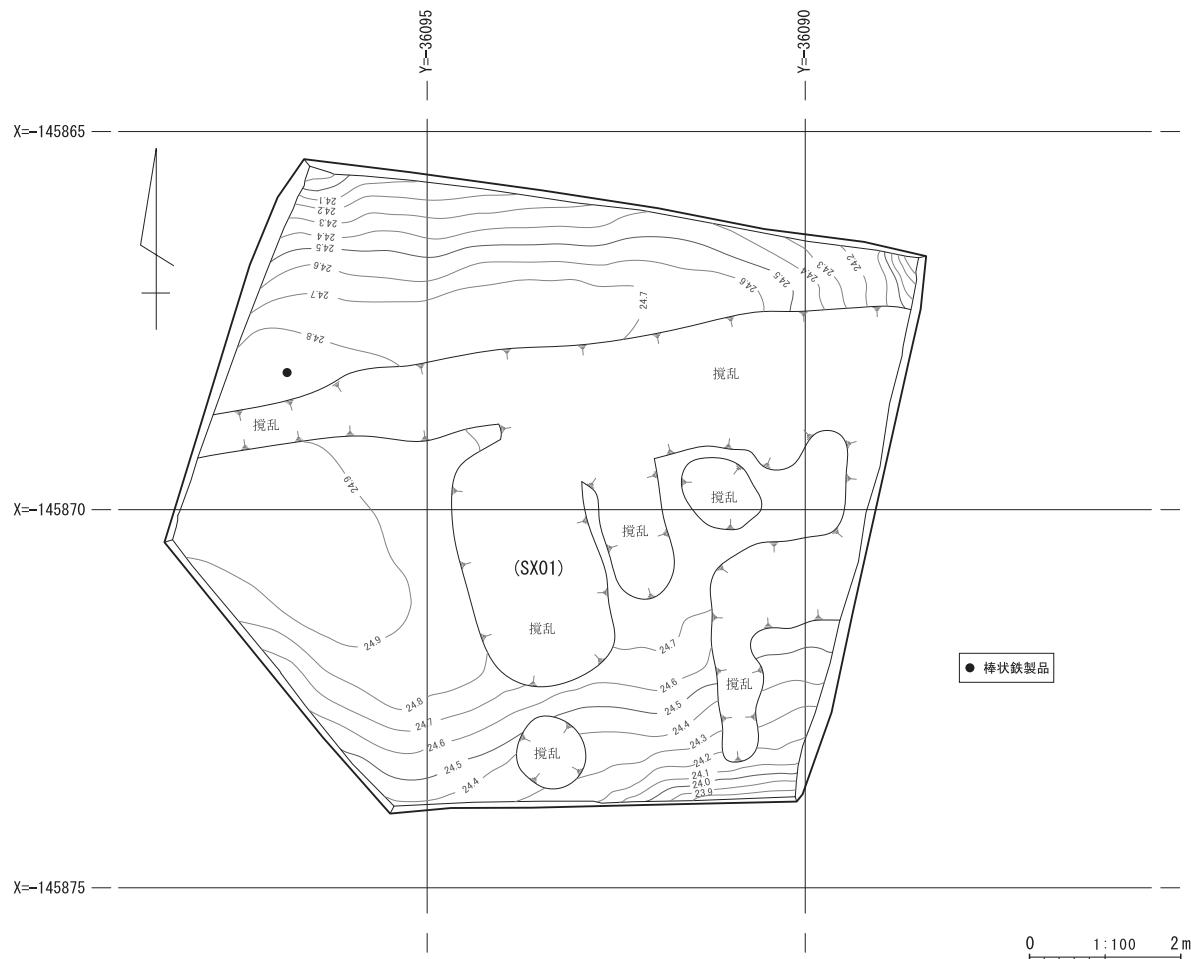
池之谷遺跡については、以下のとおり標準土層を設定した（第5図）。

- ①層：現表土である。
- ②層：暗茶褐色土層。旧耕作土である。部分的に黒褐色土を含む。調査区の頂部では存在しない。流失した可能性が高い。
- ③層：淡灰褐色砂礫層。地山の淡灰褐色礫が風化し、堆積した層。
- ④層：淡灰褐色礫層。地山である。

試掘確認調査の土層であるが、トレンチ1・2については、この標準土層と同一である。テラス部分に設定したトレンチ3であるが、先に述べたとおり、表土下に、暗褐色土（粘性、しまり弱い）があり、近現代の瓦を含む埋土であった。この下が地山となる。記録を取った部分においては表土約40cm、暗褐色土約60cmであり、約1mで地山に達するが、遺構・遺物が見られなかった点から、削平された上、盛土を行った可能性がある。



第5図 土層断面図



第6図 本調査区完掘状況図

### 第3節 遺構

今回の調査で検出された落ち込みのうち、明確なプランを有するSX01は、覆土中に弥生土器がやや集中して発見される箇所が存在し、またガラス小玉が発見された点などから、方形周溝墓の主体部を想定して本調査を行ったが、覆土の状態が不自然な上、調査後半において、落ち込みの側面に重機の爪痕と思われる痕跡が発見されたため、極めて新しい時期に作られた搅乱の穴と判断した。

なおSX01以外にも、尾根上を東西方向に走る溝状の落ち込みや、そこから延びる溝状の落ち込み、楕円形の落ち込み等もやはり新しい時期の搅乱であった。搅乱以外の箇所においては遺構が検出されなかった（第6図）。次節で掲載する遺物が出土している点から、本来は遺構が存在していた可能性は高いと思われる。それにもかかわらず、遺構が検出されなかつたことから、遺構は全て搅乱等で破壊され、今回の調査で検出されなかつたと考えられる。なお、本来存在した遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期前半の土坑墓か土器棺墓の可能性が高く、方形周溝墓の可能性もある。

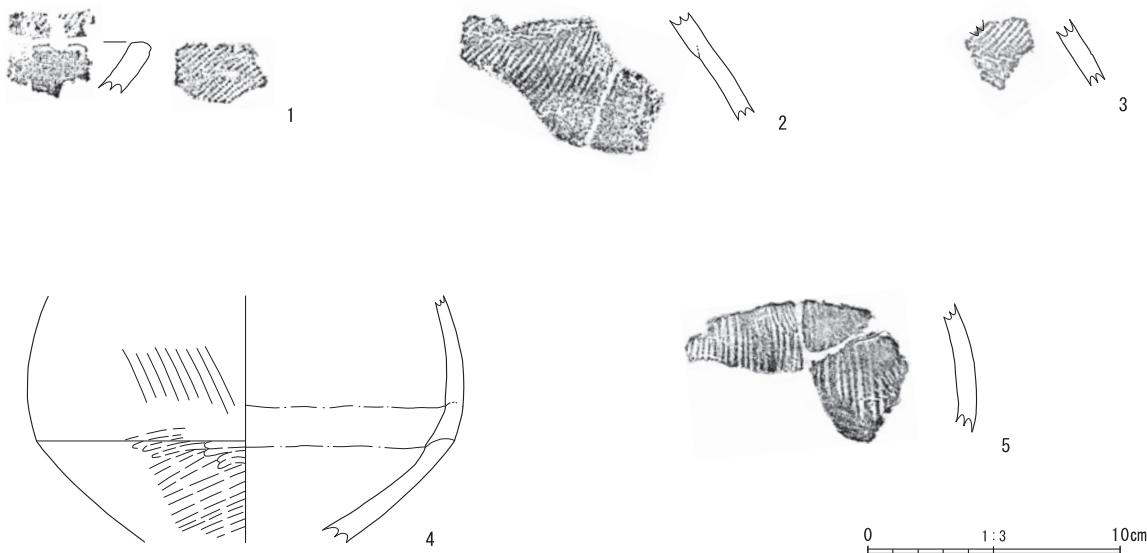
なお、今回の本調査地点について、明治～戦後期の地図で道等の記載があるか否か確認したが、地図上では確認できなかつた（註1）。

### 第4節 遺物

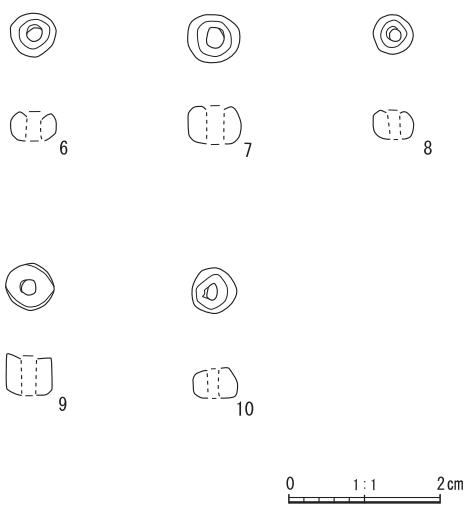
今回の調査で出土した遺物は、試掘確認調査、本調査を含めて、土器約110片、ガラス製品（小玉）5点、鉄製品6点であった。

#### （1）土器（第7図）（図版3）

今回出土した土器は、全て弥生時代後期～古墳時代初頭の土器であると考えられる。弥生土器でも中期以前のものや後期初頭のものは認められない。また、出土した土器も壺以外の器種は明確には認められず、小片も含め全て壺であると考えられる。さらに、同一個体と推定される破片が多く、確証は欠くが少數の数個体の壺に限定される可能性が高い。



第7図 出土土器実測図



第8図 出土ガラス製品実測図

第7図1は口縁部片。直口口縁で、器表は横方向の細密なハケ目で調整する。裏面から口唇部にかけては、同一原体の単節縄紋LRを連続して施紋する。土器全体は（器壁を含めて）褐色を呈するが、器表のみ、にぶい黄橙色である。

2と3は、接合しないが明らかに同一個体である。壺の胴部上半の破片である。3で見る限り、細密なハケ目で斜め方向にやや乱雑に調整を行ったのち、「端末結節縄文」（鮫島1994）を伴う単節縄紋LRを数段にわたって施紋する。内・外面それぞれ類似した色調であり、器壁は褐色である。

4と5は壺の胴部で、恐らくは同一個体である。内・外面それぞれ類似した色調であり、器壁は褐色である。ただし、4の胴下半の器表は暗灰褐色を呈す。4の胴上部は斜め方向の太いハケ目を施す。胴下部は横～斜め方向のミガキで調整する。5は胴上部の破片で4と同様に太いハケ目を縦～斜め方向に施す。

次に、これらの土器の編年的位置付けについて述べる。1は口縁内面と口唇部に縄紋を施紋する典型的な東遠江東部の直口壺である。類例は菊川市耳川遺跡や同市白岩遺跡で出土している。篠原編年（加納他編2002）の東遠江東部V-2・3様式（恐らくはその古い段階）に比定される。2と3は「端末結節縄文」を伴う縄紋を数段にわたって施紋しており、V様式ではあるが、細別は難しい。4と5はやや球胴化しており、胴部下半の稜が目立たない点で後出的であると思われるが、同様に細別は難しい。V-4・5様式（特に古い段階）に比定される可能性もある。

### （2）ガラス製品（第8図）（図版3）

ガラス製品は全て小玉であり、試掘確認調査で1点、本調査で4点の計5点が出土した。色調は6が紺色、7・8がコバルトブルー、9・10は緑がかかった暗青色である。形状は上・下端部はいずれも円形である。側面形は、6～8が隅丸長方形、9は実測図で下端部は平坦であるが、上端部は傾斜する。10は橢円形である。観察の結果、巻き技法で製作したものは無く、全て引き伸し技法で製作したと思われる（註2）。全体として良く研磨されており、どれも上・下端部には稜が見られる。ただし、7のみ、気泡によると見られる凹凸がやや多く見られる。

今回出土したガラス小玉は明確に伴出した遺構・遺物はないが、出土土器から考えて、弥生時代後期～古墳時代前期前半のものと考えられる。斎藤氏（斎藤2014）の集成によるならば、菊川市内では該期のガラス小玉の出土例は無く、初めての出土例と思われる。近隣地域では、掛川市本村遺跡、同市角庵II遺跡で該期のガラス小玉が少量出土している。

### （3）鉄製品（第9図）（図版3）

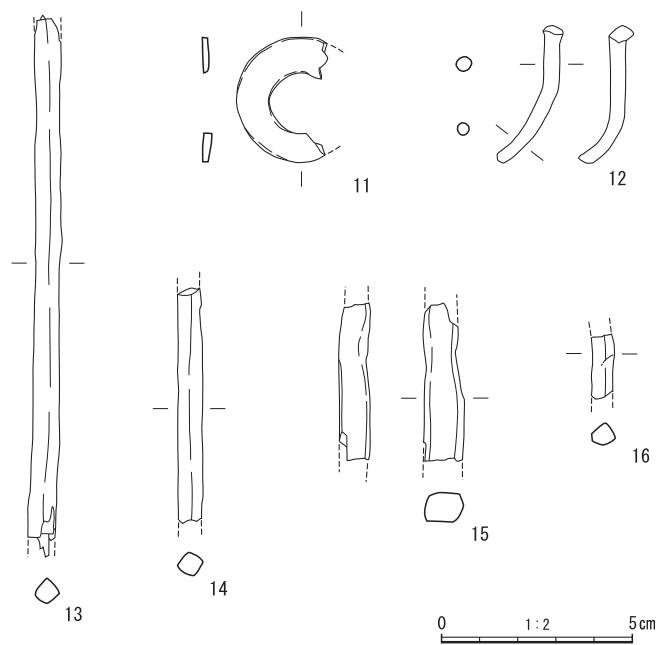
鉄製品6点は全て本調査で出土した。13・14のみ地山直上で出土した他は、全て表土中ないし搅乱土より出土したものである。このうち、13・14はまとまって出土し、接合はしないが同一個体と考えられるので、それを合わせて考えれば鉄製品の総数は5点となる。

11は用途不明の環状製品。何らかの道具の部品であろうか。12は釘で、基部及び脚部（以下、釘の部位等についての用語は（金箱1984）に従う）の断面が丸い丸釘（洋釘）である。頭（かしら）は頭巻類であると思われる。13～16は棒状鉄製品。用途は不明であるが、13・14はその太さや想定される長さから考えて、鉄箸の可能性がある。15・16は不明である。

これらの鉄製品で、時期が概ね判明するのは12の釘だけであり、丸釘であることから、近代以降と思われる。他は不明である。ただし、弥生時代～古墳時代のものと明確に言えるものはない。

## 註

- 過去に遡って地図上で確認したが、本調査地点を通る道の記載は管見の限り見当たらなかった。地図としては、1891（明治24）年出版の2万分1「相良」、1919（大正8）年出版の2万5千分1「平田村」、1972（昭和47）年発行の2万5千分1「下平川」を参照した。
- 「巻き技法」・「引き伸し技法」については、（藤田1994）によった。



第9図 出土鉄製品実測図

## 第4表 出土遺物観察表

## &lt;土器&gt;

挿図 No.	図版	調査箇所	層位	種別	器種	部位	色調（外）	色調（内）	備考
1	3	本調査	表土	弥生土器	壺	口縁部	にぶい黄橙 10YR 7/3	褐灰 10YR 5/1	
2	3	本調査	攪乱	弥生土器	壺	胴上部	浅黄 10YR 8/4	灰黄 2.5Y 6/2	
3	3	本調査	攪乱	弥生土器	壺	胴上部	浅黄橙 10YR 8/3	にぶい黄橙 10YR 6/4	
4	3	本調査	攪乱	弥生土器	壺	胴部	にぶい黄橙 10YR 7/4		体部最大径： 17.40 cm
5	3	本調査	攪乱	弥生土器	壺	胴部	にぶい黄橙 10YR 7/4		

## &lt;ガラス製品&gt;

挿図 No.	図版	調査箇所	層位	遺物名	長さ (mm)	厚さ (mm)	上端孔径 (mm)	下端孔径 (mm)	重さ (g)	色調	備考
6	3	本調査	攪乱	小玉	3.60	6.00	1.90	2.10	0.156	紺 5PB 2/4	
7	3	本調査	表土	小玉	5.00	6.70	2.10	2.10	0.254	コバルトブルー 5B 4/8	
8	3	本調査	表土	小玉	4.30	5.30	1.90	1.70	0.125	コバルトブルー 5B 4/6	
9	3	本調査	表土	小玉	5.60	6.10	2.00	2.00	0.248	青緑色 5BG 2/4	
10	3	試掘確認調査	丘陵 基盤層上	小玉	4.00	5.90	1.20	1.50	0.148	青緑色 5BG 3/3	

## &lt;鉄製品&gt;

挿図 No.	図版	調査箇所	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
11	3	本調査	攪乱	円環状鉄製品		3.35	0.20	
12	3	本調査	攪乱	釘	3.60	頭部 0.61 / 身部 0.4		頭部長 0.45 cm 身部長 3.15 cm
13	3	本調査	地山直上	棒状鉄製品	(14.20)	0.70	0.65	
14	3	本調査	地山直上	棒状鉄製品	(6.15)	0.65	0.60	
15	3	本調査	表土	棒状鉄製品	(5.15)	1.05	0.80	
16	3	本調査	攪乱	棒状鉄製品	(1.70)	0.55	0.55	

# 第5章 中山遺跡

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の成果

中山遺跡は、掛川浜岡線の下り線拡幅部分に1区～3区を設定した。県土木事務所が行う県道工事の工程に合わせて、年度毎に発掘調査を行った。1区と2区は平成26年度に調査、3区は平成28年度に調査を実施した。各調査区とも遺構調査面は1面である。調査前の現状標高値は10～12mとなっている。

1・2区の調査では集落の遺構が一部見つかった。2区南ではV層（黄灰色粘土）上面で掘立柱建物跡1棟を検出した。検出面は標高9.2mである。この他に複数の小穴や溝跡、自然流路等を検出した。いずれも丘陵と小笠高橋川の間に埋没している微高地上に立地していたことが明らかとなった。遺構の年代は奈良時代～平安時代（須恵器、灰釉陶器～山茶碗）の時期と考えられる。調査で発見された土器の年代幅は、古墳時代の須恵器壺蓋・身、模倣壺、奈良時代須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶磁器等である。遺構や包含層の一部には古墳時代末の須恵器や土師器も少量含まれていたが、二次的な堆積の可能性も調査所見で指摘されている。出土土器の主体はあくまでも灰釉陶器・山茶碗であり、その器種は碗、小碗、小皿、大甕等がある。土師器の甕も伴っている。陶磁器では天目茶碗破片や擂鉢、青磁片等がある。3区は集落遺構が確認されず、7層上面では溝状遺構、北端では自然流路を検出した。自然流路の堆積層上層には炭化物層が見られた。自然流路の底からは数片の灰釉陶器がまとまって出土したことから、流路の年代も当該時期と想定できる。調査区の中央部では1・2区で見られた生活基盤層（黄灰色粘土層上面）が見つかったが、遺構は溝跡のみであった。調査区南側へ向かって地形が下がり、湿地化している。遺物の出土量も1・2区と比べて極端に少なく、包含層に小片が混じる程度であったことから、ここが集落の南端部だったのだろう。

少量だが包含層より土製品や石製品が出土している。金属製品は本調査区内では出土しなかった。

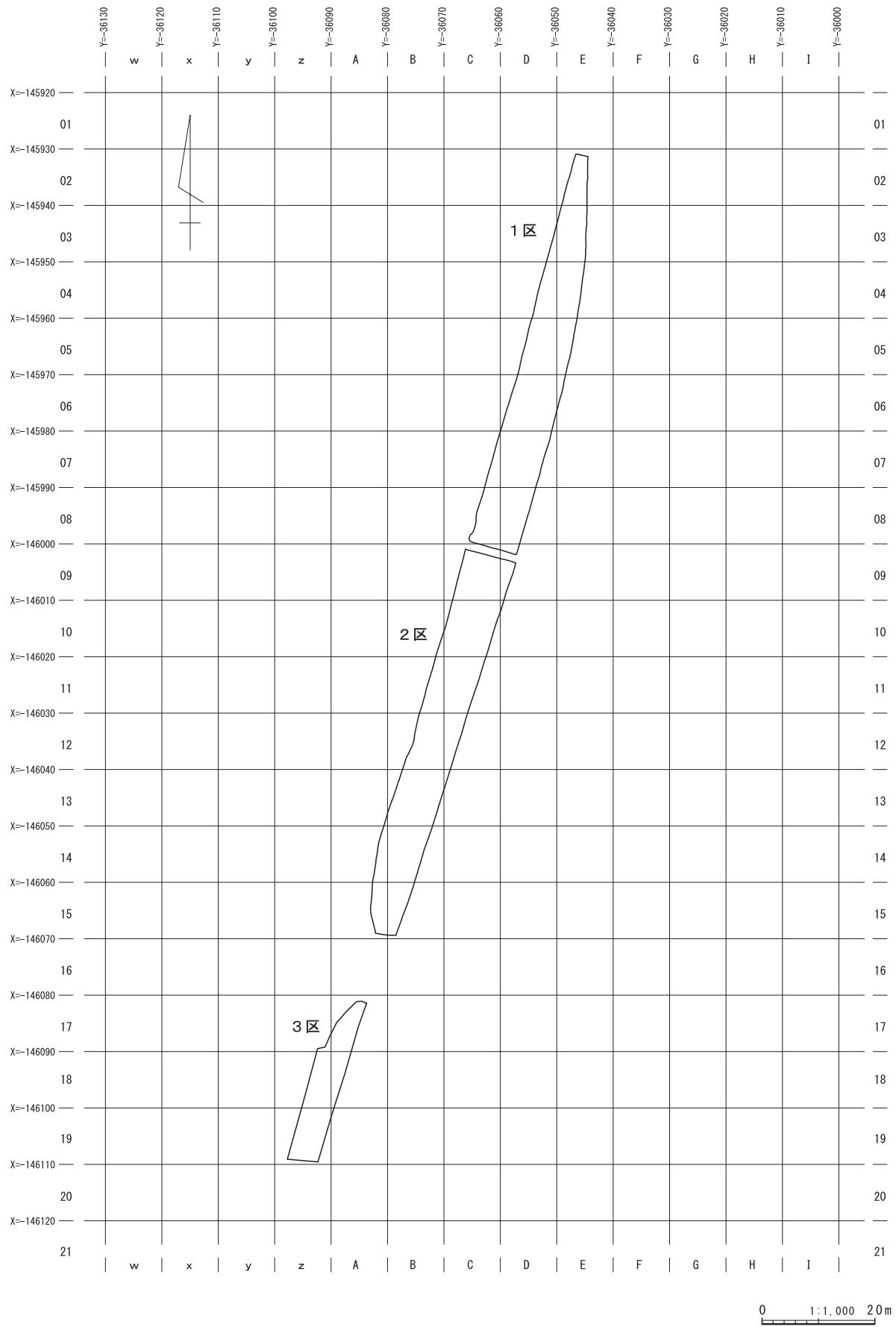
以上のことから、本調査の結果、集落域は西側の丘陵裾から1・2区の周辺範囲に広がっていたと考えられる。出土した遺物の量が少ないとから、集落域の中心部とは考えにくく、集落の縁辺部と考えた方が妥当だろう。

なお、報告書に掲載した遺構番号は調査時に付けた番号を使用している。1・2区は2区→1区の順、3区は別番号を付した。番号の重複を避け、遺構番号の前には調査区を記した。

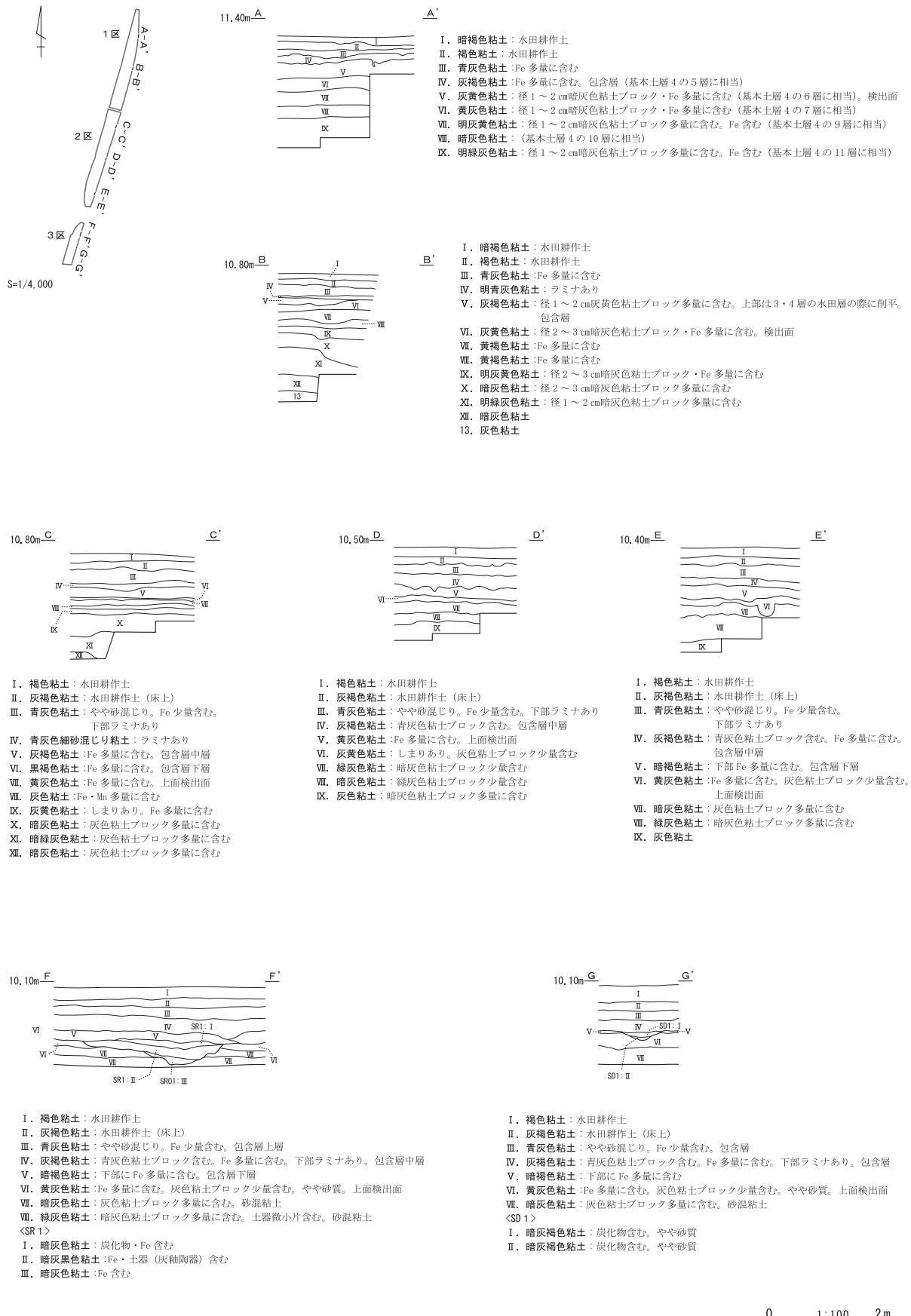
### 2 基本土層

調査では遺跡の西側にある丘陵から続く微高地を検出した。現在は水田の下に埋没している微高地の途中には地形の起伏も見られ、小笠高橋川方向へ流れる流路や低湿地も確認された。堆積土層は1区B-B' 土層断面を基準とする。中山遺跡の基本土層は以下の通りである。

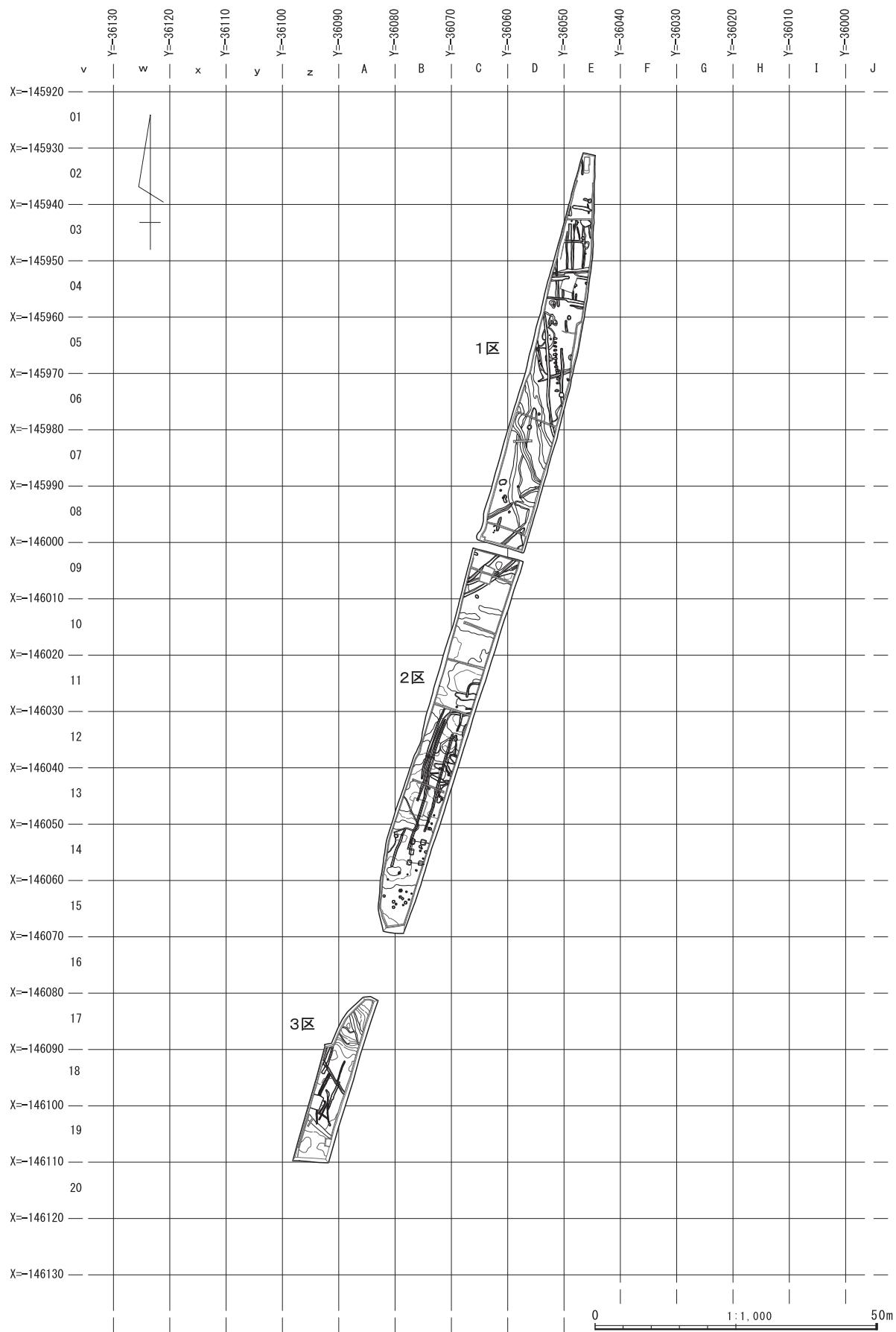
- 1層 水田耕作土・・・I層 褐色粘土
- 2層 水田耕作土（床土）・・・II層 灰褐色粘土
- 3層 青灰色粘土・・・III層：やや砂混じり。Fe多量に含む。
- 4層 明青灰色粘土・・・IV層：下部ラミナあり。
- 5層 灰褐色粘土・・・V層：径1～2cm灰黄色粘土ブロック多量に含む。



第10図 中山遺跡調査区配置図



第11図 基本土層図



第12図 1～3区全体図

上部はⅢ・Ⅳ層の水田層の際に削平。包含層。

6層 灰黄色粘土・・・VI層：径2～3cm暗灰色粘土ブロック・Fe多量に含む。検出面。

7層 黄灰色粘土・・・VII層：Fe多量に含む。径2～3cm暗灰色粘土ブロック多量に含む。

8層 黄褐色粘土・・・VIII層：Fe多量に含む。

9層 明灰黄色粘土・・・IX層：径2～3cm暗灰色粘土ブロック・Fe多量に含む。

10層 暗灰色粘土・・・X層：明緑灰色粘土多量に含む。

11層 明緑灰色粘土・・・XI層：径1～2cm暗灰色粘土ブロック多量に含む。

12層 暗灰色粘土・・・XII層

13層 灰色粘土・・・XIII層

## 第2節 遺構と遺物

### 1 1・2区遺構

#### 2区SH 1（第24図、図版14）

2区南半部、B14グリッドで検出した掘立柱建物跡である。調査区の東端で、一部は調査区外に続いているため、梁行や桁行方向は不明となっている。現状で2間×1間以上が確認できる。南北は約3.8m、東西は2.9m以上の規模を持つ建物であったと考えられる。柱穴はP1～P5の5箇所が見つかっており、柱穴の形状は方形に近い。P3は長軸が1m程、短軸は0.8m程の柱穴である。深さは0.8m程と深い。覆土は黒灰色粘土に灰色粘土の小塊を含む。柱間は芯と芯の間で2.0～2.4m。P1とP3には柱の抜き去り痕が土層断面に見える。建物跡は2区SD8とほぼ平行している。

各柱穴内の覆土からは少量の弥生土器小片が出土している。弥生土器は磨耗しており、調査の所見でも二次堆積による可能性が指摘されている。こうした土器が覆土内に入り込んだ可能性がある。よって柱穴より出土した土器は、建物跡の年代の決め手になり得るものではなく、時期の特定が困難である。ただし、覆土は周辺の溝状遺構と同じであることから、奈良～平安時代のものと考えるのが妥当であろう。

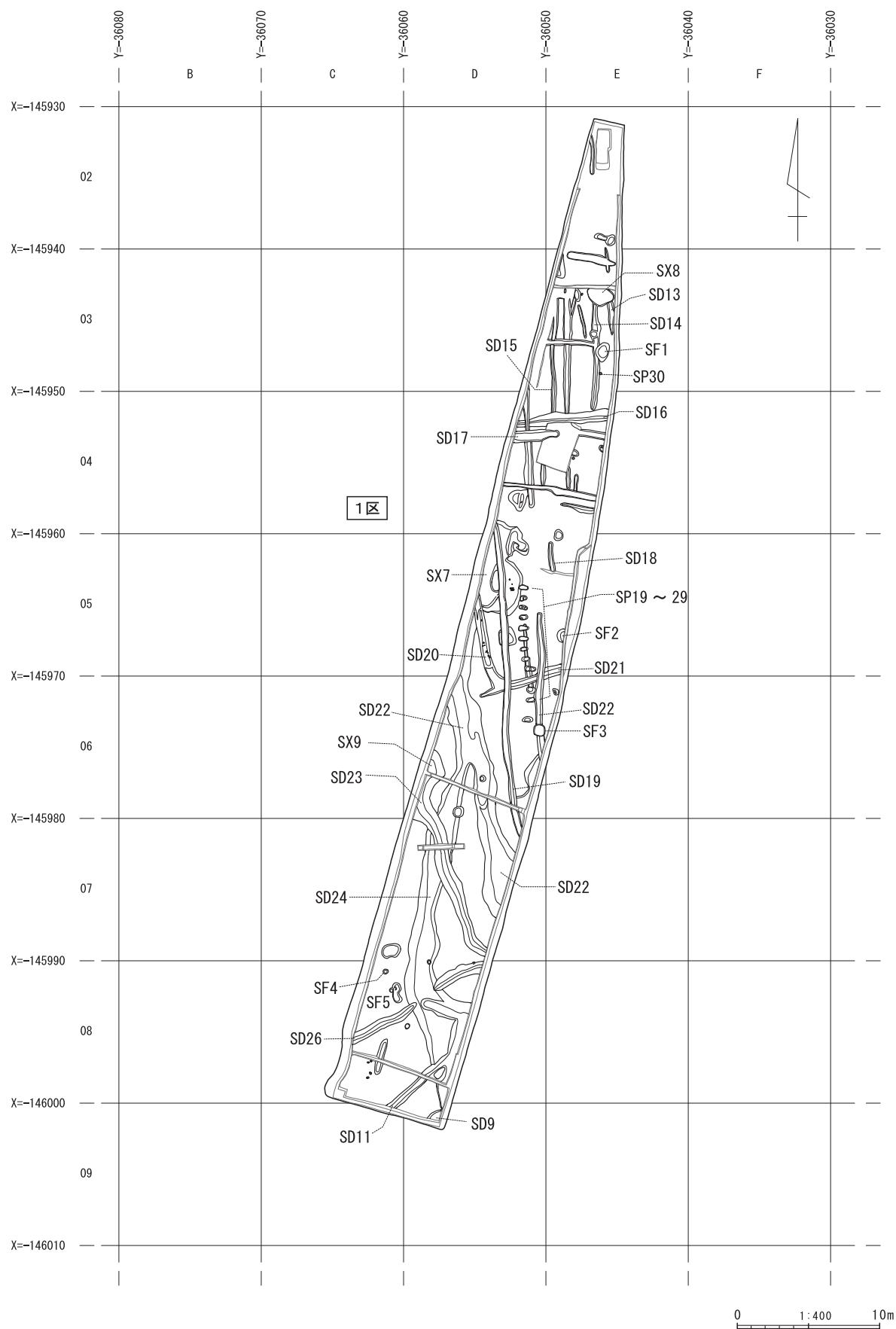
#### 2区SP 1～17（第22・23図）

大半が2区南半部のA～C14・15で検出した小柱穴である。掘立柱建物跡SH1の周辺に位置するが、掘立柱建物跡の柱穴とは規模が異なる。小柱穴の規模は、小さいもので径0.2mから、大きいものは0.5mを超える。なかにはB13グリッドのSP3や、B14・15グリッド内のSP9・10・13のような柱根の痕跡を持つものもある。小柱穴の覆土は黒灰色粘土灰色粘土の小塊が混じり、深さのあるものが多い。ただ規則的に並ぶものではなく、建物跡の復元には至らなかった。

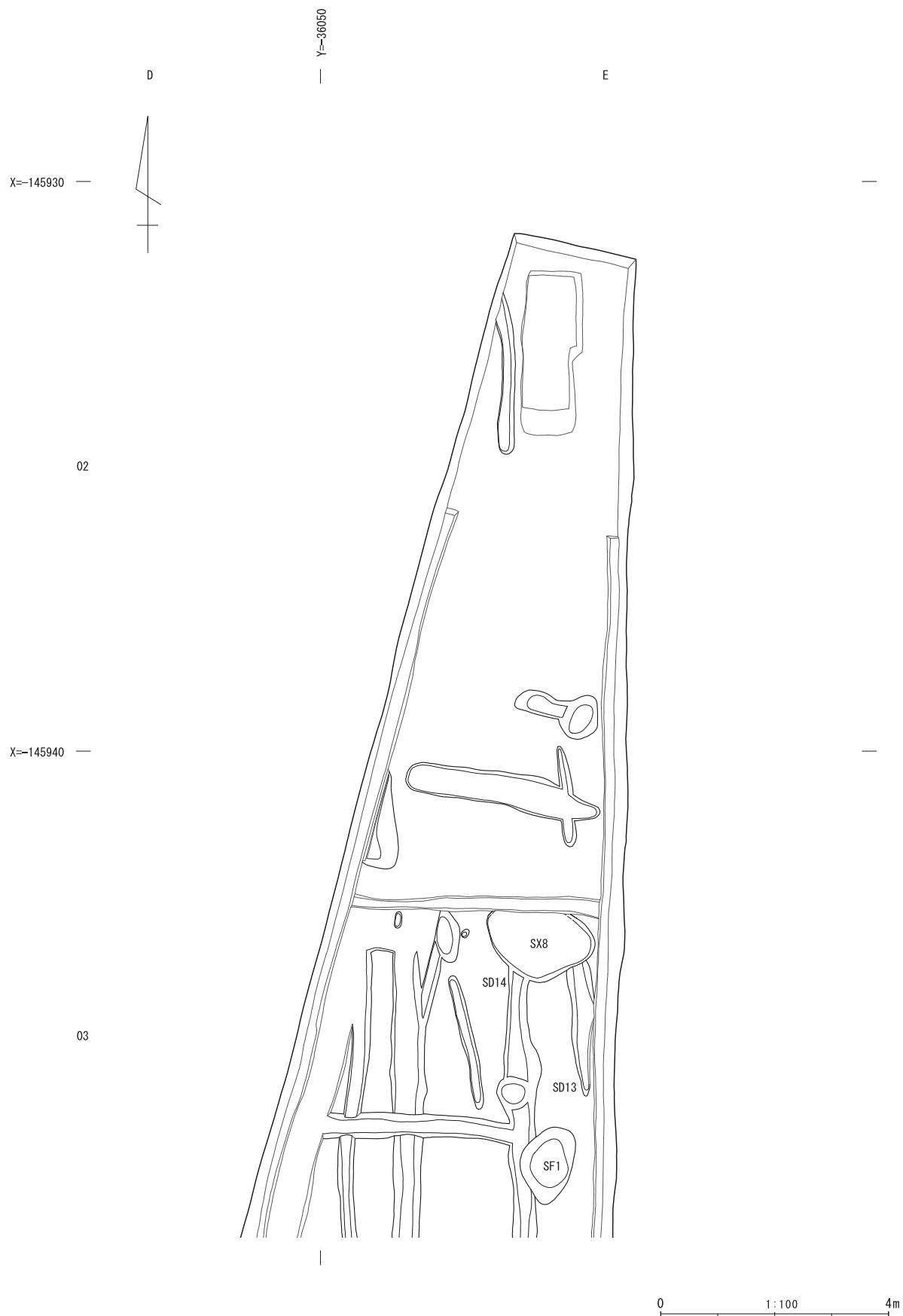
#### 1区SP18～29（第15・16図、図版15）

D5・6グリッドで検出したSP19～29は、総延長が約9.5m、芯と芯の間隔が0.7～0.8mで並ぶ小穴群である。平面形は楕円形で、長軸は東西方向である。小穴の規模は、長軸方向で0.7m、短軸方向で0.3～0.5mを測る。一部の小穴には木材があったと思われる痕跡がある。列状にはなっているものの、対面に並ぶ小穴群はない。近接する遺構は溝状遺構SD19やSD22と並行している。調査区幅が狭いため、周辺の状況が掴めないところではあるが、建物の柱穴等ではなく、柵のような機能を持った小穴群ではないだろうか。何らかの境界の意味を持つ遺構として考えられる。SP19・21・22・24・26・28より須恵器の小片が出土している。SP27では土師器の甕片が出ている。遺構年代は奈良時代の可能性がある。

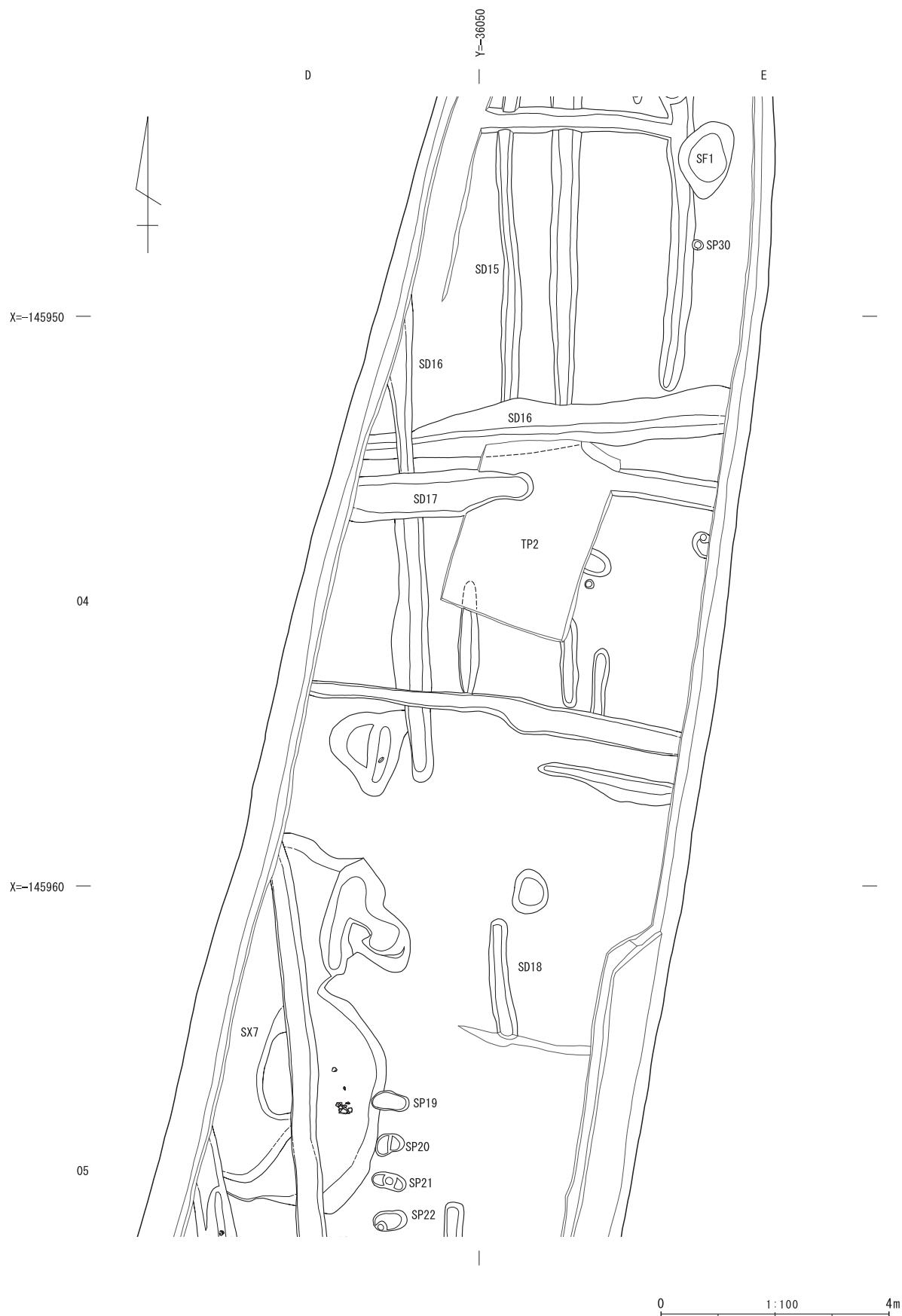
#### 1区SP30（第15図）



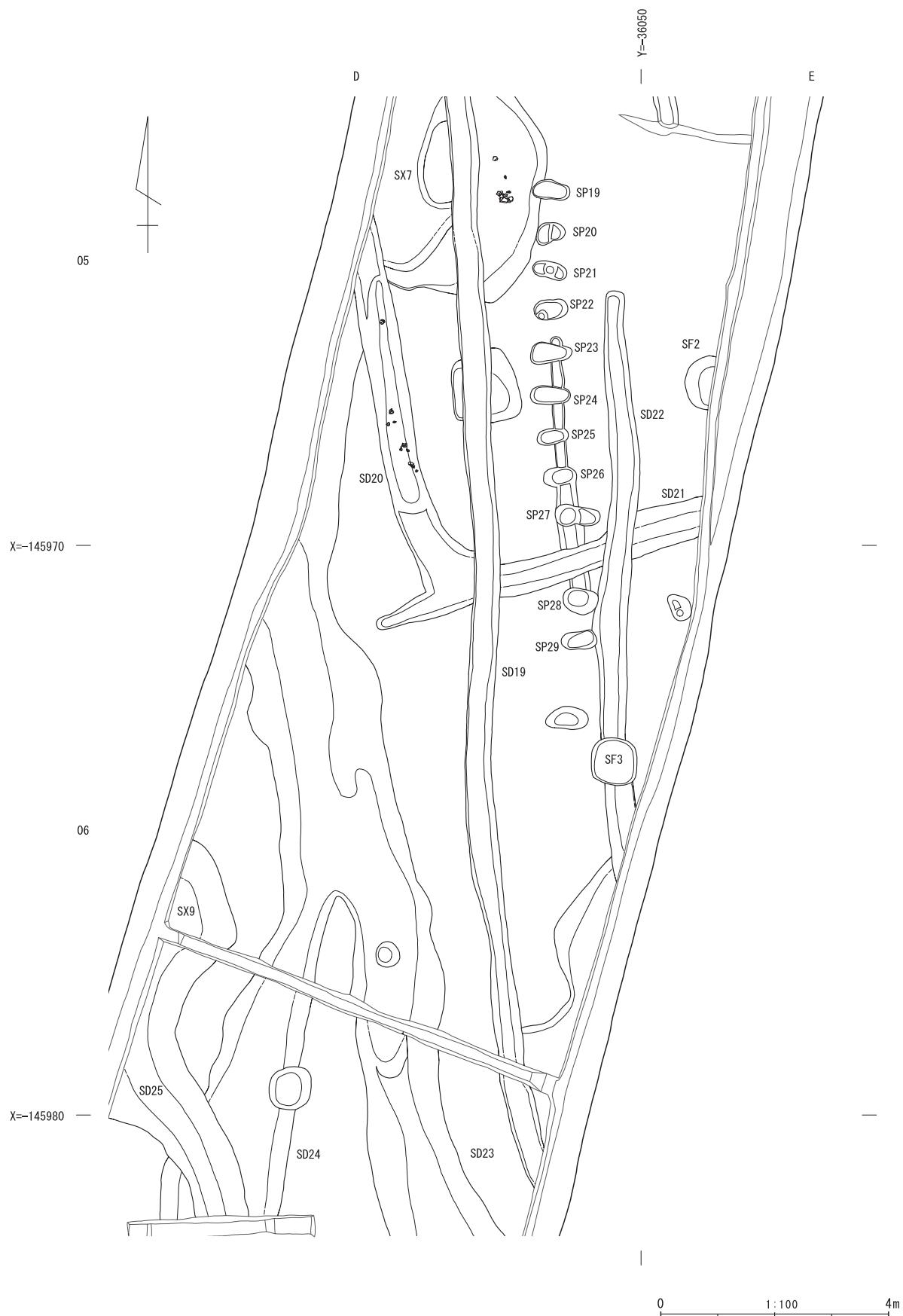
第13図 1区全体図



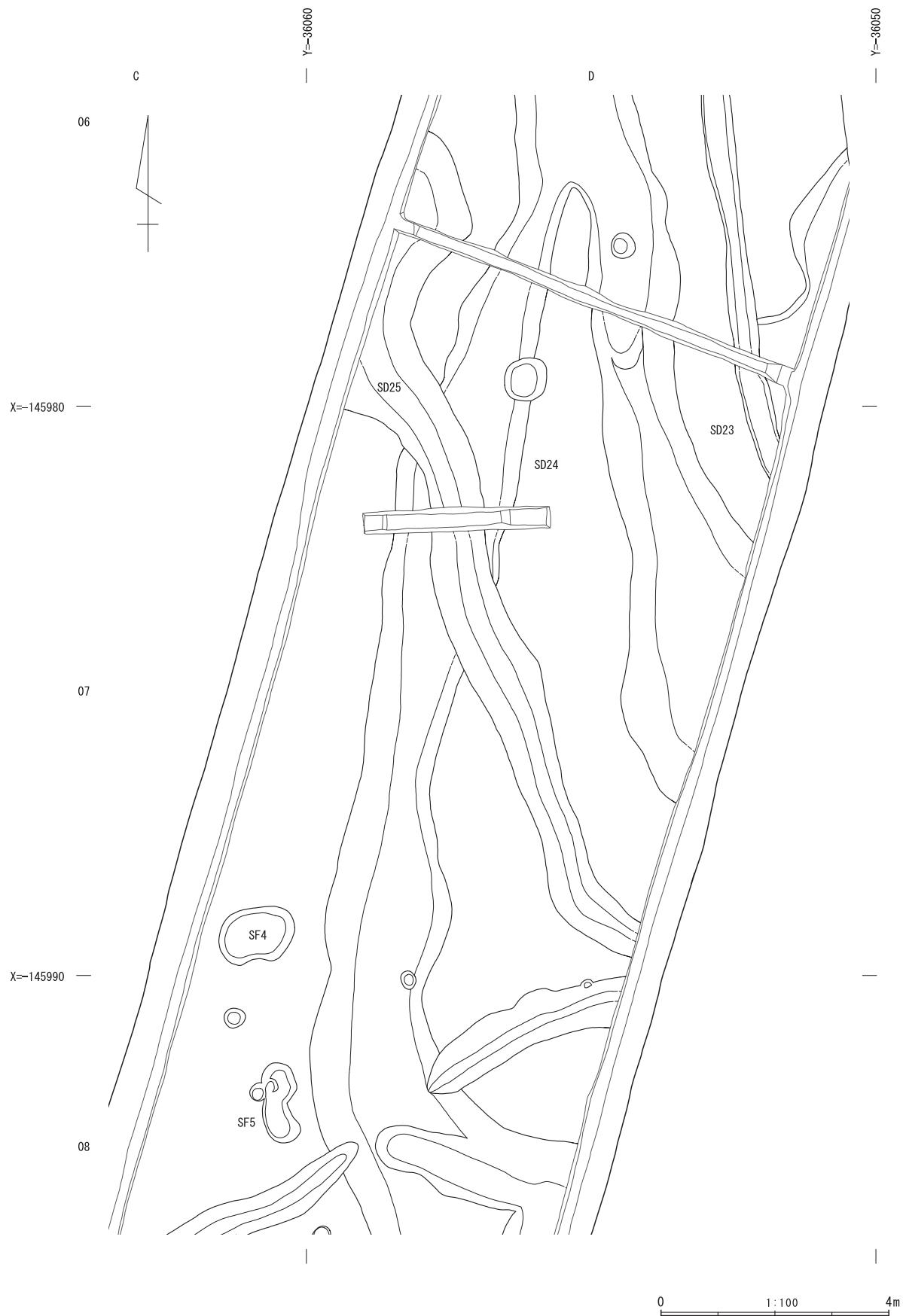
第14図 1区拡大図1



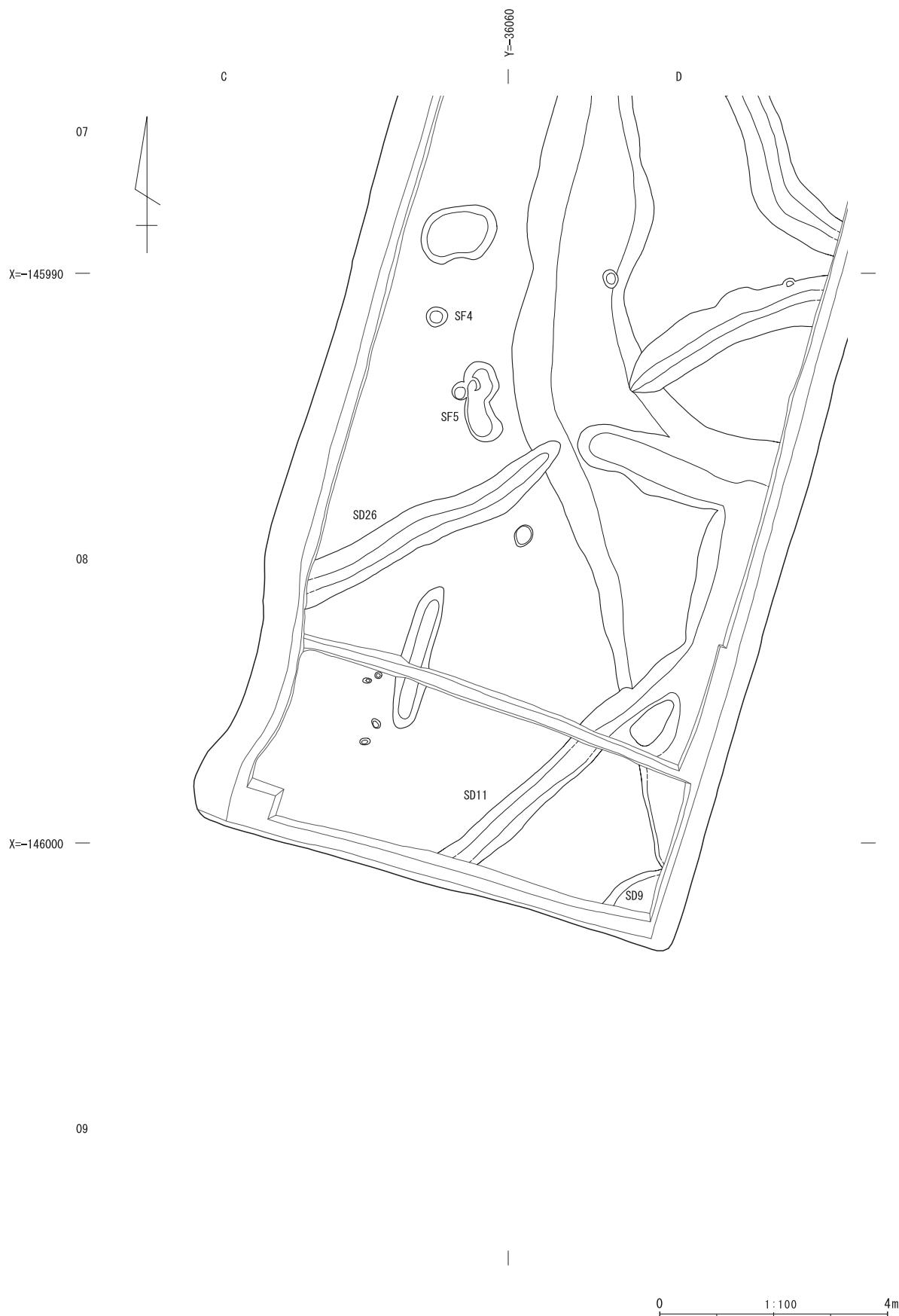
第15図 1区拡大図2



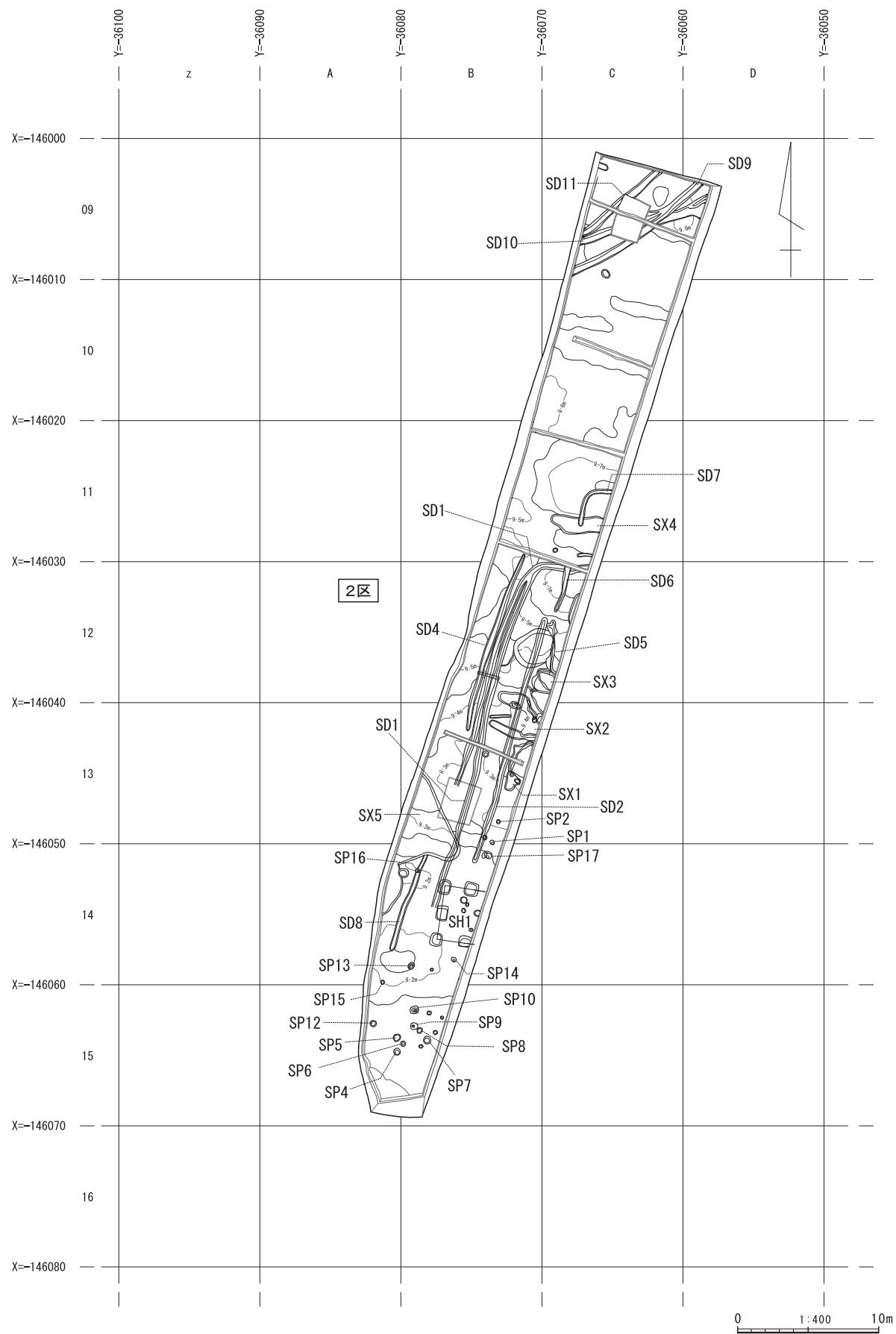
第16図 1区拡大図3



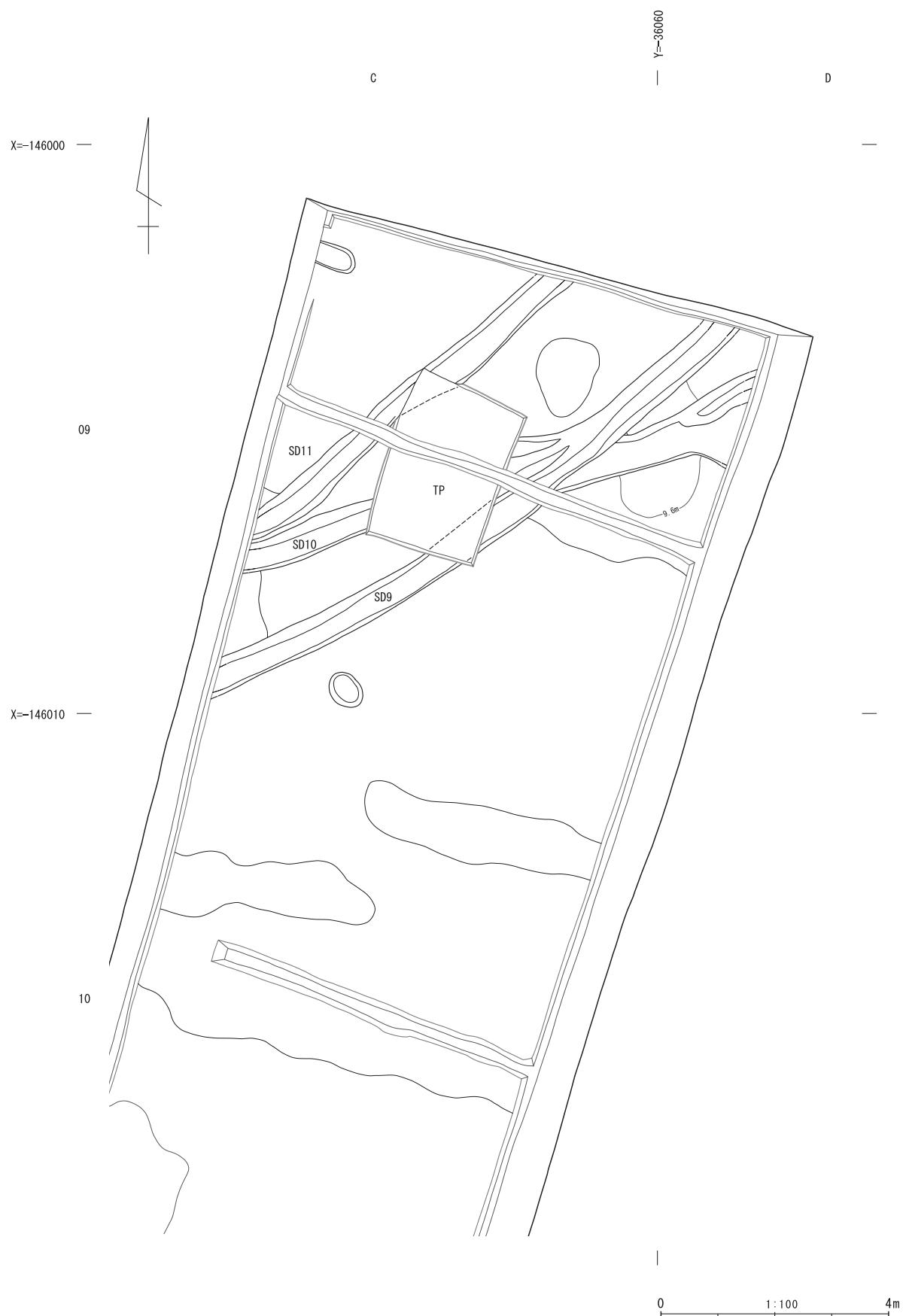
第17図 1区拡大図4



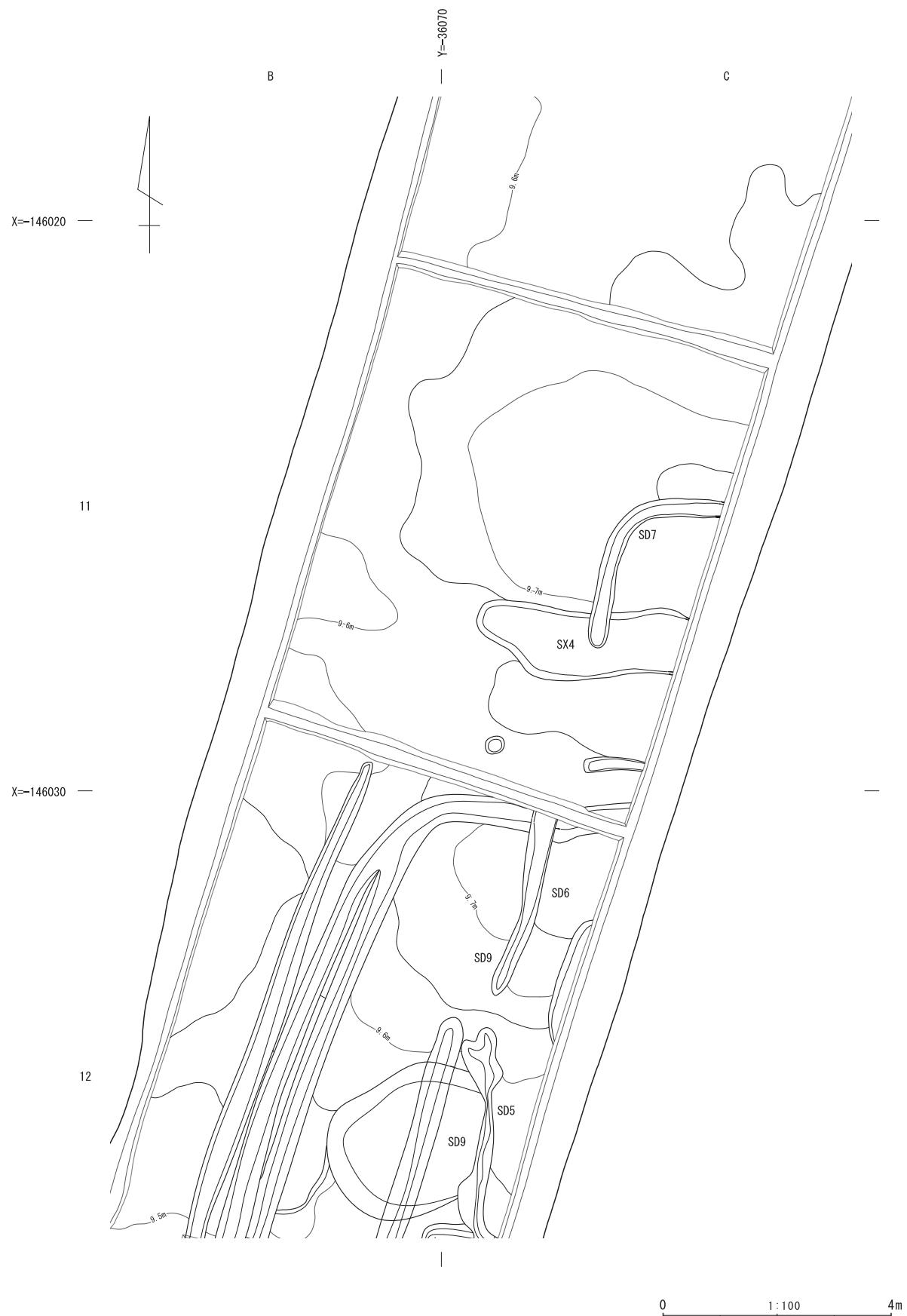
第18図 1区拡大図5



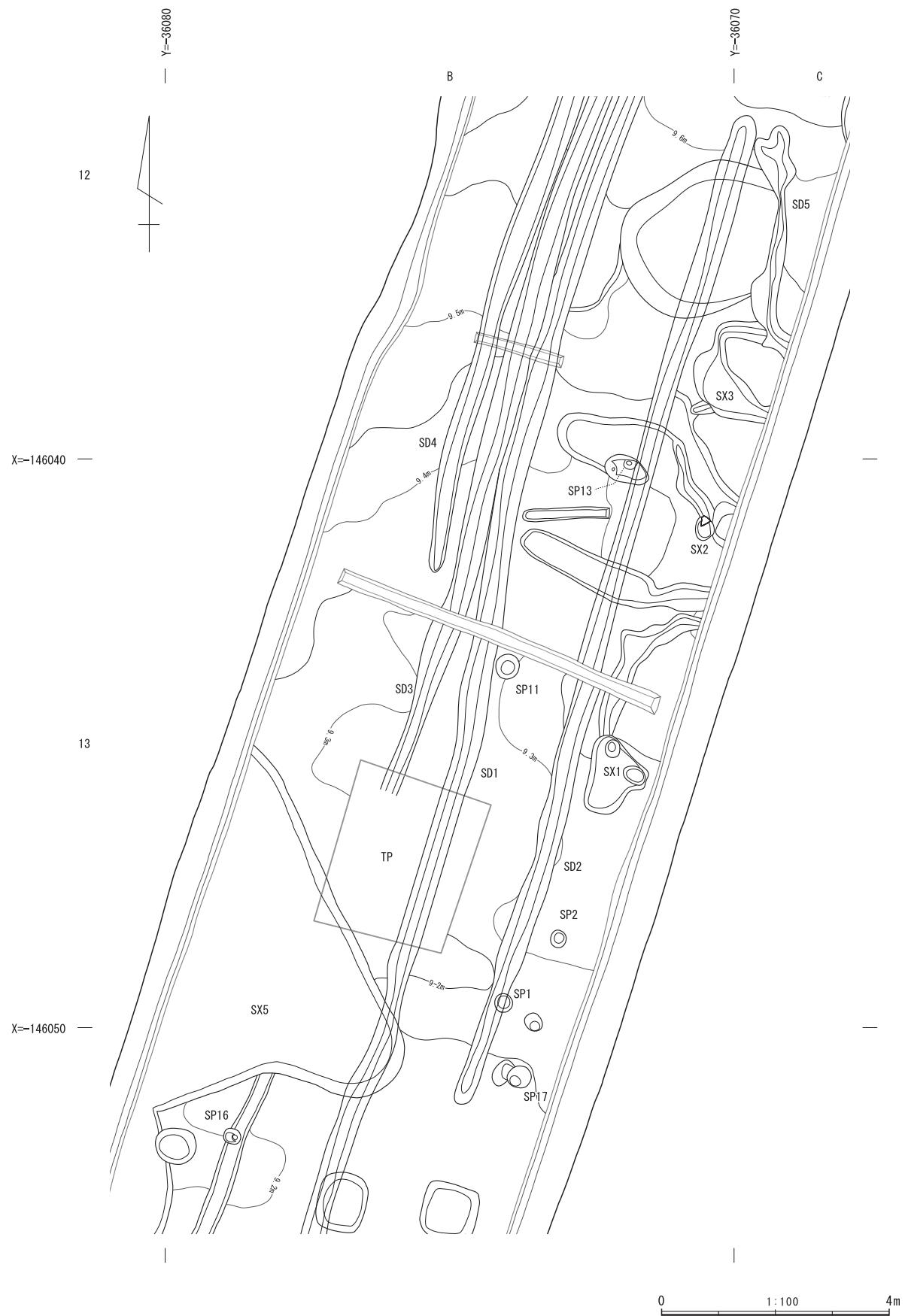
第19図 2区全体図



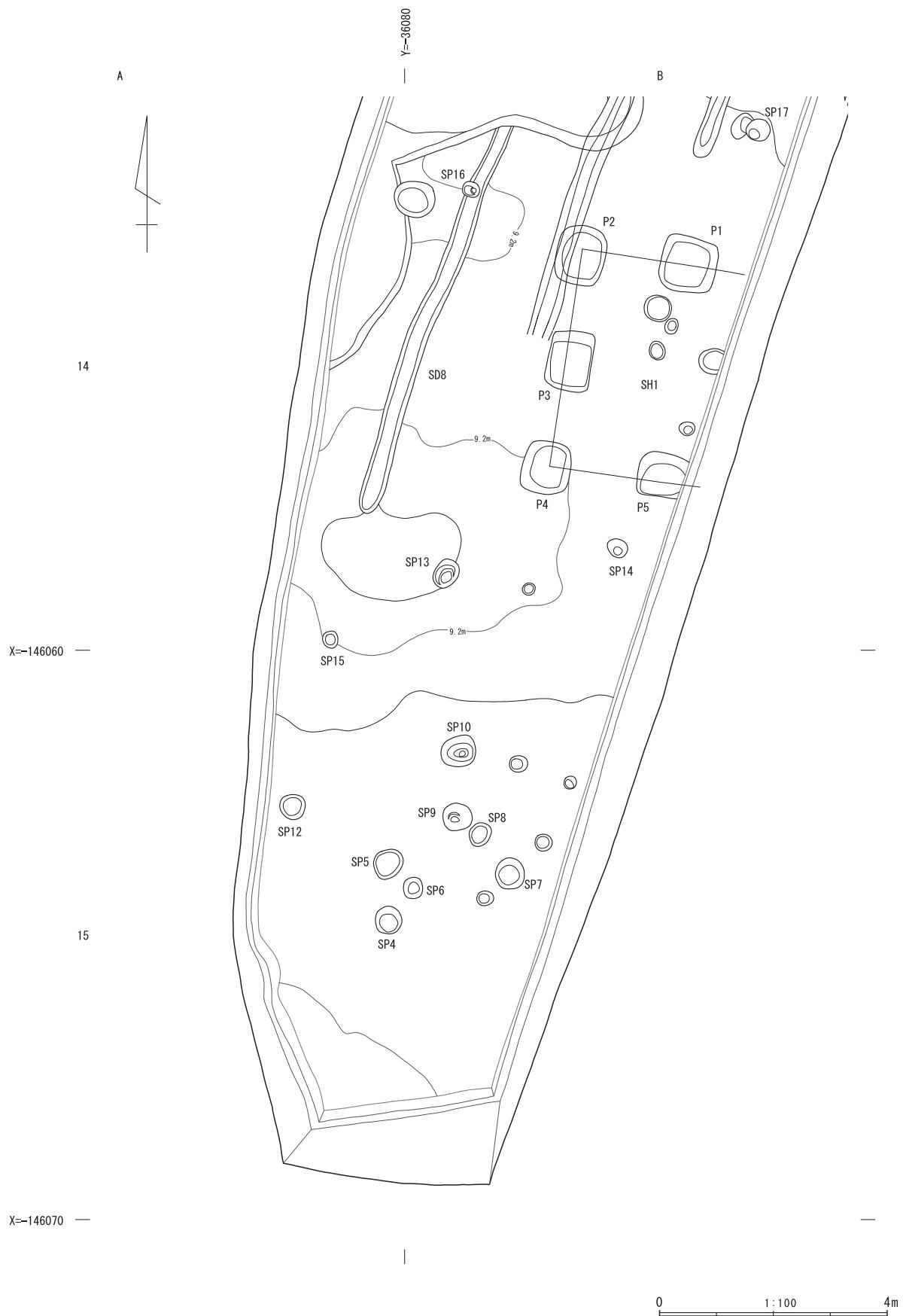
第20図 2区拡大図1



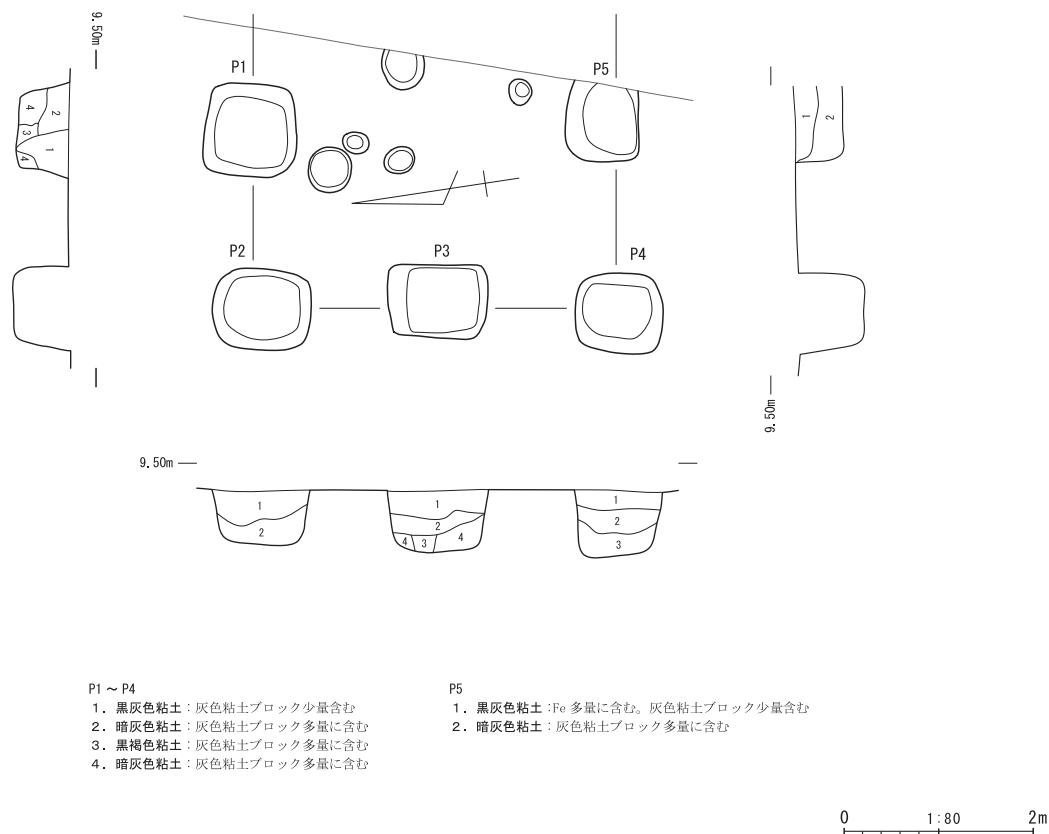
第21図 2区拡大図2



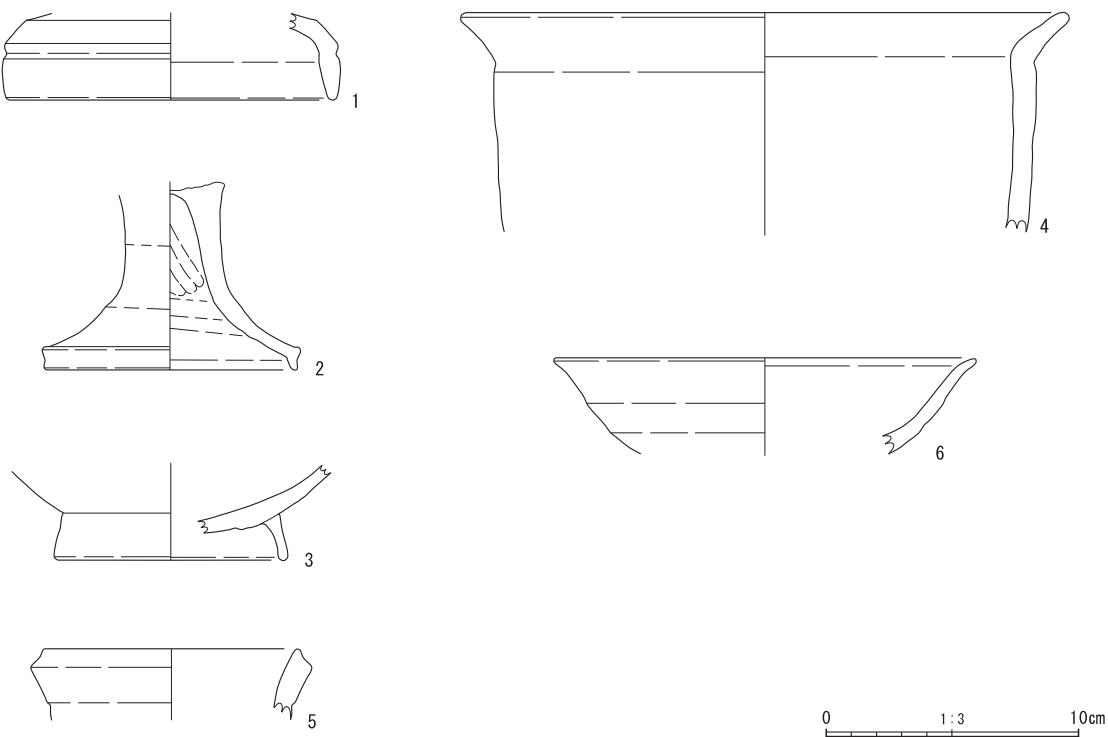
第22図 2区拡大図3



第23図 2区拡大図4



第24図 2区SH 1実測図



第25図 2区SX 2・4、1区SX 7・9、SP30出土遺物実測図

1区北半部E 3 グリッド内、SD14の東縁に位置する小穴である。直径は0.2mの円形を呈する。周囲に関連する同規模の小穴は見られなかったことから、建物の柱穴である可能性は低い。覆土からは灰釉陶器1点が出土した（第25図6）。6は灰釉陶器の口縁部片で、復元口径は16.8cm、釉薬等の痕跡は見られない。平安時代初頭の年代と推定される。

#### 1区SF 1（第26図）

調査区北側のE 3 グリッドで不定形な楕円形の土坑を検出した。土坑の長軸は南北方向で1.4m、短軸は0.9mの規模を持つ。溝状遺構SD14の上に構築されていることから、SD14よりも新しい年代であろう。覆土は上層が暗褐色粘土、下層が灰褐色粘土に黄灰色粘土の小塊を多量に含んでいる。土師器の小片が1点出土した。

#### 1区SF 2（第16図）

E 5 グリッド内に位置する土坑である。調査区東端の排水溝脇で検出した。土坑の東半分は調査区外へ出てしまうが、恐らく円形の土坑であったと想定される。残存する長軸は0.9m、短軸は0.4m以上と思われる。覆土内より土師器小片が1点出土した。

#### 1区SF 3（第16図）

E 6 グリッド内で検出した隅丸方形状の土坑である。最大長・幅ともに0.8m程の掘り方を持つ。溝状遺構SD22と切り合っているが、SF 3 のほうが後世に掘削されている。灰釉陶器または山茶碗の小片が1点出土した。

#### 1区SF 4（第17図）

D 7 グリッドの南西端で、溝状遺構SD24の西側に位置する。土坑の長軸は1.4m、短軸は1.0m、不定形な楕円形を呈する。他の遺構との切り合い関係はない。覆土より須恵器片1、土師器小片2が出土した。

#### 1区SF 5（第17図）

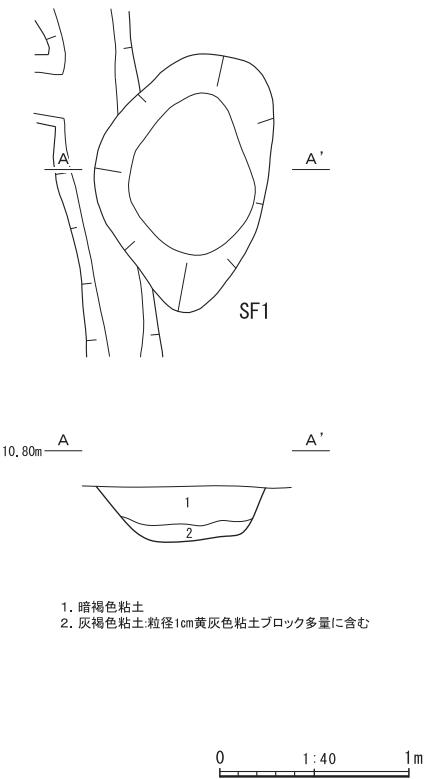
D 8 グリッドの北西部に位置する不定形な土坑である。円形穴が2つ以上、重なっている可能性もある。溝状遺構SD24の西側にある。覆土内からは須恵器・土師器の小片が出土している。

#### 2区SD 1～4（第27図、図版12）

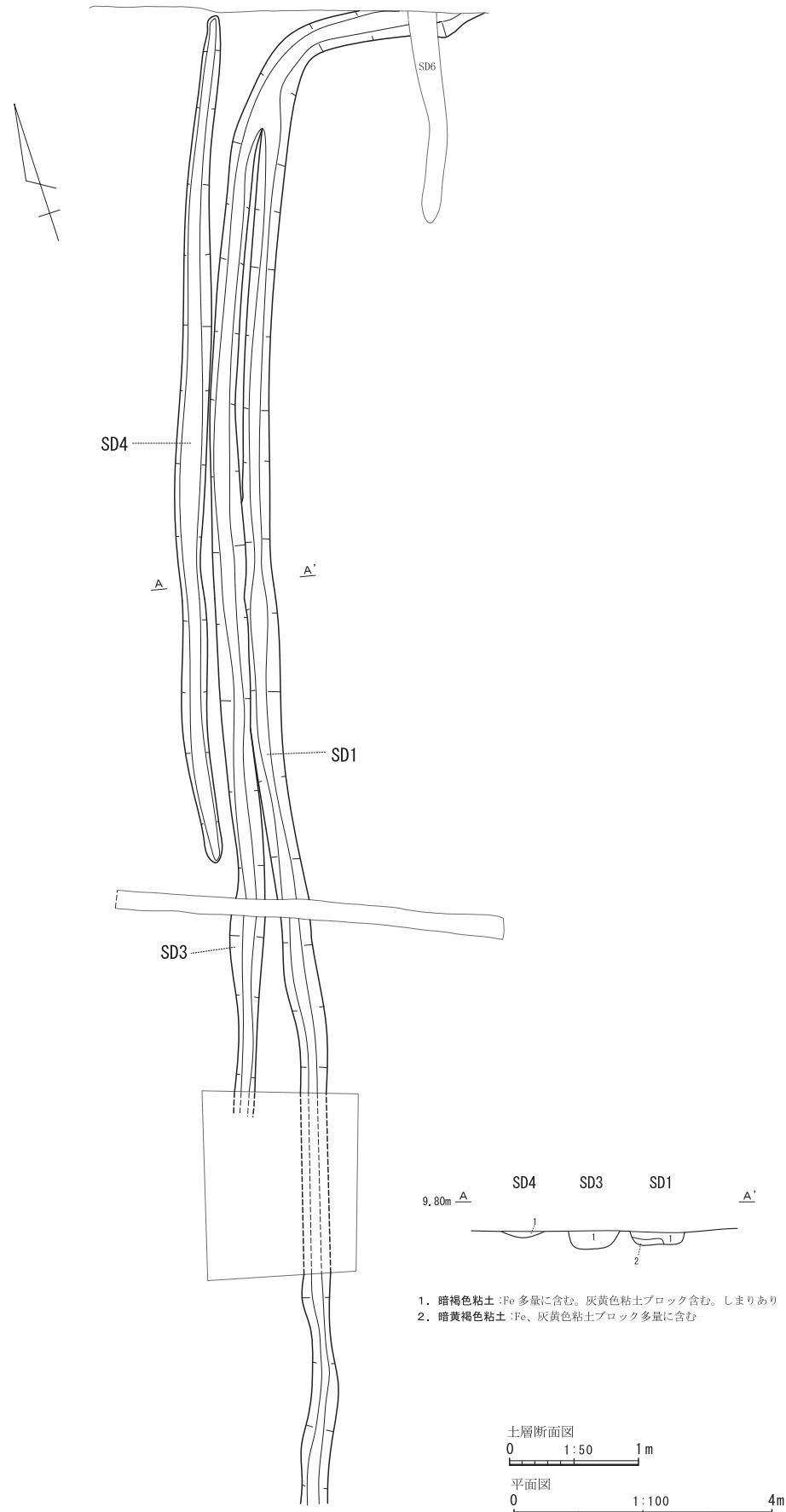
調査区のほぼ中央、B・C 12～14グリッド内に位置し、南北に長く伸びる。溝状遺構SD 1～4 はほぼ並行しており、SD 1・3・4 は近接して3条に並んでいる。

溝状遺構SD 1 は北側ではSD 3 と同一の溝であり、東端は調査区外に続いている。東西方向からC 12 グリッド内で90度屈曲して、途中、SD 3 に分かれて南西方向に伸びている。延長は約20m、溝幅は最大0.5mで、深さは0.1mと浅い。南側はB 14 グリッドの途中で判然としなくなる。

溝状遺構SD 2 はSD 1・3・4 と並行しているが、2mほど東に離れた位置にある。延長は18m、最大幅は0.4mの深い溝である。覆土は暗褐色粘土層である。切り合うSX 2 よりも上層で確認されている。溝状遺構SD 3 はSD 1 と北側で二又に分かれた溝である。SD 1 とSD 3 の間に挟まれ、いずれも近接している。枝分かれしたところより南へ15m程の延長があり、最大幅は0.4m、深さは0.35mを測る。覆



第26図 1区 SF 1 実測図



第27図 2区 SD 1 · 3 · 4 実測図

土も他の溝と共通している。ただ、さらに南側で検出されたSD 8と延長方向や規模が同じであることから、同一遺構の可能性もある。

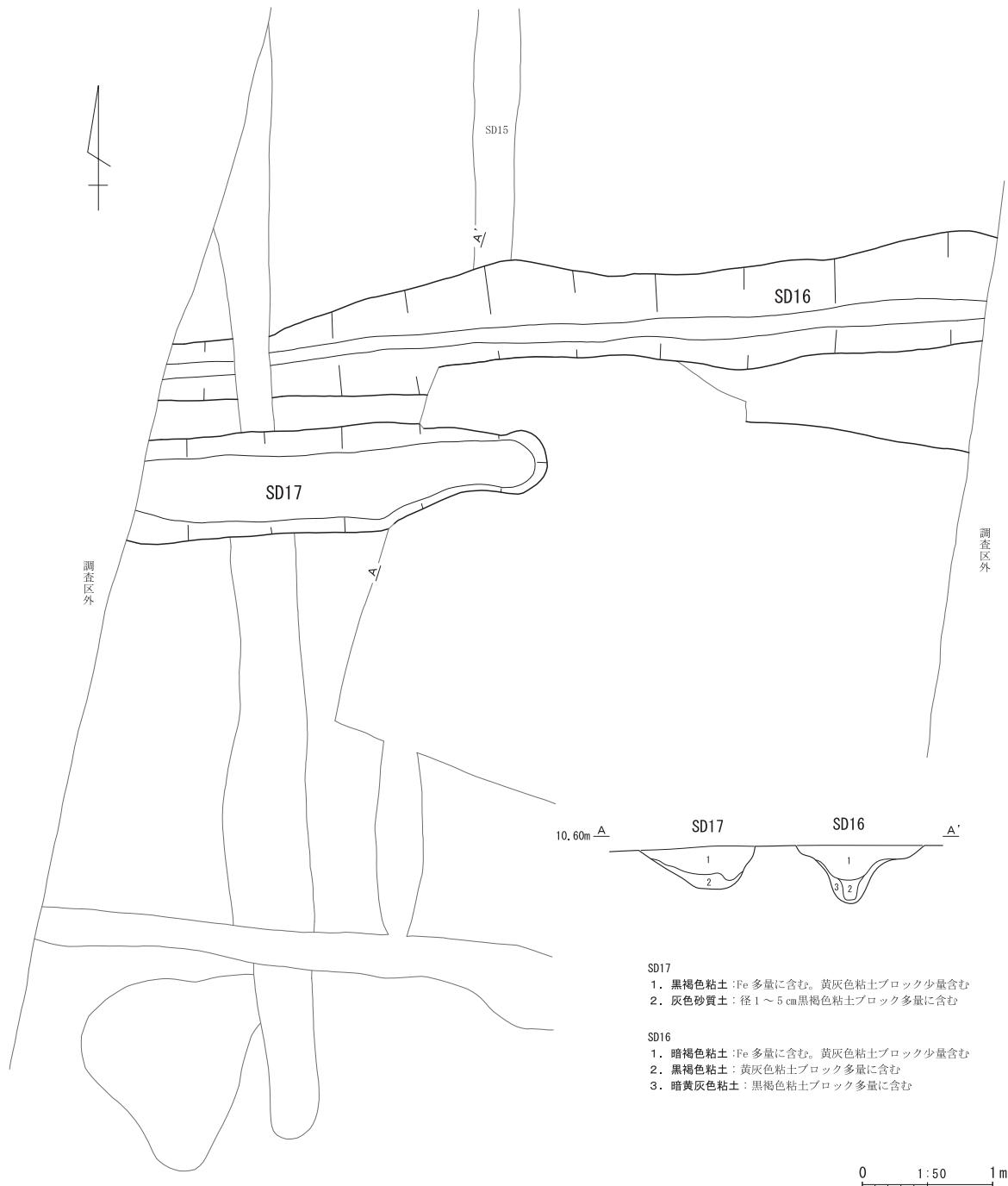
溝状遺構SD 4はSD 3のすぐ西側に接する単独の溝である。延長は13m、最大幅は0.4m、深さは0.1mに満たない。

## 2区SD 5（第22図）

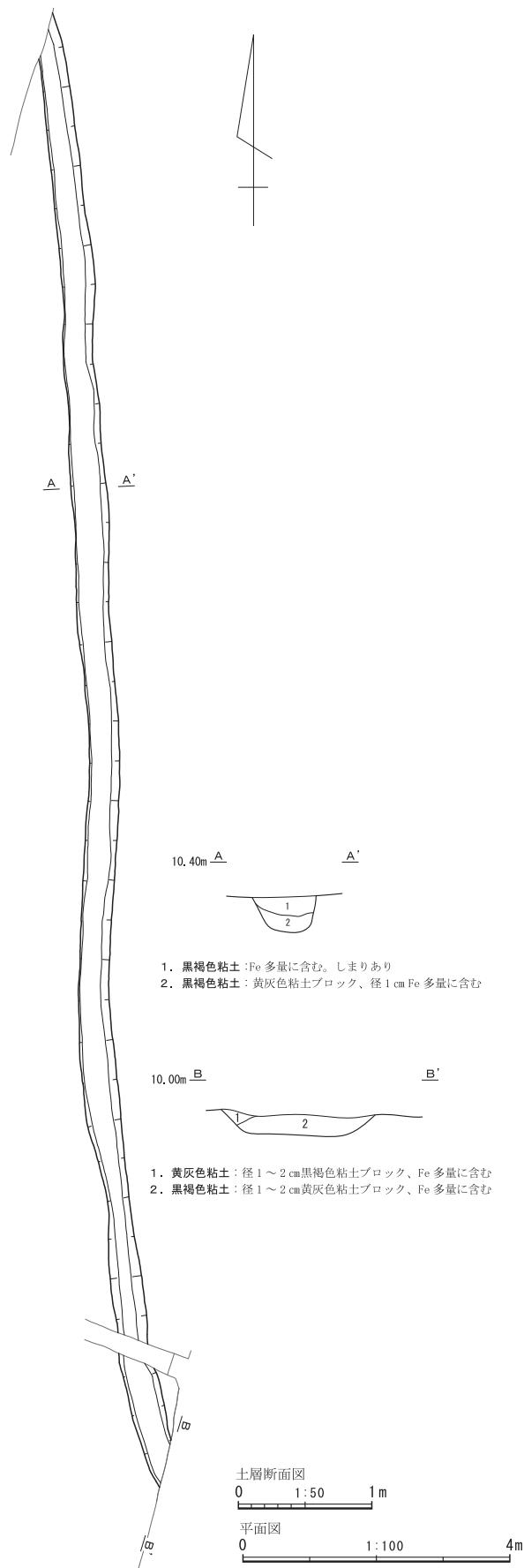
溝状遺構SD 5はC12グリッド内の東壁近くで検出した不定形な溝である。南側でSX 3と接しており、SD 5は後世に出来ている。

## 2区SD 6（第21図）

溝状遺構SD 6はC12グリッド北半部で検出した。SD 1・3の上部に切り合う。3.3mの延長があり、



第28図 1区 SD16・17 実測図



第29図 1区 SD19 実測図

0.4m幅を持つ。

### 2区SD 7 (第21図)

C11グリッドで検出した溝状遺構である。東壁調査区外から西側へ入り、途中、角度を90度変えて南側へ伸びる。SX 4との切り合いでSD 7のほうが新しい年代である。延長は4m程あり、0.3mの幅を持つ。

### 2区SD 8 (第23図)

溝状遺構SD 8はB14グリッドで検出した。北側はSX15と切り合っている。延長は7.2m、最大幅は0.4mを測る。北側は後世のSX15に切られているが、さらに北側で検出されたSD 3と同じ延長上にあり、規模も似ていることから、同一の溝状遺構の可能性もある。

### 2区SD 9~11 (第20図、図版15)

1区と2区の調査区境、C・D 8・9グリッドの範囲で検出した溝状遺構である。南西から北東方向に伸びる。溝幅は0.5~0.6m程である。1区で検出した溝状遺構SD26と並行している。周辺はその他の遺構がほとんど無く出土遺物も少ない。しかし遺構を被覆する黒褐色粘土層からは、灰釉陶器や山茶碗小皿、清郷鍋片、土錘等が出土していることから、遺構の年代は当該期と考えられる。遺構の覆土は3~5層に分層される。SD 9とSD11とは覆土が類似している。

溝状遺構SD 9は2区のC・D 9グリッドに位置する。1区南東端でも一部が見つかっている。延長は15m程、最大幅は0.6mを検出したが、西側も東側も調査区外へ伸びている。1区で検出した溝状遺構SD26と並行している。SD10とは途中、二又に分かれている。

溝状遺構SD10はSD 9と途中、枝分かれした溝である。延長は6m、最大幅は0.6mを測る。西側はSD11と接し、調査区外へと伸びる。

溝状遺構SD11はC 9グリッド内で検出した。1区南東端でも、その延長が確認されている(第18図)。長さは15mほどで、最大幅は0.6m、東端は他の遺構と繋がり、西側は

調査区外へ伸びている。1区で検出した溝状遺構SD24よりも上層で確認されていることから、平安時代よりも新しい年代と想定される。

#### 1区SD13（第14図）

溝状遺構SD13はE 3 グリッド内の調査区東端で検出した。延長は2.3m、幅は0.4m、北側はSX 8 で途切れている。周辺のSD14やSD15と並行した方向性を持つ。広域で見ればSD19やSD22とも同じ方向性を持っている。土師器と須恵器の微小破片が出ている。

#### 1区SD14（第14図）

溝状遺構SD14はE 3・4 グリッドで検出した。西側にあるSD15や東側にあるSD13とは同一方向である。延長は7.2m、最大幅は0.7mを測る。途中、西側へ直角に枝分かれした溝がある。北側は後世のSX 8、途中はSF 1 やSP30に切られている。覆土からは須恵器を含む小片が出土している。年代は平安時代以前と考えられる。

#### 1区SD15（第15図）

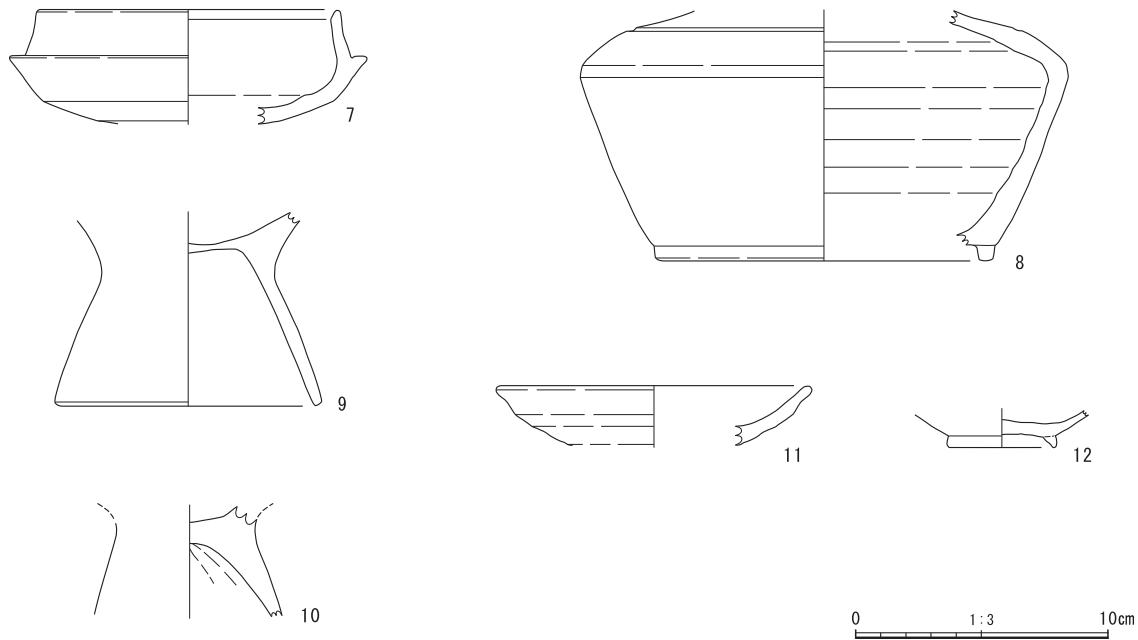
溝状遺構SD15はE 3・4 グリッドに位置する。ほぼ同規模の溝が東側に並行している。北側はSD14と枝分かれした東西の溝で切られ、南側はSD16に切られている。延長は6m程で、幅は0.3～0.4mと狭い。覆土からは土師器小片1点、須恵器甕の破片が複数出土した。年代はSD14よりも前に存在しているとすると奈良時代と考えられる。

#### 1区SD16（第28図、図版15）

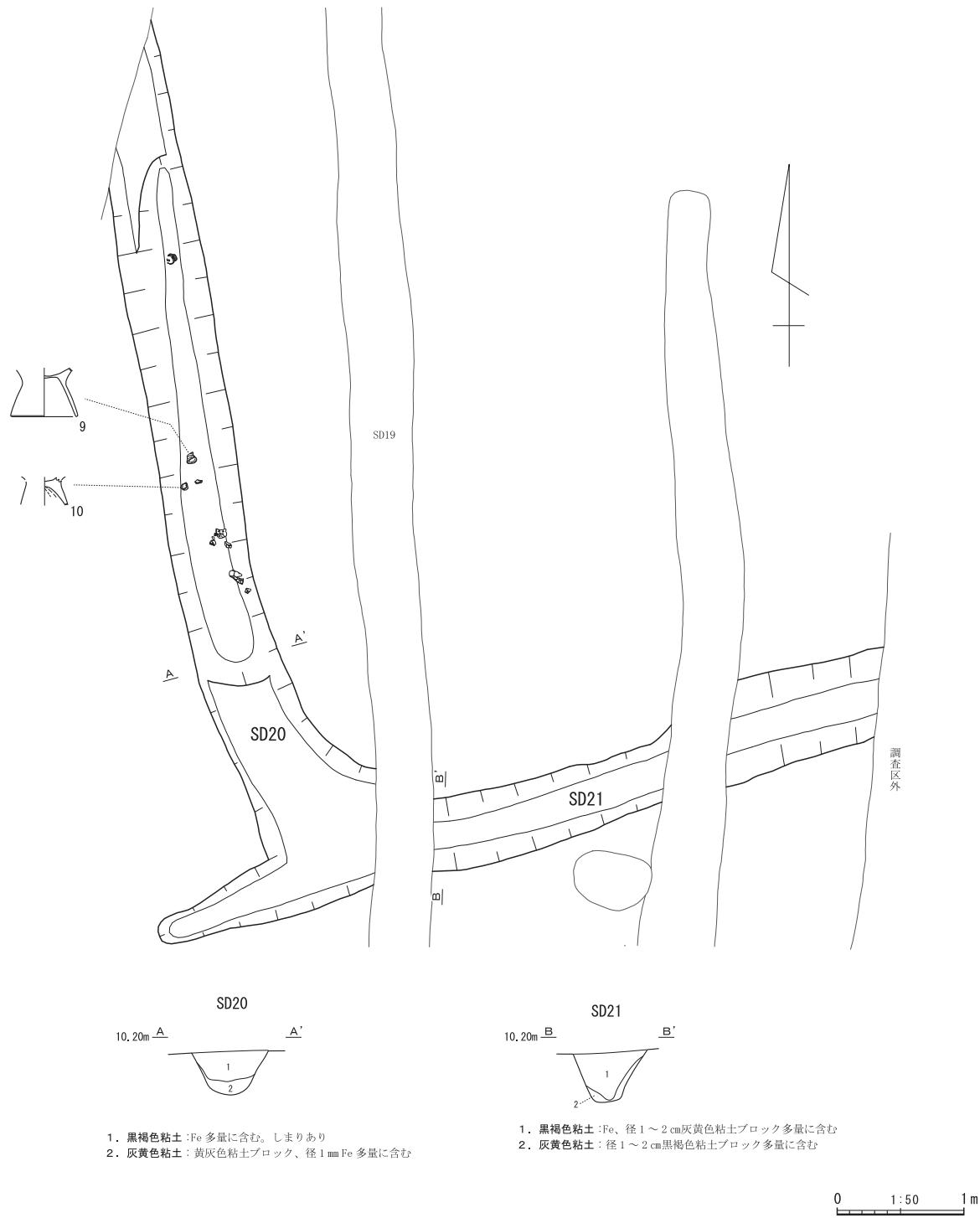
溝状遺構SD16はE・D 4 グリッド内で検出した溝である。SD17の北側に並行した東西方向の溝で、6.3mの延長がある。最大幅は0.9mほどである。東西の両端は調査区外に伸びている。覆土は3層に分層される。出土遺物は土師器の小片が十数点出土した。年代決定には及ばない土器だが、遺構の年代はSD17と並行することから、同時期の溝とも思われる。

#### 1区SD17（第28図、図版15）

溝状遺構SD17はSD16の南側、E・D 4 グリッド内に位置する。溝の中央付近は試掘確認調査で切られている。東西方向に6.3mの長さがある。最大幅は0.8mを測る。覆土内より須恵器と土師器の小片が3点出土した。年代は奈良時代以降であろう。



第30図 2区 SD 3、1区 SD20・24・25 出土遺物実測図



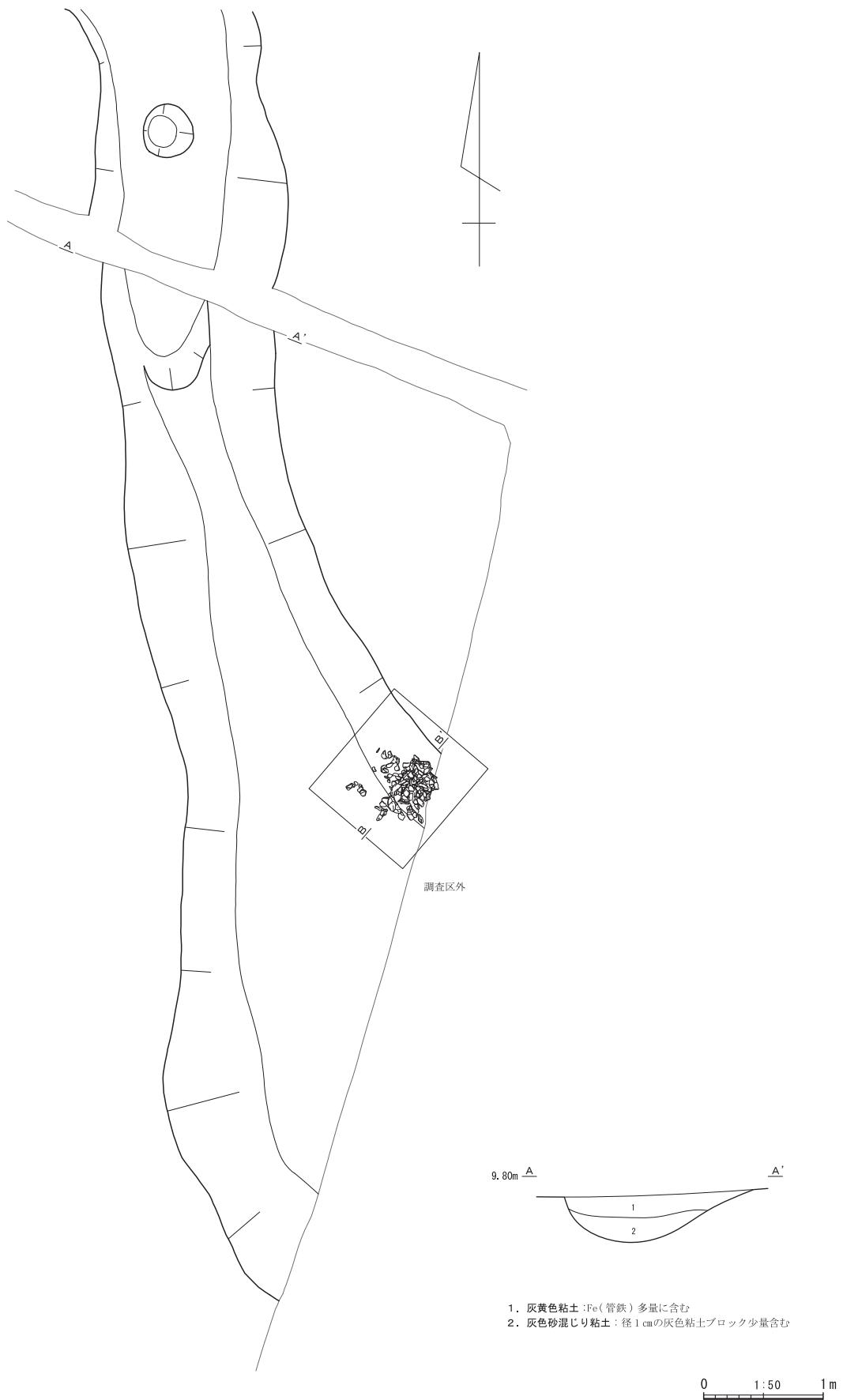
第31図 1区 SD20・21実測図

### 1区SD18（第15図）

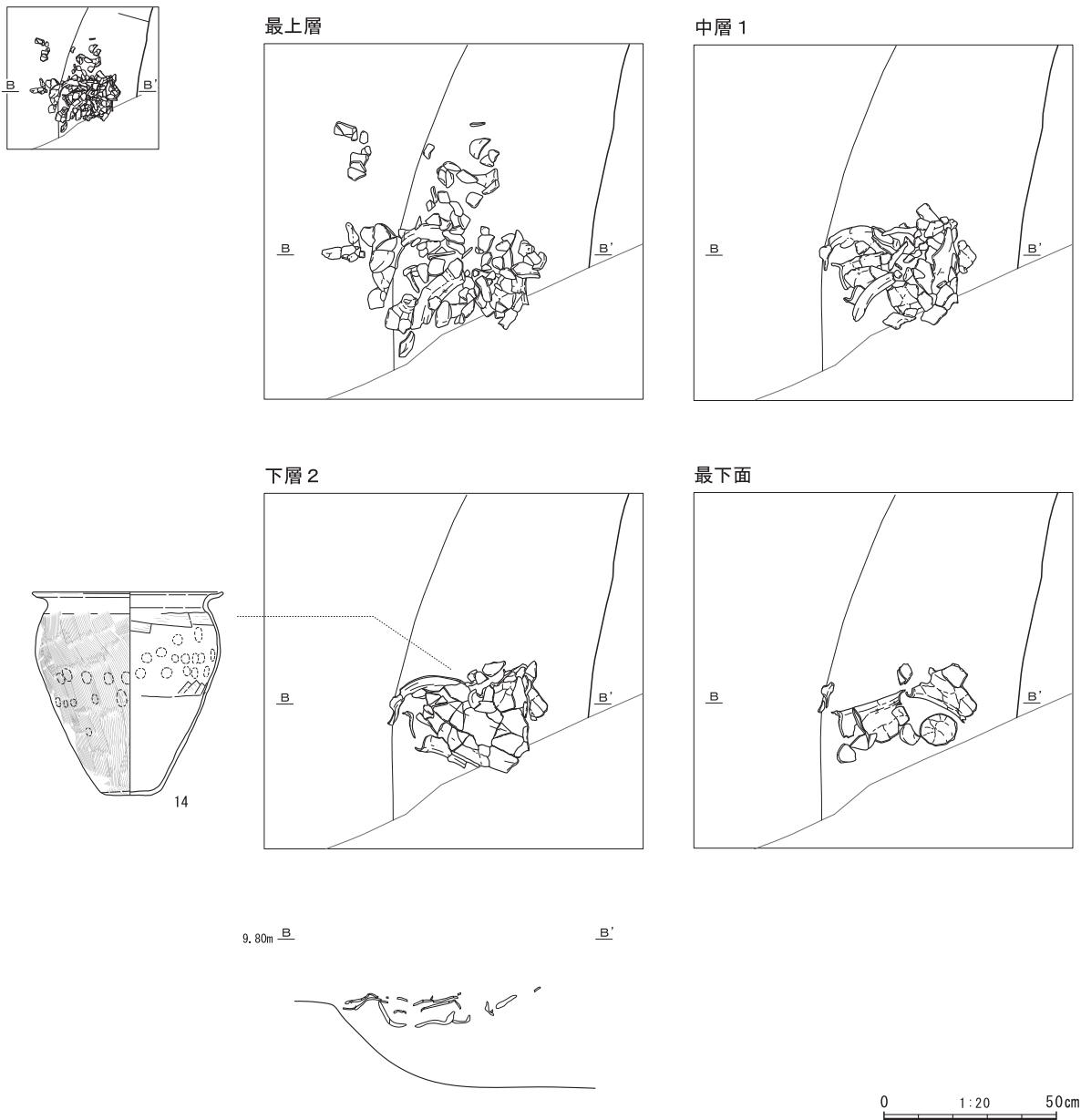
E 5 グリッド北側で検出した南北方向の小規模な溝状遺構である。SD19の東側に位置する。長さは2m、最大幅は0.4mを測る。溝の方向性はSD14・15・19等と同じで、覆土より山茶碗または灰釉陶器の小片が1点出土した。

### 1区SD19（第29図、図版15）

溝状遺構SD19はD 5・6 グリッドに位置する。ほぼ南北の方向性を持つ溝で、総延長は23m、最大幅



第32図 1区 SD23 実測図 1

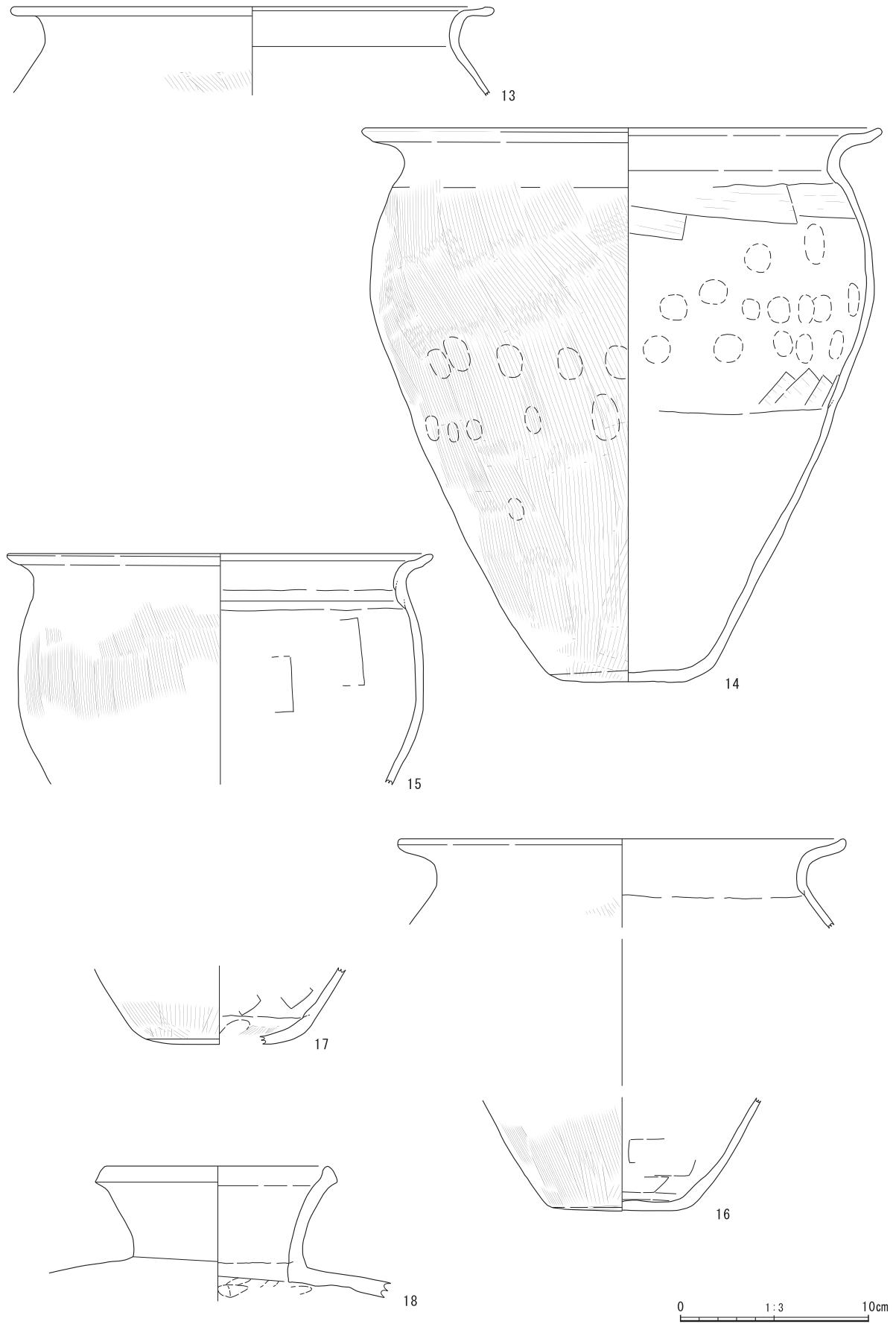


第33図 1区SD23実測図2

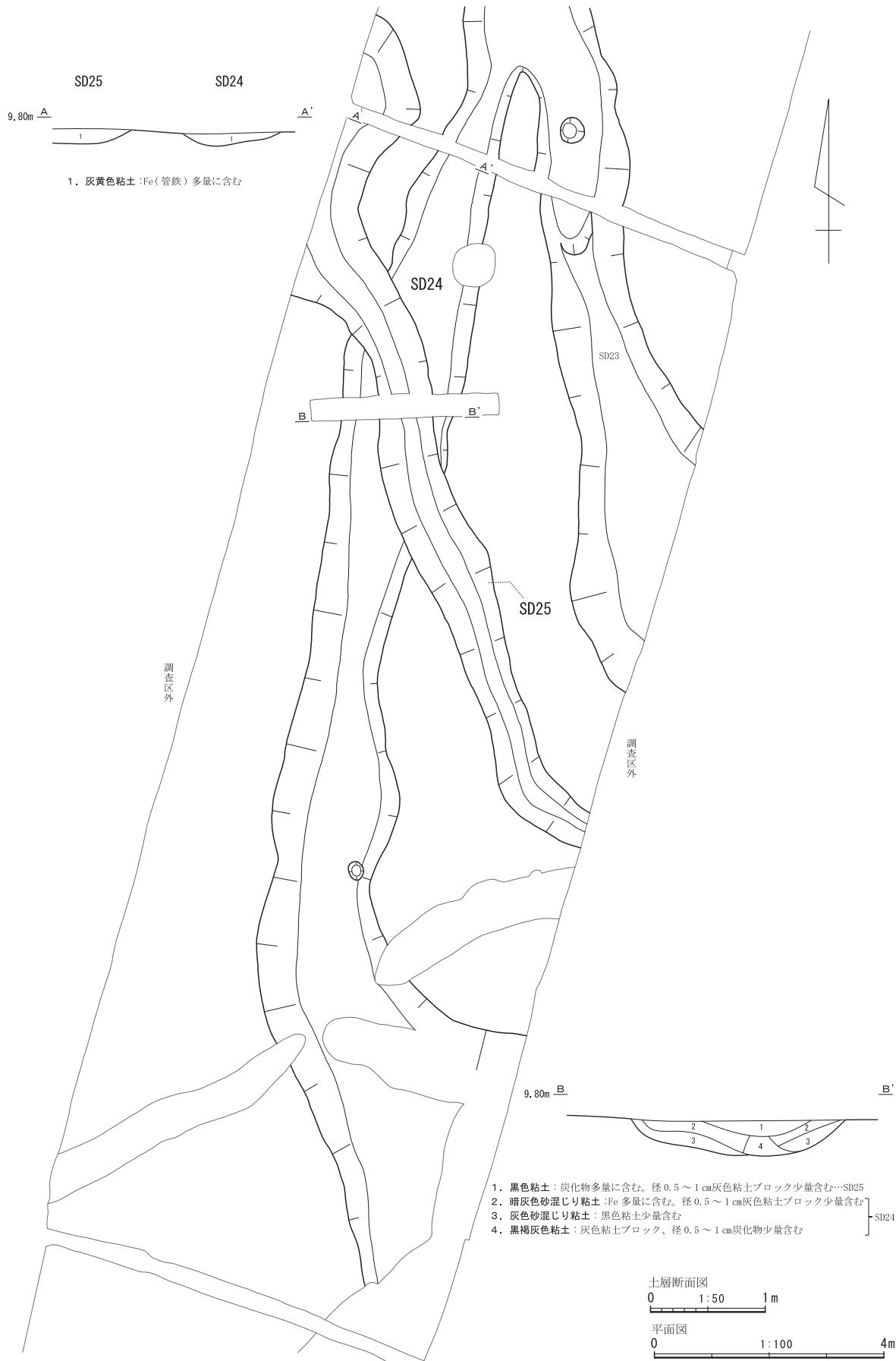
は0.5mを測る。南北の端は、さらに調査区外へと伸びている。2mほど東に位置するSD22やその間に  
あるSP19～29の小穴列と並行している。北側ではSX 7と切り合うが、SD19はSX 7よりも新しい年代  
の遺構である。中央付近ではSD21と切り合う。遺構の性格は人工的な掘削によるものと思われ、区画溝  
的な役割を持っていた可能性がある。遺物は覆土内より出土した。須恵器を含むが、土師器片のほうが  
多く含まれていた。本遺構の年代はSX 7よりも後の年代だが、時期差は大きくなく、平安時代以降と  
考えられる。

#### 1区SD20・21（第31図、図版15）

溝状遺構SD20はD 5グリッドで検出した南北方向の溝である。延長は7m、幅は0.7m、深さは0.35  
mほどで、北側は調査区外へ続いており、南側は東西方向のSD21に繋がっている。SX 7の南端に接し  
ている。覆土は上層に黒褐色粘土、下層は灰黄色粘土で、覆土内から土器が複数個体出土している。第  
30図9・10は台付甕の脚部片である。9は底径10.6cm、残存高は7.65cmで、表面は摩滅して調整痕は



第34図 1区 SD23 出土遺物実測図



第35図 1区 SD24・25 実測図

見えない。全体に歪んでいる。10も台付甕の脚部で、脚部内面には製作時の調整痕が残っている。東側で検出した溝状遺構SD 9などとはやや方向性が異なる。その他、覆土より出土した土器は全て弥生土器片であった。出土土器の年代が弥生時代後期であることから、周辺の遺構よりも古い年代に遡る可能性がある。

溝状遺構SD21はSD20の南端に接し、SD20とは直角に交わる東西方向の遺構である。延長6m、最大幅は0.8m、深さは0.4mほどで、東端は調査区外へ続く。覆土はSD21と同様である。方向性は同区内の溝状遺構SD16やSD26、2区SD11などと同じだが、いずれも離れた場所で検出されているので関連性はないと思われる。遺構からは弥生土器小片が出土した。SD20同様、周辺よりも古い年代の遺構であろう。

#### 1区SD22（第16図、図版15）

溝状遺構SD22はD 5・6グリッドの東端に位置する。SD19やSP19～29の小穴列と並行している。延長は10.3m、最大幅は0.6m、南側はさらに調査区外へ伸びている。SD21よりも後世で、SF 3より古い年代の遺構である。規格性があることから自然流路とは考えにくく、人為的に掘削された溝であろう。

#### 1区SD23（第32・33図、図版16）

SD23はD 5～7グリッド内の広範囲で検出した。形状は人為的な掘削によるものではなく、自然の流路であろう。水流は北西から南東へ向かう。おそらく小笠高橋川の旧流路へ向かう流れであろう。延長は23m、最大幅は東端で4.8mほどある。D 6グリッド内でSD24へ分岐する。

第34図13～18はSD23覆土内より出土した土器である。いずれもSD23の東端で折り重なるような状態で出土した（第33図）。土器が出土した地点は、礫混じりの砂層が深くまで落ち込んでおり、遺物が多く集中していた。その状況から鑑みると、上流部から流れてきた二次堆積の可能性も考えられる。これらのうち5個体分の土師器の長胴甕を図化した（13～17）。13は甕の口縁部片である。復元口径は25.8cmほどである。14はほぼ完形に近い長胴甕である。口径は27.8cm、高さ29.6cm、口縁部は強く外側に開く。胴部には粘土を指押さえした上から調整した細かいハケの痕跡がある。内面は板状の工具で面を調整している。15も甕の口縁部から胴部までが残っている。16は甕の口縁部と底部の破片で、接合点はないが同一個体と考えられる。復元口径は23.9cm、底径は7.4cm、底部の残存高は6.0cmで、底面はハケ調整後ナデている。17は甕の底部片である。18は須恵器の横瓶口縁部である。口径は11.8cm、残存高は7.0cmである。そのほか覆土内より土師器の高壺脚部や須恵器甕の小片などが多く出土した。出土した土器の年代から、SD23は奈良時代の遺構と考えられる。同じ方向性を持つSD24やSD25では山茶碗等が出土しており、SD23はそれよりも若干、古い年代であろう。

#### 1区SD24（第35図、図版16）

SD24はD 5～8グリッド内で検出した。SD23と同様に人為的な溝ではなく、自然流路であろう。北側はSD23と同じ流路で、D 6グリッド内でSD23とは分岐している。北側も含めると総延長は37m、最大幅は南端で5.2mを測る。北側では浅く、南側は0.3m程の深さがある。第30図11は覆土内より出土した山茶碗の小皿である。遺構の北側では奈良時代の須恵器が多く出土した。南側では奈良時代の甕破片が多く、高壺脚部の破片もあった。その他に轍の羽口破片も出土した。轍の羽口は1区包含層からも1点出土している（第43図52）。流路の年代は出土した土器から、奈良～平安時代であろう。

#### 1区SD25（第35図、図版16）

SD25はD 6・7グリッド内で検出した。SD23・24と同様に自然流路である。SD24の上層で切り合っており、SD25はSD24よりも後に流れてきた流路である。延長は15mほどで、幅は1.2mである。北端ではSX 9の遺構名が付いているが、SD25の一部であろう。SD25の覆土内より山茶碗の小皿（第30図12）が出土した。そのほか須恵器の甕を含む小片や土師器の小片が出土した。土器の小片は二次堆積の可能

性もある。遺構の年代は平安時代以降であろう。

#### 1区SD26（第18図）

溝状遺構SD26はC・D 8 グリッドで検出した。南西から北東方向の溝である。東西の端は調査区外に続いている。溝の平面形は部分的に緩やかに曲線を描いており、人為的か自然のものかは判別できない。途中SD24で区切れるが、延長は11m、最大幅は0.9mである。覆土内より須恵器の甕や土師器片が複数出土した。

#### 2区SX 1（第22図）

調査区南半部のB 13グリッドにある不定形な土坑である。長軸方向は1.5m、短軸方向は1.0m程の規模がある。遺構の用途は不明である。SX 2よりも新しい年代と考えられる。

#### 2区SX 2（第22図、図版13）

調査区中央付近、B 13グリッド北半部で検出した不定形な溝状の遺構である。途中、溝状遺構SD 2と切り合っており、SD 2よりも古いことが解っている。覆土は黒灰色粘土で灰色粘土の小塊が多く混じる。

第25図1は2区SX 2より出土した須恵器の坏蓋である。復元口径は13.0cm、残存高3.6cm、口縁～体部は厚みを持っている。蓋部上面には回転ヘラ削りがある。外面には明瞭な沈線が巡っている。覆土内には、このほかにも7世紀代の須恵器が出土した。須恵器大甕の胴部片や須恵器坏蓋・坏身片、平底の小型壺他、奈良時代坏蓋小片、灰釉陶器の碗片、器種が特定できない土師器の小片多数を含む。いずれにしても古墳時代の古い年代のものではなく、7世紀代以降の時期である。

#### 2区SX 3（第22図）

調査区のほぼ中央東寄り、C 12グリッドで検出した不定形なコの字形を呈する溝状遺構である。東側は調査区外で途切れていますため、全体形状は不明である。人為的に掘削したものとは考えにくい。

#### 2区SX 4（第21図）

2区北半部のC 11グリッドで検出した溝状遺構である。長軸は東西方向で3.6m、短軸方向は1.3m程と広く、東端部は調査区外へと続いている。これより15m程北側の先までは遺構のない空白地帯で、C 9グリッド以北から再び溝状遺構が検出されている。SX 4の覆土内より須恵器高坏（第25図2）が1点出土した。須恵器の高坏は脚部片で、底部径は10.1cm、残存高は7.3cmとなっている。上部は坏部との接合部分で剥がれている。脚部内面上部には絞り痕、下方には縦方向の傷が2本並行している。2本の傷は焼成前に付いたものと判断される。

出土した土器から、遺構の年代は古墳時代後期であろう。

#### 2区SX 5（第22図）

調査区南半部B 13・14グリッドの西壁側で検出した不定形な遺構である。西側は調査区外へと続くため、全体の形状も不明である。同調査区内で検出した溝状遺構よりも後の上層で見つかった。同グリッド内検出のSD 8よりもSX 5は新しい時期である。西壁側の延長は10m、幅は4mと広範囲に及ぶ。

#### 1区SX 7（第15図、図版13）

調査区中央部西側のD 5グリッド内で検出した不定形な遺構である。西側は調査区外である。南北は6mを超える範囲に渡る。上層でSD19が切り合っている。第25図3・4はSX 7東側の覆土内より出土した。3は山茶碗の体部から高台部分の破片である。復元底径は9.3cm、残存高は3.8cm、内面見込みには重ね焼き痕があり、高さのある高台は貼り付け高台である。4は甕の口縁から体部片で、復元口径は24.2cm、残存高は8.7cmを測る。表面は風化が著しく、調整痕は見えない。器種は土師器の甕だろうか。出土した土器の年代から、平安時代と考えられる。

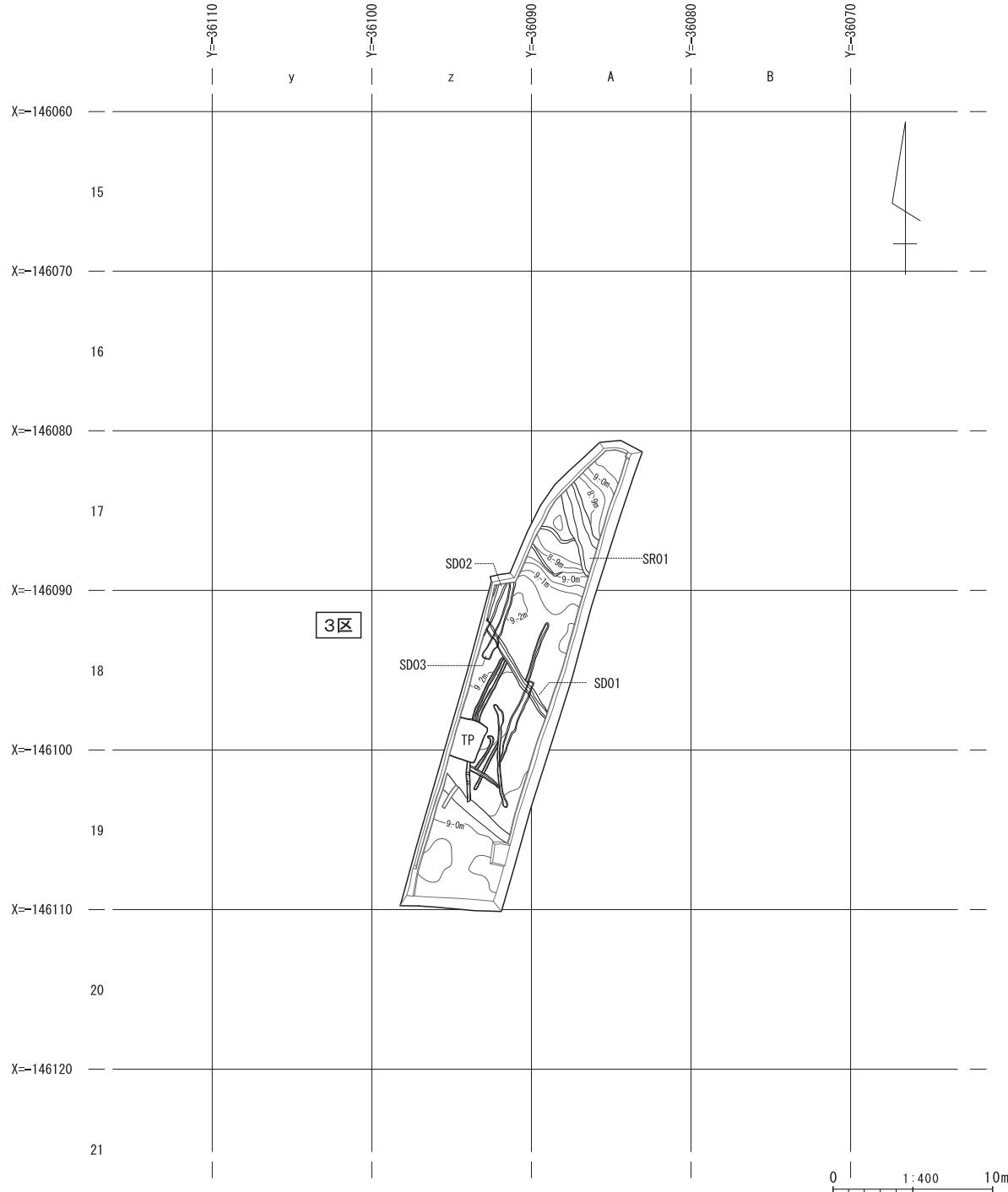
#### 1区SX 9（第16図）

調査区中央部の西側、D 6 グリッド内で検出した。SD25の北側に位置する。形状は不定形で、西側は調査区外へ続いている。位置関係からSD25の一部の可能性もある。覆土内より第25図5の壺類の口縁部片が出土した。口縁には発色していない降灰釉が見える。復元口径は10.2cmほどある。小片のため年代を特定するのは困難である。

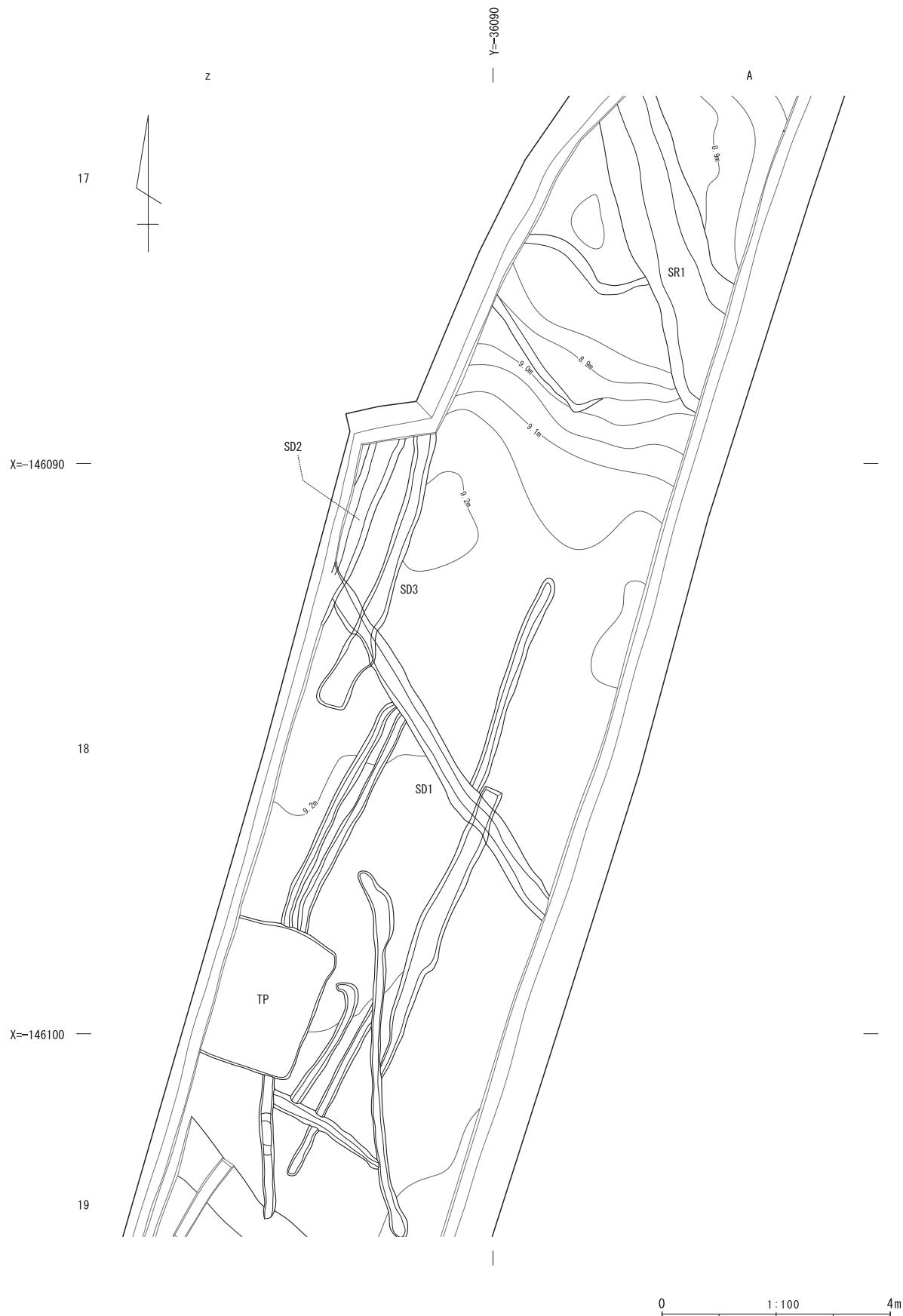
## 2 3 区遺構

### 3区SD 1（第38図、図版17）

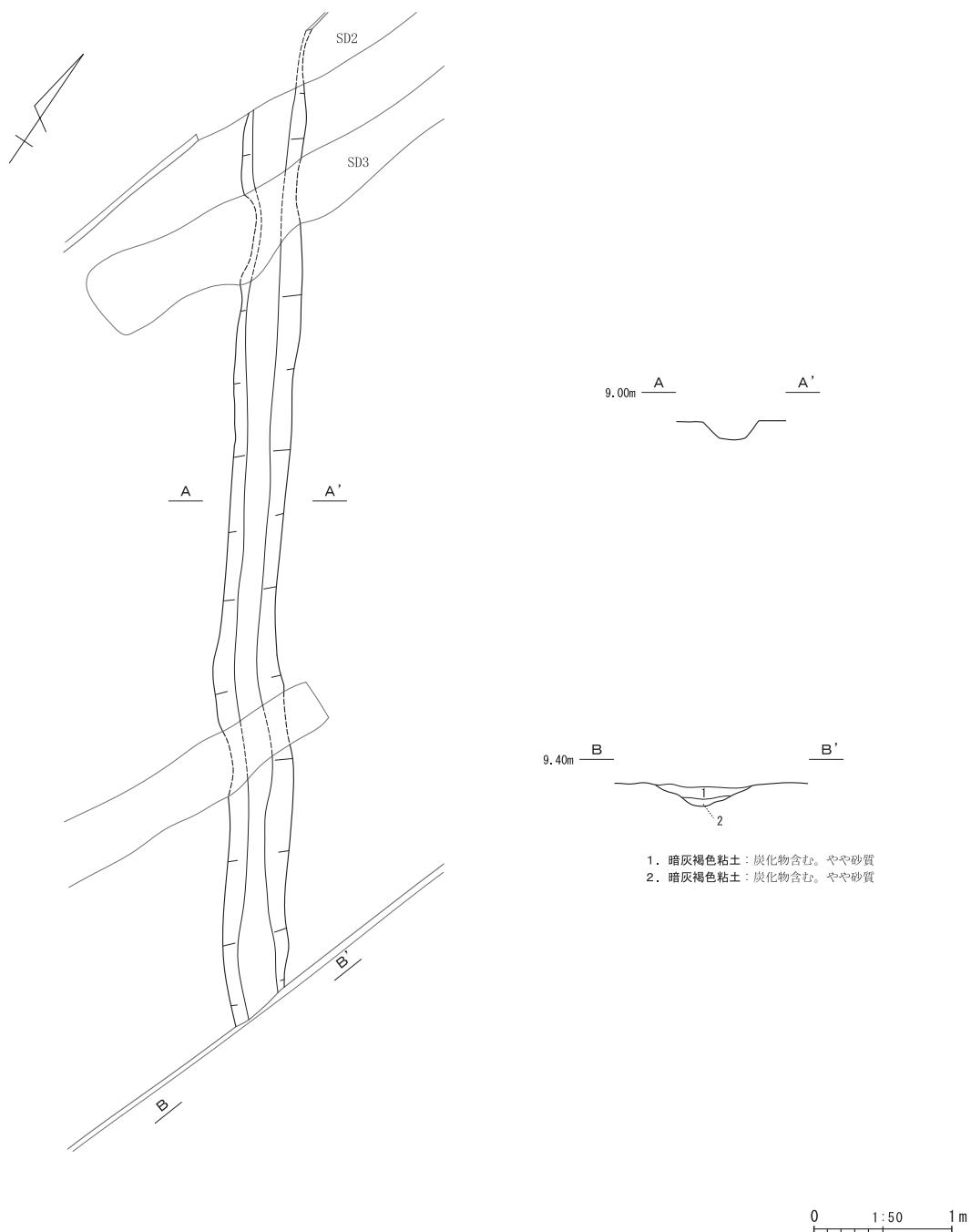
北西から南東方向に向かって直線状に伸びる溝状遺構SD 1は6層上面で検出した。調査区で確認し



第36図 3区全体図



第37図 3区拡大図

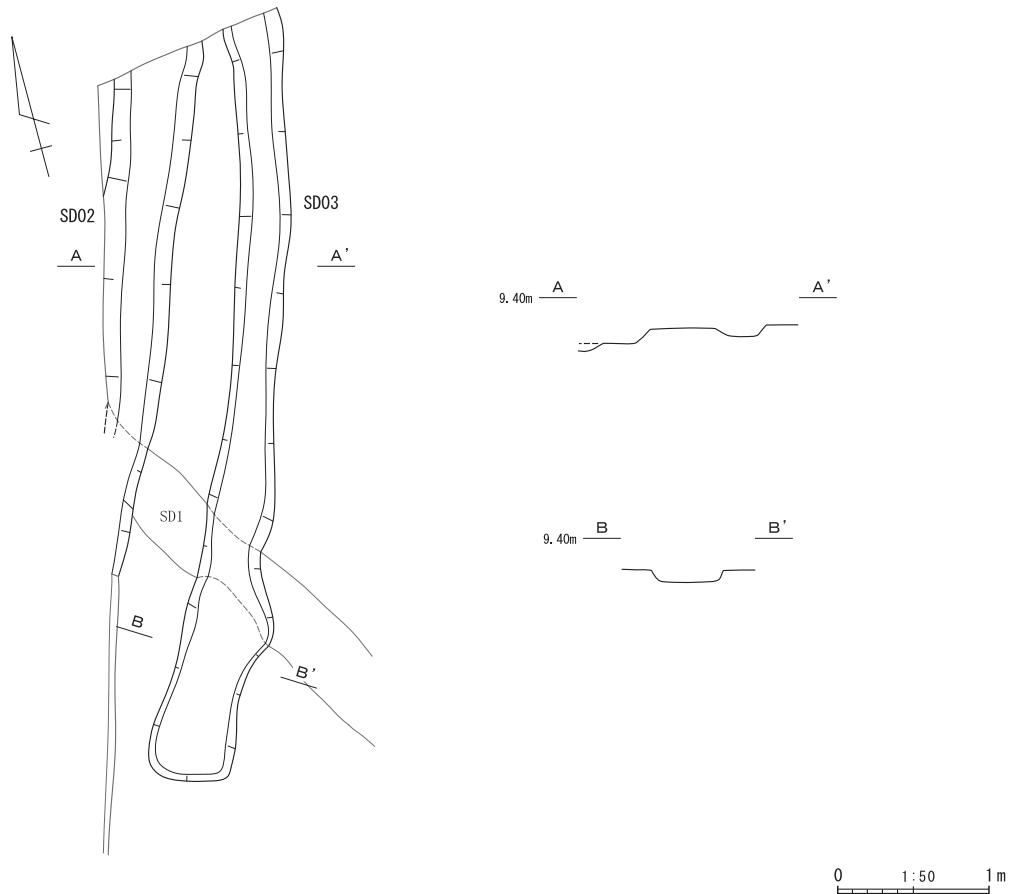


第38図 3区SD 1実測図

た延長は7.2m、最大幅は0.5mを測る。東西は調査区外へと伸びている。溝の覆土は、やや砂質な暗灰褐色粘土層で、炭化物を含む。覆土内に遺物は含まれていなかった。直線的な遺構の形状から、自然流路ではなく、人為的に掘削された溝と考えられる。出土遺物がないことから年代特定は困難である。

### 3区SD 2・3 (第39図、図版17)

SD 2・3は調査区西側端で検出した溝状遺構である。両者はほぼ並行している。SD 2は延長3.5m、幅は0.5m、SD 3は延長5.1m、最大幅は0.6mを測る。南北の端部は調査区外のため、全体の規模は不明である。覆土は暗灰褐色粘土層で、覆土からの出土遺物はなかった。年代や遺構の性格ともに不明で

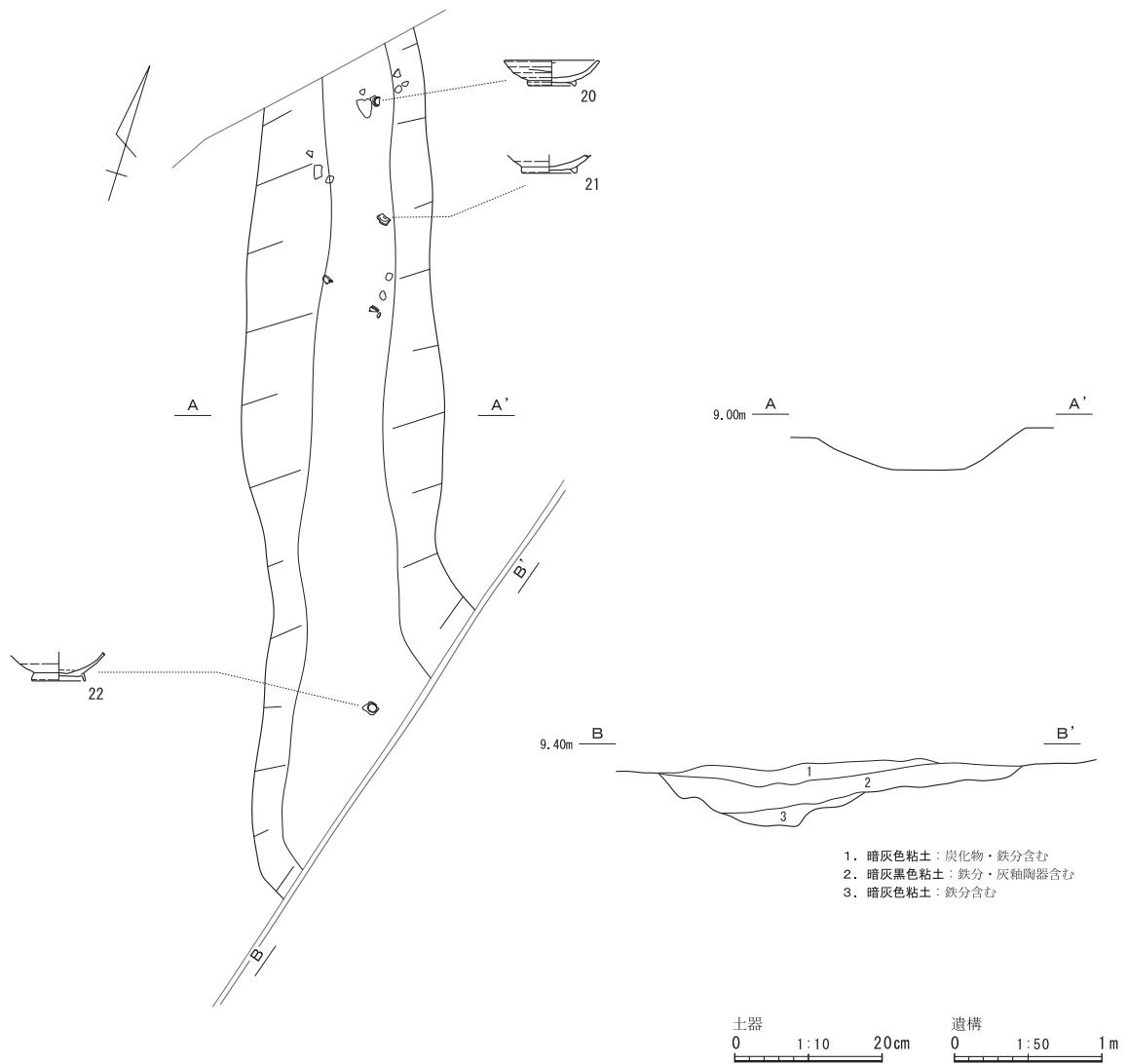


第39図 3区SD2・3実測図

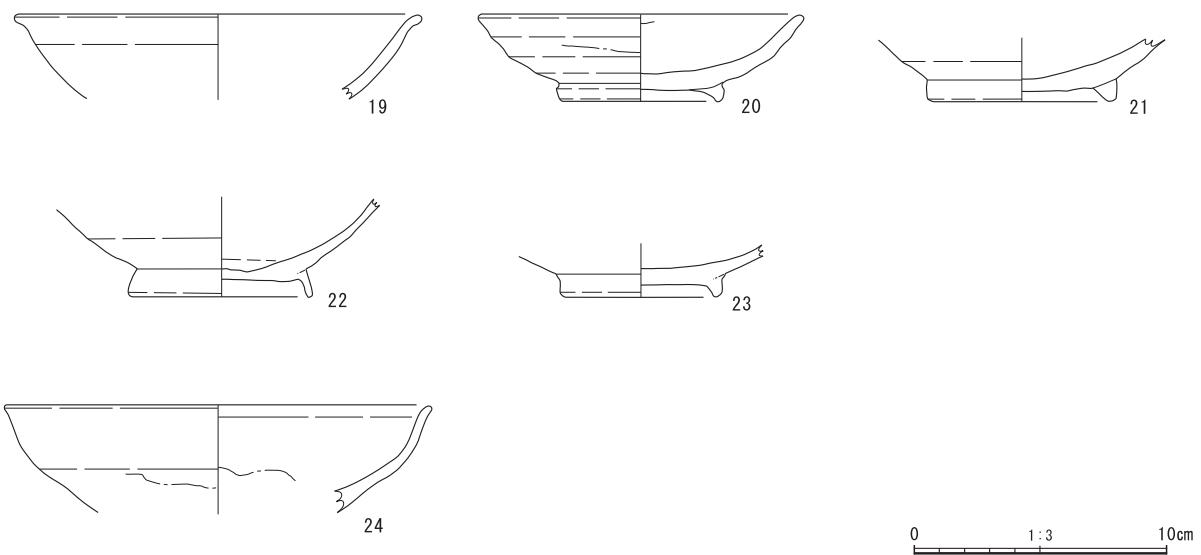
ある。

### 3区SR 1（第40図、図版17）

SR 1は3区北端で検出した自然流路である。調査区内で検出した延長は4.7m、流路幅は下流の2.3mが最大である。下流側の深さは0.4mほどであった。覆土は3つに分層される。上層は炭化物を多量に含む粘土層であった。中層では灰釉陶器を含む暗灰黒色粘土層である。下層の暗灰色粘土層に遺物は含まれていなかった。水流の方向は北西から南東方向へ流れている。平成26年度に発掘調査した2区の南端部では南側に地形が下がっていくことが確認されている。その南側は、現況、市道の下となっているが、奈良末から平安時代の頃には西侧丘陵から小笠高橋川に向かっていく流路であったと考えられる。覆土内では中層より灰釉陶器がまとまって出土した（第41図19～24）。19は灰釉陶器の碗で、口縁～体部にかけての破片である。復元口径は16.2cm、内碗面には全面に暗灰釉が発色している。口縁は薄く、外側へ緩やかに屈曲する。20は灰釉陶器の小碗である。復元口径は13.0cm、器高は3.5cm、底径は6.4cmを測る。高台は外面側に稜を持つ。灰釉薬を漬け掛けしている。21は山茶碗の底部で、高台は太く厚みがある。底径は7.5cmである。内碗面には重ね焼き痕がある。22は灰釉陶器の碗体部から高台が残存している。底径は7.3cmで、高台は薄く高さを持っている。内碗面に重ね焼き痕がある。23は灰釉陶器の碗底部片である。内碗面には重ね焼き痕がある。24は灰釉陶器の碗で口縁～体部の破片である。復元口径は17.0cmである。灰釉薬の漬け掛け痕が残っている。覆土内には、その他の土器や有機質のものは無かつたことから、比較的短期間に埋没した可能性がある。出土土器の年代からSR 1は平安時代に存在した自然流路であろう。



第40図 3区SR 1実測図



第41図 3区SR 1出土遺物実測図

### 3 包含層

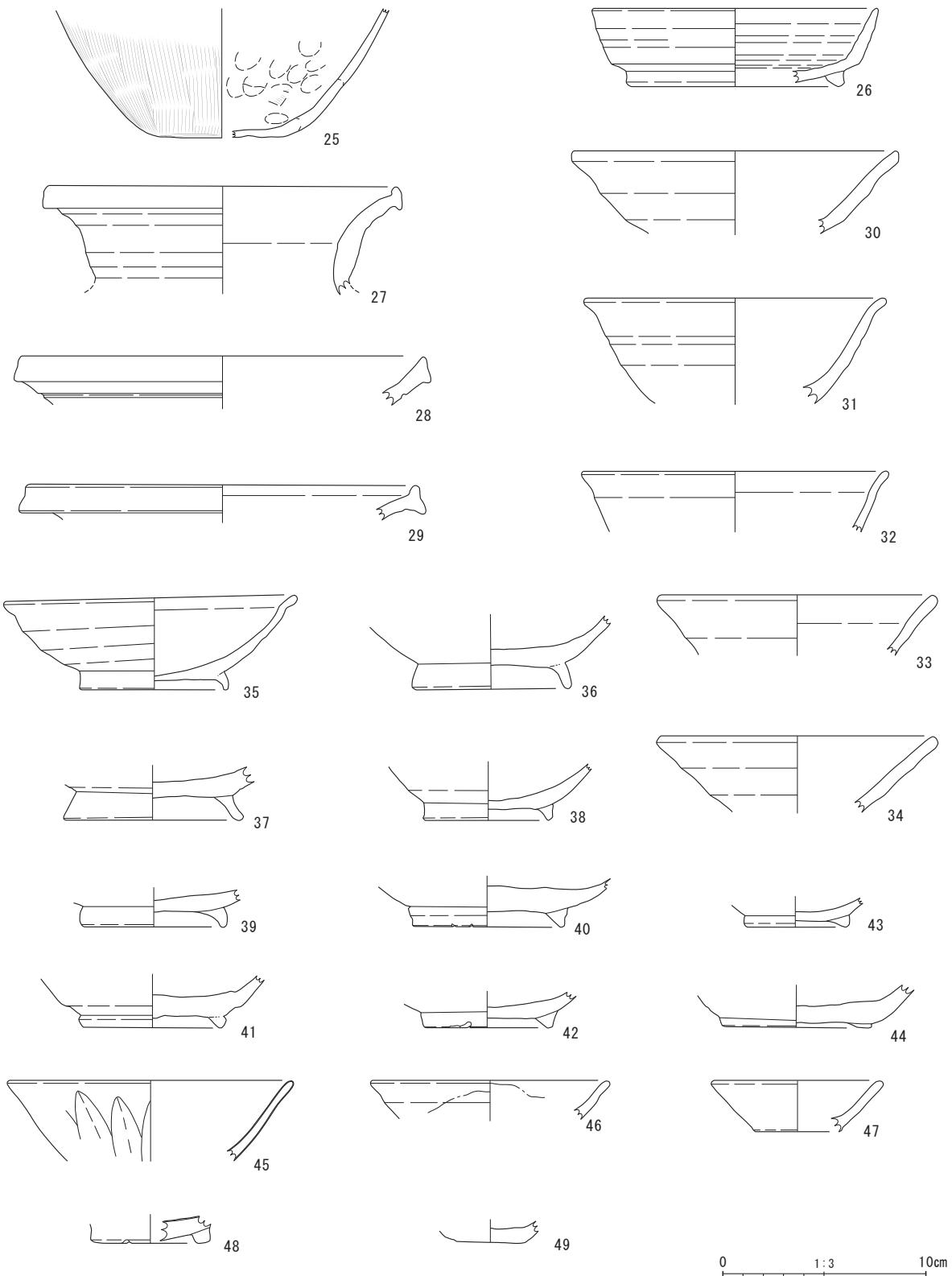
中山遺跡1～3区の出土遺物は各遺構図の後に付け、包含層出土遺物は第42～48図にまとめた。ここで言う包含層とは、基本土層の5層に相当する堆積土のことである。土器は古墳時代～奈良時代の須恵器や土師器、平安時代の灰釉陶器・山茶碗、近世陶磁器等が出土した。このほかに土製品と石製品が少量出土した。

第42・43図は1区包含層より出土した。25は土師器の甕底部で、長胴甕底部である。26は須恵器の坏身で、復元口径は14.2cm、器高は3.85cmを測る。27～29は須恵器の甕口縁部である。30～44、46・47・49は灰釉陶器や山茶碗である。35は口径が14.5cm、器高は4.5cm、底径は7.0cmの灰釉陶器である。45は貿易陶磁で蓮弁紋の青磁碗である。復元口径は14.15cm程あつたであろう。48は陶磁器の天目茶碗高台部片である。50は陶磁器の甕で、外面には粗いハケ目がある。復元底径は27.0cmと大型である。

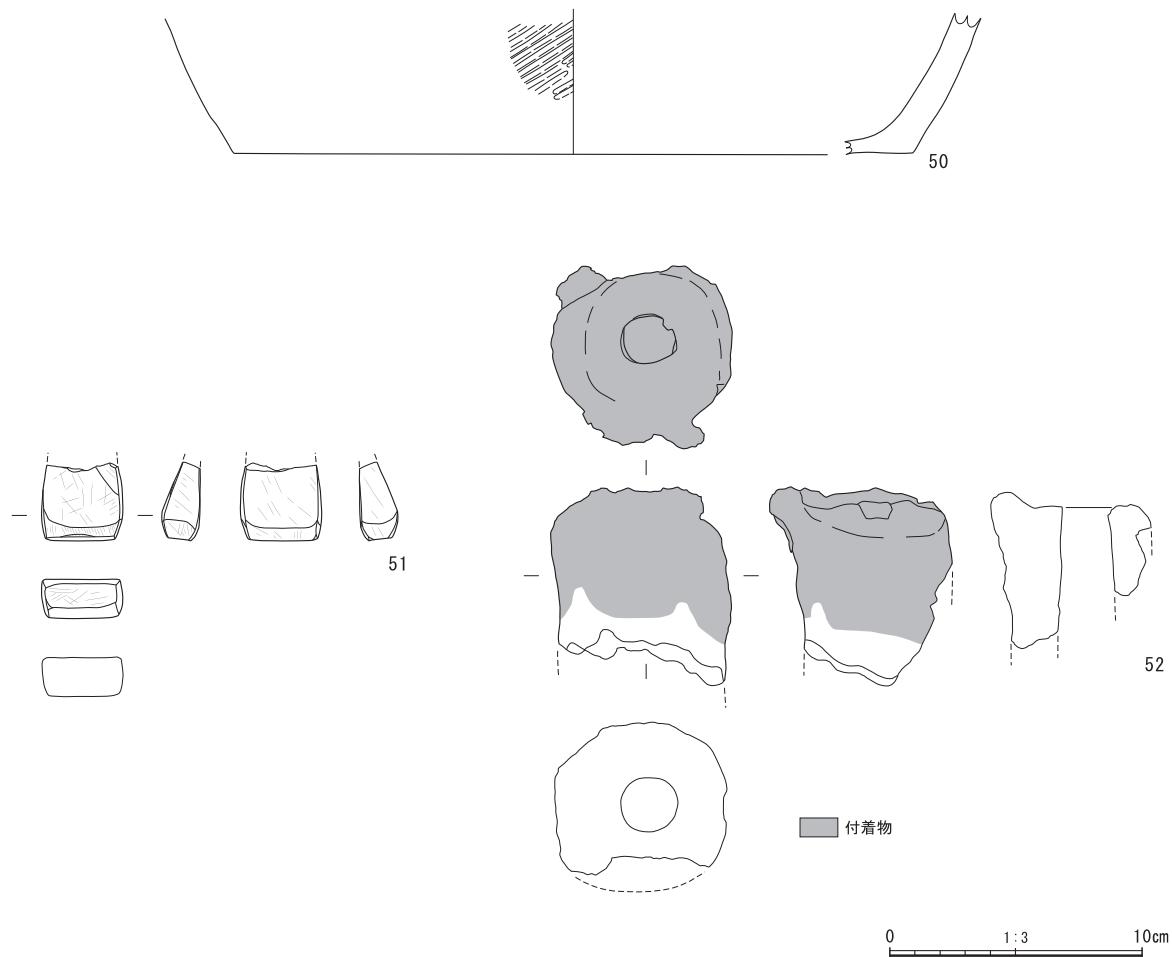
第43図51は1区の灰褐色粘土層より出土した。大きさからして手持ち砥石であろう。上半部は欠損している。もともと長さは6cm以上あったと思われるが、使い込まれた結果、中央が薄くなつて折れ、その後、再利用することなく廃棄されたものと思われる。折れた面以外は全面が使われている。粗い研磨痕が全体に見える。砥面の感触はやや粗く、中砥～仕上げ砥として使っていたであろう。材は人造と見られ、近・現代のものが何らかの原因で混入したと思われる。

52は轆の羽口である。長さは7.85cm、径7.2cm程の円柱形で、中心には径2.3cmの孔が、ほぼ真っ直ぐに貫通している。下半部は欠損している。上半部は被熱しており、赤褐色に変質した付着物がある。1区SD24の覆土内からも轆の羽口片が出土している。今回の調査では製鉄等に関係するような遺構は発見されていないが、近隣には低丘陵地もあり、周辺に製鉄遺構が存在していた可能性もある。

第44～47図は2区包含層の出土品である。53・54は古墳時代の土師器高坏の脚部である。55・56は土師器の甕の脚部か。年代や器種が不詳である。57は土師器の堵で、残存する器高は10.1cmを測る。58～62は土師器の甕口縁部である。63は土師器の甕か。64は用途不明の土製品である。手捏ね土器か、または高坏の坏部と脚部とを連結する部分の破片かと思われる。小片のため断定は不可能である。65は長胴甕の底部片である。66は土師器で、底部中央に径7cm程の穿孔がある。甌であろうか。67・68は土師器で甌の把手部分である。69～72は古墳時代の須恵器である。69は坏蓋で、直径は復元して13.7cmである。蓋上面は回転ヘラ削りで調整され、側面には沈線が巡る。70は復元径が9.2cmと小型の坏蓋である。71・72は須恵器の坏身である。71は口径12.8cm、最大径は14.6cmである。72は口径13.3cm、最大径は14.8cm、器高は4.55cmである。いずれも年代は7世紀代と考えられる。73～78は須恵器坏蓋で、宝珠状の摘みを有する。奈良時代の須恵器である。79～86は須恵器の坏身で、79～83は高台を持つ。82は復元口径14.4cm、器高は4.25cm、底径は10.5cmで、底内面にはヘラ記号のような傷がある。84～86は無高台である。85は復元口径が15.5cm、器高は6.0cm、底径は12.2cmとやや大振りな坏である。87は須恵器の壺蓋で小型品である。88は小型の壺である。87と88は組合せであろう。89は須恵器の壺の頸部から肩部の破片である。90は須恵器の小型短頸壺で、口径は5.7cm、器高は6.8cmを測る。胴部に沈線が巡っている。91～93は須恵器甕の口縁部で中型から大型品である。94～98は灰釉陶器又は山茶碗である。小片のため器種特定が困難であるが、98は灰釉陶器の小碗か。模倣の可能性がある。99は陶磁器片で、高台の外側と高台見込み部分に染付けがある。100は須恵器の大甕の口縁部分である。口縁の下方には波状紋と沈線が2段、連続している。波状紋の単位は8本である。101は陶臼で、底径は9.9cm、残存高は4.7cmである。底部に近い下方には叩き目状の文様がある。102～105は土師器の坏身である。106・107は山茶碗の小皿である。108～111は陶磁器である。108は小片のため器種は不詳。109は擂鉢底部である。110は高台付の鉢か。111は脚付きの香炉か。112は須恵器の壺の注口部分である。113は戸車か。残存長は7.95cm、幅は3.85cm、厚みは1.7cmで、元は円形で中央には貫通孔がある。陶磁器製



第42図 1区包含層出土遺物実測図1



第43図 1区包含層出土遺物実測図2

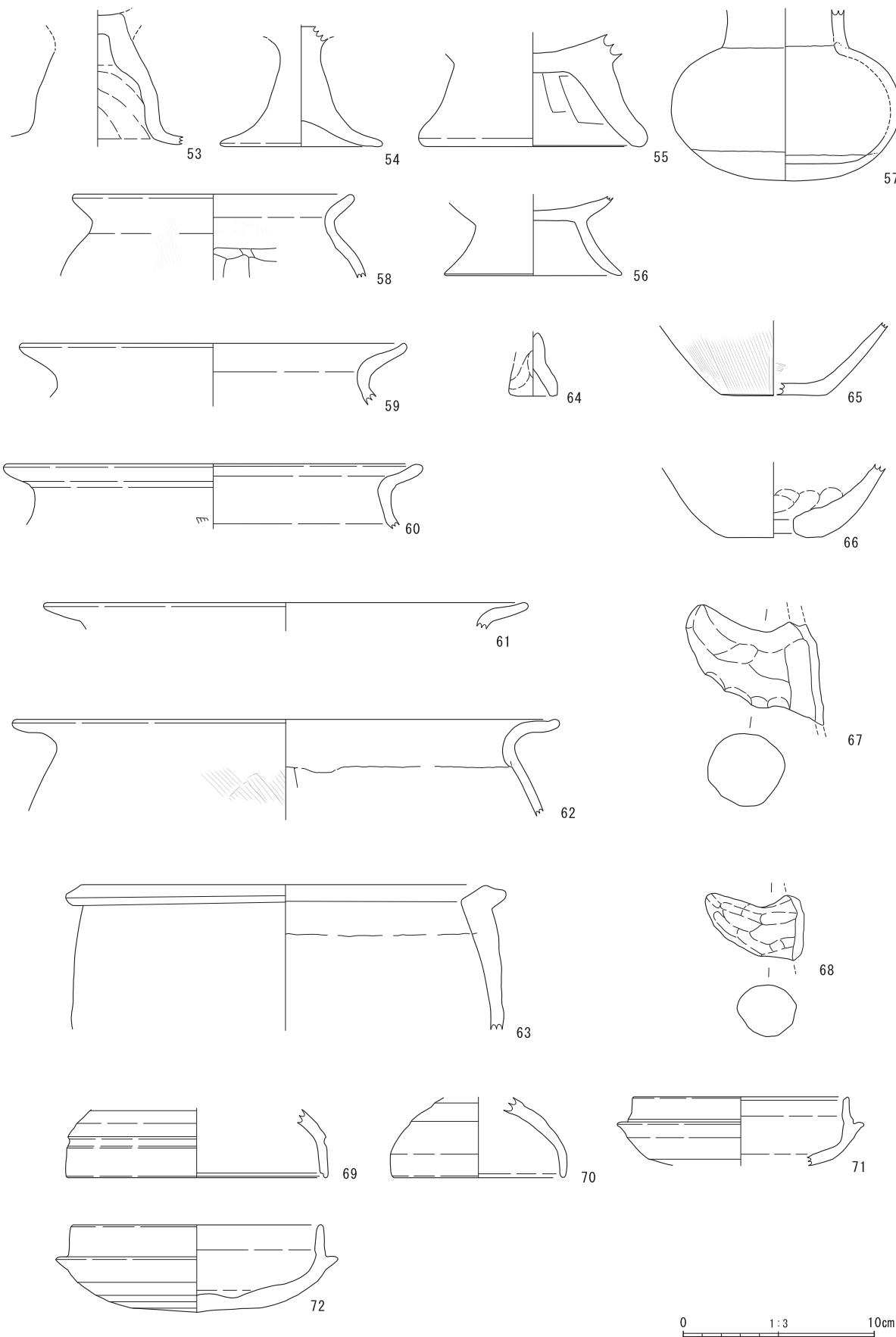
か。114は土師質の土錐で、長さ5.3cmの円柱状で、幅は3.9cm、中央の貫通孔は径1.4cmで完形品である。重さは52.72gを測る。黒褐色粘土層より出土した。

第47図115は2区の暗褐色粘土（包含層下層）より出土した砥石である。手持ちで使う小型の砥石で、流紋岩材であることから仕上げ砥として使われていたであろう。上半部は欠損している。下端面には研磨がない。折れた面以外は4面使用されている。右側面は節理により一部剥がれている。使い込まれて薄くなつたところで折れて、再利用されずに廃棄されたのであろう。

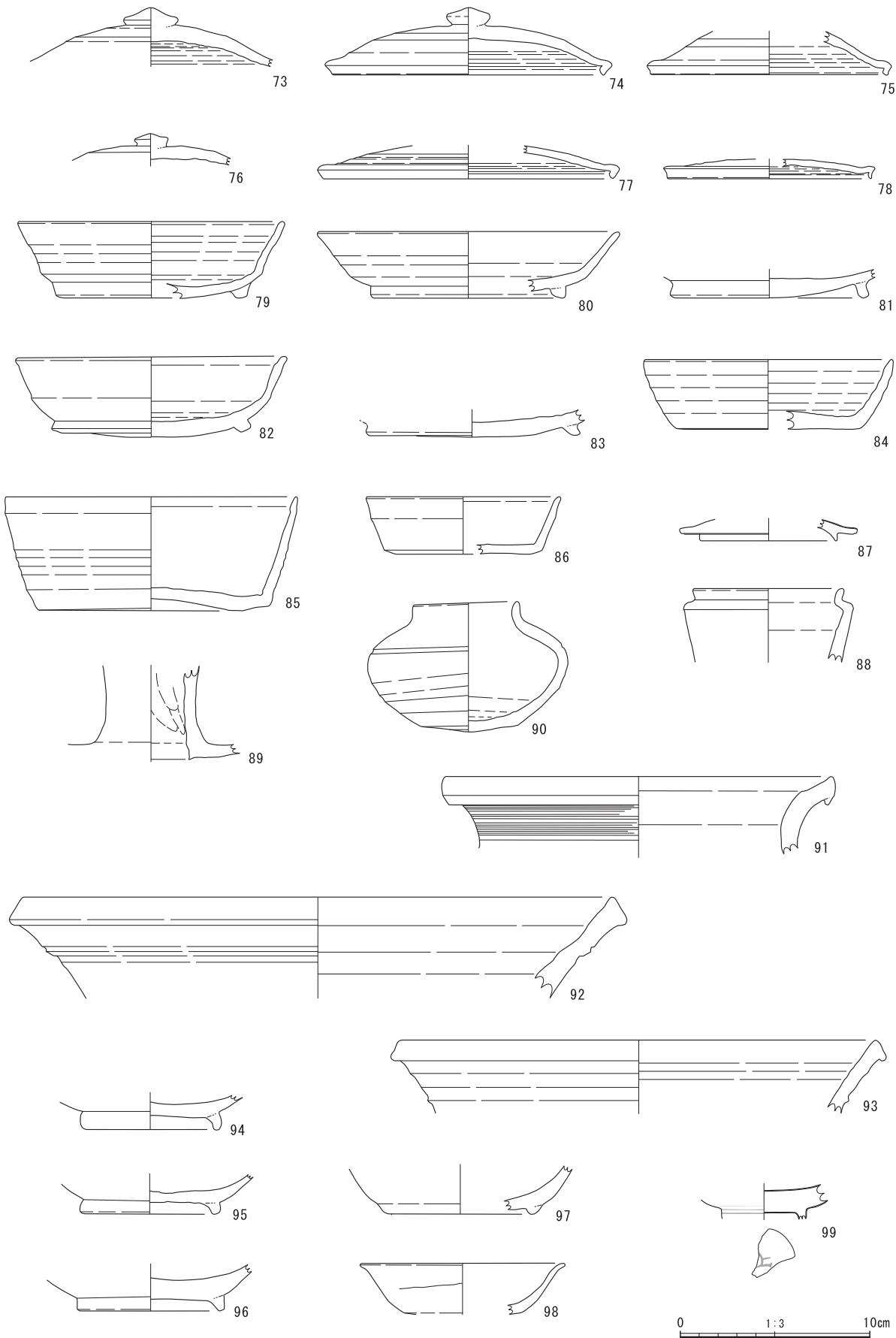
第47図116は2区の黒褐色粘土（包含層中層）より出土した手持ち砥石である。変質流紋岩製。上半部は折損している。材の粒子が細かいことから仕上げ砥として使われていただろう。下端部は擦り面なし。3側面が使用面である。使い込まれた結果、中央で折れ、再利用せずに廃棄されたものであろう。

第48図は3区包含層より出土した。117は土師器の坏身で手捏ねである。口縁部は指でなでたような形状である。118の須恵器坏身は、復元口径8.8cmと小型である。119は須恵器の坏蓋で、宝珠状の摘みを持つ。120は土師器坏身で、口径は10.9cm、器高は3.35cm、底径は5.4cmである。

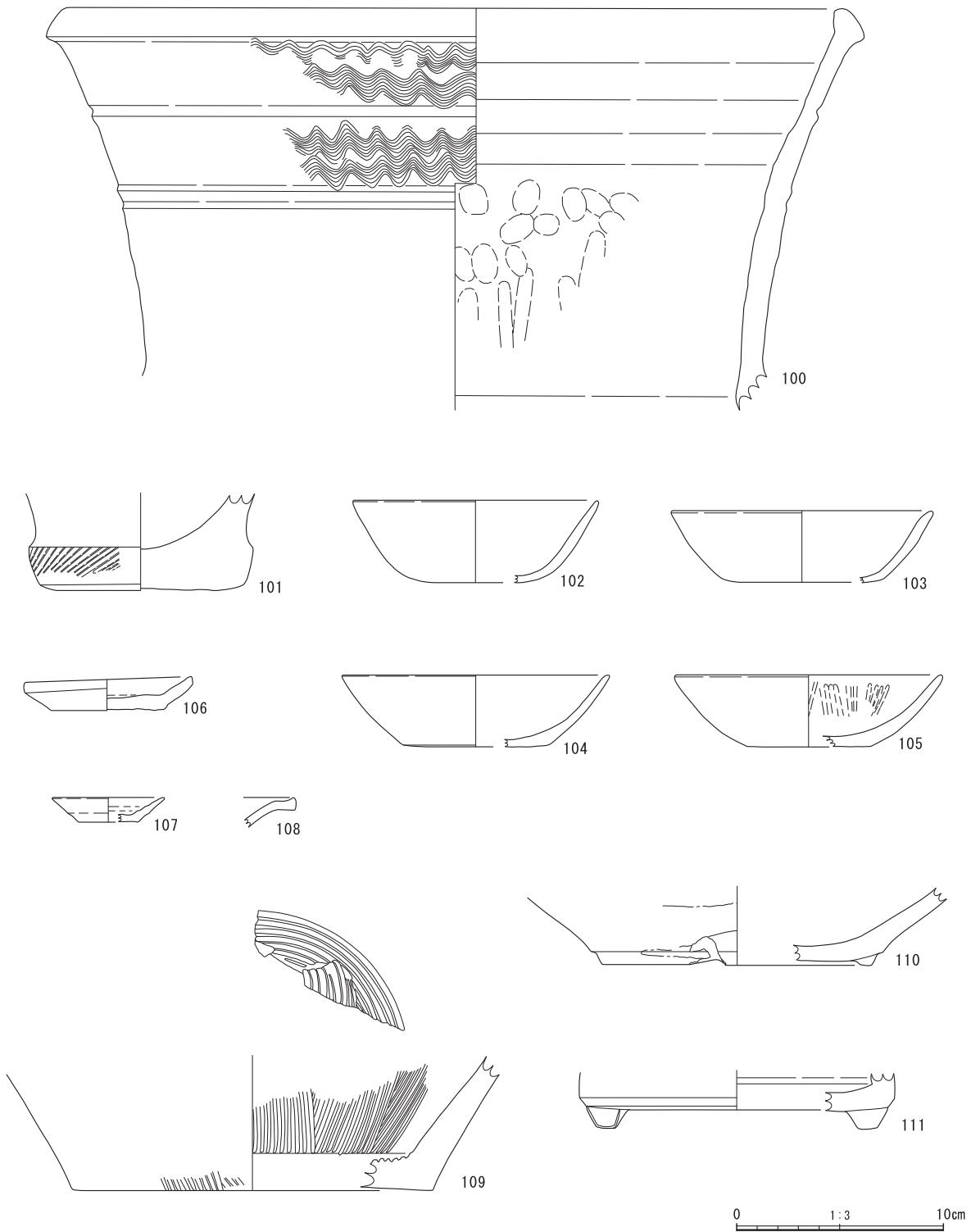
第48図121は3区包含層より出土した。径6cm程の球状に近い形をしている。自然の礫面は残っておらず、全面に敲打の痕がある。用途は敲石か。閃綠岩製で周辺河川には見られない石材である。



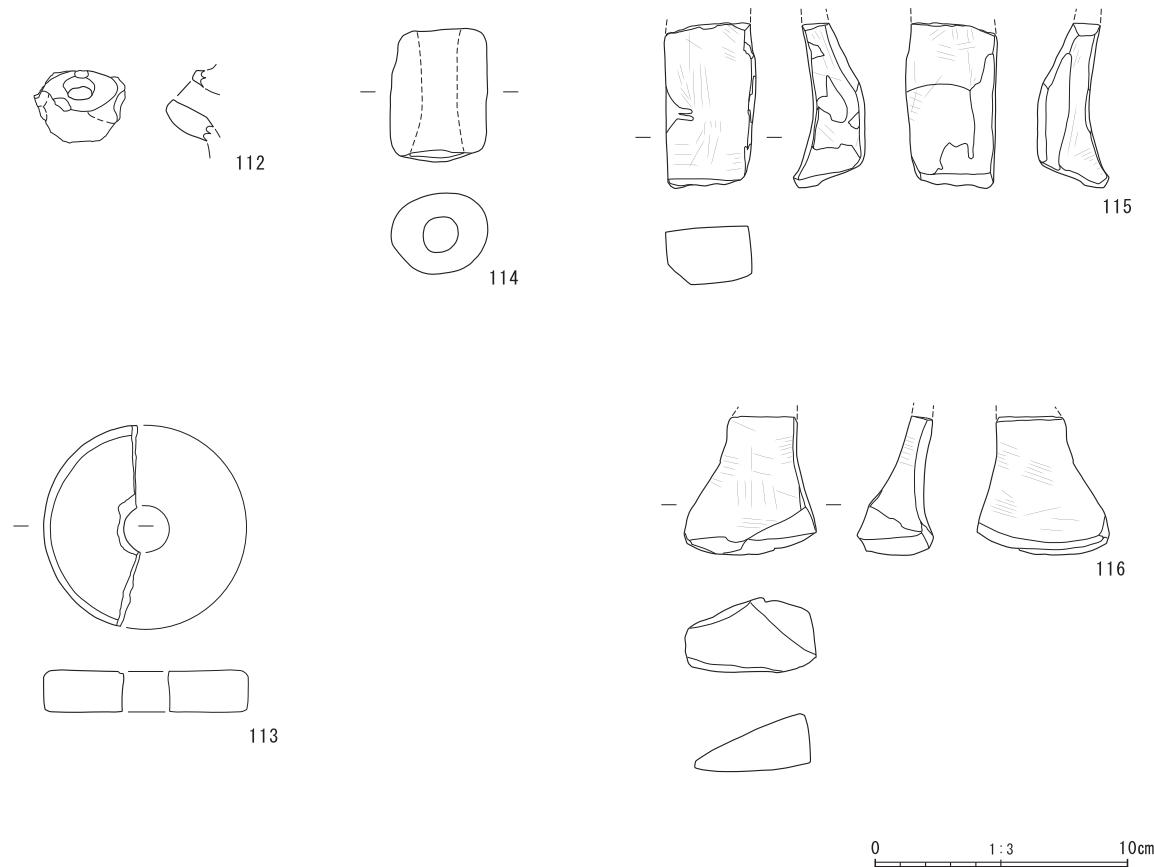
第44図 2区包含層出土遺物実測図1



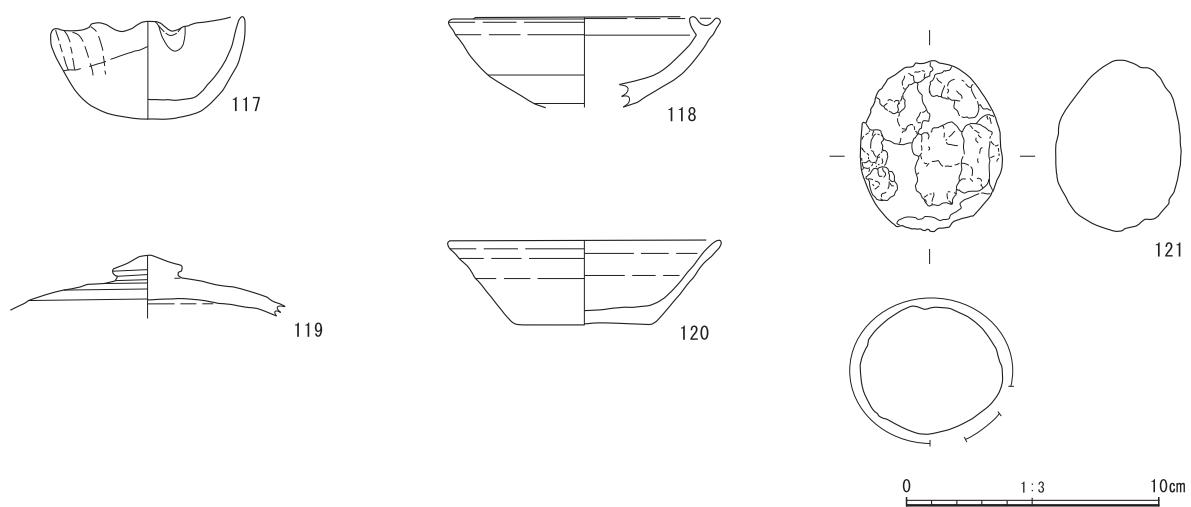
第45図 2区包含層出土遺物実測図2



第46図 2区包含層出土遺物実測図3



第47図 2区包含層出土遺物実測図4



第48図 3区包含層出土遺物実測図

第5表 遺構観察表

## 【溝・土坑他】

遺構番号	区	グリッド	備考
SD1	2	B12～14	
SD2	2	B12～14	
SD3	2	B13	
SD4	2	B11～13	
SD5	2	C12	
SD6	2	C12	
SD7	2	C11	
SD9	1	C・D9	
SD10	2	C9	
SD11	2	C9	
SD13	1	E3	
SD14	1	E3	
SD15	1	E3・4	
SD16	1	E・D4	
SD17	1	E・D4	
SD18	1	E5	
SD19	1	D5～7	
SD20	1	D5	
SD21	1	D5・6	
SD22	1	D5・6	

遺構番号	区	グリッド	備考
SD23	1	D5・6	
SD24	1	D7・8	
SD25	1	D6・7	
SD26	1	E・D8	
SD1	3	A17	
SD2	3	z18	
SD3	3	z18	
SR1	3	z・A18	
SF1	1	E3	
SF2	1	E5	
SF3	1	D6・7	
SF4	1	C8	
SF5	1	D8	
SX1	2	B13	
SX2	2	B13	
SX3	2	B12	
SX4	2	C11	
SX5	2	B13	
SX7	1	D5	
SX8	1	E3	

## 【小穴】

遺構番号	区	グリッド	検出面標高(m)	底面標高(m)	深度(m)	備考
SP1	2	B13	9.26	9.18	0.08	
SP2	2	B13	9.31	9.3	0.01	
SP3	2	B13	-	-	-	
SP4	2	A15	9.26	8.81	0.45	
SP5	2	A15	9.28	9.14	0.14	
SP6	2	B15	9.25	8.92	0.33	
SP7	2	B15	9.26	8.55	0.71	
SP8	2	B15	9.25	9.06	0.19	
SP9	2	B15	9.25	8.61	0.64	
SP10	2	B15	9.25	8.6	0.65	
SP12	2	A15	9.26	8.71	0.55	
SP13	2	B14	9.16	8.78	0.38	
SP14	2	B14	9.2	8.81	0.39	
SP15	2	A14	9.2	8.88	0.32	
SP16	2	B14	9.21	8.99	0.22	
SP17	2	B14	9.26	9.06	0.2	
SP19	1	D5	10.14	10.12	0.02	
SP20	1	D5	10.16	10.09	0.07	
SP21	1	D5	10.16	10.05	0.11	
SP22	1	D5	10.18	10.13	0.05	
SP23	1	D5	10.20	10.15	0.05	
SP24	1	D5	10.20	10.14	0.06	
SP25	1	D5	10.17	10.12	0.05	
SP26	1	D5	10.16	10.12	0.04	
SP27	1	D5	10.17	10.09	0.08	
SP28	1	D6	10.13	10.02	0.11	
SP29	1	D6	10.13	10.04	0.09	
SP30	1	E3	10.51	10.35	0.16	

第6表 出土遺物觀察表

## 【土器】

擲図 No.	図 版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	焼 成	備考
1		2	SX2	須恵器	壺蓋	口縁部	15	(3.6)		(13.0)		灰色N 6/	灰色N 6/	良	
2	18	2	SX4	須恵器	高壺	脚部	60	(7.3)			(10.1)	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
3		1	SX7	山茶碗か	碗	底部	30	(3.8)			(9.3)	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
4	18	1	SX7	土師器	甌か	口縁部 ~体部	40	(8.7)		(24.2)		灰黄色 2.5Y 7/2	灰白色 10YR 8/1	良	
5		1	SX9	灰釉陶器か	壺類	口縁部	15	(2.8)		(10.2)		灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
6		1	SP30	灰釉陶器か	碗	口縁部	15	(3.8)		(16.8)		灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
7		2	SD3	須恵器	壺身	全体	20	(4.5)	(14.2)	(12.1)		灰色N 6/	灰色N 6/	良	
8		2	SD3	須恵器	壺類	体部 ~底部	25	(9.95)	(19.6)		(13.4)	灰白色 10Y 7/1	灰白色 10Y 7/1	良	
9	18	1	SD20	弥生土器	台付甌	台部	70	(7.65)			(10.6)	褐灰色 10YR 5/1	褐灰色 10YR 5/1	良	
10		1	SD20	弥生土器	台付甌	台部	40	(4.5)				灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
11		1	SD24	山茶碗	小皿	口縁部	15	(2.3)		(12.2)		灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
12		1	SD25	山茶碗	小皿	底部	70	(1.45)			(4.4)	灰白色N 8/	灰色N 4/	良	
13		1	SD23	土師器	甌	口縁部	45	(4.75)		(25.8)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
14	18	1	SD23	土師器	甌	全体	50	29.6		(27.8)	8.8	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
15		1	SD23	土師器	甌	口縁部 ~体部	70	(12.3)		22.7		にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	煤付着
16		1	SD23	土師器	甌	口縁部 ~頸部 /底部	30 /70	(4.8) (6.0)		(23.9)	7.4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
17		1	SD23	土師器	甌	底部	40	(4.15)			(7.8)	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	煤付着
18	18	1	SD23	須恵器	横瓶	口縁部 ~体部	90	(7.0)		(11.8)		灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
19	20	3	SR1	灰釉陶器	碗	口縁部 ~体部	10	(3.35)		(16.2)		灰白色 N 7/	灰白色 7.5Y 7/1	良	
20	20	3	SR1	灰釉陶器	小碗	全体	35	3.5		(13.0)	(6.4)	黄灰色 2.5Y 6/1	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
21	20	3	SR1	山茶碗	碗	底部	40	(2.5)			(7.5)	灰黄色 2.5Y 6/2	灰黄色 2.5Y 6/2	良	
22	20	3	SR1	灰釉陶器	碗	底部	30	(3.9)			(7.3)	灰白色5Y 5/1	灰色N 6/	良	
23	20	3	SR1	灰釉陶器	碗	底部	50	(2.1)			(6.4)	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
24	20	3	SR1	灰釉陶器	碗	口縁部 ~体部	20	(4.25)		(17.0)		灰色N 6/	灰色N 6/	良	
25		1	V33s grid	土師器	甌	底部	40	(6.3)			(6.4)	灰黃褐色 10YR 5/2	灰黃褐色 10YR 5/2	良	
26		1	-	須恵器	壺身	全体	20	3.85		(14.2)	(10.8)	うすい黒色	灰白色N 8/	良	
27		1	D7 grid	須恵器	甌	口縁部	10	(6.0)		(19.3)		灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
28		1	D8 grid	須恵器	甌	口縁部	5	(2.4)		(20.2)		灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
29		1	D8 grid	須恵器	甌	口縁部	10	(1.7)		(19.5)		灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
30		1	E5 grid	山茶碗	碗	口縁部	10	(4.1)		(16.2)		灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
31		1	D6 grid	山茶碗	碗	口縁部	25	(5.2)		(15.0)		灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
32		1	D5 grid	灰釉陶器か	碗	口縁部	10	(3.0)		(15.2)		灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
33		1	E5 grid	山茶碗	碗	口縁部	10	(3.0)		(13.9)		灰色N 6/	灰白色 7.5Y 7/1	良	
34		1	D・E4 grid	山茶碗	碗	口縁部	30	(3.75)		(13.9)		灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
35	18	1		灰釉陶器	碗	全体	50	4.5		14.5	7.0	青灰色 5B 5/1	青灰色 5B 5/1	良	
36		1		灰釉陶器	碗	底部	100	(3.6)			7.9	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	

第6表 出土遺物観察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	焼成	備考
37		1		山茶碗	碗	底部	90	(2.6)			8.9	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
38		1	D8 grid	山茶碗	碗	底部	100	(2.8)		(6.4)	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良		
39		1	D6 grid	山茶碗	碗	底部	40	(1.8)			7.3	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
40		1		山茶碗	碗	底部	100	(2.4)			7.5	灰白色N 8/	灰白色N 7/	良	
41		1		山茶碗	碗	底部	70	(2.9)			8.2	灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
42		1		灰釉陶器	碗	底部	100	(1.8)			6.4	灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
43		1	D8 grid	山茶碗	小碗	底部	100	(1.45)			5.2	灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
44		1		山茶碗	碗	底部	100	(2.15)			7.4	灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
45	18	1		青磁	碗	口縁部	10	(4.0)		(14.15)		オリーブ灰色 2.5GY 6/1	オリーブ灰色 2.5GY 6/1	良	
46		1	D8 grid	山茶碗	碗	口縁部	25	(2.15)		(13.3)		灰白色 2.5Y 6/2	灰白色 2.5Y 6/2	良	
47		1	D6 grid	山茶碗	小皿	全体	20	2.5		(8.5)	(4.4)	灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
48		1	D・E4 grid	陶器	天目茶碗	底部	25	(1.35)			(5.9)	にぶい橙色 5YR 6/4	にぶい橙色 5YR 6/4	良	釉：黒褐色5YR 2/1
49		1	E2 grid	山茶碗	小皿	底部	100	(1.25)			4.0	灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
50		1	D8 grid	陶磁器	甕	底部	10	(5.6)			(27.0)	黄灰色 2.5Y 6/1	灰白色 5Y 7/1	良	
53		2		土師器	高壺	脚部	70	(6.0)				橙色 2.5YR 6/8	橙色 2.5YR 6/8	良	
54		2	B15NW grid	土師器	高壺	脚部	80	(7.6)			9.6	橙色 2.5YR 7/6	橙色 2.5YR 7/6	良	
55	18	2	B12 grid	土師器	台付甕か	台部	60	(5.9)			(12.0)	にぶい黄橙色 10YR 6/4	浅黄色 2.5Y 7/3	良	
56	18	2		土師器	器台か	脚部	60	(4.2)			(9.3)	にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
57	19	2		土師器	壺	頸部～底部	70	(10.1)	(13.5)			浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
58		2		土師器	甕	口縁部～体部	15	(4.3)		(14.8)		淡橙色 5YR 8/4	灰白色 10YR 8/1	良	
59		2	B13NW grid	土師器	甕	口縁部～頸部	15	(3.5)		(20.3)		橙色 5YR 7/8	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
60		2	B14NW grid	土師器	甕	口縁部～頸部	15	(3.4)		(22.0)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
61		2	B13NE grid	土師器	甕	口縁部	10	(1.4)		(25.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
62		2		土師器	甕	口縁部～体部	15	(5.1)		(28.7)		浅黄橙色 10YR 8/3	灰白色 10YR 8/2	良	
63	19	2	C10S grid	土師器	甕	口縁部	60	(7.6)		(23.1)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
64		2	東排水溝	土師器	手捏ね土器	脚部	100	(3.3)				浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
65		2	B14NW grid	土師器	甕	底部	25	(3.9)			(5.5)	灰白色 2.5Y 8/2	灰黄褐色 10YR 5/2	良	
66	19	2	B12SE grid	土師器	甕	底部	80	(3.9)			5.1	灰白色 10Y 8/2	灰白色 10Y 8/2	良	
67		2		土師器	甕	把手部	100					浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	径:3.8×4.0 cm
68		2	B13SW grid	土師器	甕	把手部	100					橙色7.5YR 7/8	橙色7.5YR 7/8	良	径:2.7×3.1 cm
69		2	B14 grid	須恵器	壺蓋	口縁部	20	(3.6)		(13.7)		灰色N 6/	灰色N 6/	良	
70		2	C9 grid	須恵器	壺蓋	口縁部	25	(4.2)		(9.2)		灰白色N 7/	灰白色N 7/	良	
71		2	B12SW grid	須恵器	壺身	全体	20	(4.05)	(14.6)	(12.8)		灰色N 6/	灰白色N 7/	良	
72	19	2	C11N grid	須恵器	壺身	全体	40	4.55	(14.8)	(13.3)		灰白色N 7/	灰色N 6/	良	
73		2	B12SW grid	須恵器	壺蓋	天井部	25～ 90	(3.5)				灰白色N 8/	灰白色N 8/	良	
74	19	2	A15NE grid	須恵器	壺蓋	全体		(3.55)		(14.3)		灰色N 6/	灰色N 6/	良	
75		2	B-14N西	須恵器	壺蓋	口縁部	20	(2.6)		(14.2)		灰色N 6/	灰色N 6/	良	

第6表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	焼成	備考
76		2		須恵器	壺蓋	天井部	25 ~ 70	(1.9)				灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
77		2	B13N grid	須恵器	壺蓋	口縁部	15	(1.95)		(17.3)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
78		2	B15NW grid	須恵器	壺蓋	口縁部	30	(1.15)		(12.2)		明紫灰色 5RP 7/1	灰白色 N 7/	良	
79	19	2	B12SW grid	須恵器	壺身	全体	30	4.05		(14.1)	(9.0)	灰色 N 5/	灰白色 N 7/	良	
80		2	B12NW grid	須恵器	壺身	全体	20	3.5		(16.0)	(10.3)	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
81		2	西排水溝	須恵器	壺身	底部	50	(1.5)			(10.5)	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
82	19	2	B12SW grid	須恵器	壺身	全体	60	4.25		(14.4)	10.5	灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
83		2	B12SW grid	須恵器	壺身	底部	70	(1.5)			(11.3)	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
84		2	B13NW grid	須恵器	壺身	全体	25	3.7		(13.2)	(9.7)	灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	
85	19	2	D13 grid	須恵器	壺身	全体	60	6.0	(14.8)	(15.5)	12.2	灰白色 N 7/	灰色 N 6/	良	
86		2	B13 grid	須恵器	壺身	全体	20	3.4		(11.6)	(8.0)	灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
87		2	C9 grid	須恵器	蓋	口縁部	10	(1.1)	(9.4)	(7.3)		にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4	良	釉：暗オリーブ褐色 2.5YR 3/3
88		2	B14NW grid	須恵器	壺	口縁部 ~体部	15	(3.9)		(8.0)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
89		2	B14 grid	須恵器	壺	頸部	30	(5.0)				灰オリーブ色 7.5Y 5/3	灰白色 N 7/	良	
90	19	2		須恵器	短頸壺	全体	50	6.8	(10.6)	(5.7)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
91		2	C9 grid	須恵器	甕	口縁部 ~頸部	20	(4.1)		(20.5)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
92		2	B12SE grid	須恵器	甕	口縁部	10	(5.35)		(31.2)		灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
93		2	東排水溝	須恵器	甕	口縁部	15	(3.9)		(25.0)		灰オリーブ色 7.5Y 6/2	灰白色 N 7/	良	
94		2	B12SW grid	灰釉陶器か	碗	底部	60	(1.8)			(7.5)	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
95		2		灰釉陶器か	碗	底部	60	(2.1)			7.4	灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
96		2	B12SW grid	山茶碗	碗	底部	80	(2.5)			7.8	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
97		2		山茶碗模倣か	碗	底部	20	(2.9)			(9.0)	灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	径：(7.95) cm 厚：1.7 cm
98		2		灰釉陶器 模倣か	碗	全体	25	(3.05)		(12.2)	(6.9)	にぶい黄橙色 10YR 7/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
99		2		陶磁器	碗	底部	30	(1.8)				灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	釉：明緑灰色 7.5GY 8/1
100		2	西排水溝	須恵器	甕	口縁部 ~頸部	5	(19.5)		(37.8)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
101		2	B12NE grid	須恵器	陶臼	底部	60	(4.7)			9.9	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
102	19	2	西排水溝	土師器	壺	全体	25	4.0		(11.9)		淡橙色 5YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
103		2		土師器	壺	全体	20	3.45		(12.7)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
104		2		土師器	壺	全体	25	3.5		(13.0)	(7.0)	にぶい橙色 2.5Y 4/3	黄灰色 2.5Y 4/1	良	
105		2	B13SW grid	土師器	壺	全体	20	3.5		(13.0)	(6.5)	灰白色 10YR 8/2	灰色 N 4/	良	
106		2		山茶碗	小皿	全体	100	1.5		8.2	5.4	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
107		2		山茶碗	小皿	全体	25	1.45		(6.1)	(3.2)	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
108		2	西排水溝	陶磁器	器種不明	口縁部	5	(1.5)				灰白色 2.5GY 8/1	灰白色 2.5GY 8/1	良	釉：灰白色 10Y 7/2
109		2		陶器	擂鉢	底部	20	(6.5)			(17.4)	褐色 7.5YR 4/3	褐色 7.5YR 4/3	良	
110		2		陶磁器	鉢か	底部	20	(3.8)			(13.1)	灰色 7.5Y 6/1	灰オリーブ色 7.5Y 6/2	良	釉
111	19	2		瓦質土器	香炉か	底部	20	(2.7)			(14.6)	灰色 N 4/	灰色 N 4/	良	
112	20	2	B13NE grid	須恵器	甕	注口部	100	(2.9)				灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	

第6表 出土遺物観察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	焼成	備考
117	20	3	A17 grid	土師器	坏か	全体	70	(3.9)		7.7		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
118		3		須恵器	坏身	全体	30	(3.1)	(10.8)	(8.8)		灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	
119		3	西侧排水溝	須恵器	坏蓋	天井部	30	(2.45)				灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	摘み部径 : (2.75) cm
120	20	3	Z18・19 ~ A18・19grid	土師器	坏身	全体	60	3.35		(10.7)	5.4	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	

( ) 内数値は器高欄では残存値、口径・器径・底径欄では推定値を示す

## 【石器・石製品】

挿図 No.	図版	区	出土位置	遺物名	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
51	18	1	D4 ~ E4 grid	砥石	人造砥石	3.1	3.25	1.55	16.9	上部欠損
115	20	2		砥石	流紋岩	6.6	3.65	2.8	81.78	上部欠損
116	20	2		砥石	変質流紋岩	5.5	5.2	3.0	59.42	上部欠損
121	20	3		敲き石	閃緑岩	6.8	5.6	5.1	257.81	

( ) 内数値は残存値を示す

## 【その他】

挿図 No.	図版	区	出土位置	遺物名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
52	19	1		轍(羽口)	(7.85)	7.2	7.25	-	
113	20	2	西排水溝	戸車か?	(7.95)	3.85	1.7	-	
114	20	2	C9 grid	土鍤	5.3	3.9	3.2	52.72	

( ) 内数値は残存値を示す

# 第6章 高橋遺跡

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の成果

高橋遺跡は、掛川浜岡線の上下線拡幅部分と小笠高橋川に架かる橋梁部分の範囲に広がっている。下り線側を1区、上り線側を2区、小笠高橋川の左岸側を3区と設定した（第49図）。各調査区は県土木事務所が行う県道工事の工程に合わせて、年度毎に調査区のなかを分割して発掘調査を行った。1-1区、2-1区、2-2区、3区は平成27年度に調査、1-2区、2-3区は平成28年度に調査を実施した。各調査区とも遺構調査面は1面である。調査前の現状標高値は8～10mとなっている。

1区の調査では集落遺構の一部が見つかった。1-2区では5層（黄灰色粘土）上面で掘立柱建物跡1棟を検出した。標高値は8.5mである。また1-1区南から2-1区にかけて自然流路を検出した。1-2区でも土器を多く含む自然流路を検出した。1・2区ではこの他に複数の小穴や溝跡、土坑等を検出した。いずれも西側の丘陵から派生する微高地上から小笠高橋川の間に立地していたことが調査の結果から明らかとなった。遺構の年代は弥生時代後期から古墳時代後期（弥生土器、土師器、須恵器）までの幅を持つ時期と考えられる。調査で発見された土器は弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、ミニチュア土器等で、検出した遺構もこの年代幅である。遺構や包含層の一部には奈良時代の須恵器や平安時代の灰釉陶器～山茶碗も含まれていたが、ごく僅かの量である。高橋遺跡の出土土器の主体は弥生時代後期から古墳時代中・後期であり、器種も多岐にわたっている。土器が最も多く出土した遺構は1-1区・2-1区の自然流路SD8と、1-2区の自然流路SR2である。流路内からは古墳時代中期から後期の壺や高壺等の土師器が多量に出土した。

3区は小笠高橋川の左岸に設定された調査区である。集落遺構は確認されず、僅かな溝跡等と杭列1・2を検出した。包含層に含まれていた土器は古墳時代の須恵器と山茶碗であり、1・2区よりも新しい年代のものである。地形もかなり標高値が下がっており、湿地化している。遺物の出土量が少量であることから、集落域からは外れた範囲であっただろう。土器のほかに自然流路や包含層より土製品や石器が出土している。金属製品は本調査区内では出土しなかった。

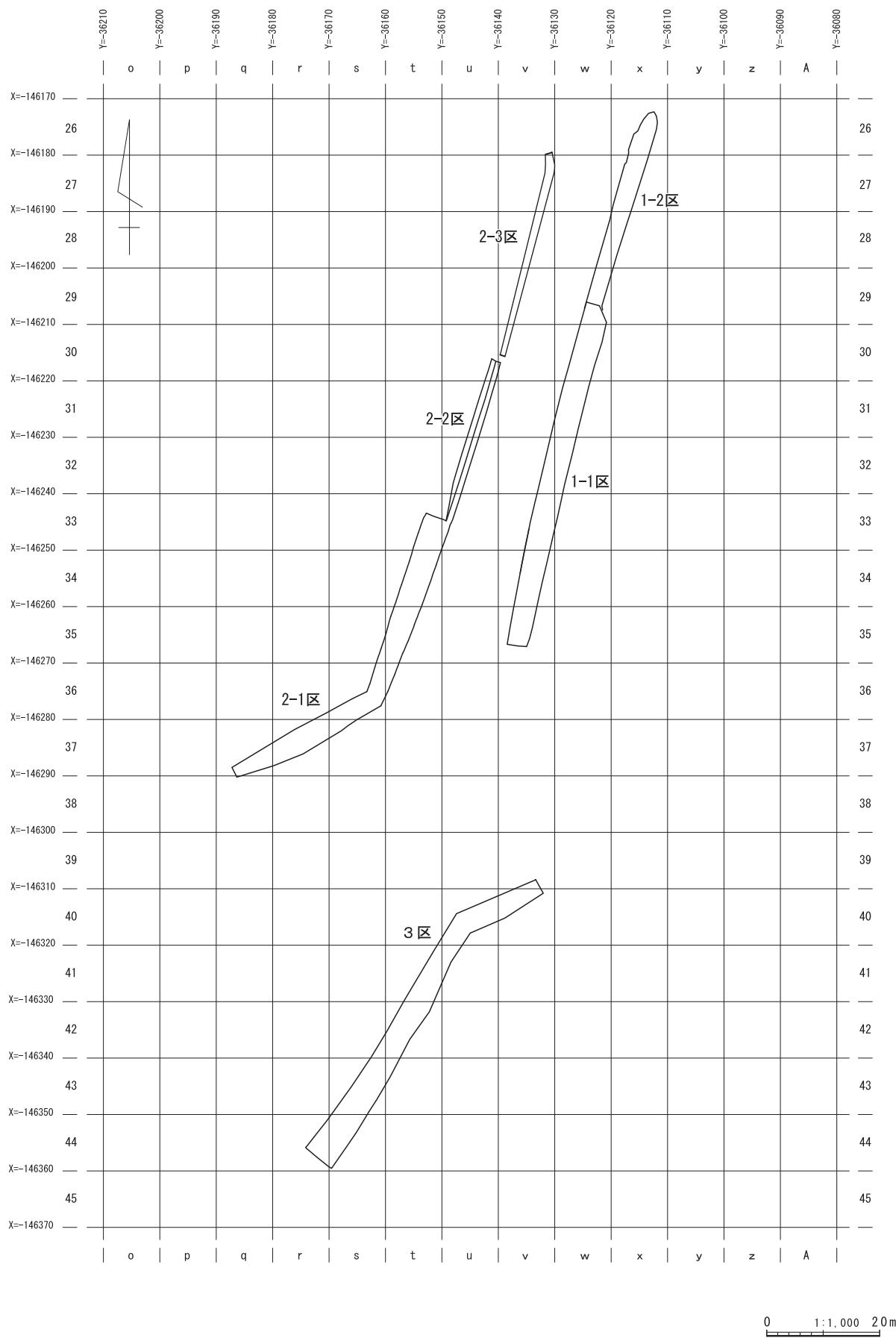
以上のことから、本調査の結果、集落域は北西側の丘陵裾から1・2区の北半部に広がっていたと考えられる。ただ、集落の中心域とは言えず、東側の縁辺部であったと考えるのが妥当であろう。前章の中山遺跡とは、遺跡の立地条件は良く似ているが、出土土器等からみて、明らかに年代が異なるため、別の埋蔵文化財包蔵地として周知されている。

なお、報告書に掲載した遺構番号は、調査時に付けた番号をそのまま使用している。年度毎、調査の順番に番号を付していることから、番号の重複を避け、遺構番号の前には調査区を記した。

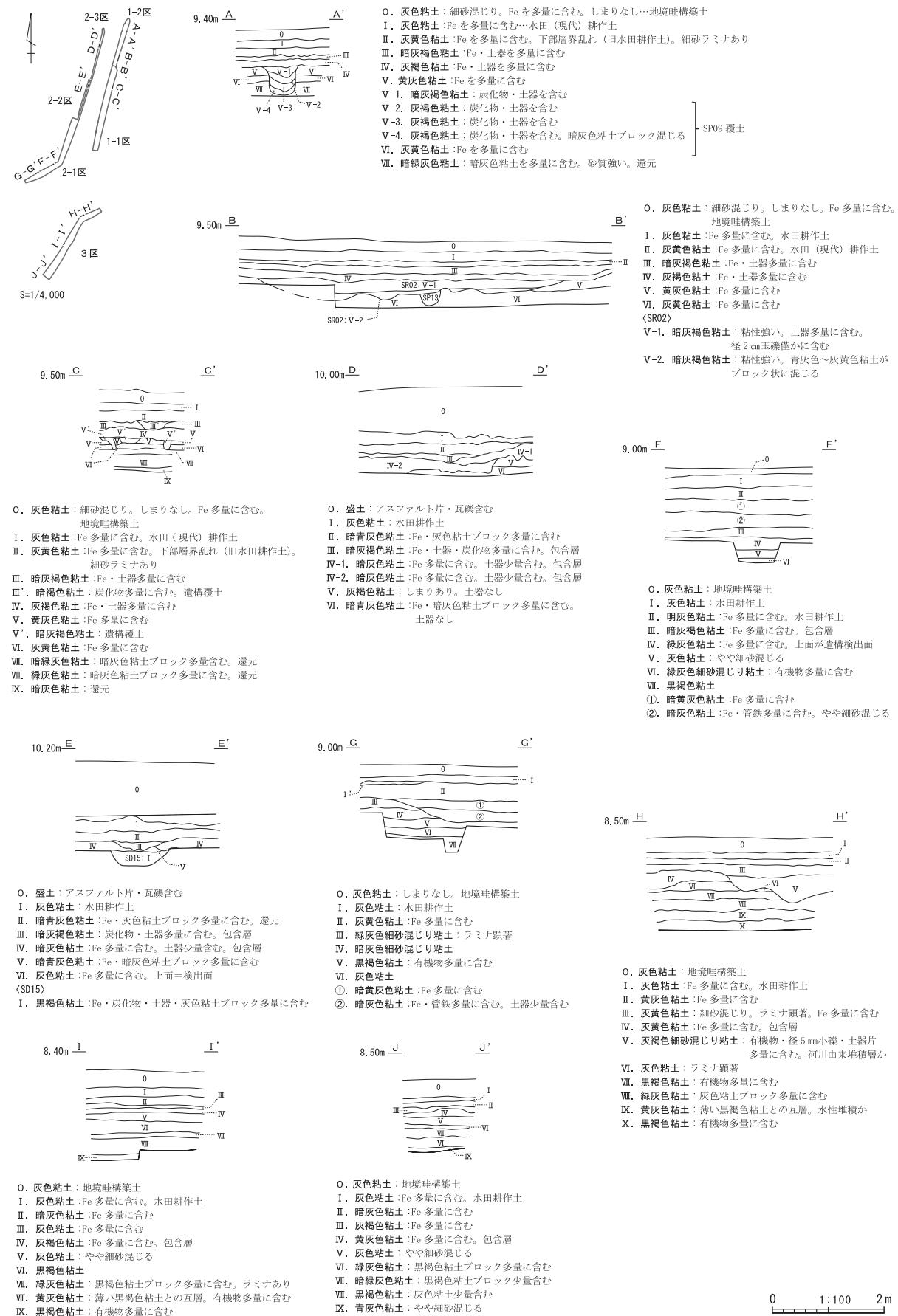
### 2 基本土層

調査では遺跡の北西側にある丘陵から派生する微高地を検出した。現在は水田の下に埋没している微高地の途中には地形の起伏もあり、小笠高橋川方向へ流れる流路や低湿地も確認された。堆積土層は1-1区C-C'土層断面を基準とする。高橋遺跡の基本土層は以下の通りである。

0層 盛土・・・灰色粘土：地境畦構築土。細砂混じり。締まりなし。鉄分を多量に含む。



第49図 高橋遺跡調査区配置図



第50図 基本土層図

- 1層 水田耕作土・・・I層 灰色粘土：鉄分を多量に含む。
- 2層 旧水田耕作土・・・II層 灰黄色粘土：鉄分を多量に含む。下部層界乱れ。  
細砂ラミナあり。
- 3層 暗灰褐色粘土・・・III層：Fe鉄分・土器を多量に含む。
- 4層 灰褐色粘土・・・IV層：Fe鉄分・土器を多量に含む。
- 5層 黄灰色粘土・・・V層：鉄分を多量に含む。
- 6層 灰黄色粘土・・・VI層：鉄分を多量に含む。
- 7層 暗緑灰色粘土・・・VII層：暗灰色粘土ブロック多量に含む。還元。
- 8層 緑灰色粘土・・・VIII層：暗緑灰色粘土ブロック多量に含む。還元。
- 9層 暗灰色粘土・・・IX層：還元。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 1・2区

1・2区の遺構調査面は5層上面で検出した遺構群である。しかし、一部の調査区では5層よりも上層の4層上面で捉えられた遺構の存在も確認された。これらの遺構は「上層遺構」と呼び、5層上面の遺構調査よりも前に、個別遺構として記録を取った。以下、遺構番号横に「上層遺構」を付して報告する。記載のないものは5層上面で検出した遺構とする。

#### 1-1区北 SF 1 (上層遺構) (第61図、図版21)

1-1区北半部、w 30 グリッド中央分近の4層上面で検出した円形の土坑である。直径は1.1m程度で0.65mの深さがある。土坑の底径は0.55mで平坦面である。覆土は炭化物を多く含み、2~5層では土器が出土した。なかには被熱した土器も含まれていた。土坑底では長さ0.5m程の棒状木製品が井戸底から壁際に沿うように出土し、須恵器坏身(第62図1)が見つかった。井戸底の最下層からは木の皮と思われるような有機物があった。覆土内より出土した土器は、この他に第62図2~4がある。土器は須恵器高坏、坏身、平瓶が出土した。

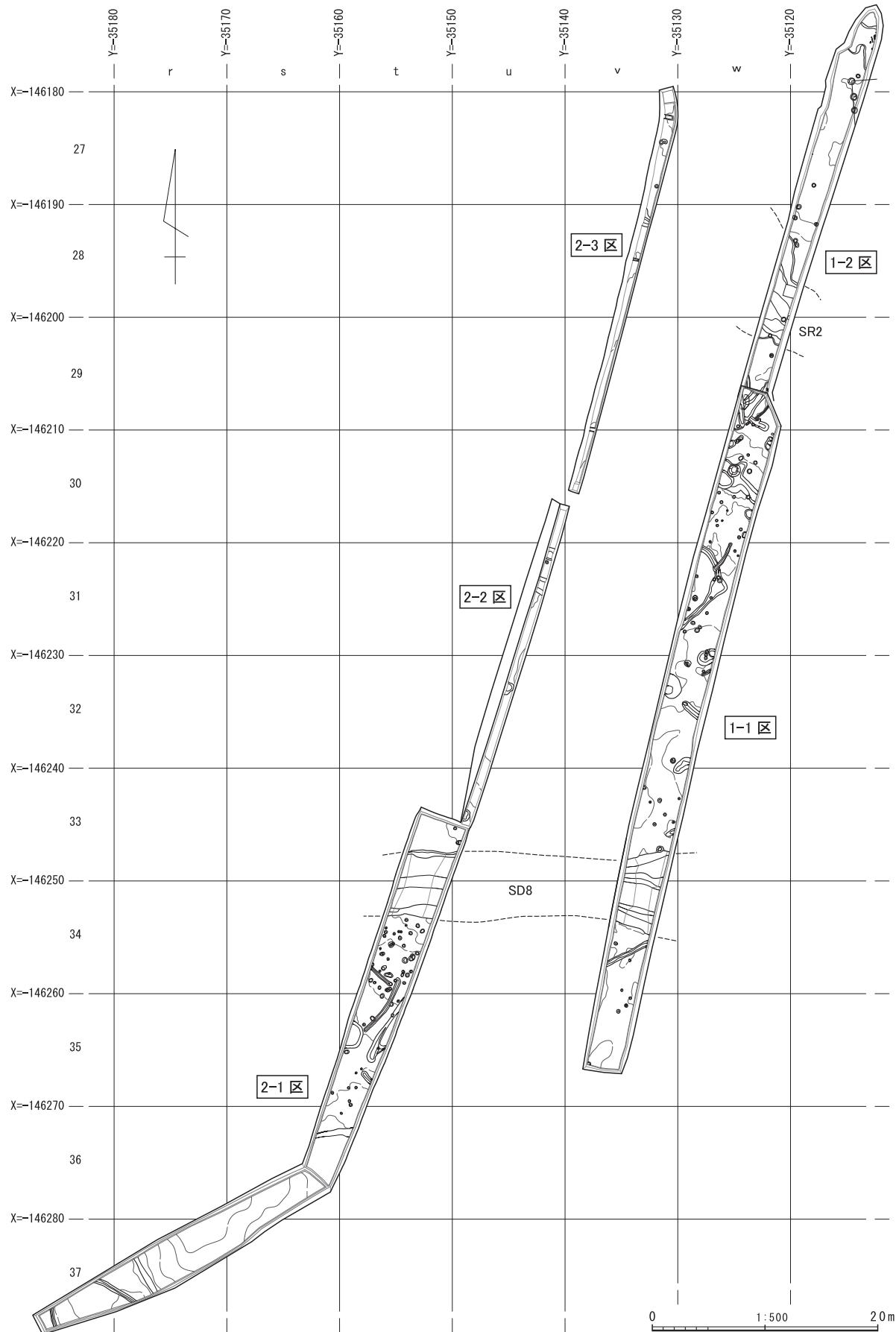
1は、ほぼ完形の須恵器坏身で、直径9.7cm(最大径12.1cm)、器高3.8cm、底径は5.0cmである。底にはヘラ記号のような線刻がある。2は土坑の上~中層で出土した高坏の坏部である。口径は15.2cm、残存高は5.7cmを測る。3も同器種で、復元口径は14.6cm、残存高は5.3cmである。坏部底には回転ヘラ削りが施されている。4は平瓶の口縁部で、内・外面には自然釉が付着している。口径は6.5cm、残存高は6.2cmである。土器の年代は7世紀前半から半ばに属する。

本遺構は調査当初、柱穴と見られていたが、調査所見では、柱穴とは認められず、井戸のような機能を持っていた可能性があると指摘される。土器の年代から、古墳時代後期の井戸と考えられる。

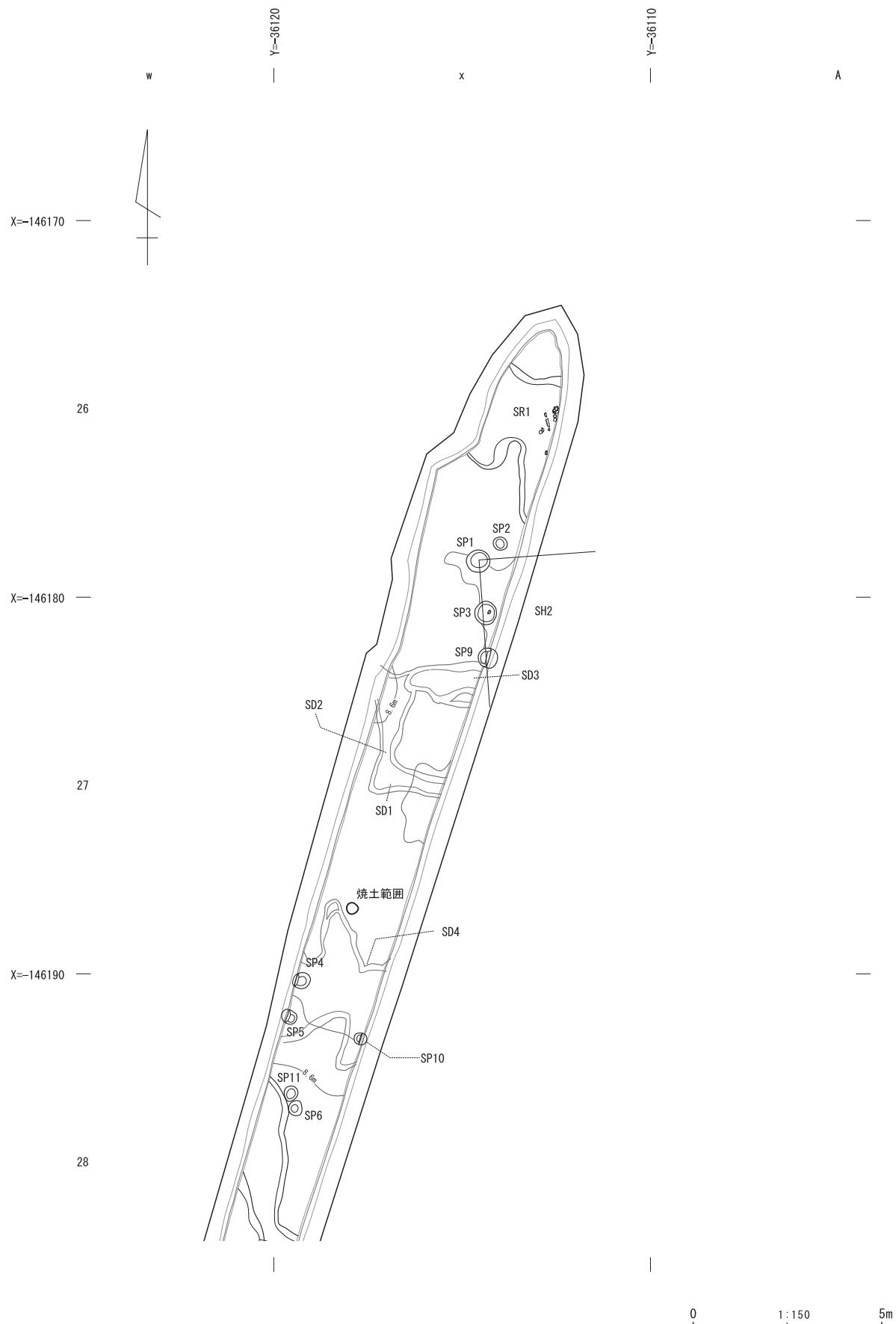
#### 1-1区北 SF 2 (上層遺構) (第61図、図版21)

w 29 グリッド南半部で検出した土坑である。調査区西壁際で検出したことから、西半部は検出できなかった。遺構規模は長軸方向で1.3m、短軸は0.6m、深さは浅い。

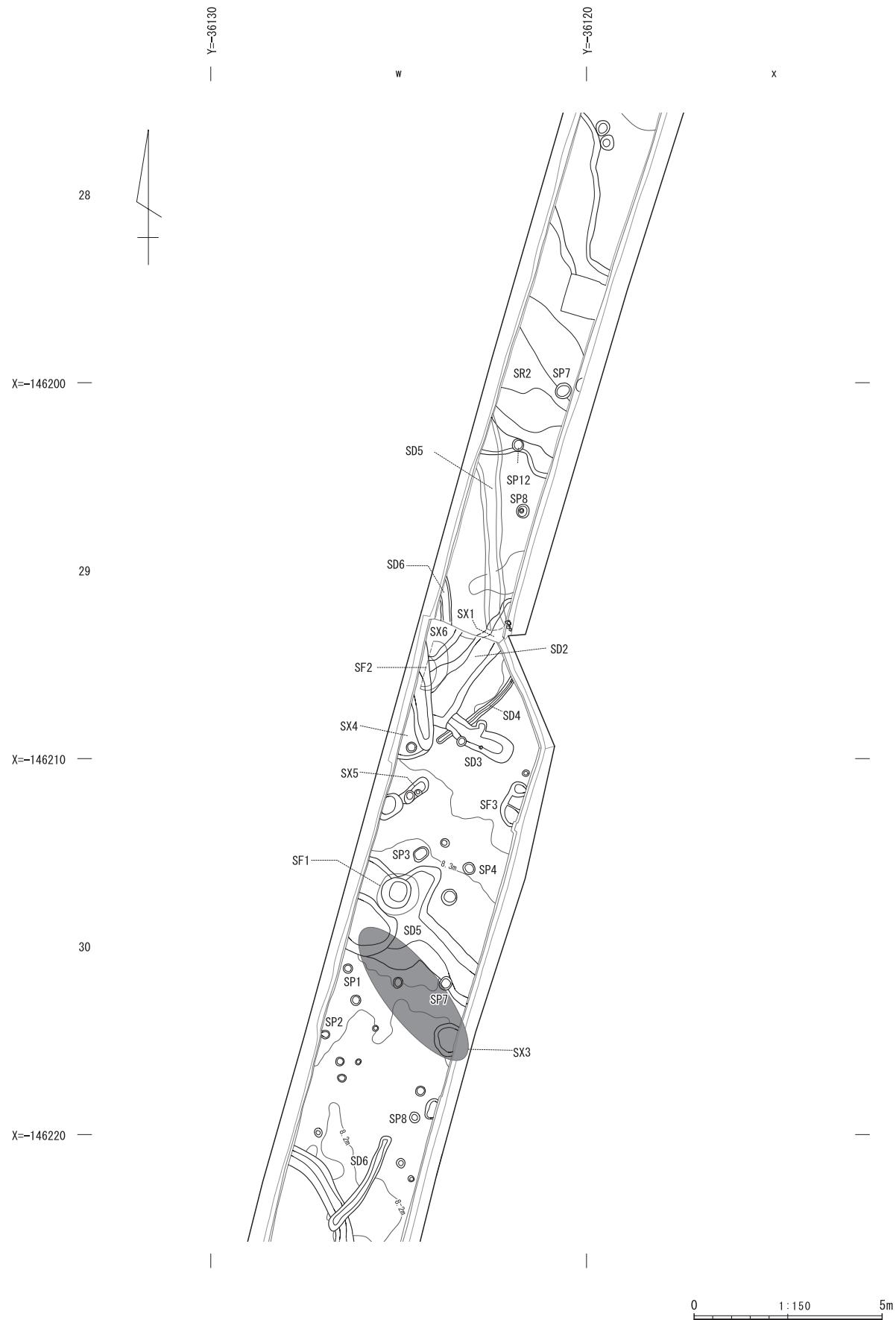
SF 2 覆土内から第62図5~9までの須恵器坏蓋、土師器甕等が出土した。5は土師器の坏で復元直径14.14cm、残存径は14.14cm、残存高は3.5cm、器面はハケ調整後、撫でている。6は土師器の甕底部で底径は7.0cmでナデ調整している。残存高は5.7cmである。7は土師器の手捏ね土器である。口縁部は欠損している。底径は4.6cm、残存高は3.7cmで、内面には指押さえの痕跡がある。8は土師器の甕口縁部から胴部までが残っている。復元直径は33.0cm、残存高は13.2cmである。表面は摩滅しており調整痕は明瞭ではない。9は須恵器の坏蓋である。直径は12.3cm、器高は4.1cm、蓋頂部には



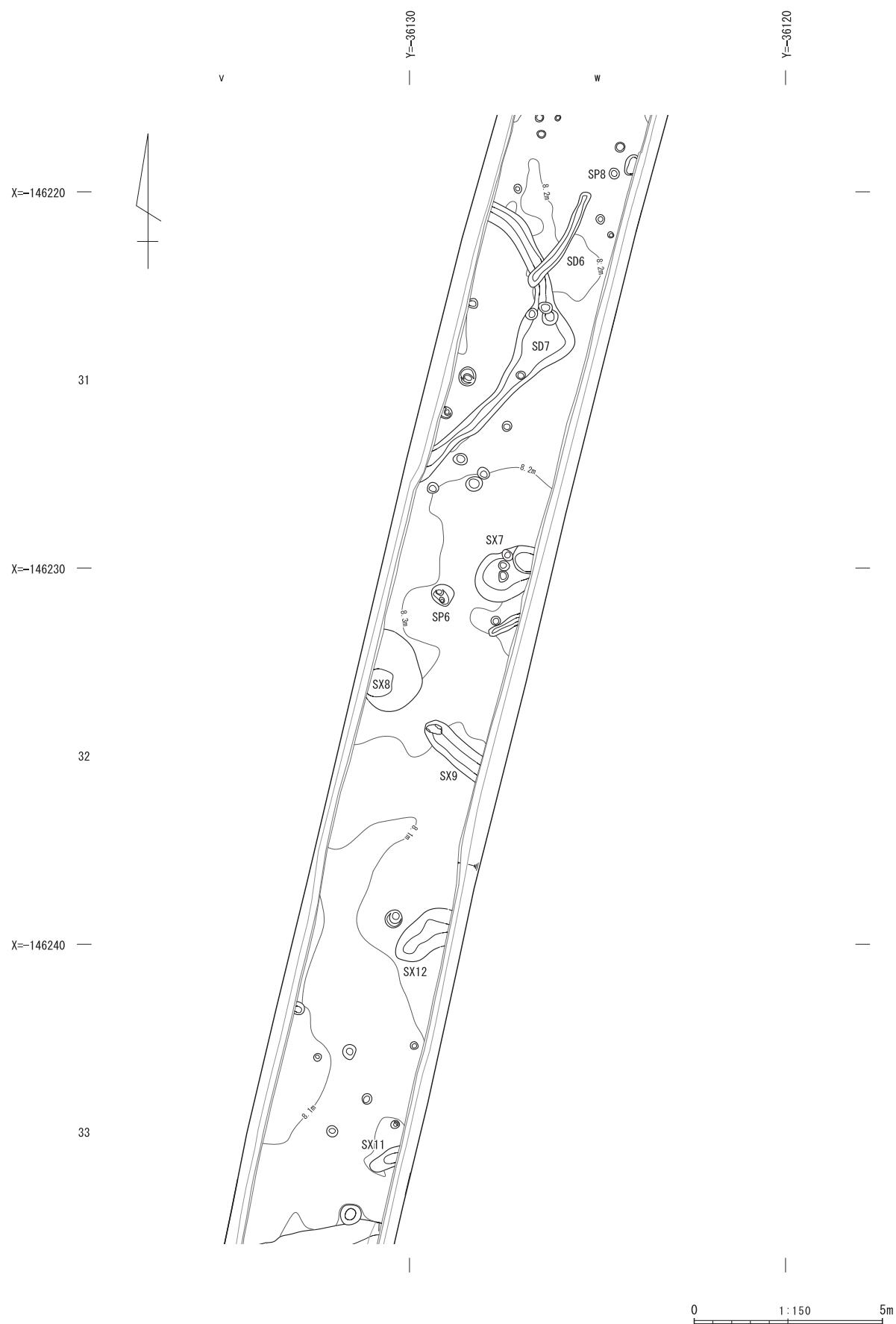
第51図 1・2区全体図



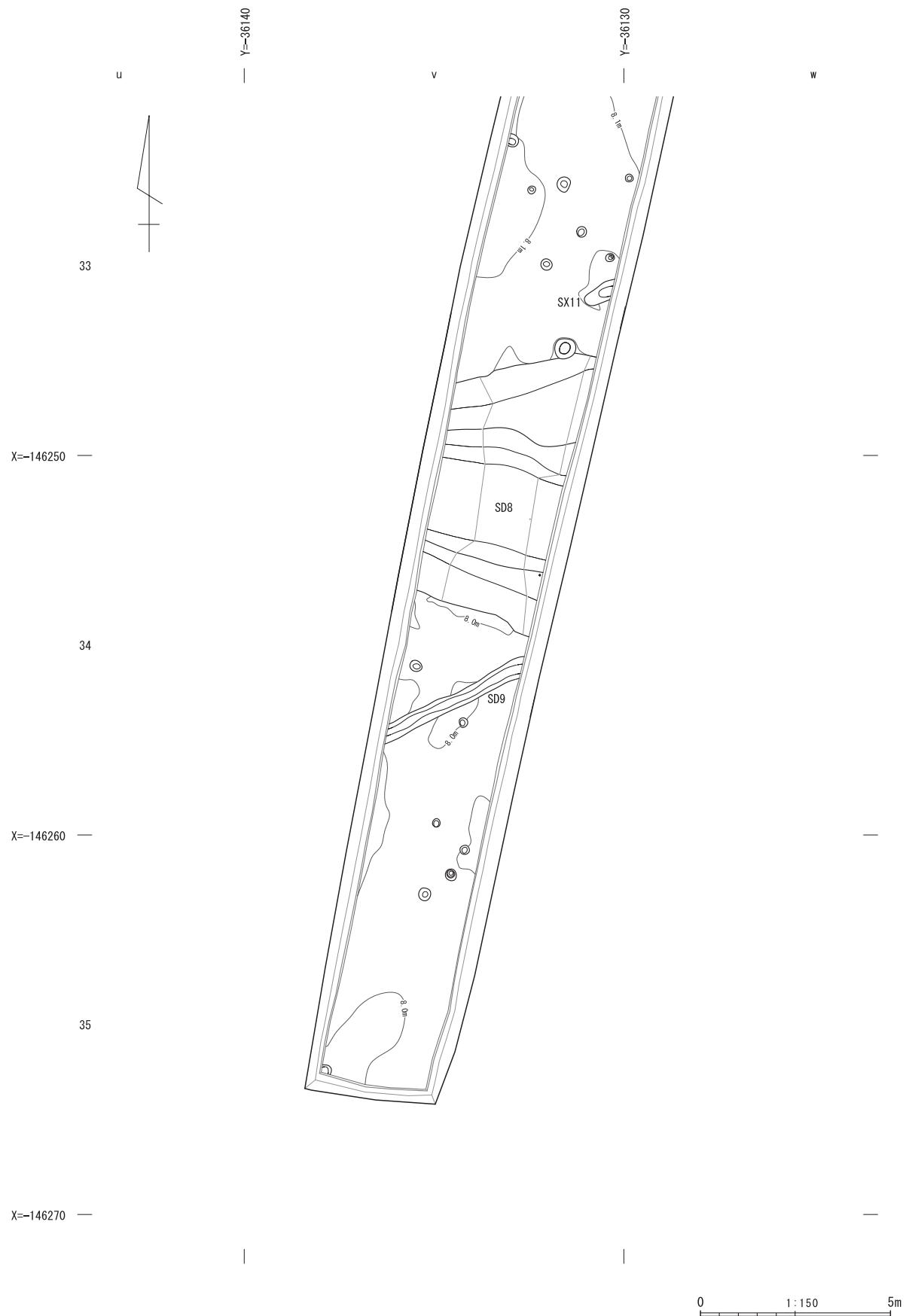
第52図 1区拡大図1



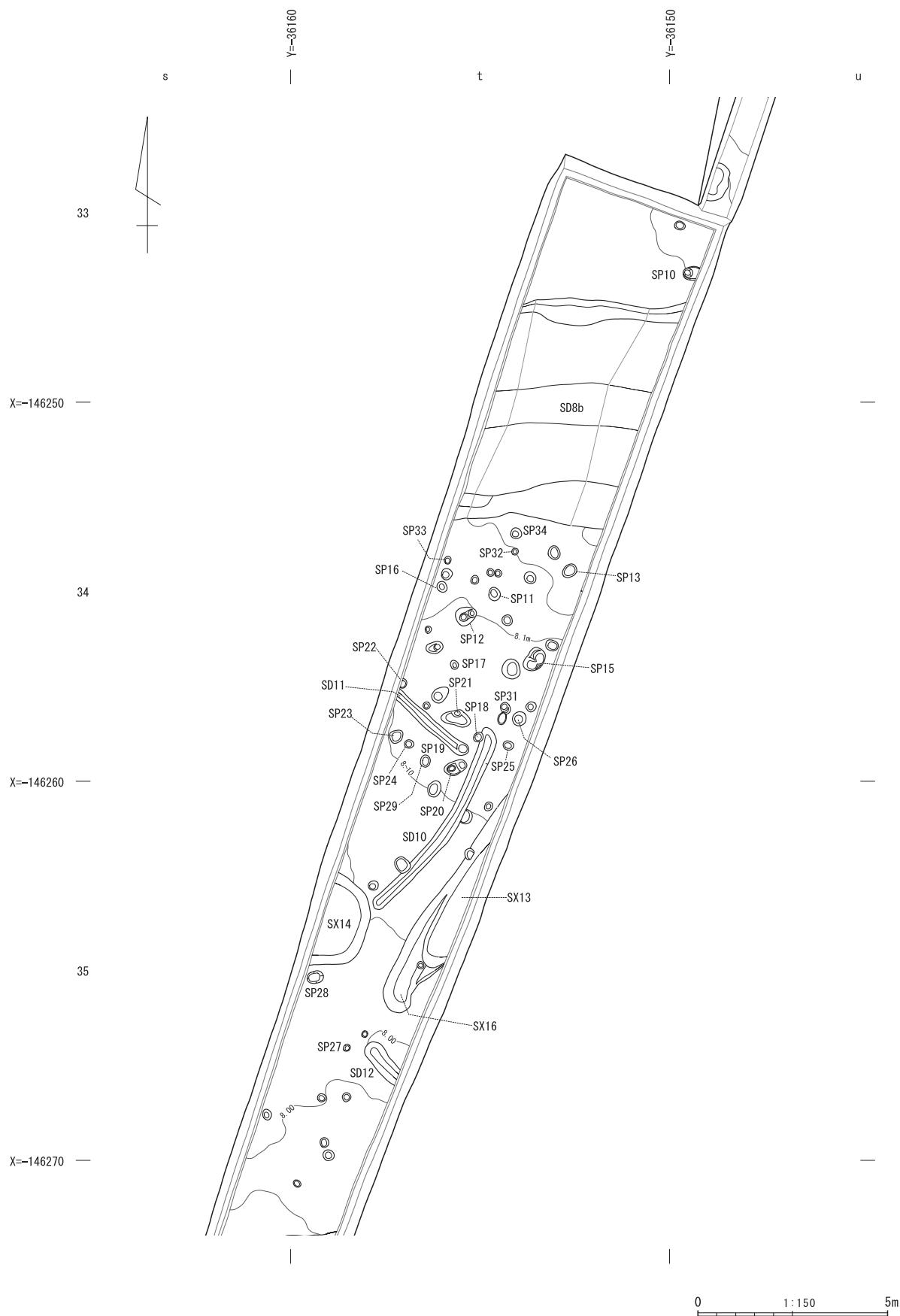
第53図 1区拡大図2



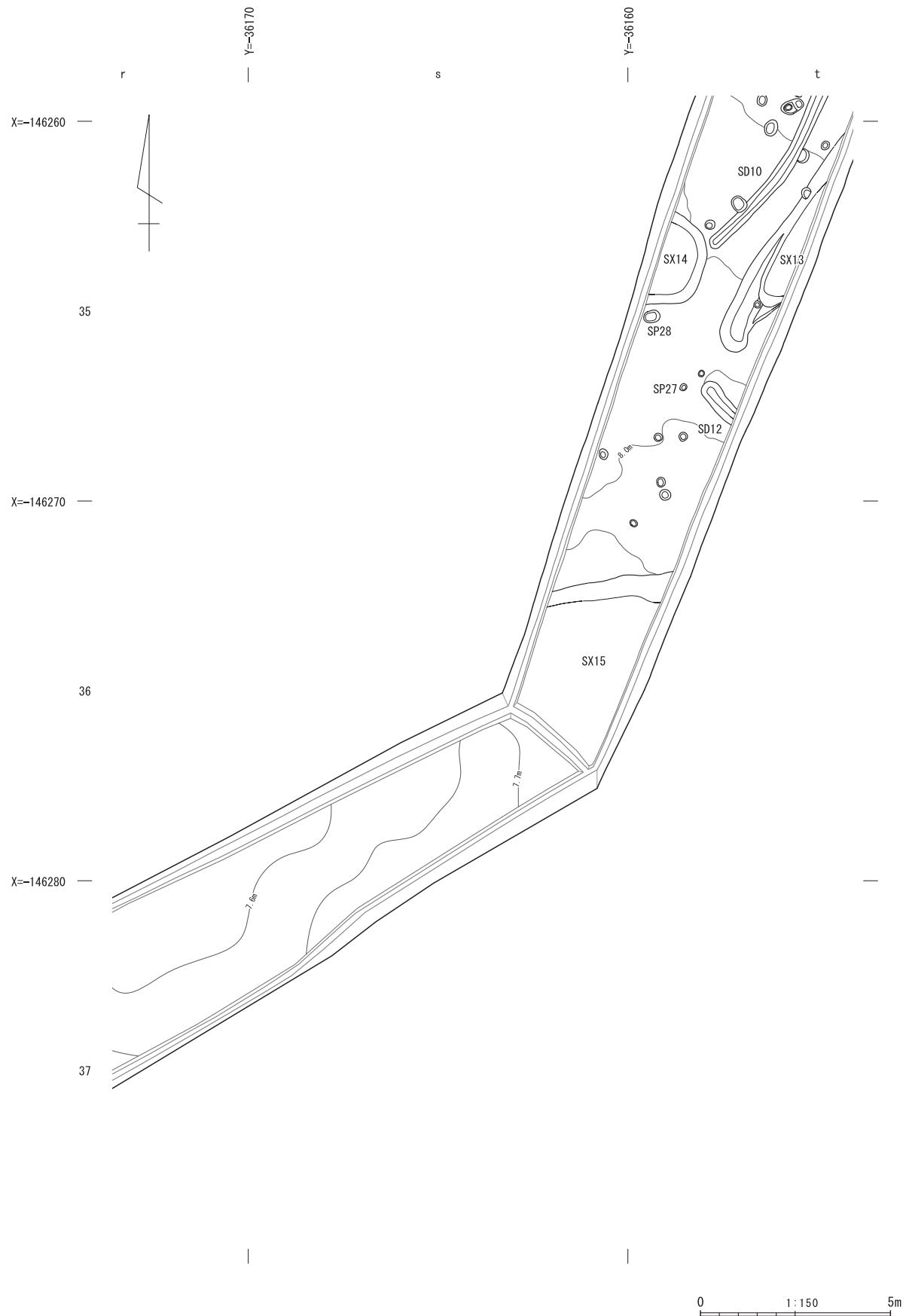
第54図 1区拡大図3



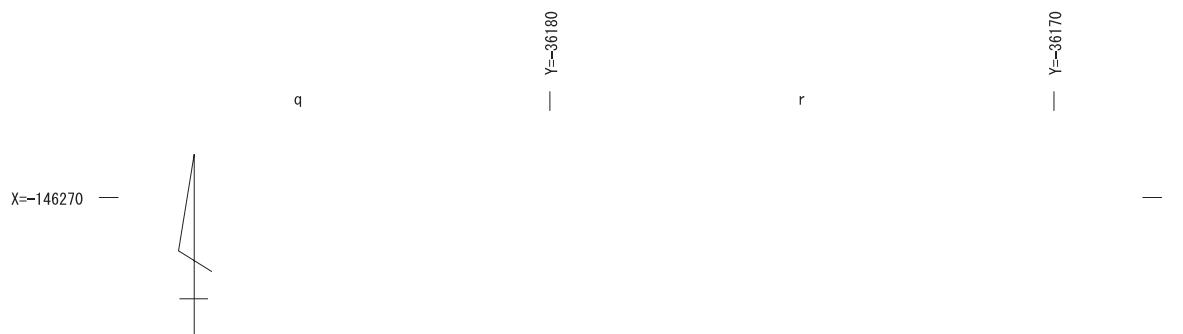
第55図 1区拡大図4



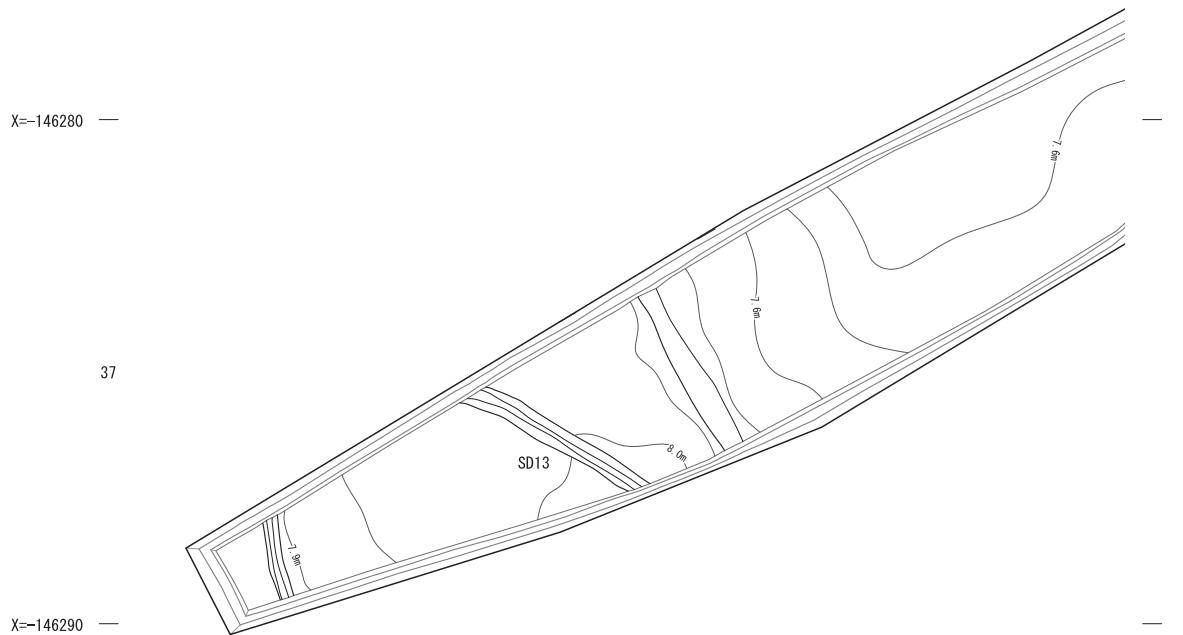
第56図 2-1区拡大図1



第57図 2-1区拡大図2



36

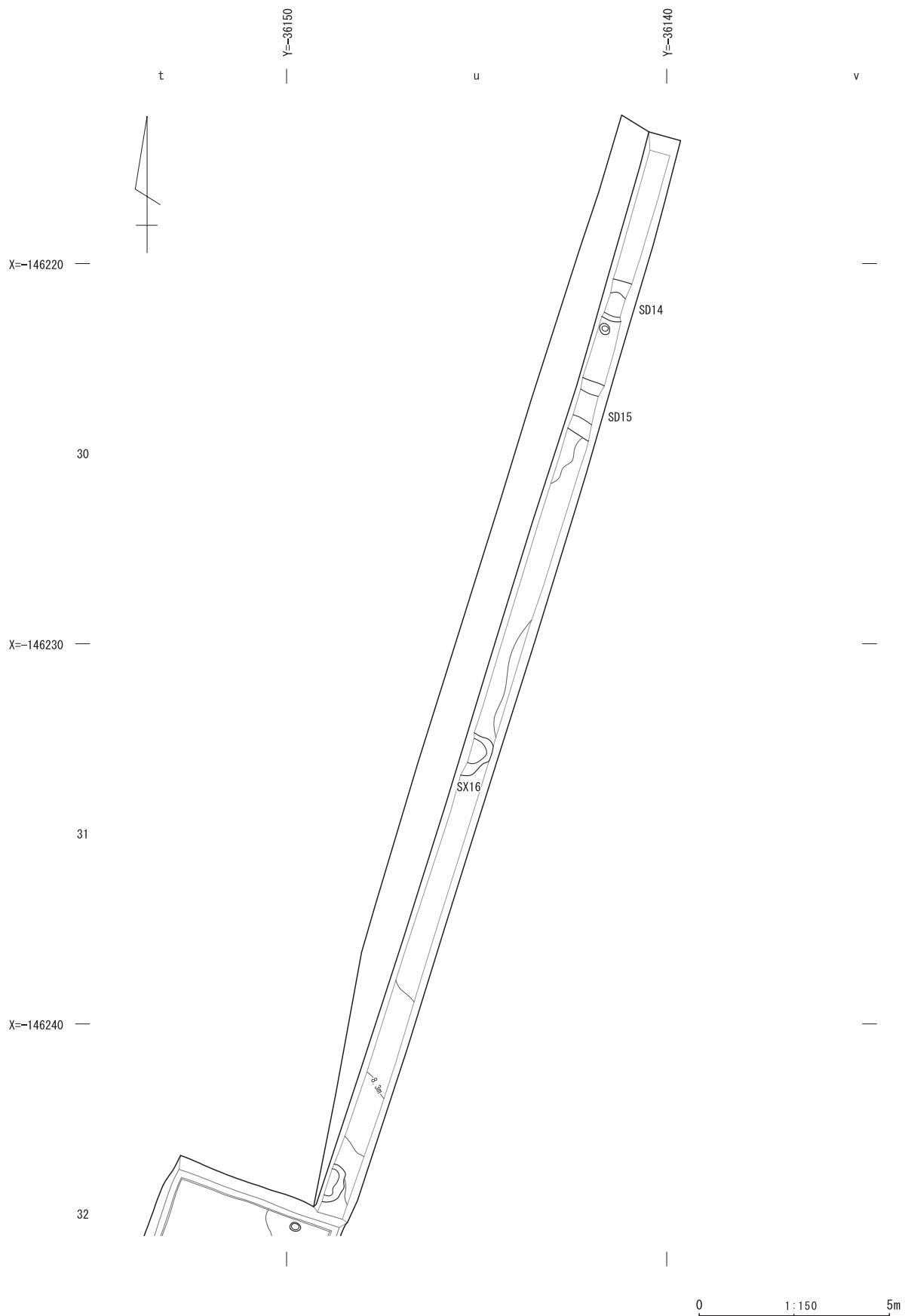


37

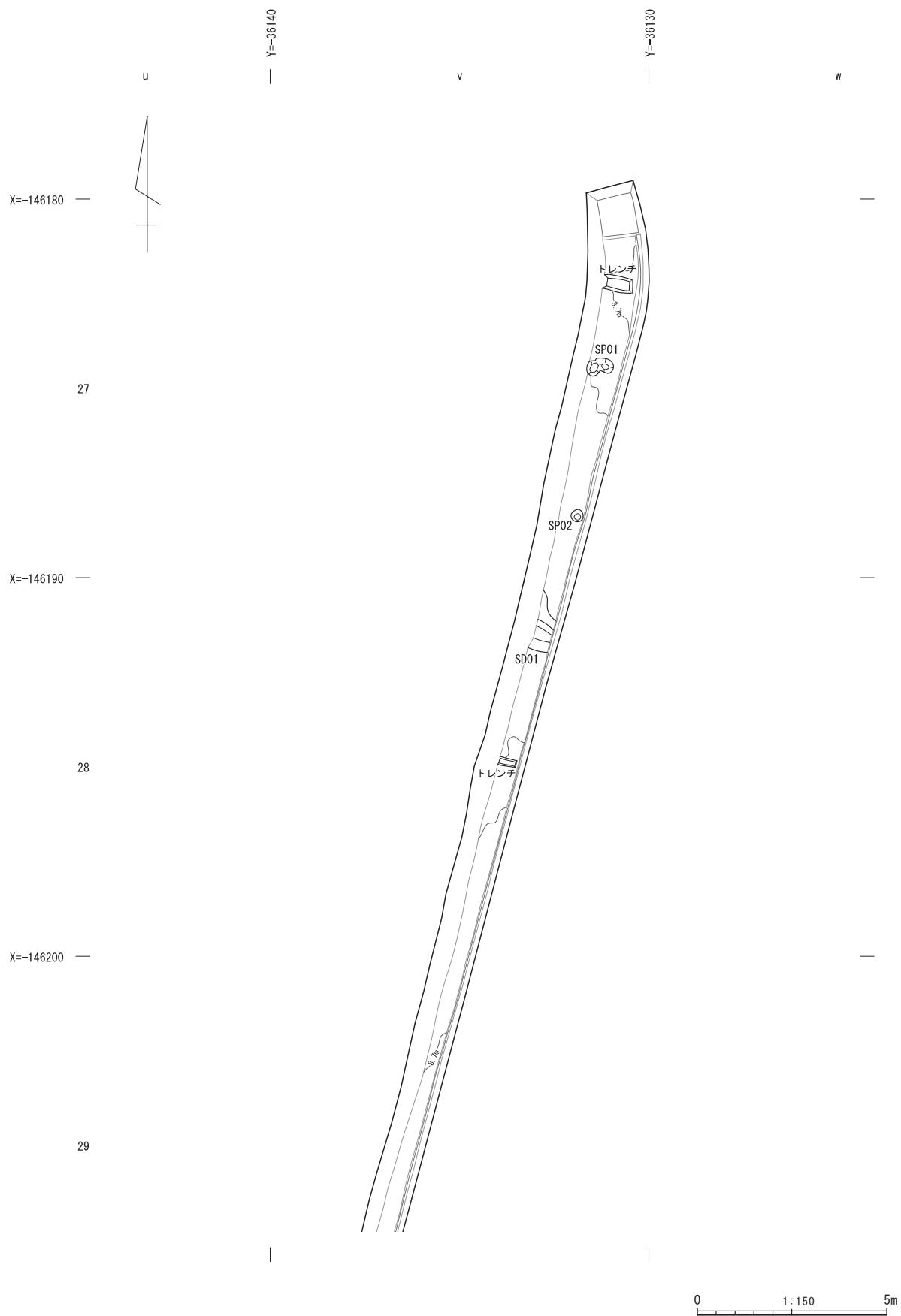


38

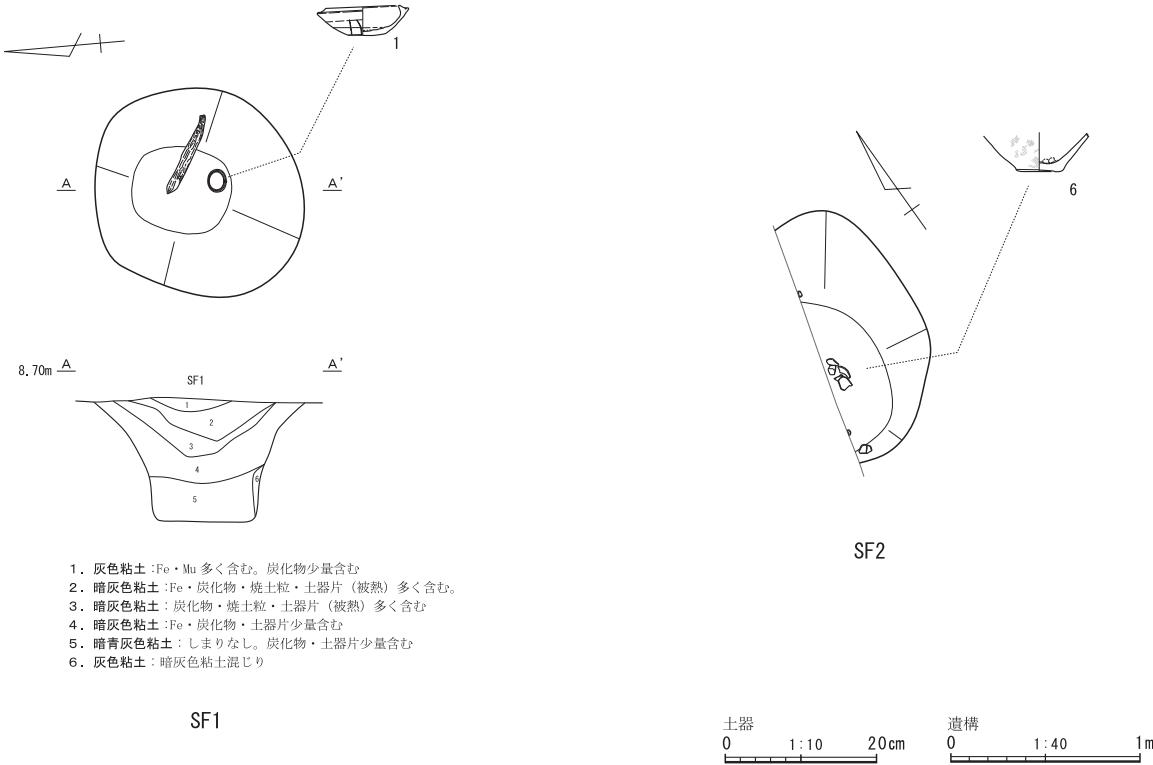
第58図 2-1区拡大図3



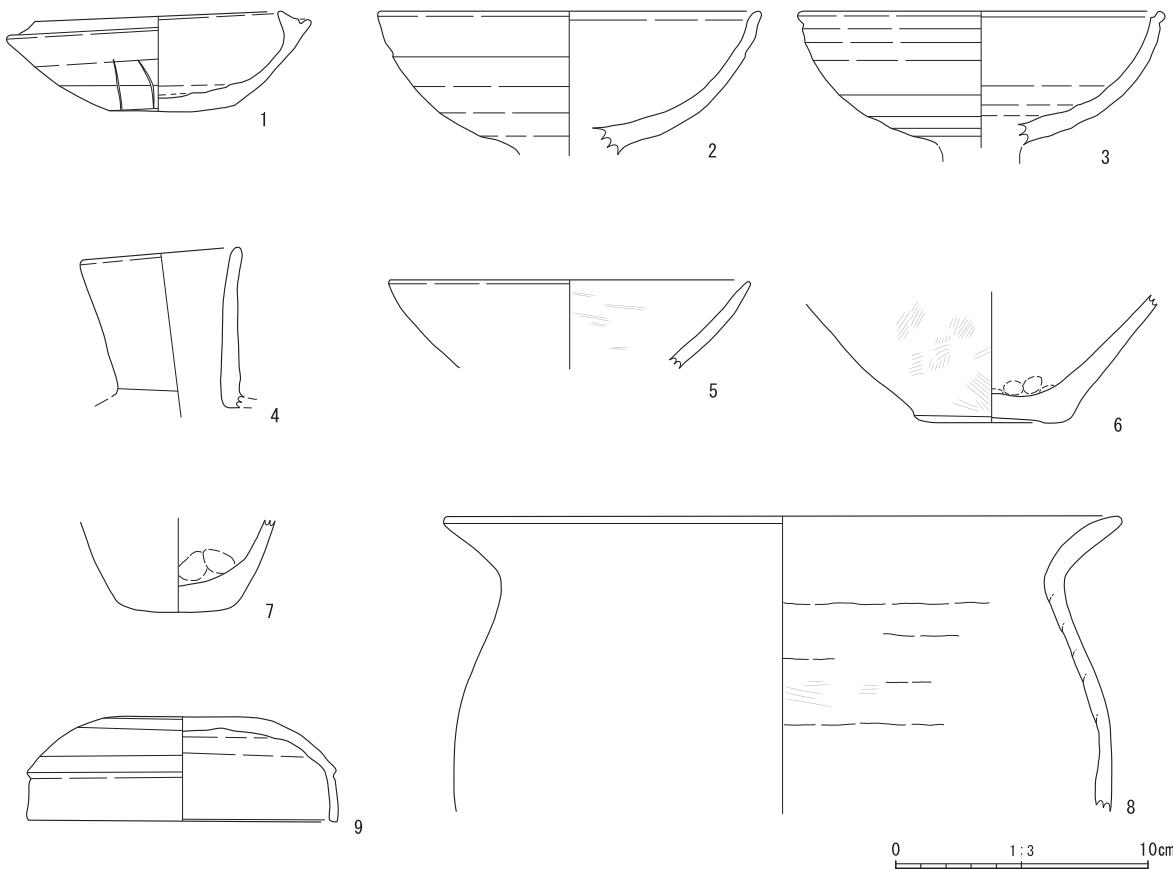
第59図 2-2区拡大図



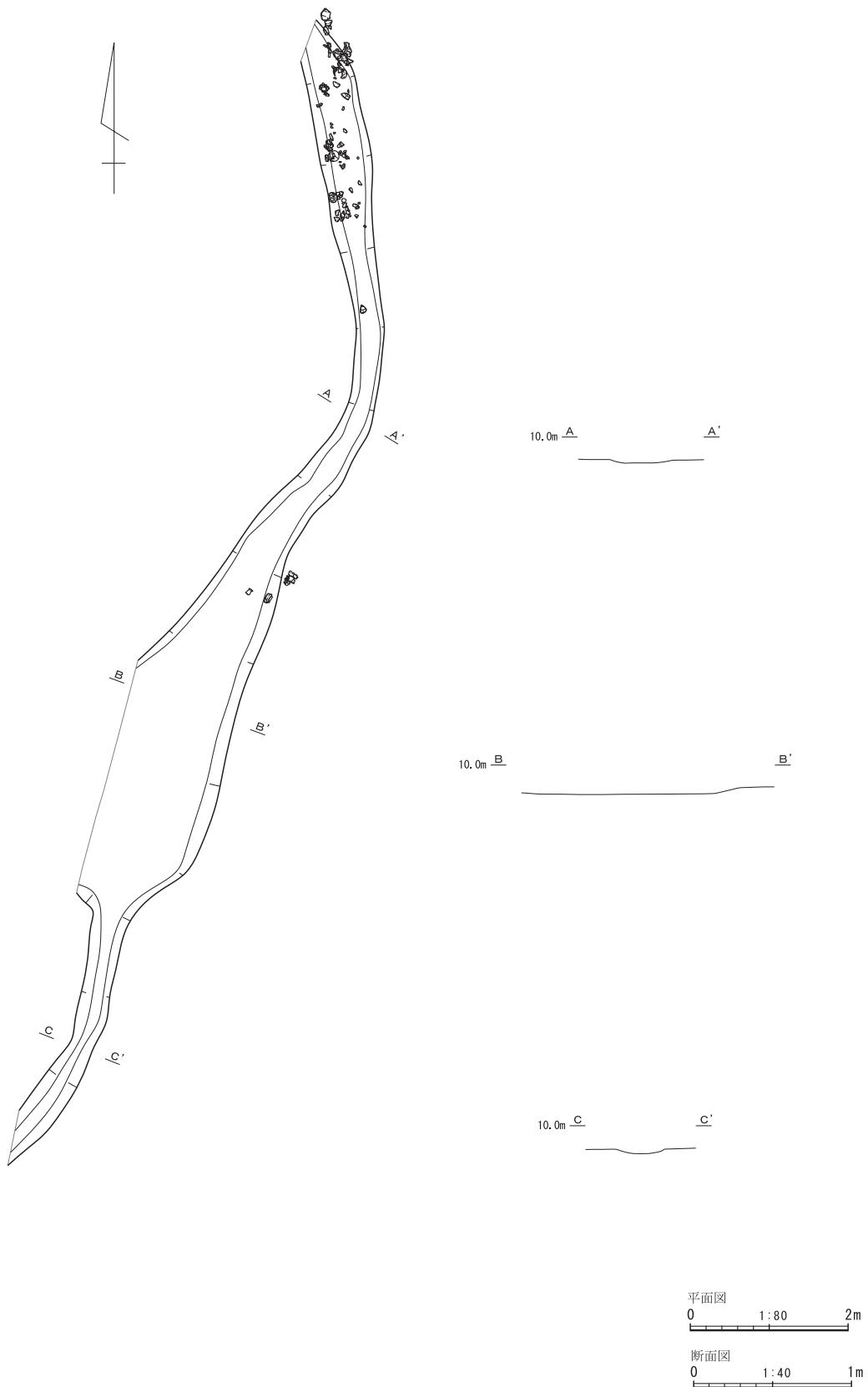
第60図 2-3区拡大図



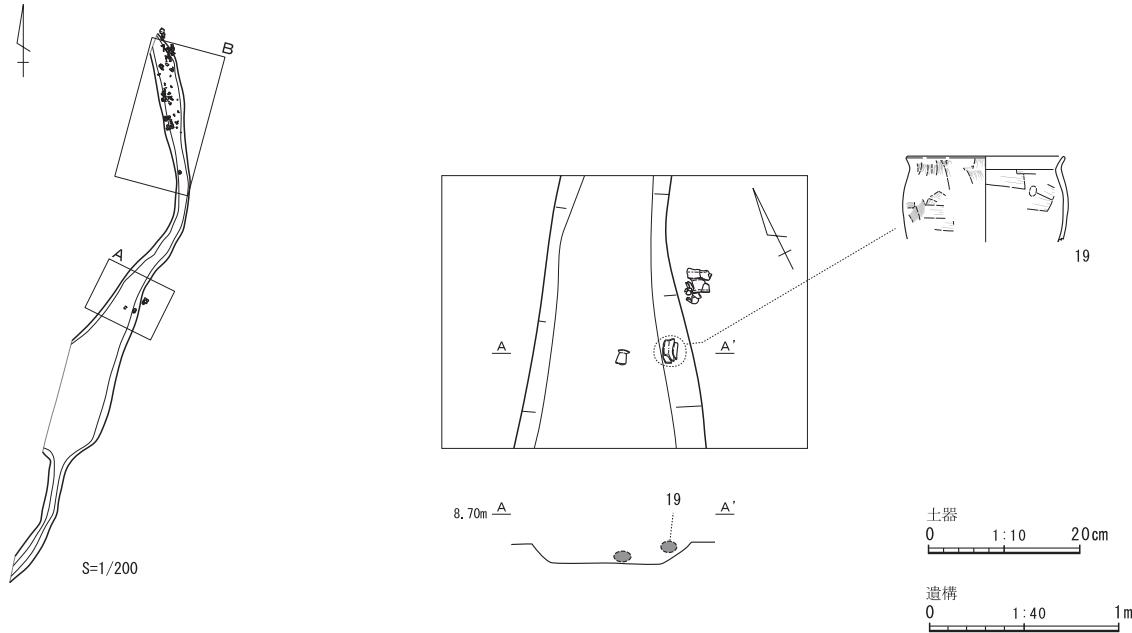
第61図 1-1区 SF 1・2実測図



第62図 1-1区 SF1・2出土遺物実測図



第63図 1-1区 SD 1実測図1



第64図 1-1区SD 1実測図2

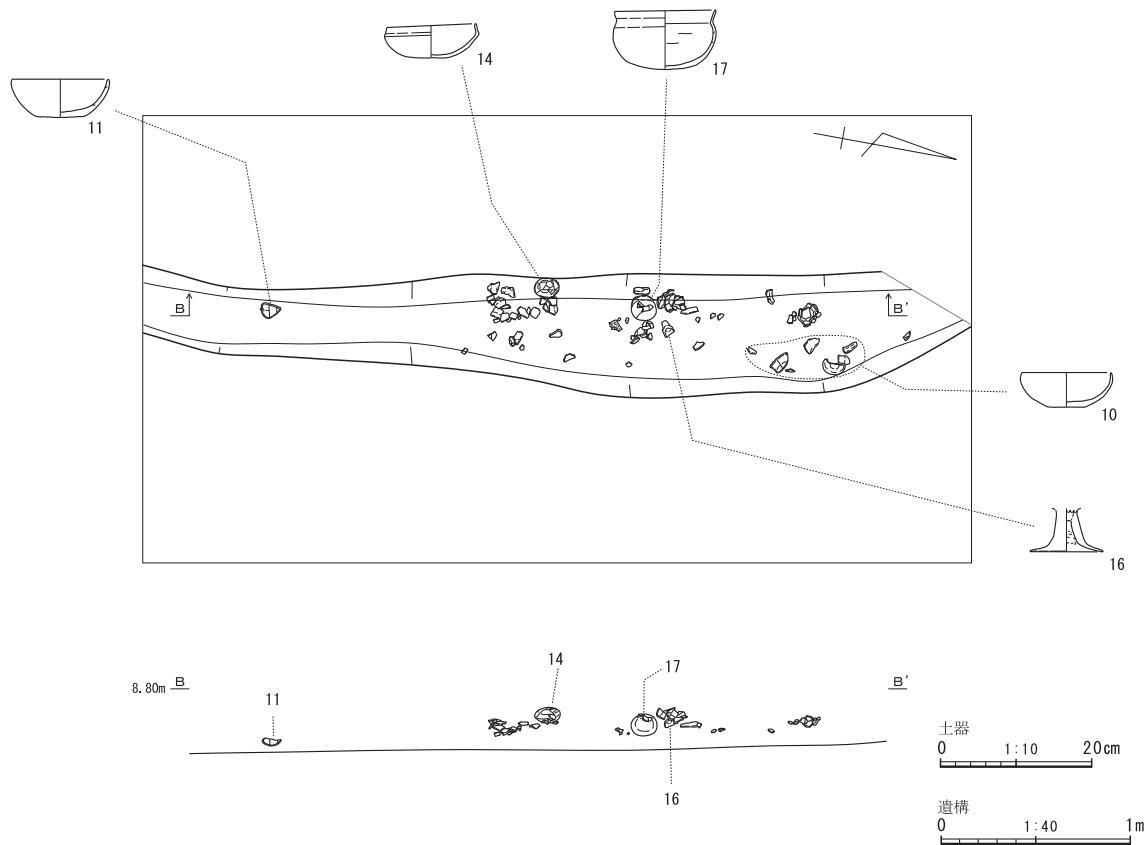
回転ヘラ削りされ、焼成時の降灰釉がある。口縁部は重ね焼きされたため、剝がれた痕がある。

本遺構はSF 1よりも浅い土坑である。年代は7世紀半ば以降と思われるが、遺構の性格は判断できない。

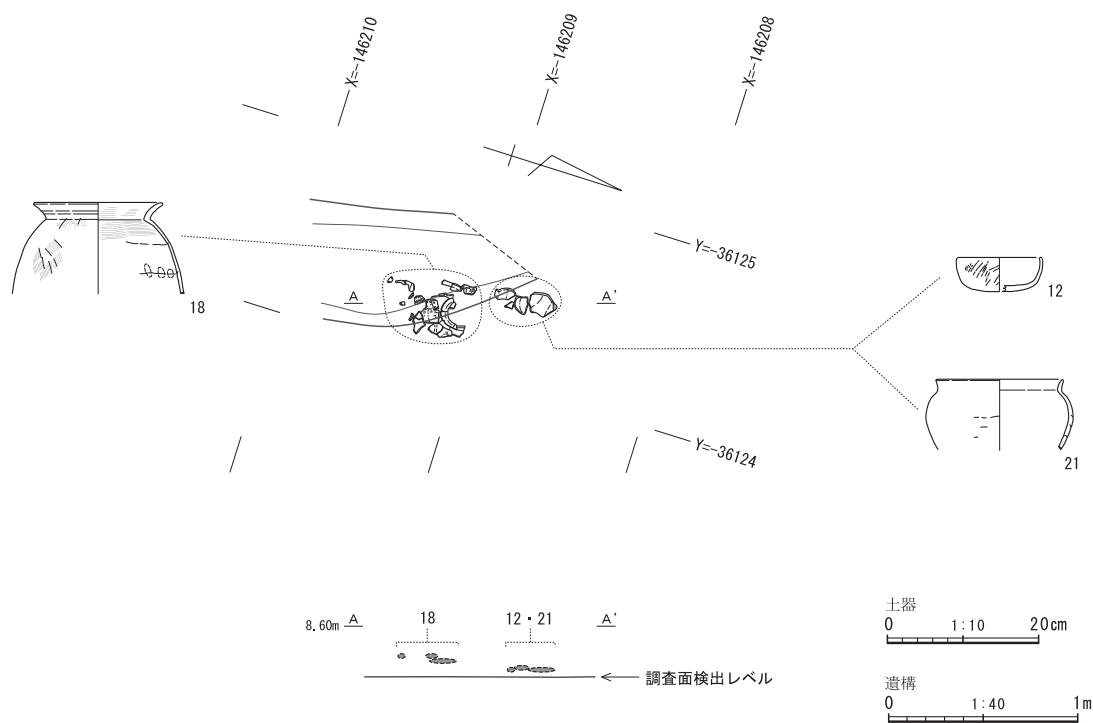
#### 1-1区北 SD 1 (上層遺構) (第63・64図、図版21)

w 29・30グリッドで検出した溝状遺構である。調査区の北東壁から始まり、やや曲がりながら西壁寄りに位置する。幅も一定でないことから人為的なものではなく自然の流路であろう。遺構覆土は暗灰褐色粘土で鉄分を多く含む。遺構内の2箇所で土器がまとまって出土している。溝の延長は15mを超える長さがある。深さは0.15m程と浅い。

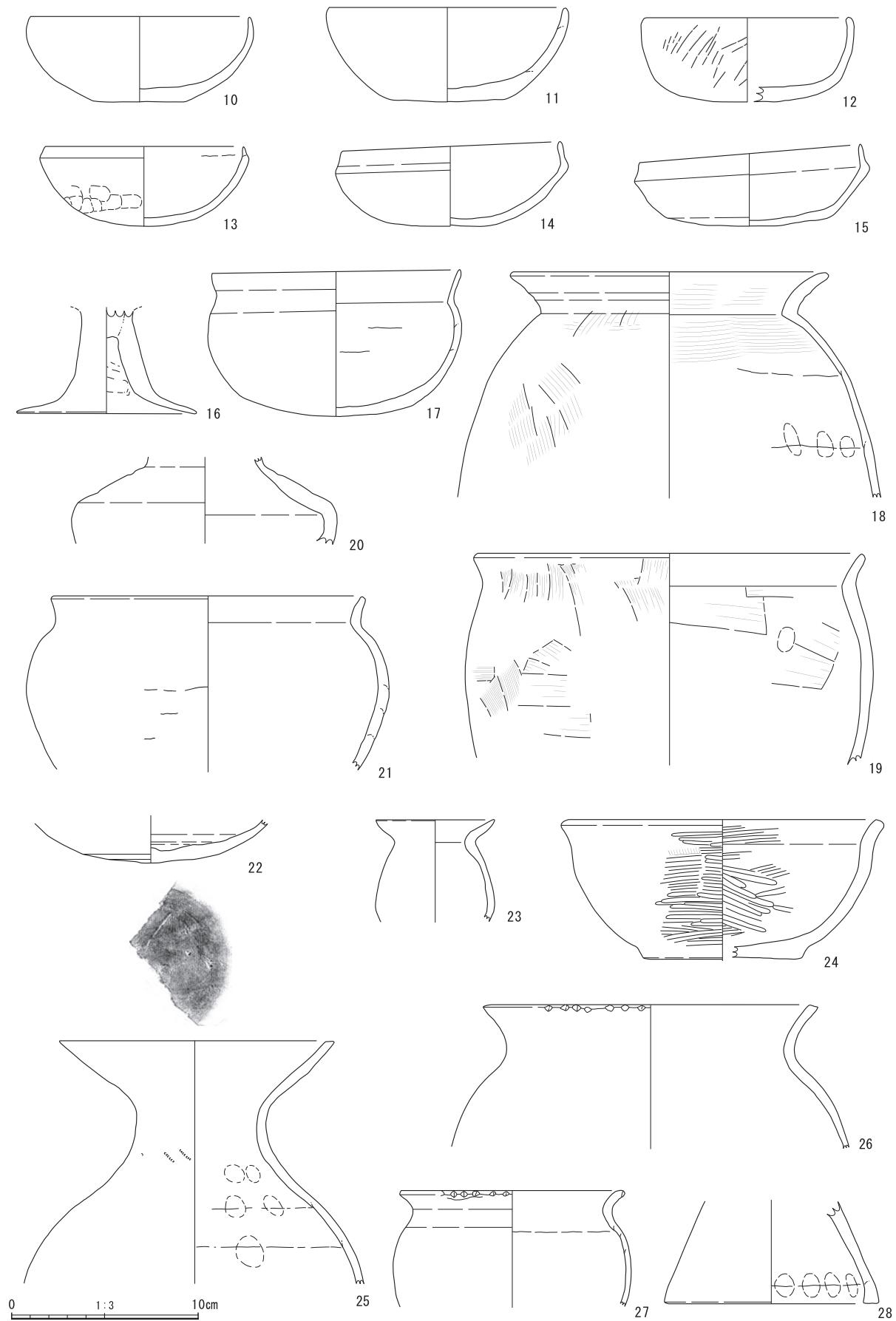
溝の覆土内からは第67図10～21が出土した。出土状況は第64～66図に示した。10～15は土師器の壺である。10は復元口径11.8cm、器高4.6cmの壺で、径5.0cmの底部を作り出している。11は復元直径13.0cm、高さ5.1cm、底径は6.0cmの壺である。12は下層から出土した壺で、復元口径11.4cm、高さは4.5cmを測る。13・14・15は須恵器壺身を模倣した土師器の壺(模倣壺)である。口縁部の作りは須恵器の壺身の受けを意識した形状になっている。13は復元口径10.6cm、高さは4.3cm、口縁部は粘土を継ぎ足している。14は口径11.8cm、最大径は12.5cm、高さは4.0～4.6cmで全体に歪んでいる。15は口径12.0cm、高さは3.4～4.4cmで、歪んでいる。16は高壺の脚部で、裾径は10.9cm、残存高は6.2cmである。脚部内面には指ナデの痕跡がある。17は土師器の小型甕でほぼ完形に近い。口径は13.4cm、高さは7.7～7.9cmで、全体に磨耗しているため調整痕は見えない。18・19は土師器の甕で、口縁～胴部が残っている。全体に磨耗し、調整痕は不明瞭である。18は口縁部がくの字状に屈曲して外側に開く形状をしている。復元口径17.2cm、残存高は12.05cm、内外面ともにハケ調整がある。19は復元口径が21.0cm、残存高は11.25cmで、外面はハケ調整後に板状工具でナデ、内面も板状工具によって撫でている。20は須恵器の壺で、6世紀代に属する。最大径は14.3cm、胴部にはヘラ削り痕がある。21は土師器の甕で、外面には一部黒ずみがある。調整痕は不明瞭だが、輪積み痕があり、全体に撫でて仕上げている。復元直径は19.0cm、残存高は10.4cmである。



第65図 1-1区 SD 1実測図3



第66図 1-1区土器集中箇所



第67図 1-1区 SD 1・2・3、2-3区 SD 1出土遺物実測図

出土した土器は土師器が主体で、6世紀代の須恵器も混じる。したがって、本遺構は赤土政所遺跡SD206より出土した土師器の壺群と同年代の6世紀後半～末と考えられる。

#### 1-2区 SD 1 (上層遺構) (第68図、図版29)

x 27グリッドに位置する東西方向の溝状遺構である。調査区内では2mを検出した。北側はSD 2やSD 3と繋がっている。いずれも浅く不定形であることから、人工的な溝ではなく、自然な流路と捉えられる。

溝の所々から土器が出土している。第67図22は須恵器の壺身か。丸底で残存高は2.4cmである。内・外面ともに回転ヘラ撫でし、外面底部はヘラ削りしている。底部にはヘラ記号かと思われる線刻がある。年代は古墳時代後期以降であろう。

#### 1-2区 SD 2 (上層遺構) (第68図、図版29)

SD 2はx 27グリッドに位置する。南北方向の溝状遺構で、南はSD 1と、北側はSD 3と繋がっている。調査区内では3.2mを確認した。SD 1と同様に人工的な溝ではなく一時的は自然流路であったと思われる。

#### 1-2区 SD 3 (上層遺構) (第68図、図版29)

x 27グリッドで検出した溝状遺構である。南側はSD 2に接しており、SD 1とも繋がっている。調査区内で検出した長さは2mであった。SD 1やSD 2と同じように一時的な自然流路の一部だったのであろう。

#### 1-2区 SD 4 (上層遺構) (第68図、図版29)

調査区北半部のx 27グリッドで検出した遺構である。東西方向だが、調査区外へと続くため、全体形状は不明である。不定形な深い溝であることから、一時的な自然流路である可能性が高い。遺構の東端の覆土から土器がまとめて出土している。土器は弥生土器の小片が多数出土したが、二次的な堆積である可能性が高い。年代の特定できるものではなかったが、弥生時代後期に属すると思われる。

#### 1-2区 SD 5 (上層遺構) (第68図)

調査区の南端で検出した溝状遺構である。延長は5.7mで直線的な形状を呈する。西端は調査区外へ続き、南端部は不明瞭になっていた。人為的な溝と思われるが、出土遺物は弥生土器の小片が多数出土したが、年代の特定に至るものではなかった。しかし周辺の土器の出土状況から、弥生時代後期であろう。

#### 1-1区北 SD 2・1-2区 SX 1 (第53図、図版29)

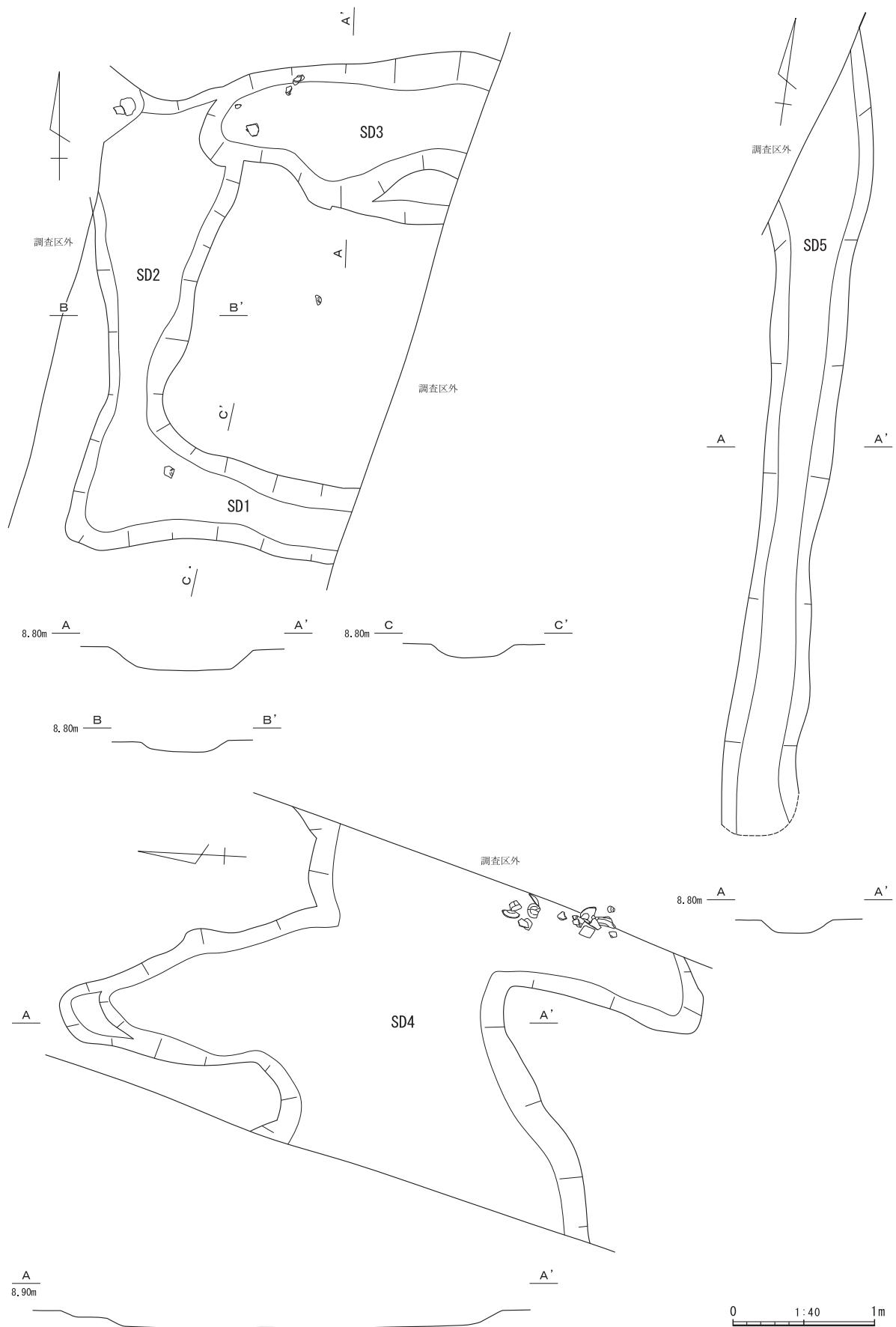
1-1区北の北端にあたるw 29グリッド内で検出した溝状遺構である。1-2区南端で検出したSX 1と繋がることから同一遺構であろう。南西から北東方向の溝で、延長は3.4mである。

SD 2の覆土内より、甕のミニチュア土器(第67図23)が出土した。甕は口縁部から体部まで残り、底部は欠損している。復元直径は6.4cm、残存高は5.5cmで、小型で実用品とは考えにくい。外面はハケ調整後に撫で、内面は撫でて仕上げている。

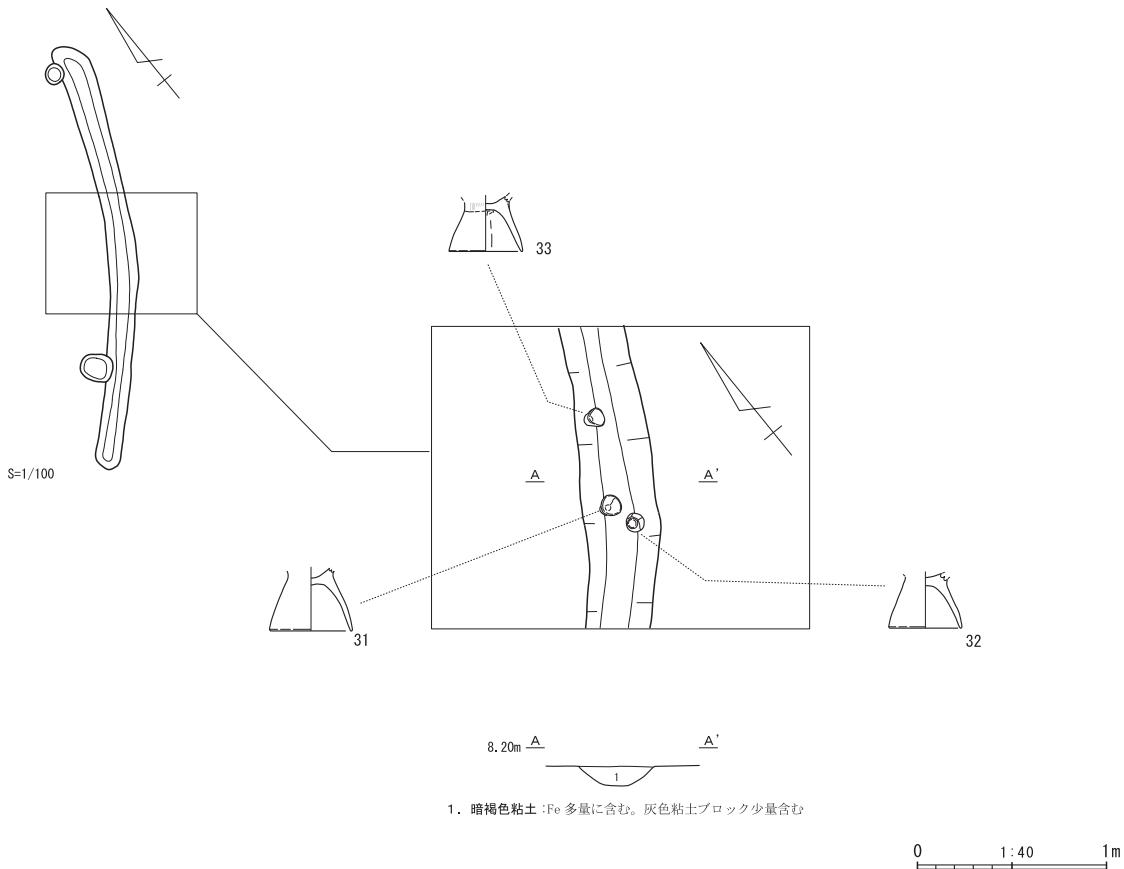
SX 1覆土内からも弥生土器の壺が出土している(第73図38)。復元口径は21.0cm、残存高は8.5cmの折り返し口縁の壺で、口縁部から頸部の破片である。折り返し口縁には棒状浮文が貼り付けられているが単位は不明である。口縁内面には櫛描波状文が3段ある。ただ表面の剥離があるため、1～2段目の波状文は不明瞭。円形浮文が3箇所に貼り付けられていた痕跡があるが、剥離している。壺の整形痕は外面がハケ調整のち縦位のヘラミガキ、内面も同じくハケ調整後に横位のヘラミガキが施されている。出土した土器の年代から、本遺構は弥生時代後期以降に属すると考えられる。

#### 1-1区北 SD 3 (第53図、図版23)

w 29グリッド南端で検出した溝状遺構である。長さ2m、幅1m程で、北西から南東に伸びる。北西側はSD 2に切られ、同区SD 4よりも新しい。



第68図 1-2区 SD 1・2・3・4・5実測図



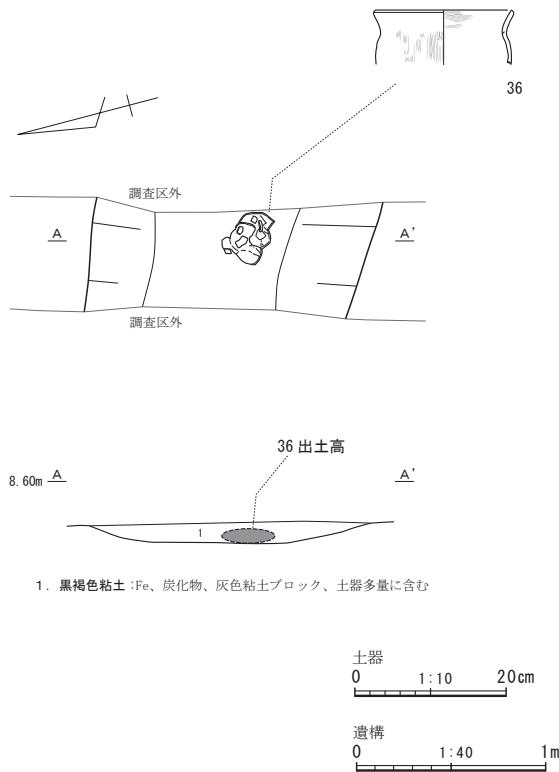
第69図 2-1区 SD10 実測図

覆土上層で見つかった土器は土師器の鉢か(第67図24)。口縁から底部まで残っており、復元口径は17.4cm、高さは7.5cm、底径は8.6cmである。内・外面ともに横位のミガキが全面に残っている。底部面もミガキで面調整している。口唇部は、所々、剥離している。遺構の年代は古墳時代以降であろう。

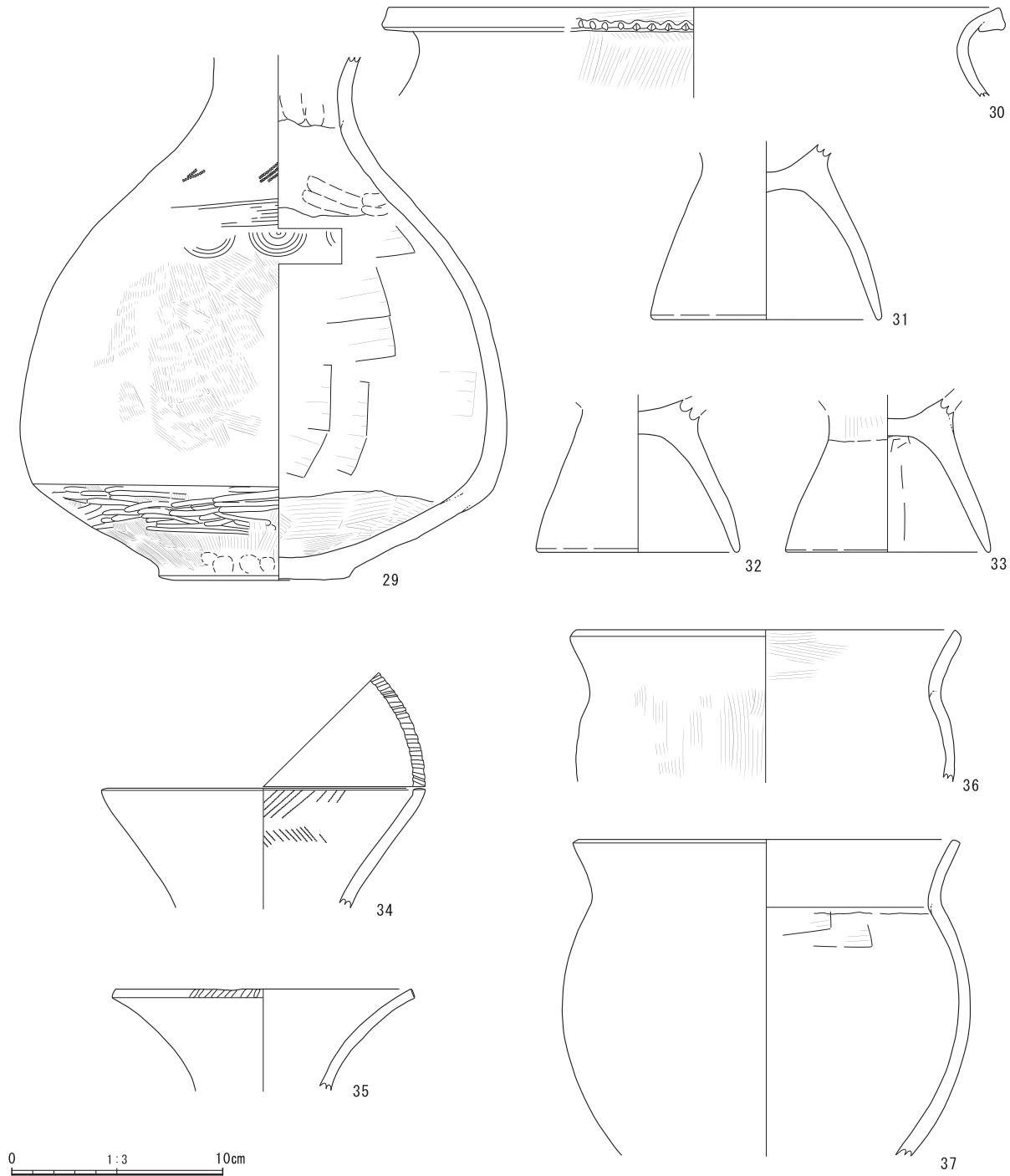
### 2-3区 SD 1 (第60図)

v 28グリッド内で検出した東西方向の溝状遺構である。調査区が狭小であることから、遺構の形状等、詳細は不明である。

覆土上層からは土器がまとまって出土した(第67図25～28)。25は弥生土器の壺である。復元口径は16.6cm、残存高は14.65cmで、全体の50%が残存している。外面の調整は風化のため不明瞭で、内面の輪積み痕と指頭圧痕だけが見える。頸部に僅かに縄文の施文が残っている。26は弥生土器の甕である。溝の覆土中より出土した。復元口径は18.0cm、残存高は



第70図 2-2区 SD15 実測図



第71図 1-1区SD5、2-1区SD10、2-2区SD14・15出土遺物実測図

7.7 cm。口縁部には工具によるキザミがある。器面の調整は内外面ともに撫でている。27は小型の甕である。口縁から体部まで残っている。復元口径は12.1 cm、残存高は6.3 cmである。口縁部には刻みがある。器面の調整は撫でて仕上げている。28は台付甕の脚部か。調整痕は不明瞭だが、仕上げは撫でている。内面には輪積み痕と指頭圧痕がある。底径は11.6 cm、残存高は5.5 cmである。いずれも覆土上層で出土しており、土器の表面も風化が著しいことから、北西側にある丘陵からの二次的な堆積と考えられる。

1-1区北 SD5 (第53図、図版23)

w 30 グリッドで検出した遺構である。北西から南東に向かう流れであるが、形状は不定形で、溝状遺構と言うよりは自然流路の可能性がある。長さは 3.8 m、最大幅は 3.0 m 程ある。上層遺構で検出した井戸状遺構の SF 1 や柱穴 SP 7 は後世に掘り込まれたものである。

覆土からは弥生土器が出土した（第 71 図 29・30）。29 は壺で、口縁部は欠損しているものの、各部 60～80% が残存している。胴部径は 23.1 cm、底部径は 9.1 cm、残存高は 24.8 cm である。肩部には縄文、櫛描横線文、櫛描円弧文の順に施文されている。胴部から底部外面には煤が付着している。調整痕は、外面がハケ調整のちへラミガキ、内面は底がハケ調整、胴部は板ナデ、頸部は指ナデ、底部は撫でている。30 は折り返し口縁の甕である。口縁部はハケ調整後にキザミを入れている。復元口径は 29.6 cm、残存高は 4.2 cm である。外面はハケ調整され、内面はナデより仕上げている。覆土より出土した他の土器は、弥生土器が主体である。

#### 1-1 区北 SD 6 (第 54 図)

w 31 グリッドで検出した長さ 3 m 程の直線に近い溝状遺構である。南端は SD 7 の北側上部を横切る。覆土からは弥生土器が少量出土している。

#### 1-1 区北 SD 7 (第 54 図、図版 23)

SD 7 は w 31 グリッドの北西の西壁から調査区内を湾曲して南西に向かう。SD 6 や小穴が切り合う。調査区が狭小のため、全容や遺構の性格は不明である。溝の覆土からは弥生土器の小片が出土している。

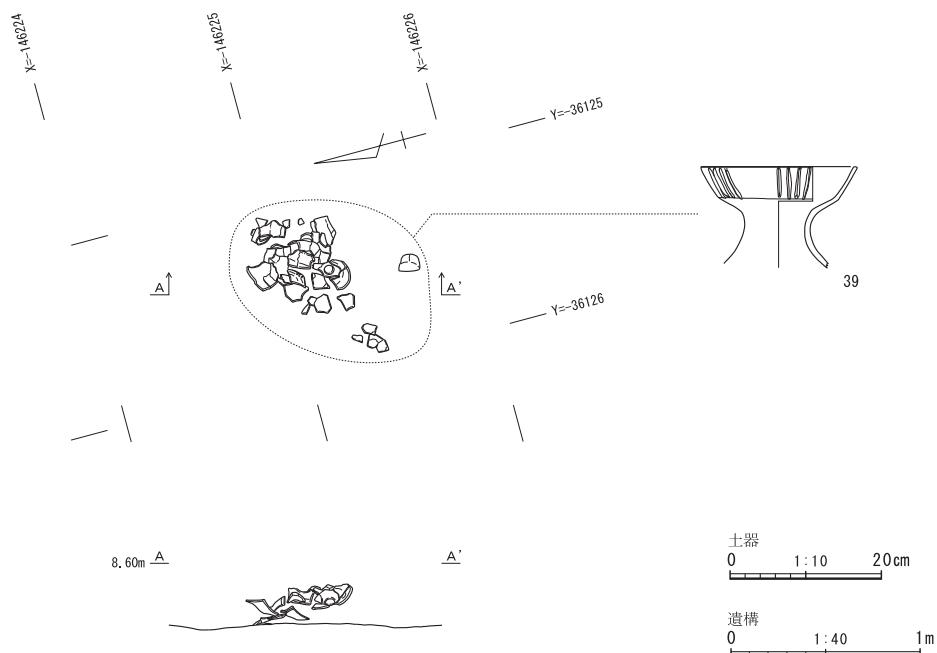
#### 2-1 区 SD10 (第 69 図、図版 33)

t 34・35 グリッドにまたがる位置で、調査区のほぼ中央で検出した溝である。総延長は 5.8 m、幅は 0.5 m、ほぼ直線的に北東から南西まで延びる。小穴以外では切り合う遺構は他にない。

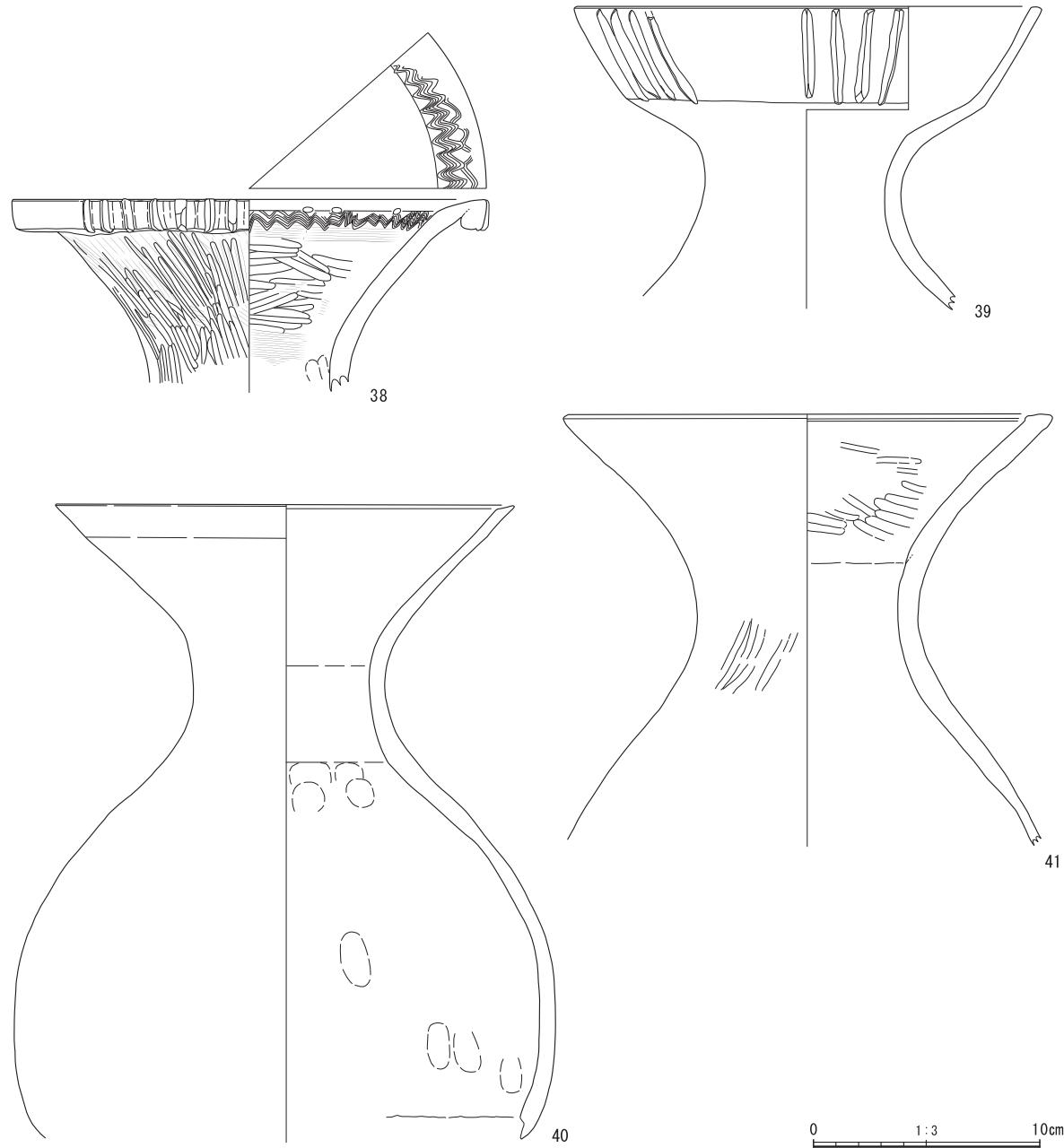
溝の中央付近からは弥生時代の台付甕の脚部が 3 点出土した（第 71 図 31～33）。31 は表面剥離しているため調整が見えない。底径は 10.7 cm である。32 も全体に摩滅している。底径は 9.7 cm をはかる。33 は脚部内面に木口痕やナデによる整形痕がある。底径は 9.75 cm である。

#### 2-1 区 SD11 (第 56 図、図版 33)

SD10 の西側で検出した東西方向の溝である。西端は調査区外に続く。検出した長さは 2.6 m、幅は



第 72 図 1-1 区 SX 2 実測図



第73図 1-1区 SX 1・2出土遺物実測図

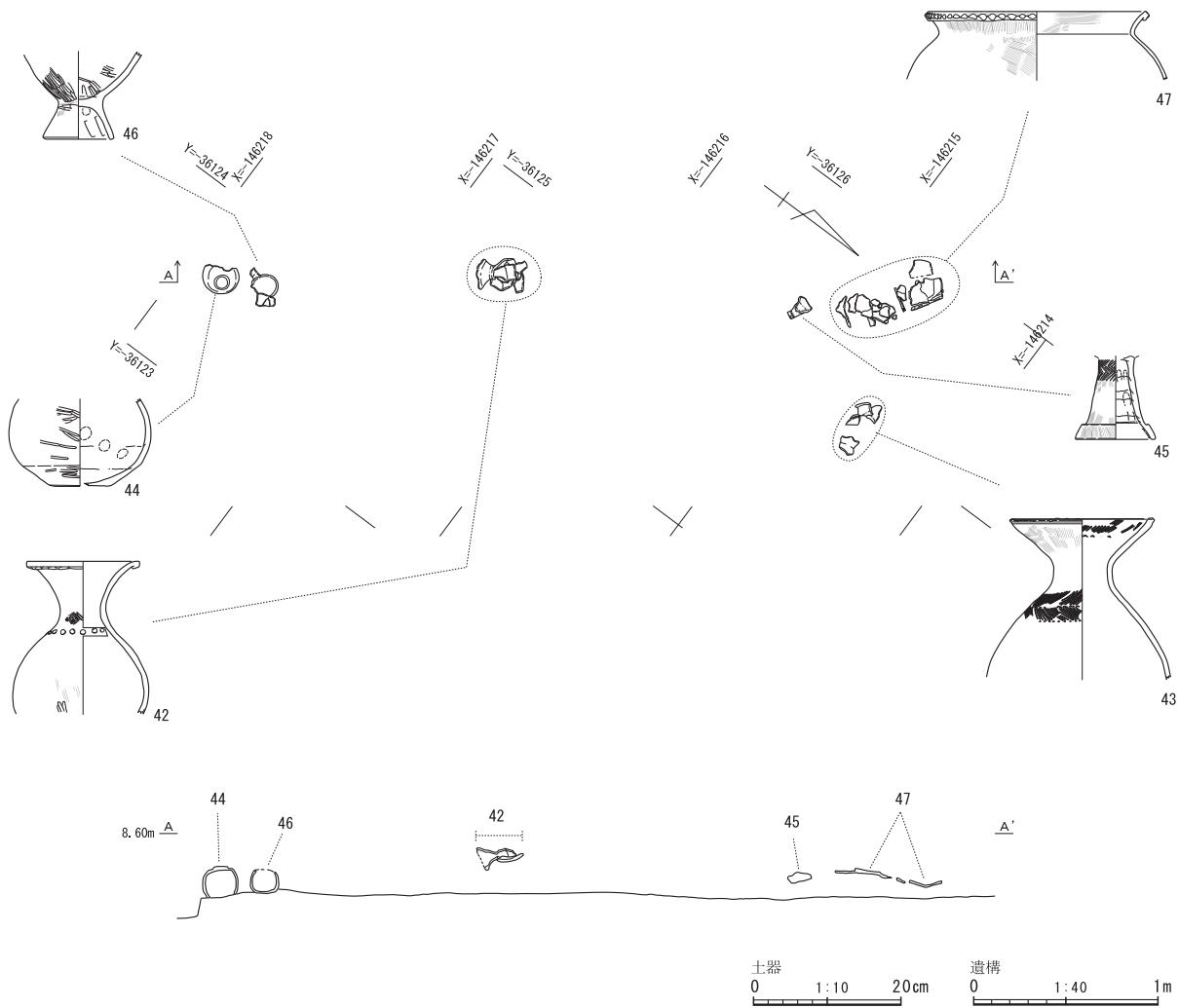
0.4 mである。周囲には小穴が複数あるが、建物跡のように並ぶ穴はない。ただ、小穴とは切り合わないことから、区画する溝としての性格を持つ可能性も考えられる。覆土からは弥生土器の小片が出土した。

#### 2-1区 SD12 (第56図)

t 35 グリッドの東壁寄りで検出した溝である。調査区内で確認できたのは 1.5 m 程で、東側は調査区外に延びる。周辺の溝と比較すると、SD11 とは平行、SD10 や SX13 とは 90 度異なる方向である。覆土からは弥生土器の小片が出土した。

#### 2-1区 SD13 (第56図)

調査区南半部の q 37 と r 37 グリッドにまたがる位置で検出した溝である。北西から南東に 3.8 m 程延びるが、端部は調査区外へと続いている。周辺には他に西端で溝状遺構が出ているのみで、他に遺



第74図 1-1区 SX 3実測図

構は確認されていない。覆土からは弥生土器の小片が出土した。

## 2-2区 SD14 (第59図)

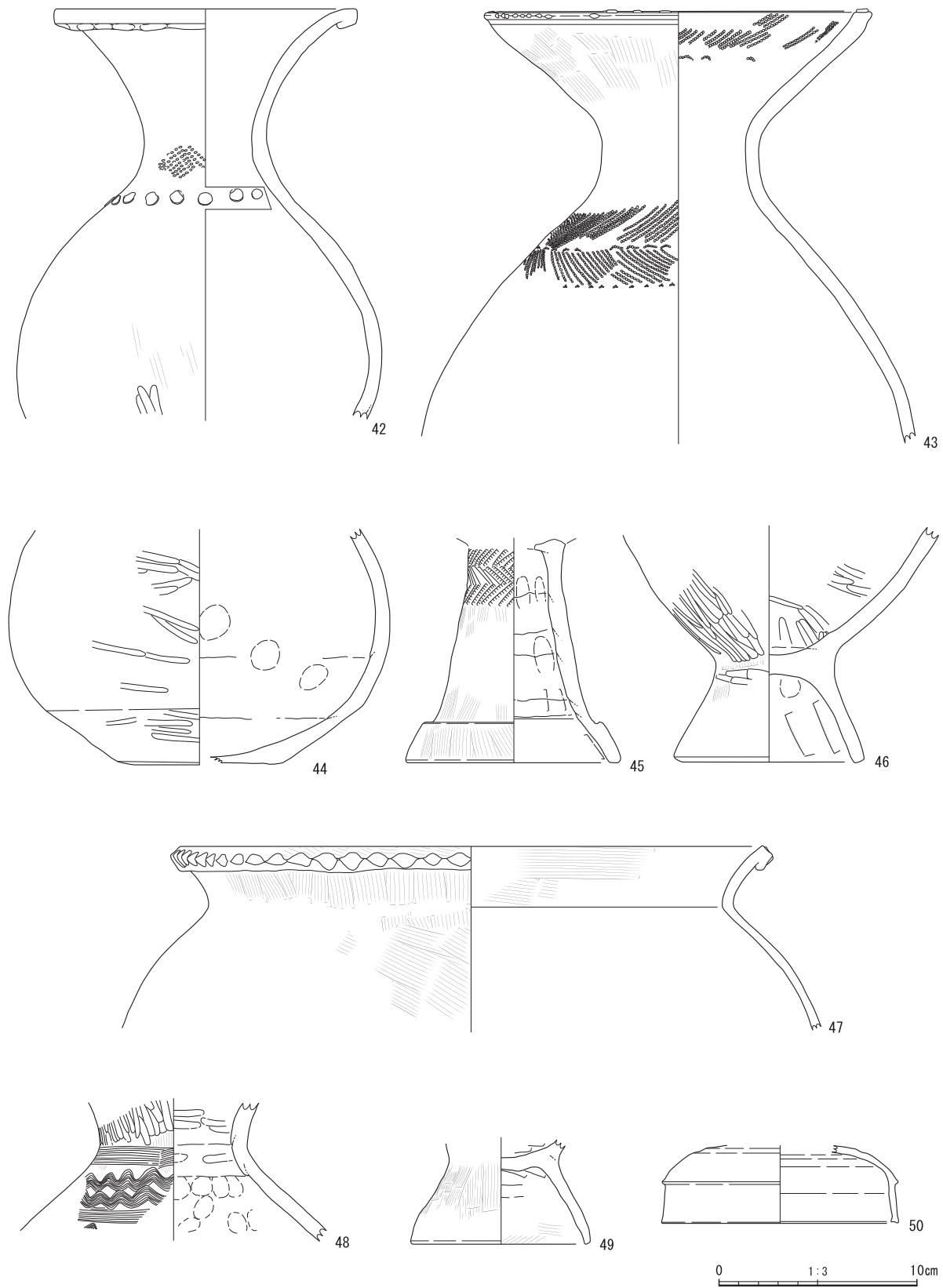
u 31 グリッド北側で検出した東西方向の溝である。調査区が狭小のため、0.8 mの長さと、幅1.0 m程しか確認されていない。ただし覆土内からは弥生土器片が多く出土した。

第71図34・35は弥生土器の壺である。34は単純口縁の壺口縁部で、復元直径が15.4 cmを測る。口唇部には櫛刺突が連続し、内面には羽状だったと思われる縄文がある。外面は摩滅のため調整痕が不明である。35も壺の口縁部で、復元直径は14.0 cmである。口唇部には櫛刺突文が並んでいる。全面剥離し摩滅している。ほかにも同遺構からは弥生時代の土器の小片が多数出土した。

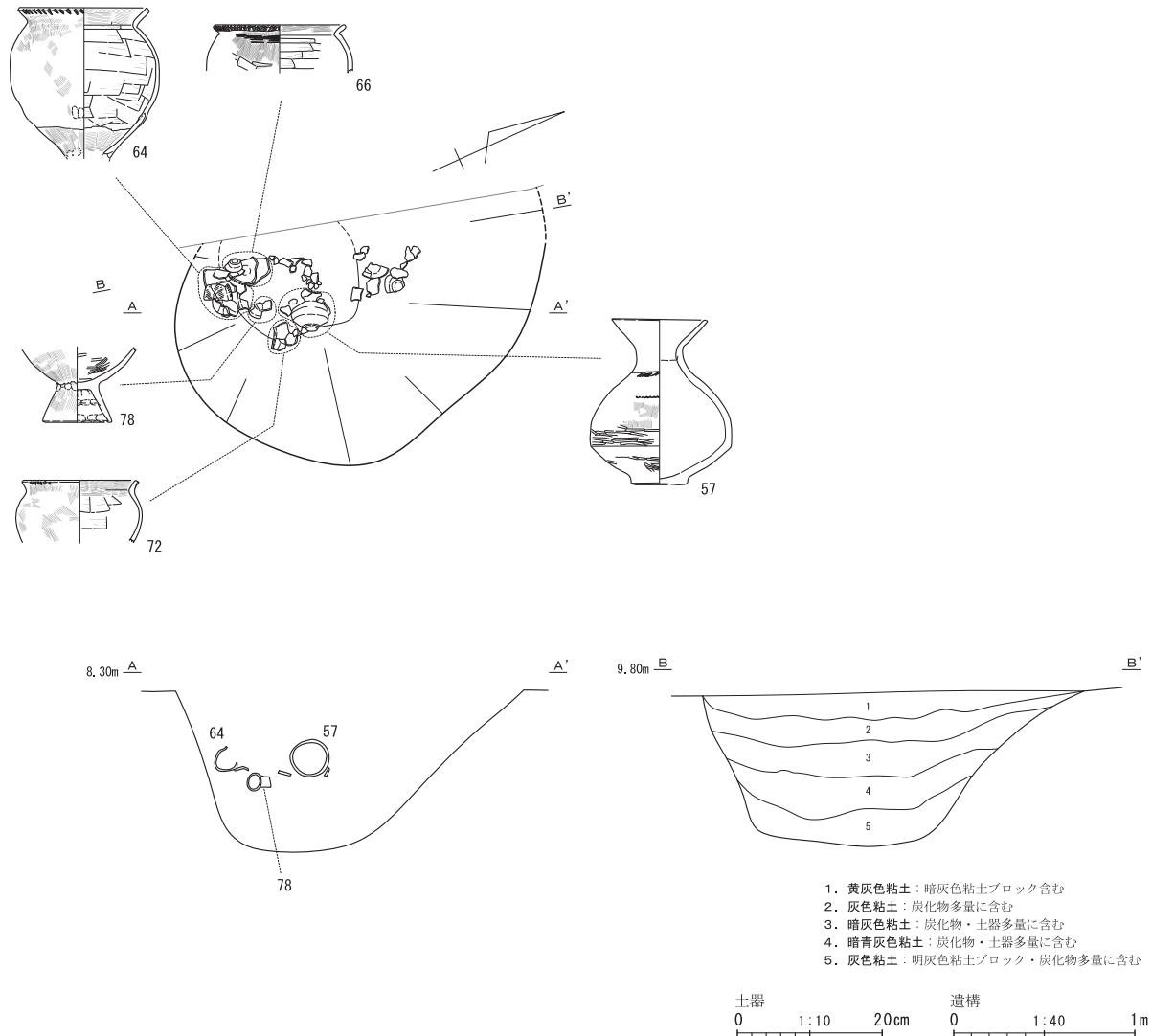
## 2-2区 SD15 (第70図)

u 31 グリッド北側で検出した東西方向の溝で、北側のSD14と平行する。SD14と同様に長さは0.8 mで、幅は1.5 mほどある。

覆土内からは弥生土器が多数出土した。図化したのは第71図36・37である。36は弥生土器の甕で口縁部から胴部まであり、復元直径が18.6 cm、残存高は7.2 cmである。外面は縦方向のハケ調整をして、口縁部は撫でて仕上げている。内面の口縁部は横方向のハケで調整し、胴内面は撫でている。37も弥生土器の甕で、復元直径は18.4 cm、残存高は15.0 cmである。全体に剥離しているため調整痕は不明



第75図 1-1区 SX 3・4・5・7出土遺物実測図



第76図 1-1区 SX 8 実測図

瞭だが、内面には板状工具によるナデが見える。

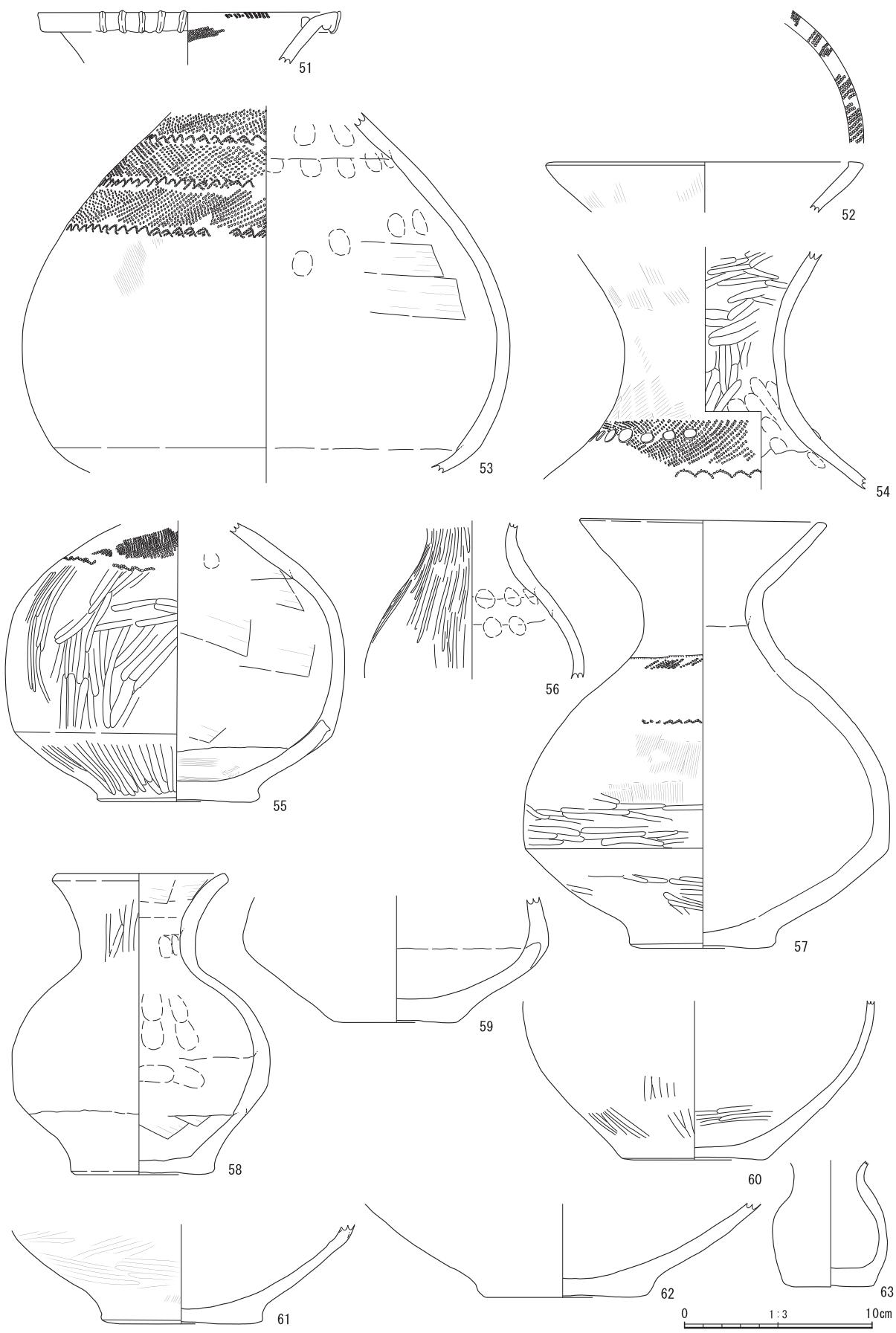
#### 1-1区北 SX 2 (上層遺構) (第73図、図版21)

w 31 グリッドの東壁付近で検出した土器集中箇所である。特に掘り込まれた遺構はなく、径1mの範囲内に、第73図39～41がまとまって出土した。

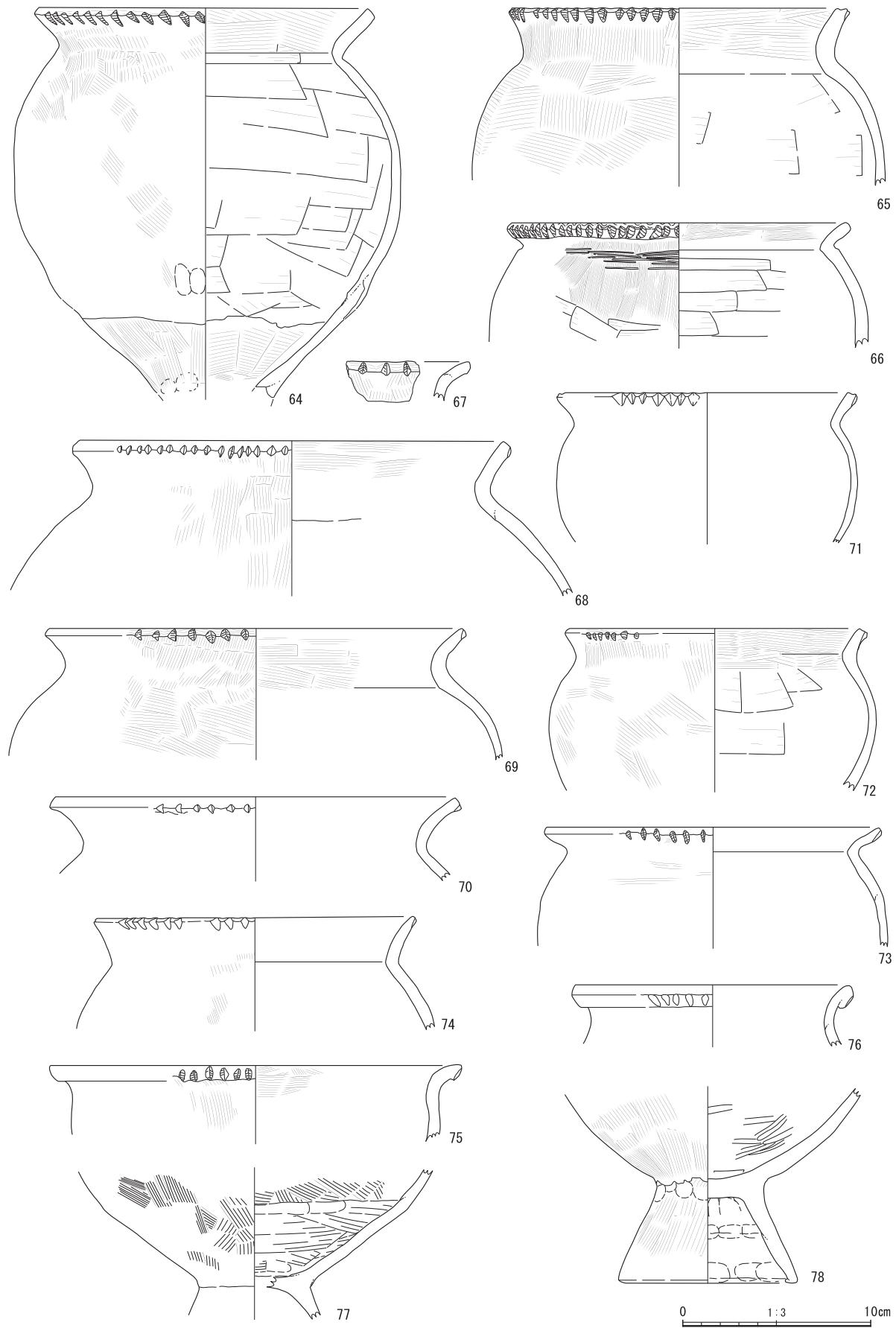
土器は弥生時代後期の壺が3個体以上、確認された。39は棒状浮文を持つ口縁の壺で、口縁～頸部まである。口径は20.6cm、残存高は13.35cmである。棒状浮文は4本単位が4～5箇所あったと思われる。40・41は単純口縁の壺である。40は口縁～胴部まで残存する。口唇部はややへこんでいる。外面は摩滅しているため調整痕は不明瞭だが、内面には輪積み痕と指頭圧痕が僅かに残る。41は口径が21.6cm、残存高は19.1cmで、口縁～頸部まで残っている。口唇部面は浅い窪みがある。外面と口縁内面にはヘラによるミガキ痕がある。その他に土器片が多量に出土しているが、すべて弥生土器である。

#### 1-1区北 SX 3 (上層遺構) (第74図)

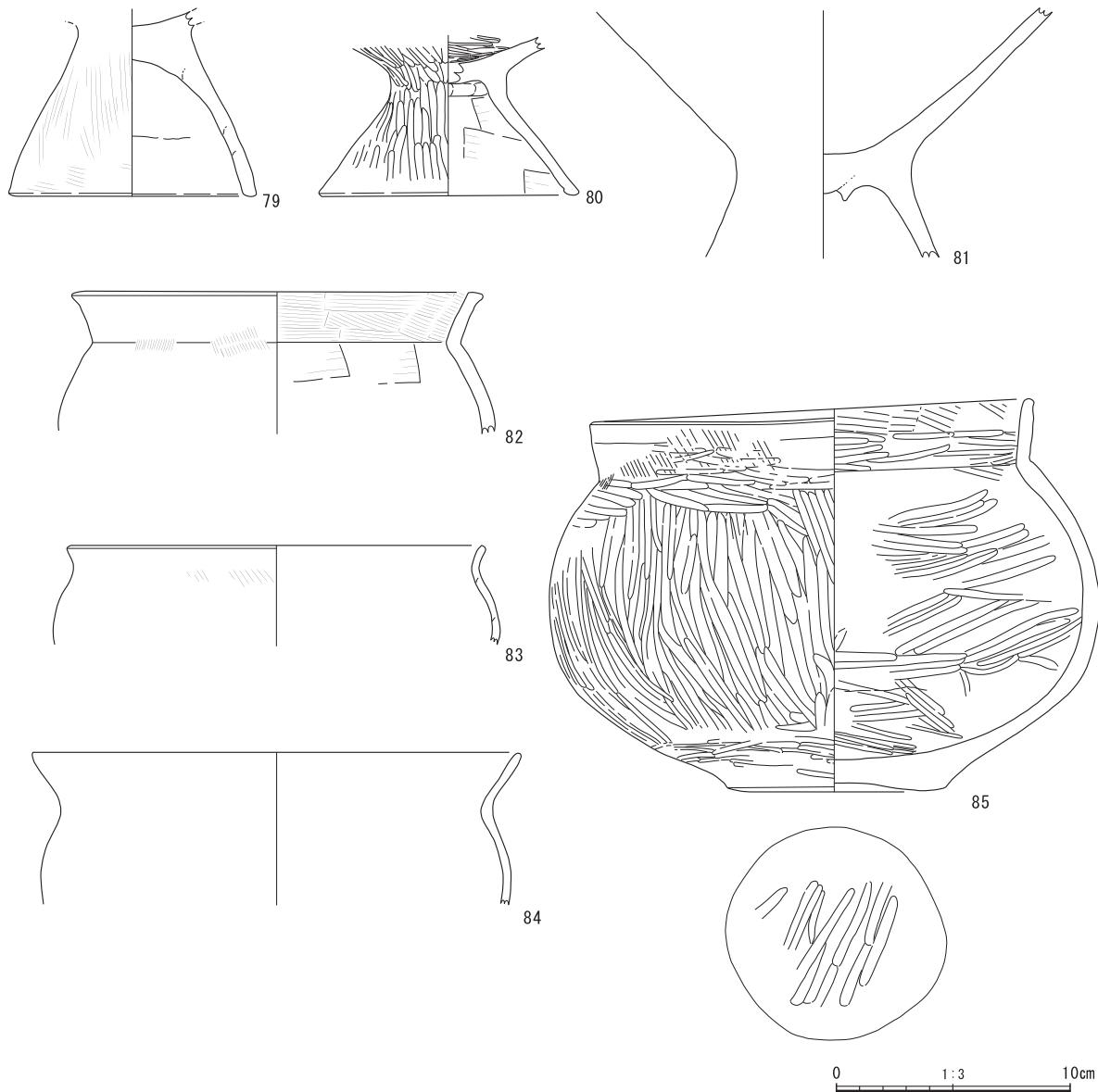
w 30 グリッドで検出した土器集中箇所である。北西から南東方向へ直線的に5m程の範囲で土器が出土した。この下層では溝状遺構SD 5が検出されていることから、SD 5に伴う土器であった可能性も考えられる。土器は各個体別に、まとまった状態で出土している。



第77図 1-1区SX 8出土遺物実測図1



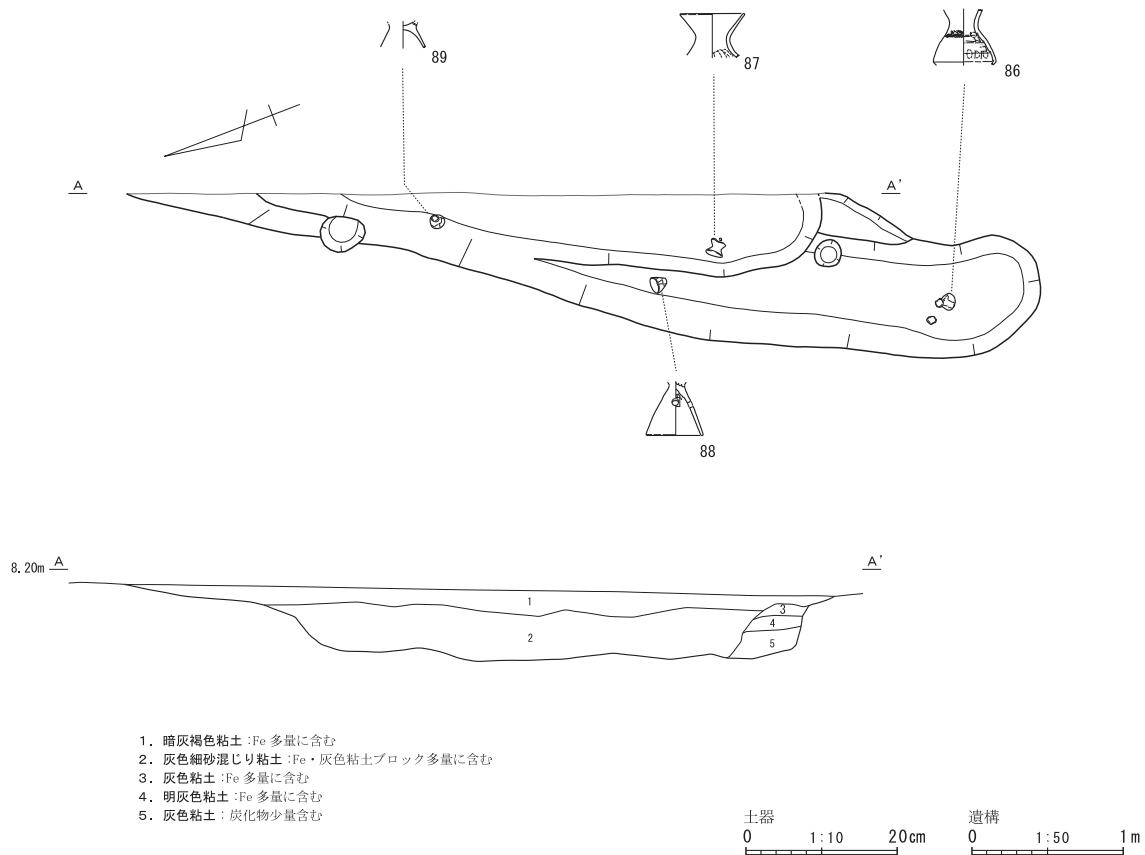
第78図 1-1区SX 8出土遺物実測図2



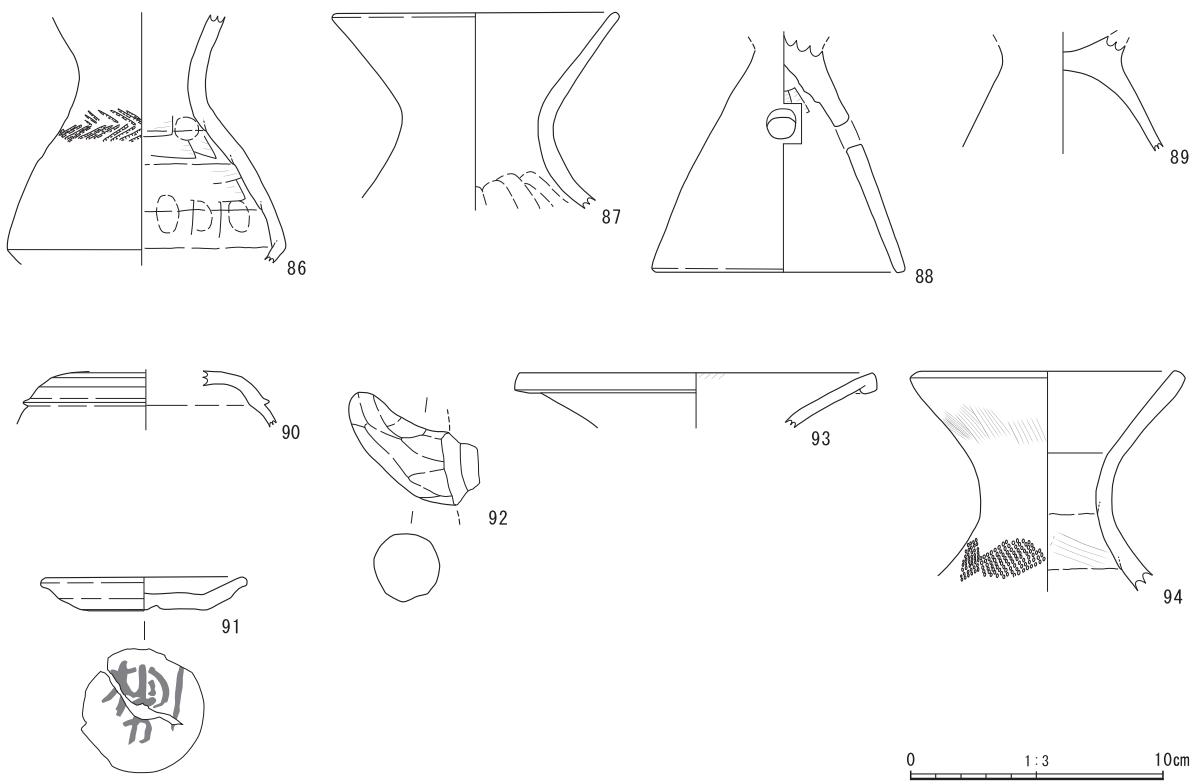
第79図 1-1区SX 8出土遺物実測図3

第75図42～47は出土した土器で、壺、甕、高坏の三器種がある。42は折り返し口縁の壺で、口縁部から胴部まで残っている。頸部に縄文、その下の肩部に円形浮文が施されている。全体に磨耗して調整痕が不明瞭であるが、一部にハケ調整ののち、ヘラミガキを施した痕が見える。円形浮文は全周囲に巡っている。復元口径は15.4cm、残存高は20.7cmである。43も口縁から胴部の一部まで残っている。表面の調整痕は不明瞭だが、外面にはハケ目が見える。口唇部には単位3つの円形浮文を4箇所に配置している。さらにその下にはキザミを施し、キザミの下には沈線がある。施文は壺の口縁内側と外面の肩部に縄文がある。口縁内面には結節縄文を施している。外面肩部には羽状に結節縄文が巡っている。口縁部は17.6cm、高さは21.8cmほど残っている。44は壺の胴部から底部までである。外面には仕上げのヘラミガキ痕がある。内面は指頭圧痕と指ナデ痕が見える。胴部径は19.3cm、底径は8.4cm、残存高は11.9cmほどある。

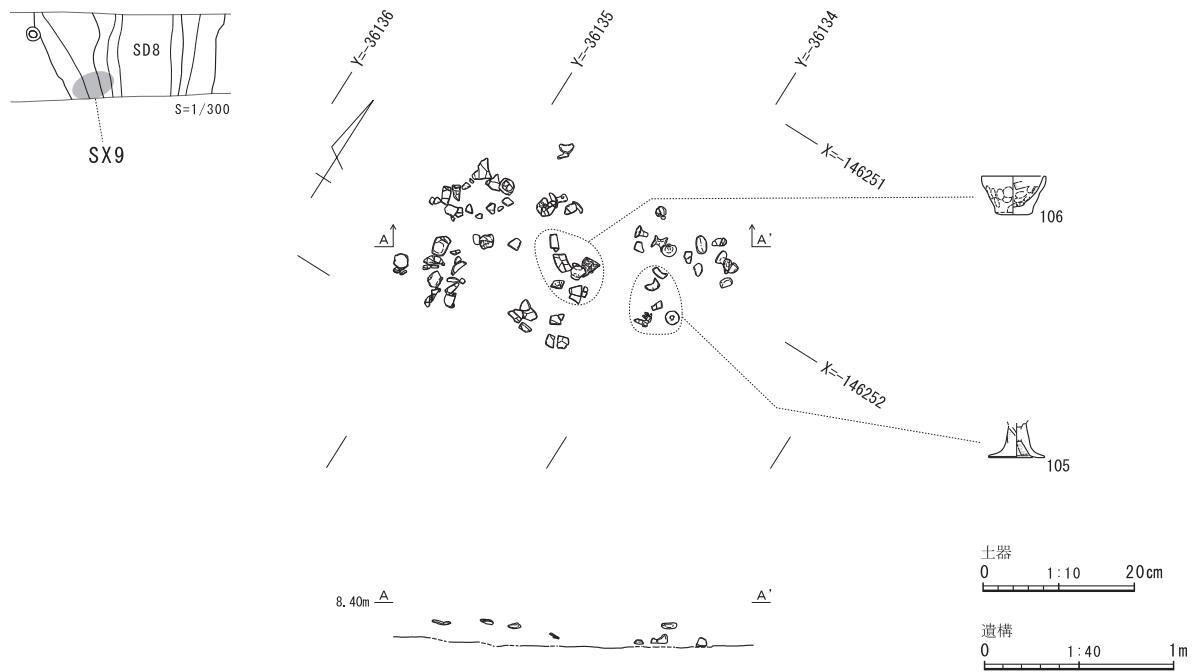
45は高坏の脚部片である。脚部裾は工具で強く撫でて段を作り出した形状である。外面の脚部はハケ調整された後に、上部に櫛刺突が羽状に3段、施されている。脚部中央のハケ目は下から上に運び、



第80図 2-1区 SX13 実測図



第81図 2-1区 SX13・15、3区 SX19、1-2区 SP 9出土遺物実測図



第82図 1-1区SX 9実測図

裾部は上から下へハケ調整している。脚部内面は輪積み部分を指でナデ押さえし、下方は板状工具で撫でている。裾径は10.9cm、残存高は11.1cmである。

46は台付甕か。体部の下方から台部までの破片である。表面は磨耗しているものの、内外面にヘラ状工具によるミガキがある。外面には縦位のミガキ、内面には縦から横位のミガキがある。脚部は外面にハケ目、内面には板状工具で調整した木口痕がある。底径は19.6cm、残存高は11.95cmである。47は甕の口縁部から肩部である。表面調整は磨耗しているため、不明瞭である。外面はハケ調整、内面は口縁部に横位のハケ目、体部はおそらく撫でているであろう。折り返し口縁で、口唇部にはハケ調整後にキザミを施している。復元口径は30.5cm、残存高は9.3cmを測る。以上の構成から、SX 3は弥生時代後期の土器群としてのまとまりを持っていると言える。図化しなかった土器も弥生土器のみである。

#### 1-1区北 SX 4 (第53図、図版23)

w 29グリッド南半部の西壁沿いで検出した遺構である。壁沿いのため、遺構の全体形は不明であるが、長辺は約3m、短辺は1m程の規模がある。遺構内の一部は溝状に壅み、南端には小穴が切り合っている。

覆土内から出土した土器は第75図48である。48は弥生土器の壺の頸部から肩部の破片である。頸部の直径は7.4cm、残存高は7.0cmを測る。外面の文様は頸部の括れから、櫛描横線文、波状文2段、櫛描横線文、波状文の順に施文されている。器面調整は外面がハケ調整のちヘラミガキ、内面は頸部が横位のヘラミガキで、下位は指頭圧痕がある。その他の土器は大半が弥生土器で、ごくわずかに土師器片を含む。

#### 1-1区北 SX 5 (第54図)

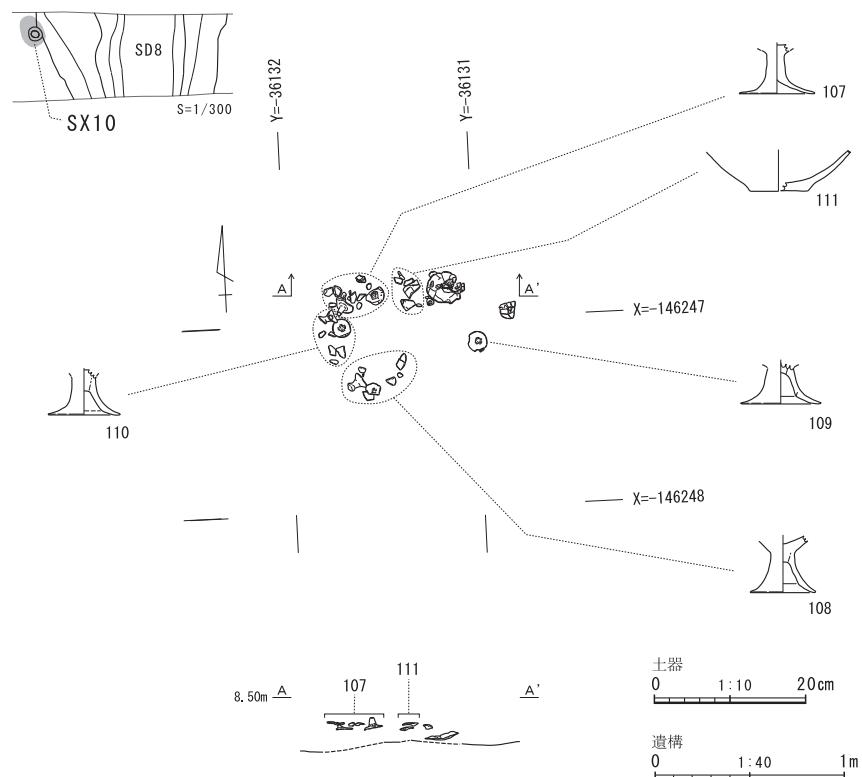
w 30グリッド北半部に位置する。溝に近い遺構で、長軸方向は1m程の長さがある。

第75図50は覆土内から出土した須恵器の壺蓋である。復元口径は12.0cm、残存高は3.9cmである。器面は回転によるナデで成形している。下端部から2cm上には、稜を作り出している。6世紀前半代の年代に属する。同区包含層でも同年代の須恵器が出土している(第138図)。その他の覆土内より出土した土器は土師器片を含んでいる。

### 1-1区北 SX7 (第54図)

w32グリッド北半部で検出した土坑状遺構である。長軸は1.8m、短軸は1.2mで、遺構の一部は東壁側の調査区外へ続いている。

遺構覆土からは弥生土器が複数点出土しており、第75図49の台付甕脚部を図化した。脚部底径は9.1cm、残存高は5.3cmである。甕内面にはわずかに煤が付着している。脚部外面は縦位のハケ調整のち裾部は撫でている。脚部内面は板ナデとハケ調整で成形している。

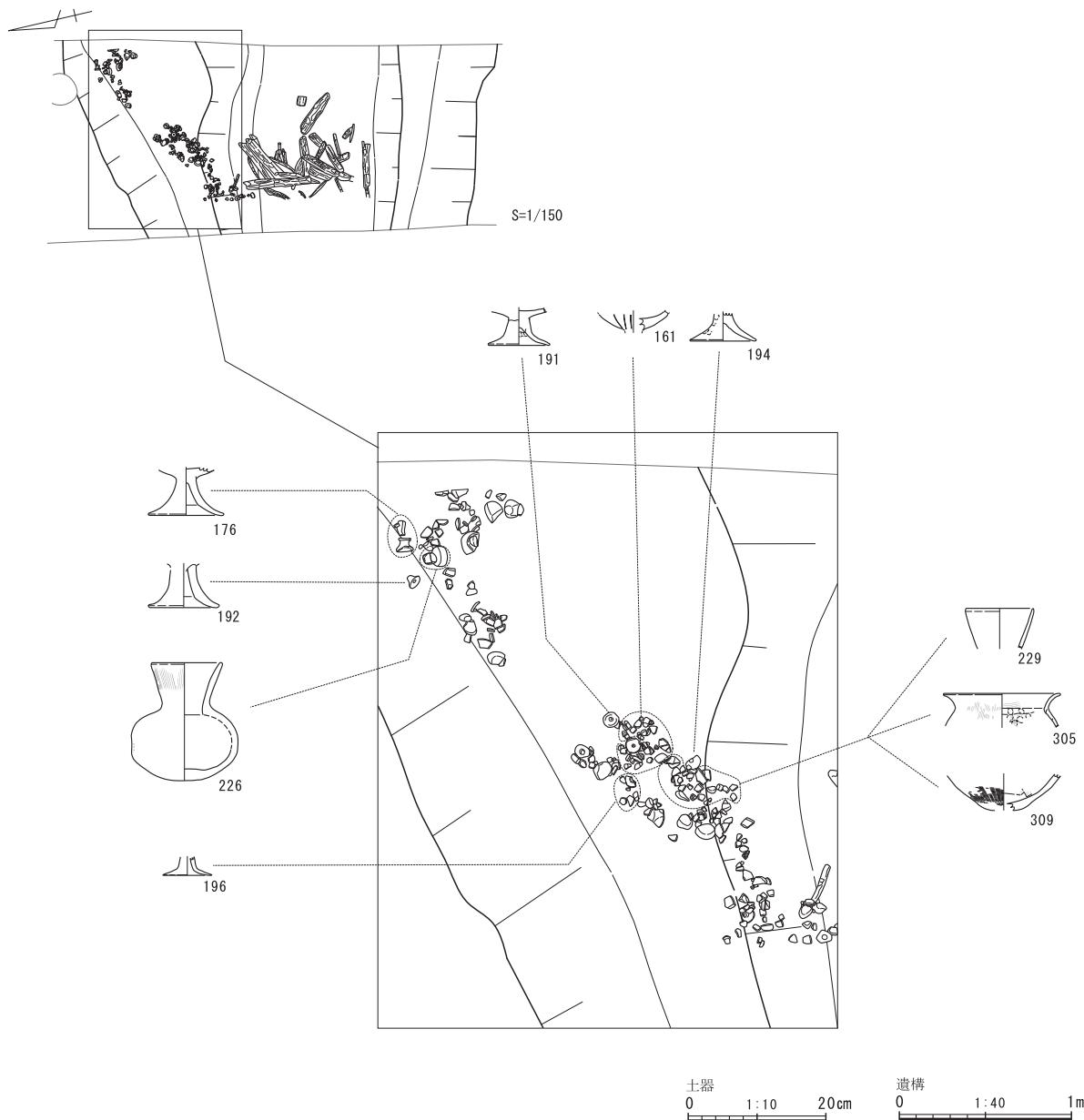


第83図 1-1区 SX10 実測図



1. 暗灰色粘土 : Fe、土器多量に含む
2. 黒褐色粘土 : 土器多量に含む
3. 灰色粘土 : 黒褐色粘土ブロック多量に含む
4. 暗青灰色粘土 : 土器多量に含む。灰色細砂混じる
5. 暗灰色細砂混じり粘土 : 上部にラミナ少量含む。有機物、木製品含む
6. 暗灰褐色細砂混じり粘土 : 下部にラミナ多量に含む。有機物、木製品多量に含む
7. 暗綠灰色細砂混じり粘土 : ラミナ多量に含む。径5mm緑灰色小礫、有機物多量に含む。礫と小礫が互層状となる
8. 暗灰色細砂混じり粘土 : 有機物多量に含む。下部に細砂と小礫層が互層状となる
9. 黑褐色粘土 : 下部にラミナ多量に含む。最下層に7層に類似する小礫含む。やや細砂混じる
10. 暗灰色粘土 : 黒褐色粘土ブロック多量に含む
11. 黑褐色粘土 : 灰色粘土ブロック含む

第84図 1-1・2-1区 SD8 実測図1



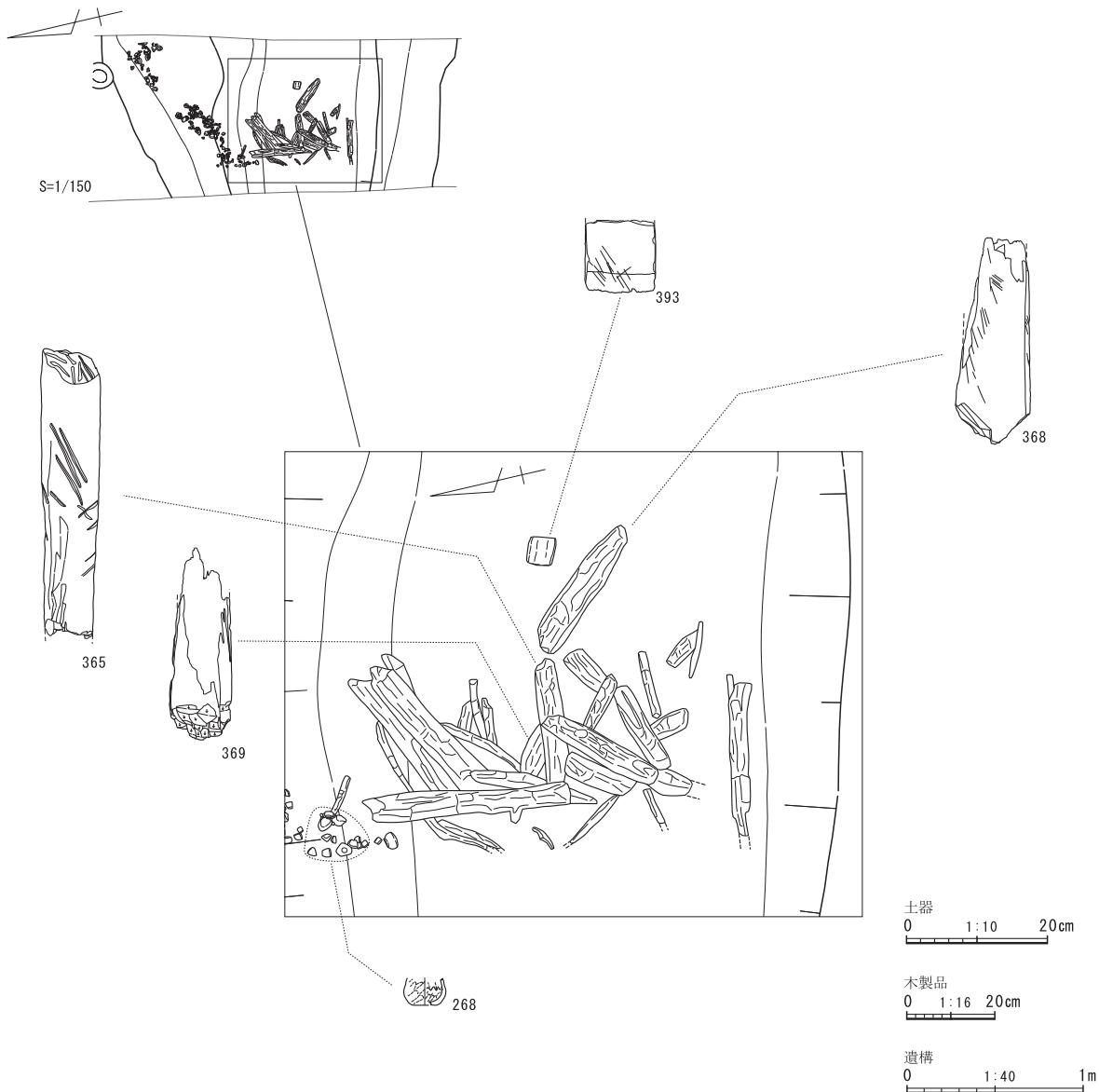
第85図 1-1・2-1区 SD 8実測図2

## 1-1区北 SX 8 (第76図、写真図版表紙、図版22)

v・w 32 グリッド北半部で検出した円形土坑である。正円形ではなく、やや歪むが、確認できた南北の最大径は2.1m、東西は1.2m、深さは0.8mであった。覆土は5層に分層され、そのうち3～4層で土器が多く出土した。

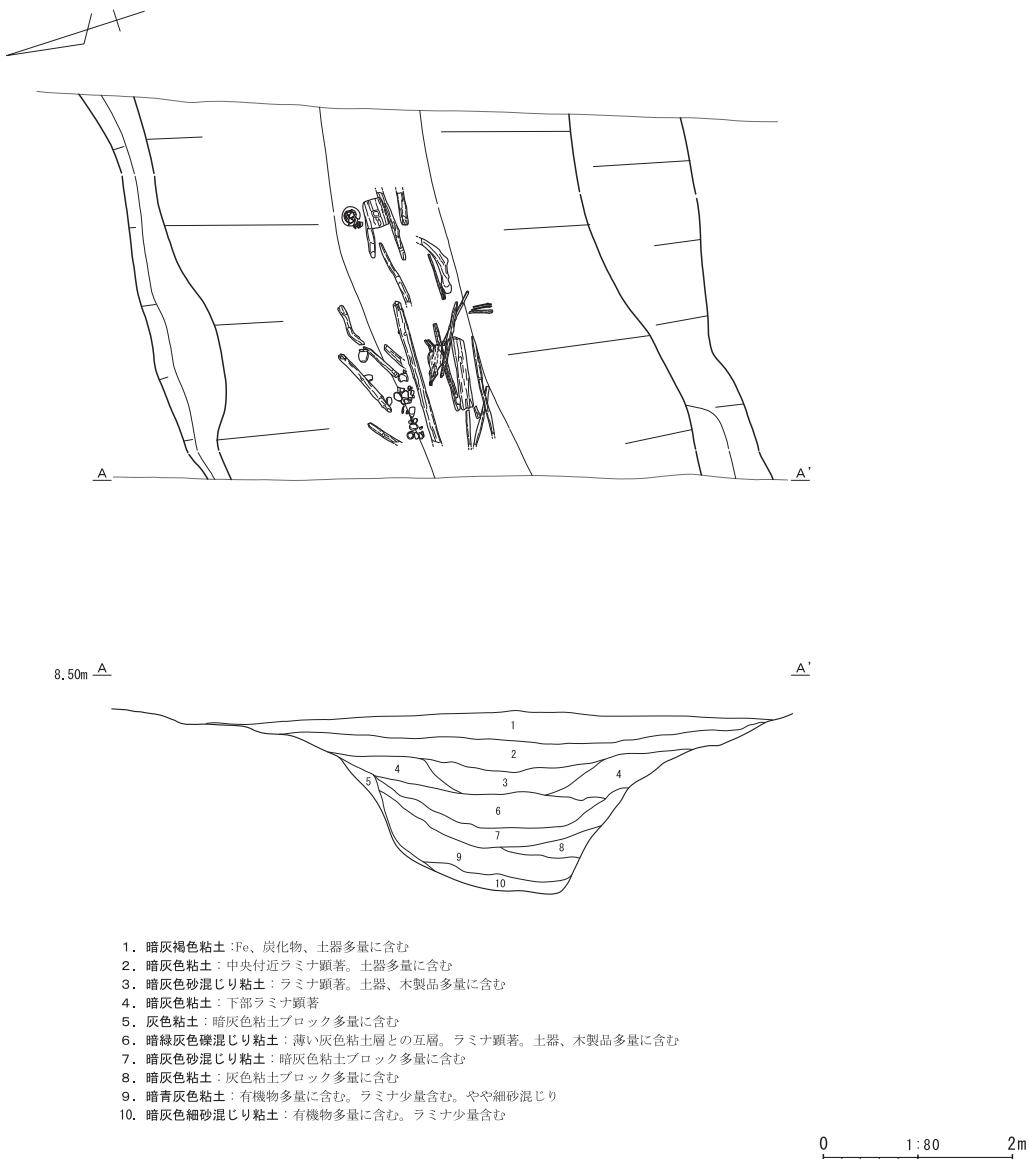
土器の器種は弥生時代後期の壺・甕のみで、高坏は含まない。当該期の一括資料（第77図51～第79図85）として、まとまりを持つ。

第77図51～63は壺である。51は折り返し口縁部片で復元した口径は16.0cmであった。口縁部には単位5本以上の棒状浮文が貼り付けられている。内面は縄文が羽状に施文された上に、円形浮文を貼り付けている。円形浮文の箇所数は不明である。52は単純口縁の破片で、口唇面に縄文がある。外面にはハケ、内面はナデの調整痕が見える。53は胴部分で、口縁部と底部は欠損している。肩から3段の結節縄文が施文されている。胴部径は最大26.0cm、残存高は19.2cmである。外面はハケ調整後ナデ、



第86図 1-1・2-1区 SD 8実測図3

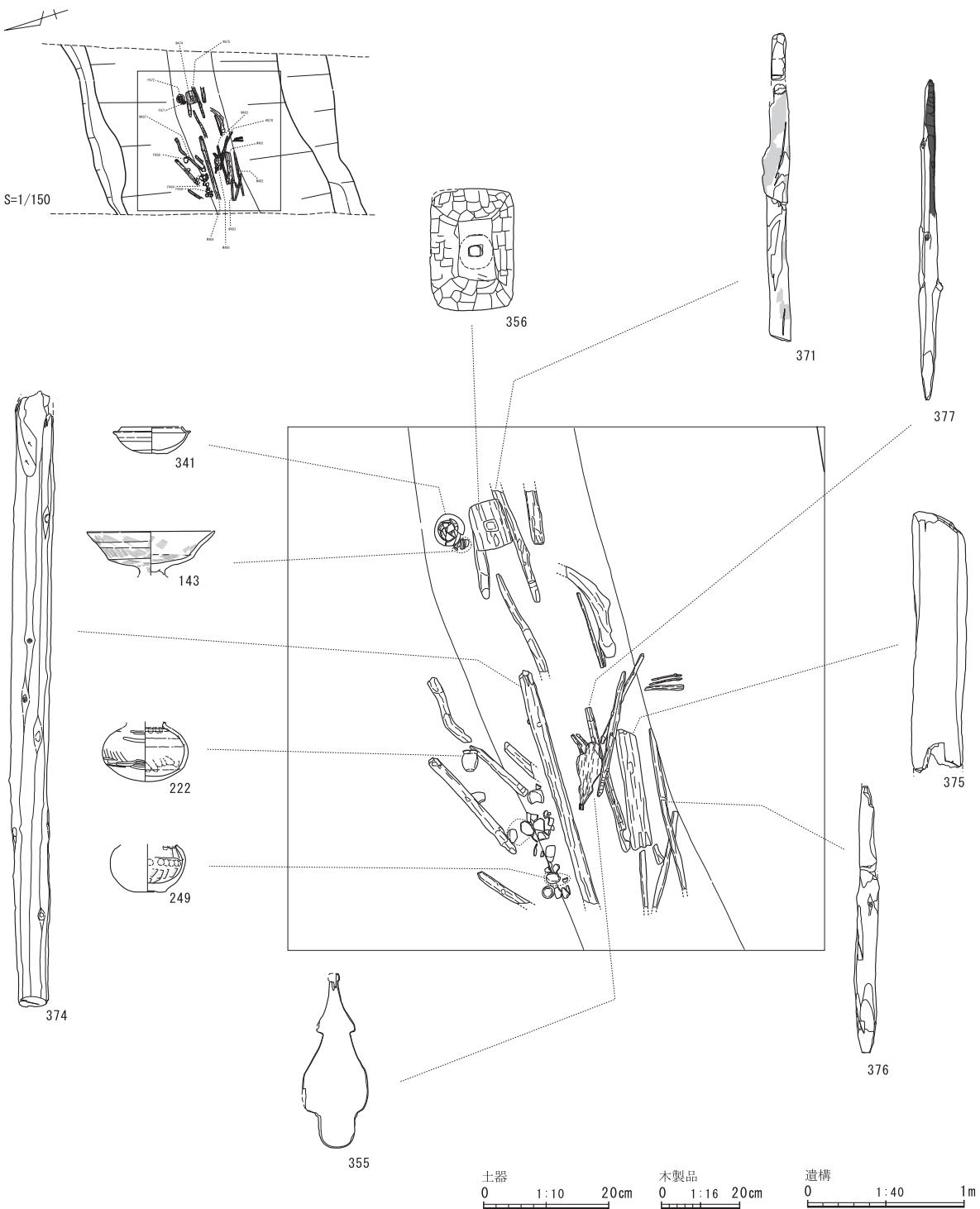
内面は指頭圧痕や板状工具で面を成形した痕跡がある。54は頸部径が7.9 cm、残存高は12.6 cmの破片である。頸部から肩にかけて、結節縄文の上に円形浮文が付けられている。円形浮文は7個単位で3箇所に配置されていた。外面はハケ調整、内面には下方には指ナデ、上方はミガキがある。55は肩部から底部までが残っている。胴部径は18.2 cm、底径は8.7 cm、残存高は14.9 cmの大きさがある。肩部には結節縄文が施文されている。外面はハケ調整後にヘラミガキ、底部はナデ、内面は底部にハケ調整、胴部は指押さえ後に板ナデにより整形されている。56は小型壺の頸部から胴部片で、頸部の径は4.8 cm、最大径は11.8 cmである。外面は縦位のヘラミガキで面調整され、内面は輪積みを指頭で押さえている。外面には黒斑がある。57は単純口縁の壺で、9割残存している。口径は13.2 cm、体部径は20.1 cm、底部径は7.8 cm、全体の高さは22.9 cmである。土器の表面は磨耗し、不鮮明だが、肩部から胴部にかけて櫛刺突文と結節縄文が施文されている。櫛刺突文の工具幅は3.2 cmである。外面の調整痕は体部下方にヘラミガキ、上部はハケ調整、内面は口縁部がナデにより成形されている。底部は凹面で木葉痕がある。58はほぼ完形に近い小型品である。口径は9.4 cm、体部径は13.8 cm、底径7.7 cm、高さ16.1



第87図 1-1・2-1区 SD 8実測図4

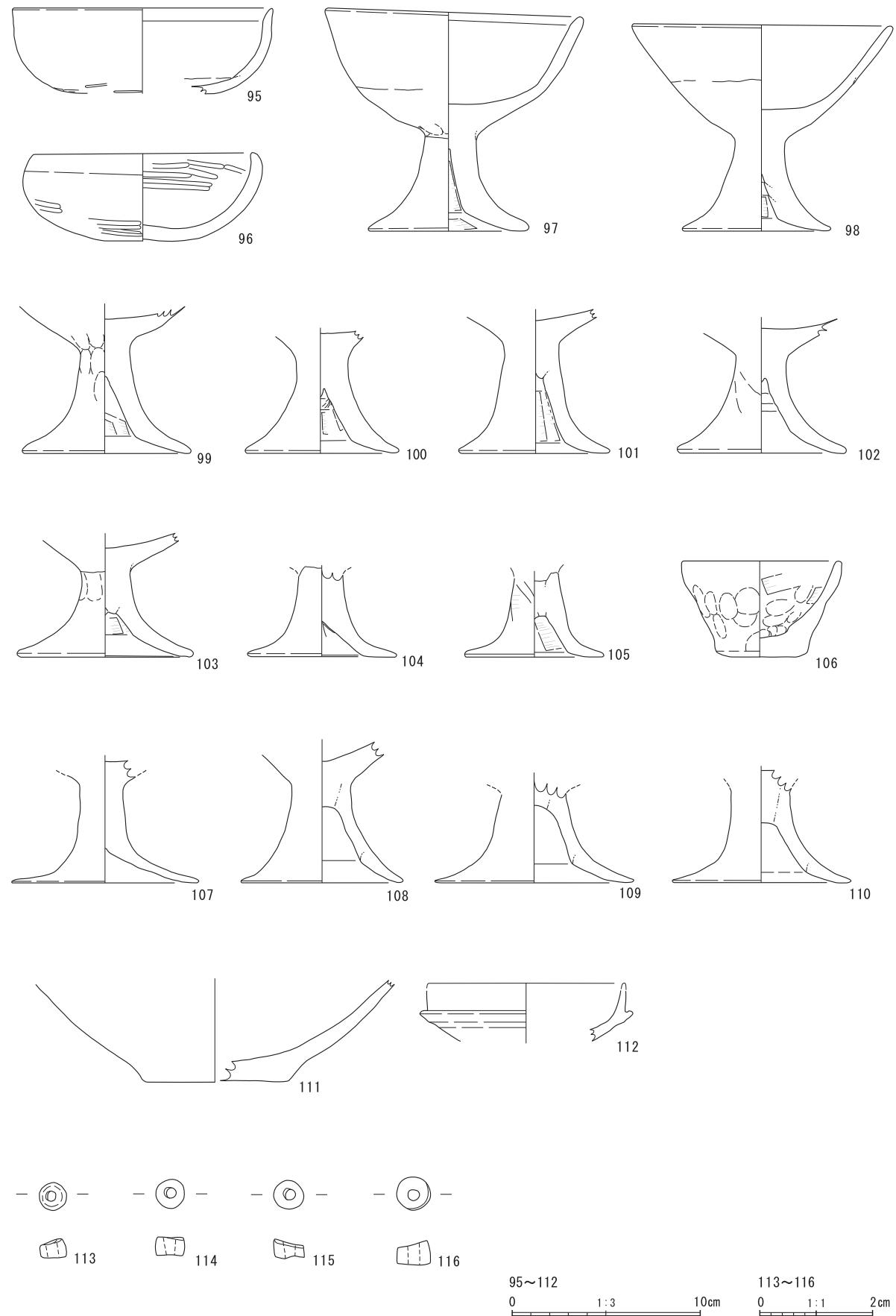
cmを測る。全体に磨耗しているが、外面の一部にヘラミガキ、内面には板ナデや指ナデの痕跡がある。59～62は壺の体部下方から底部までの破片である。59は全面にナデによる整形痕がある。底径は6.6 cmである。60の底径は7.8 cmで中央が浅く窪んでいる。内・外面にはヘラミガキ痕がわずかに残っている。61は底径8.5 cm、外面はヘラミガキ痕、内面はナデにより整形している。62の底径は8.7 cmで底面には木葉痕がある。内・外面ともにナデにより仕上げている。63は小型品で、実用ではなくミニチュア模造品であろう。口縁部は欠損している。底径は4.8 cm、残存高は6.7 cmで、全体をナデにより仕上げている。

第78図64～第79図84は甕である。いずれも台付甕と思われる。口縁部にキザミのある甕は64～76にまとめた。甕の外面はハケ調整による整形で、口縁部のキザミもハケ状工具を使ってキザミ目を入れているものと考えられる。一方、内面は胴部を板状工具または指等によるナデによって輪積み痕を消し、口縁部には横位のハケ調整痕を残している。胴部内面の調整痕を板状工具または指ナデにより消している製作方法は、この地域の特徴とも言える。口縁部の断面形状は、くの字状に屈曲するものが多



第88図 1-1・2-1区 SD 8実測図5

いが、75のように緩やかに湾曲するものや、76のように折り返し口縁となっている場合もある。64は外面の胴部と内面の底部に煤が付着している。66は外面の肩部に横位のヘラミガキ痕がある。67は外面の一部に煤が付着している。77～81は台付甕の底部から脚部である。78・80は内面を棒状工具等で強く撫でて、ヘラミガキ状に面調整をしている。79は内面に煤が付着している。82～84は口縁にキザミを持たない甕の口縁部である。整形の特徴は前述の台付甕等と同様である。84は内面に煤が付着している。85は平底の甕である。全体に歪みがあるものの、口径 19.0 cm、底径 9.4 cm、高さは 16.8



第89図 1-1・2-1区 SX 9・10 出土遺物実測図

cmである。内・外面、底面ともにハケ調整後にヘラミガキで器面の整形をしている。外面に黒斑がある。

遺構の性格は素掘りの井戸等の可能性が考えられるが、埋没していく過程で一時的に廃棄土坑として利用された可能性がある。

#### 1－1区北 SX9（第54図）

w 32 グリッド内、SX 8 の南東側で検出した遺構である。v 34 グリッドで検出した1－1区南 SX 9 (SD 8 最上層) と遺構番号が重複している。調査区内では2.1 mの長さで、幅0.6 mを確認したが、南東側は調査区外へと続いている。

#### 1－1区南 SX11（第54図）

v 33 グリッド内、SD 8 のすぐ北側に位置する。長さは1 m程で、北東側は調査区外へ続く。覆土からは弥生土器の壺片が1点出土した。

#### 1－1区南 SX12（第54図）

w 32 グリッド南端、東壁側で検出した。長軸は2 m、短軸は1 m程で、北東側は調査区外へ続いている。覆土より出土した土器は弥生時代のものである。破片は小片多数で図化していない。

#### 2－1区北 SX13（第80図）

t 35 グリッド内の東壁沿いで検出した遺構である。北東側は調査区外へ続くため、全体形状は不明であるが、長軸は6.6 m、短軸方向は1.2 mの規模がある。

覆土より出土した土器は第81図86～89である。86は小型壺で、口縁と底部が欠損している。頸部径は5.0 cm、残存高は9.9 cmである。肩部に櫛刺突羽状文がある。87は単純口縁の壺口縁部で、口径11.4 cm、全体に摩滅しているが、内面に指ナデ痕が残っていた。88は高壺で、壺部が欠損した脚部片である。脚部には直径1 cm程の円形透かしが3箇所にある。脚部径は10.05 cm、高さは9.4 cmである。89は台付壺の脚部片で上下は欠損している。全面的に摩滅し調整痕は見えない。

#### 2－1区北 SX14（第56図）

t 35 グリッド内の西壁沿いで検出した遺構である。調査区内で確認できたのは半円形で、南北方向の長軸は2.6 m、短軸は1.2 mを測る。

#### 2－1区北 SX15（第57図）

r～t36・37 グリッドの広範囲にまたがる。集落遺構面から0.3～0.4 m下がった低湿地帯である。覆土内からは、土器が出土した。このうち第81図90・91を図化した。90は須恵器の壺蓋体部片である。蓋上部は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより整形されている。91は山茶碗の小皿で、湖西3－2期に属する。口径は8.2 cm、器高は1.3 cm、底径は5.0 cmで、底面には墨書がある。墨書は「□（相力）田」の可能性がある。

#### 2－2区 SX16（第59図）

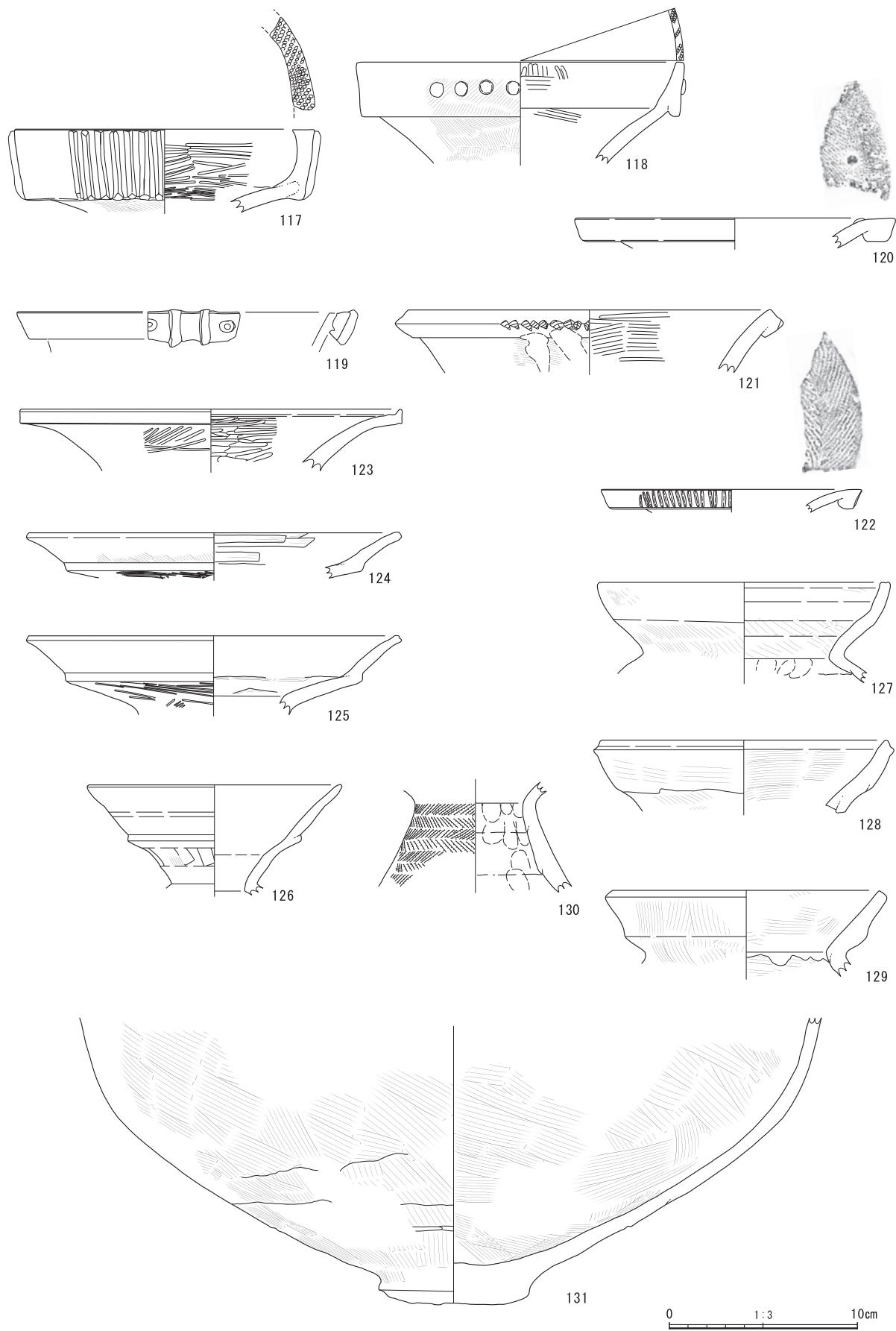
u 32 グリッドで検出した。狭小な調査区の西壁側に位置するが、遺構の西側は調査区に続くことから全体形は不明である。検出できた部分は不定形で、長軸方向は1.2 mほどある。遺構の覆土からは弥生土器の小片が多数出土している。

#### 3区 SX17（第131図）

v 40 グリットの北半部、標高7.1 mで検出した不定形な遺構である。遺構の北側は北壁の調査区外へと続いており、全体の形状はわからない。東西の長軸方向は4 m、短軸は1.1 mであった。遺構の性格等も不明である。低地部であることから、部分的な窪地であった可能性がある。

#### 3区 SX18（第127図）

u 40 グリットの南半部で検出した不定形な遺構である。東側は調査区外に続いている。遺構の北端には杭列1が重複している。長軸方向は7 m程の長さがある。SX17と同様、窪地であったと思われる。



第90図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図1

### 3区 SX19（第131図）

t 41 グリットで検出した南北方向の溝状の遺構である。長軸方向は 5.5 m、幅は最大 0.9 m で、北側は調査区外へ続く。

覆土からは古墳時代の甌の把手（第81図92）が出土した。甌の把手断面は径が 2.7 × 2.6 cm で、甌体部に付けるために凸帯を作り出している。

#### 1-1区南 SX9（SD 8 最上層）（第82図、図版25）

1-1区北 SX9 と遺構番号が重複する。1-1区南、v 34 グリット内で検出した SX9 は、調査当初は土器集中箇所としていたが、その後に下層で SD8 が見つかったことから、旧流路跡 SD8 の覆土上層であったことがわかった。後述する SX10 も同様である。SX9 は検出時に明確な掘り込みが確認できなかった。おそらく SD8 が埋没する最終段階のもので、流路右岸の縁辺部、約 2 m の範囲に土器が集中している。このことからも、古墳時代後期に川辺で行われた祭祀跡の可能性が高い。出土した土器は土師器の坏や高坏が多く、実用的なものではなく、祭祀色の強い器種構成となっている。

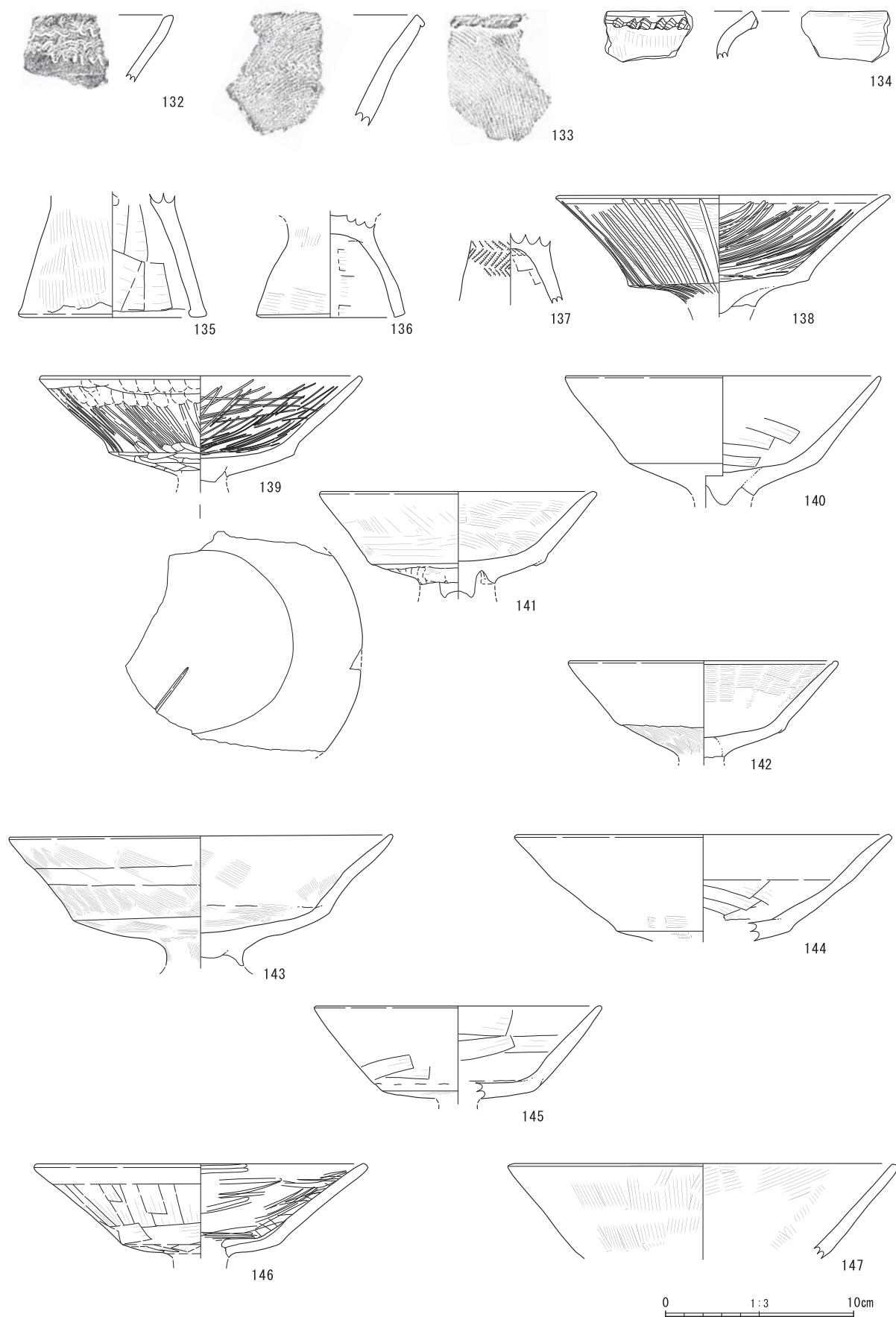
図化した土器は第89図95～106、石製模造品は同図113～116に掲載した。95・96は土師器の坏である。95は底部が欠損、復元口径は 13.9 cm、底部にヘラミガキのような痕跡がある。口縁部は垂直に立ち上がる形状を持つ。96は径 11.6 cm、体部径は 12.7 cm、器高は 4.75 cm で、口縁部は内向している。器面は内外面ともにヘラミガキで面調整されている。97～105は土師器の高坏である。全体にも高坏の割合が高い。表面は磨耗しているものが多い。いずれの脚部内面も板ナデもしくは板状工具で内面を削り取ったような状態であった。97・98は坏部と脚部全体が残る。97は口径 13.8 cm、脚径は 8.6 cm、器高は 11.9 cm である。98は復元口径が 13.9 cm、脚部径は 7.9 cm、器高は 11.0 cm である。99～105は脚部片である。99・103の坏部と脚部接合部には指ナデの痕跡がある。100・102・105の脚部内外面には絞り痕がある。高坏の製作方法はどれも良く似ており、同じ時期に製作された可能性がある。またつくりが粗いことからも、一時的な使用に耐えうる程度に製作された土器であろう。106は手捏ねの小型鉢で、口径は 8.55 cm、底径は 4.8 cm、器高は 5.1 cm を測る。内・外面は指頭圧痕で整形されている。

石製模造品は臼玉である。113は直径 0.5 cm の円形で下端面は平坦に研磨されている。全長は高低差があり、穿孔も中央ではなく片寄っている。114は直径 0.53 cm の臼玉で、上下端部面は研磨がされておらず、割れた面のままの状態であった。115は直径 0.56 cm の臼玉で、上下面ともに割れ面で研磨は側面のみであった。側面から見ると厚みが片寄っている。116は直径 0.6 cm の臼玉で、上記3点と同じく上下端部には研磨がなく、割れ面の状態であった。いずれも石材は滑石製である。SD8 の最上層で出土した臼玉と同じような臼玉は 1-1 区 SD8 下層でも出土している（第105図347～350）が、SD8 下層の臼玉とは異なったつくりをしている。

#### 1-1区S SX10（SD 8 最上層）（第83図、図版25）

前述の SX9 と同様に SX10 も SD8 の覆土上層で検出した。SX10 も掘り込み等は確認されず、土器が集中して出土した状況であったことから、自然流路の縁辺部で行われた祭祀跡であろう。SX10 では SD8 の左岸側で 1 m の範囲にまとまって土器が出土した。やはり実用的なものではなく、祭祀色の強い高坏が多く見られた。

出土土器は第89図107～112に掲載した。107～110は土師器の高坏脚部である。器面は全体に摩滅しているが、全面ナデにより仕上げられている。107の底径は 10.0 cm、108は 8.6 cm、109は 10.6 cm、110は 9.5 cm と、10 cm 内外の寸法である。111は壺の体部から底部である。底径は 7.8 cm、残存高は 5.4 cm で、底部には黒斑がある。器面は摩滅しているがナデにより仕上げている。土器の年代は弥生時代後期に属するものであろう。112は須恵器の坏身で、復元口径は 11.4 cm、残存高は 2.7 cm を測る。面調整は焼成不良で脆くなっていることから不明瞭である。



第91図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図2

SX 9 の高坏脚部内面は板ナデによる面調整だが、SX10 の高坏は脚部内面がナデによる。こうした製作方法や形状も明らかに異なっている。別々に行われた祭祀行為の時期差による違いと思われる。

#### 1－1区南・2－1区 SD 8 (第 84～88 図、図版 25・26)

1－1区南ではv 33・34 グリット、2－1区北ではt 33・34 グリットに位置する。当初、1－1区南ではSD 8、2－1区北ではSD 8 bと呼んでいたが、調査の結果、同じ遺構と判断されたことからSD 8として統合した。埋没微高地のなかにあり、東から西方向に流れる自然流路と考えられる。自然流路は小笠高橋川の支流、もしくは小笠高橋川の本流にあたる流れであろう。今回の本発掘調査では、東から西方向あるいは西から東方向に流れる流路が幾筋も調査区内を横切っている。SD 8は、そのなかでも規模が大きく、最大8 mほどの流路幅を持つ。流路の深さは1－1区南では1.7 m、2－1区北では1.9 mである。覆土層は10～11層に分けられた(第 84・87 図)。覆土内より出土した土器・木製品は、中層である5・6層と、上層である1～3層に多く含まれていた。

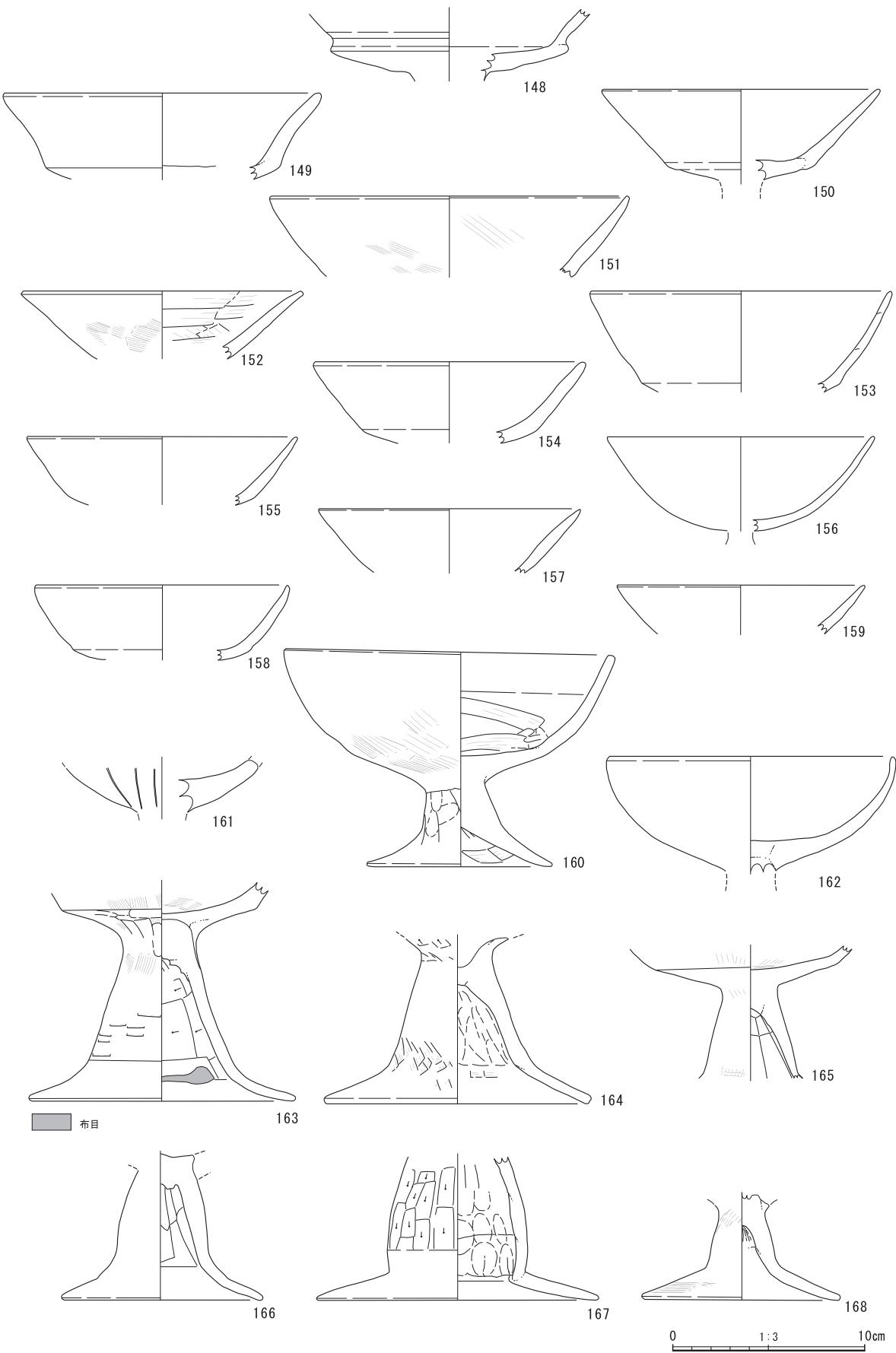
以下、SD 8より出土した遺物について記述する。土器は第 90 図 117～第 104 図 346、石製品は第 105 図 347～352、木製品は第 106 図 353～第 114 図 407 に掲載した。

117～133は壺である。117は下層より出土した受け口の口縁部片で、口径は16.0 cmである。口唇面には縄文があり、口縁側面には単位8本以上の棒状浮文が施されている。調整痕は外面にハケ調整、内面は横位のヘラミガキである。118も同じく受け口の壺口縁で、口径は17.5 cm、口縁側面に円形浮文が4箇所、口唇部には縄文が施されている。中層より出土した。119～122は折り返し口縁の壺である。119は7～10層出土で、口縁部に棒状浮文と円形の竹管文がある。120は3～10層出土で、口縁の内面に縄文を施し、円形浮文を付けている。口唇部には棒状浮文の痕跡がある。121は壺か甕か、小片のため口径も正確ではない。口唇面にキザミを付けている。122は口径13.9 cmで、口唇部にヘラ状工具で縦方向にキザミを入れている。口縁内面には羽状に縄文を施文した後、その境目に竹管文を入れている。123は下層より出土した土師質の壺口縁部である。口径20.4 cmで、内外面はヨコナデ後にヘラミガキで面を調整している。124・125は土師器の壺口縁部片か。7層(2－1区北)より出土した。口径はいずれも20.0 cmで、接合点はないものの、同一個体の可能性が高い。外面は下方にヘラミガキ、上部はヨコナデ、内面は下方に板ナデの痕がある。126は土師器の広口壺の口縁部である。SD 8の下層より出土した。口径は13.6 cmで、頸部から大きく外側に開く形状である。127～129も土師器の壺口縁部片である。中～下層より出土した。127は口径15.6 cm、残存高は5.35 cmを測る。内・外面はハケ調整で、口縁部だけヨコナデしている。130は弥生土器の壺の頸部か。櫛刺突文が羽状に7段の配列を持つ。SD 8の下層より出土した。131は3～10層より出土した壺の体部から底部で残存高は15.3 cmである。底径は8.0 cmで底面には木葉痕がある。内外面はハケにより面調整されている。

132は外面に櫛描き波状文がある。小片のため口径不明。1～2層で出土した。133は弥生土器の壺口縁部片である。SD 8の下層より出土している。口唇部には櫛刺突文が斜めに施され、口縁部内面には結節縄文がある。134は中下層で出土した弥生土器の甕口縁部片で、口唇部にはキザミがある。

135・136は中下層で出土した弥生土器の台付甕である。脚部片で、脚径は10.0 cm、高さは6.55 cm、外面は下から上方向のハケ調整、内面は板ナデで整形している。137も台付甕の脚部か。櫛刺突文を羽状に施文している。

138～196・239は土師器の高坏で、138～159・161・162・239は坏部片、160は完形の高坏、163～196は脚部である。下層で出土した138は口径17.8 cmで、内外面はハケ調整のちヘラによるミガキが全面にある。139は7～10層で出土した坏部で、復元口径は19.4 cmである。幅0.1 cmのヘラ状工具で内外面を磨いている。脚部との接合部にはヘラ削りがある。脚部底には直線状のヘラ描きがある。140は中下層で出土した。口径は16.8 cmで、内面には板ナデの痕跡がある。底部には脚部との接合の



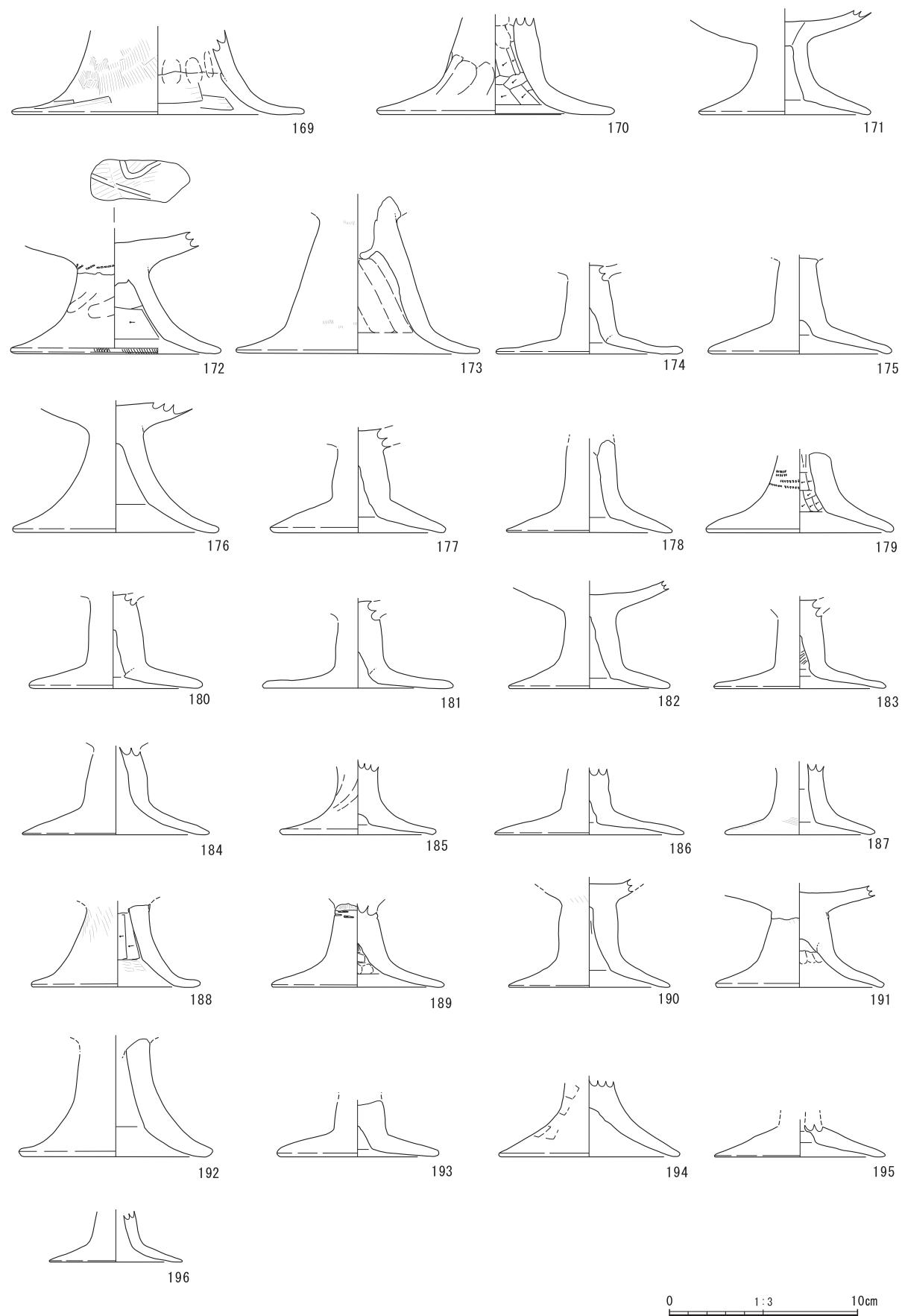
第92図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図3

ために突出部を作り出している。141は3～6層より出土した。口径は16.6cmでハケ調整痕が内外面に残る。脚部の一部には絞り痕がある。142は中下層で出土した。口径は16.2cm、表面は磨耗しているが、ハケ調整痕が残っている。143は壺部の9割が残存する。口径は20.4cmで内外面にはハケ調整後に撫でて整形した痕がある。144は7層出土で、口径は20.2cmを測る。内外面は撫でにより仕上げている。145は中下層で出土した。口径は15.4cmで、内外面は板状工具により撫でている。146は口径が17.8cm、外面は板ナデで整形後、口縁部はヨコナデし、内面はヘラミガキにより仕上げている。工具があたった痕跡もある。147は下層で出土した壺部片で、口径は20.8cmを測る。表面は磨耗しているがハケ調整痕は見える。

第92図148は下層より出土した壺部片で、内面の一部に煤が付着している。149は7～10層で出土した。復元口径は16.6cmで、残存高は4.5cmである。150は中～下層出土で、口径は14.6cm、壺部の高さは4.8cmを測る。151は7～10層で出土した。復元口径は18.8cmで、器面はハケ調整後、横方向に撫でている。152は下層より出土し、復元口径は16.6cmの壺部片である。内面は板状工具で撫でて整形している。153は中～下層出土で、口径は15.8cmである。154は中（2）層より出土で、口径は16.0cmである。155は下層より出土した。復元口径は15.9cmである。156は壺の底部に丸みを持つ形で、口径は14.0cmである。157は口径15.4cmで、下層より出土した。158・159は中（2）層より出土した。158の復元口径は15.0cm、159は14.6cmである。160は全体の7割が残存する高壺で、中層より出土した。口径は17.3cm、底径は9.7cm、高さは11.4cmを測る。外面はハケ調整後にナデ、内面は板ナデ後に口縁部は横方向に撫でている。脚部内面は絞り痕と板ナデにより整形し、外面は接合部から下方を指で撫でている。161は壺部底の破片で、外面には工具による調整痕があり、その後、ナデにより仕上げている。162は口径が15.0cmで、壺部の残存高は6.0cmである。中（2）層より出土した。

163は壺の一部と脚部で11.4cmの高さが残っている。7層より出土し、底径は14.0cmである。壺部にはハケ調整痕があり、脚部外面には工具によるハケ調整や指ナデが見える。内面は付け根部分に絞り痕、中央はヘラ状工具により削り、底面に近い部分には布目痕がある。164の底径は14.0cm、残存高は8.6cmで、壺と脚の接合部で剥がれている。接合部は脚の頭を窪めてある。外面は板ナデで整形し、一部黒く焼けている。内面は絞り痕があり、仕上げは撫でている。165は壺の一部と脚部片で、内・外面に赤彩がある。外面はハケ調整後にナデ、内面はヘラ状工具により粘土を掻き取っている。166は底径が10.5cmで高さは7.65cmで、脚部中央がやや膨らむ形状である。脚部内面はヘラ削りし、底部はナデにより整形している。167は脚全体が大きく膨らむ形状で、底径は14.8cm、残存高は7.5cmである。下層より出土した。外面は上から下方向へヘラナデし、内面は輪積み部分を指で押さえ、底縁は撫でている。168は中～下層で出土した。底径は10.4cm、脚部内面奥には絞り痕がある。

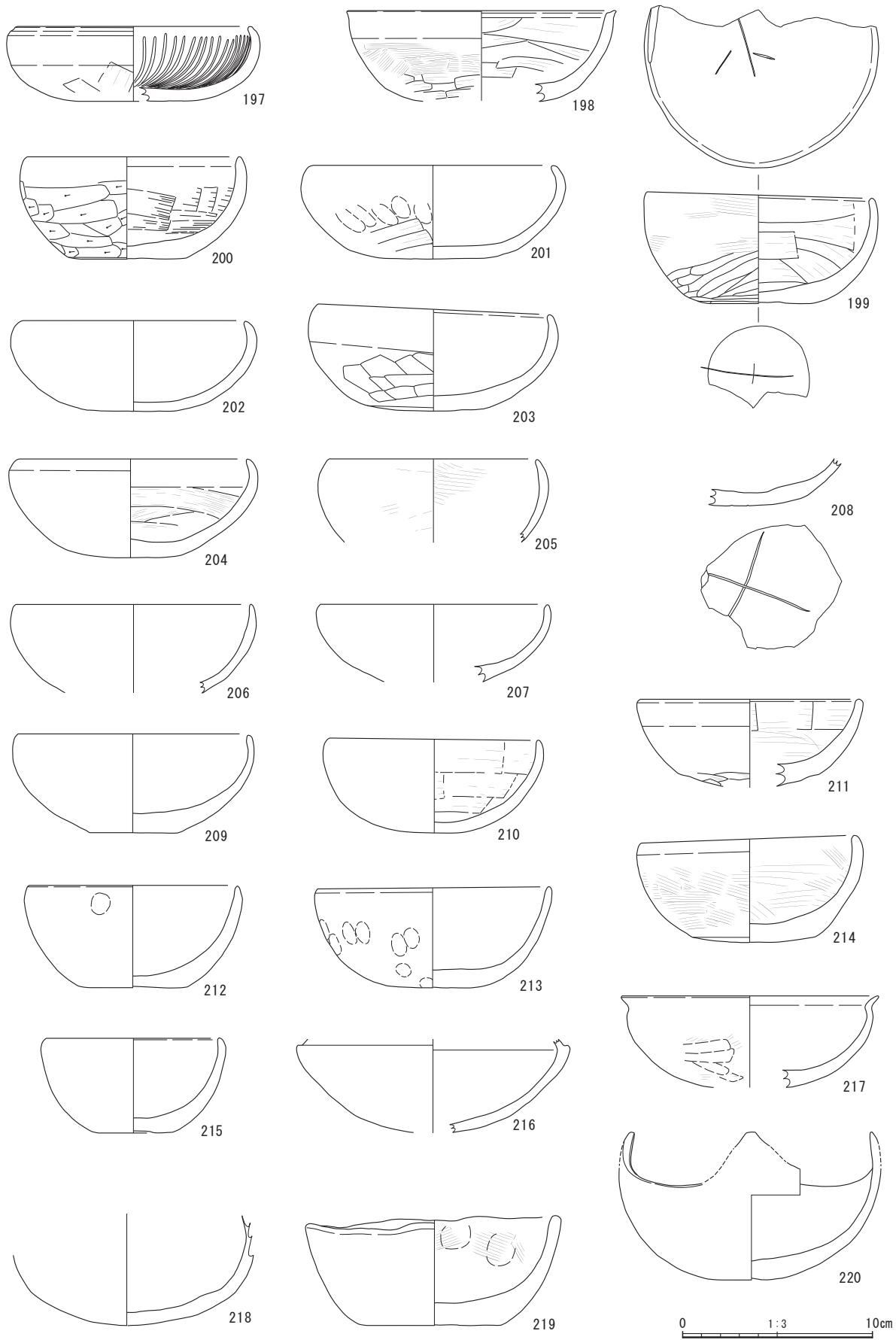
第93図169は3～10層出土の脚部片である。底径は15.6cm、残存高は4.5cmで、外面はハケ調整、内面は指ナデとヘラナデの痕がある。170は中層出土で、底径は12.7cm、残存高は5.2cmである。外面はヘラナデ、内面はヘラ削りにより整形している。171は全面ナデにより仕上げている。上層～中層で出土し、底径は9.2cm、残存高は5.5cmである。172は上層より出土した。壺の一部も残存しており、底径は11.25cm、残存高は6.5cmである。接合部にある櫛刺突のような痕や底唇部のキザミ目のような痕は、ハケ状工具による痕であろう。壺部内面はハケ調整後にヘラミガキし、脚部外面は指ナデ、内面はヘラ削りし、裾部は撫でている。173は壺との接合部を大きく窪めて撫でてある。脚部外面はハケ調整後にナデ、内面には絞り痕がある。底径は13.0cm、残存高は8.35cmと、やや大きめな高壺である。174は中（2）層より出土した。底径は10.0cm、残存高は4.8cmで、全面ナデにより仕上げている。175は上層より出土している。全面ナデにより仕上げ、底径は9.8cm、残存高は4.9cmである。176は壺の一部と脚部片だが、全体に歪みがある。底径は11.0cm、残存高は6.9cmで、内面は回



第93図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図4

転しながら撫でている。下層より出土した。177・178は中（2）層より出土した。177の底径は9.4cm、残存高は5.5cmで、178の底径は8.9cm、残存高は4.9cmである。いずれも全面ナデにより整形している。179は3～6層より出土した。底径は10.0cm、残存高は4.15cmで、外面には工具の端部痕が残っている。内面奥には絞り痕があり、下方はヘラ削りで整形している。180は中（2）層より出土した。底径は9.3cm、高さは5.0cmで、全面ナデにより整形している。181も全面撫でて整形している。底径は10.2cm、残存高は4.6cmである。182は壺の一部も残っている。上～中（1～2）層より出土し、底径は8.6cm、高さは5.7cmで、整形は全面に撫でている。183は中～下層で出土した。底径は9.2cm、残存高は4.7cmで、内面は工具により削って仕上げている。184は脚部中央がやや膨らむ形状で、底径は10.0cm、高さは4.7cmほど残存している。185・186は中～下層より出土した。185は底径8.4cm、高さは4.1cm、186は底径10.1cm、高さは3.5cmで、いずれも全面ナデにより整形している。187は下層より出土した。底径は9.0cm、高さは4.2cmで、内面は工具により削られている。裾部から外面はナデにより整形している。188は中層より出土した。底径は9.0cm、高さは4.4cmで、全体に磨耗しているものの、外面はハケ調整、内面はヘラ状工具で削って裾部はハケ調整で整形している。189は中～下層より出土した。底径は9.2cmで、接合部外面には工具の端部痕、内面は絞り痕がある。190は上～下層で出土した脚部で、壺の一部が残っている。底径は8.6cmで、外面と壺の見込みはナデで仕上げ、脚内面は工具により撫でている。191は下層より出土した。底径は9.0cmで、全面ナデで整形しているが、脚内面は絞り痕と指ナデで整形している。192は下層で出土した。底径は7.85cmで、全体に磨耗して調整痕が見えない。193は中層より出土した小型の脚部で、底径は8.6cm、残存高は3.0cmである。194は底径が9.7cmで、外面は板ナデ、裾部は撫でて仕上げている。195は下層より出土した。底径は9.1cmで、全体はナデによる整形である。196は底径が8.0cmの小型高壺の脚部である。全面撫でている。

第94図197～220はSD8の覆土より出土した土師器の壺である。197は下層より出土した。口径は12.4cm、体部径は13.4cm、高さは3.95cmである。外面調整はヘラナデ後にヨコナデ、内面はヘラナデの後、放射状にヘラミガキをしている。198は口径が14.2cmで底部が欠損している。外面は板ナデとハケ調整後に口縁をヨコナデしている。内面は板ナデにより整形している。199は中層より出土した。口径は12.3cm、高さは5.9cmを測る。外面は底部をヘラ削りし、体部より上はハケ調整されている。底部にヘラ記号のような痕がある。一方、内面は板ナデにより整形し、見込み部分に手書きの木葉痕のような痕がある。200も同じような整形で、底部から体部外面をヘラ削りしている。3～6層出土で、口径は11.5cm、体部径は12.0cm、高さは5.4cm、底径は6.2cmである。201は全体に磨耗しているが、外面調整は板ナデと指ナデ整形している。口径は12.8cm、体部径は14.0cmである。202・203は下層より出土した。202は口径11.8cm、高さは4.8cmで、全体にナデ調整されている。203は全体に歪みがある。口径は12.1cmで高さは5.48cm、外面は手持ちでヘラ削りしたようで、口縁部はヨコナデで仕上げている。204は3～6層出土で、口径は12.3cm、体部径は13.2cm、高さは5.2cmと全体の90%が残存している。外面は磨耗しているが、内面は板ナデによる整形で、口縁部はヨコナデしている。205～207は口縁から体部片である。205は中（2）層より出土した。口径は11.3cmで、全体をハケ調整後に指ナデ整形している。206は中～下層出土で、口径は14.4cmで指ナデ整形している。207は中（2）層出土で、口径12.4cmに復元できる。全面指ナデによる整形で、外面の一部に黒ずみがある。208は底部片で、底面に十字状のヘラ記号がある。209は中（2）層出土で、底面がナデ整形、体部は全面指ナデで整形されている。口径は12.1cm、底径は4.6cm、高さは5.2cmを測る。210は口径12.7cm、高さは5.6cmで丸底の壺である。外面は磨耗しているが、内面は板ナデにより整形している。211は中・下層より出土した壺で、底部は欠損している。口径は12.0cm、高さは4.6cmで、内面はハケ調整と横方向の板ナデで整形している。212は底面のある壺で、口径は11.2cm、底径は5.8cm、高さは



第94図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図5

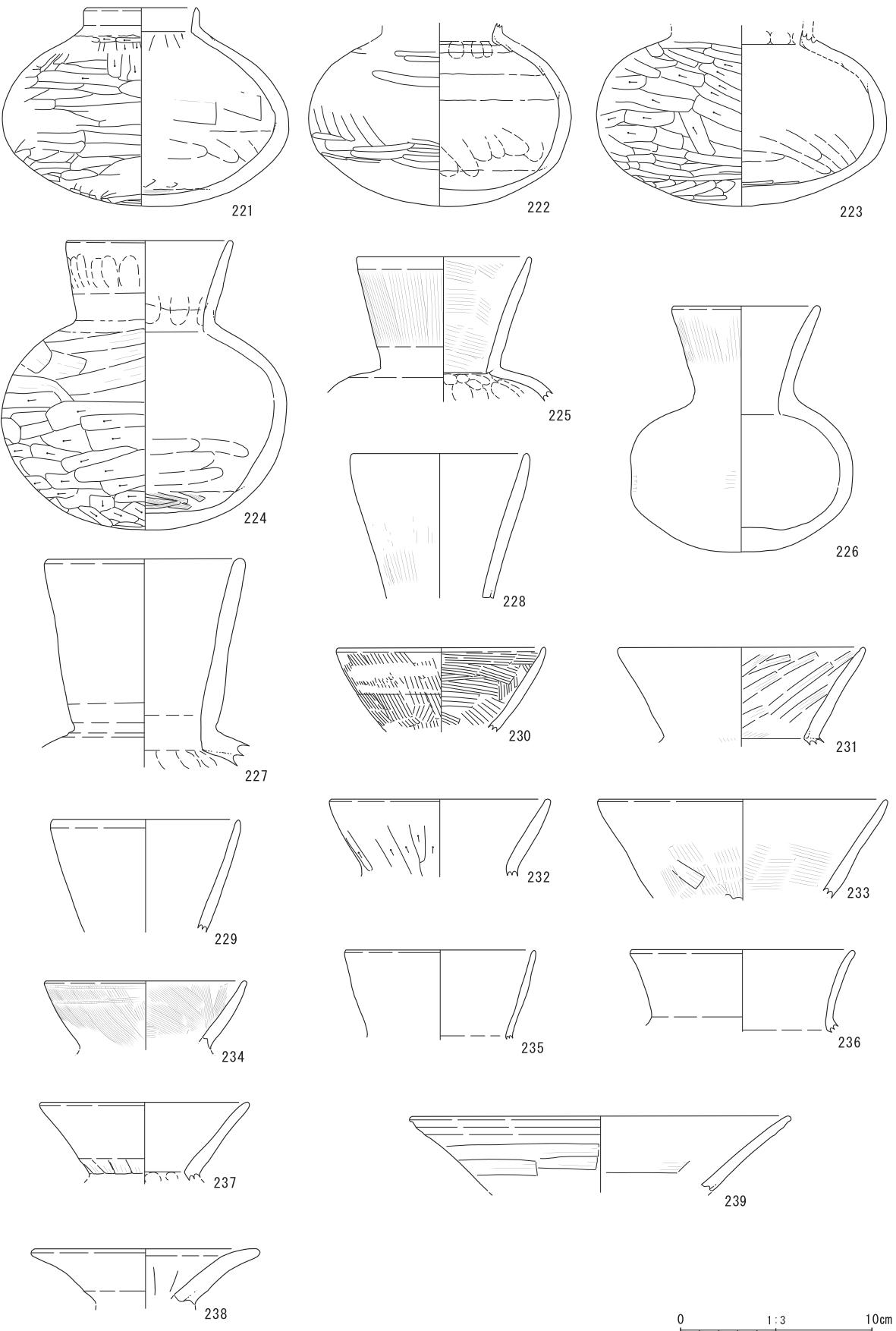
5.4 cmである。面調整はナデにより形を整えている。213も最終的に指ナデにより整形しているが、全面に工具のあたった痕跡が残っている。80%残存し、口径は12.5 cm、高さは5.2～5.4 cmとやや歪みがある。214は下層より出土した。内外面は2種類のハケ状工具で面調整し、底面はヘラ削り後にスノコ上で乾燥させたような痕跡がある。口径は13.5 cmで、底径は7.3 cm、高さは6.3 cmである。215は中層より出土した壺で、口径10.4 cm、体部径は11.0 cm、高さは5.6 cmと、ほかに比べてやや小振りである。全体に磨耗しているため調整痕は見えない。216は2-1区北のSD 8の3～6層より出土した模倣壺である。体部径は14.4 cm、残存高は4.9 cmを測る。表面は剥離しているため、口縁部のヨコナデが見えるのみである。217は口縁部が外側に屈曲する形状の壺である。中(2)層より出土し、口径は14.6 cmを測る。218は丸底の壺で、口縁は欠損している。219はほぼ完形に近い壺だが、整形が粗く、口縁部は歪んでいる。口径は13.6 cm、底径は7.4 cmで底面には木葉痕がある。外面は摩滅しているが、内面は指ナデのちハケ調整している。

220は口縁部の4箇所が突出した形状になっている。中層より出土したが、同じような形状の壺は赤土政所遺跡の南区第2面包含層でも出土している。口径は12.9 cm、体部径は13.8 cm、高さは7.8 cmである。

第95図221～239は壺等である。221は中(2)層より出土した丸底の短頸壺である。口径は6.05 cm、体部径は15.5 cm、高さは10.4 cmの法量がある。表面は剥離しているが、外面は底から体部はすべてヘラ削り、内面は底部がハケ、体部は指ナデ、頸部には絞り痕がみえる。口縁部は撫でている。222は丸底の壺で、口縁部は欠損している。体部径は13.8 cm、残存高は9.6 cmで、全体に磨耗している。外面はヘラ削りかヘラミガキかは判別できない。内面は指ナデにより整形している。223も口縁部が欠損している。SD 8の6層より出土し、体部径は15.25 cm、残存高は9.2 cmである。外面は手持ちでヘラ削りされている。内面は底部を板ナデ、上部は指ナデにより整形している。224はほぼ完形に近い形状で残っている。口径は8.8 cm、体部径は14.9 cm、高さは15.1 cmの丸底壺である。外面は底から体部まではヘラ削りで、肩部は板ナデ、頸部は指ナデ後にヨコナデにより整形している。内面は底部にハケ調整、体部は横位の指ナデ、輪積み痕は指頭圧痕で押さえている。口縁部は指ナデ後に横方向に撫でている。225は壺の口縁部片である。SD 8の粘土～6層より出土した。口径は9.2 cm、残存高は7.5 cmである。外面はハケ調整後に撫でている。口唇部は横方向に撫でている。内面は体部と頸部の接合部は指頭圧痕、上部はハケ調整している。226は下層より出土した、ほぼ完形の丸底壺である。口径は7.8 cm、頸部径は5.2 cm、高さは12.9 cmである。頸部外面はわずかにハケ調整痕が見えるものの、全体に磨耗し調整痕はよく見えない。

227～232は壺の口縁部片である。全体に磨耗しているが、ナデにより仕上げている。口径は7.9 cm、残存高は8.1 cmで頸部径は5.6 cmを測る。228は口径が9.4 cmで外面はハケ調整後にヨコナデしている。229は口径が10.0 cm、残存高は5.9 cmで、全体にナデ整形している。230は下層より出土した。全面にハケ調整痕が残っているが、外面はハケ後、一部を横方向に撫でている。231は7層より出土した。口径は13.0 cmで、外面はヨコナデ、内面は斜め方向の板ナデで整形している。232は7～10層出土で、口径は11.6 cmである。全体に磨耗しているが、外面は下から上方向にヘラ削りされている。

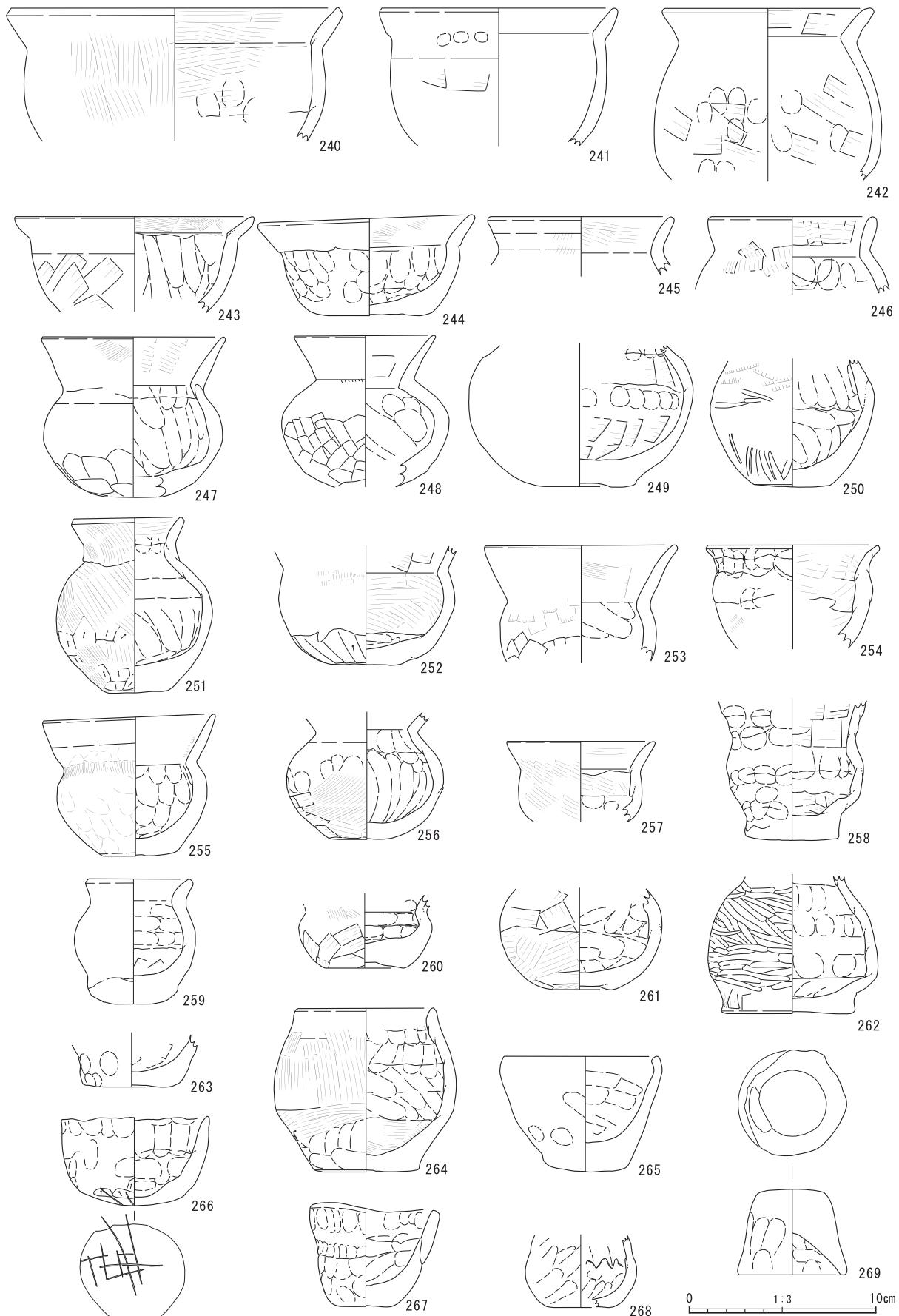
233は高壺の壺部か。口径は15.2 cmで、内外面はハケ調整痕がある。234は小型の壺口縁部片か。SD 8の下層より出土した。口径は10.6 cmで、内外面はハケ調整している。235も下層より出土した。口径は10.0 cm、残存高は4.7 cmで、全体にナデ整形している。236は上層より出土した。復元口径は11.8 cm、残存高は4.2 cmで、内外面はナデ整形している。237は下層より出土した小型壺の口縁部片か。頸部には接合時の板ナデが見えるが、上部はヨコナデしている。口径は11.0 cm、残存高は4.1 cmに復元できる。238はSD 8の中・下層より出土した。小型壺の口縁部と思われる。表面は剥離が著し



第95図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図6

く。内面に絞り痕のような皺がみえる。口径は12.0 cmに復元できる。239は7層より出土した。口径が20.0 cmであることから、高壙の壺部片の可能性がある。外面は横位の板ナデ、内面はヨコナデしている。

第96図240～269は小型手捏ね（ミニチュア）土器である。240・241は中・下層より出土した甕の口縁部から体部片である。240の口径は18.0 cmに復元できることから、手捏ねではない可能性もある。内外面ともにハケ調整で整形しているが、口縁部のみヨコナデをしている。241は口径が12.8 cm、残存高は7.4 cmで、外面の下方には煤が付着している。242は表面が摩滅しているため、指頭圧痕と板ナデによる調整がわずかに見えている。底部に近いほうに煤が付着している。243と244は広口の鉢のような形状をしている。243は中・下層より出土し、口径は12.85 cmである。外面は板ナデ後、口縁部をヨコナデし、内面は体部を指ナデして、口縁部は横方向にハケ調整をしている。244は口径が11.7 cm、高さは5.4 cmで、7層より出土した。内外面は指ナデにより整形し、口縁部にだけヨコナデを施している。245・246は小型の甕を模した手捏ね土器である。245は下層より出土した。口径が10.0 cmで、内外面はハケ調整後に撫でている。246は中・下層で出土している。口径は9.1 cmでハケ調整と指ナデによる整形をしている。247・248は小型の壺、もしくは壺の手捏ね土器であろう。247は下層で出土している。口径は9.9 cm、高さは8.6 cmで、外面の底部はヘラ削りで面整形をしている。内面は指ナデし、口縁部はハケ調整した後にヨコナデしている。248も同様の整形方法だが、頸部内面に布目が見える。口径は7.6 cmで残存高は8.1 cmを測る。249と250は口縁部が欠損している。249は体部径が12.05 cm、底径が4.9 cm、残存高は7.6 cmである。外面は磨耗しているが、上げ底の底部から体部にまでかかる木葉痕があり、煤が付着している。内面は板ナデと指頭圧痕がある。250は体部径が8.8 cmで底径は4.0 cmで、外面下方はヘラ削り、上方にはハケ目が残っている。内面は全面指ナデしている。251は壺の手捏ね土器でほぼ完全な形状を持つ。口径は6.8 cm、底径は3.55 cm、高さは10.6 cmである。外面はハケ調整とヘラ削りが混じっている。内面は指で撫でている。252・253は小型壺の手捏ね土器である。252は下層より出土した。口縁部は欠損している。外面下方はヘラ削りし、上方や内面はハケ調整により整形している。253は口径が10.4 cmの口縁から体部片で、7層（下層）で見つかっている。やはり外面底部に近いところは手持ちでヘラ削りをしている痕がある。254は甕の手捏ね土器か。全体に輪積み痕が残り、指で押さえ、粗いハケ調整を行っている。口径は9.3 cmである。255・256は小型壺の手捏ね土器か。255の口径は9.3 cm、底径は4.0 cm、高さは7.6 cmである。外面は指ナデとハケ調整、内面下方は指ナデし、口縁部はヨコナデしている。256は体部径が8.4 cmで、外面はハケ調整、内面は指ナデにより整形している。257は下層より出土した鉢の手捏ね土器か。底部が欠損している。口径は8.0 cmで、ハケ調整により整形をしている。258は底部が厚く、整形が粗いことから器種特定が難しい。中～下層で出土し、体部径は7.4 cm、底径は5.0 cmで、体部には黒斑がある。底部にはモミ痕が見える。内外面は輪積み痕と指押さえ痕が顕著に残り、整形が粗い。259は7～10層出土の手捏ね土器で、口径が5.8 cm、底径は4.8 cmを測る。外面は磨耗し、内面には板ナデと指ナデ痕がある。260は口縁部が欠損する。体部最大径は7.2 cm、底径は4.15 cmで、底はヘラ状工具で平坦にし、中心を指で押さえている。261は7～10層出土で、体部径は8.7 cm、底径は3.2 cmで上げ底となっている。外面はハケ調整と板ナデ、内面は指ナデで整形している。262は小型壺の手捏ね土器である。口縁部が欠損している。体部径は9.1 cm、底径は7.2 cmで、底部にはモミ痕がある。外面は全面ヘラミガキし、内面は輪積みを指で押さえている。263は中（2）層より出土した底部片である。底径は5.2 cmで、歪みが大きい。264は6層より出土した小型の短頸壺の手捏ね土器か。全体の7割ほど残存し、口径は9.6 cm、体部の最大径9.8 cm、底部径は5.7 cm、器高は8.75 cmを測る。外面は下方を指ナデ、上方はハケ調整後に口縁はヨコナデしている。内面は底部をハケ調整し、輪積み部分を指ナデしている。265～269は器種不明な手捏ね



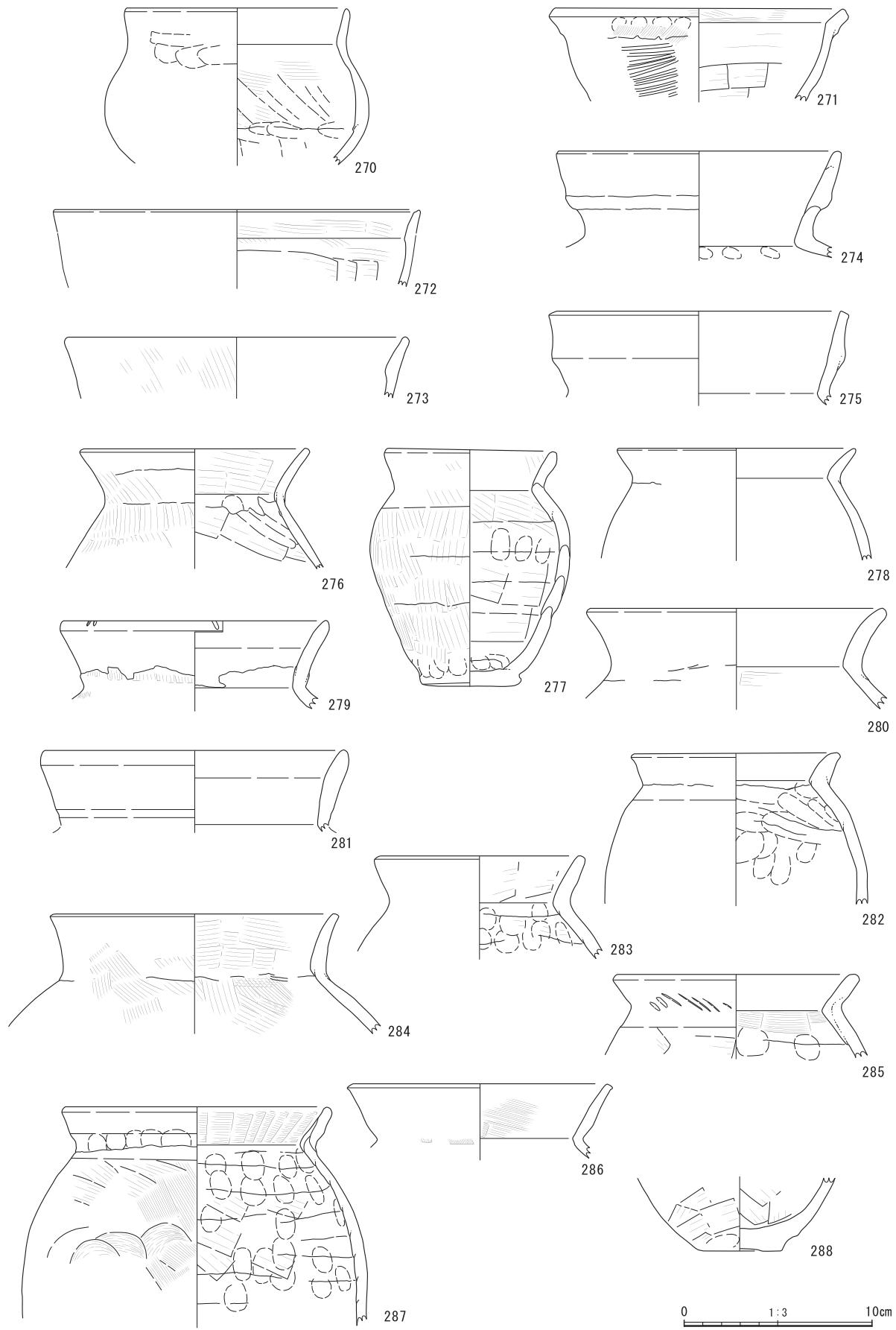
第96図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図7

土器である。265は中(2)層より出土した。厚底で整形も指ナデのみで粗い整形である。口径は8.3cm、底径は4.5cm、器高は6.2cmを測る。266はほぼ完形に近い。底面は手持ちでヘラ削りし、それ以外は指ナデで整形している。底面にはヘラ描きのような線刻がある。口径は8.0cm、器高は4.8cmである。267は全面、指ナデで整形している。底面には布目痕があり、外面の一部には黒斑がある。口径は7.0cm、底径は3.1cm、器高は5.6cmに復元できる。268も全面指ナデによる整形である。口縁部は欠損し、底径が3.6cm、残存高は3.9cmと小さい。

269は中層より出土した。台付甕の脚部かと思われたが、手捏ねの坏の可能性もある。底径は5.9cm、高さは4.6cmである。

第97図270～第98図305は小型～中型の甕等である。270は小型の甕である。復元直径は14.0cm、残存高は8.3cmを測る。表面は撫でにより仕上げられ、内面は輪積み痕を指押さえし、ハケ調整後に撫でている。271は下層より出土した浅い鉢か。直径は16.0cmで、口縁は折り返して指押さえしてからハケ調整をしている。体部外面はハケ調整後にヘラミガキし、内面は板ナデしている。272・273は甕の口縁部か。272は下層より出土した。口径は19.6cmで、外面はヨコナデ、内面は体部が板ナデ、口縁部がハケ調整後ナデで整形している。273もよく似た形状の口縁部で、口径は18.4cm、中(2)層より出土した。外面は粗いハケ調整が見え、口縁から内面は撫でている。274・275は壺の口縁部の可能性がある。274は全面をナデにより仕上げている。口径は15.2cmで、外面の口唇と頸部の間には粘土を付け足したように突出した部分がある。275も同様の形状をしている。全面をナデ仕上げし、口径は16.2cm、中(2)層より出土した。276～280は甕の口縁部である。このうち277は小型甕で、ほぼ完形に近い。276は口縁から体部の破片で、中下層より出土した。口径は12.3cmと小型である。外面はハケ調整、内面は板ナデとハケ調整をしている。277は口縁から底部まで残存する。口径は9.25cm、底径は5.4cm、高さは12.65cmとかなり小型で実用品とは考えにくい。整形も粗く、外面はハケ調整、内面は輪積み痕が顕著に残る。内面の底から体部には煤が付着し、モミ痕がある。また底面にもモミ痕がある。278は全体に磨耗が激しく調整痕が見えない。最上層から出土し、口径は12.8cmと小型品である。279も表面の一部が剥がれ落ちて調整痕が僅かしか見えない。上層より出土し、口径は14.4cmを測る。280は中下層より出土した甕の破片で、復元口径は16.0cmで、ヨコナデにより口縁部を仕上げている。281は土師器の甕口縁部である。上層より出土し、口径は16.0cm、全体をナデにより整形している。282は口縁から体部片で、外面全面に煤が付着している。内面は指ナデで整形し、内側にも煤が付着している。中～下層より出土し、口径は11.2cmを測る。283は中～下層より出土し、口径は11.2cmと小型品である。表面は剥離している。284は6層より出土した。全体に摩滅が著しいが、ハケ調整で整形していることがわかる。285は中～下層で出土した甕で、口径は13.2cm、外面口縁部にはナデ整形前の工具痕が見える。内面は体部がハケ調整で口縁部を撫でている。286は口縁部に煤が付着している。3～10層より出土し、口径は14.15cmに復元できる。287は口径が14.5cm、体部径は18.4cmで、口縁部から体部中央まで残存している。6層より出土した。外面体部はハケ調整、頸部は指頭圧で貼り付けて、口縁部はヨコナデしている。内面整形は指頭圧で輪積みを貼り付けてから粗くハケ調整したのみである。288は底部のみである。中～下層より出土し、焼き歪みがある。底径は4.5cm、上げ底気味で、内外面を板ナデしている。

第98図は293を除き、甕等の口縁部である。293以外の甕は口径が18～21cmで、実用的な大きさがある。289は中下層より出土し、表面は磨耗している。口径は10.8cmで、外面をハケ調整、内面は指頭圧痕がある。290は6層より出土した。口径は12.8cmで、口縁が垂直に立ち上がる形状であることから、甕ではなく短頸壺の可能性もある。291も同様で短頸壺か。中下層より出土した。口径は11.4cmで全体に磨耗している。292は最下8層より出土した破片で、口径は14.0cmで、わずかにハケ調整



第97図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図8

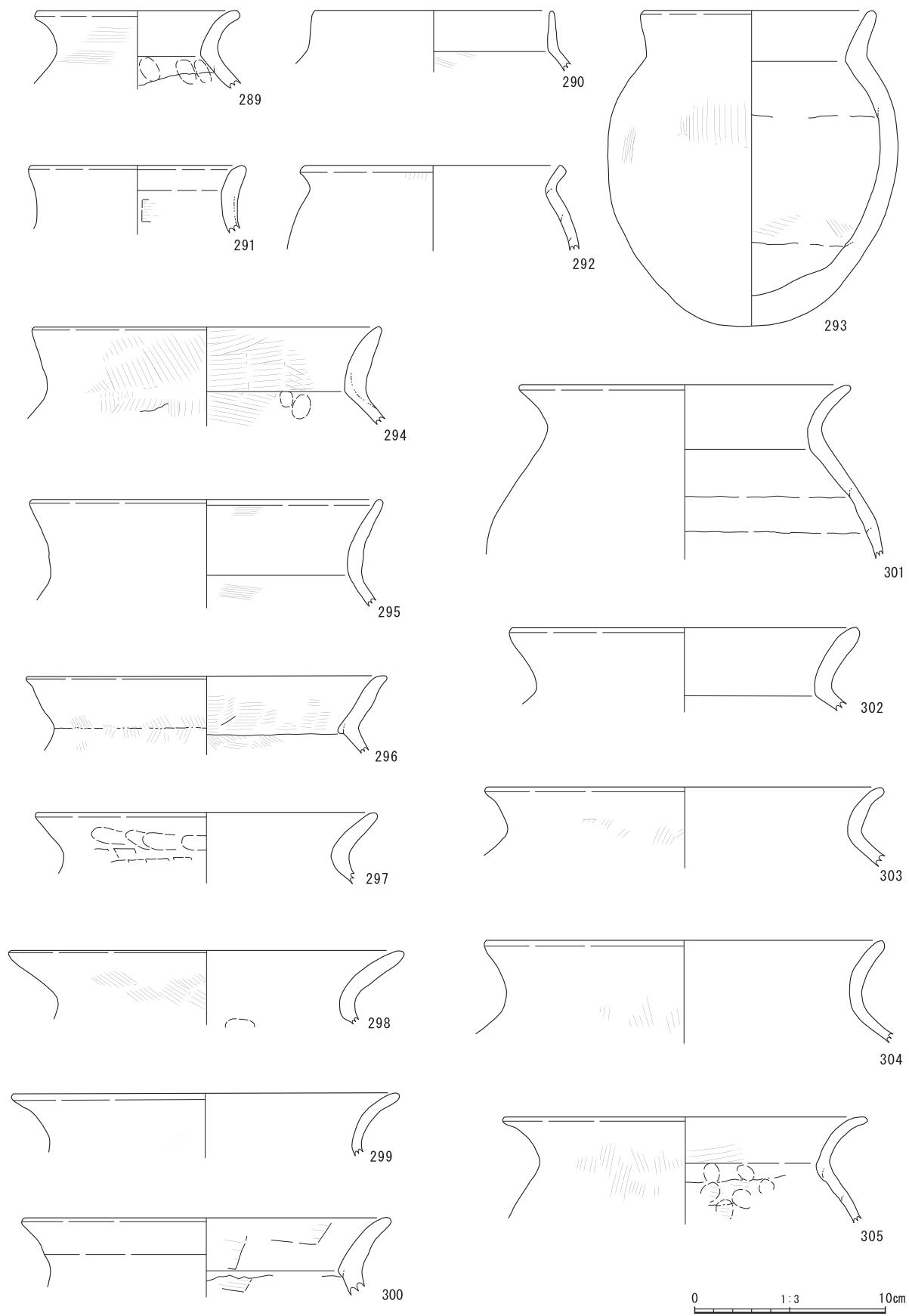
が見える。293は口縁から底部まで85%ほど残存している。口径は9.3cm、体部径は11.5cm、器高は12.4cmで、断面はかなり厚みがある。器面の調整は磨耗しており、わずかにハケ目が見える程度である。大きさからして実用品としては考えにくく、一時的な祭祀用具として使われた可能性が高い。294は中下層より出土し、口径は18.4cmで、全体にハケ調整し、外面はその後に撫でている。295は全面に磨耗しているが、内面にハケ調整痕が見える。口径は18.6cmで、1~2層より出土した。296は頸部がくの字に屈曲する。口径は19.0cmで、全体にハケ調整による整形である。6層より出土した。297は全体にナデ整形している。口径は18.0cmを測る。298はSD 8の東土層1~2層より出土した。口径は20.8cmで外面はハケ調整が見える。299は口径が20.4cmで、内外面はハケ調整後に撫でており、内面には煤が付着している。300は中層より出土、口径は19.4cmで、外面はヨコナデ、内面は板ナデ後に撫でている。301は口縁から体部まで残存し、下層より出土した。口径は17.4cmで、全面にナデ整形している。302は東土層1~2層より出土しているが、全面磨耗している。口径は18.4cmである。303・304は口径が21.0cmである。いずれも外面はわずかにハケ調整痕が見える。305は口径が19.2cmで、外面と内面の口縁はハケ調整後に撫でている。内面体部は指頭圧痕がある。

第99図306~317は壺又は甕、その他土器の底部片である。306・307は中(2)層より出土した。306は土師器の甕底部か。外面は全面ハケ調整され、煤が付着している。内面はハケ調整の後、撫でている。307も土師器か。底部面を作り出しているが、木葉痕のある底部面の外周を工具で削り落している。底部径は4.6cmで、残存高は2.7cmである。

308は弥生土器の壺の底部か。外面には籠目が付いている。底面はナデによる整形で、底の形状は、粘土整形時か、その直後に方形の籠に入れられたためか、4方向に角がある。内面は指ナデによる整形である。309は弥生土器の壺底部か。底面は網代編み、外面は莫蘆編みの籠目がある。残存高は5.3cmで、内面は板ナデしている。310も外面に籠編み目を持つ。底面は穿孔されていることから、土師器の甕の可能性がある。孔径は4.2cm、残存器高は3.2cmで、底に近い外面と穿孔部分はヘラ削りされている。内面は板ナデが見える。SD 8の下層より出土した。

311は上~中層で出土した弥生土器の壺底部で、底径は7.2cmである。内外面はハケ調整後に撫でている。312は弥生土器の壺の底部で3~6層より出土した。底径は6.3cmで木葉痕がある。313~317は弥生土器の壺底部である。313は上層で出土した。底径は11.7cmと大型品で、底面には木葉痕と黒斑がある。314は下層より出土した底部で、底径は9.8cmである。外面はナデにより整形している。315は6層より出土し、底面ははっきりとした面を作り出してはいない。底面にはヘラ描きされたと思われる木葉痕がある。316は下層より出土し、底径が5.6cmを測る。底は約2cmの厚みがある。317は体部から底部まである弥生土器の壺で、底径は6.8cm、残存高は12.7cmである。外面は輪積みの部分に指頭で押さえ、その後に指ナデと板ナデをしている。内面は焦げた炭化米が付着している(図版55)。

第100図318~第102図326は土師器の甕である。318は全体の7割以上が残存し、全体形がわかる資料となっている。口径は16.2cm、体部径は21.4cm、器高は32.0cmで、口縁部は歪みがある。底部は丸底で、胴部は長胴となっている。外面は縦方向のハケ調整、内面は底から板ナデし、肩部は指ナデ、口縁はヨコハケ後に口唇を撫でている。外面の下から1/3ほどは煤が付着し、内面底にも黒い付着物がある。319は口径17.1cm、体部径は23.3cm、器高は26.7cmの甕で、中層より出土した。底は丸みがあり、胴は中央が最も張り出している。外面底は後で粘土を貼り付けたようになっている。底から指押さえし、板ナデからハケ調整で整形している。胴の最大径のある場所に横方向のナデが入る。内面は輪積みを指押さえ後にハケ調整しているが、粗いハケと細かいハケと2種類を使っている。外面の底から2/3ほどに煤が付着している。320は5層より出土した。全体の85%ほど残存しており、口径は19.4cm、最大径は23.7cm、底径は7.3cm、器高は27.35cmである。外面はハケ調整、内面は輪積みを指ナデ後



第98図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図9

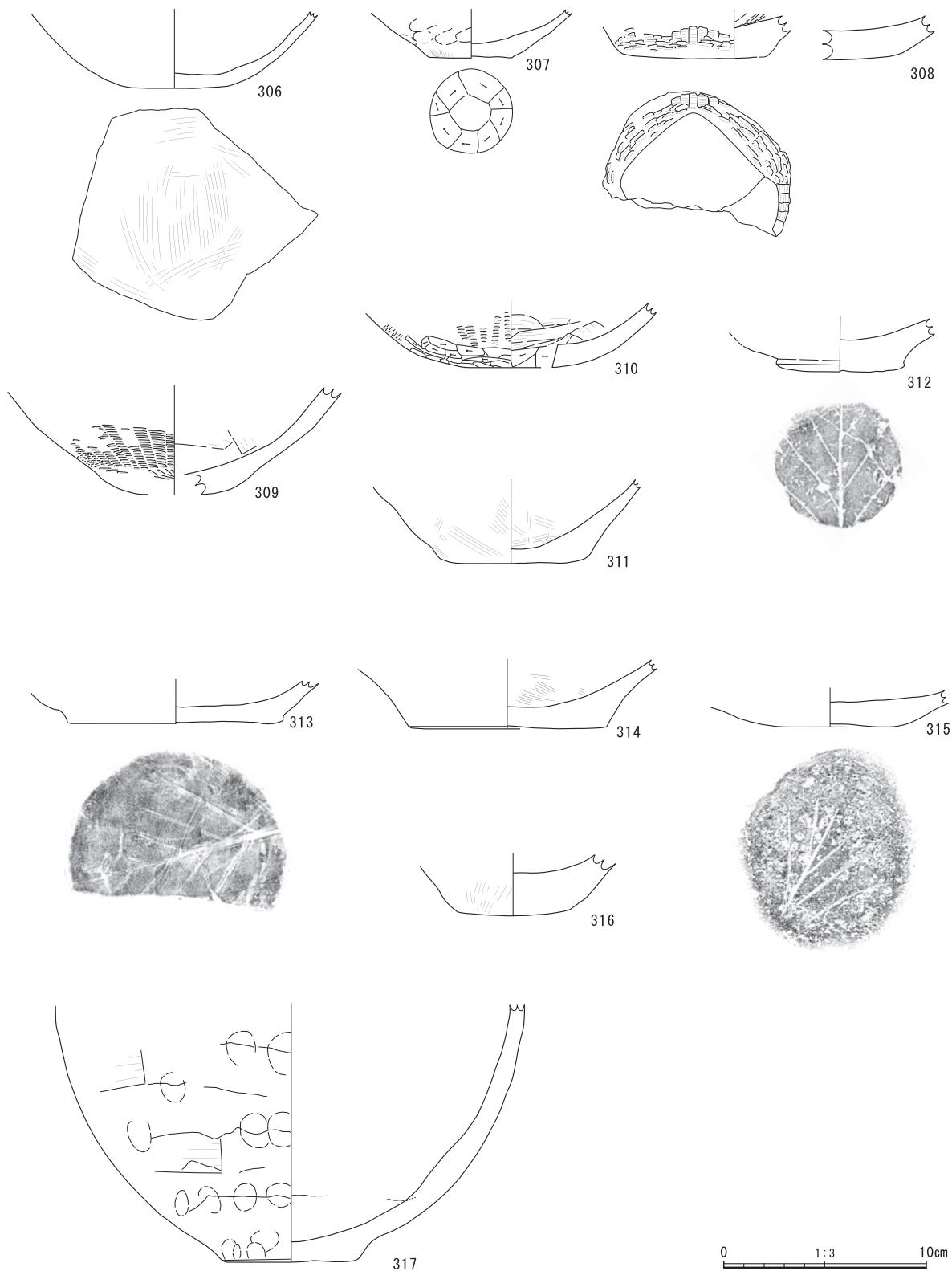
に板ナデとハケ調整をしている。外面の下方は煤が付着しているが、欠損部にも煤が入っていることから、欠けた後も使用している。底面は上げ底でモミ痕がある。321は下層より出土した口縁から胴部までの破片で、全体に磨耗している。口径は13.9cm、残存高は10.8cm、外面はハケ調整、内面もハケ調整や板ナデし、口縁部はヨコナデをしている。

第101図322は中層より出土し、全体の75%が残り、口縁部が欠損している。頸部径は13.5cmで、最大径は胴中央で25.2cm、底部径は8.7cm、器高は24.9cmを測る。胎土は白っぽく、粒子等はごく僅かである。外面はヘラミガキし、内面は底をハケ調整し、胴部は板ナデ、頸部は指押さえで口縁を繋いでいる。底面には木葉痕がある。323・324は6層から出土した口縁から胴部の甕である。323は口径が16.0cmで、内外面をハケ調整で整形し、口縁部は撫でている。一方、324は口径が13.8cm、外面をハケ調整後に撫でて、内面も調整痕をナデ消している。

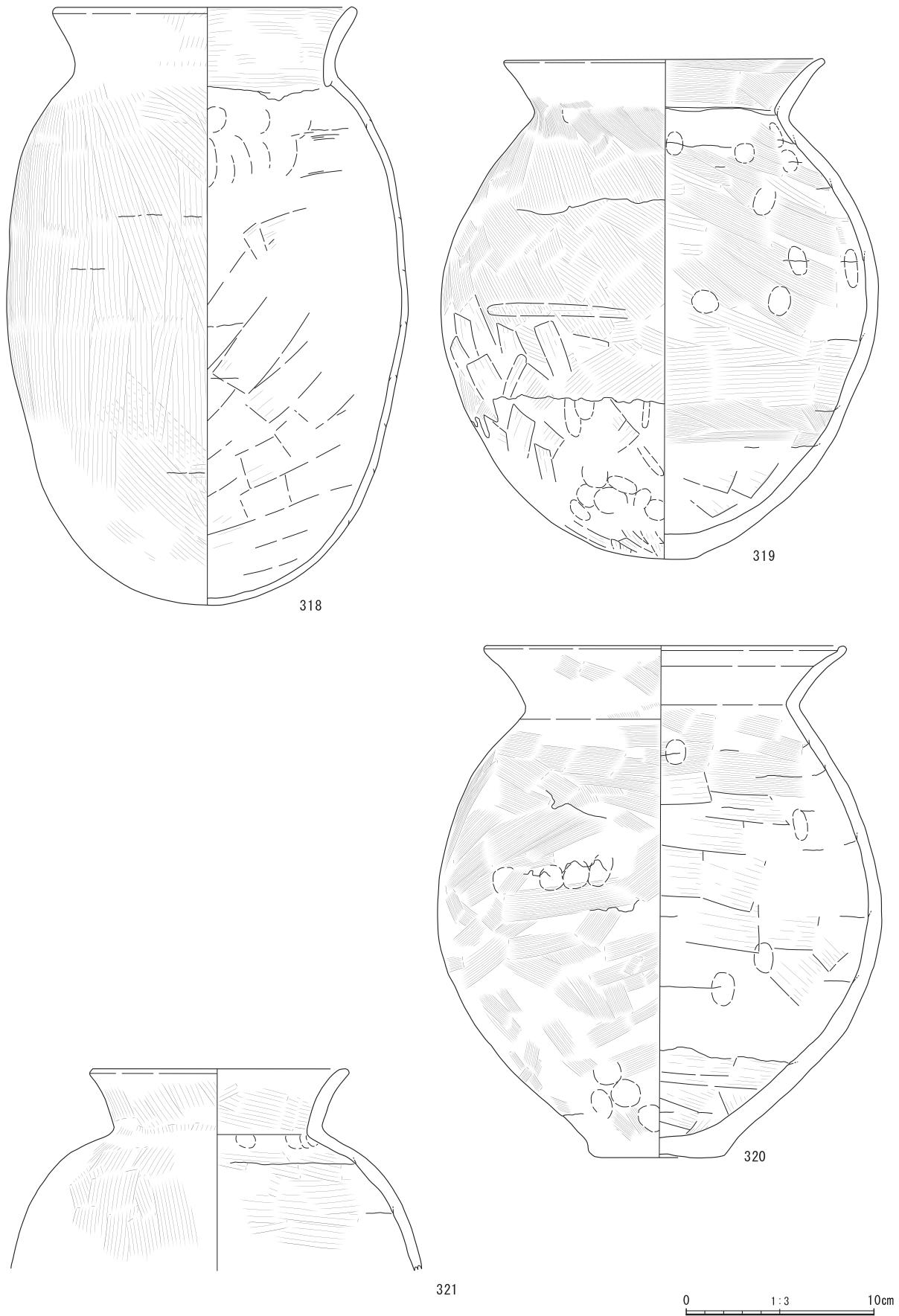
第102図325は中層より出土した。口径は16.9cm、体部径は26.4cm、器高は29.3cmで、胴の中央が最も張る形状である。底径は8.7cm、上げ底で、モミ痕と木葉痕がある。全体に磨耗気味だが、外面は指ナデからハケ調整で整形し、内面は指頭圧痕や板ナデの痕跡が見える。胎土に粗い粒子を多く含む。326は6層と中（2）層で出土した破片が接合した。口径は16.6cmで、外面には口縁部と胴部に煤が付着している。内面の調整は指押さえと板ナデをしている。胎土には粗い粒子を多く含む。口唇部は平坦面になっている。

第103図327～331は土師器の甕である。327は下層より出土した甕の口縁部か。口径は35.2cmで外側へ折り返したような口縁部で、段面形はくの字状である。内外面ともハケ調整後に撫でている。胎土には粒子を多く含む。328・329は6層より出土した。328は口唇部に向かって緩く広がる形状で、口径は23.0cmである。内外面はハケ調整され、口縁部はヨコナデしている。329は把手部分が付いた状態の甕片である。胴部径は約21cmで、内外面の調整はハケ調整後に撫でている。把手の貼り付けは指ナデ押さえをしている。330・331は甕の把手部分である。いずれも指ナデによる整形をしている。390は中～下層出土、331は上層で出土している。

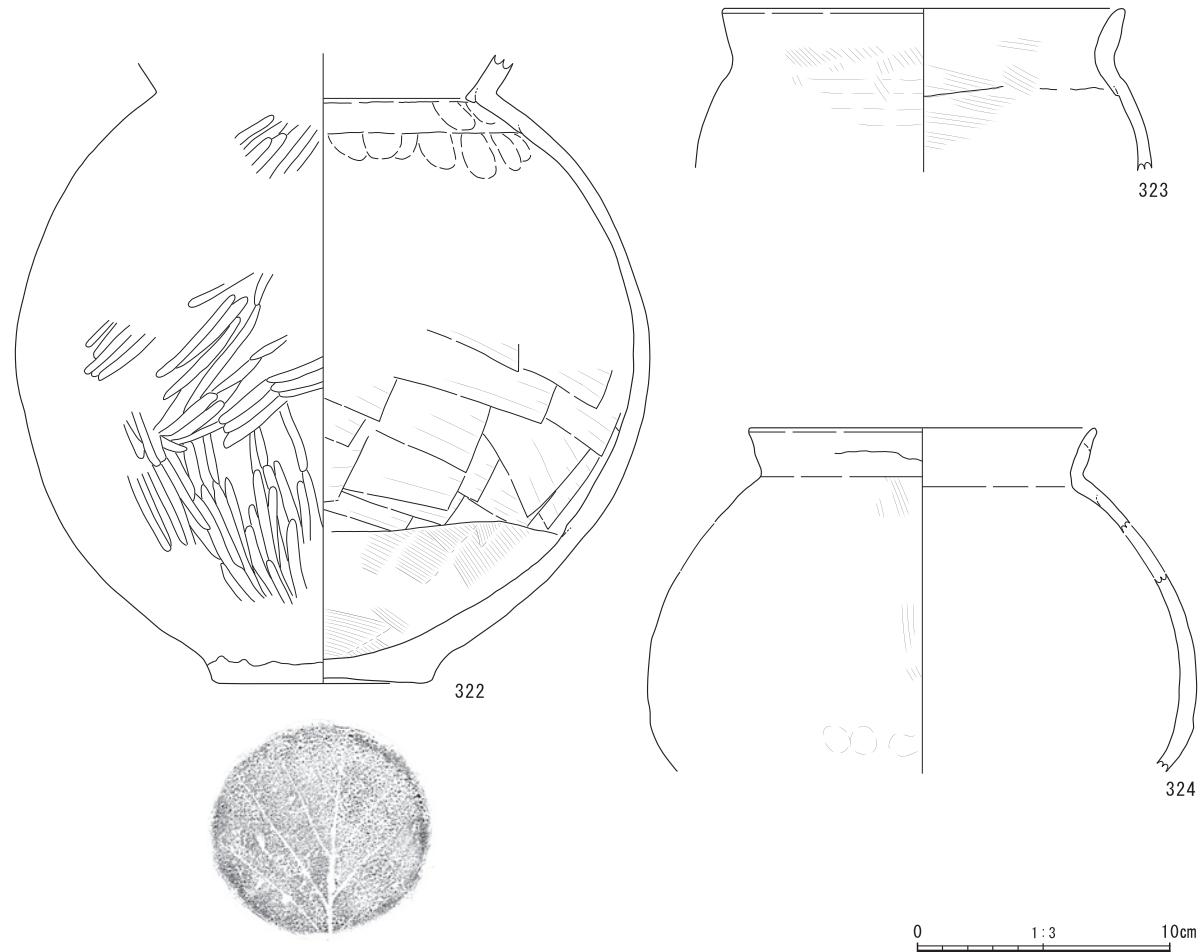
第104図332～346は須恵器である。332は坏蓋、333～341は坏身、342～344は高坏、345・346は穗である。332は口径12.0cm、器高は4.15cmで、蓋上部に焼成時の付着物がある。333は口径が10.9cmで、全体に歪みがある。334は下層より出土した坏身で70%ほど残存している。口径は11.9cmである。335は底部が欠損している。中層より出土し、口径は9.9cmと小振りな坏身である。336は上層より出土した坏身で95%とほぼ完全な形状に近い。口径は12.5cmで、内面には輪積みのような痕がある。底は未調整となっている。337は中・下層より出土した。口径は11.1cmで、全体に自然釉が付着し、調整痕が不明である。338は底部が欠損している。中・下層より出土し、口径は10.8cmと小型である。339は中層より出土した。口径は11.9cmで、外面には自然釉が厚く付着している。340は上層出土で、口径は復元値で13.0cm、器高は2.7cmと浅い坏である。外面には自然釉が付着する。341は口径9.7cm、器高は4.2cmと小型の坏身である。342は高坏の蓋で、蓋の頂部に摘みを持つ。摘みは平坦で中央が窪んでいる。口径は13.5cm、器高は4.8cmで、焼き膨れで形が歪となっている。下端部にはスノコ状の圧痕がある。343・345は高坏の坏部片である。343は口唇部と脚部が欠損している。中（2）層出土で、外面には櫛状工具による波状文がある。344は口径が10.7cm、最大径は12.4cmで、蓋受け部分には蓋の溶着がある。345は口縁部が欠損している。上～中層より出土した。孔は破片中にはなかった。外面は底部を持ちでヘラ削りし、櫛描き波状文が上下に配置されている。頸部の括れと胴部に沈線が巡っている。346は口縁部と底部が欠損している。最大径は9.95cmで、外面には頸の半分から下にカキ目がある。カキ目の一部は上部には櫛描き波状文がある。内面には自然釉が付着している。胴部穿孔の径は1.4cmである。



第99図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 10



第100図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 11

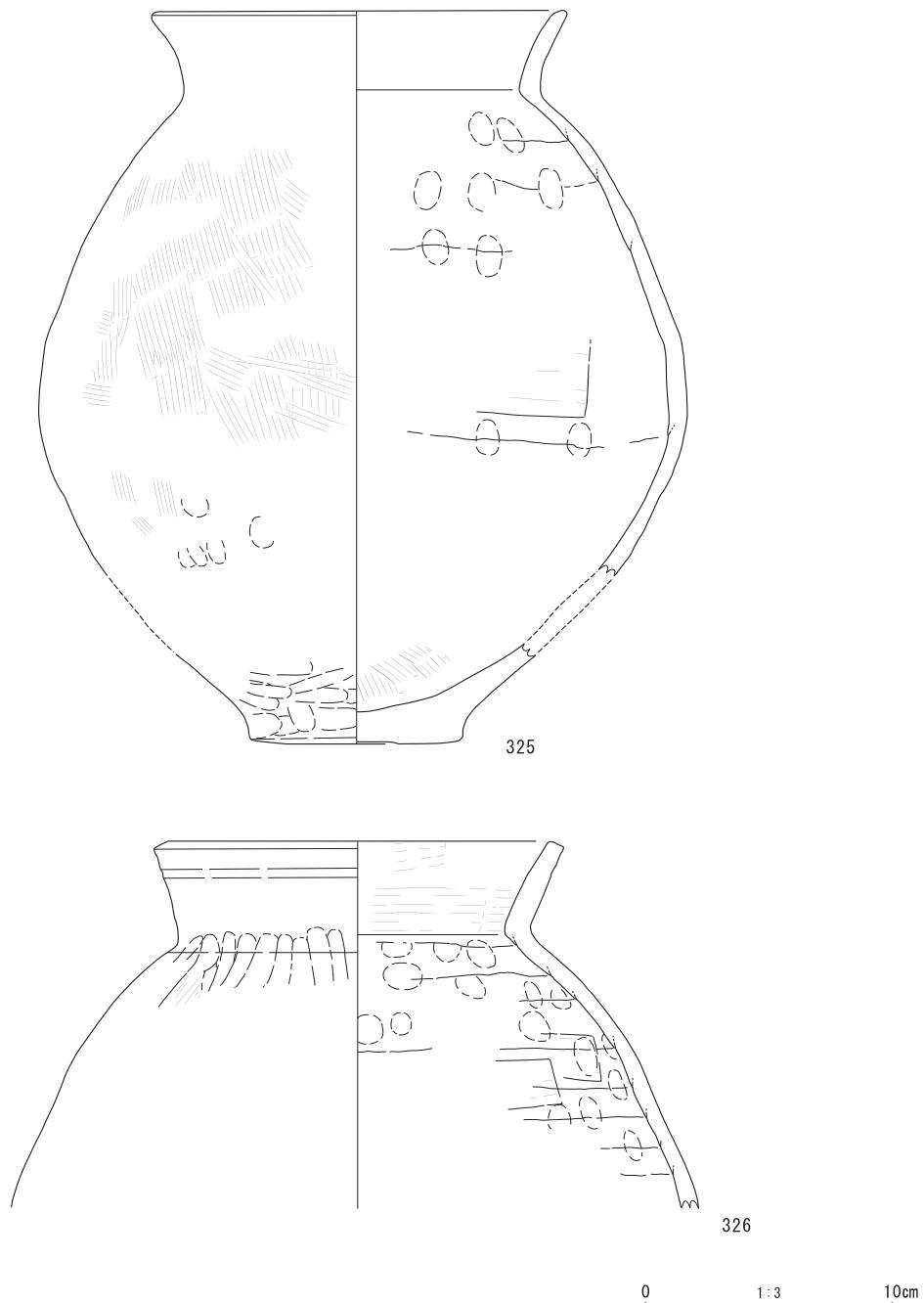


第101図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 12

第105図347～352はSD 8より出土した石製模造品である。347～350は臼玉で、覆土より出土した。347の直径は0.49cmで、高さも4.6cmと大きい。側面側は磨かれている。348は直径が0.42cmと径がやや小さい。各面とも研磨され表面には擦痕が見える。349も直径0.43cmと径が小さい。各面研磨されている。側面がやや算盤玉状に中央に稜を持っている。350は直径0.51cmの臼玉で、各面とも研磨されている。高さがなく薄い。石材同定の結果、すべて滑石製であることがわかっている。SD 8出土の臼玉は、SX 9 (SD 8最上層) 出土の臼玉とは、基本的なつくりが異なっている。

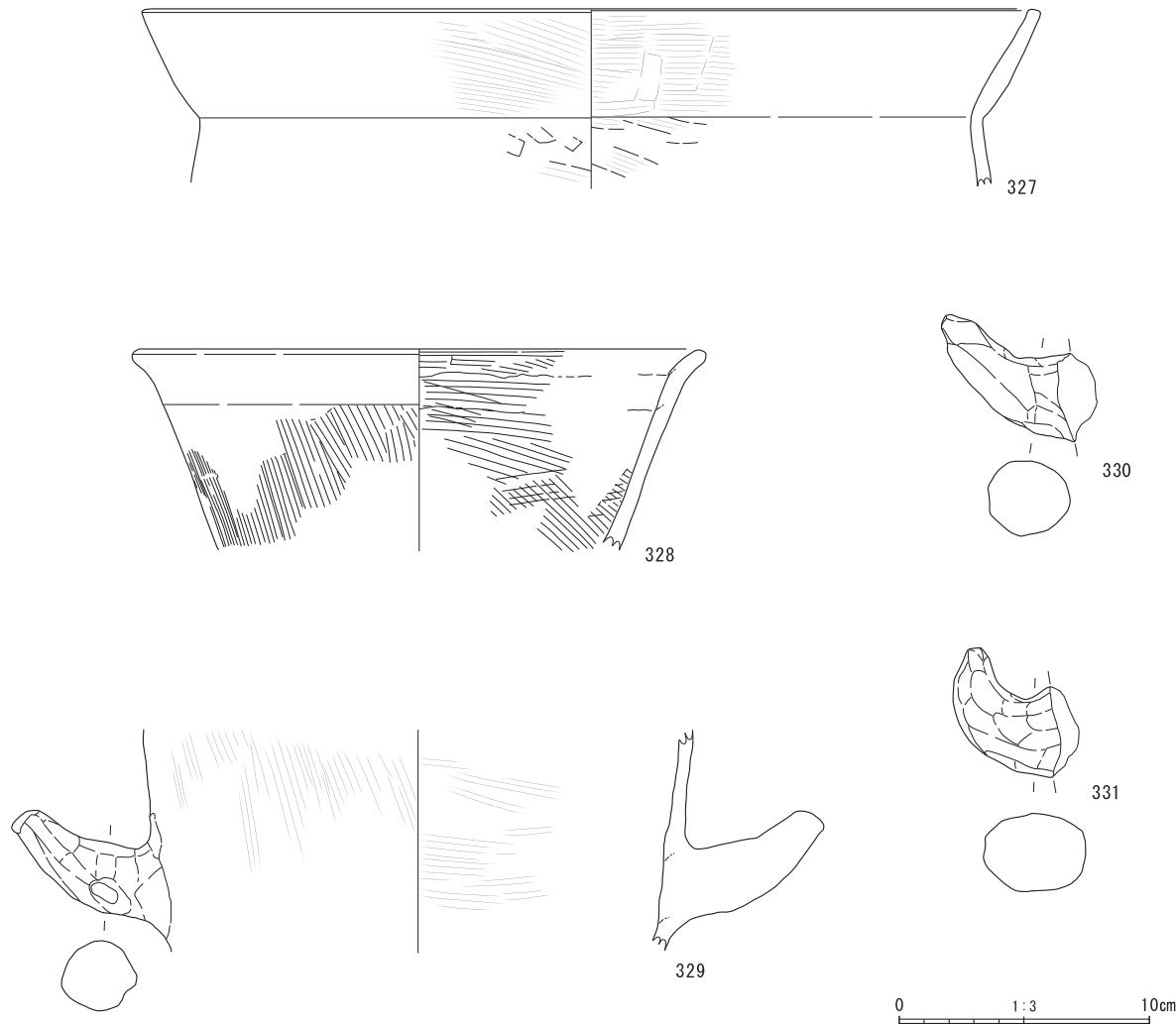
351は緑泥石製の勾玉である。模造品のひとつで、おそらく上下対象の形状だったと思われるが、下半部は欠損している。全面、丁寧に研磨されており、表面・裏面には擦痕もある。側面には面を作り出す研磨があり、丸みをつけている。穿孔の径は0.25cmである。352は緑泥石製の有孔円盤である。石材は板状剥離しやすい滑石を選んで作られている。全体の形状は正円ではなく、歪な橢円形である。右下方部は欠損している。表・裏ともに研磨痕があり、径0.1～0.2cmの貫通孔が2箇所にある。

第106図353～第114図407はSD 8より出土した木製品を器種ごとに掲載した。第106図353～355は農耕土木具である。353は鎌柄の端部である。グリップエンド部分のみ残存し、上部は欠損している。柄は径2.5cmほどの棒状に加工され、下端部は手が握部から滑り抜けないよう鍵の手状に突出部を作り出している。その向きから、右利き用の鎌柄であったことが想定できる。樹種はコジイで、芯持ち材ではなく、柾目材を用いている。表面には面を調整したときの加工痕が全面に残っている。下端面は平坦で、磨かれている。354は堅杵で、1/2ほど残存し、下方は欠損している。スダジイの芯持ち材



第102図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図13

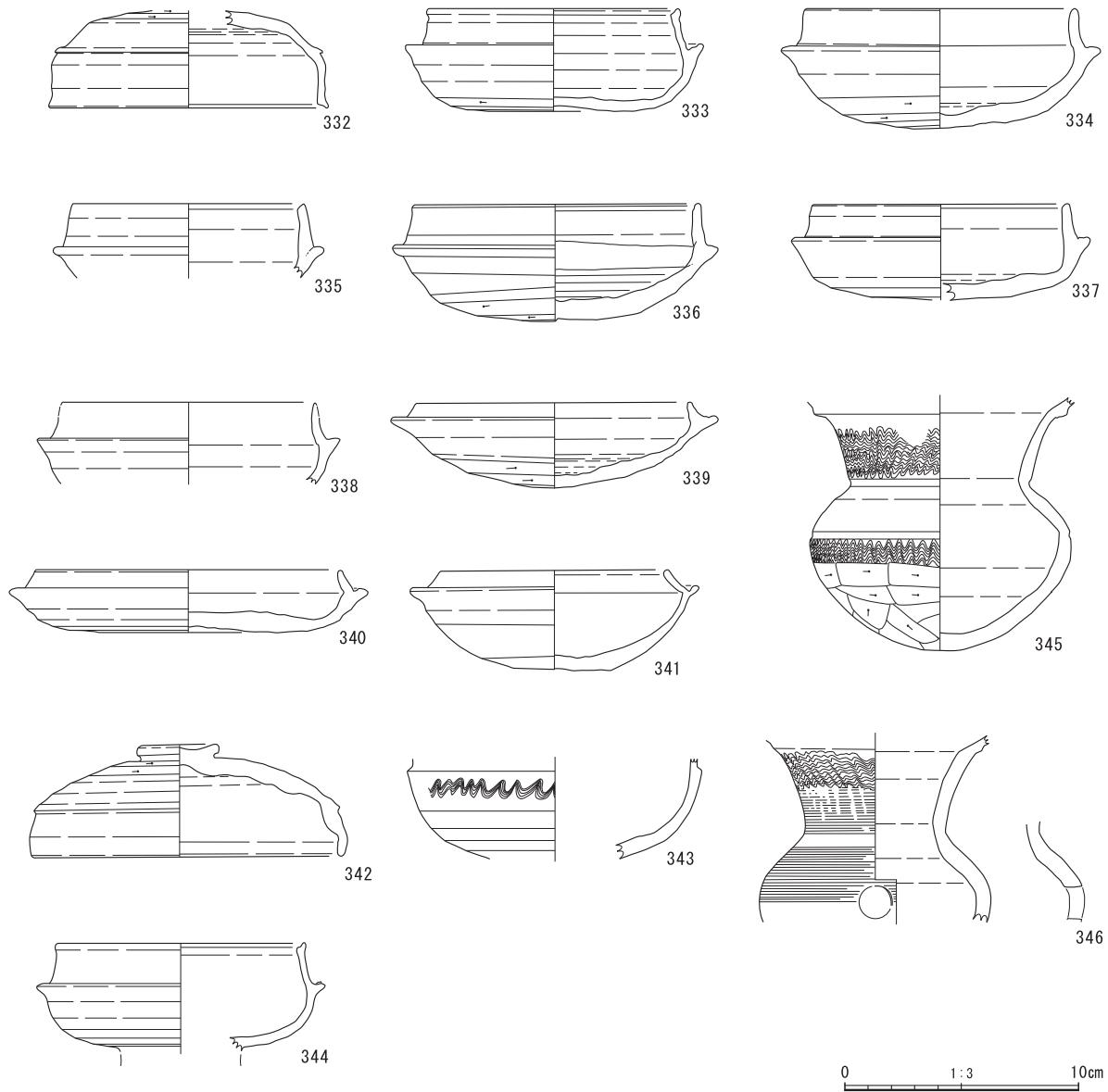
を使って整形している。直径は最大7.5cm、握部は3.9cmを測る。握部は9.5cmほど残存し、下方に向かって斜めに削られた加工痕が残っている。上端部は加工された痕が残っているが、摩滅が激しい。柄部や握部には特別な装飾は見られない。355は曲柄広鉗の鉗身である。通称「ナスピ型広鉗」と呼ばれ、刃先にはU字形鉄先が装着される。樹種はコナラ属アカガシ亜属の柾目材を用いて鉗身に整形している。表面は劣化しており、加工痕や縋縛痕は不明である。ほぼ完成品で、長さ44.7cm、最大幅16.8cm、厚さ1.4cm、刃部先端付近は0.6cmと薄い。上端部に有頭状の突起を作り出しているが一部欠損している。上部から徐々に幅広となるが、8cmほど下に、左右を切り欠き、括れを作り出している。突起と括れは、いずれも鉗の膝柄と鉗身を縋縛固定するために作り出されたもので、この時期の特徴とも言える



第103図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 14

形状である。括れから体部にかけては、緩やかに広がり、下端より 15 cmほどから再び幅を減していく。鉄先は幅 5 cm、長さ 5 cm 程の U字状の部分を作り出している。この部分に U字型鉄先を装着したのであろう。鉄先を嵌め込むため、非常に薄く作られている。前面は平坦面となっているが、後面はやや膨らみを持ち丸みを帯びている。

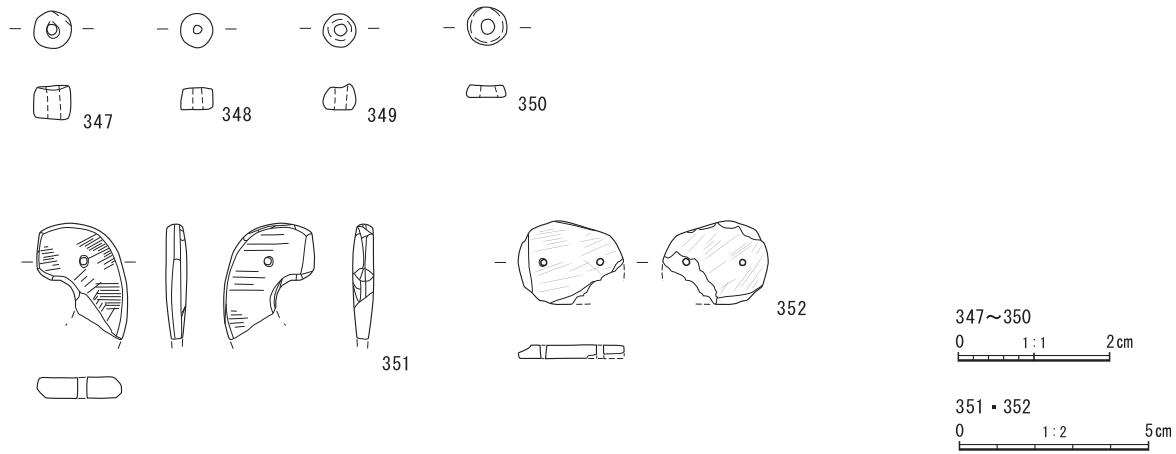
第107図 356 は紡織具に分類される糸巻き具の軸受台（タタリ台）と思われる。平面形態は長方形で、長軸は 30.7 cm、短軸は 21.5 cm を測る。高さは 7.9 cm と厚みがある。上面は 8.7 ~ 9.5 cm × 14 ~ 15.7 cm、下方面は 21.5 × 30.7 cm の台形状に整形している。側面側からの形状も台形を呈している。周囲は高さ 2.5 cm のところで、やや内側に面取りされている。中央には台形上面から下面にかけて方形孔が貫通している。中央の方形孔は 2.8 × 2.6 cm で、ほぼ直線に貫通している。上下左右側面には刃物で面を整形したときの加工痕が見える。裏面側は欠損していることもあるが、風化しているため加工痕跡は見えない。裏面中央の方形孔の周囲は 9.4 × 8.7 cm の方形を意識したすり鉢状に削り貫かれている。台形上面は平坦になっており、方形孔の周囲には直径 9 cm 程の円形の範囲に別部材（軸部か）が組み合っていたと思われる圧痕がある。材質はコナラ属クヌギ節の半裁材から作られた製品である。軸受台（タタリ台）の類例は県内では浜松市山ノ花遺跡や恒武西浦遺跡で同じ特徴を持つ形状の木製品が出土している（鈴木 1999）。



第104図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 15

357は一本で割り貫かれた台付の方形容器である。欠損部が多く、元々の形状や大きさは復元できない。平面形状は方形で現存長は39.4cm、幅は18.6cmほど残っている。底面には長方形の脚が削り出されている。底の形状が方形あるいは長方形であったか定かではないが、底面の四隅には想定4箇所(現存2箇所)の脚を作り出している。脚の大きさは4.9×3.5cmで、脚の上下には位置の目印とする刃物痕が刻まれている。脚の高さは1.4cmほどと低い。容器の縁は欠損しており、高さや深さは不明である。スギの板目材を使っており、木目方向を見ると、1/4に分割された材を伏せ、外周側から割り貫かれて制作したと想定される。木目の直徑からみて、かなりの大径材の表皮に近い部位を使っていることがわかる。

第108図358は武器に属する木製鞘尻である。上部欠損のため、平面形状はシズク型か、タマゴ型かは不明である。残存長は3.75cm、最大幅は2.75cm、2.75cmの厚みがある。中央部分が2cmほど方形に割り貫かれている。表面と側面には漆の塗膜が残っている。ただし漆の塗膜は残存状態が悪く、所々、剥離している。樹種は同定の結果、メギ属と出ているが確定は出来ていない。木の部位は芯持ち材が使



第105図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 16

われている。漆は黒色で、国産漆であることが分析結果で出ている（第8章第2節）。このことから使用された木材も国産と考えられる。ただ、樹種同定結果にもあるようにメギ属は大径木にはならないことから、別の樹木を使っている可能性も考えられる。漆については明治大学理工学部へ自然科学分析を依頼し、蛍光X線分析（XRF）と熱分解GC/MSを実施した。

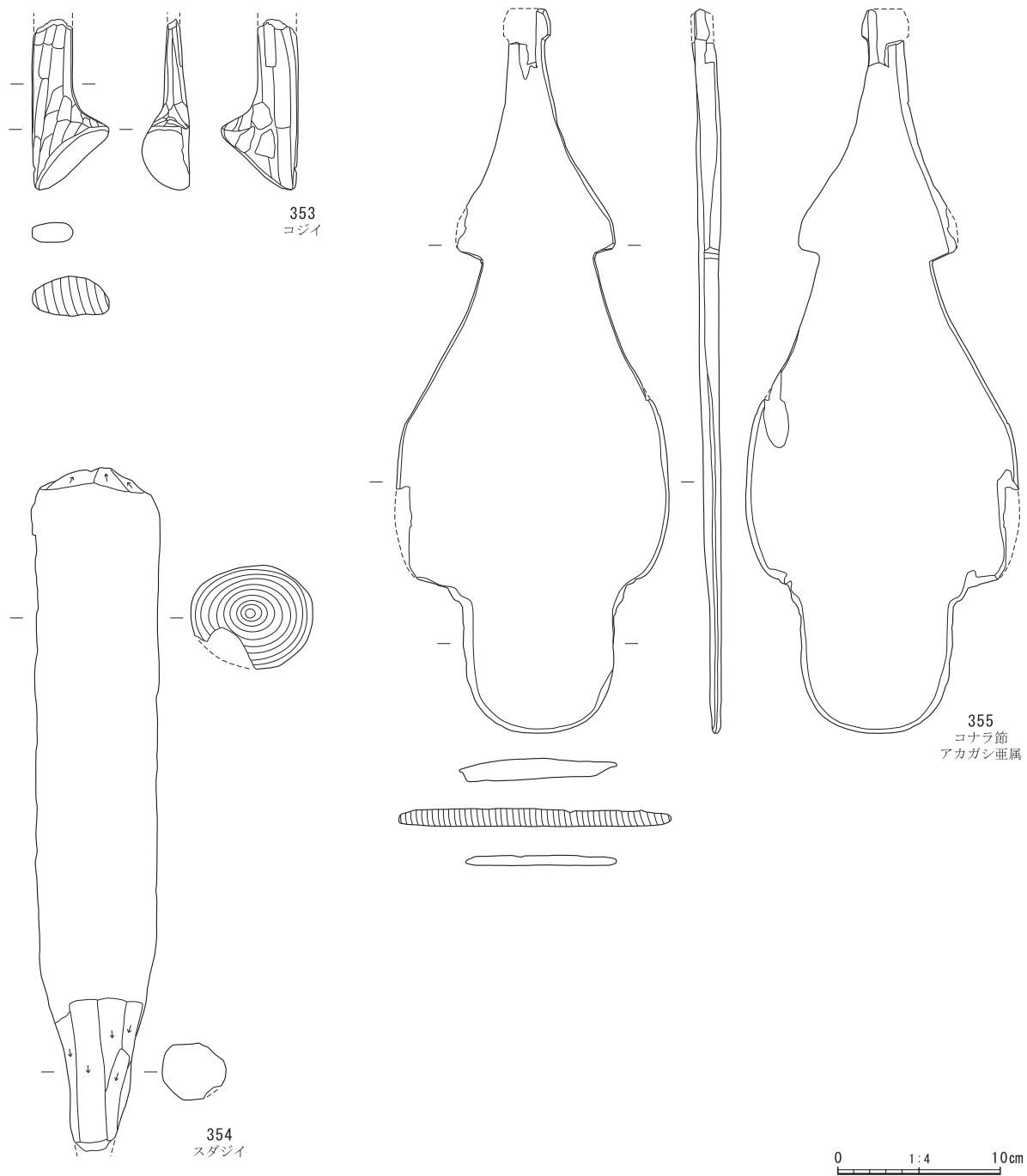
木製把頭や鞘尻は県内で12例ほどが出土している。浜松市山ノ花遺跡3例、同市恒武西浦遺跡1例、三島市仁坂遺跡1例、同市夏目木16号墳2例、袋井市五ヶ山B2号墳3例、菊川市八幡ヶ谷古墳1号棺（漆塗膜のみ）1例、藤枝市下藪田遺跡1例等がある。類例樹種はカエデ属やツバキが多い。なかでも最も形状が近いのは、恒武西浦遺跡の鞘尻（樹種はヤブツバキ）と報告されている木製品である。県外類例は奈良県谷遺跡や南郷大東遺跡、布留遺跡、三重県六太A遺跡、島根県前田遺跡等が挙げられる。

第109図359～第111図375はSD 8より出土した建築材である。359はサワラの板目材を整形加工した板状木製品である。平面形態は上端が43.9cm、下端が56.1cmで台形状を呈する。上端面は水平だが、下端面は36cm幅で浅く弧状に削られている。左右両脇には $3.1 \times 2.3\text{cm}$ 、 $2.6 \times 1.7\text{cm}$ の方形孔がある。本品の用途は、サワラ材が壁板でも使われていることから、建築部材の可能性が高い。また形状の特徴から妻壁（註1）であることも考えられる。妻壁は切り妻屋根側面の妻梁より上に位置する三角形の壁を指す。一枚板ではなく、複数枚の板を組み合わせて壁を構築することから、縛るための孔が必要となる。359の左右両脇にある方形孔は、こうした縛る孔の可能性がある。

360は栓である。上部には長さ7.7cm、最大幅8.8cmの頭部を作り出し、下半部は長さ14.2cm、幅3cm程の棒状になっている。下端部は欠損している。頭部は上端部が平坦で、表面は加工し、裏面は割り面となっている。樹種はツガ属（マツ科）で、板目材から栓の形状に整形している。

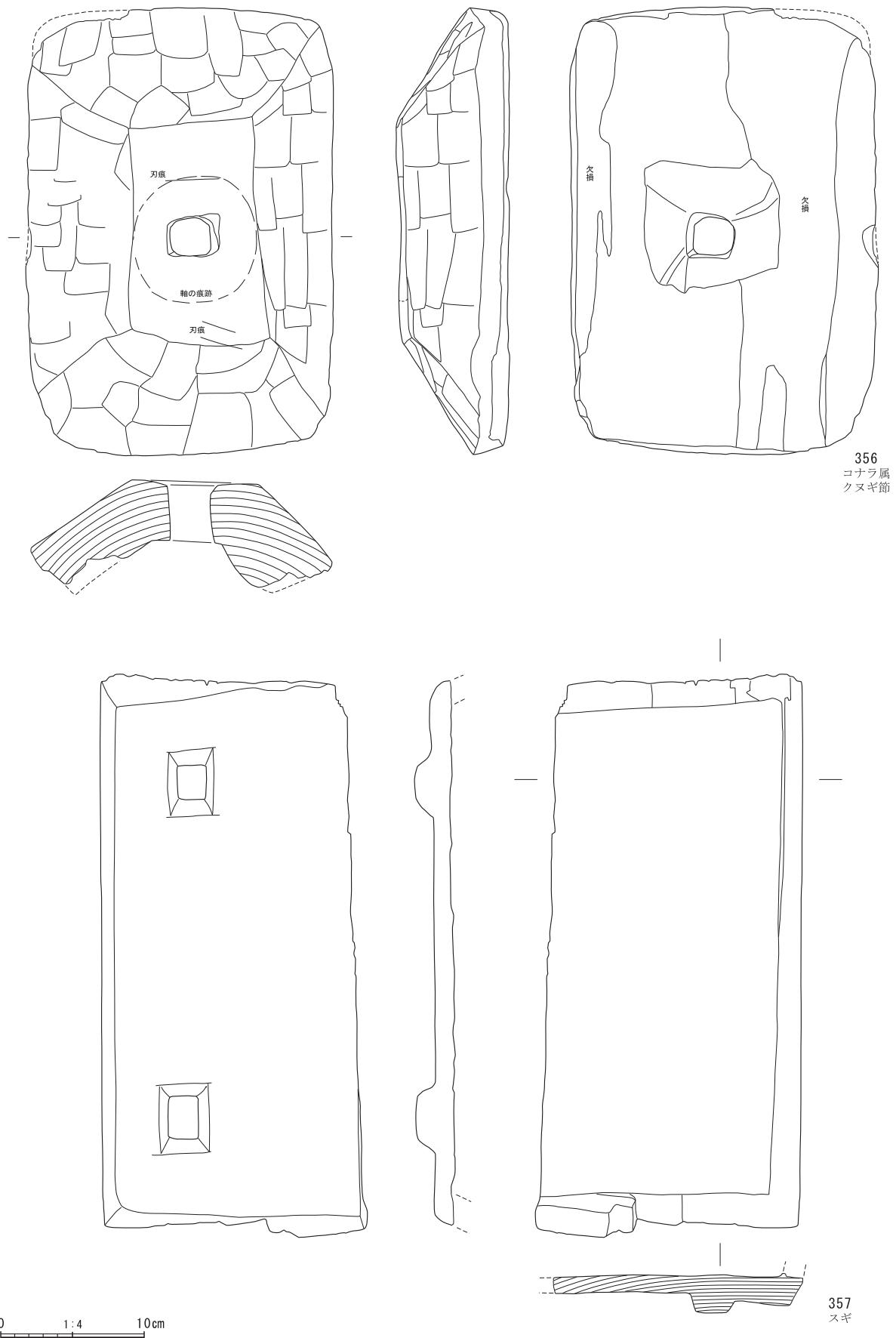
361は高床式倉庫等の入り口に使われる扉の把手部分である。樹種はイヌマキ属で、板目材を使っている。通常、扉板と把手は一木で作られているものだが、その扉板から把手部分だけが木目方向で剥がれてしまった状態である。長さは41cmで、正面形状は中央が最も括れ、上部と下部は幅広になっている。断面は台形状で、中央付近は3cm幅程度である。側面から見ると細い三日月形で、中央部に方形孔の痕跡がある。門が通る孔の一部であろう。孔の残存は長さ5.35cm、深さは0.9cmである。剥がれた部分以外は全面加工されている。側面には整形時の加工痕が残っている。小型の扉板の把手と考えられる。

362は掘立柱建物の出入口に方立や扉と組み合う「蹴放し」と呼ばれる部材である。全長は141.7cm、最大幅は14.7cm、最大厚は9.6cmを測る。体部の一部が欠けているものの、ほぼ完形に近い形状で復元できる。回転軸を受ける孔が体部の右寄りに2箇所あることから、観音開きの扉板が付くと想定され

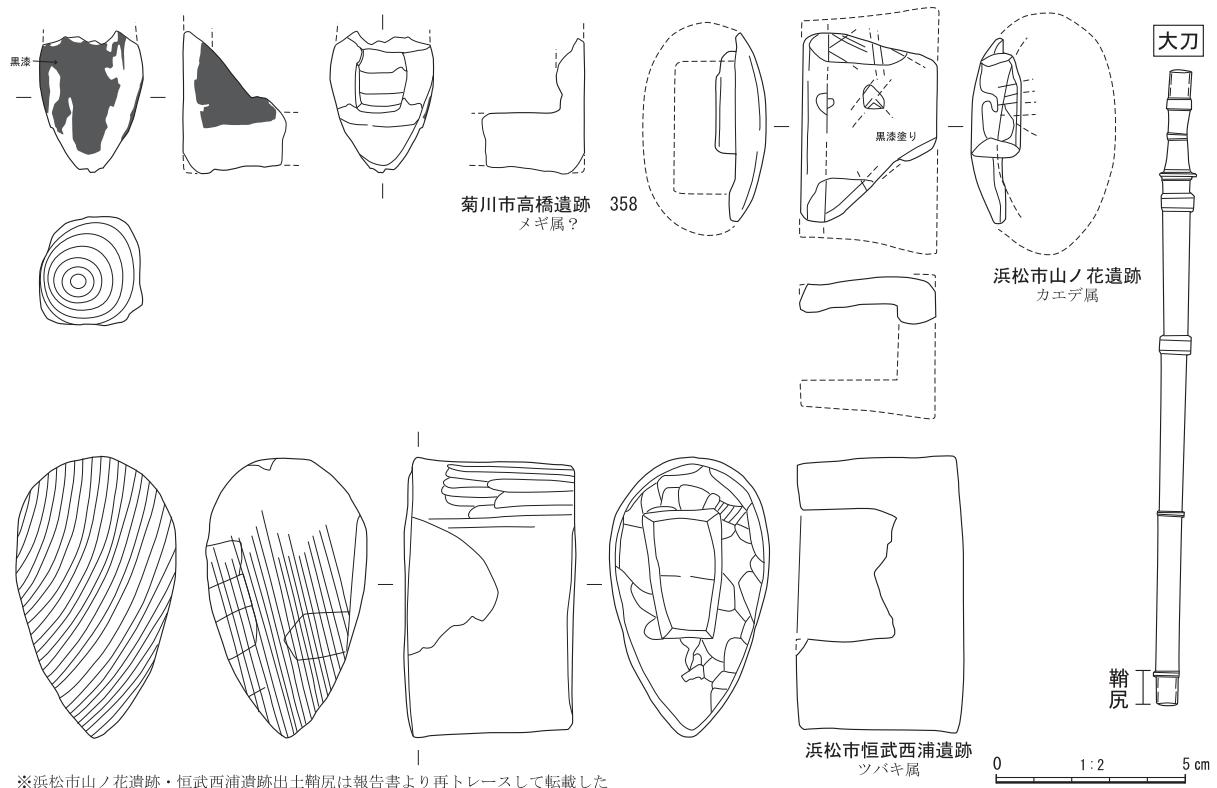


第106図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 17

る。軸受けの孔は円形に近い方形で、大きさは $5 \times 4$  cmほどである。両孔の左側には扉板の軸部があたったような擦れた痕がある。軸受けの孔の中心間で 61.6 cmを測り、扉板 1枚あたりの幅は 30 ~ 35 cmほどであったと思われる。部材の中心部には台形状の突出部があり、その高さは 5 cmほどある。突出部には、ちょうど中程の位置に浅い窪みが出来ており、扉板があたった痕の可能性がある。軸部から浅い窪みまでの長さは、扉板に向かって左側のほうが長い。方立板は扉板の両側に付く部材で、本品の上面に加工された溝部分に嵌る。方立板の全長は不明だが、幅は 18.2 ~ 18.7 cm、厚みは 2.5 cm程の方立板であったと考えられる。方立板の両脇にある部材は方立板と壁板を受けるものである。材の形状は推測できないが、 $6.5 \times 4.5$  cmの方形孔に差込む出柄が付く部材と想定できる。材質はネムノキで、厚さ



第107図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 18



第108図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図19

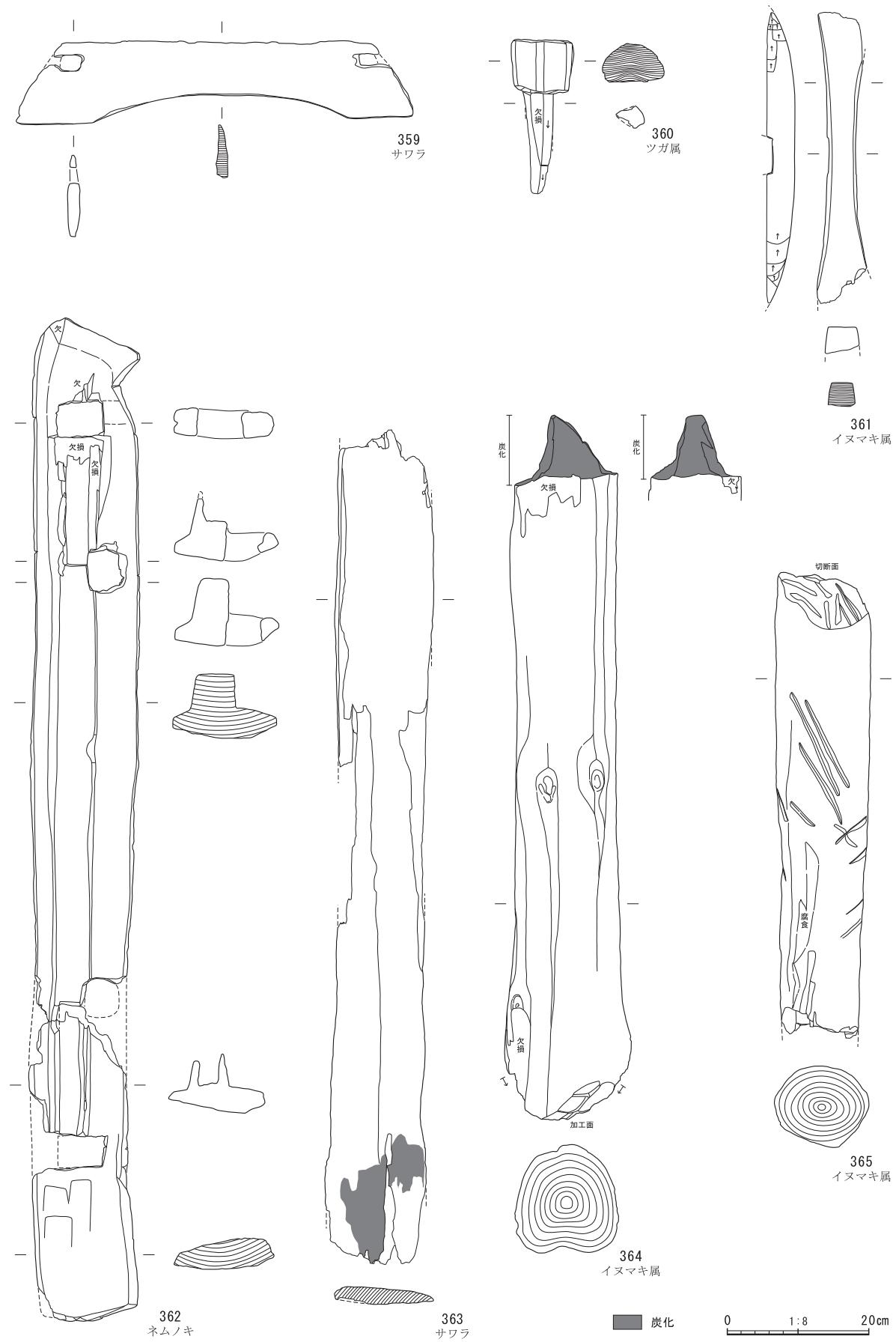
10 cm程の板目材から整形加工している。樹種同定の結果では「ネムノキは東北地方中部以南の全国の山野、沢沿いの陽光地に普通に生育する落葉小高木で、幹径 30 cm、樹高 8 m くらいになる。材の成長は早く、軽軟で脆く、保存、耐朽性も低く、各種器具材に使われる程度である。」とある。建築材としては不向きであり、長期間使われる建築物に選択された材とは考えにくい。一時的な使用を目的とする掘立柱建物等の建築物が存在した可能性もある。

363 は長さ 118.0 cm の整形板で、壁板の可能性がある。上下端部とも欠損していることから、長さはそれ以上であった可能性がある。中央部分も損傷が著しく、全体に風化している。下方は一部に炭化した痕跡が見られる。サワラの追柾目材で、木目が非常に細かい。炭化した痕から、建物の部材に使われていた段階で火を受けた可能性がある。

364 は柱に使用されていた木材と思われる。直径 17.9 cm のイヌマキ属の丸木を使っている。残存長は 99.7 cm である。上端部から 10 cm の部分が炭化して焼け落ちてしまっている。下端部は鋭利な刃物で切断した痕跡がある。下方はやや径が大きいことから根に近い部分であったかもしれない。表面には特別な加工はなく、樹皮を取り去り、枝を払った状態の丸太を柱として使ったと考えられる。上端部の一部分しか火を受けていないことから、建築物の部材として組み合った状態で火災を受けた可能性がある。

365 も柱である。残存長 65.7 cm、最大径は 13.5 cm の丸木柱である。イヌマキ属の芯持ち材を使用している。柱面には数箇所、刃物痕がある。上面は斜めに切断した痕跡があり、刃物痕が複数残っている。下方は欠損している。366 や 367 と同様の柱であろう。

366 は上部分を二又に整形した柱である。ほぼ完形に近く、長さ 140.0 cm、柱部分の最大径は 11 cm 前後ある。上部の二又部分は、ちょうど枝分かれしていた木材を利用している。二又部分の根元には、梁・桁等の横架材を受けるための平坦面を作り出している。平坦面の形状から約 8.0 ~ 8.5 cm 幅の横架材だったと考えられる。二又部分の最大長は 11 cm で、上端部にも整形加工痕が明瞭に残っている。柱面に



第109図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 20

は顯著な加工は見えない。下端部は腐食し欠損している。樹種はコナラ属コナラ節の芯持ち材で、表面には節や、一部に樹皮が残っている。本製品は樹皮が残っていたこともあり、未完成品と考えるか、もしくは長期間の使用を目的としない建物に使われたのか、どちらの可能性も考慮する必要がある。

367 は 366 と同様に掘立柱建物か堅穴住居等に使われた柱である。上方の一部が欠損しているものの、ほぼ原形が復元できる完形品と言える。長さは 167.0 cm で、サカキの芯持ち材を使っている。最大径は 15.3 cm で、下方が根元に近い部分だったであろう。上下端部は平坦に削られており、加工痕も明瞭に残っている。上端より 45 cm ほど下に何かにあたっていた様な圧痕がある。側面の一部には樹皮も残っていた。表面には刃物の傷が複数見られる。柱の表面は現状ではひび割れているが、材そのものがもともと全体にねじれていたのである。サカキ材は、当地域では建築材としても利用されていた傾向がある。本製品も未完成品とするか、一時的な利用を目的としていたかは、今後、検証する必要があるだろう。

368 は残存長が 46.85 cm、最大径は 16.9 cm の柱である。イヌマキ属の芯持ち丸太材であり、上部は欠損している。下端部は左右両脇から切断されたときの刃物痕が残っている。表面には全体的に腐食しているため、表面の調整は見られない。樹種の選択と寸法からみても、柱として使われていたものと判断しても良いだろう。

369 は掘立柱建物や堅穴住居等の柱として使われていた木製品であろう。残存長は 43.6 cm、最大直径は 14.1 cm で、材はイヌマキ属の芯持ち丸太材が使われている。上部は欠損し、全体に欠損部分が多く腐食している。下端部面は材を切断したときの刃物痕が残っている。工具である鉄製斧の最大幅は 4.5 cm ほどであったと想定される。

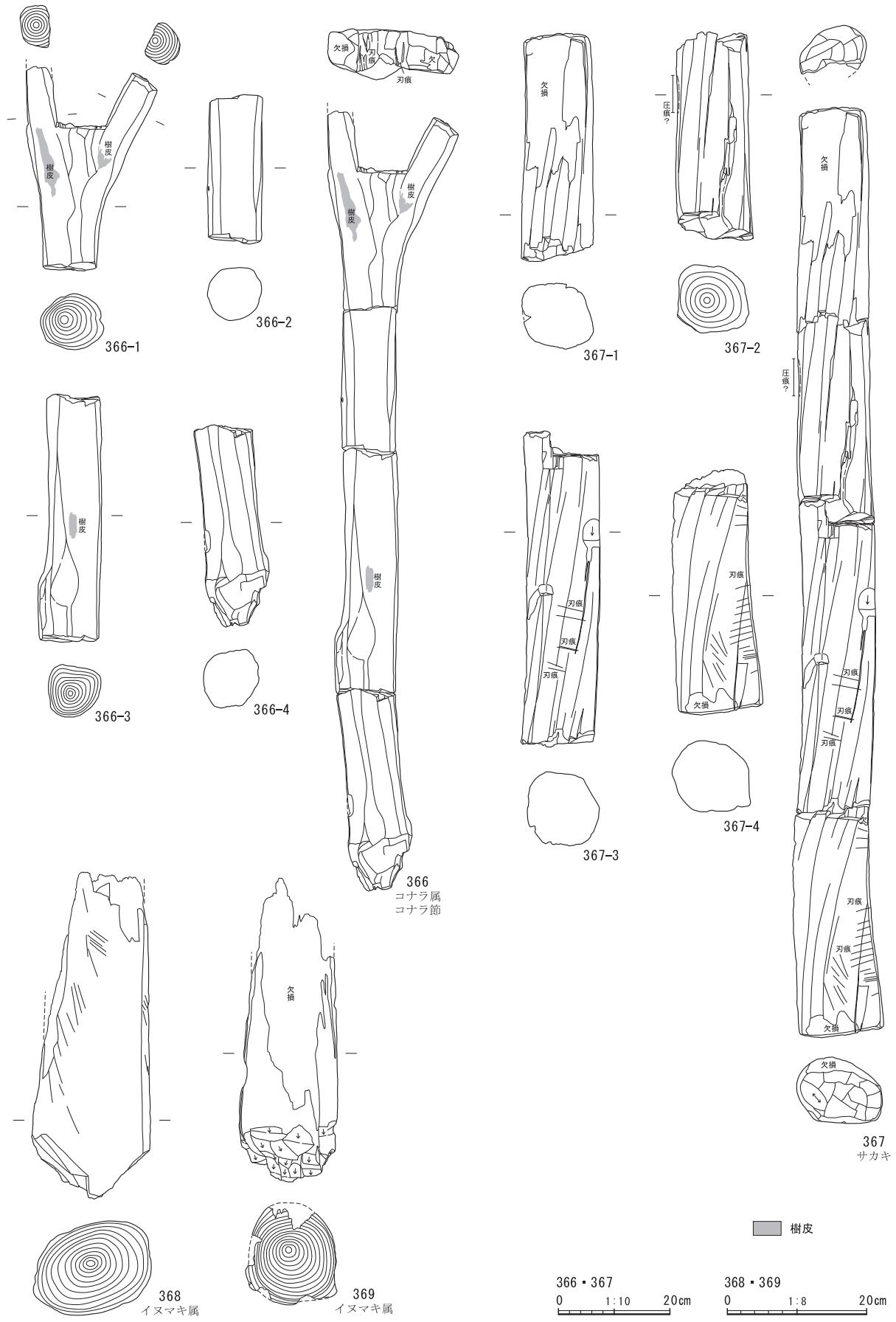
第 111 図 370 はイヌマキ属の芯持ち材で、長さは 79.8 cm、直径 8.0 cm の棒状木製品である。上下端部は欠損している。下半の一部と右側面から裏面全体にかけて火を受けて炭化している。左側面と下方に刃物痕がわずかに見られるものの、それ以外はっきりとした加工等の痕跡はない。柱もしくは垂木のような用途で使われたものであろうか。

371 は垂木である。長さは、途中欠損し、接合点がないことから正確な数値ではないが、77.8 cm 以上ある。直径は 5.4 cm 程の棒状で、イヌマキ属の芯持ち材で作られている。上端部は丸みをつけて加工してある。上部には端部より 2.2 cm のところから 13.4 cm 程の長さの抉り部分がある。下方は切断されている。表面には樹皮が所々に残っている。枝はまっすぐではなく、枝の節が切断されたところもある。全体的に丁寧な加工ではなく、一次利用的に作られたように見える。

372 も垂木である。長さ 124.9 cm、径 3.8 cm ほどのイヌマキ属の芯持ち材である。表面は丸木のままで、複数箇所に枝を払った痕跡がある。上端部と下端部が一部欠損しているが、ほぼ元の形に近い状態である。上端部は刃物で切断されたのか、刃物痕が斜めにあたっている。上端部から 7.7 cm のところから 6.5 cm の長さを浅く抉り込んでいる。下端部は斜めに切り落とされている。

373 は柱または梁・桁等の横架材として使われた製品と考えられる。木材はイヌマキ属の芯持ち材を使っている。全長 212.1 cm、最大幅は 10.5 cm、厚みは 8.0 cm を測る。上部は端部から 12.75 cm のところで切り欠いて、段を作り出している。段の表面は整形されず割り面のままである。さらに上端部は段のある裏面側を斜めに削っている。下方は腐食し欠損している。表面は切り欠きから下方まで、手斧で面を作っている。面調整は上部から下部に向けて一方向に削っている。使われた手斧は身幅 4 ~ 5 cm 前後と想定される。裏の自然面には虫食い痕がある。使われているイヌマキ属は当遺跡のなかでも柱等の建築材として多用されていることから、本製品も柱あるいは横架材等であった可能性がある。

374 は長さ 157.8 cm、直径 10 cm 弱の丸木で、樹皮はなく、ほぼ全面自然面の木製品である。上部は欠損している。上端部から 8.9 cm の所に一部加工面がある。下端部は平坦に切断された面となっている。イヌマキ属の芯持ち材であることから、建築材の柱として使われていた可能性が高い。



第110図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 21

375 の直径は最大 13.7 cm、長さは 66.9 cm のコナラ属アカガシ亜属の芯持ち材で、柱の可能性がある。広葉樹材であるため、表面の加工は見えないが、恐らく樹皮を取った状態で使用されていたと思われる。上端部は切断された面で刃物痕が残っている。下端部には幅 4.1 cm、長さ 7.6 cm の切り欠きが一部残存している。

376 は杭状に加工された木製品である。タイミンタチバナの芯持ち材で、表面に加工は無く、枝を払った状態で使っている。下端部は先端から 17.8 cm までを 2 面加工し、尖らせてある。上部は欠損している。出土した遺構は SD 8 だが、形状からして杭として使用されていたものと考えられる。

377 は長さ 81.9 cm、幅は 4.7 cm の角材を使った杭である。イヌマキ属の辺材から割り取られた板目材で裏面の自然面以外は 3 面とも割り面となっている。上部は 30 cm ほどのところまで激しく炭化している。下方は先端を 12.5 cm の長さを杭状に尖らせてある。表面は特に加工がなく、割り面のまま使用している。

第 112 図 378 はヒノキの柾目材の板状木製品である。左側面の一部を欠損。表裏面は面調整がなく割り面の状態のままである。左右側面は垂直面となっている。上下端部は上面に向かって斜めに切断されている。用途は不明である。

379 の使われている樹種はコナラ属クヌギ節で芯持ちの丸木材である。広葉樹であるため、全体の残存状態は良くない。表裏面は平坦に加工された面があるものの、表面の風化により加工痕などは見えない。上下端部も加工面である。全長 44.1 cm、幅 12.9 cm、厚さは 8.4 cm である。用途は特定できない。

380 は全長 61.6 cm、最大幅 3.2 cm の角材である。ヒノキの板目材が使われている。上端部は切断面、下方は欠損している。表裏は加工された面だが、左右は割り面のままである。上端から中央部分まで表面から側面まで炭化しており、上端から 13 cm 下の幅 13 cm 程には、焦げていない部分がある。建築部材などとして使われ、組み合っていたところが延焼を免れたのであろうか。

381 は最大直径 12.6 cm のイヌマキ属の芯持ち材である。上下は欠損している。体部に 2 箇所ほど刃物痕がある。10 cm 以上の直径を持つことやイヌマキ属であることから、柱等の建築材であったものだろう。

382 は用途が特定できない木製品である。長さ 77.2 cm、径 3 cm 程の細長い棒状を呈する。上端は、ほぼ垂直に切断されている。下方は欠損。表面には加工がなく、枝を打ち払っただけの状態である。樹種はコナラ属アカガシ亜属の幼木である。近隣に植生する手近な雑木を使用したものであろう。

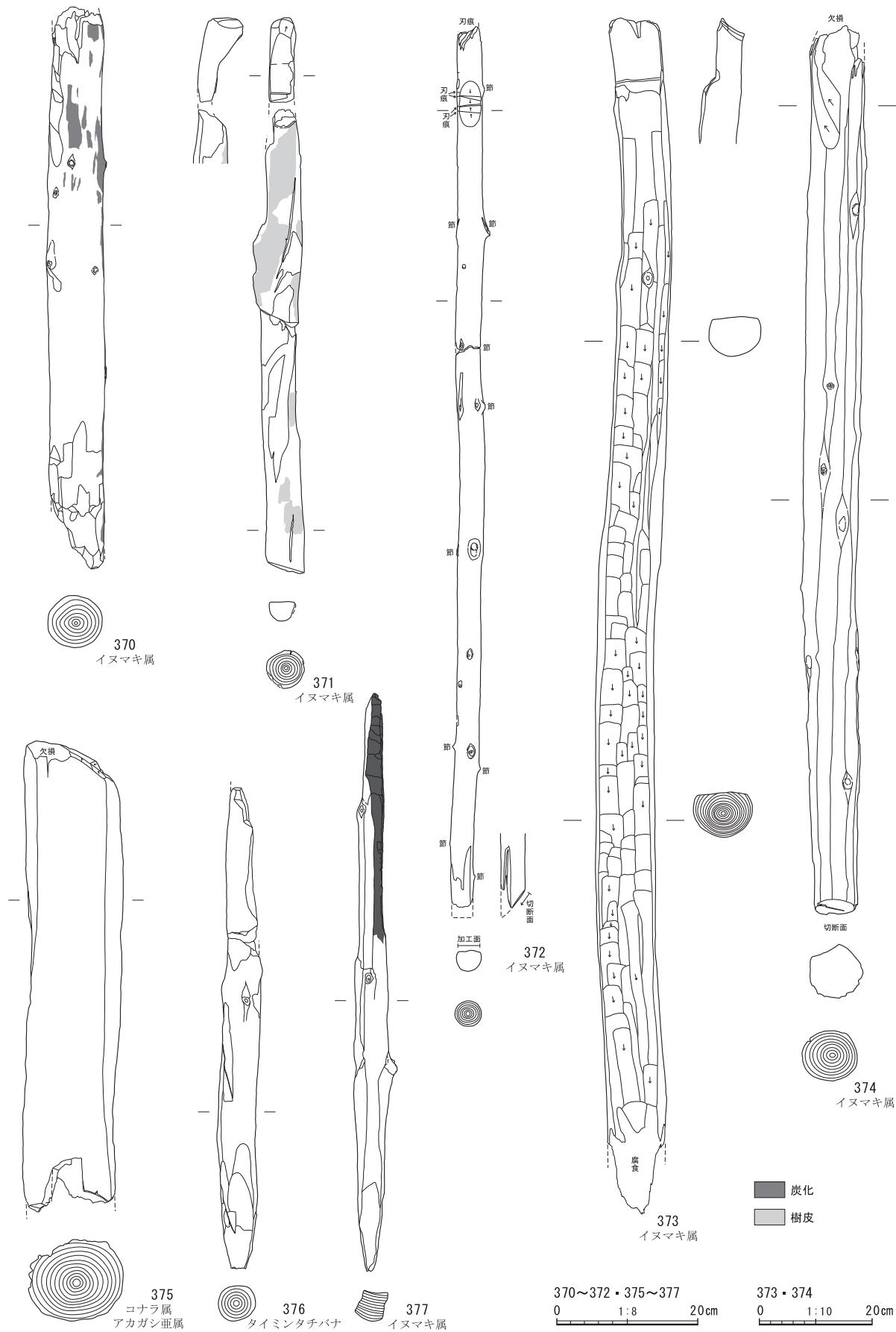
383 は杭か？ 径 5 cm 程の芯持ちのヒサカキ材で、全体に樹皮が付いた状態である。上端部は潰れて歪んでいる。下端部は 3 面を刃物で削って杭状に加工している。ヒサカキ材はサカキやヤブツバキとよく似ており、同じように使われる。

384 の樹種はイヌマキ属の芯持ち材である。表面に特別な加工は無く、枝を払っただけの状態になっている。上端部には刃物で切断した痕が残っている。下方は下端部を杭状に先端を尖らせてある。用途不明としたが、形状からみて杭として使用された可能性が高い。

385 の現存長は 106.0 cm、最大径は 5.7 cm で、イヌマキ属の芯持ち材である。上下端部は欠損し、特に下端部は腐食が著しく進んでいる。表面には特に加工の痕跡はなく、枝払いがなされているだけである。同材は建築部材に多用される材であることから、垂木等に使われていた可能性がある。

第 113 図 386 は用途不明の木製品である。最大長 18.2 cm のスギの薄板である。木目は板目で、厚さは 0.3 cm と薄い。欠損部分が多く、現在の形状からは用途が特定できない。下面には浅く弧を描くように削り込まれている。

387 はイチイガシの柾目材で整形された板である。残存長は 9.1 cm、幅は 10.4 cm、厚さ 0.9 cm と薄いが、やや乾燥して収縮が見られる。左側面と右側面の一部が元の形状を残している。欠損部分が多いため元



第111図 1-1・2-1区SD 8出土遺物実測図 22

の形状復元は難しいが、イチイガシという樹種からみて、鍬・鋤等の農耕土木具である可能性が高い。高橋遺跡ではU字型鉄先を装着する曲柄広鍬が出土していることから、U字型鉄先を嵌め込む鍬身部分であった可能性がある。

388はヒノキの板目材である。非常に木目が細かい材を使っている。左右表裏は面として整形されている。上下端部には切断したような刃物痕が見られる。長さ調整した際に出た端材だろうか。

389は棒状の芯持ち材で、上下端部が欠損している。表面に目立った加工はなく、一部には樹皮も残っている。正面側は浅く窪んでいる。樹種はイボタノキ属。本県では、あまり木製品には使用されない樹種を使っている。手近な雑木を利用したもののか、もしくは建築部材の垂木の可能性がある。いずれにしても欠損がひどく、用途が特定できない。

390はイヌマキ属の追柾目材で、ほぼ全面に手斧痕がある。形状は角柱状で、上端部は左右から削られて鶴頭状に尖っている。下方にも斜めに切断された刃物痕が残っている。残存長は20.3m、幅は6cm、厚みは4.7cmである。両側面には細かい刃物痕がある。用途は特定できないが、全面整形された材であり、樹種がイヌマキ属であることから、同樹種が多用されている建築部材の一部であった可能性がある。

391はミズキの柾目材である。上部は4.7cmほど円柱状の出柄がある。下方は厚さ2.6cmの板状になっている。左側面と下方は欠損している。当初、鍬・鋤等の農耕土木具である可能性を考えたが、樹種がミズキであることから、農耕土木具であった可能性は極めて低い。農耕土木具であれば、アカガシ亜属のなかでもイチイガシが多用される。それ以外の樹種が使われることは、ほとんどないと言えるほど、樹種選択が明確なのである。こうしたことから用途が不明な木製品のなかへ含めた。

392は長方形に面加工して整形された板である。表面、上面、左右両面は加工面で、裏面は割り面である。下方は欠損か、意図的に切断されたかの判別は出来なかった。しかし切断の可能性は高い。幅17.8cm、長さ12.6cm、厚さは最大4.0cmと厚みがある。表面は手斧削りで平坦にしている。また左側面は0.7cmほど切り込まれた段差がある。こうした加工から床板などの建築部材の一部だったであろう。床板ならば、見える側の面のみ加工する場合も考えられる。本製品は床板などの設置時に不必要な分を切断して出た端材であった可能性もある。樹種はツガ属（マツ科）。当遺跡ではツガ属（マツ科）が栓にも使われている。以上のことから、建築部材とも考えられる。

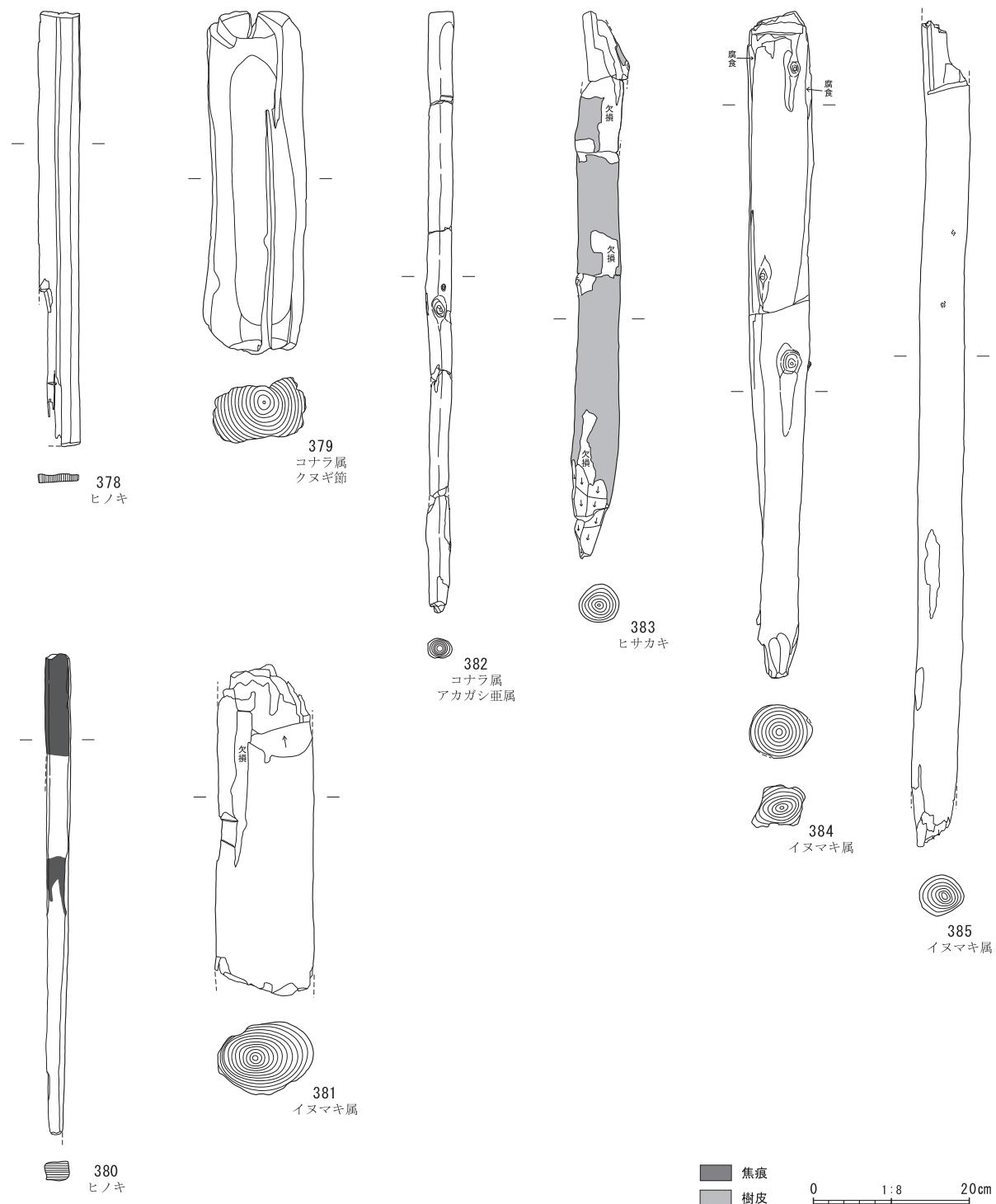
393はスギ材の板目板で、幅16.6cm、厚みは最大3.2cmの整形された板である。上部は欠損か切断かは腐食しており、はっきりとしない。下方も腐食により、やや薄くなっている。正面には幅4～5cmほどの鋭利な刃物の痕跡が複数ある。

394は用途が不明な木製品である。スギの追柾目材を加工している。12.4cm程の長方形の板状だが、左右が欠損している。上下端部は加工面で、表裏面は平坦面を作り出すために面調整されている。加工痕は見えない。右側面に円形孔と見られる貫通孔の痕がある。

395は2cmの厚みを超える柾目板で、材はコジイである。広葉樹材であるため、表面が磨耗し加工痕等は観察できない。何らかの用材かとして使われて、余った材が廃棄されたかもしれないが、用途は特定できない。

396は長さ18.1cm、幅8.1cmのミカン割りから整形へと進む途中の段階の柾目板である。広葉樹材は放射組織が発達しているため放射組織に沿って木材を分割し、ミカン割り材から整形板を作り出すのが一般的である。本資料はまだ調整には至っていない段階のものである。当初、広葉樹の柾目材であったことから、鍬・鋤等の農耕土木具と思われたが、樹種同定の結果、ミズキ材であったため、その可能性は極めて低いと考えられる。

397はスギ材の板で、木目は追い柾目である。右角部分と左側面、下方は欠損している。厚みが1cm程の板として加工整形されているものだが、欠損部分が多く、用途は不明とした。

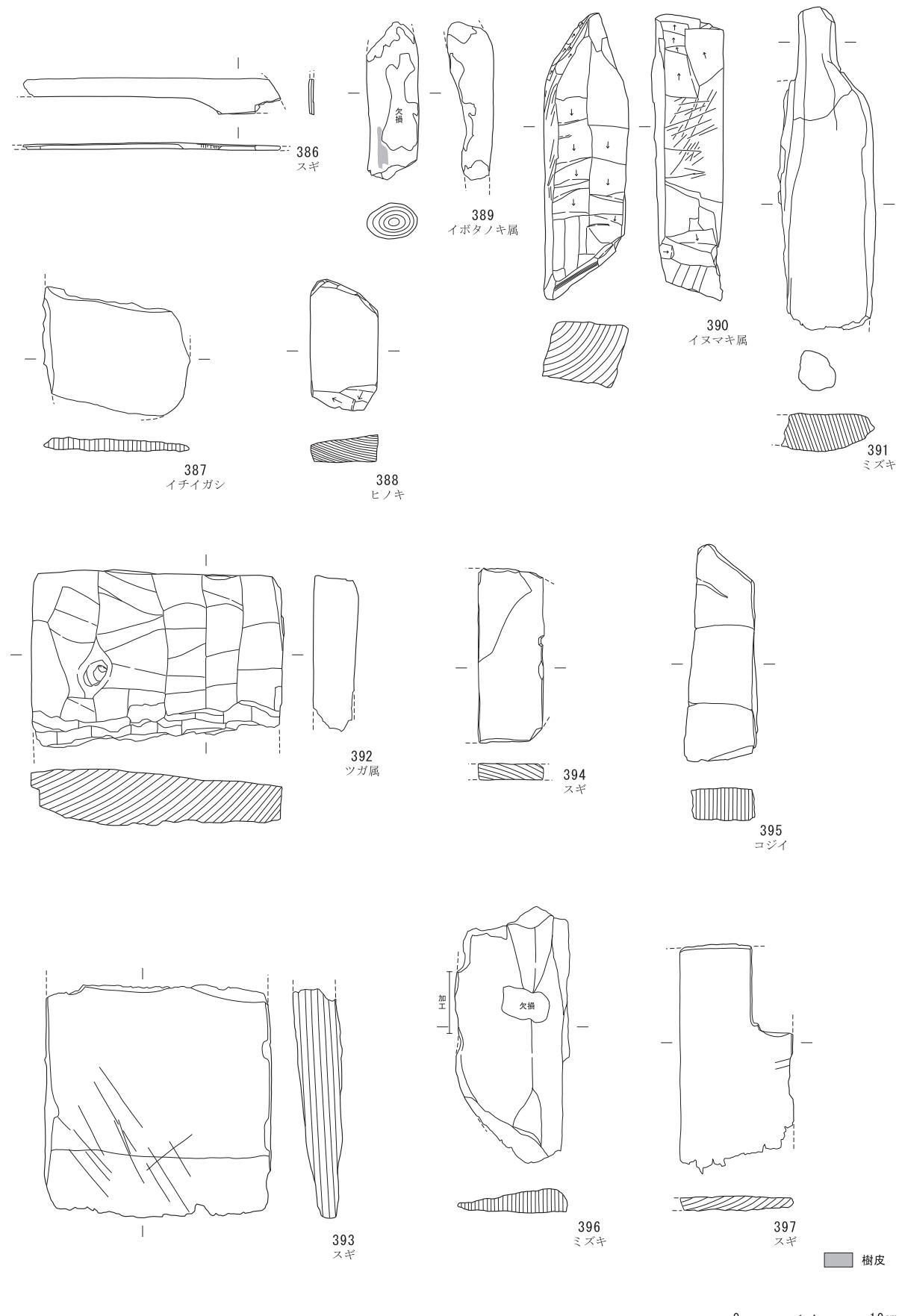


第112図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 23

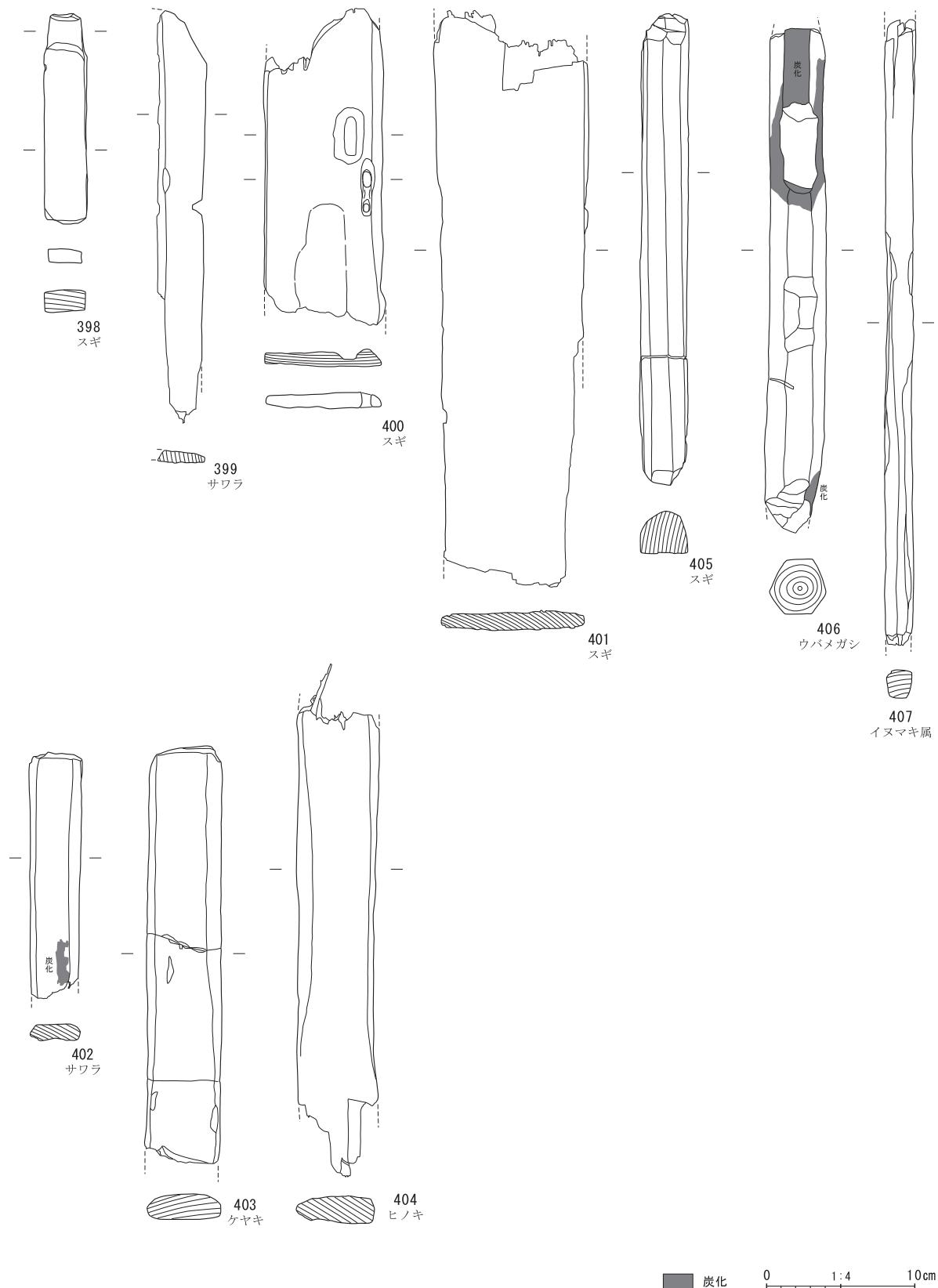
第114図398は長さ14.2cm、幅2.9cmの小型の整形板である。全面加工して、面を作り出し丁寧に整形してある。上部には長さ2cmほどの段差を作り出してある。材はスギで木目は板目方向である。

399は長さ14.2cm、幅2.9cmの小型の整形板である。全面加工して、面を作り出し丁寧に整形してある。上部には長さ2cmほどの段差を作り出してある。材はサワラで木目は板目方向である。

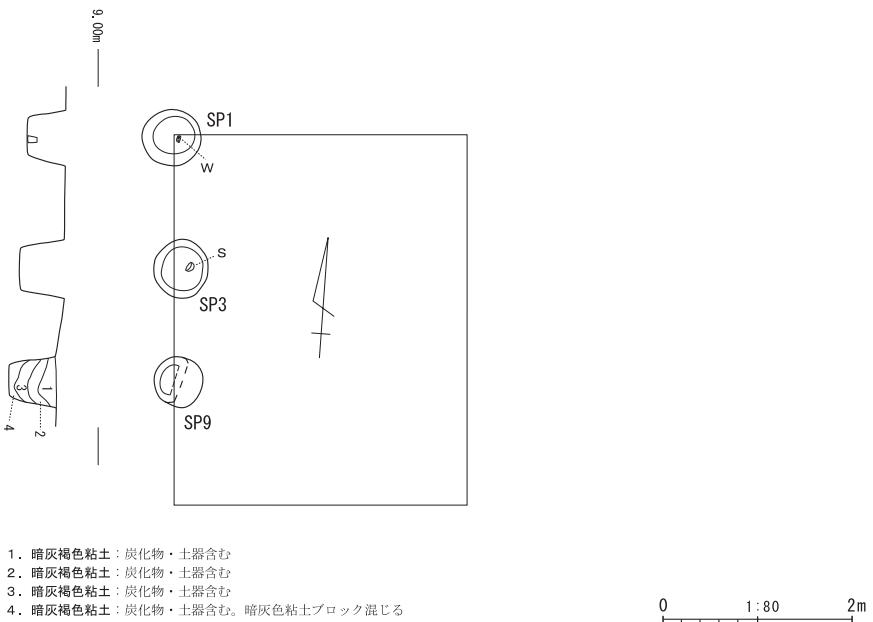
400は小型の整形されたスギの板目板だが、上下は欠損しており、表面も風化が著しく進んでいるため、加工の痕跡が観察できない。左右側面は加工面で、板の幅は7.8cmを測る。右端に孔が2箇所上下



第113図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 24



第114図 1-1・2-1区 SD 8出土遺物実測図 25



第115図 1-2区SH 2実測図

に並び、貫通している。その上部には  $3.8 \times 2.1$  cm の窪みがある。

401 の現存長は 38.95 cm、幅 10.4 cm のスギ材追柾目板である。上下は欠損しているものの、左右側面を作り出し、平均的な厚さに調整された整形板である。欠損部が多いため用途は特定できないが、壁板や床板、屋根板などの建築部材であった可能性がある。

402 は長さ 16.6 cm、幅 3.5 cm の板状木製品である。下方は欠損している以外は、全面加工されている。左右側面は緩やかに面取りされている。右下部分に黒い付着物がある。用途は不明である。樹種は 399 と同様のサワラ材と同定された。

403 は全面に加工し、細長い板状になっている。樹種はケヤキで板目材である。上端は垂直面で、下方は欠損している。ケヤキ材から丁寧に作り出しているが、どんな用途に使われたかは不明である。

404 は長さ 34.8 cm、幅 5.6 cm、厚みは 1.9 cm の板材で、材はヒノキの追柾目である。上下は欠損している。四面は加工してある。角は丸みを付けてある。当初、農耕土木具と思われたが、樹種同定の結果からもわかるように、その可能性は極めて低い。

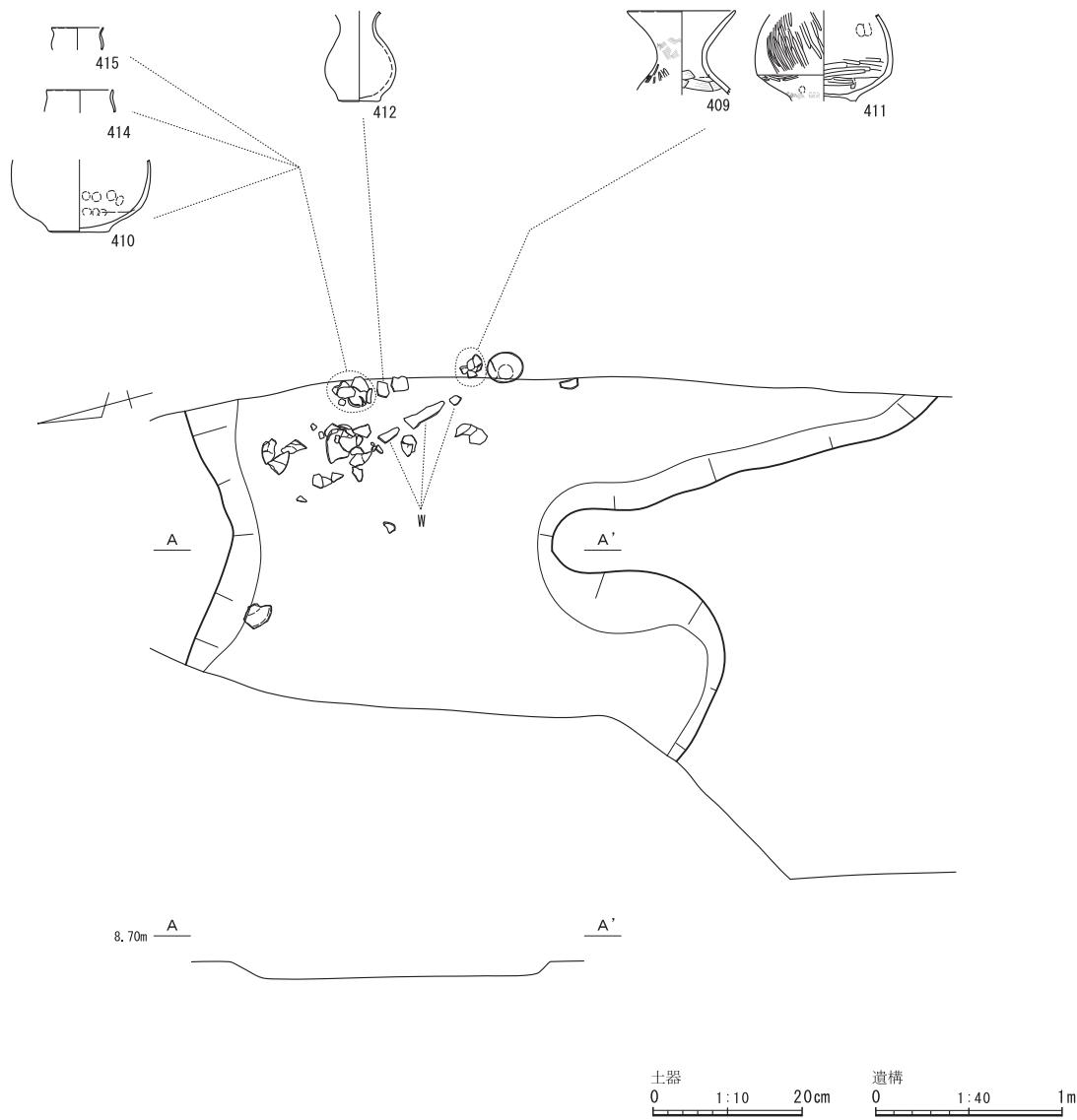
405 は長さ 31.85 cm、幅 3.2 cm で全面に加工された木製品である。表面は丸みを帯び、裏面は平坦面で、断面形が蒲鉾状になっている。上下端部は切断したような刃物痕が見られる。スギの柾目材を使っているが、何の用途かは不明である。

406 は長さ 34.1 cm の棒状木製品で、側面は六角形に面加工されている。表面の一部と上下端部が欠損している。上部と下端部の一部が炭化している。ウバメガシの芯持ち材を加工している。本県では一般的に、あまり使われる木材ではなく、用途も特定できない。

407 は長さ 42.3 cm の角材状の用途が不明な木製品である。4面とも割り面の状態で、上下端部は欠損している。表面を整形している加工痕は見られない。材はイヌマキ属である。

#### 1-1区南 SD 9 (第55図、図版25)

v 34 グリッドの標高 8.0 m の遺構面で検出した溝状遺構である。SD 8 の南側に位置し、北東から南



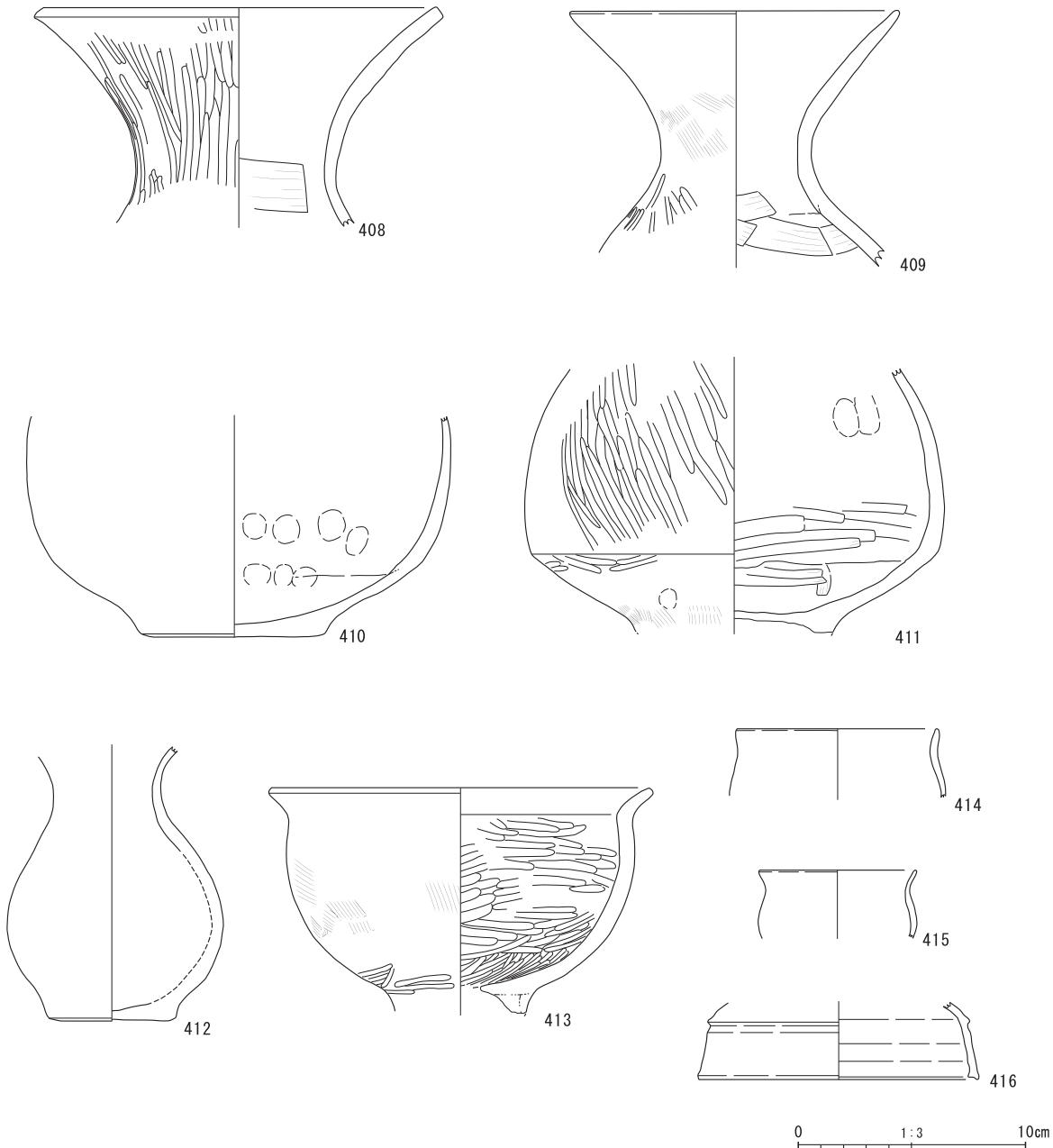
第116図 1-2区 SR 1実測図

西方向へ直線的に延びる。全長は3.5m、幅は0.5mほどである。端部はなく、調査区外へ続いている。覆土内より弥生土器の小片が多数出土した。この遺構以南で柱穴状の小穴は、数箇所検出されているが、いずれも建物等に復元できるものではない。

#### 1-2区 SH 2（第115図、図版30）

SH 2はx 26・27グリットに跨る位置で検出した掘立柱建物跡である。検出した柱穴は3つで、北西角を含む西列の柱穴列である。建物の東側は調査区外へと続いているため、全体の規模はわからない。南西側の柱穴SP 9は調査区の東壁で検出した。

その覆土より出土した土器は第81図93・94に図化掲載した。93は折り返し口縁を持つ弥生土器の壺である。表面は風化により摩滅しており、調整痕はほとんど見えない。わずかに口縁内面に縄文があったような痕跡が見える。復元口径は14.0cmである。94は単純口縁の壺である。復元口径は10.9cm、残存高は8.75cm、肩部には縄文の施文がある。外面にはハケ調整、内面には輪積み痕とナデ調整がある。覆土内から出土した土器の年代は弥生時代後期であるが、包含層にも弥生土器が含まれることから、一概に弥生時代の建物跡と即断はできない。ただ、周囲に弥生時代後期の遺構が多く検出されていること



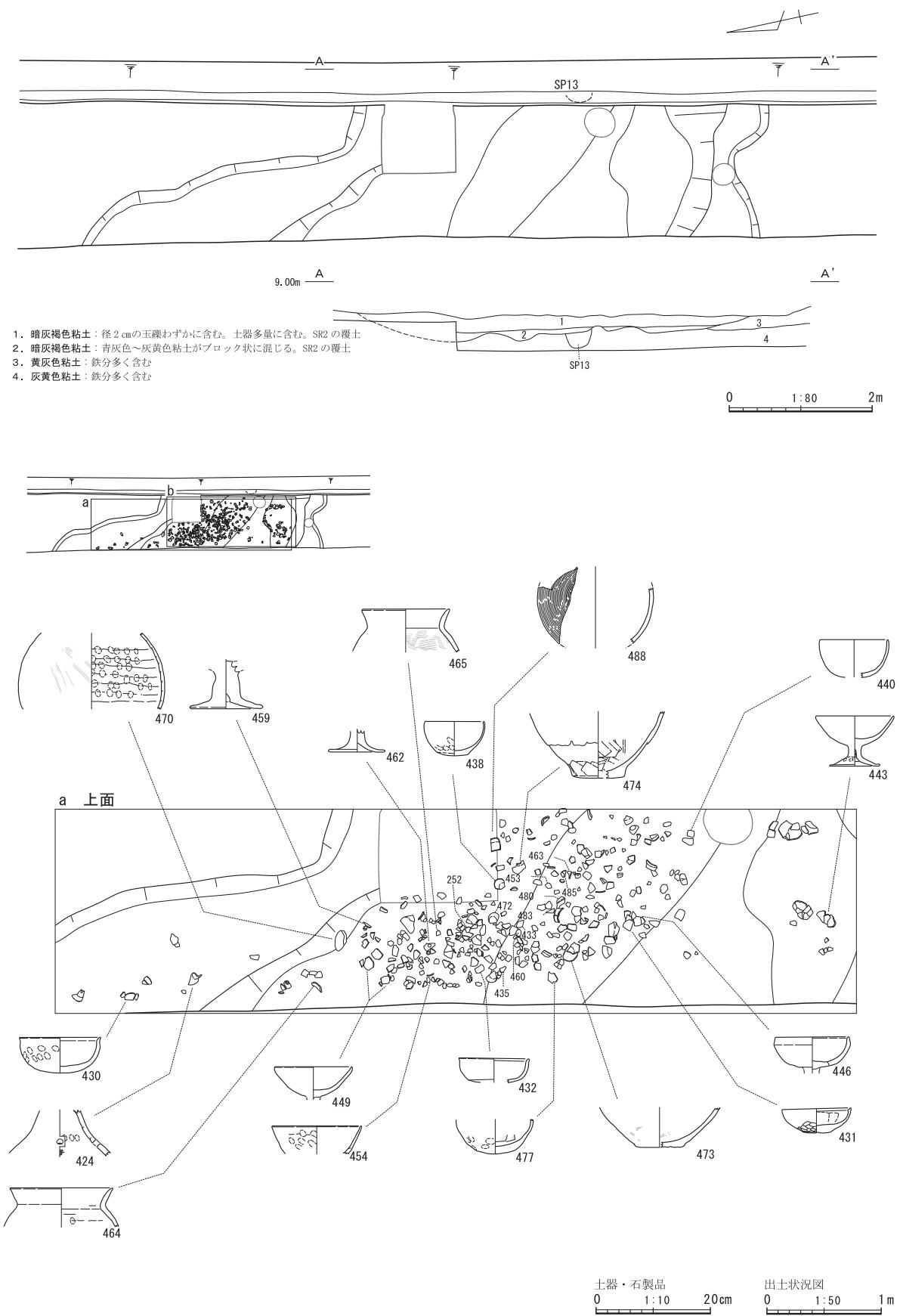
第117図 1-2区SR 1出土遺物実測図

を勘案すると、弥生時代後期の掘立柱建物である可能性が高いとも言える。

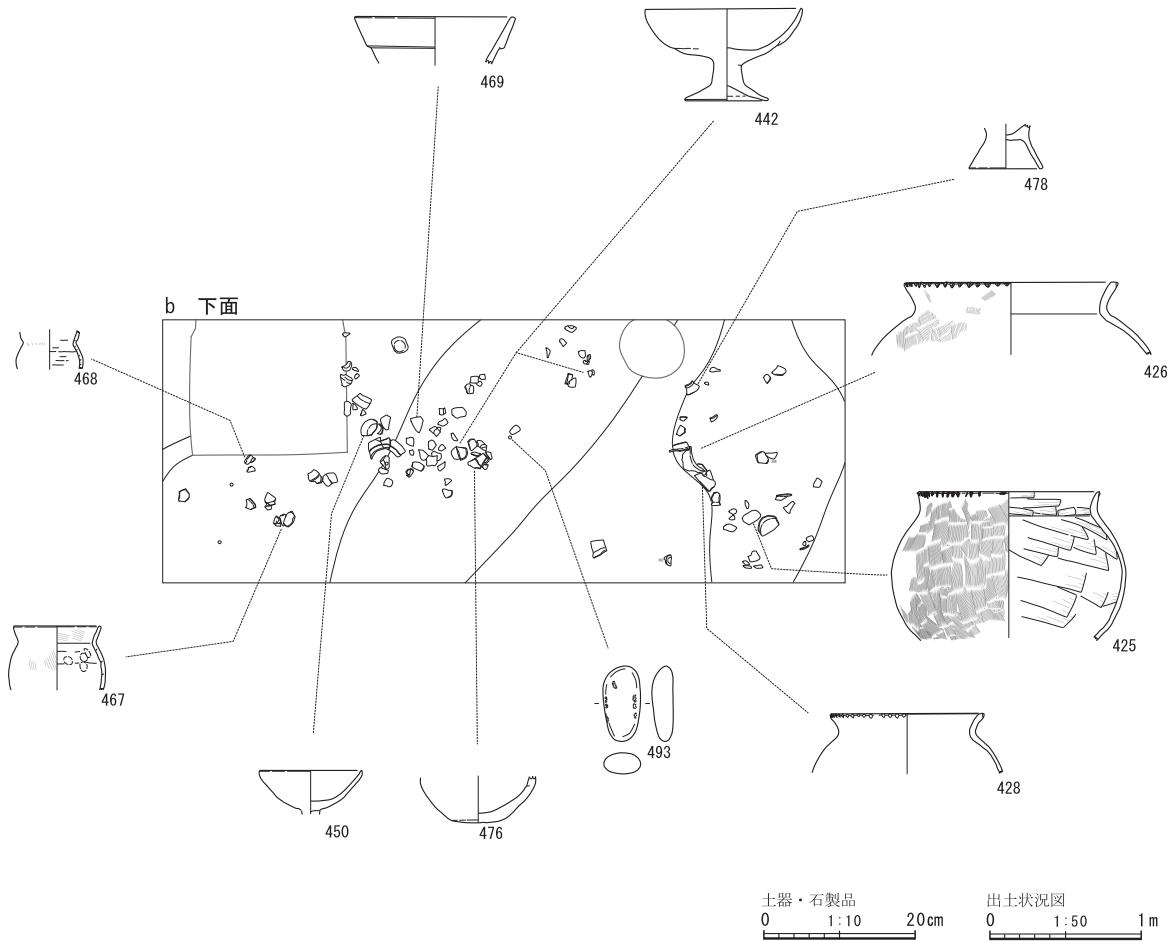
#### 1-2区 SR 1 (第116・117図、図版29)

x 26 グリッドで検出したSR 1は不定形な深い溝である。1-2区の調査区北端で検出した遺構は長さが2m、幅は最大4mほどある。深さは0.1~0.15mと深い。遺構は河川跡と言うよりも、同区上層遺構として検出したSD 1~3、SD 4のような、本流から溢れた支流のような流路であったと思われる。

覆土内からは東壁寄りに土器等がまとまって出土した。出土状況は溝底から少し浮いた中層から上層までの位置であった。図化した土器は第117図408~416に掲載した。土器は表面が摩滅したものが多く、製作時の調整痕が見えにくいものもある。408・409は弥生土器の単純口縁の壺である。408は口径が18.0cmで、口縁から頸部までが残っている。外面には縦方向にヘラミガキし、内面は板ナデした痕跡が見える。409は覆土上層出土で、口径が14.6cm、残存高は11.25cmで、口縁から肩の一部までがあ



第 118 図 1-2 区 SR 2 実測図 1



第119図 1-2区SR 2実測図2

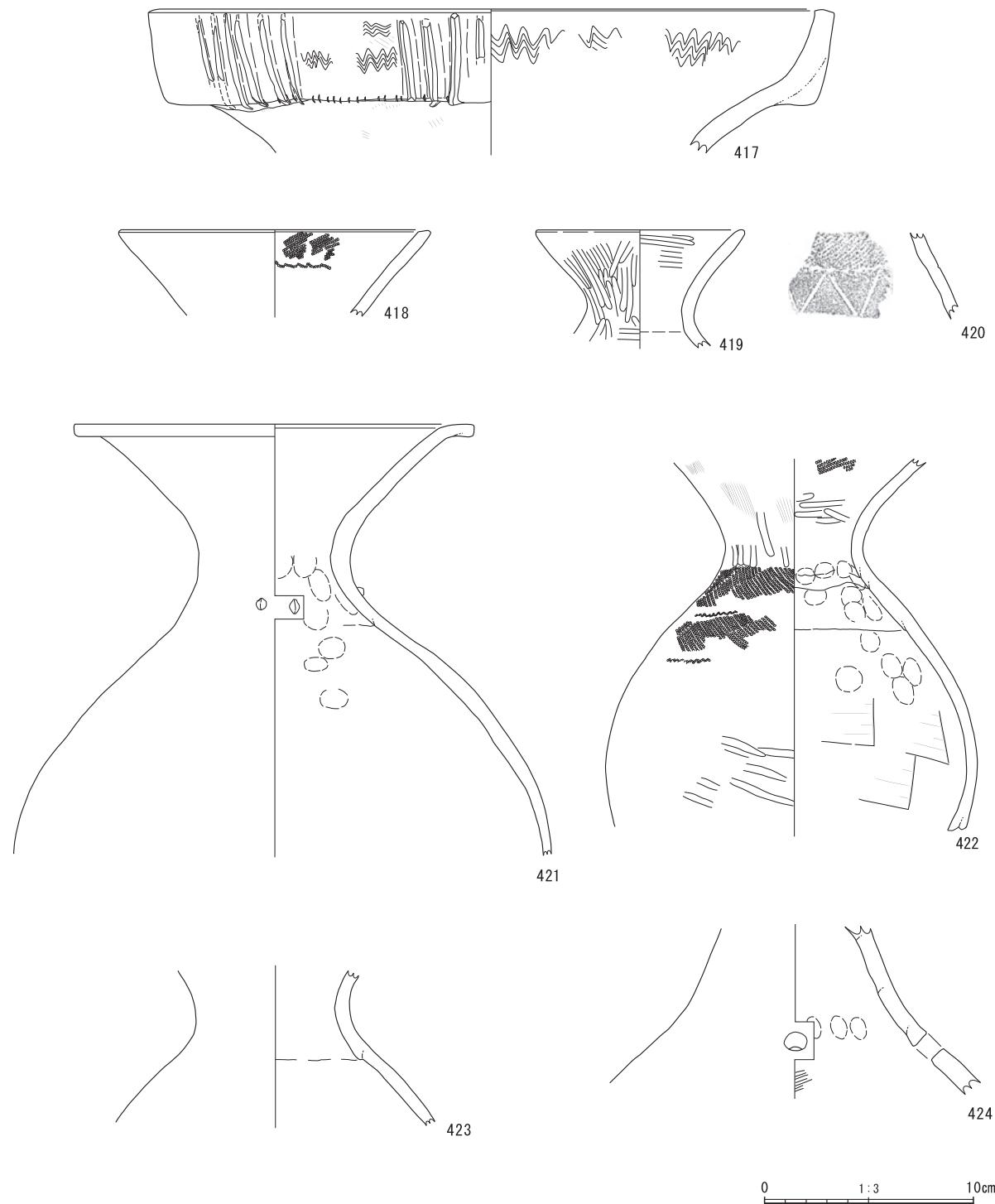
る。外面は肩部にヘラミガキ、頸部はハケ調整痕がある。肩部内面には板ナデ痕がある。410・411は上層から出土した胴部から底部まで残存する弥生土器の壺である。410は底径が8.05cm、胴部の最大径は18.6cmほどある。磨耗のため外面調整は見えない。内面は輪積み痕と指頭圧痕がある。411は胴部最大径が18.6cm、底は剥離欠損しているため径は不明である。外面は底部に横方向、胴部には斜め方向のヘラミガキがある。内面は板ナデと指頭圧痕で整形している。412は小型の壺だが、外面が薄く剥がれ落ちているため調整痕は不明である。口縁部は欠損し、頸部径が4.7cm、底径が5.6cm、残存高は12.1cmを測る。外面調整はナデか？内面はハケ調整後にミガキか。底部はナデ仕上げしてある。実用的な壺ではなく、手捏ねの範疇に入るものだろう。

413は土師器の鉢か。底部は欠損している。口径が17.0cm、器高は9.9cmで、外面はハケ調整後にヘラミガキし、内面は全面にヘラミガキされている。414・415はミニチュアの甕である。全面、ナデ調整で仕上げているが摩滅している。414は口径9.0cm、415は口径が7.0cmである。

416は須恵器の壺蓋である。天蓋部は欠損している。口径は12.4cm、残存高は3.4cmで、回転ナデによる整形である。出土土器は弥生時代後期から古墳時代末までの複数年代の土器が含まれる。

#### 1-2区 SR 2 (第118~125図、図版31)

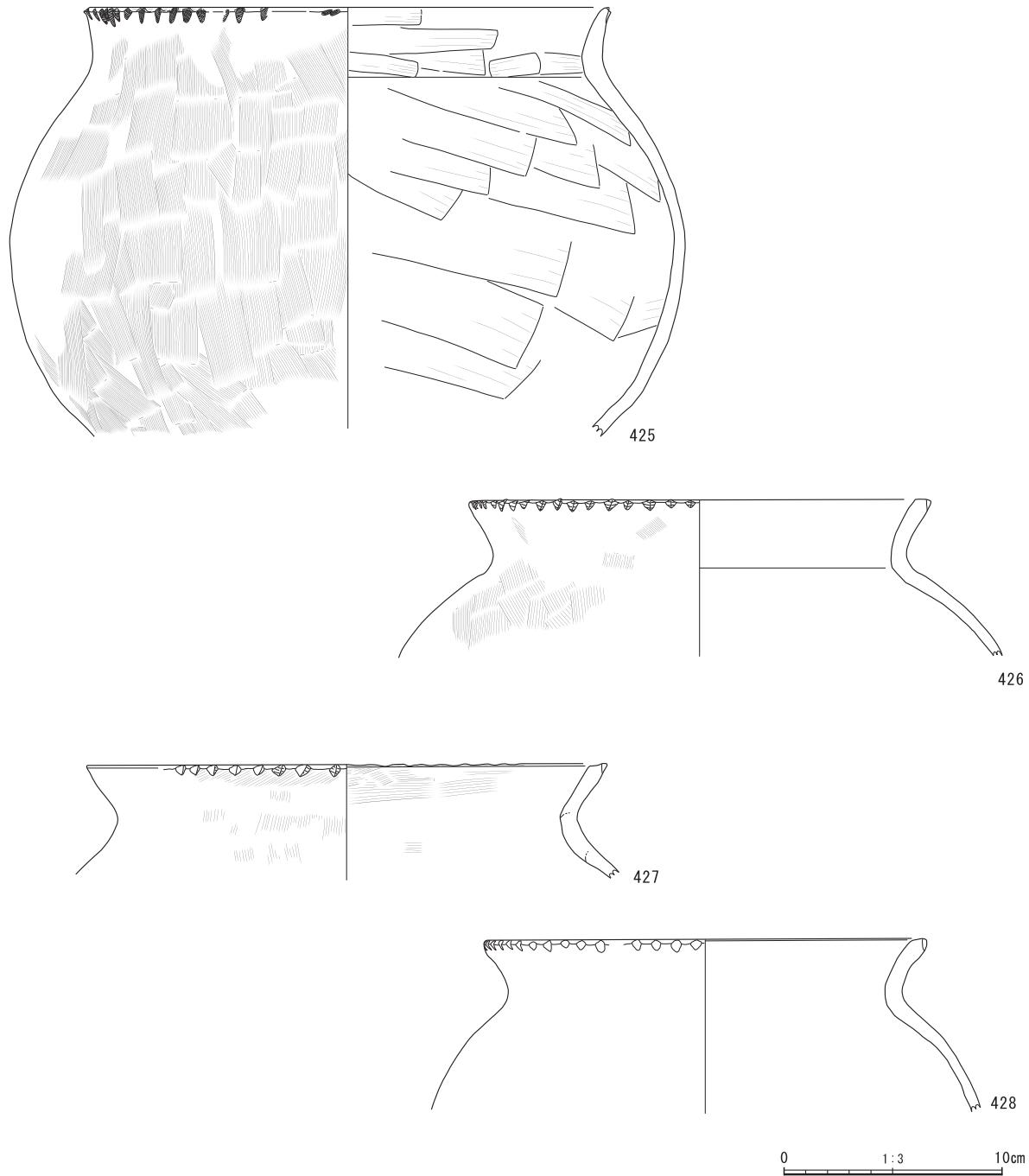
SR 2はw・x 28・29グリッドで検出した自然流路である。検出した長さは2m、幅は最大で9m以上あったと思われる。深いところでは流路底が0.4mである。水流方向は北西から南東へとなっていたと考えられる。さほど深い流路ではないが、遺構覆土の上層にあたる1層からは夥しい数の土器が出土



第120図 1-2区SR 2出土遺物実測図1

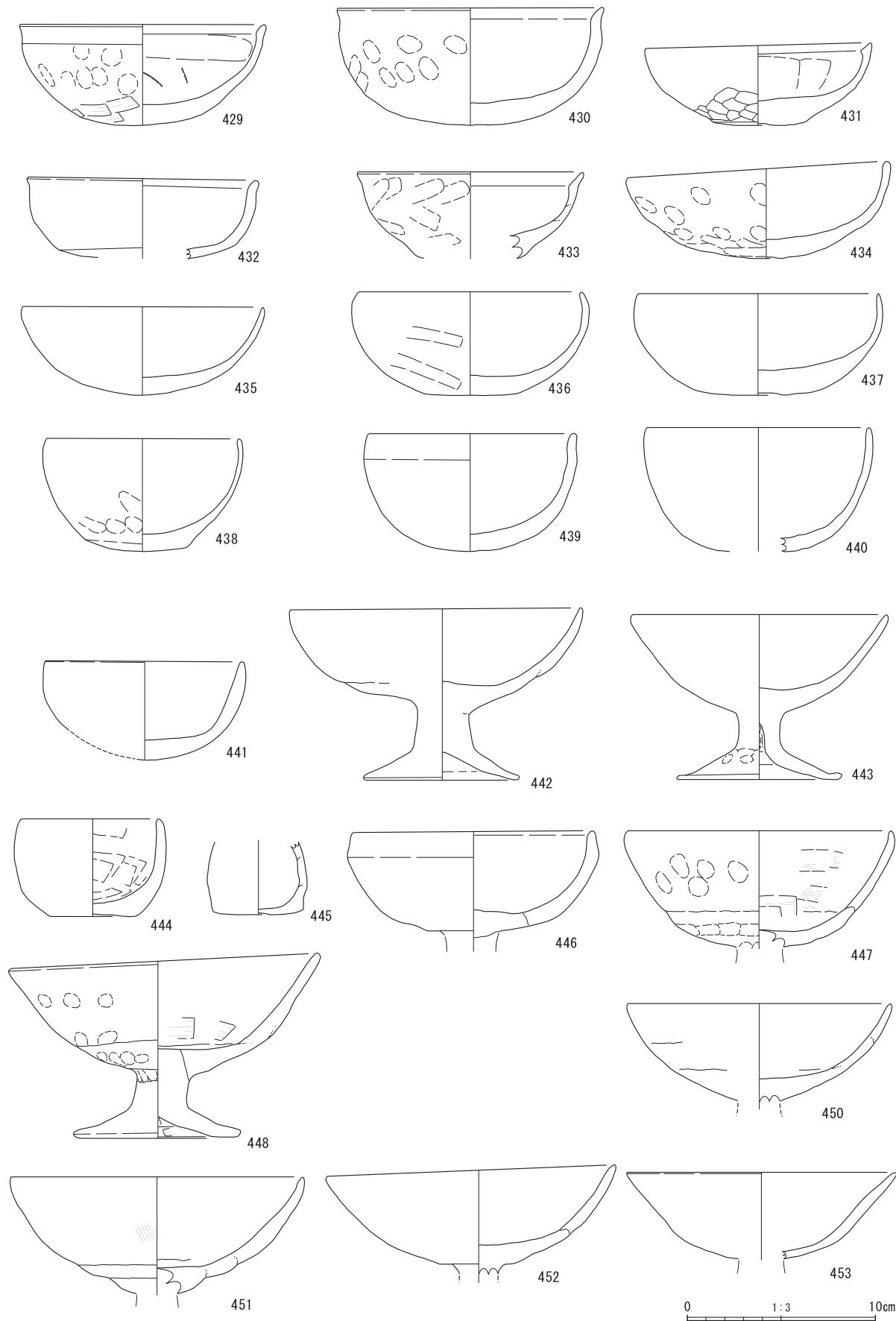
した。土器は流路の中央で折り重なるように出土したことから、上面と下面に分けて出土状況を図化した。出土状況を見る限りでは、その場で使用されたものではなく、上流部から流れてきた二次的な堆積と捉えられる。覆土に含まれる出土品を見ると、上層から年代の古いものが出ていていることから、堆積流は一度ではなく、複数回繰り返されて上流部の土器等を押し流して来ていると考えられる。

出土した土器は弥生時代後期から古墳時代後期の須恵器まで含まれている。覆土内から出土した土器は、接合を経て図化したもの第120～125図に掲載した。



第121図 1-2区 SR 2出土遺物実測図2

第120図 417～424は弥生土器の壺である。417は平成25年度の試掘・確認調査で試掘坑1より出土した。記録を見る限りでは、遺構らしき落ち込みの覆土4層（灰色粘土）より出土しており、本調査時での基本土層の4層に該当すると思われる。正確な位置は分からぬものの、SR 2で出土した土器である可能性が高い。土器は胴部片も出土しているが、接合点がなく復元が困難なことから、口縁部のみを図化した。複合口縁の壺で、口径は33.0cmと大型で、口縁には棒状浮文と櫛描波状文がある。棒状浮文は単位6本以上で、指でナデ付けている。櫛描波状文は4本の単位で2段を施文している。複合口縁の下端にはハケ状工具による細かいキザミのような痕跡がある。内面には4本単位の櫛描波状文が1段あるが、磨耗して、所々途切れています。胎土は軟質で乳白色の色調である。



第122図 1-2区 SR 2出土遺物実測図3

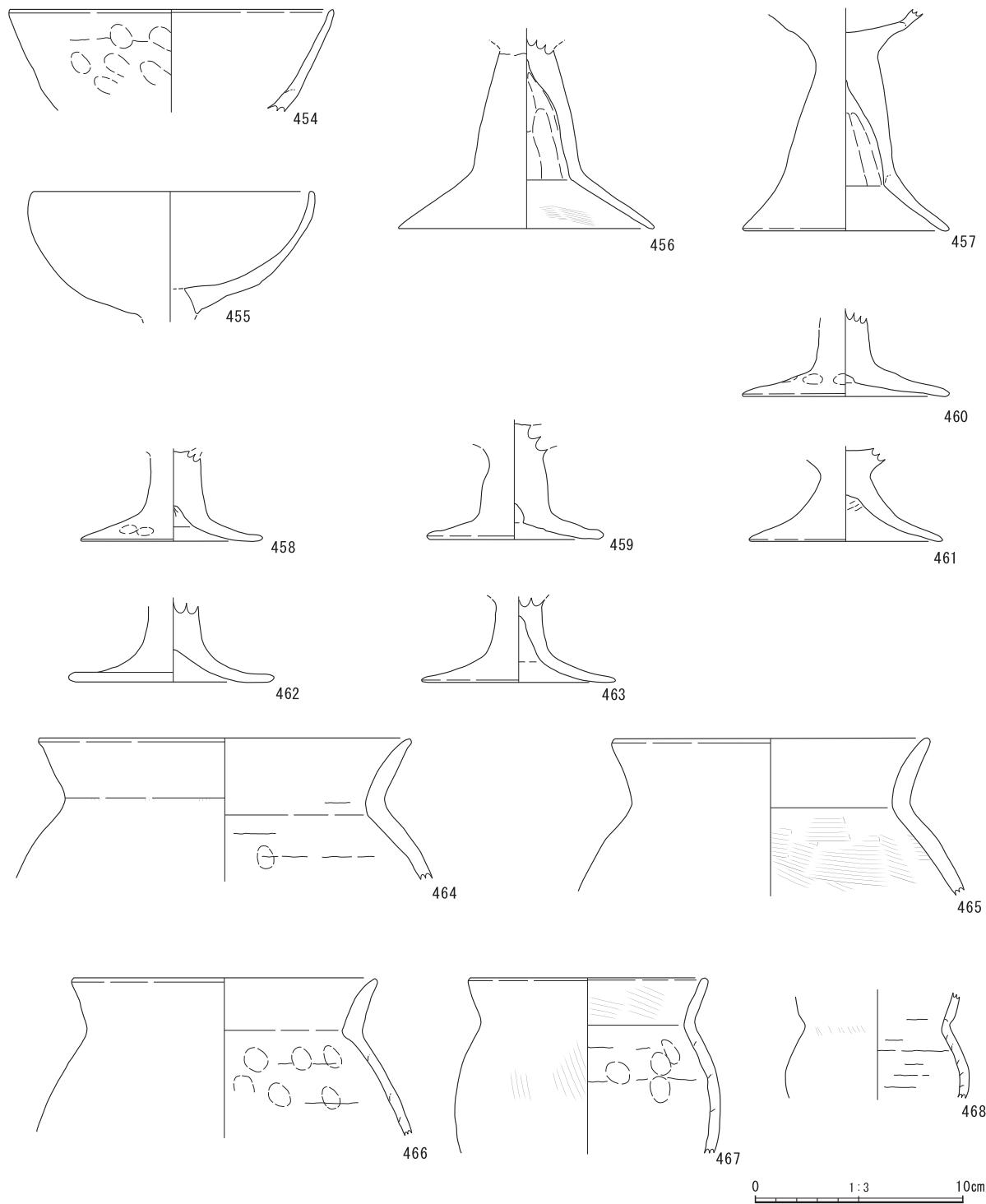
418・419は単純口縁の壺である。418は口径15.0cmで、全面ナデにより仕上げている。口縁内面には結節縄文が施されている。419は口径が10.0cmで、外面をヘラミガキ、内面も口縁を横位のヘラミガキで仕上げている。弥生時代後期後葉に属する。420は肩部の破片である。結節縄文の下に三角形と見られるヘラ描きがある。421は折り返し口縁を持つ壺で、口縁から胴部まで残存する。口径は19.2cm、残存高は20.75cmで、覆土中層より出土した。全体に磨耗しているが、外面の肩部には摘まれた円形の浮文が单位2個で4箇所に配置されていたとみえる。内面には頸部に指頭圧痕がある。422は口縁部と底部が欠損している壺である。頸部径は6.6cm、胴部は17.85cmで、残存高は17.8cmほどある。外面はハケ調整後にヘラミガキされ、肩部に結節縄文が2段に施文されている。一方、内面の胴部は板ナデし、肩部は指押さえし、口縁はヘラミガキした後に縄文を付けている。弥生時代後期後半に属する。423・424は壺の頸部から肩にかけての破片である。423は頸部径が7.5cm、全面ナデ仕上げで、施文はない。424は中層より出土した。424は頸部から肩部の破片で、肩に円形の穿孔がある。中層から出土し、全体はナデ整形している。穿孔の直径は1.0cmで、何箇所あったかは不明である。弥生時代中期後半の白岩系の壺か。高橋遺跡のなかでは、最も古手の土器になる。

第121図425～428は弥生土器の甕である。425は口径が24.2cm、胴部径は31.0cm、残存高は19.7cmを測る。口縁部にはハケ状工具によるキザミを施す。外面は全体に縦方向のハケ調整があり、胴部から下は煤が付着している。一方、内面は全体を板ナデで整形している。内面の一部にも煤が付着している。426は口径が21.2cmで、残存高は7.2cm、器体はやや脆い。口縁部にはハケ状工具によるキザミを持ち、外面はハケ調整している。内面は全面調整痕をナデ消している。甕の内面をナデ消することは、当地域ではよく見られる。弥生時代後期後半に属する。427は口縁にキザミがあり、口径が23.9cmで、内外面はハケ調整後に撫でている。428は覆土下層より出土した。口径は20.2cm、口縁部にはキザミを有す。器面全体をナデにより仕上げている。

第122図429～123図463は土師器の坏、高坏他である。429～441は土師器の坏である。大半は遺構の中層より出土している。429の口径は14.8cm、器高は6.0cmを測る。外面は底を板ナデし、体部は指押さえしている。内面は工具で整形後に撫でている。口縁部は強くヨコナデし、模倣坏のようにも見える。430は全体をナデ整形している。口径は14.3cm、器高は6.2cmで、内外面には部分的に黒ずみがある。431は80%残存している坏で、底に近い体部は手持ちでヘラ削りされている。口径は12.0cm、器高は4.25cmと小振りだが、口唇部は内湾している。432は底部が欠損している。口径は12.1cmで、器面は摩滅して、ナデ調整部分がわずかに見える。433も底部が欠損している。全体をナデにより整形している。434は器面の調整が不明瞭である。口径は14.2cm、器高は5.1cmで、口縁はヨコナデしている。435は口径が13.0cm、器高は4.7cmでナデ整形している。436は70%が残存する坏で、口径は12.7cm、器高は5.5cm、底径は4.8cmである。口唇部は内湾する。437は口径13.3cm、器高は5.4cmで、底に厚みがある。438は全面ナデにより整形された坏で、口径は10.7cm、底径は5.5cm、器高は6.0cmである。439は口径が11.1cm、器高は6.3cmで、器面が剥離し摩滅している。口縁部をヨコナデし、模倣坏に近い形をしている。440は底部が欠損している。器面が剥がれているため調整痕が見えない。441も外側が剥離している。口径は10.4cm、器高は5.3cmと小型の坏である。

444・445は手捏ね土器である。444は口径が7.3cm、底径が4.6cm、器高は5.2cmで、外面はナデ、内面は板ナデで整形している。445は口縁が欠損する。底径は4.8cm、残存高は3.9cmで、全面ナデ整形している。

442・443・448は全体形のわかる高坏、446・447・449～455は高坏の坏部、456～463は高坏の脚部である。442は表面が剥離しており、接合部分だけが確認できる。口径は15.5cm、脚部径は8.3cm、器高は9.15cmを測る。443は外面をナデ整形し、脚部内面奥には絞り痕がみえる。口径は13.8cm、器



第123図 1-2区 SR 2出土遺物実測図4

高は8.8cm、脚部径も8.8cmである。448は中層より出土した。全体に磨耗している。口径は16.6cm、脚部径は8.9cm、器高は9.8cmで、外面は指頭圧痕、内面には板ナデ痕がある。446は口径が12.9cm、壺部高は5.7cmで、全体に摩滅している。口縁部はヨコナデしており、須恵器の高壺の形状を意識しているものか。447は口径が14.4cmで外面はナデ、内面を板ナデしている。449は下層より出土した壺部で、口径は13.6cm、全面ナデにより整形している。450は器面が剥がれているもののナデ整形しているだろう。口径は14.1cm、残存高は5.2cmである。451はハケ調整後に撫でている。口径は15.7cmであ

る。452は複数個体が接合した。口径は15.5cmで全面を撫でている。453は中層出土で、口径は14.4cm、全面、ナデ整形している。454は口径が15.7cmで、外面には指押さえ痕があり、全面を撫でている。455は脚部との接合部が剥がれている。口径は13.4cmで、器面は摩滅して調整痕がよく見えない。456は中層より出土した脚部で、底径は12.4cmである。外面は撫でているが、内面は絞り痕やハケ調整で整形している。457は接合部径が3.0cm、脚底径は10.0cmである。内面は指ナデ痕がある。458は器面全体を撫でている。脚底径は8.8cmである。459の表面は剥がれているが、ナデ整形しているであろう。脚底径は8.6cmを測る。460～463の小型高壺の脚部で、器面はナデにより整形されている。脚底径は9.4cmから10.0cmの間である。

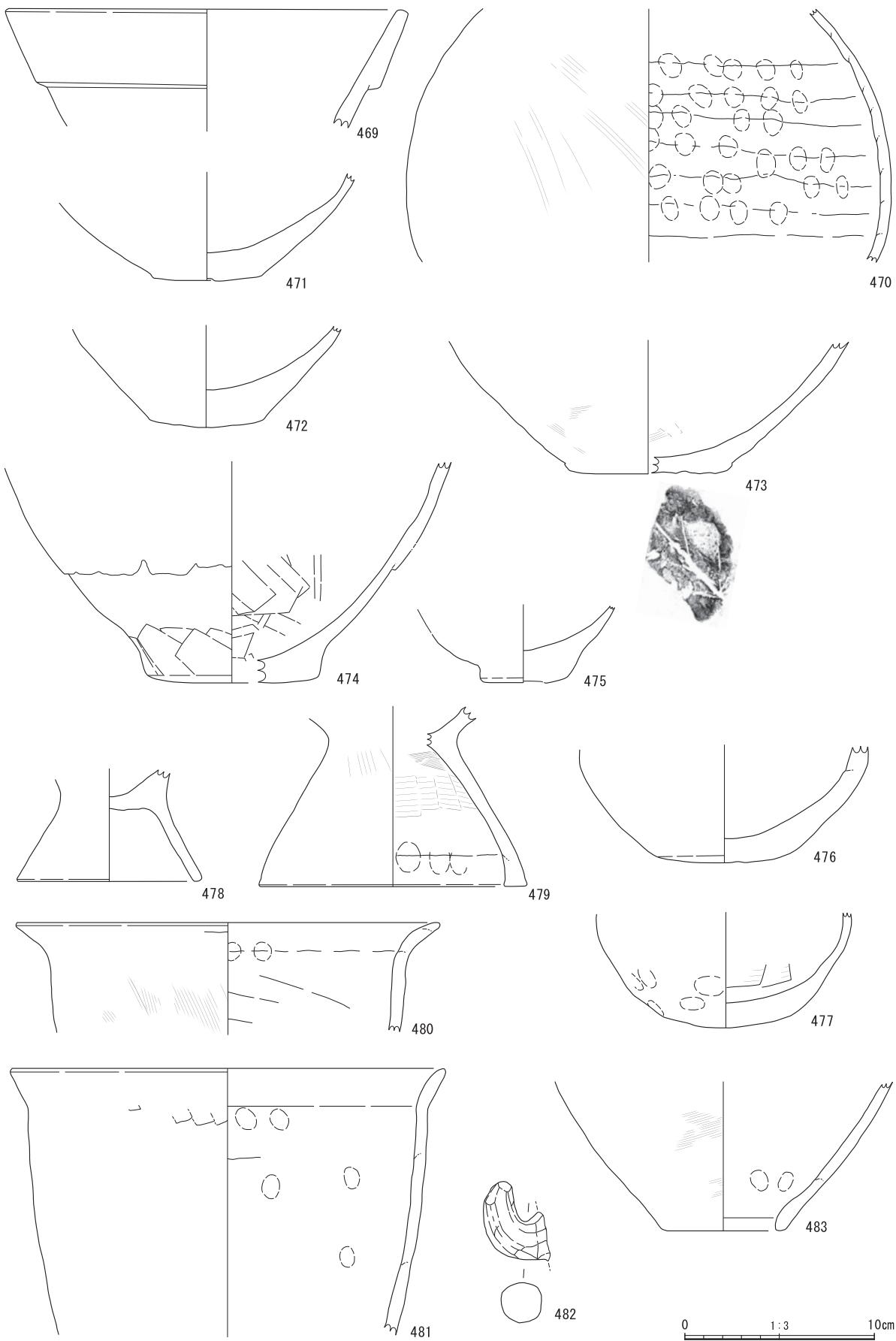
第123図464～468は土師器の甕である。464・465は中層より出土した。464は口径が18.0cmで、輪積み痕を指押さえしてナデ整形している。465は表面が磨耗し、内面だけハケ調整が見える。口径は15.4cmである。466は口径が14.8cmで、内面の輪積み痕を指押さえして撫でている。467は下層より出土した。内外面はハケ調整後に撫でている。口径は11.6cmと小型である。468も下層より出土した。口縁部と底部は欠損している。胴部径は8.9cmしかないことから手捏ね土器であろう。内面には輪積み痕が残る。

第124図469～483は弥生土器または土師器の壺・甕、瓶等である。469～475は壺形土器である。SR2下層より出土した469は大型壺の口縁部である。口縁の形状は折り返しており、口径は20.4cmである。外面は摩滅して調整痕は見えないが、内面はナデ整形している。胎土は灰白色で、他の壺形土器とは質感が異なっている。470は肩部から胴の部分である。最も張り出している胴まわりは25.6cmを測る。外面はハケ調整、内面は輪積み痕と指押さえ痕がそのまま残っている。471～475は壺または甕の底部片である。471は底径が5.7cmで、胎土中には径0.1～0.2cmの粒子が混じる。472も同様の破片で、底径は6.0cmで、厚底で、木葉痕がある。473は底径が8.4cmで、内外面ともハケ調整後に撫でている。外面には一部煤が付着する。474は胴～底部片で、底径は9.2cmで、底面には木葉痕がある。整形痕は板ナデ痕が見えるが、外面には輪積み痕がそのまま残るほど面調整が粗い。外面には煤が付着している。475は底径が4.6cmと小型であり、手捏ね土器の可能性がある。表面は摩滅しており調整不明である。476・477は丸底片である。476は底径が6.9cmで、底面には乾燥台のような痕跡がある。内外面は摩滅している。中層から出土した477は外面に指頭圧痕、内面は板ナデの痕がある。478・479は台付甕の脚部である。478は全面ナデ整形で、脚部径は9.8cmを測る。479は内外面をハケ調整している。脚部径は14.2cmで、脚の端部は平坦面となっている。

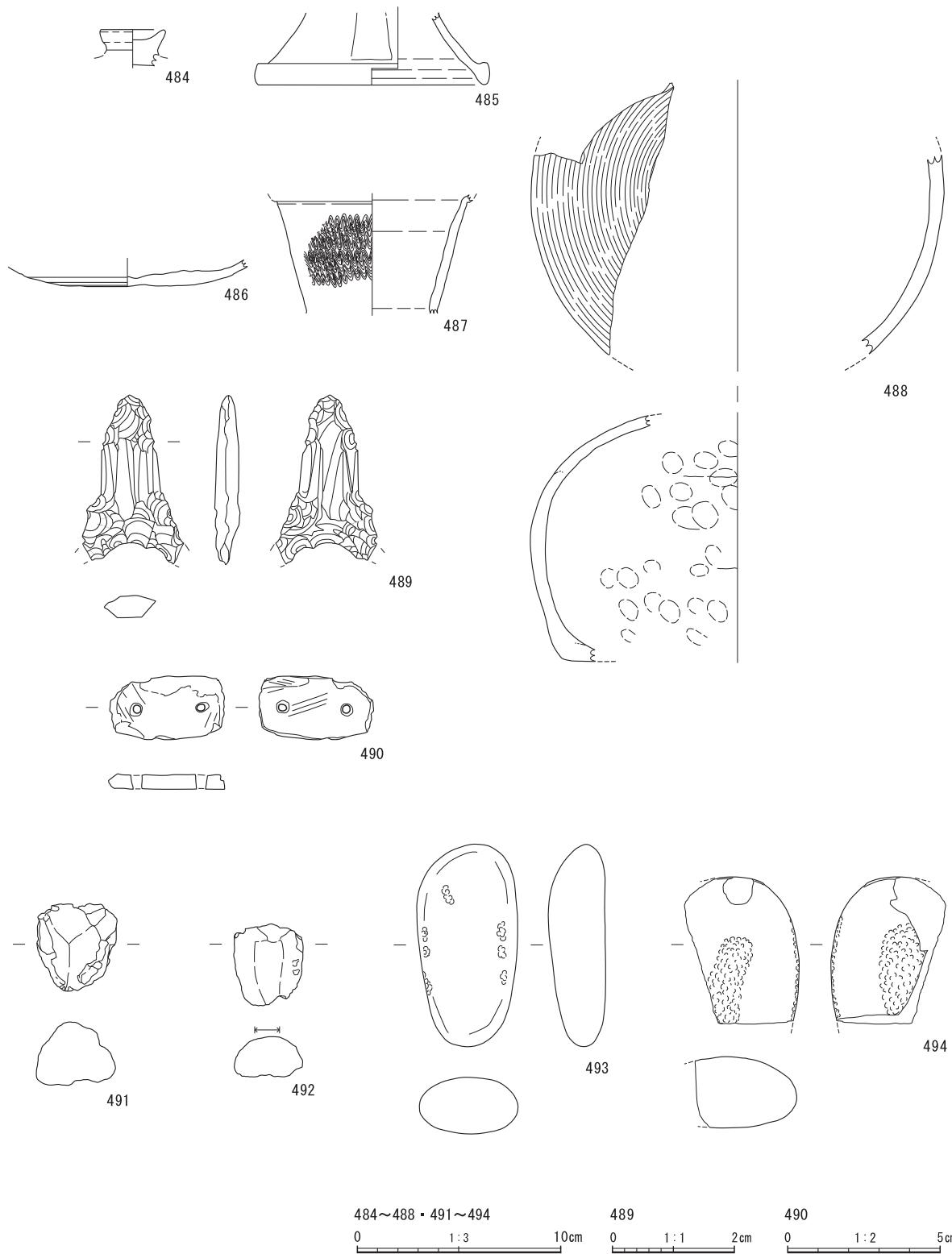
480～482は瓶である。480・481は土師質で、いずれも中層より出土した。480は口径が22.4cmで、外面をハケ調整し、内面から口縁部は撫でている。481は口径が23.0cm、全体をナデ整形している。482は須恵質の瓶把手部分である。径は2.1×2.2cmで、ナデにより仕上げている。小型であることから実用ではないミニチュアの可能性がある。

第125図484～488は須恵器である。484は壺蓋の摘み部分である。中層より出土し、径は3.2cmである。485は高壺の脚部で長方形の透かしが4箇所に入るものの、脚部径は11.5cmで、外面に自然釉が付着している。486は壺身の底破片である。6世紀後半代に属する。487は頸の頸部で、口縁部と胴部から下が欠損している。残存高は5.9cmである。外面には单位9本程の櫛状工具で2段の波状文がある。内面には斑点状に自然釉が付着する。488は中層より出土した提瓶の胴部片である。最大径は20.4cmで、高さは13.4cmを測る。表面にはカキ目を施し、内面は輪積み部分を指頭で押さえている。

第125図489～494は石器・石製品である。489は1～2区SR2上層より出土した。長さ2.18cm、幅は1.66cm、厚みは0.42cm、重量は1.16gを測る。基部先端は欠損しているか？表・裏の中央付近は風化したような面ある一方、側縁部の加工は新しく、珪質頁岩材、本来の色調が見える。もともと石



第124図 1-2区 SR 2出土遺物実測図5



第125図 1-2区SR 2出土遺物実測図6

鏃として使われていたものを再加工して使った可能性も考えられる。490は1-2区SR2覆土上層より出土した石製模造品で、石材は緑泥石製である。厚さ0.5cm程の板状で、横長の長方形を呈する。径0.45cmの穿孔2箇所が左右に並ぶ。孔は垂直に穿たれている。剥離面が多く、研磨されていない部分が多く、やや粗雑なつくりである。4方向の側面は磨かれている。円形の有孔円盤を再加工した可能性も考えられる。

491はSR2覆土層より出土した鉱滓破片である。当初、軽石片と思われたが、石材分析の結果、鉱滓であることが判明した。土器等と共に、上流部の集落より混入した可能性がある。150mほど北側の中山遺跡1区包含層では轍の羽口が出土している。今回の調査区内では製鉄に関連する遺構は見つかっていないが、西側の低丘陵から山裾に關係する遺構が存在する可能性がある。

492はSR2の覆土層より出土した。軽石の破片である。一部、擦り面がある。欠損しており、元の形状は不明である。遠州灘沿岸部で採集されて、集落に持ち込まれた可能性が高い。493はSR2覆土内より出土した敲き石で、石材は砂岩製である。10cmほどの長さで、ちょうど手のひらに収まる大きさである。自然礫の側面近くに一部、敲打痕がある。上下端部には敲き面ない。あまり使い込まれてはいないようである。494はSR2覆土層より出土した。やや扁平な楕円形状の自然礫で、石材は砂岩である。下方と右側面側は欠損している。表面と裏面の中央付近と、側縁に敲打痕がある。上端面は擦り面となっている。使用中に折損して、その後、廃棄されたものと思われる。全体に被熱している。

## 2 3区

3区は小笠高橋川の左岸側に設定した調査区である。遺構は数本の溝跡等と杭列1・2を検出した。包含層(IV層)より出土した土器は古墳時代の須恵器と山茶碗である。調査の結果、3区では湿地化が進んでいたことが判明した。標高値は1・2区よりも0.5~0.9mほど低い。特に南半部は砂混じり層が堆積している。遺構と思われるものの一部には、河川の流れで深く抉られたと思われるところも含まれている。また1・2区で見られた遺物包含層のIII~IV層が見えず、遺物も北側では複数見つかったが、南側へ行くほど希薄になることから、集落域からは外れていく範囲であっただろう。

土器のほかに自然流路や包含層より土製品や石器が出土している。これらは砂混じり層に黒褐色土が入り込んだ堆積土より出土している。以上を勘案すると、出土した遺物は上流側から流れて二次堆積したものと考えるのが妥当だろう。なお、基本土層は第50図にある。

### 3区 SD15(第131図、図版38)

v 40グリッドで検出した溝状遺構である。全長は2.5m、幅も0.5mほどで、西側は調査区外へと続いている。SD17とは平行しているが、周辺の遺構と関連する可能性は低い。

### 3区 SD16(第132図、図版38)

u 40グリッドで検出した溝状遺構である。南北方向で、全長は2m、幅は1m程で、北側は調査区外に出ている。SD16の周囲には杭列1が存在する。

### 3区 SD17(第131図、図版38)

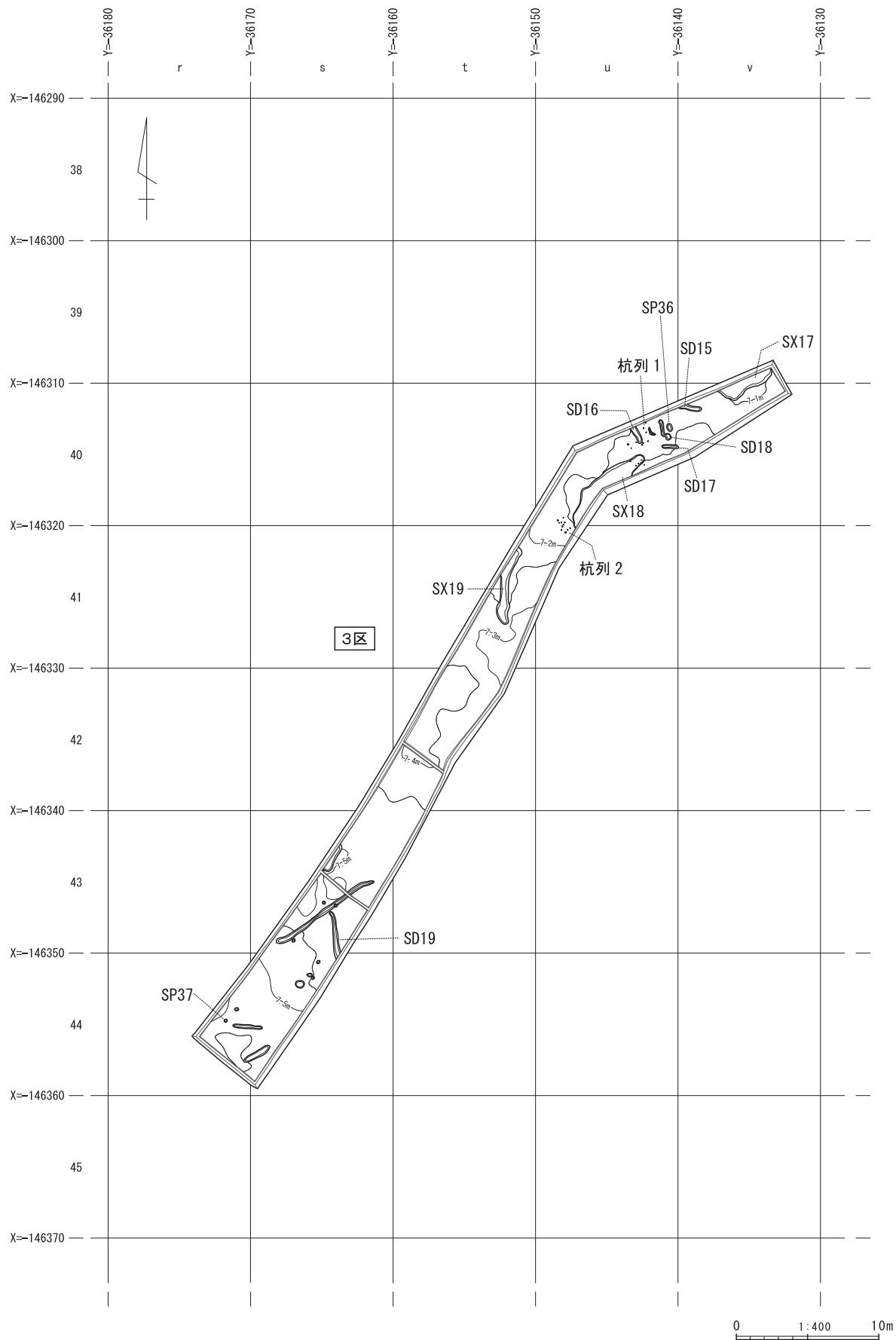
u 40グリッドで検出した溝状の遺構である。SD15とは平行するが、関連はないものと思われる。調査区内で全体形が確認でき、全長は0.95mほどである。

### 3区 SD18(第131図、図版38)

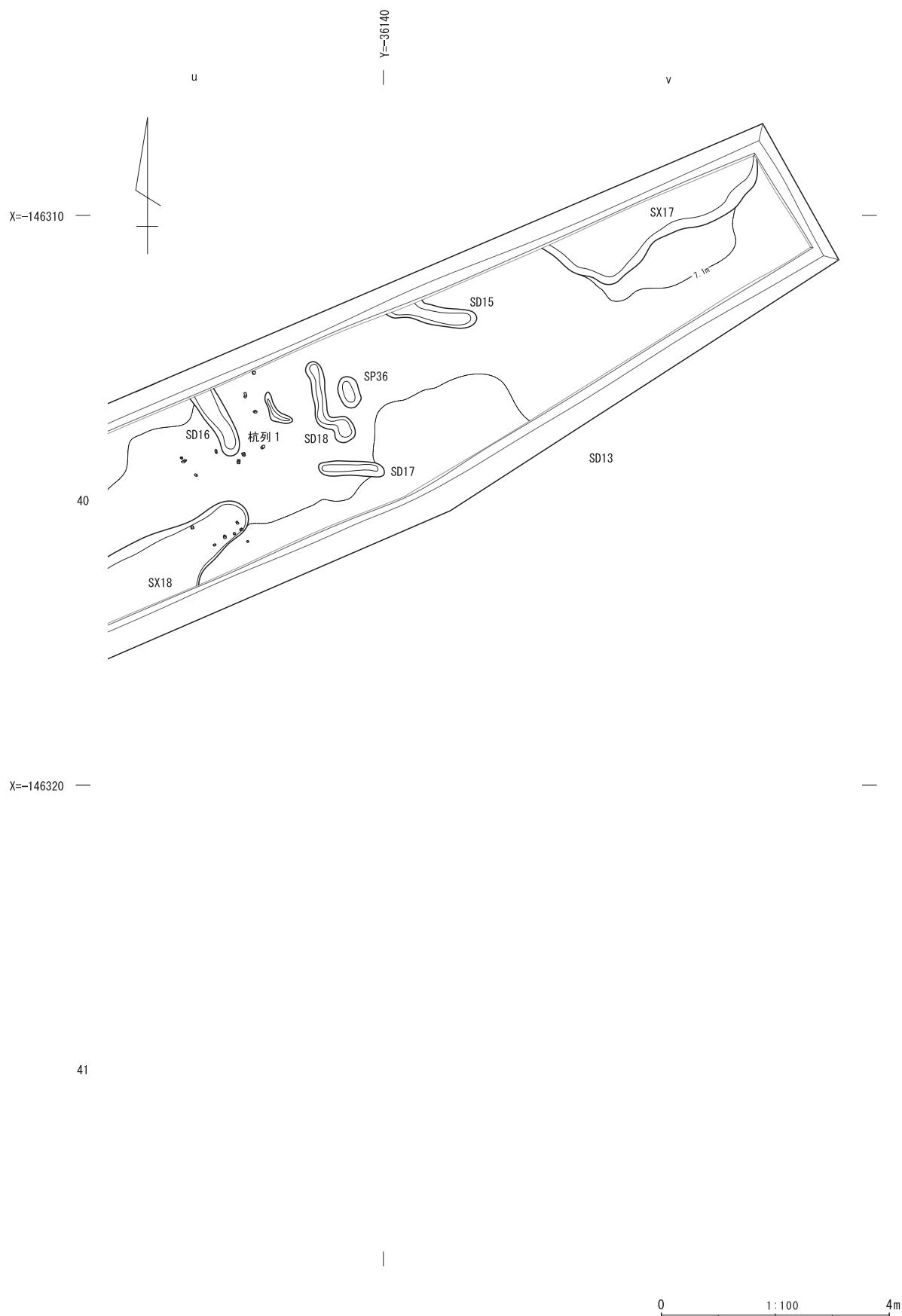
u 40グリッドで検出した溝状の遺構である。SD17の北側に位置する。形状は北側が南北に直線的に伸び、南側はクランク状に曲がる。

### 3区 SD19(第131図、図版39)

s 43グリッドで検出した南北方向の溝状遺構である。ほぼ直線的に伸びており、3.4mの延長が確



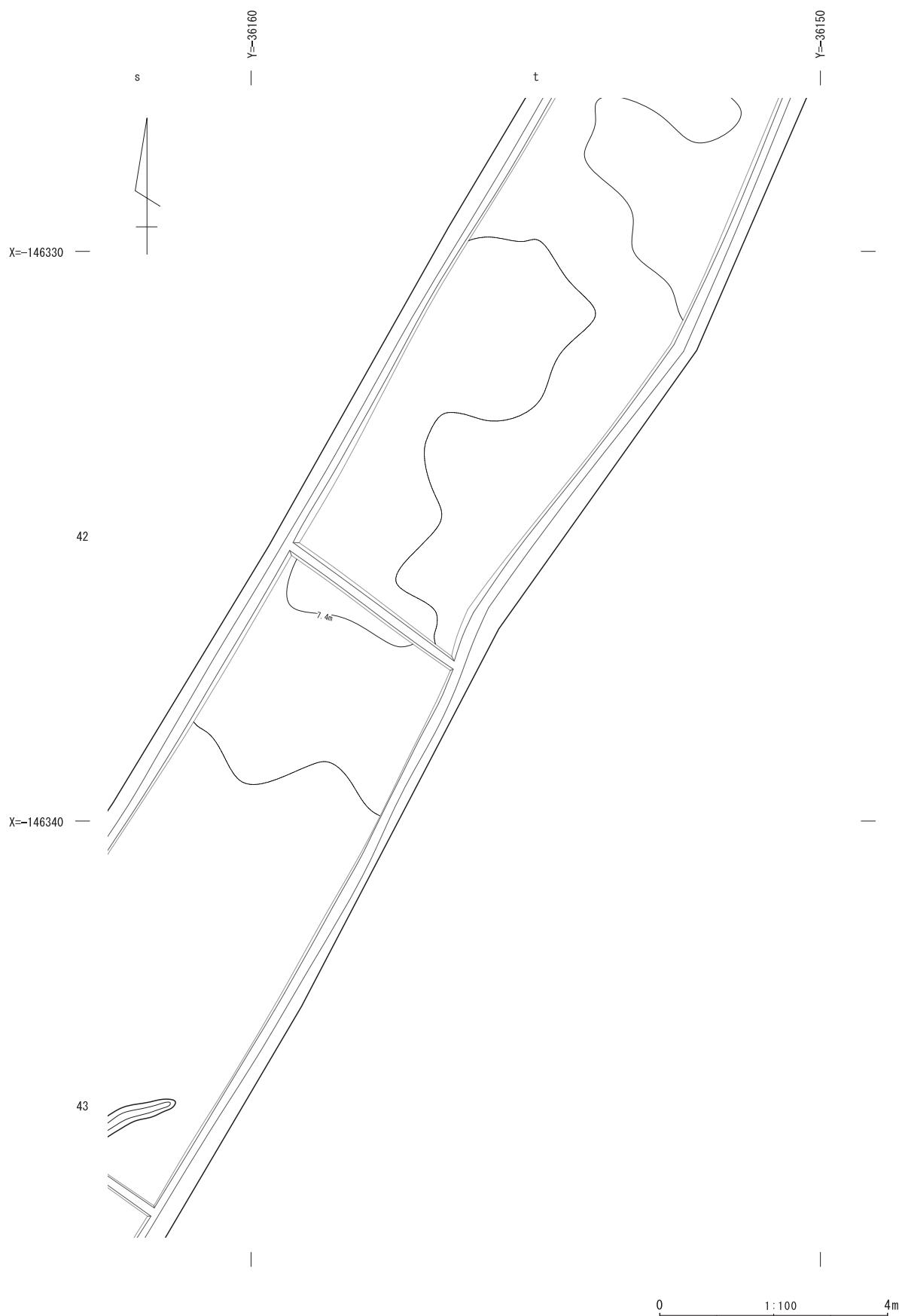
第126図 3区全体図



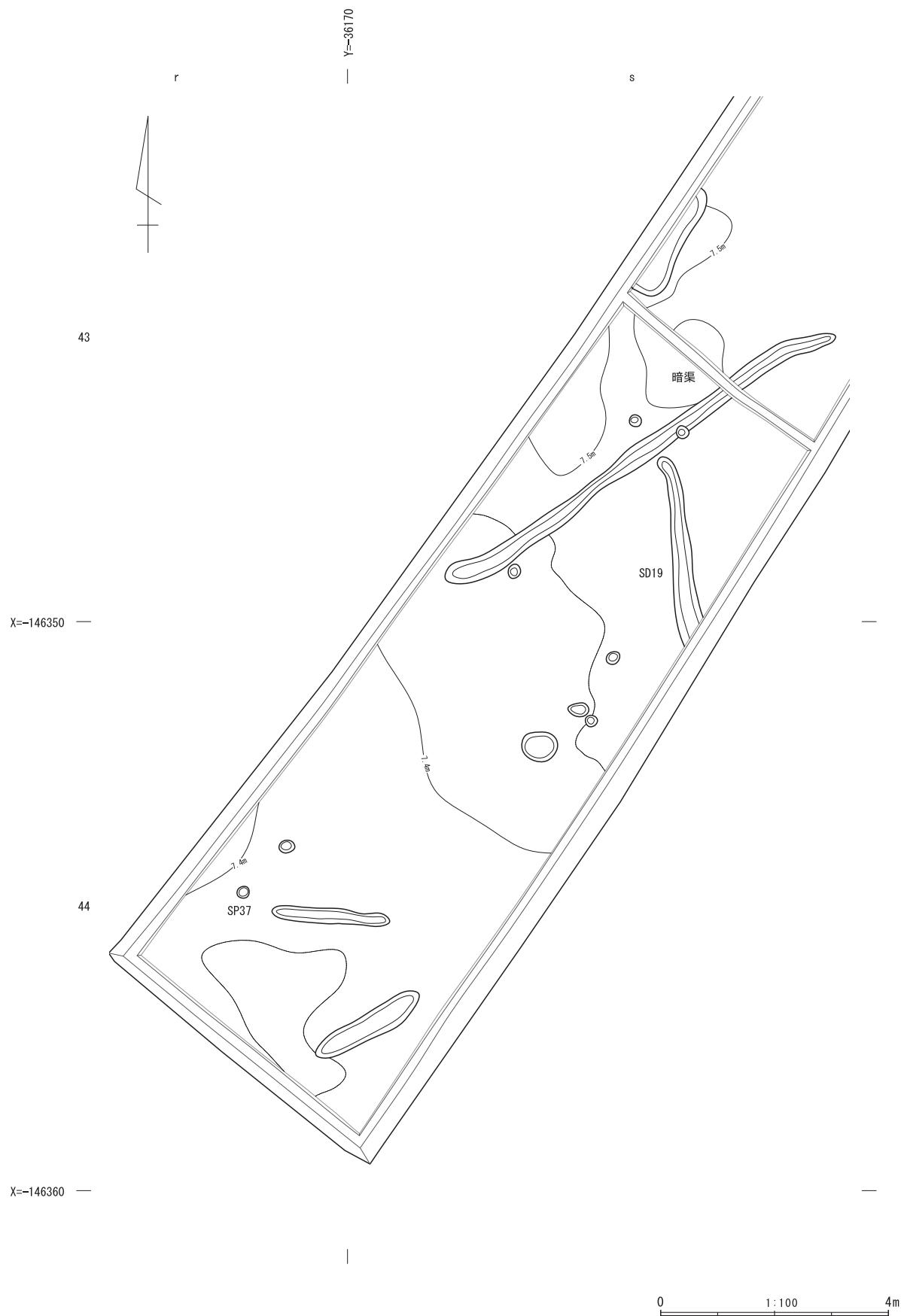
第127図 3区拡大図1



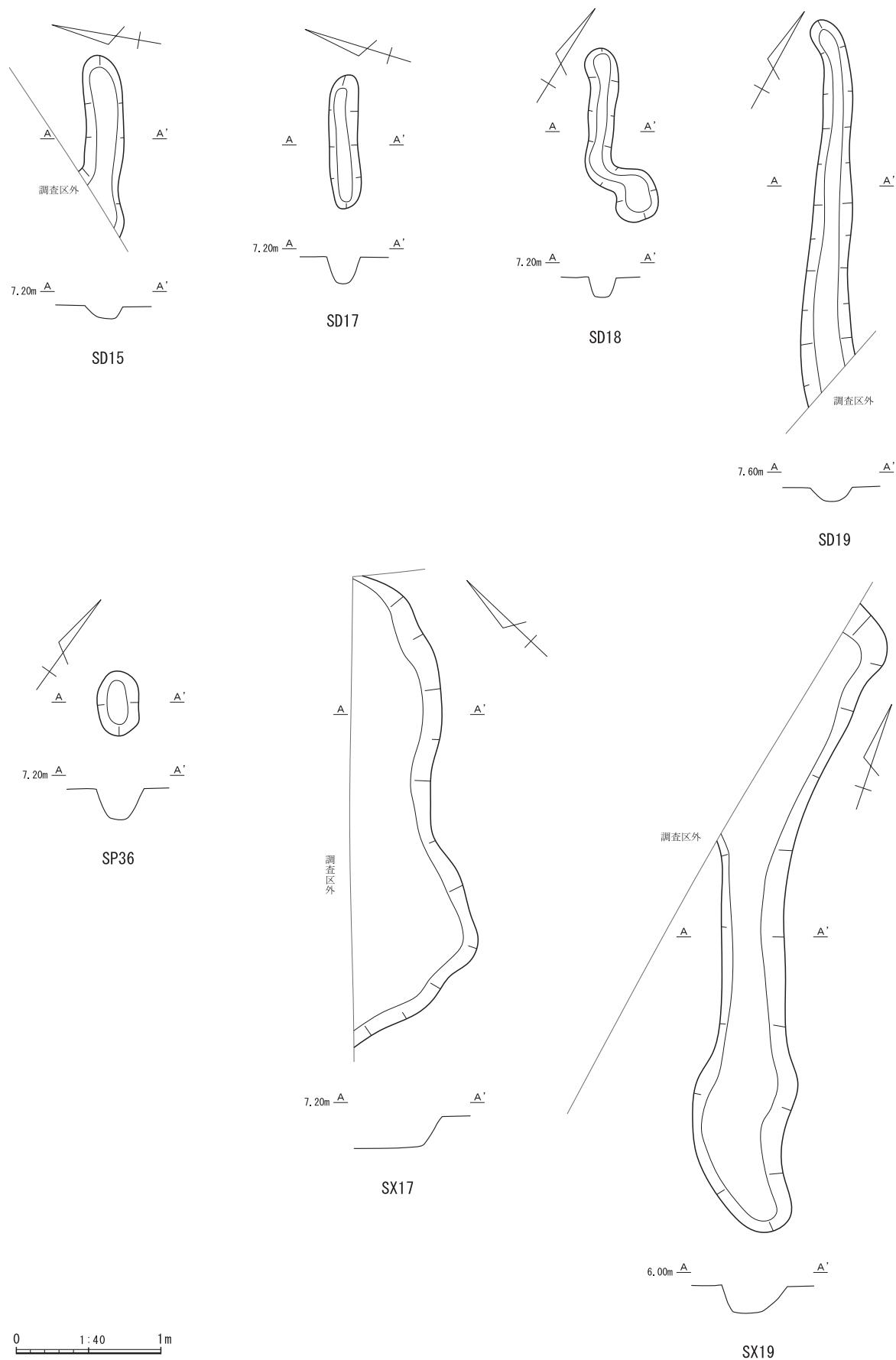
第128図 3区拡大図2



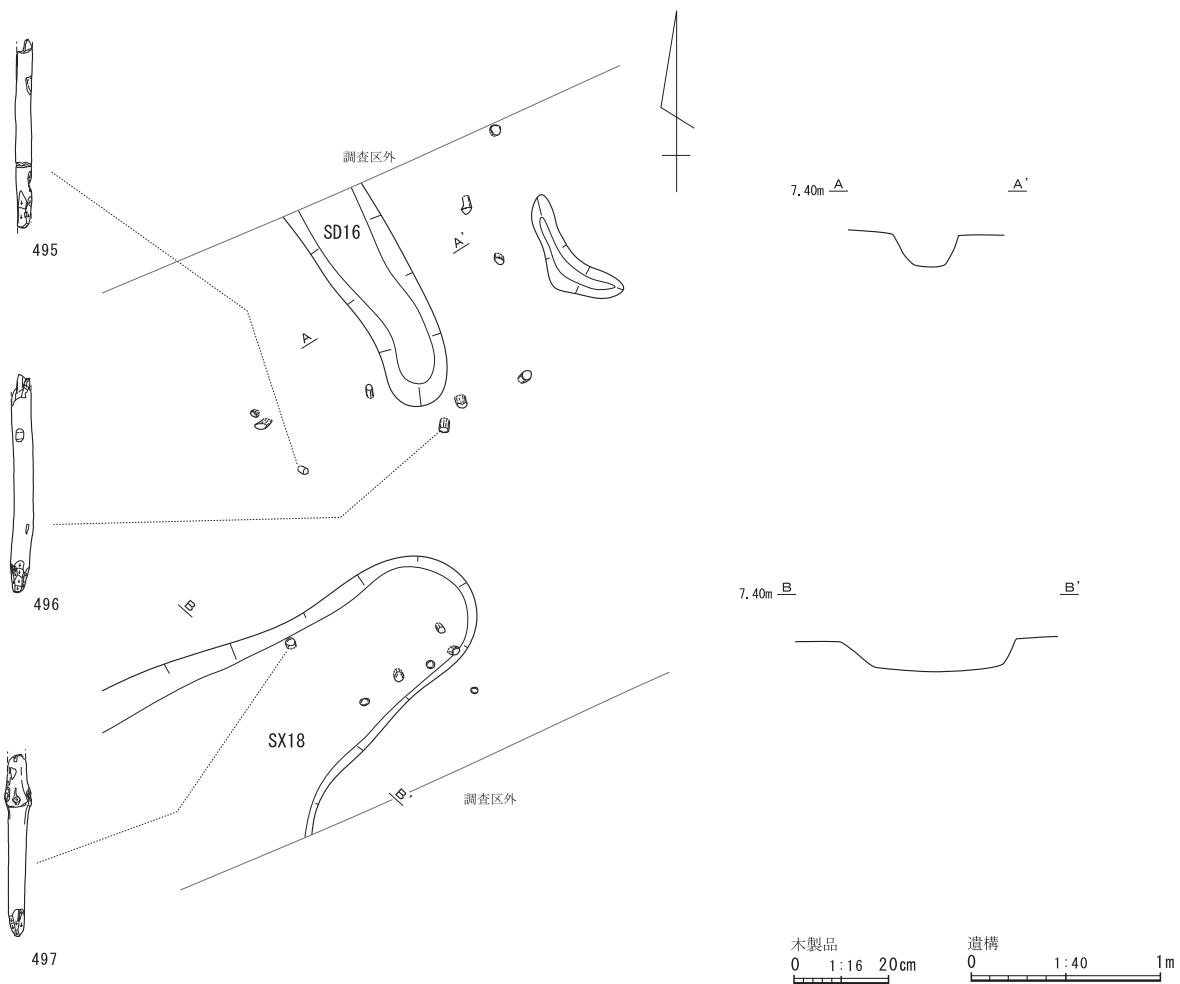
第129図 3区拡大図3



第130図 3区拡大図4



第131図 3区 SD15・17・18・19、SP36、SX17・19 実測図



第132図 3区杭列1実測図

認できた。南側は調査区外へ続いている。

### 3区 SP36 (第131図、図版38)

u 40 グリッドで検出した。楕円形状の穴で、長軸は 0.9 m、短軸は 0.4 m である。西隣には SD18 があるが、関連するものではない。

### 3区 SP37 (第131図、図版39)

3区南西隅の r 44 グリッドで検出した柱穴状の小穴である。周辺には関連する柱穴ではなく、建物跡にはならない。

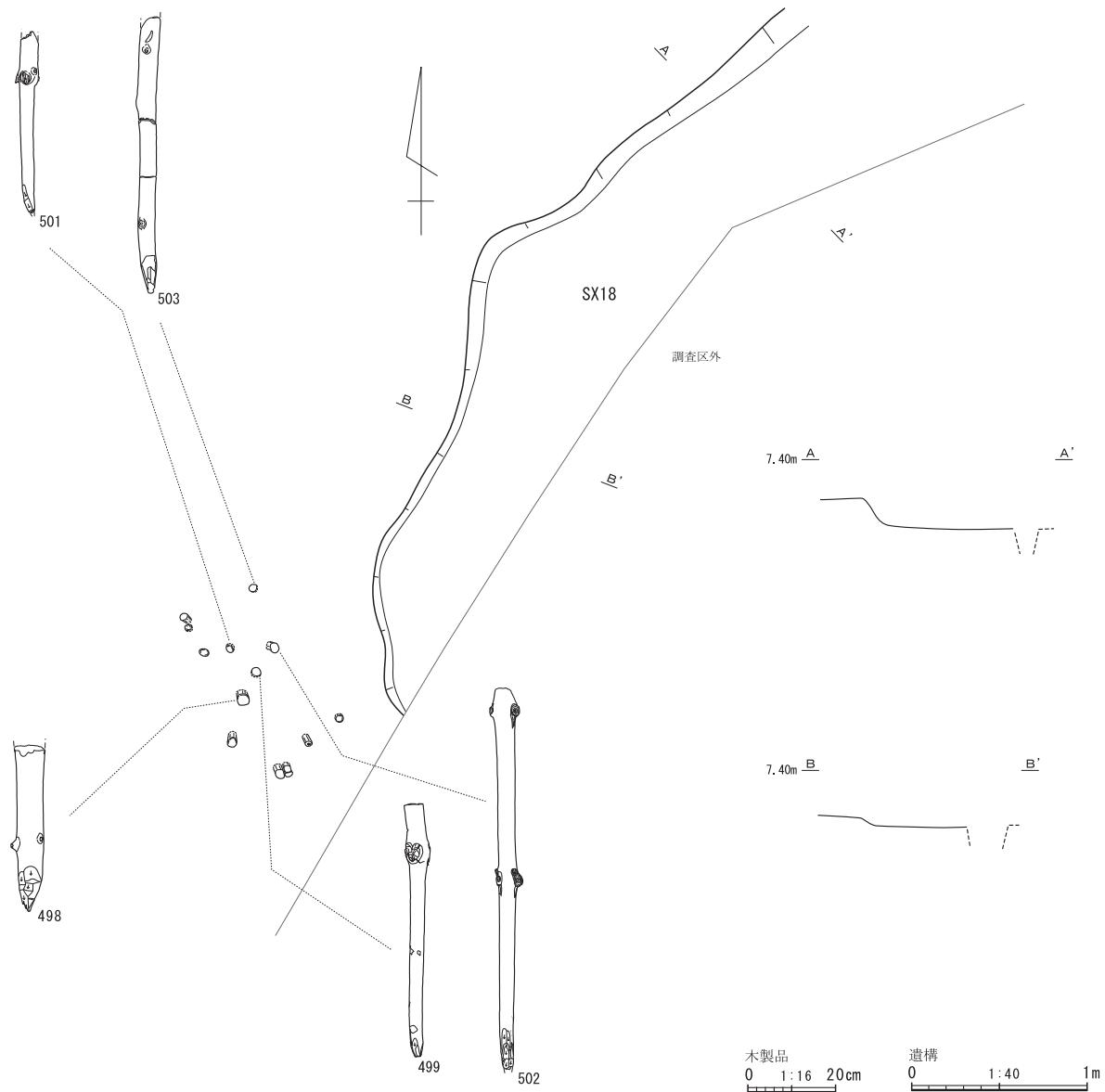
### 3区 杭列1・2 (第132～134図、図版40)

杭列1はu 40 グリット、杭列2はu 41 グリットで検出した。

杭列の各杭は径 4～6 cm 前後の丸木を使用している。丸木の先端を工具で削り、尖らせてある。樹種はクリ2、アカマツ1、マツ属複維管束亜属5。手近にある雑木を使っていると考えられる。

495は直径 3.4 cm の丸木で、樹種はクリ材である。上下端部は欠損している。下方は2面に杭状の加工がある。496は下端部から 6.7 cm まで 6面に加工し杭状となっている。下端部の先端は押し潰されている。上端は欠損している。497は下方先端部に 5面の加工がされており、杭状に尖っている。上部には枝を払った痕跡が残っている。上端部は欠損している。

498は下方 10 cm まで杭状の加工をしている。上端は杭を打ち込んだ痕とみられ打ち潰されている。



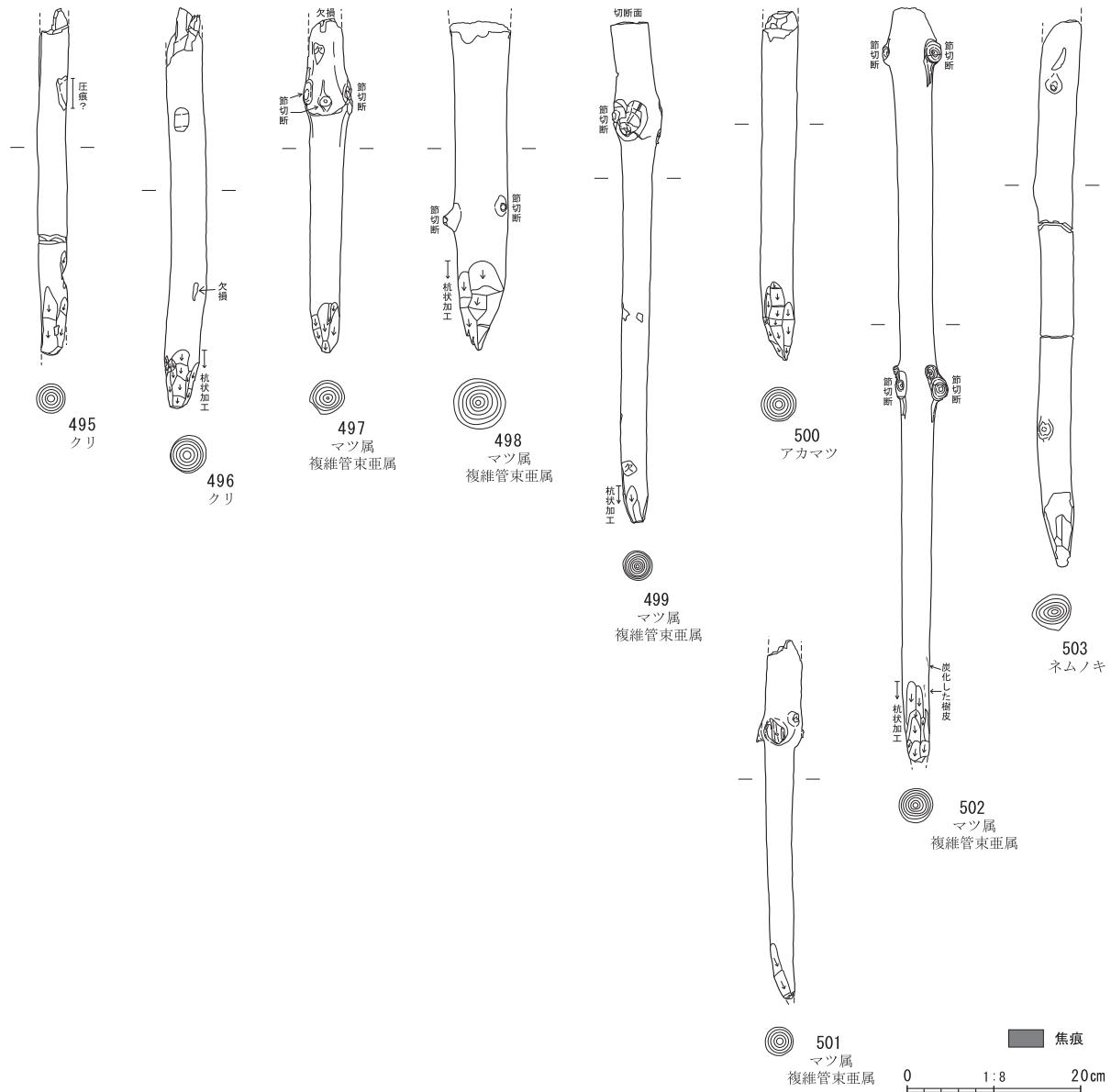
第133図 3区杭列2実測図

枝を切断し折り取った痕跡が残る。499の下端部は4面の加工がある。上端部は切断面となっている。上部には節の痕があり、枝を払ったときの刃物痕がある。500はアカマツ材の丸木の先端を杭状に加工している。上端部は欠損している。下方は下端から9.0cmの部分に4面の刃物痕がある。501はマツ属複維管束亜属の芯持ち材を杭状に加工してある。上下端部は欠損している。下方は1面のみ斜めに削られている。上部には枝を払った節がある。502は下方9cmを杭状に加工してある。炭化している樹皮が僅かに残存している。上端部は欠損している。払い落とされた枝の節が残る。503はネムノキの芯持ち材で、直径は4.5cmである。上端部は欠損し、下端部も一部欠けている。下方は斜めに4面を削り、杭状に尖っている。

### 3区 SX17 (第131図、図版38)

▼ 40グリッド内の調査区北端で検出した不定形な落ち込みである。人為的なものではなく、調査段階で認識したように河川の流れで抉られた自然地形の一部かと思われる。

### 3区 SX18 (第132・133図、図版38)



第134図 3区杭列1・2出土遺物実測図

u 40 グリット内の3区南壁中央付近で検出した。一部は杭列1と重複する。SX18も自然地形で、河川の流れの影響を受けた地形とみるのが妥当である。

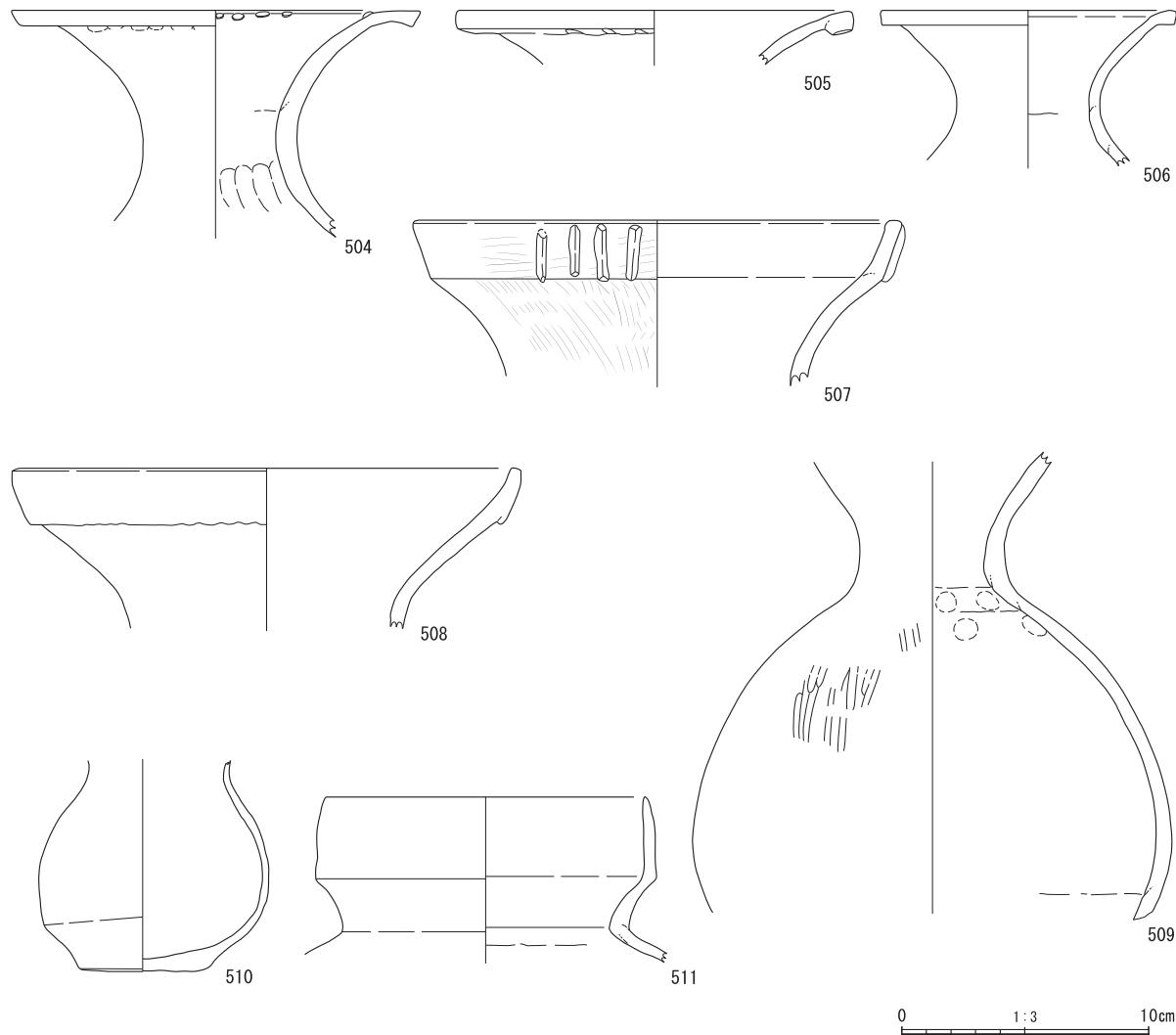
### 3区 SX19 (第131図、図版38)

t 41 グリッド内の西壁側で検出した。不定形な溝状を呈するが、調査区南半部は砂混じり層が堆積して河川の影響を受けた範囲でもあることから、自然地形と考えられる。

### 3 包含層

第135～148図は高橋遺跡の包含層より出土した土器等である。包含層出土土器は調査区ごとの図版～器種ごとにまとめた。

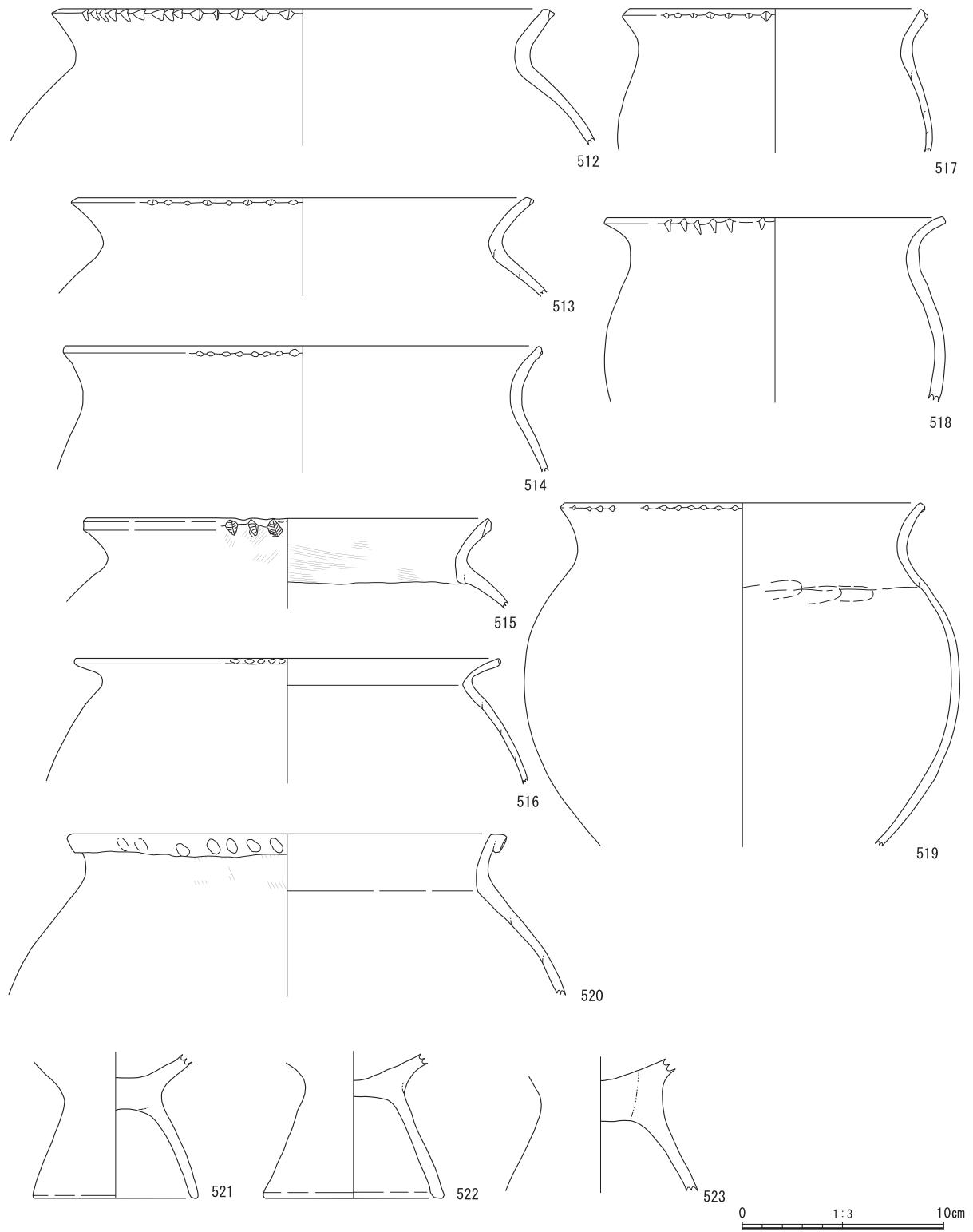
第135図504～511は1-1区包含層出土の壺形土器である。器面が摩滅し、調整痕が不明なものが多い。504は折り返し口縁の壺である。IV層より出土し、口径は16.6cmで、口縁内側に円形浮文が4箇所ある。破片のため円形浮文の単位と貼り付け箇所は不明である。505はIV～V層で出土した折り



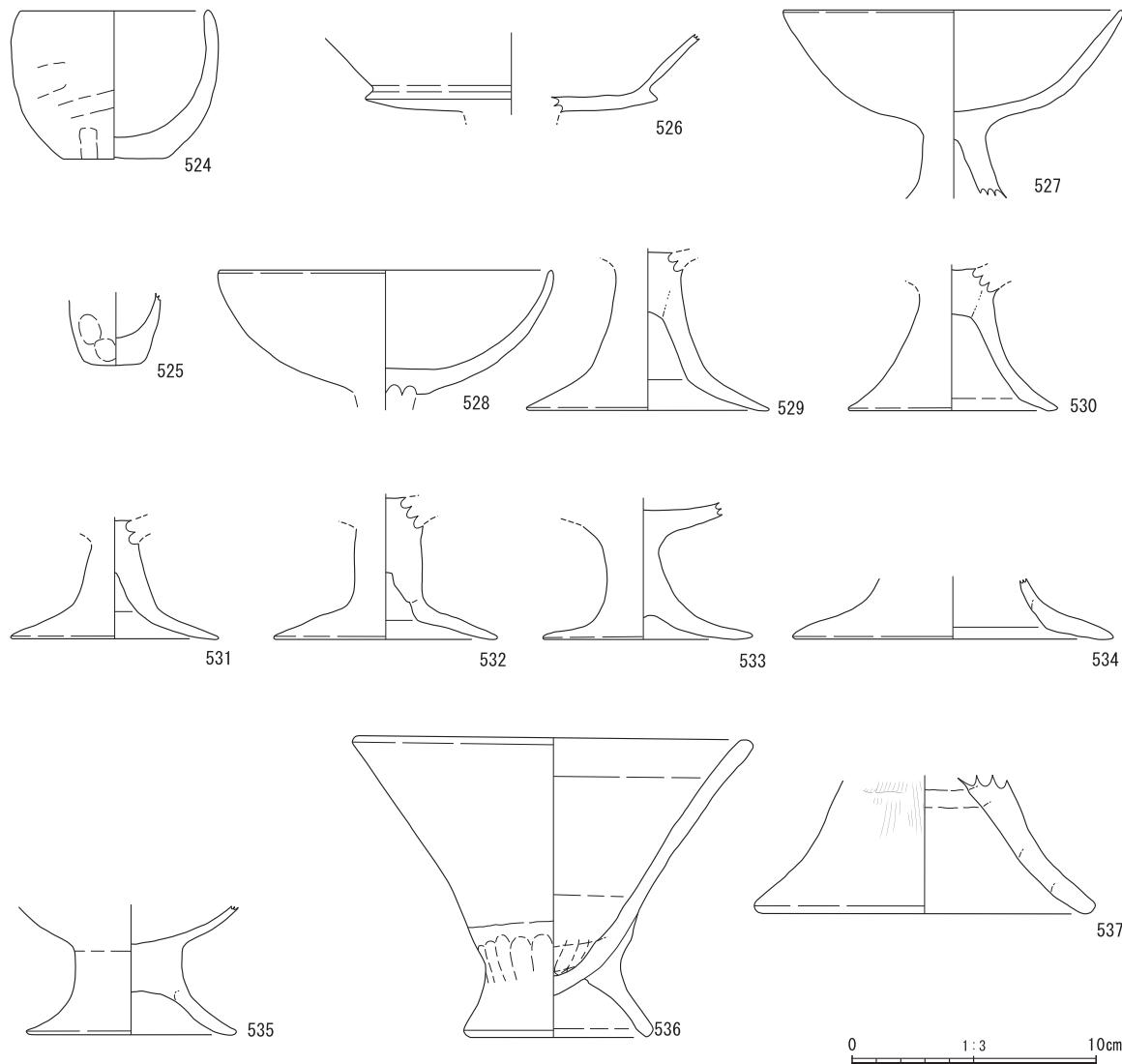
第135図 1-1区包含層出土遺物実測図1

返し口縁を持つ壺である。全面ナデ整形している。506は口径12.0cmで、口縁は折り返している。507は受け口の口縁で、外面に4本単位の棒状浮文を付けている。配置箇所数は不明である。口径は19.8cmで、外面はハケ調整し、内面は撫でている。508も受け口の口縁か。粘土の継ぎ足し時に外面の貼り付けが甘いため、折り返しのようにも見える。口径は20.6cmで、IV層からV層より出土した。509は口縁と底部が欠損している。III層より出土し、最大径は22.0cmで、外面はヘラミガキをしている。出土したグリッドの位置から見て、SD 8の上層部であった可能性がある。510もSD 8上層出土の可能性がある小型壺である。口縁部が無く、底径は5.0cm、高さは8.6cmで、全体にナデ整形し、歪みがある。511は口縁部が垂直に立ち上がる形状の壺である。口径は13.0cmで、III層より出土した。

第136図512～523は1-1区包含層出土の甕である。512～520は口縁部から体部の破片で、いずれも口縁部にキザミを持つ。器面は磨耗しているものが多く、調整痕が不明瞭である。またいずれも遺構検出面である5層上面よりも上層の包含層より出土している。521～523は台付甕の脚部片で、同様に上層の包含層より出土した。512は3層より出土した甕で口径は25.0cmである。513は口径が23.0cmで全面ナデ仕上げしているか。514は4下～5層より出土した。口径は23.8cmで、全面ナデ仕上げしている。515はw 32グリッドの4層より出土した。口径は20.2cmで、外面と内面の口縁部をハケ調整後に撫でている。体部内面は調整痕が残らないほど、ナデ消している。516は515と同じ場所で出土



第136図 1-1区包含層出土遺物実測図2



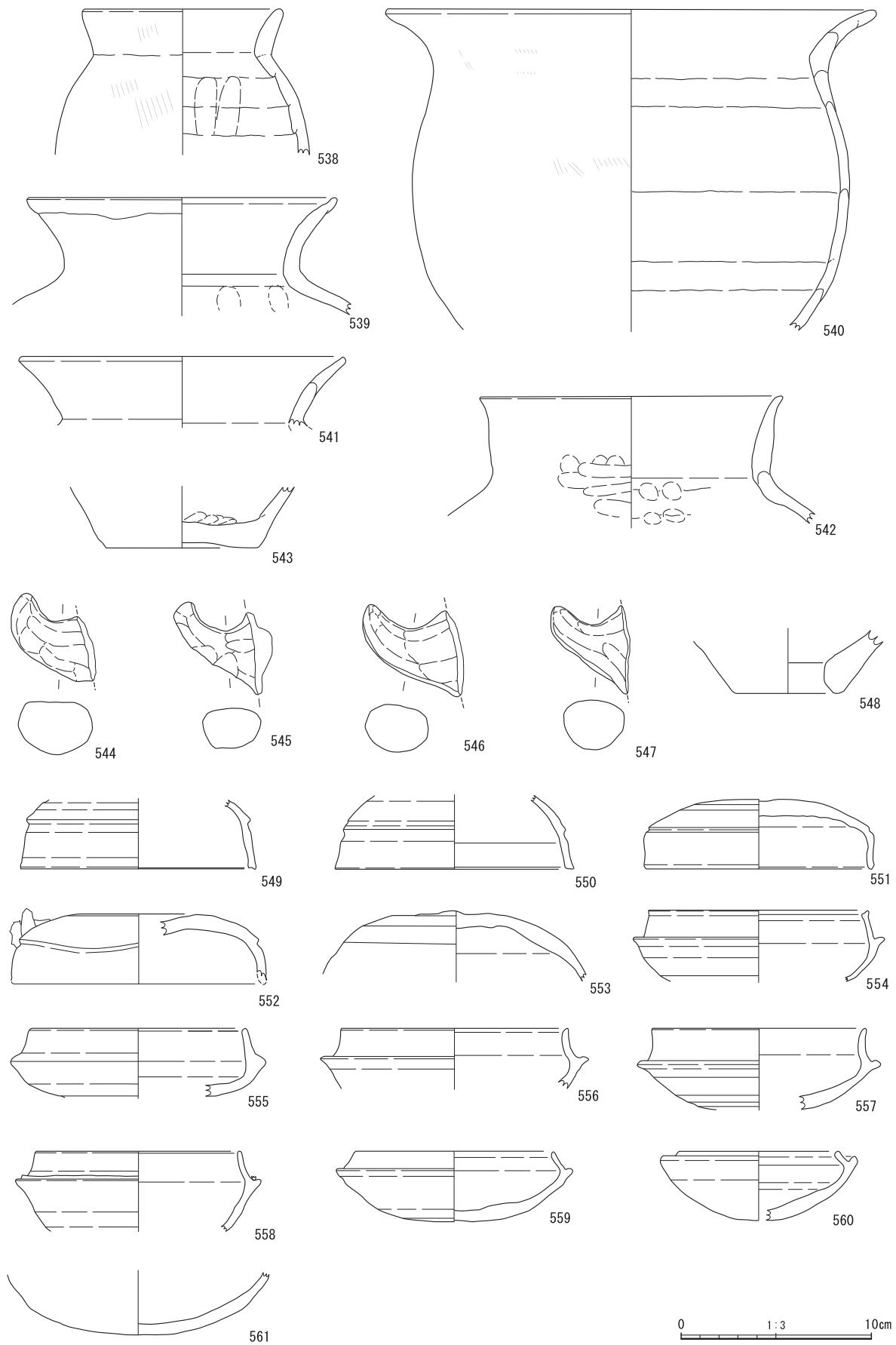
第137図 1-1区包含層出土遺物実測図3

した。口径は21.2cmで全面ナデにより調整している。517は口径が15.2cmとやや小型の甕である。w 37グリッド北側の4下～5層より出土した。518はw 32グリッド内の5層検出面で出土した。口径は17.0cmと小型である。519は口縁から体部まで残存している。口径は18.2cmで、内面は輪積み痕を指ナデしている調整痕が見える。520は折り返し口縁の口唇部にキザミを入れた甕の口縁部片である。4～5層の下層で出土した。口径は21.8cmで内外面はハケ調整後に撫でている。

521は4下～5層より出土した。脚の底径は8.2cmで、全面ナデ整形している。522はw 29グリッドの東排水溝内で出土した脚部で、底径は9.0cmで、ナデによる整形である。523は脚の底面が欠損している。4下～5層で出土した。

第137図524～537は1-1区包含層出土の手捏ね土器、高坏他である。524・525は手捏ね土器、526～535は高坏、536・537は深鉢と思われる。これらのうち、524・525、528～533・535は出土したグリッドからみて、SD 8の上層に含まれる可能性がある。524は口径が7.7cm、高さは6.1cmの手捏ね土器である。全面、指ナデにより整形している。525は小型の手捏ね土器で、底径は2.0cm、残存高は3.0cmである。全面、ナデ整形で、外面には指頭圧痕がある。

526はw 31グリッドの3層より出土した。高坏の坏部片で、口縁部は欠損している。坏部底はほぼ



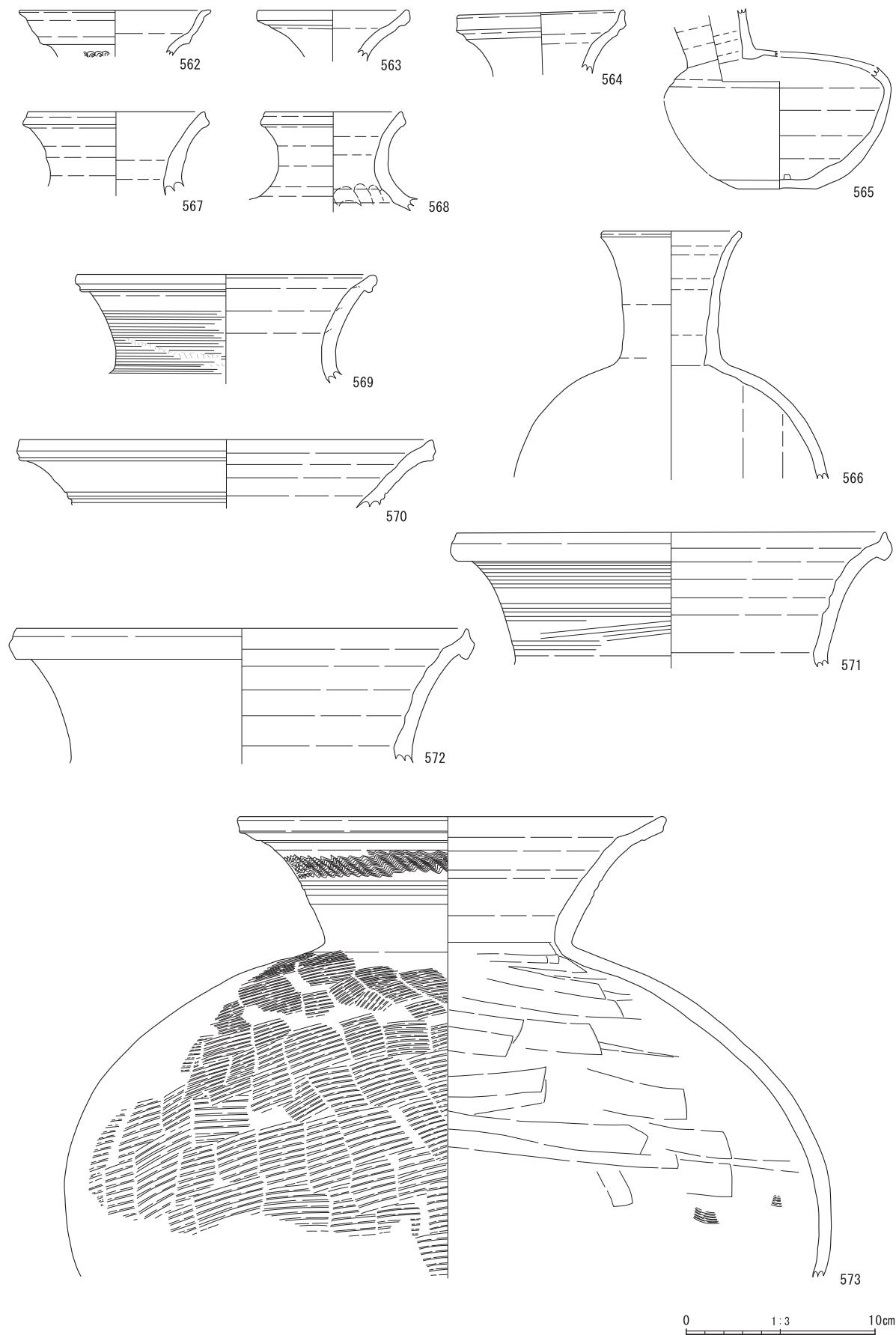
第138図 1-1区包含層出土遺物実測図4

水平で、粘土を継ぎ足して口縁部へと繋がる。外面には切り替わり部分に大きな稜を持つ。全面、ナデ整形で仕上げている。527は土師器の高坏で、坏部から脚部の一部まで残っている。口径は13.9cm、残存高は7.7cmで、全面、撫でている。528は3層より出土した坏部で、口径は13.8cm、器面はナデにより仕上げている。529～535は高坏の脚部片である。器面は磨耗しているものも多いが、全面、ナデにより整形している。529は4層出土で、底径は10.0cm、脚部高は6.5cmである。530は3層出土で、底径は8.7cm、残存高は5.8cmである。531は4層出土、底径は8.6cmで、内面は工具により削って調整している。532は3層より出土し、底径は9.2cmを測る。533も3層より出土し、底径は8.6cmで、全体に歪みがある。534は3層より出土した脚の裾片で、底径は13.2cmである。535は坏の一部から脚部まで残っている。4層より出土し、底径は8.6cmである。536は脚が付いた深めの鉢である。4下～5層より出土した。口径は16.45cm、底径は7.75cm、器高は12.2cmである。上部と脚部とを繋げるため、内外面に縦方向の指ナデをしている。537は高坏または鉢の脚部と思われる。3層より出土し、底径は14.0cmで、内外面はハケ調整後に撫でて整形している。

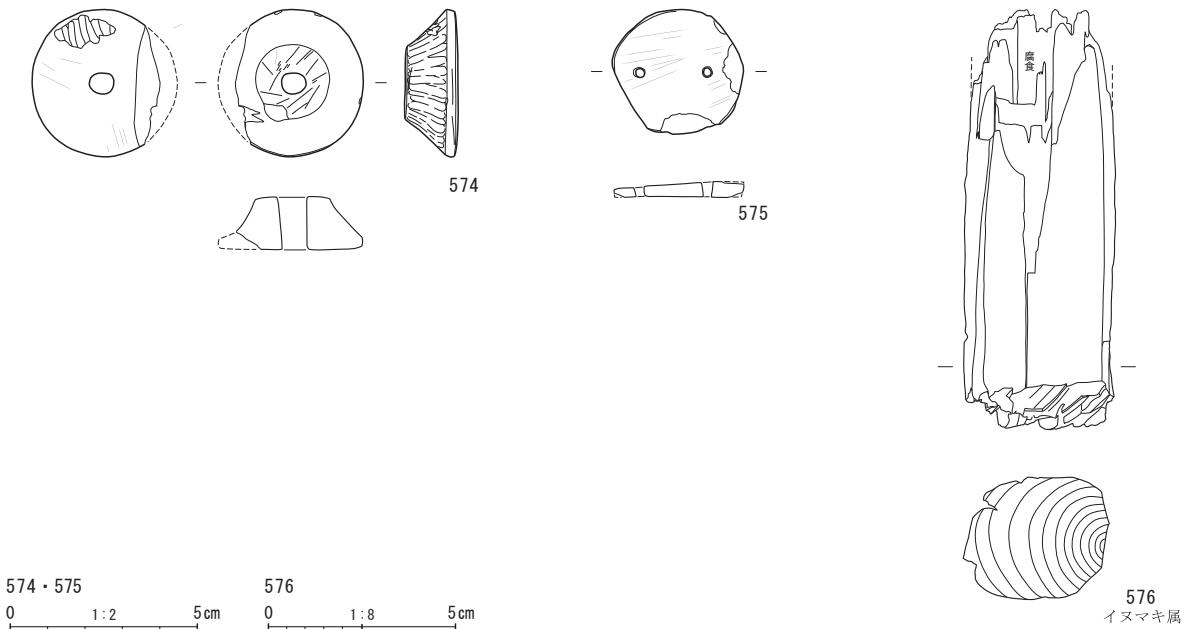
第138図538～561は1～1区包含層出土の土師器の甕、瓶、須恵器の坏である。538～542は甕、543は壺底部か。544～548は瓶、549～561は須恵器の坏蓋・坏身である。538は小型の甕である。底部から体部が欠損している。口径は10.6cmで、外面はハケ調整、内面は口縁がハケ調整後にナデ、体部内面は輪積みの後に指ナデしている。539は甕の口縁部で、w34グリッドの3層より出土した。SD8上層出土の可能性がある。口径は16.4cmで、外面の口縁部は粘土の継ぎ足し痕がある。内面はナデ整形している。540は口縁から体部まで残存し、底部は欠損している。w29グリッドの4～5層出土で、口径は25.8cmと実用的な大きさである。外面はハケ調整後ナデ、内面はナデ整形をしている。541は口縁部破片で、口径は17.2cmを測る。内外面はナデ整形している。542は垂直に立ち上がる口縁部で短頸壺の可能性もある。口径は15.0cmで、外面は指ナデ、内面も輪積み部分を指で押さえている。543は1～3層より出土した底部片で、底面には木葉痕がある。底径は8.0cmで、全面ナデ仕上げしている。壺の底部であろうか。

544～547は瓶の把手部分である。いずれも指によりナデ整形をしている。出土したグリッドからみてSD8の上層と思われる。544は4層出土で径は2.8×3.9cmである。545は1～3層出土で、径は2.1×3.1cm、本体との接合部には出っ張りを設けている。546は径が2.5×3.3cm、547の径は2.6×3.2cmである。548は瓶の底部である。w30グリッドの3層より出土し、表面は全体に剥離している。調整はナデ整形と思われる。底径は6.0cmで、底は孔が貫通している。

549～553は須恵器の坏蓋である。このうち、549・551～553・555～558・561はSD8の上層出土である可能性が高い。549は3層より出土した小片だが、口径は12.4cmに復元できた。550は4～5層下層より出土した。口径は12.6cmで、外面には自然釉が付着している。551は4層より出土した。口径は12.2cmで、外面頂部はヘラ削りされている。552は4層より出土した坏蓋で、器は大きく歪み、外面には癒着物がある。一見すると窯跡から出土したようである。口径は13.4cmで口唇部分は欠損している。今回の調査でも癒着した須恵器がいくつか見つかっている（第104図344、第138図558、図版20P-69）。ただ数量としては少なく、ほんの一部に過ぎない。当地周辺には今のところ古墳時代後期の須恵器窯は確認されておらず、出自が不明な須恵器である。553は口縁部が欠損している。4層より出土している。外面頂部には粘土が付着している。554～561は須恵器の坏身である。554は口径が11.6cmで、w29グリッド南の4～5層より出土した。555は3層より出土し、口径は11.5cmを測る。556は底部が欠損している。口径は12.0cmで4層より出土した。557も底部が欠損している。3層出土で、口径は11.2cmである。558は3層出土の坏身で、口径は10.8cmと小型である。蓋受け部分には、焼成時に付着した坏蓋の口縁部が残っている。559は口径が10.4cm、器高は3.7cmで、4層より出土した。



第139図 1-1区包含層出土遺物実測図5



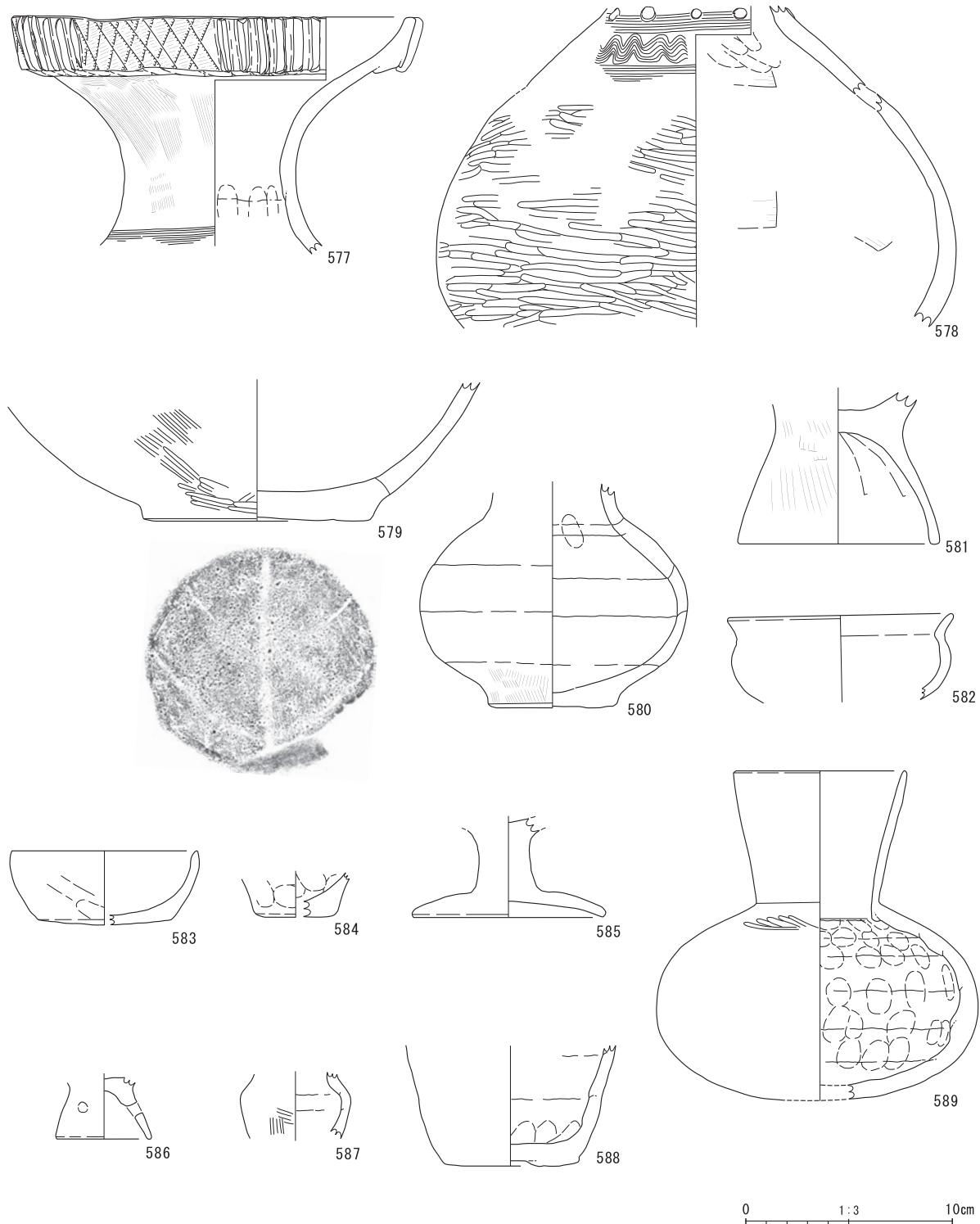
第140図 1-1区包含層出土遺物実測図6

器面には自然降灰釉が付着している。560は4層より出土した壺身で、口径は8.4cm、器高は3.7cmと、さらに小型である。561は4層より出土した須恵器だが、壺身か、あるいは丸底の瓶の可能性がある。

第139図562～573は1-1区包含層出土の壺、瓶、壺、甕等の須恵器・灰釉陶器である。562～564は壺か、灰釉陶器の小型壺の口縁部である。562・563はSD 8の上層出土の可能性がある。562はv 34グリッドの3層より出土した。口径は10.2cmで、外面には櫛描波状文の一部が確認できる。563は灰釉陶器の小型壺の口縁部か。v 34グリッドの1層より出土した。口径は8.1cmで、外面には降灰釉が付着している。564も灰釉陶器の小型壺の口縁部か。表土掘削時に出土している。口径は8.9cmである。565は平瓶である。w 32グリッド北の3層より出土した。口縁部は欠損している。最大径は12.0cm、底径は4.2cmで、内面底に窯体のような付着物がある。566はフラスコ型の長頸壺である。口縁部から体部の一部まで残存している。口径は7.5cm、残存高は13.1cmで、外面全体に釉があり、内外面の部分的に自然降灰釉がある。

569～573は須恵器の大型甕である。569は表土掘削時に出土した甕の口縁部である。口径は16.0cmで、外面にはカキ目と、その工具痕跡がある。567は口縁部径が22.3cmで、外面には2本の沈線が入る。571はw 31グリッド北の3層より出土した。口径は23.4cmで、外面にはカキ目が入っている。572はv 33グリッド南の4層より出土した甕口縁部である。口径は24.8cmと大型である。573は口縁部から胴部まで残存している大型甕で、口径は22.8cm、残存高は24.5cmを測る。v 35グリッド西で出土したことからSD 8上層であった可能性もある。頸部までの間に沈線と櫛描波状文がある。体部外面の整形は工具によるタタキ目があり、内面はタタキの当て具ののち、幅広の工具でヘラナデしている。

第140図574～576は1-1区包含層出土の石製品と木製品である。574は石製紡錘車で、1-1区w 30グリッドの3層より出土した。表面から見ると正円形、側面側から見ると台形状を呈する。左側縁の一部を欠損している。全体を非常に丁寧に研磨してあるが、一部に研磨する前の荒削り段階の痕が残っている。上面・下面には擦痕がある。側面は上面から下面へ向かって放射状に磨かれている。細いヤスリのような工具で研磨したように見える。孔は中央に穿たれ、正面側は径0.8cm、反対面は径0.65cmである。石材は滑石製である。古墳時代後期に出土する石製紡錘車の特徴を有する（鈴木

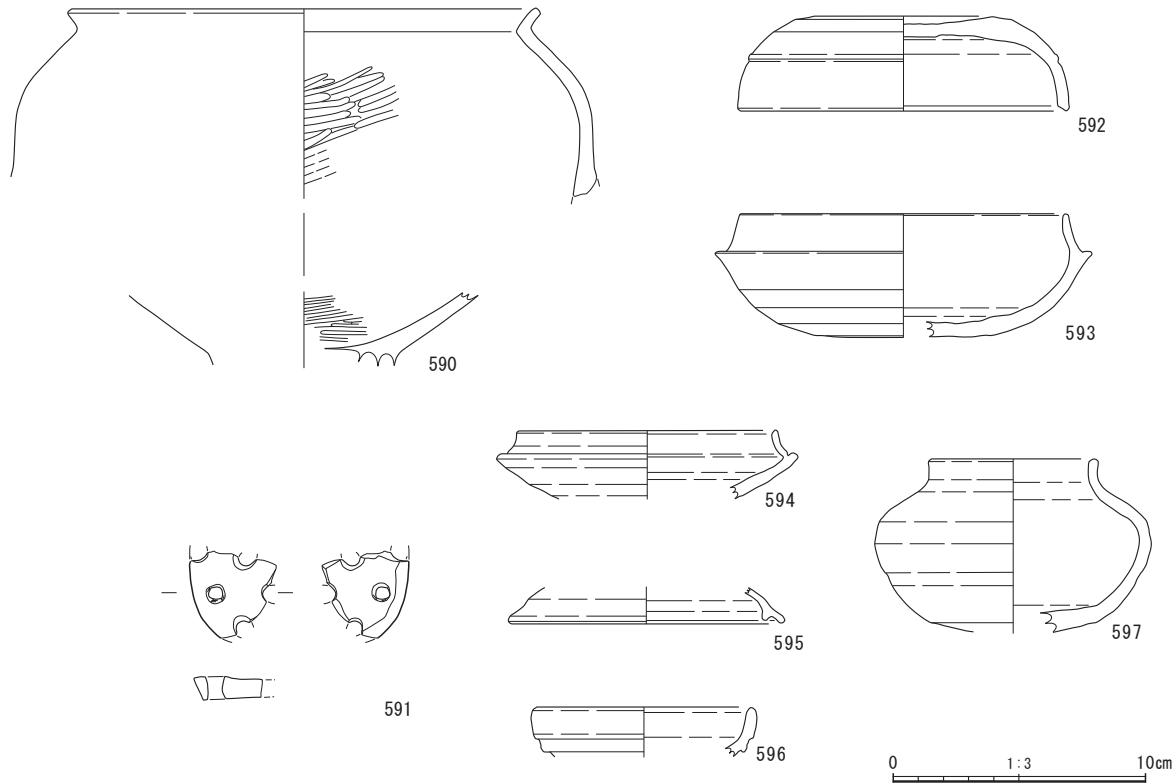


第141図 1-2区包含層出土遺物実測図1

1999）。このことからも6世紀代から7世紀始めの年代に属するものであろう。

575は包含層より出土した滑石製模造品で、板状剥離し易い緑泥石を使ってつくられている。径は3.35～3.5cmほどで、正円には及ばないが丸く円を意識して作っている。両面に研磨痕がある。厚みは左右に異なる。穿孔は横並びに2孔ある。孔の径は最大0.3cm、同じ工具を使って穿たれたであろう。

576は1-1区北のw 30グリッドで検出した柱穴SP 7（第53図、図版23）より出土した建築材の



第142図 1-2区包含層出土遺物実測図2

柱根である。最大径は15.6cm、長さは44.85cmほど残存している。上部は腐食が激しく欠損している。下端部は切断したときの刃物痕が顕著に残っている。イヌマキ属の材を使っており、芯が端に寄っていることから、1/4に分割された材から加工した可能性がある。右側面には3面の加工面がある。

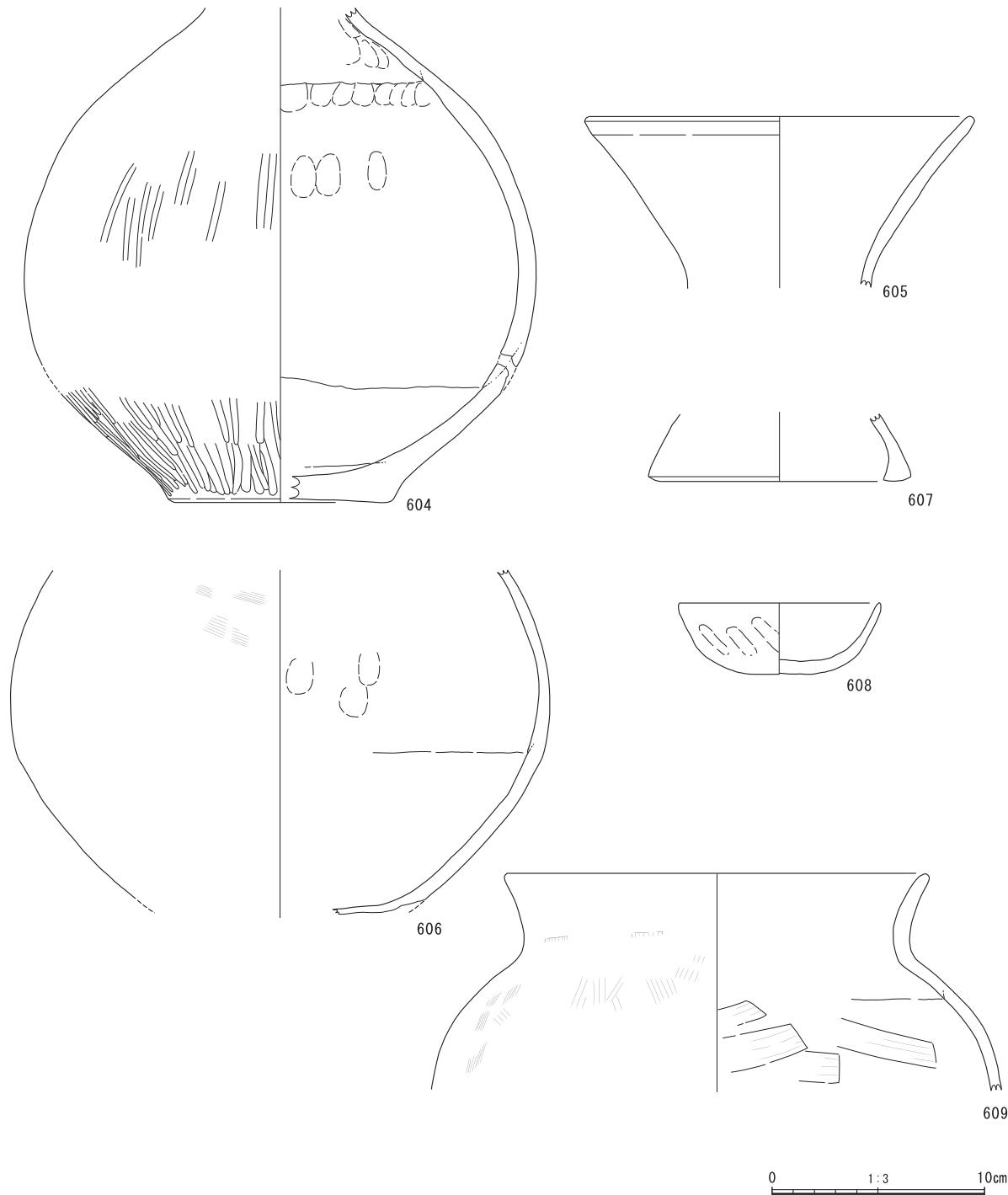
第141図577～589は1-2区包含層出土の土器である。1-2区包含層や土器集中箇所のうち、x 26グリッドはSR 1、x・w 28グリッドはSR 2を検出しており、第141～144図に掲載したなかには、各遺構の上層出土の可能性がある。577～580は壺である。577はSR 1を検出した東側排水溝より出土した。出土位置はSR 1の範囲だが、SR 1より出土した土器群（第117図）の標高値よりも低い層より出土している。そのため、577については包含層出土として扱うこととした。口径は19.6cm、残存高は11.45cmで、口縁部から頸部にかけて、ほぼ全周が残っている。外面はハケ調整、内面は磨耗しているものの輪積み箇所に指ナデがある。口縁は受け口で、外面には6本単位の棒状浮文が5箇所に配置され、その合間に櫛刺突による櫛斜格子文で埋めている。頸部には櫛描横線文の一部が残っている。年代は弥生時代後期後葉に属する。578はII層（排水溝内）より出土した。口縁部と底部は欠損している。体部の最大径は25.3cm、残存高は15.6cmを測る。器面は外面をヘラミガキ、内面は板ナデと指ナデにより面調整している。肩部には櫛描横線文の間に波状文を挟み、上段横線文の上には直径0.7～1.1cmの円形浮文を配置している。円形浮文は4箇所残っているが、全体では11箇所に配置されていたと思われる。579は底部片で、東側排水溝より出土した。外面はヘラミガキで、内面は摩滅している。底径は11.1cmで、木葉痕がある。580はII～III層より出土した小型壺である。口縁部は欠損し、胴部中央が最も張り出す形状である。外面はハケ調整後にヘラミガキし、内面は撫でているか。底径は6.3cmで、底面にはモミ痕がある。581はIV層より出土した台付甕の脚部である。底径は9.8cmで、外面はハケ調整し、内面は板ナデにより面を作り出している。

582は土師器の坏で、口径が10.9cmと小型品である。IV層より出土し、底部は欠損している。口縁



第143図 1-2区包含層出土遺物実測図3

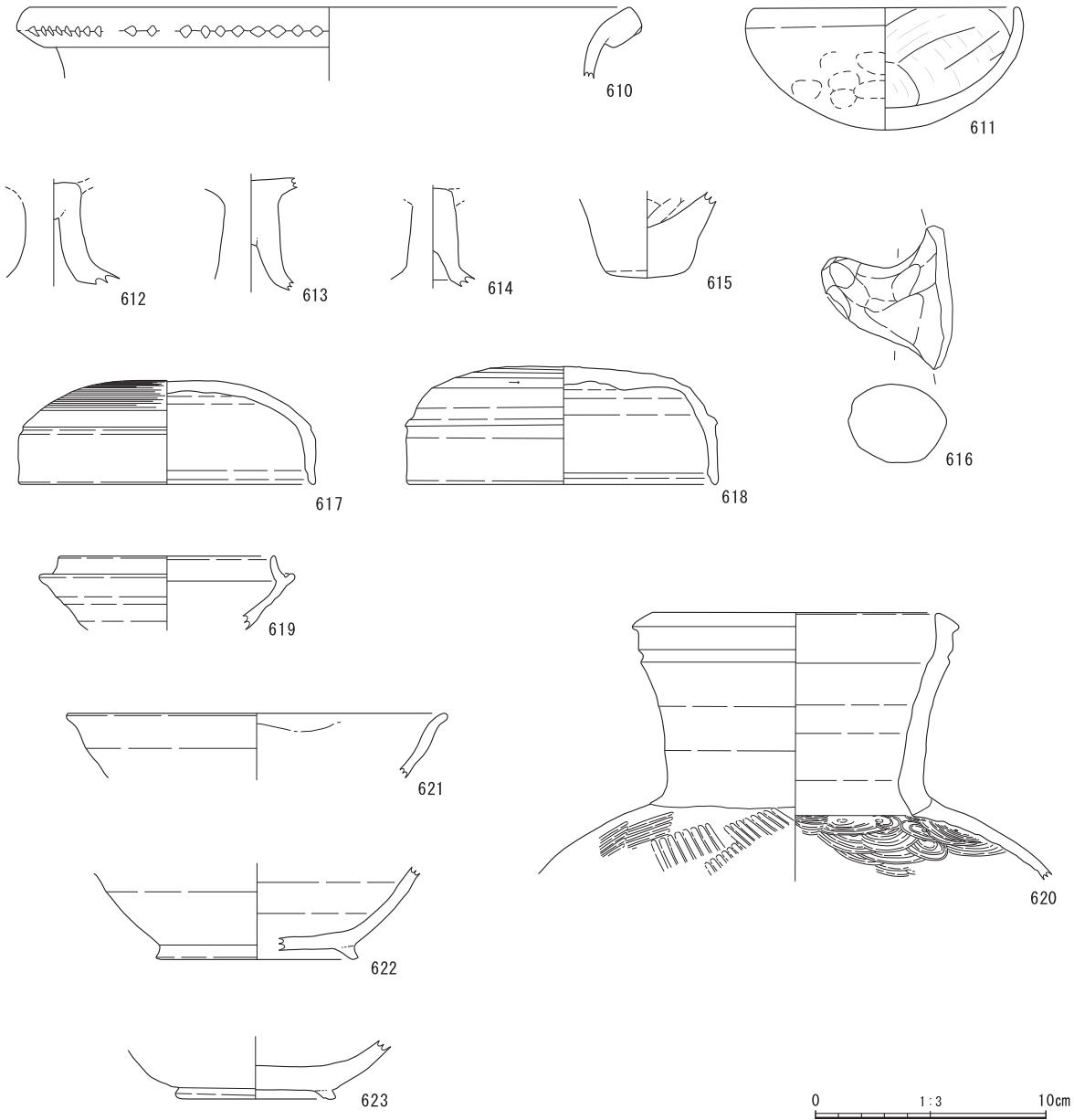
部は屈曲して外側へ開く形状になっている。583は手捏ね土器で、器種は壺である。口径は9.0cm、底径は6.5cm、器高は3.6cmで、外面を板ナデ、内面は調整痕をナデ消している。584も手捏ね土器でx 26グリッドのII～III層より出土した。底径は3.9cmで、内外面には指頭圧痕がある。585は土師器の高壺または器台の脚部分である。x・w 28グリッドのIV層より出土したことから、SR 2の上層出土の可能性がある。底径は9.4cm、残存高は4.8cmで、全面ナデにより仕上げている。586は台付甕か器台のミニチュア土器か。脚底径は4.7cm、残存高は3.0cmで、側面には3箇所の穿孔がある。器面は全面ナデによる整形をしている。587も甕のミニチュア土器か。口縁部と底部が欠損し、高さ3.2cmの体部だけの破片である。外面はハケ調整後ミガキ、内面には輪積みの後、撫でている。588はx 26グリッドのII層より出土した。器種名は特定できないが手捏ね土器である。外面には黒斑状の黒ずみがある。



第144図 1-2区土器集中箇所出土遺物実測図

内面は指ナデにより整形している。底面は撫でており、底径は 6.6 cm である。589 は西側排水溝のⅢ層上層より出土した壺である。壺は丸底で、口径が 8.4 cm、最大径は 15.6 cm、器高は 16.0 cm で、ほぼ完形に近い状態で見つかった。磨耗しているものの外表面はヘラミガキ、内面は輪積み部分を指押さえしている。

第142図 590～597 は 1-2 区包含層出土の土器・土製品である。590 は土師器の甕で、口縁から体部の破片である。同一個体で間違いないが、接合点はない。x 26 グリッドのⅡ層より出土した。外表面調整は摩滅のため見えないが、内面はヘラミガキにより整形している。口径は 18.8 cm である。591 は

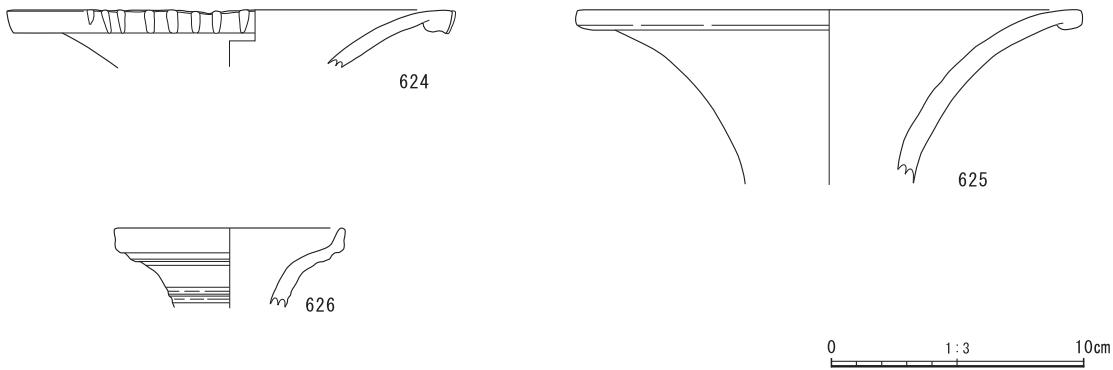


第145図 2-1区包含層出土遺物実測図

多孔の板状土製品である。厚さ 0.9 cm の板状で、円形であった可能性がある。 $x \cdot w 28$  グリッドの表土～包含層より出土した。裏面は表面が剥離している。孔は 5箇所を確認できるが、もともとは複数の孔が開いており、側面は上面から下面方向に斜めに切られている。瓶の付属品かと思われる。

592 はIV層から出土した須恵器の坏蓋である。口径は 13.1 cm、器高は 3.35 cm で蓋頂部は歪んでへこんでいる。593 は須恵器の坏身である。口径は 13.0 cm、最大径は 15.0 cm、器高は 4.9 cm である。594 はIII層より出土した須恵器の坏身で底部を欠損している。口径は 10.4 cm である。595 はIII層より出土した須恵器蓋である。口径は 11.0 cm で、上部は欠損している。596 は憩の口縁部である。位置が  $x \cdot w 28$  グリッドであることから、SR 2 の上層出土の可能性がある。口径は 9.0 cm を測る。597 は須恵器の短頸壺である。器面は回転ナデによる整形で、底部はヘラ削りされている。口径は 6.8 cm、高さは 6.9 cm と小型なことから、実用品ではない可能性がある。

第143図 598～603 は1-2区包含層出土の石製品である。598 は1-2区III層より出土した臼玉で

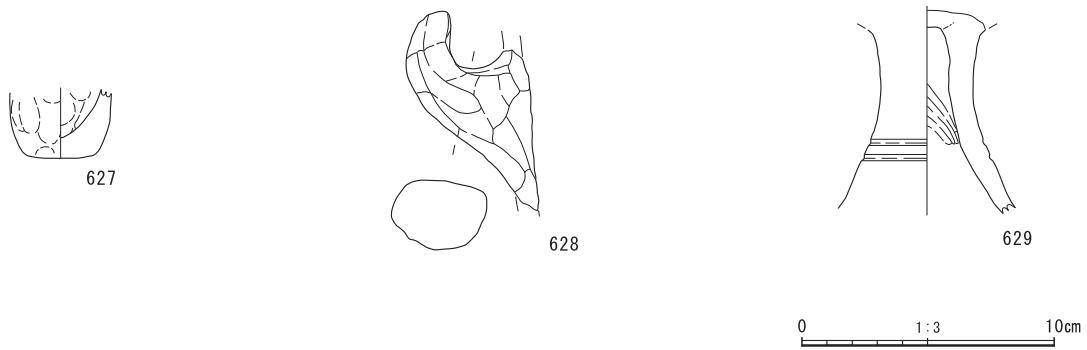


第146図 2-2区包含層出土遺物実測図

ある。材質は滑石製で、直径 0.54 cm、全面研磨されている。表面には擦痕がある。599 は 1-2 区より出土した砥石である。上半部は欠損している。もともと長さは 15 cm ほどあったと思われるが、使い込まれた結果、中央が薄くなり折れたため、廃棄されたものと思われる。表面には付着物がある。表裏左右面の 4 面が使われている。下端面は風化している。流紋岩材であることから仕上げ砥として使っていたのであろう。600 は全体に風化が著しく進んでいる。流紋岩を使い、使用されたと思われる平坦面は 1 面で擦り痕が粗く残っている。中央で折れている。601 は SR 2 覆土層より出土した。貞岩製で、小振りな自然礫の一部を使っている。上端部は狭く、擦れた痕がある。右側縁と下端縁には剥離痕がある。手に収まる大きさであることから、敲き石等の工具である可能性もある。602 は出土したグリッドの位置から、1-2 区 SR 2 覆土より出土した可能性もある。砂岩製の中型の扁平な自然礫で、右半部が欠損している。表側の片面中央部分に敲打痕が集中している。手に持つにはかなりの重量があることから、作業台のような用途で使用されたか。使用中に破損したことにより廃棄されたのであろう。603 は 1-2 区の IV 層より出土した。砂岩製の自然礫を使った完形の敲石である。上下端部と表・裏の中央付近に 2 箇所ずつ敲き潰れた痕が集中している。長軸方向の真ん中辺りがやや細くなっているため、ちょうど手のひらに握りやすく、収まりやすい形状をしている。

第144図 604～609 は 1-2 区包含層の土器集中箇所より出土した土器である。604～607 は  $\times 26$  グリッドの IV 層上面で出土した土器で、SR 1 上層出土の可能性がある。また 608・609 は  $\times 28$  グリッドで出土したもので、SD 4 か SR 2 上層出土である可能性が高い。604 は口縁から頸部を欠損した壺で、体部と底部まで 23.3 cm が残存している。最大径は体部中央で 24.2 cm、底径は 10.6 cm で上げ底の形状を持つ。外面は磨耗しているが部分的にヘラミガキ痕が残る。内面はナデ調整し、頸部に近いところは指頭圧痕がある。605 は壺の口縁部で、 $\times 26$  グリッドの IV 層上より出土した。口径は 18.4 cm で残存高は 8.0 cm、器面は剥離しているため調整痕は不明である。606 は壺体部で、口縁から頸部、底部が欠損している。体部の最大径は 25.4 cm である。器面は磨耗しているが外面はハケ調整後にナデ、内面は撫でているが、輪積み痕と指頭圧痕がある。607 は脚部片だが、器種は甕か深鉢かは不明である。脚底径は 12.4 cm で、全面ナデにより整形している。608 は小型の壺で、口径は 10.6 cm、器高は 3.8 cm で全面ナデにより整形している。609 は土師器の甕で口縁～体部までの破片である。IV 層上面より出土した。口径は 20.0 cm、残存高は 10.25 cm で、外面はハケ調整し、内面は板ナデにより整形している。口縁部は撫でている。

第145図 610～623 は 2-1 区包含層出土の土器である。610 は弥生土器の甕か。t 33・34 グリッドの III 層より出土した。口径は 26.1 cm で、口縁部は折り返しており、側面にキザミがある。内外面の調整痕は摩滅している。611 は土師器の壺身で完形品である。口径は 13.1 cm、器高は 6.0 cm、外面はナ



第147図 2-3区包含層出土遺物実測図

デによる整形で、内面は板ナデ後に撫でている。612～614は高壺の脚部であるが、壺部や脚の裾部は欠損している。いずれも表面が摩滅している。615は手捏ね土器で口縁部が欠損している。底径は3.6cmで底部は厚みがある。616は甌の把手部分で、断面径は3.4×4.3cm、全面ナデ整形している。

617～620は須恵器である。617は壺蓋で、Ⅲ層より出土した。口径は13.0cm、器高は4.5cmで、蓋頂部にはカキ目がある。618も壺蓋で、v 34グリッド出土であることからSD 8の上層の可能性もある。口径は13.5cm、最大径は13.6cmで、器高は5.15cmを測る。620は甌である。t 33・34グリッドのⅢ層より出土した。口径は14.2cmで、全体にやや歪みがある。口縁部は回転ナデによる整形、外面の肩部にはタタキ目があり、その上に自然降灰釉が厚く付着している。内面は肩部下に直径1.8cm以上の当て具痕がある。頸部の一部に降灰釉がある。

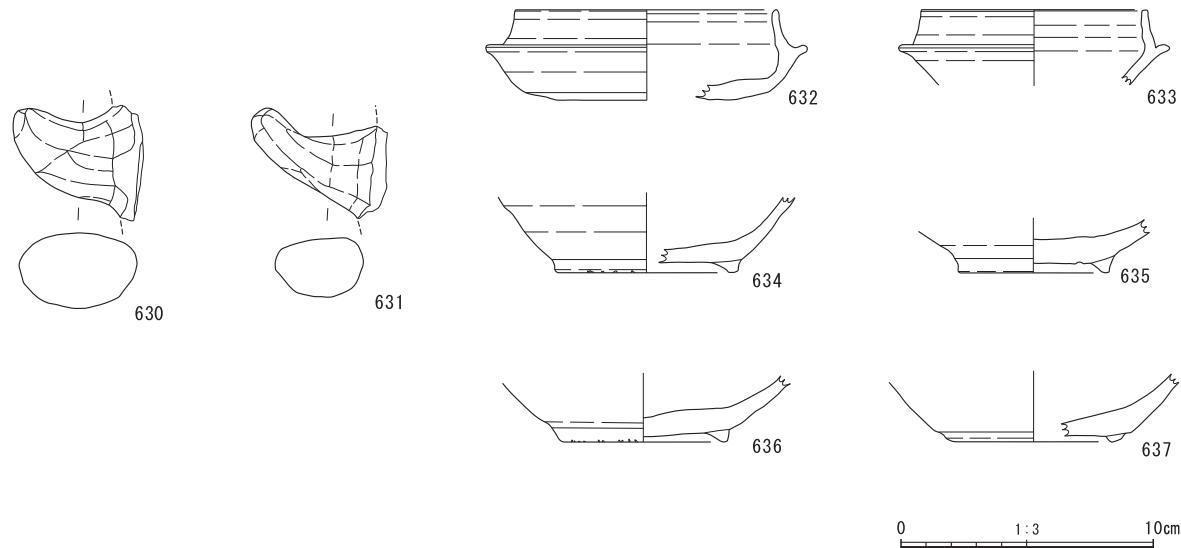
621は灰釉陶器の碗の口縁部片である。Ⅲ～Ⅳ層より出土し、口径は16.6cm、内面に施釉の痕が薄く残っている。622・623は山茶碗の底部片である。622は底部の高台径が8.8cmで、底面には回転糸切り痕がある。内面は見込み部分に重ね焼き痕があり、降灰釉が付着している。623は高台径が7.0cmで、高台縁にはモミ殻痕がある。

第146図624～626は2-2区包含層出土の土器である。624は弥生土器の壺口縁部である。u 31グリッドで出土した。折り返し口縁で、側縁には8本単位の棒状浮文が貼り付けられている。器面は摩滅により調整痕は不明である。625はu 33グリッドより出土した壺の口縁部である。器面は剝離して摩滅している。口径は20.0cmで、折り返し口縁部の形状である。

626は須恵器の壺の口縁部であろう。I～III層より出土した。口径は9.2cmで内外面は回転ナデによる整形である。外面の頸部には沈線がある。

第147図627～629は2-3区包含層出土の土器である。627は小型の手捏ね土器である。口縁部は欠損している。底径は2.7cm、残存高は2.75cmで、内外面は指ナデで整形している。628は土師器の甌把手部分である。全面ナデによる整形で、断面径は2.7×3.5cmで、右側は甌本体から剥がれた痕である。629は須恵器の高壺の脚部である。胎土は灰白色で、壺部は失われ、脚部裾も欠損している。接合部分の径は4.2cmで、外面には裾近くに2本の沈線が入る。内面には絞り痕がある。

第148図630～637は3区包含層出土の土器である。多くがv 40グリッド付近の砂混じり層より出土した。630・631は土師器の甌把手部分である。630は全面ナデ整形され、断面径は3.0×4.7cmである。631も全面ナデ整形で、断面径は2.35cm×3.5cmである。632は須恵器の壺身である。全体に歪みがあり、底部は欠損している。口径は10.4cm、残存高は3.6cmである。底面には乾燥台と思われる痕跡がある。633も須恵器の壺身である。底部へ欠損している。口径は9.0cmと小型品である。634はIV層より出土した山茶碗の底部である。高台径は7.3cmで、内碗面には自然降灰釉が付着している。635も



第148図 3区包含層出土遺物実測図

山茶碗の底部で、高台径は 6.0 cm である。高台内面には糸切り痕がある。内碗面には降灰釉が斑点状にある。636 は山茶碗の底部である。高台径は 6.7 cm で、高台底面にはモミ殻痕がある。IV層より出土した。内碗面には付着物がある。637 も山茶碗の底部で、潰れた高台の径は 7.0 cm である。高台底面にはモミ殻痕がある。内碗面には自然降灰釉が付着している。

### 註

1. 妻壁については静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第35集『寺家前遺跡II（木製品・石製品・金属製品他編）』2013年3月を参照のこと。

第7表 遺構観察表

## 【溝・土坑他】

遺構番号	区	グリッド	備考
SD1	1-2	x27	上層遺構
SD2	1-2	x27	上層遺構
SD3	1-2	x27	上層遺構
SD4	1-2	x28	上層遺構
SD5	1-2	w29	上層遺構
SD1	2-3	v28	
SD2	1-1	w29	
SD3	1-1	w29	
SD4	1-1	w29	
SD6	1-1	w31	
SD7	1-1	w30	
SD8	1-1・2	v33・34/t33・34	
SD9	1-1	w31	
SD10	2-1	t34・35	
SD11	2-1	t34	
SD12	2-1	t35	
SD13	2-1	q・r37	
SD14	2-2	u30	
SD15	2-2	u30	
SD15	3	v40	
SD16	3	u40	
SD17	3	u40	

遺構番号	区	グリッド	備考
SD18	3	u40	
SR1	1-2	x26	
SR2	1-2	w28・29	
SF3	1-1	w30	
SX1	1-2	w29	
SX3	1-1	w30	上層遺構
SX4	1-1	w29	
SX5	1-1	w30	
SX6	1-1	w29	
SX7	1-1	w31・32	
SX8	1-1	w32	
SX9	1-1	w32	
SX11	1-1	w33	
SX12	1-1	w32	
SX13	2-1	t35	
SX14	2-1	t35	
SX15	2-1	s・t36	
SX16	2-2	u31	
SX17	3	v39・40	
SX18	3	u40	
SX19	3	s43・44	

## 【小穴】

遺構番号	区	グリッド	検出面標高 (m)	底面標高 (m)	深度 (m)	備考
SP1	1-1	w30	8.27	8.04	0.23	
SP2	1-1	w30	8.27	8.02	0.25	
SP3	1-1	w30	8.29	7.98	0.31	
SP4	1-1	w30	8.31	7.86	0.45	
SP6	1-1	w32	8.20	7.94	0.26	
SP7	1-1	w30	8.25	7.97	0.28	
SP8	1-1	w30	8.23	8.08	0.15	
SP1	1-2	x26	8.56	8.26	0.3	
SP2	1-2	x26	8.57	8.33	0.24	
SP3	1-2	x27	8.57	8.18	0.39	
SP4	1-2	x28	8.57	8.27	0.3	
SP5	1-2	x28	8.59	8.29	0.3	
SP6	1-2	x28	8.57	8.24	0.33	
SP7	1-2	w28	8.56	8.37	0.19	
SP8	1-2	w29	8.59	8.26	0.33	
SP9	1-2	x27	8.55	8.06	0.49	
SP10	1-2	x28	8.61	8.38	0.23	
SP11	1-2	x28	8.58	8.21	0.37	
SP12	1-2	x28	8.48	8.27	0.21	
SP10	2-1	u34	8.16	7.78	0.38	
SP11	2-1	t34	8.08	7.71	0.37	
SP12	2-1	t34	8.12	7.83	0.29	
SP13	2-1	t34	8.02	7.71	0.31	
SP15	2-1	t34	8.14	7.86	0.28	
SP16	2-1	t34	8.09	7.87	0.22	
SP17	2-1	t34	8.12	7.81	0.31	

第7表 遺構観察表

遺構番号	区	グリッド	検出面標高(m)	底面標高(m)	深度(m)	備考
SP18	2-1	t34	8.14	7.64	0.5	
SP19	2-1	t34	8.14	7.81	0.33	
SP20	2-1	t34	8.12	7.79	0.33	
SP21	2-1	t34	8.10	7.99	0.11	
SP22	2-1	t34	8.11	7.99	0.12	
SP23	2-1	t34	8.10	7.93	0.17	
SP24	2-1	t34	8.11	7.87	0.24	
SP25	2-1	t34	8.13	7.92	0.21	
SP26	2-1	t34	8.12	7.96	0.16	
SP27	2-1	t35	8.01	7.84	0.17	
SP28	2-1	t35	8.04	7.88	0.16	
SP29	2-1	t34	8.12	7.94	0.18	
SP31	2-1	t34	8.14	7.58	0.56	
SP32	2-1	t34	8.05	7.88	0.17	
SP33	2-1	t34	8.08	7.91	0.17	
SP34	2-1	t34	8.04	7.84	0.2	
SP36	3	u40	7.14	6.91	0.23	
SP37	3	r34	7.39	7.33	0.06	
SP1	2-3	v27	8.74	8.48	0.26	
SP2	2-3	v27	8.76	8.43	0.33	

第8表 出土遺物観察表

## 【土器】

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
1	41	1-1	SF1	須恵器	壺身	全体	100	3.8	1.1	9.7		灰色N 5/	灰色N 5/	良	ヘラ記号あり
2		1-1N	SF1	須恵器	高壺	壺部	25	(5.7)		(15.2)		灰色N 6/	灰白色N 7/	良	
3	41	1-1	SF1	須恵器	高壺	壺部	25	(5.3)		(14.1)		灰色N 6/	灰白色N 7/	良	
4	41	1-1	SF1	須恵器	平瓶	口縁部 ～頸部	100	(6.2)		6.5		灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
5		1-1N	SF2	土師器	壺	壺部	20	(3.5)		(14.4)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色5YR 7/6	良	
6		1-1N	SF2	土師器	壺	底部	100	(5.7)			7.0	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰白色 10YR 8/2	良	
7		1-1	SF2	土師器	手捏ね土器	底部	100	(3.7)			4.6	橙色5YR 7/6	橙色5YR 7/6	良	
8		1-1N	SF2	土師器	甕	口縁部 ～体部	15	(13.2)		(33.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
9	41	1-1	SF2	須恵器	壺蓋	全体	90	4.1		12.3		灰色N 6/	灰色N 4/	良	
10	41	1-1	SD1	土師器	壺	全体	50	4.6		(11.8)	5.0	橙色5YR 7/6	橙色5YR 7/6	良	
11	41	1-1	SD1	土師器	壺	全体	40	5.1		(13.0)	(6.0)	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
12	41	1-1N	SD1	土師器	壺	全体	40	4.5		(11.4)		灰白色 10YR 8/5	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
13	41	1-1	SD1	土師器	模倣壺	全体	50	4.3		(10.6)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
14	41	1-1N	SD1	土師器	模倣壺	全体	90	4.6	12.5	11.8		浅黄橙色 7.5YR 8/4	橙色 2.5YR 6/6	良	
15	41	1-1	SD1	土師器	模倣壺	全体	90	3.4 ～4.4		12.0		灰白色 10YR 7/1	橙色5YR 7/6	良	
16		1-1N	SD1	土師器	高壺	脚部	30	(6.2)			(10.9)	にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色5YR 7/6	良	
17	42	1-1	SD1	土師器	小型甕	全体	100	7.7 ～7.9		13.4		浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい橙色 5YR 7/3	良	
18	42	1-1N	SD1	土師器	甕	口縁部 ～体部	40	(12.05)		(17.2)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
19	42	1-1N	SD1	土師器	甕	口縁部～体部	40	(11.25)		(21.0)		浅黄色 2.5Y 7/3	浅黄色 2.5Y 7/3	良	
20		1-1N	SD1	須恵器	壺	頸部～体部	40	(14.3)				灰白色 N 7/	灰色 N 6/	良	
21		1-1N	SD1	土師器	甕	口縁部～体部	15	(10.4)		(19.0)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
22		1-2	SD1	須恵器	壺身か	底部	30	(2.4)				灰白色 N 7/	灰色 N 6/	良	底部ヘラ記号
23		1-1N	SD2	土師器 (ミニチュア)	甕	口縁部～体部	15	(5.5)		(6.4)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
24		1-2	SD3	土師器	鉢	全体	30	(7.5)		(17.4)	(8.6)	橙色 5YR 6/6	にぶい黄橙色 10YR 7/4	良	
25	42	2-3	SD1	弥生土器	壺	口縁部～体部	50	(14.65)		(16.6)		浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
26		2-3	SD1	弥生土器	甕	口縁部～体部	25	(7.7)		(18.0)		灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 8/2	良	
27		2-3	SD1	弥生土器	小型甕	口縁部～体部	10	(6.3)		(12.1)		にぶい黄橙色 10YR 6/3	灰白色 10YR 8/2	良	
28		2-3	SD1	弥生土器	台付甕	台部	25	(5.5)			(11.6)	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
29	42	1-1	SD5	弥生土器	壺	頸部～底部	60 ～ 80	(24.8)	23.1		9.1	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	煤付着
30		1-1	SD5	弥生土器	甕	口縁部～頸部	20	(4.2)		(29.6)		黄灰色 2.5Y 6/1	灰白色 5Y 7/1	良	
31	42	2-1	SD10	弥生土器	台付甕	台部	60	(7.25)			9.7	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
32		2-1	SD10	弥生土器	台付甕	台部	60	(8.35)			10.7	灰黄褐色 10YR 6/2	橙色 5YR 6/8	良	
33	42	2-1	SD10	弥生土器	台付甕	台部	90	(6.3)			(9.75)	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
34		2-2	SD14	弥生土器	壺	口縁部～頸部	25	(5.7)		(15.4)		にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
35		2-2	SD14	弥生土器	壺	口縁部～頸部	30	(4.8)		(14.0)		にぶい橙色 5YR 7/4	灰白色 7.5YR 7/2	良	
36	43	2-2	SD15	弥生土器	甕	口縁部～体部	25	(7.2)		(18.6)		褐灰色 10YR 4/1	灰黄褐色 10YR 6/2	良	
37		2-2	SD15	弥生土器	甕	口縁部～体部	30	(15.0)		(18.4)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
38		1-2	SX1	弥生土器	壺	口縁部～頸部	20	(8.5)		(21.0)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
39	42	1-1N	SX2	弥生土器	壺	口縁部～頸部	80	(13.35)		20.6		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
40	43	1-1	SX2	弥生土器	壺	口縁部～体部	30	(28.0)	(24.0)	20.3		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
41	43	1-1N	SX2	弥生土器	壺	口縁部～体部	100 ～ 30	(19.1)		21.6		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
42	43	1-1	SX3	弥生土器	壺	口縁部～体部	50	(20.7)		(15.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
43	43	1-1	SX3	弥生土器	壺	口縁部～体部	60	(21.8)		17.6		淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	良	
44	43	1-1	SX3	弥生土器	壺	体部～底部	65	(11.9)	19.3		8.4	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
45	43	1-1	SX3	弥生土器	高杯	脚部	60	(11.0)			(10.9)	灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
46	44	1-1S	SX3	弥生土器	台付甕	底部～台部	60	(11.95)			(9.6)	浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
47	43	1-1N	SX3	弥生土器	甕	口縁部	25	(9.3)		(30.5)		にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい褐色 7.5YR 5/3	良	
48		1-1N	SX4	弥生土器	壺	頸部	20	(7.0)				灰白色 10YR 8/2	灰白色 7.5Y 7/1	良	
49	44	1-1N	SX7	弥生土器	台付甕	台部	95	(5.3)			(9.1)	浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
50		1-1N	SX5	須恵器	壺蓋	全体	15	(3.9)		(12.0)		灰色 N 5/	灰色 N 6/	良	
51		1-1	SX8	弥生土器	壺	口縁部～頸部	15	(2.8)		(16.0)		浅黄橙色 10YR 8/3	灰白色 10YR 8/2	良	
52		1-1	SX8	弥生土器	壺	口縁部	15	(2.7)		(17.0)		淡黄色 2.5Y 8/3	灰黄色 2.5Y 6/2	良	
53	44	1-1N	SX8	弥生土器	壺	体部	50	(19.2)	(26.0)			浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
54	44	1-1N	SX8	弥生土器	壺	頸部	100	(12.6)				灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
55	44	1-1	SX8	弥生土器	壺	体部 ～底部	25 ～100	(14.9)	(18.2)		8.7	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
56		1-1	SX8	弥生土器	小型壺	体部	50	(8.4)	(11.8)			浅黄橙色 10YR 8/3	灰黄褐色 10YR 6/2	良	
57	44	1-1	SX8	弥生土器	壺	全体	90	22.9	20.1	13.2	7.8	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
58	45	1-1	SX8	弥生土器	壺	全体	95	16.1	13.8	9.4	7.7	にぶい黄橙色 10YR 7/2	黒色 10YR 2/1	良	
59		1-1	SX8	弥生土器	壺	底部	20	(6.7)			6.6	にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
60		1-1N	SX8	弥生土器	壺	体部 ～底部	70	(8.5)			7.8	灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
61		1-1	SX8	弥生土器	壺	底部	80	(5.3)			8.5	にぶい黄橙色 10YR 7/2	灰白色 7.5YR 8/1	良	
62		1-1	SX8	弥生土器	壺	底部	100	(5.0)			8.7	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/1	良	
63		1-1	SX8	弥生土器	壺 (ミニチュア)	頸部 ～底部	90	(6.7)			4.8	にぶい黄橙色 10YR 7/3	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
64	44	1-1	SX8	弥生土器	台付甕	口縁部 ～体部	80 ～60	(20.8)	(20.1)	18.1		にぶい黄橙色 10YR 7/1	にぶい黄橙色 10YR 7/1	良	煤付着
65	45	1-1N	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	30	(9.45)		(18.2)		黒褐色 2.5Y 3/1	黄灰色 2.5Y 6/1	良	煤付着
66	45	1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	30	(6.7)		(18.4)		灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 5/2	良	
67		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部	5	(2.1)				灰黄褐色 10YR 6/2	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
68		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	20	(8.2)		(23.4)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/1	良	
69		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	25	(7.0)		(22.5)		灰黄褐色 10YR 6/2	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
70		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	15	(4.4)		(22.0)		淡橙色 5YR 8/3	灰白色 10YR 8/2	良	
71		1-1N	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	20	(8.05)	(16.1)	(16.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
72	45	1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	40	(8.6)	(17.4)	16.1		灰白色 2.5Y 8/2		良	
73		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	20	(6.4)		(18.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
74		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	25	(6.2)		(17.2)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
75		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	10	(4.1)		(22.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰白色 2.5Y 8/2	良	
76		1-1N	SX8	弥生土器	甕	口縁部	10	(3.2)		(15.0)		灰褐色 7.5YR 5/2	灰褐色 7.5YR 6/2	良	
77		1-1N	SX8	弥生土器	台付甕	底部 ～台部	40	(7.95)				灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	良	
78	45	1-1	SX8	弥生土器	台付甕	底部 ～台部	100	(10.4)			(9.6)	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
79	45	1-1	SX8	弥生土器	台付甕	台部	50	(7.9)	(7.9)		(10.6)	灰白色 10YR 8/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	内面煤付着
80		1-1N	SX8	弥生土器	甕か	脚部？	45	(6.75)				灰白色 7.5YR 8/1	灰白色 7.5YR 8/1	良	
81		1-1	SX8	弥生土器	台付甕	底部 ～台部		(10.7)				にぶい黄橙色 10YR 7/2	灰白色 10YR 8/2	良	
82		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	25	(6.1)		(17.6)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
83		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	15	(4.3)		(18.0)		灰白色 10YR 8/2	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
84		1-1	SX8	弥生土器	甕	口縁部 ～体部	15	(6.5)		(21.0)		明褐色 7.5YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
85	45	1-1	SX8	弥生土器	鉢か	全体	60	16.8	23.7	19.0	9.4	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	黒斑あり
86	45	2-1	SX13	弥生土器	小型壺	頸部 ～体部	70	(9.9)	(11.0)			にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
87	45	2-1	SX13	弥生土器	壺	口縁部 ～頸部	70	(7.8)		11.4		橙色 5YR 7/6	灰白色 7.5Y 7/1	良	
88	46	2-1N	SX13	弥生土器	高坏	脚部	100	(9.4)			(10.0)	明褐色 7.5YR 7/2	明褐色 7.5YR 7/2	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
89		2-1	SX13	弥生土器	台付甕	台部	40	(4.6)				灰白色 2.5Y 8/1	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
90		2-1	SX15	須恵器	壺蓋	天井部	25	(2.25)				にぶい橙色 5YR 6/3	灰白色 N 7/	良	
91	46	2-1	SX15	山茶碗	小皿 (墨書き土器)	全体	40	1.3		(8.2)	(5.0)	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	底部墨書きあり
92		3	SX19	土師器	甕	把手部	100					灰黄色 2.5Y 7/2	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	径: 2.7 × 2.6 cm
93		1-2	SP9	弥生土器	壺	口縁部 ～頸部	15	(2.2)		(14.0)		橙色 2.5YR 6/6	橙色 2.5Y 5/1	良	
94	46	1-2	SP9	弥生土器	壺	口縁部 ～頸部	50	(8.75)		(10.9)		浅黄橙色 10TRY 8/3	浅黄橙色 10TRY 8/3	良	
95	46	1-1S	SX9	土師器	壺	全体	20	4.55		(13.9)		橙色 5YR 6/8	橙色 5YR 6/8	良	
96	46	1-1S	SX9	土師器	壺	全体	90	4.75	12.7	11.6		橙色 2.5YR 6/8	橙色 2.5YR 6/8	良	
97	46	1-1S	SX9	土師器	高壺	全体	80	11.9		13.8	8.6	浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	良	
98	46	1-1	SX9	土師器	高壺	全体	50	11.0		(13.9)	7.9	橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	良	
99	46	1-1S	SX9	土師器	高壺	底部 ～脚部	55	(7.85)			(9.0)	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
100	46	1-1S	SX9	土師器	高壺	底部 ～脚部	80	(6.5)			(8.2)	橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	良	
101	47	1-1S	SX9	土師器	高壺	底部 ～脚部	70	(7.7)			(8.0)	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
102	47	1-1N	SX9	土師器	高壺	底部 ～脚部	70	(7.2)			(9.0)	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
103	47	1-1	SX9	土師器	高壺	底部 ～脚部	80	(6.6)			(9.4)	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
104	47	1-1S	SX9	土師器	高壺	脚部	90	(4.85)			7.95	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
105	47	1-1S	SX9	土師器	高壺	脚部	100	(4.5)			7.4	橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	良	
106	47	1-1	SX9	土師器	手捏ね土器 鉢か	全体	60	5.1		(8.55)	4.8	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
107	47	1-1	SX10	土師器	高壺	脚部	70	(6.5)			(10.0)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
108	47	1-1	SX10	土師器	高壺	脚部	90	(9.5)			8.6	橙色 5YR 7/8	橙色 2.5YR 6/8	良	
109	47	1-1	SX10	土師器	高壺	脚部	80	(5.9)			10.6	橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	良	
110	47	1-1	SX10	土師器	高壺	脚部	90	(6.0)			9.5	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
111		1-1S	SX10	弥生土器か	壺	底部	80	(5.4)			(7.8)	浅黄橙色 10YR 8/3	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
112		1-1S	SX10	須恵器	壺蓋	口縁部 ～体部	15	(2.7)		(11.4)		灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
117		2-1N	SD8	弥生土器	壺	口縁部	15	(4.4)		(16.0)		灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
118		2-1	SD8	弥生土器	壺	口縁部 ～頸部	10	(5.4)		(17.5)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 N 7/	良	
119		2-1	SD8	弥生土器	壺	口縁部	15	(2.0)		(18.8)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
120		2-1	SD8	弥生土器	壺	口縁部	15	(1.6)		(17.1)		橙色 2.5YR 6/8	橙色 2.5YR 6/8	良	
121		2-1	SD8	弥生土器	壺か	口縁部 ～頸部	10	(3.35)		(19.3)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
122		2-1	SD8	弥生土器	壺	口縁部	20	(1.2)		(13.9)		にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
123		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	10	(3.3)		(20.4)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
124		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	15	(2.45)		(20.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
125		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	20	(4.2)		(20.0)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
126		2-1N	SD8	土師器	広口壺	口縁部	25	(5.9)		(13.6)		橙色 5YR 7/6	灰白色 7.5YR 8/2	良	
127		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	75	(5.35)		15.6		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
128		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	20	(3.85)		(16.0)		灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
129		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	20	(4.6)		(15.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
130		2-1N	SD8	弥生土器	壺	頸部	25	(5.9)				浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
131		2-1N	SD8	弥生土器	壺	底部	70	(15.3)			(8.0)	灰白色 2.5Y 8/1	浅黄橙色 10YR 8/3	良	底部木葉痕
132		1-1S	SD8	弥生土器	壺	口縁部	5	(3.6)				灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
133		2-1	SD8	弥生土器	壺	口縁部	5	(5.9)				橙色 7.5YR 7/6	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
134		2-1N	SD8	弥生土器	甕	口縁部	10	(2.55)				にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
135		2-1N	SD8	弥生土器	台付甕	台部	25	(6.55)			(10.0)	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
136	48	2-1N	SD8	弥生土器	台付甕	台部	100	(6.1)			8.95	明褐色 7.5YR 7/2	明褐色 7.5YR 7/2	良	
137		1-1	SD8	弥生土器	高坏	脚部	20	(3.8)				灰白色 10YR 8/2	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
138	48	2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	75	(6.3)		17.8		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
139		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	40	(6.35)		(19.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	外面へラ描き
140		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	20	(6.85)		(16.8)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
141	48	2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	75	(6.35)		16.6		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
142	48	2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	80	(5.8)		16.2		灰白色 7.5YR 8/2	灰白色 7.5YR 8/2	良	
143	48	2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	90	(7.0)		20.4		灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
144		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	15	(5.65)		(20.2)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	明褐色 7.5YR 7/2	良	
145		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	20	(4.9)		(15.4)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
146		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	60	(5.0)		(17.8)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
147		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	10	(5.05)		(20.8)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
148		2-1	SD8	土師器	高坏	坏部	30	(3.8)				にぶい橙色 5YR 7/4	明褐色 2.5YR 7/2	良	
149		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	15	(4.5)		(16.6)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
150		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	30	(4.8)		(14.6)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	褐灰色 10TR 6/1	良	
151		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	15	(4.2)		(18.8)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
152		2-1N	SD8	土師器	高坏	坏部	25	(4.0)		(16.6)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
153	48	1-1	SD8	土師器	高坏	坏部	40	(5.3)		(15.8)		浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
154		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	30	(4.8)		(16.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
155		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	15	(4.0)		(15.9)		にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 6/4	良	
156		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	40	(4.9)		(14.0)		橙色 5YR 7/6	橙色 2.5YR 7/8	良	
157		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	30	(3.7)		(15.4)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
158		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	50	(4.4)		(15.0)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色 5YR 7/6	良	
159		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	25	(2.9)		(14.6)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色 5YR 7/6	良	
160	48	1-1	SD8	土師器	高坏	全体	70	11.4		17.3	9.7	淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	良	
161		1-1S	SD8	土師器	高坏	坏部	5	(2.7)				灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
162	48	1-1	SD8	土師器	高坏	坏部	50	(6.0)		(15.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/6	橙色 7.5YR 7/6	良	
163	49	2-1N	SD8	土師器	高坏	脚部	60	(11.4)			(14.0)	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	内面布目痕

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外側)	色調(内側)	焼成	備考
164		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	70	(8.6)			(14.0)	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
165		2-1	SD8	土師器	高壺	底部 ~脚部	50	(6.9)				にぶい橙色 7.5YR 7/4	赤橙色 10YR 6/6	良	
166		2-1	SD8	土師器	高壺	脚部	40	(7.65)			(10.5)	にぶい橙色 10YR 7/3	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
167		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	35	(7.5)			(14.8)	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
168	49	2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	70	(5.45)			10.4	にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
169		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	15	(4.5)			(15.6)	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
170		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	50	(5.2)			(12.7)	にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
171	49	1-1S	SD8	土師器	高壺	底部 ~脚部	100	(5.5)			9.2	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
172	49	2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	95	(6.5)			11.25	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	内面へラ描き
173	48	2-1	SD8	土師器	高壺	脚部	30	(8.35)			(13.0)	灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
174		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	100	(4.8)			10.0	橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
175	49	2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	80	(4.9)			(9.8)	橙色 5YR 6/6	橙色 5YR 6/6	軟	
176	49	1-1	SD8	土師器	高壺	底部 ~脚部	40	(6.9)			(11.0)	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
177	49	1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	100	(5.5)			9.4	にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
178	49	1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	80	(4.9)			8.9	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
179		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	50	(4.15)			(10.0)	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
180		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	70	(5.0)			19.3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	良	
181	49	1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	50	(4.6)			(10.2)	橙色 5YR 4/6	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
182	50	1-1S	SD8	土師器	高壺	底部 ~脚部	95	(5.7)			8.6	にぶい橙色 7.5YR 7/4	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
183		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	40	(4.7)			(9.2)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
184	50	1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	80	(4.7)			10.0	橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
185		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	40	(4.1)			(8.4)	橙色 5YR 7/4	褐色 10YR 5/1	良	
186	50	1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	100	(3.5)			10.1	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
187		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	40	(4.2)			(9.0)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
188	51	2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	80	(4.4)			9.0	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
189		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	40	(4.45)			(9.2)	にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
190		1-1	SD8	土師器	高壺	脚部	60	(5.8)			(8.6)	橙色 2.5YR 6/6	橙色 5YR 7/6	良	
191	50	1-1	SD8	土師器	高壺	底部 ~脚部	80	(5.4)			9.0	にぶい橙色 7.5YR 7/4	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
192	51	1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	90	(4.7)			(7.85)	にぶい橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 5YR 7/6	良	
193		2-1N	SD8	土師器	高壺	脚部	80	(3.0)			(8.6)	橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	不良	
194		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	60	(4.0)			(9.7)	淡橙色 5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
195		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	100	(1.7)			9.1	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 6/4	良	
196		1-1S	SD8	土師器	高壺	脚部	20	(3.1)			(8.0)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
197	50	1-1S	SD8	土師器	壺	全体	45	3.95	(13.4)	(12.4)		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
198		2-1N	SD8	土師器	壺	全体	15	(4.8)		(14.2)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
199	50	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	55	5.9			12.3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	底部外面へラ描き 木葉痕

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外側)	色調(内側)	焼成	備考
200	50	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	75	5.4	(12.0)	(11.5)	6.2	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
201	50	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	45	4.9	(14.0)	(12.8)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
202		1-1S	SD8	土師器	壺	全体	40	4.8		(13.0)		橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/6	良	
203	51	2-1	SD8	土師器	壺	全体	100	5.5			12.1	橙色 2.5YR 7/6	橙色 2.5YR 7/6	良	
204	51	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	90	5.2	13.2	12.3		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
205		1-1S	SD8	土師器	壺	口縁部 ~体部	15	(4.4)		(11.3)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	良	
206		1-1S	SD8	土師器	壺	全体	30	(4.7)		(14.4)		にぶい橙色 5YR 7/4	橙色 5YR 7/6	良	
207		1-1S	SD8	土師器	壺	口縁部 ~体部	20	(4.1)		(12.4)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
208	51	1-1S	SD8	土師器	壺	底部	100	(2.4)				にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色 5YR 7/6	良	底部ヘラ記号
209	51	1-1	SD8	土師器	壺	全体	50	5.2		12.1	4.6	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
210	51	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	70	5.6		12.7		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
211		2-1N	SD8	土師器	壺	全体	20	(4.6)		(12.0)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
212		1-1S	SD8	土師器	壺	全体	25	5.4		(11.2)	(5.8)	浅黄橙色 10YR 8/3	灰白色 10YR 8/2	良	
213	51	1-1	SD8	土師器	壺	全体	80	5.2 ~ 5.4		12.5		浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
214	51	1-1S	SD8	土師器	壺	全体	100	6.3	7.3	13.5		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
215	51	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	25	5.6	(11.0)	(10.4)		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
216		2-1N	SD8	土師器	模倣壺	体部 ~底部	25	(4.9)	(14.4)			にぶい黄橙色 10YR 7/2	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
217		1-1S	SD8	土師器	壺	全体	60	(4.8)		(13.6)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
218		1-1S	SD8	土師器	壺	底部	60	(5.8)				浅黄橙色 7.5YR 8/4	褐色 10YR 6/1	良	
219	52	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	95	6.8		13.6	7.4	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
220	52	2-1N	SD8	土師器	壺	全体	70	7.8	(13.8)	(12.9)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
221	52	1-1S	SD8	土師器	丸底壺・埴	全体	60	10.4	15.05	(6.05)		にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
222	52	2-1N	SD8	土師器	丸底壺・埴	頸部 ~底部	100	(9.6)			13.8	浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
223	52	2-1N	SD8	土師器	丸底壺・埴	体部 ~底部	95	(9.2)	15.25			にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
224	52	2-1N	SD8	土師器	丸底壺・埴	全体	100	15.1	14.9	8.8		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
225	52	1-1S	SD8	土師器	埴	口縁部 ~頸部	65	(7.5)		9.2		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
226	52	1-1S	SD8	土師器	埴	全体	45 ~ 100	12.9	11.65	(7.8)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
227	52	1-1S	SD8	土師器	埴	口縁部 ~底部	100	(8.1)		7.9		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
228		2-1N	SD8	土師器	埴	口縁部	25	(7.6)		(9.4)		にぶい黄橙色 10YR 2/2	にぶい黄橙色 10YR 2/2	良	
229		1-1S	SD8	土師器	埴	口縁部	20	(5.9)		(10.0)		橙色 7.5YR 7/6	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
230		2-1N	SD8	土師器	小型壺	口縁部	45	4.4		(11.0)		灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
231		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	30	(5.2)		(13.0)		明褐色 7.5YR 7/2	灰白色 10YR 8/2	良	
232		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	30	(4.05)		(11.6)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
233		2-1N	SD8	土師器	壺	口縁部	20	(5.2)		(15.2)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
234		2-1N	SD8	土師器	小型壺	口縁部	25	(3.6)		(10.6)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	

第8表 出土遺物観察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
235		1-1S	SD8	土師器	壺	口縁部	25	(4.7)		(10.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
236		1-1S	SD8	土師器	壺	口縁部	15	(4.2)		(11.8)		にぶい橙色 7.5YR 6/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
237		2-1N	SD8	土師器	小型壺	口縁部	30	(4.1)		(11.0)		灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
238		2-1N	SD8	土師器	壺か	口縁部	20	(2.9)		(12.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
239		2-1N	SD8	土師器	高坏か	坏部	15	(3.9)		(20.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
240		2-1N	SD8	土師器	小型甕	口縁部～体部	15		(7.15)	(18.0)		橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
241		2-1N	SD8	土師器	小型甕	口縁部～体部	20	(7.4)		(12.8)		にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
242		2-1N	SD8	土師器	小型甕	口縁部～体部	20	(9.2)		(11.4)		明褐色灰色 7.5YR 7/2	明褐色灰色 7.5YR 7/2	良	煤付着
243		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部～体部	20	(5.15)		(12.85)		灰白色 2.5Y 8/1	黄灰色 2.5Y 4/1	良	黒斑あり
244	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	25 ～60	5.4		11.7		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
245		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部	20	(3.1)		(10.0)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
246		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部～体部	25	(4.1)		(9.1)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	煤付着
247	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	25	(8.6)	(9.65)	(9.9)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
248	53	2-1	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部～体部	40	(8.1)		(7.6)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
249	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	70	(7.6)	12.05		4.9	にぶい黄橙色 10YR 7/3	橙色 2.5YR 7/6	良	底部木葉痕
250		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	65	(6.8)	8.8		(4.0)	灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
251	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	90	10.6	9.4	(6.8)	3.55	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
252	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	頸部～底部	50	(6.4)	9.5		3.9	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
253		2-1	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部～体部	70	(6.2)		(10.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	淡橙色 5YR 8/3	良	
254		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部～体部	25	(5.55)		(9.3)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
255	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	60	7.6	8.1	(9.3)	4.0	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
256	54	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	50	(6.8)	(8.4)	(5.5)	3.1	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
257	54	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	口縁部～体部	15 ～30	(4.3)		(8.0)		灰白色 2.5Y 7/1	黒色 2.5Y 2/1	良	
258	54	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	60	(7.5)	(7.4)		5.0	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	底部モミ穀痕
259	54	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	85	6.7	6.5	(5.8)	4.8	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
260		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	頸部～底部	80	(3.9)	7.2		4.15	灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
261		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	50	(5.4)	(8.7)		3.2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
262	53	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	80	(7.35)	9.1		7.2	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 7/1	良	
263		1-1	SD8	土師器	手捏ね土器か	底部	100	(2.8)			5.2	淡黄色 5YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
264	54	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	70	8.75	(9.8)	(7.6)	5.7	にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
265	54	1-1S	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	60	6.2		(8.3)	4.5	灰白色 10YR 8/2	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
266	54	2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	90	4.8		8.0		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	底部外面へラ描き
267		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	80	5.6		7.0	3.1	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
268		1-1	SD8	土師器	手捏ね土器	体部～底部	40	(3.9)			(3.6)	灰白色 2.5Y 8/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
269		2-1N	SD8	土師器	手捏ね土器	全体	75	4.6			(5.9)	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 6/3	良	上端部径:(3.8)

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
270		1-1S	SD8	土師器	小型甕	口縁部～体部	20	(8.3)		(14.0)		橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
271		2-1N	SD8	土師器	小型甕	口縁部～体部	15	(4.95)		(16.0)		灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
272		2-1N	SD8	土師器	甕か	口縁部	15	(3.95)		(19.6)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
273		1-1S	SD8	土師器	甕か	口縁部	15	(3.2)		(18.4)		灰黄褐色 10YR 6/2	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
274	55	1-1S	SD8	土師器	短頸壺	口縁部～頸部	50	(5.6)		(15.2)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
275		1-1S	SD8	土師器	短頸壺	口縁部	25	(5.0)		(16.0)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
276		2-1N	SD8	土師器	小型甕か	口縁部～体部	20	(6.4)		(12.3)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
277	54	2-1N	SD8	土師器	小型甕	全体	100	12.65		9.25	5.4	にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	煤付着
278		2-1N	SD8	土師器	小型甕	口縁部～体部	15	(6.0)		(12.8)		淡黄色 5YR 8/4	淡黄色 5YR 8/4	良	
279		2-1N	SD8	土師器	甕か	口縁部	20	(4.7)		(14.4)		灰色 N 6/0	灰白色 5Y 7/1	良	
280		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	15	(5.4)		(16.0)		淡赤橙色 2.5YR 7/4	淡赤橙色 2.5YR 7/4	良	
281		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	20	(4.4)		(16.0)		灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	や や 良	
282		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	25	(8.1)		(11.2)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	内外面煤付着
283		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	40	(5.5)		(11.2)		黄灰色 2.5Y 6/1	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
284		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	15	(6.4)		(15.4)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	外面煤付着
285		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	20	(4.4)		(13.2)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい橙色 5YR 6/4	良	
286		2-1	SD8	土師器	甕	口縁部～頸部	25	(3.9)		(14.15)		黒色 2.5Y 2/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
287	55	2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	60	(11.65)	18.4	14.5		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
288		2-1N	SD8	土師器	甕か	底部	100	(3.9)			4.5	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
289		2-1N	SD8	土師器	甕か	口縁部～体部	25	(4.1)		(10.8)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
290		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～頸部	15	(3.3)		(12.8)		橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
291		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	25	(3.55)		(11.4)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
292		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	15	(4.5)		(14.0)		黄灰色 2.5Y 6/1	黄灰色 2.5Y 5/1	良	
293	54	1-1S	SD8	土師器	甕	全体	85	12.4	11.5	(9.3)		橙色 7.5YR 7/3	橙色 7.5YR 7/3	良	
294		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	15	(5.15)		(18.4)		灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	良	
295		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	20	(5.6)		(18.6)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
296		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～頸部	15	(4.1)		(19.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
297		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～頸部	15	(3.7)		(18.0)		明褐灰色 7.5YR 7/2	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
298		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	20	(3.85)		(20.8)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
299		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部	15	(3.3)		(20.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
300		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	20	(4.1)		(19.4)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
301		1-1	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	25	(9.1)		(7.4)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	橙色 5YR 7/6	良	
302		2-1N	SD8	土師器	甕	口縁部	30	(4.4)		(18.4)		にぶい橙色 2.5YR 6/4	にぶい橙色 2.5YR 6/4	良	
303		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～頸部	10	(4.2)		(21.0)		にぶい橙色 5YR 7/4	灰白色 10YR 8/2	良	
304		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	20	(5.4)		(21.0)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
305		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	15	(5.5)		(19.2)		灰黄色 2.5Y 6/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
306		1-1S	SD8	土師器	甕	底部	100	(4.3)			4.2	灰黄褐色 10YR 6/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
307	55	1-1S	SD8	土師器	壺か	底部	100	(2.7)			(4.6)	にぶい橙色 5YR 7/4	褐灰色 10YR 5/1	良	
308	55	1-1S	SD8	弥生土器	籠目土器	底部	60	(2.1)			(7.1)	浅黄橙色 10YR 8/3	灰黄色 2.5Y 7/1	良	外面に籠目
309	55	1-1S	SD8	弥生土器	籠目土器	底部	20	(5.3)				浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	外面に籠目
310	55	2-1N	SD8	土師器	瓶か	底部	60	(3.2)				浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	孔径: 4.2 cm 篦目
311		1-1S	SD8	弥生土器	壺	底部	100	(4.2)			7.2	浅黄橙色 10YR 8/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
312		2-1	SD8	弥生土器	壺	底部	100	(2.7)			6.3	灰白色 10YR 8/2	灰白色 2.5Y 8/1	良	底部木葉痕
313		1-1S	SD8	弥生土器	壺	底部	95	(2.1)			11.7	褐灰色 10YR 5/1	灰白色 10YR 8/2	良	
314		1-1S	SD8	弥生土器	壺	底部	50	(3.4)			(9.8)	灰白色 2.5YR 8/2	灰白色 2.5Y 8/1	良	
315		1-1S	SD8	弥生土器	壺	底部	100	(1.8)			6.8	にぶい黄橙色 10YR 7/2	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
316		1-1S	SD8	弥生土器	壺	底部	100	(3.0)			(5.6)	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい橙色 7.5Y 7/4	良	
317	55	2-1	SD8	弥生土器	壺	体部～底部	50	(12.7)			6.8	灰白色 10YR 8/2	黒褐色 10YR 8/1	良	
318	56	1-1S	SD8	土師器	甕	全体	40 ～75	32.0	21.4	16.2		灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 5/2	良	煤付着
319	56	1-1	SD8	土師器	甕	全体	40	26.7	(23.3)	17.1		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
320	56	1-1S	SD8	土師器	甕	全体	85	27.35	23.7	(19.4)	7.3	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	良	煤付着
321	55	1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	50	(10.8)		(13.9)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
322	56	1-1	SD8	土師器	甕	頸部～底部	70	(24.9)	8.7			灰白色 7.5YR 8/2	灰白色 7.5YR 8/2	良	底部木葉痕
323		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	25	(6.4)		(16.0)		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
324		1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	10	(4.1)	(21.9)	(13.8)		にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 6/4	良	
325	56	1-1S	SD8	土師器	甕	全体	50	29.7	(26.4)	16.9	8.7	浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
326	56	1-1S	SD8	土師器	甕	口縁部～体部	20	(14.9)			16.6	にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
327		2-1	SD8	土師器	瓶	口縁部～頸部	10	(7.1)		(36.0)		灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	良	
328		1-1S	SD8	土師器	瓶	口縁部～体部	15	(8.0)		(23.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
329		1-1S	SD8	土師器	瓶	体部・把手	-	(8.9)				浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	径: 2.8 × 3.0 cm
330		2-1	SD8	土師器	瓶	把手部	100					灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	径: 3.0 × 3.2 cm
331		1-1S	SD8	土師器	瓶	把手	100					灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	径: 3.1 × 4.1 cm
332		1-1S	SD8	須恵器	壺蓋	全体	20	(4.15)		(12.0)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
333	57	1-1S	SD8	須恵器	壺身	全体	50	4.4	(12.8)	(10.9)		灰色 N 4/	灰色 N 4/	良	
334	57	1-1S	SD8	須恵器	壺身	全体	70	5.15	(13.8)	(11.9)		灰赤色 2.5YR 4/2	灰色 N 4/	良	
335		2-1	SD8	須恵器	壺身	口縁部	15	(3.2)	(11.6)	(9.9)		灰色 N 6/	灰色 N 5/	良	
336	57	1-1S	SD8	須恵器	壺身	全体	95	5.0	14.0	12.5		灰色 N 5/	灰色 N 5/	良	
337		2-1N	SD8	須恵器	壺身	全体	25	4.1	(12.8)	(11.1)		青灰色 5B 5/1	青灰色 5B 5/1	良	自然釉
338		2-1	SD8	須恵器	壺身	口縁部	20	(3.5)	(13.0)	(10.8)		灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
339	57	2-1N	SD8	須恵器	壺身	全体	50	3.6	(14.0)	(11.9)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	自然釉
340	57	2-1	SD8	須恵器	壺身	全体	40	2.7	(15.4)	(13.0)		灰白色 5Y 7/1	灰色 N 6/	良	
341	57	1-2	SD8	須恵器	壺身	全体	60	4.2	12.4	9.7		灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版 区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考	
342	57	2-1N	SD8	須恵器	高坏蓋	全体	55	4.8		13.5		灰色 N 5/	灰色 N 5/	良	摘み径 : 3.5 cm
343		1-1S	SD8	須恵器	高坏	坏部	20	(4.3)	(12.6)			灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	
344		1-1S	SD8	須恵器	高坏	坏部	25	(4.6)	(12.4)	(10.7)		灰色 N 5/	灰色 N 5/	良	
345	57	1-1S	SD8	須恵器	甌	口縁部 ~底部	30 ~ 80	(8.2)	11.3			灰白色 N7/	灰白色 N7/	良	内外面自然釉
346		1-1S	SD8	須恵器	甌	頸部 ~体部	70 ~ 30	(8.0)	9.95			灰色 N 5/	灰色 N 5/	良	孔径 : (1.4) cm
408	66	1-2	SR1	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	90	(9.65)		18.0		淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	良	
409	66	1-2	SR1	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	60	(11.25)		(14.6)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
410	67	1-2	SR1	弥生土器	壺	体部 ~底部	70	(9.7)	8.05			浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
411	67	1-2	SR1	弥生土器	壺	体部 ~底部	30	(11.6)	(18.6)			灰白色 5Y 8/2	灰白色 5Y 8/2	良	
412		1-2	SR1	弥生土器	小型壺	頸部 ~底部	80	(12.1)	(9.5)		5.6	浅黄橙色 7.5YR 8/3	灰白色 7.5YR 7/2	良	
413	66	1-2	SR1	弥生土器	鉢	口縁部 ~体部	15 ~ 30	(9.9)		(17.0)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
414		1-2	SR1	弥生土器	小型甌か	口縁部 ~体部	10	(3.0)		(9.0)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 2.5Y 8/1	良	
415		1-2	SR1	弥生土器	小型甌か	口縁部 ~体部	15	(3.0)		(7.0)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
416		1-2	SR1	須恵器	坏蓋	口縁部	10	(3.4)		(12.4)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
417	66	確認 2-1	SR2	弥生土器	壺	口縁部	30	(6.9)		(33.0)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
418	66	1-2	SR2	弥生土器	壺	口縁部	20	(4.1)		(15.0)		灰白色 10YR 8/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
419		1-2	SR2	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	70	(5.65)		(10.0)		淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	良	
420		1-2	SR2	弥生土器	壺	体部	-	(4.1)				灰白色 10YR 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
421	66	1-2	SR2	弥生土器	壺	口縁部 ~体部	50	(20.75)		(19.2)		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
422	66	1-2	SR2	弥生土器	壺	頸部 ~体部	100 ~ 70	(17.8)	(17.85)			灰白色 2.5Y 8/1	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
423		1-2	SR2	弥生土器	壺	頸部 ~体部	40	(7.4)				灰白色 10YR 8/2	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
424	66	1-2	SR2	弥生土器か	壺	頸部 ~体部	20	(8.1)				灰白色 10YR 7/1	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
425	67	1-2	SR2	弥生土器	甌	口縁部 ~体部	40	(19.7)	(31.0)	(24.2)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	煤付着
426	67	1-2	SR2	弥生土器	甌	口縁部	60	(7.2)		(21.2)		にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良	
427		1-2	SR2	弥生土器	甌	口縁部 ~体部	15	(5.3)		(23.9)		灰白色 10YR 8/2	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
428		1-2	SR2	弥生土器	甌	口縁部 ~体部	30	(8.0)		(20.0)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
429	67	1-2	SR2	土師器	坏	全体	80	6.0		14.8		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
430	67	1-2	SR2	土師器	坏	全体	60	6.2		(14.3)		浅黄色 2.5Y 8/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
431	67	1-2	SR2	土師器	坏	全体	80	4.25		12.1	4.9	にぶい橙色 5YR 6/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
432	67	1-2	SR2	土師器	坏	全体	70	(4.2)		12.4		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
433		1-2	SR2	土師器	坏か	全体	40	(4.6)		(12.1)		にぶい橙色 5YR 6/4	橙色 5YR 7/6	良	
434	67	1-2	SR2	土師器	坏	全体	80	5.1		(14.2)		灰白色 10YR 8/2	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
435	68	1-2	SR2	土師器	坏	全体	50	4.7		(13.0)		橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
436	68	1-2	SR2	土師器	坏	全体	70	6.5		(12.7)	4.8	浅黄橙色 10YR 8/3	橙色 5YR 7/6	良	
437	68	1-2	SR2	土師器	坏	全体	60	5.4		(13.3)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
438	68	1-2	SR2	土師器	坏	全体	50	6.0		(10.7)	5.5	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい橙色 10YR 7/4	良	

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
439	68	1-2	SR2	土師器	壺	全体	70	(6.3)		11.1		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
440		1-2	SR2	土師器	壺	壺部	50	(6.6)		(11.9)		にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
441	68	1-2	SR2	土師器	壺	全体	60	5.3		10.6		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
442	68	1-2	SR2	土師器	高壺	全体	40	5.2		(7.3)	4.6	浅黄橙色 10YR 8/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
443	68	1-2	SR2	土師器	高壺	体部 ~底部	60	(3.9)			(4.8)	にぶい黄橙色 10YR 7/4	褐灰色 10YR 6/1	良	
444	69	1-2	SR2	土師器	手捏ね土器か	全体	60	9.15		15.5	8.3	橙色 2.5YR 6/6	橙色 2.5YR 6/6	良	
445		1-2	SR2	土師器	手捏ね土器か	全体	40	8.8		(13.8)	8.8	灰白色 10YR 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
446	68	1-2	SR2	土師器	高壺	全体	60 ~100	9.8		16.6	8.9	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	
447		1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	25	(6.2)		(15.7)		浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
448	68	1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	70	(5.7)		(12.9)		灰黄色 2.5Y 7/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
449		1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	50	(6.2)		(14.4)		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
450		1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	50	(5.3)		(13.6)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色 5YR 7/6	良	
451		1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	40	(5.2)		(14.1)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
452	69	1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	50	(5.8)		15.5		にぶい橙色 7.5YR 7/3	橙色 5YR 7/6	良	
453		1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	50	(4.6)		(16.4)		橙色 2.5YR 7/6	明褐灰色 7.5YR 7/2	良	
454		1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	30	(4.9)		(15.7)		にぶい橙色 5YR 6/4	橙色 2.5YR 6/6	良	
455	69	1-2	SR2	土師器	高壺	壺部	40	(6.1)		(13.5)		橙色 2.5YR 6/6	橙色 2.5YR 6/6	良	
456		1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	25	(9.5)			(10.4)	橙色 2.5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
457		1-2	SR2	土師器	高壺	底部 ~脚部	30	(10.7)			(10.0)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
458	69	1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	70	(4.4)			8.8	浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
459	69	1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	60	(5.6)			8.6	橙色 2.5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
460		1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	50	(4.2)			(10.0)	浅黄色 2.5Y 7/3	灰黄色 2.5Y 7/2	良	
461		1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	30	(4.5)			(9.4)	橙色 5YR 7/6	浅黄橙色 2.5YR 8/3	良	
462		1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	50	(3.9)			9.9	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
463		1-2	SR2	土師器	高壺	脚部	30	(4.0)			(9.4)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
464		1-2	SR2	土師器	甕	口縁部 ~体部	15	(6.8)		(18.0)		にぶい橙色 7.5YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	良	
465	69	1-2	SR2	土師器	甕	口縁部 ~体部	40	7.6		(15.4)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
466		1-2	SR2	土師器	甕	口縁部 ~体部	25	(7.6)		(18.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
467		1-2	SR2	土師器	甕	口縁部 ~体部	15	(8.5)		(11.6)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	
468		1-2	SR2	土師器	手捏ね土器か	頸部 ~体部	15	(5.1)	(8.9)	(8.9)		灰黄色 2.5Y 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
469	69	1-2	SR2	土師器	壺	口縁部	90	(6.3)		(21.3)		灰白色 5YR 8/1	灰白色 5YR 8/1	良	
470		1-2	SR2	土師器	壺	体部	30	(13.4)	(25.6)			浅黄色 2.5Y 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
471		1-2	SR2	土師器	壺	底部	100	(5.7)			5.7	橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 5YR 7/4	良	
472		1-2	SR2	土師器	壺か	底部	90	(5.4)			6.0	灰黄色 2.5YR 7/2	橙色 5YR 7/6	良	
473		1-2	SR2	土師器	壺	底部	40	(7.0)			(8.4)	にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰白色 2.5Y 8/2	良	底部木葉痕
474		1-2	SR2	土師器	甕か	体部 ~底部	50	(11.7)			9.2	褐灰色 7.5YR 4/1	褐灰色 10YR 8/2	良	底部木葉痕

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
475		1-2	SR2	土師器	甕か	底部	45	(4.1)			4.6	明褐色 10YR 7/2	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良	
476	69	1-2	SR2	土師器	丸底壺か	体部 ~底部	70	(6.15)		(6.9)	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良		
477	69	1-2	SR2	土師器	丸底壺か	底部	80	(6.05)			浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良		
478	69	1-2	SR2	土師器	台付甕	台部	100	(5.9)			9.8	浅黄橙色 10YR 8/4	橙色 7.5YR 7/6	良	
479	69	1-2	SR2	土師器	台付甕	台部	30	(9.5)		(14.2)	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	良		
480		1-2	SR2	土師器	甕	口縁部 ~体部	20	(5.8)	(23.4)		灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄色 2.5Y 7/2	良		
481		1-2	SR2	土師器	甕	口縁部 ~体部	25	(14.1)	(23.0)		浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良		
482		1-2	SR2	土師器	甕	把手部	100				灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	径: 2.1 × 2.2 cm	
483		1-2	SR2	土師器	甕	底部	20	(7.8)		(6.6)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良		
484		1-2	SR2	須恵器	壺蓋	摘み部	100	(1.8)			灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	摘み部径: (3.2) cm	
485		1-2	SR2	須恵器	高壺	脚部	15	(3.6)		(11.5)	黄灰色 2.5Y 5/1	灰色 N 5/	良		
486		1-2	SR2	須恵器	器種不明	天井部	50	(1.3)			灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良		
487		1-2	SR2	須恵器	甕	頸部	20	(5.9)			灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良		
488		1-2	SR2	須恵器	提瓶	体部	-	(13.4)	(20.4)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良		
504	71	1-1N	W30S grid	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	20	(9.2)	(16.6)		橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良		
505		1-1	W30N gird	弥生土器	壺	口縁部	15	(2.2)	(16.2)		浅黄橙色 10YR 8/4	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良		
506		1-1	W31S grid	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	40	(6.3)	(12.0)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良		
507		1-1	W30S grid	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	25	(6.8)	(19.8)		黄灰色 2.5Y 5/1	灰白色 10YR 8/2	良		
508		1-1	W30N gird	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	20	(6.5)	(20.6)		黄灰色 2.5Y 6/1	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良		
509	71	1-1S	東排水溝	弥生土器	壺	頸部 ~体部	40	(21.35)	(22.0)		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良		
510	71	1-1	V33N grid	弥生土器	小型壺	体部	60	(8.6)		(5.0)	にぶい橙色 5YR 7/4	にぶい橙色 5YR 7/4	良		
511	71	1-1	西排水溝	弥生土器	壺	口縁部 ~頸部	70	(6.7)		13.0	橙色 5YR 7/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良		
512		1-1N	東排水溝	弥生土器	甕	口縁部	20	(6.75)	(12.5)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良		
513		1-1	W30N gird	弥生土器	甕	口縁部 ~頸部	15	(4.9)	(23.0)		灰色 5Y 6/1	灰色 5Y 6/1	良		
514		1-1		弥生土器	甕	口縁部 ~体部	20	(6.3)	(23.8)		にぶい橙色 5YR 6/4	灰色 5Y 6/1	良		
515		1-1	W32 grid	弥生土器	甕	口縁部 ~頸部	20	(4.5)	(20.2)		にぶい黄橙色 10YR 6/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良		
516		1-1	W32N grid	弥生土器	甕	口縁部 ~体部	15	(6.2)	(21.2)		灰色 5Y 6/1	灰色 5Y 6/1	良		
517		1-1	W30N grid	弥生土器	甕	口縁部 ~体部	25	(7.1)	(15.2)		灰色 5Y 5/1	にぶい橙色 7.5YR 7/3	良		
518		1-1N	W31S grid	弥生土器	甕	口縁部 ~体部	15	(9.2)	(17.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/3	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良		
519	71	1-1		弥生土器	甕	口縁部 ~体部	45	(17.0)	(18.2)		灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	良		
520		1-1	排水溝	弥生土器	甕	口縁部 ~体部	25	(8.0)	(21.8)		灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良		
521	71	1-1S	W31S grid	弥生土器	台付甕	底部 ~脚部	95	(7.2)		(8.2)	にぶい橙色 7.5YR 7/3	にぶい橙色 5YR 7/4	良		
522	71	1-1N	東排水溝	弥生土器	台付甕	台部	10	(7.2)		9.0	浅黄橙色 10YR 8/3	にぶい黄橙色 10YR 7/2	良		
523	71	1-1		弥生土器	台付甕	台部	80	(7.2)			浅黄橙色 10YR 8/3	灰白色 10YR 8/2	良		
524		1-1S	V34N grid	土師器	手捏ね土器	全体	50	6.1	(7.7)	4.3	浅黄橙色 10YR 8/4	橙色 5YR 7/6	良		
525	72	1-1	V34N grid	土師器	手捏ね土器 (ミニチュア)	体部 ~底部	60	(3.0)		(2.0)	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 6/4	良		

第8表 出土遺物觀察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
526		1-1	西排水溝	土師器	高坏	坏部	30	(3.2)				浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/4	良	
527	72	1-1	排水溝	土師器	高坏	全体	80	(7.7)		13.9		橙色 7.5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
528		1-1S	V34N grid	土師器	高坏	坏部	70	(5.1)		(13.8)		橙色 7.5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
529	72	1-1	V33S grid	土師器	高坏	脚部	50	(6.5)			(10.0)	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
530	72	1-1S	V33S grid	土師器	高坏	脚部	90	(5.8)			(8.7)	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/6	良	
531	72	1-1	V34N grid	土師器	高坏	脚部	100	(4.9)			8.6	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
532	72	1-1S	V33S grid	土師器	高坏	脚部	40	(5.9)			9.2	浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
533	72	1-1S	V34N grid	土師器	高坏	底部 ~脚部	60	(5.6)			(8.6)	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
534		1-1	W31N grid	土師器	高坏	脚部	40	(13.2)			2.5	橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
535	72	1-1	V33S grid	土師器	高坏	底部~ 脚部	70	(5.3)			8.6	灰白色 10YR 8/2	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
536	72	1-1N		土師器	鉢	全体	80	12.2		16.45	(7.75)	浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
537		1-1	W31N grid	土師器	高坏か	脚部	20	(5.6)			(14.0)	浅黄橙色 10YR 8/4	灰白色 10YR 8/2	良	
538		1-1	東排水溝	土師器	甕	口縁部 ~体部	20	(7.7)		(10.6)		灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	良	
539		1-1S	V33S grid	土師器	甕	口縁部 ~頸部	30	(6.15)		(16.4)		浅黄橙色 10YR 8/3	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
540		1-1	W30N grid	土師器	甕	口縁部 ~頸部	15	(3.6)		(17.2)		黄灰色 2.5Y 6/1	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
541		1-1	東西 排水溝	土師器	甕	口縁部 ~体部	20	(16.9)		(25.8)		浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/3	良	
542		1-1N	東排水溝	土師器	甕	口縁部 ~頸部	40	(6.7)		(15.0)		橙色 5YR 7/6	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	
543		1-1		土師器	壺か	底部	100	(3.2)			8.0	にぶい橙色 7.5Y 6/4	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
544		1-1S	V33S grid	土師器	甌	把手部	100					灰白色 5Y 8/2	灰白色 5Y 8/2	良	径: 2.8 × 3.9 cm
545		1-1		土師器	甌	把手部	100					浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	径: 2.1 × 3.1 cm
546		1-1S	V33S grid	土師器	甌	把手部	100					灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	良	径: 2.5 × 3.8 cm
547		1-1S	V33S grid	土師器	甌	把手部	100					浅黄橙色 7.5YR 8/4	浅黄橙色 7.5YR 8/4	良	径: 2.6 × 3.2 cm
548		1-1	W30N grid	土師器	甌	底部	25	(3.3)			(6.0)	にぶい橙色 7.5YR 7/4	橙色 2.5YR 7/8	良	
549		1-1S	V34N grid	須恵器	坏蓋	口縁部 ~体部	15	(3.7)		(12.4)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
550		1-1N	東西 排水溝	須恵器	坏蓋	全体	10	(3.9)		(12.6)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
551		1-1S	V33S grid	須恵器	坏蓋	全体	40	3.7		(12.2)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
552	73	1-1	V33S grid	須恵器	坏蓋	全体	30	3.65		(13.4)		灰色 7.5Y 5/1	灰色 N 5/	良	歪み著しい。 土器片溶着
553		1-1	V34N grid	須恵器	坏蓋	天井部	100	(3.7)				灰白色 5YR 7/6	灰白色 N 7/	良	
554		1-1N	W29S grid	須恵器	坏身	全体	15	(3.7)	(13.2)	(11.6)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
555		1-1N	東排水溝	須恵器	坏身	全体	20	(3.6)	(13.5)	(11.5)		灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
556		1-1S	V34N grid	須恵器	坏身	口縁部 ~体部	15	(3.1)	(14.2)	(12.0)		灰色 N 5/	灰色 N 5/	良	
557		1-1S	V34S grid	須恵器	坏身	口縁部 ~体部	20	(4.3)	(12.8)	(11.2)		黄灰色 2.5Y 6/1	灰色 N 6/	良	
558		1-1S	V33S grid	須恵器	坏身	口縁部 ~体部	20	(4.2)	(13.0)	(10.8)		灰色 5Y 5/1	灰白色 N 7/	良	
559	73	1-1	W29S grid	須恵器	坏身	全体	50	3.7	(12.5)	(10.4)		灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	
560	73	1-1N	W31N grid	須恵器	坏身	全体	50	3.7	(10.4)	(8.4)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	

第8表 出土遺物觀察表

擇図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
561		1-1S	V34N grid	須恵器	壺身か	底部	80	(3.3)				灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
562		1-1S	東排水溝	須恵器	甌	口縁部～頸部	15	(2.5)		(10.2)		灰色 7.5Y 5/1	灰白色 N 7/	良	
563	73	1-1S	V34S grid	灰釉陶器か	小型壺	口縁部～頸部	80	(2.7)		(8.1)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
564		1-1N	表土	灰釉陶器か	小型壺	口縁部～頸部	15	(3.3)		(8.9)		灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
565		1-1	W32N grid	須恵器	平瓶	頸部～底部	50	(9.6)	(12.0)		4.2	灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
566	74	1-1		灰釉陶器	長頸壺	口縁部～体部	30	(13.1)		(7.5)		灰オリーブ色 5Y 6/2	灰白色 2.5Y 8/1	良	
567		1-1N		須恵器	短頸壺	口縁部～頸部	30	(4.4)		(9.9)		灰色 5Y 6/1	灰色 5Y 6/1	良	
568		1-1N	東排水溝	須恵器	短頸壺	口縁部～頸部	30	(5.3)		(7.2)		灰白色 5Y 7/1	灰色 N 5/	良	
569		1-1		須恵器	壺	口縁部～頸部	25	(5.7)		(16.0)		灰白色 N 8/	灰白色 N 7/	良	
570		-		須恵器	甌か	口縁部～頸部	15	(3.6)		(22.3)		灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 6/1	良	
571		1-1N	W31N grid	須恵器	甌か	口縁部～頸部	25	(7.2)		(23.4)		灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	
572		1-1S	V33S grid	須恵器	甌か	口縁部～頸部	15	(7.1)		(24.8)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
573	73	1-1		須恵器	甌	口縁部～体部	30	(24.5)		(22.8)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
577	74	1-2	東排水溝	弥生土器	壺	口縁部～頸部	90	(11.45)		19.6		灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
578		1-2	排水溝	弥生土器	壺	体部	30	(15.6)	(25.3)			にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰色 N 4/	良	
579	74	1-2	東排水溝	弥生土器	壺	底部	80	(6.8)			11.1	灰白色 7.5YR 8/2	浅黄橙色 7.5YR 8/3	良	底部木葉痕
580		1-2	X26 grid	弥生土器	壺	頸部～底部	60～100	(11.1)	(13.1)		6.3	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 7/1	良	
581	74	1-2	X26 grid	弥生土器	台付甌	台部	90	(7.4)			9.8	灰白色 5YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	良	
582		1-2	X・W28	土師器	小型甌か	口縁部～体部	25	(4.15)		(10.9)		浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
583	74	1-2	X・W28 grid	土師器	壺か	全体	40	3.6		(9.0)	(6.5)	橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	良	
584	74	1-2	X26 grid	土師器	手捏ね土器	底部	40	(2.15)			(3.9)	にぶい橙色 7.5YR 6/4	にぶい橙色 7.5YR 6/4	良	
585		1-2	X・W28 grid	土師器	高壺	脚部	40	(4.8)			9.4	橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	
586	74	1-2	X26 grid	土師器	高壺	脚部	80	(3.0)			(4.7)	灰白色 10YR 8/1	淡赤橙色 2.5YR 7/4	良	
587		1-2	W29 grid	土師器	手捏ね土器	体部	25	(3.2)	(5.4)			黄灰色 2.5Y 4/1	黄灰色 2.5Y 4/1	良	
588	74	1-2	排水溝	土師器	甌か	体部～底部	40	(5.9)			6.6	灰白色 2.5Y 8/2	にぶい黄橙色 10YR 7/3	良	
589	74	1-2	X・W28 grid	土師器	壺	全体	60	16.0	(15.6)	(8.4)		橙色 5YR 6/6	橙色 5YR 6/6	良	
590		1-2	排水溝	土師器	甌	口縁部～体部/底部	20	(7.5)/(2.9)		(18.8)		灰白色 5Y 8/2	灰色 5Y 6/1	良	
591	75	1-2	X・W28 grid	土師器	甌	底部	20					にぶい橙色 7.5YR 6/4	にぶい橙色 7.5YR 6/4	良	厚み 0.9 cm
592	75	1-2	X28 grid	須恵器	壺蓋	全体	45	3.35		(13.1)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
593	75	1-2	W29 grid	須恵器	壺身	全体	25	4.9	(15.0)	(13.0)		灰色 N 5/	赤灰色 5Y 5/1	良	
594		1-2	X・W28 grid	須恵器	壺身	口縁部～体部	15	(2.7)	(12.0)	(10.4)		黄灰色 2.5Y 6/1	灰色 N 6/	良	
595		1-2	X・W28 grid	須恵器	壺蓋	口縁部	10	(1.4)	(11.0)	(9.2)		灰色 N 6/	灰白色 N 7/	良	
596		1-2	X・W28 grid	須恵器	甌	口縁部	10	(2.0)		(9.0)		灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
597	75	1-2	X・W28 grid	須恵器	短頸壺	口縁部～体部	20	(6.9)		(6.8)		灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
604	75	1-2	土器集中箇所①	弥生土器	壺	体部～底部	70～40	(23.3)	(24.2)		(10.6)	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	

第8表 出土遺物観察表

挿図 No.	図版	区	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	焼成	備考
605	76	1-2	土器集中箇所①	弥生土器	壺	口縁部～頸部	50	(8.0)		(18.4)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
606		1-2	土器集中箇所①	弥生土器	壺	体部	30	(16.2)	(25.4)			灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
607		1-2	土器集中箇所①	弥生土器	台付甕か	脚部	15	(3.2)			(12.4)	灰白色 7.5YR 8/1	灰白色 7.5YR 8/2	良	
608	76	1-2	土器集中箇所②	土師器	壺	全体	50	3.8		(10.6)		橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 7.5YR 6/4	良	
609	76	1-2	土器集中箇所②	土師器	甕	口縁部～体部	30	(10.25)		(20.0)		浅黄橙色 7.5YR 8/4	灰白色 10YR 8/2	良	
610		2-1	西排水溝	弥生土器	甕	口縁部	20	(3.1)		(26.1)		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
611	76	2-1N		土師器	壺	全体	100	6.0	13.6	13.1		にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
612		2-1	s37 grid	土師器	高壺	脚部	70	(4.45)				にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
613		2-1	s37 grid	土師器	高壺	脚部	70	(4.95)				橙色 5YR 7/8	橙色 5YR 7/8	良	
614		2-1	s37 grid	土師器	高壺	脚部	70	(4.3)				浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
615	76	2-1	s37 grid	土師器	手捏ね土器か	底部	100	(3.75)			3.6	にぶい橙色 5YR 6/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
616		2-1	南排水溝	土師器	甕	把手部	100					橙色 5YR 7/6	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	径:3.4 × 4.3 cm
617		2-1	t33S～34N grid	須恵器	壺蓋	全体	25	(4.5)		(13.0)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
618	76	2-1N	西排水溝	須恵器	壺蓋	全体	85	5.15	13.6	13.5		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
619		2-1	t34N grid	須恵器	壺身	口縁部～体部	30	(3.2)	(11.1)	(9.5)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
620		2-1N	t33S～34N grid	須恵器	壺	口縁部～体部	20	(11.6)		(14.2)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
621		2-1	南排水溝	灰釉陶器	碗	口縁部	10	(2.8)		(16.6)		灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
622		2-1	s37W grid	山茶碗	碗	底部	30	(4.0)			(8.8)	灰色 5Y 6/1	灰色 5Y 6/1	良	
623		2-1	s37E grid	山茶碗	碗	底部	100	(2.6)			7.0	灰白色 N 7/	灰白色 N 7/	良	
624		2-2	U31 grid	弥生土器	壺	口縁部～頸部	15	(2.3)		(17.8)		灰白色 2.5Y 8/1	灰白色 2.5Y 8/1	良	
625		2-2	U33 grid	弥生土器	壺	口縁部～頸部	30	(6.9)		(20.2)		浅黄橙色 7.5YR 8/6	浅黄橙色 7.5YR 8/6	良	
626		2-2		須恵器	甕か	口縁部～頸部	15	(3.15)		(9.2)		灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
627	76	2-3		手捏ね土器		体部～底部	60	(2.75)			(2.7)	にぶい橙色 7.5YR 7/4	にぶい橙色 7.5YR 7/4	良	
628		2-3		土師器	甕	把手部	100					にぶい橙色 7.5YR 7/4	浅黄橙色 10YR 8/3	良	径:2.7 × 3.5 cm
629	76	2-3		須恵器	高壺	脚部	40	(4.2)				灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	良	
630		3	V40W grid	土師器	甕	把手部	100					橙色 5YR 7/6	橙色 5YR 7/6	良	径:3.0 × 4.7 cm
631		3	U40E grid	土師器	甕	把手部	100					橙色 7.5YR 7/6	橙色 7.5YR 7/6	良	径:2.35 × 3.5 cm
632		3	U40E grid	須恵器	壺身	全体	40	3.6	(12.8)	(10.4)		黄灰色 2.5Y 6/1	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
633		3	V40W grid	須恵器	壺身	口縁部～体部	10	(3.0)	(10.9)	(9.0)		灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
634		3	s43S grid	山茶碗	碗	底部	30	(3.0)			(7.3)	灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	
635		3	V40 grid	山茶碗	碗	底部	60	(2.1)			6.0	灰色 N 6/	灰色 N 6/	良	
635		3	U40E grid	山茶碗	碗	全体	40	3.6	(12.8)	(10.4)		黄灰色 2.5Y 6/1	黄灰色 2.5Y 6/1	良	
636		3	s43S grid	山茶碗	碗	底部	40	(2.6)			6.7	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	良	
637		3	U40 grid	山茶碗	碗	底部	30	(2.7)			(7.0)	灰白色 N 8/	灰白色 N 8/	良	モミ殻痕

( ) 内数値は器高欄では残存値、口径・器径・底径欄では推定値を示す

第8表 出土遺物觀察表

## 【木製品】

挿図 No.	図版	区	遺構	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	備考	
353	58	1-1S	SD8	農耕土木具	鎌	鉄製鎌柄		コジイ	(10.5)	4.7 /2.5	2.45 /1.2	柾目		
354	58	2-1N	SD8	農耕土木具	杵	堅杵		スダジイ	(42.2)	7.5	6.4	芯持ち材		
355	58	2-1N	SD8	農耕土木具	鋤	曲柄鋤身	平鋤	コナラ属 アカガシ亜属	44.7			柾目	軸部長 : 15.1 cm 刃部長 : 29.6 cm 柄部幅 : 2.2 cm 繫縛部幅 9.65 cm 刃部幅 : 9.3 ~ 16.8 cm 柄部厚 : 1.4 cm 繫縛部厚 : 1.4 cm 刃部厚 : 0.6 ~ 1.1 cm	
356	58	2-1N	SD8	編み具 ・紡織具	糸巻具	台		コナラ属クヌギ節	30.7	21.5	7.9	板目		
357	58	1-1S	SD8	容器		削物		スギ	(39.4)	18.6		板目		
358	59	1-1S	SD8	武器 ・武具・馬具	刀	鞘尻		メギ属?	(3.75)	2.75		芯持ち材	全面に黒漆	
359	59	2-1N	SD8	建築部材か	壁か			サワラ	56.1	11.9	1.8	柾目		
360	59	1-1S	SD8	建築部材	結合補助材	栓		ツガ属	21.9	8.8	5.5	柾目		
361	59	1-1S	SD8	建築部材	扉			イヌマキ属	(41.0)	3.0 ~ 7.0	3.8	板目		
362	60	1-1S	SD8	建築部材	蹴放し			ネムノキ	141.7	14.7	9.6	板目		
363	60	1-1S	SD8	建築部材	壁			サワラ	(118.0)	12.9	12.4	柾目		
364	59	1-1S	SD8	建築部材	柱			イヌマキ属	99.7	17.9	15.3	芯持ち材		
365	59	1-1S	SD8	建築部材	柱			イヌマキ属	(65.7)	13.0	11.5	芯持ち材		
366	61	1-1S	SD8	建築部材	柱		コナラ属コナラ節	140.0	19.8	10.1	芯持ち材			
								36.3	11.3	10.5	芯持ち材	366-1		
								26.8	9.9	9.5	芯持ち材	366-2		
								44.5	11.0	9.4	芯持ち材	366-3		
								36.7	19.8	10.1	芯持ち材	366-4		
367	61	1-1S	SD8	建築部材	柱		サカキ	167.0	12.0 ~ 15.3	13.3	芯持ち材			
								37.4	13.2	12.2	芯持ち材	367-1		
								40.9	12.8	11.8	芯持ち材	367-2		
								44.1	15.3	12.8	芯持ち材	367-3		
								56.8	13.2	13.3	芯持ち材	367-4		
368	61	1-1S	SD8	建築部材	柱			イヌマキ属	(46.85)	16.9	13.6	芯持ち材		
369	61	1-1S	SD8	建築部材	柱			イヌマキ属	(43.6)	13.6	14.1	芯持ち材		
370	62	2-1N	SD8	建築部材	柱			イヌマキ属	(79.8)	8.0	7.4	芯持ち材		
371	62	2-1N	SD8	建築部材	垂木			イヌマキ属	120.0 /65.8	7.0	5.4	芯持ち材		
372	62	2-1N	SD8	建築部材	垂木			イヌマキ属	(124.9)	3.8	3.6	芯持ち材		
373	62	1-1S	SD8	建築部材	梁・桁			イヌマキ属	212.1	10.5	8.0	芯持ち材		
374	62	2-1N	SD8	建築部材	柱			イヌマキ属	(157.8)	9.9	8.9	芯持ち材		
375	62	2-1N	SD8	建築部材	柱			コナラ属 アカガシ亜属	66.9	13.7	11.5	芯持ち材		
376	62	2-1N	SD8	土木材	杭			タイミンタチバナ	(68.3)	5.3	5.0	芯持ち材		
377	62	2-1N	SD8	土木材	杭			イヌマキ属	(81.9)	4.7	4.4	板目		
378	63	2-1N	SD8	その他	加工材	分割材		ヒノキ	(55.8)	5.2	0.9	柾目		
379	63	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		コナラ属クヌギ節	44.1	12.9	8.4	芯持ち材		
380	63	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		ヒノキ	61.6	3.2	2.4	板目		
381	63	1-1S	SD8	その他	加工材	芯持ち材 (柱?)		イヌマキ属	(42.5)	12.6	9.2	芯持ち材		
382	63	2-1N	SD8	その他	加工材	芯持ち材		コナラ属 アカガシ亜属	(77.2)	3.1	2.6	芯持ち材		
383	63	2-1N	SD8	その他	加工材	芯持ち材 (柱?)		ヒサカキ	(70.2)	5.5	4.9	芯持ち材		
384	63	2-1N	SD8	その他	加工材	芯持ち材		イヌマキ属	(48.7)/ (38.9)	7.8/8.1	5.1/6.9	芯持ち材		

第8表 出土遺物観察表

挿図 No.	図版	区	遺構	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	備考
385	63	1-1S	SD8	その他	加工材	芯持ち材 (垂木?)		イヌマキ属	(106.0)	5.7	5.4	芯持ち材	
386	63	2-1N	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		スギ	(2.5)	18.2	0.3	板目	
387	63	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		イチイガシ	(9.1)	10.4	0.9	柾目	
388	63	2-1N	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		ヒノキ	9.4	4.8	1.1 ～ 2.0	板目	
389	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		イボタノキ属	(11.2)	3.5 ～ 2.7	2.5	芯持ち材	
390	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		イヌマキ属	20.3	6.0	4.7	柾目	
391	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		ミズキ	(22.9)	6.9	2.6	柾目	
392	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		ツガ属	(1.6)	17.8	4.0	柾目	
393	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		スギ	(16.6)	15.8	1.0 ～ 3.2	板目	
394	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		スギ	12.4	4.7	1.1	追柾目	
395	64	2-1N	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		コジイ	14.9	5.1	2.2	柾目	
396	64	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		ミズキ	(18.1)	8.1	1.6	柾目	
397	64	2-1N	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		スギ	(16.3)	8.0	1.0	追柾目	
398	65	1-1S	SD8	用途不明	その他 ・不明	その他 ・不明		スギ	14.2	2.9	1.5	板目	
399	65	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		サワラ	(27.6)	3.3	0.8	柾目	
400	65	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		スギ	(21.35)	7.9	1.2	板目	
401	65	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		スギ	(38.95)	(10.4)	1.3	追柾目	
402	65	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		サワラ	(16.6)	3.5	1.0	柾目	
403	65	2-1N	SD8	その他	加工材	分割材		ケヤキ	(28.2)	5.0	1.7	板目?	
404	65	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		ヒノキ	(34.8)	5.6	1.9	追柾目	
405	65	1-1S	SD8	その他	加工材	分割材		スギ	(31.85)	3.2	2.85	柾目	
406	65	2-1N	SD8	その他	加工材	芯持ち材		ウバメガシ	(34.1)	3.8	4.7	芯持ち材	炭化
407	65	3N	SD8	その他	加工材	分割材		イヌマキ属	(42.3)	2.0	1.9	板目	
495	70	3N	杭列 1	土木材	杭			クリ	(40.0)	3.3	3.4	芯持ち材	
496	70	3N	杭列 1	土木材	杭			クリ	(46.1)	4.1	4.3	芯持ち材	
497	70	3N	杭列 1	土木材	杭			マツ属 複雑管束亞属	(38.5)	(4.0)	(3.9)	芯持ち材	
498	70	3N	杭列 2	土木材	杭			マツ属 複雑管束亞属	37.9	5.95	5.8	芯持ち材	
499	70	3N	杭列 2	土木材	杭			マツ属 複雑管束亞属	57.7	4.3	3.4	芯持ち材	
500	70	3N	杭列 2	土木材	杭			アカマツ	(4.05)	4.0	3.9	芯持ち材	
501	70	3N	杭列 2	土木材	杭			マツ属 複雑管束亞属	(41.3)	3.2	3.3	芯持ち材	
502	70	3N	杭列 2	土木材	杭			マツ属 複雑管束亞属	(87.0)	(6.8)	3.9	芯持ち材	
503	70	3N	杭列 2	土木材	杭			ネムノキ	(63.1)	4.5	4.1	芯持ち材	
576	70	1-1N	SP7	建築部材	柱	分割材		イヌマキ属	44.85	15.6	13.05	芯持ち材	

( ) 内数値は残存値を示す

第8表 出土遺物観察表

## 【石器・石製品】

挿図 No.	図版	区	出土位置	遺物名	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
351	57	1-1	SD8	有孔石製品	クリノクロア (緑泥石)	3.05	2.4	0.55	5.25	孔径:0.25 cm
352	57	1-1	SD8	有孔円盤	クリノクロア (緑泥石)	長径:2.8	短径:2.2	0.35	2.56	孔径:0.15 cm / 0.1 cm
489	70	1-2	SR2	石鏸	珪質頁岩	2.18	1.66	0.42	1.16	
490	70	1-2	SR2	有孔石製品	クリノクロア (緑泥石)	2.1	3.85	0.5	6.68	孔径:0.45 × 0.3 cm / 0.45 × 0.3 cm
493	70	1-2	SR2	敲き石	砂岩	9.95	4.95	2.8	205.84	
494	70	1-2	SR2	敲き石	砂岩	5.65	7.55	4.7	503.42	孔径:0.8 cm / 0.65 cm
574	74	1-1	W30 grid	紡錘車	滑石	長径:3.9	短径:2.0	1.4	23.95	
575	74	1-1		有孔円盤	クリノクロア (緑泥石)	長径:3.5	短径:3.35	0.2 ~ 0.4	23.95	孔径:0.3 × 0.2 cm / 0.25 × 0.2 cm
599	76	1-2		砥石	流紋岩	6.2	7.7	4.3	163.76	上部欠損
600	75	1-2		砥石	流紋岩	7.65	3.35	4.65	120.27	著しく風化
601	75	1-2		敲き石	頁岩	10.45	4.1	1.35	92.22	
602	75	1-2	X・W27 grid	台石か	砂岩	16.6	11.0	4.9	1147.1	一部欠損
603	75	1-2	X27 grid	敲き石	砂岩	14.7	6.35	3.1	477.69	

( ) 内数値は残存値を示す

## 【玉類】

挿図 No.	図版	区	出土位置	石材	直径 (mm)	全長 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	備考
113	48	1-1	SX9	滑石	5.0	3.7	2.0	0.09	オリーブ灰色	
114	48	1-1	SX9	滑石	5.3	3.6	2.0	0.15	緑灰色	
115	48	1-1	SX9	滑石	5.6	3.7	2.3	0.11	オリーブ灰色	
116	48	1-1	SX9	滑石	6.0	4.7	2.0	0.19	オリーブ灰色	
347	57	1-1	SD8	滑石	4.9	4.6	1.6	0.17	灰オリーブ色	
348	57	1-1	SD8	滑石	4.2	2.9	1.5	0.08	青灰色	
349	57	1-1	SD8	滑石	4.3	3.3	1.9	0.07	オリーブ灰色	
350	57	1-1	SD8	滑石	5.1	1.9	2.1	0.05	オリーブ灰色	
598	75	1-2	X27 grid	滑石	5.4	3.5	1.8	0.16	オリーブ灰色	

( ) 内数値は残存値を示す

## 【その他】

挿図 No.	図版	区	出土位置	遺物名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
491	70	1-2	SR2	鉄滓	4.3	3.95	3.1	14.52	
492	70	1-2	SR2	軽石	4.05	3.35	2.0	8.84	

( ) 内数値は残存値を示す

## 第7章　まとめ

### 第1節　遺跡周辺の調査と歴史

#### 1　遺跡周辺の発掘調査

静岡県道掛川浜岡線（県道37号線）の道路整備事業に伴う発掘調査では、池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡と3つの遺跡において本発掘調査を行ってきた。当地内で発掘調査が行われたのは、これが初めてではなく、菊川市教育委員会の記録によれば、高橋遺跡は昭和45（1970）年、静岡大学が学術研究を目的とした発掘調査を実施した記載がある（註1）。このとき高橋遺跡は弥生時代から奈良時代の遺跡であることと、集落跡であることがわかっている（註2）。それから時を経て、県道路整備事業に伴い、道路整備事業地内で、平成24年度（2012年）に試掘・確認調査を開始し、平成28年度（2016年）まで本発掘調査を実施してきた。その結果、それぞれの遺跡の年代と、遺跡の種類が明らかとなった。低丘陵上に位置する池之谷遺跡では弥生時代の土器等が出土し、散布地となっている。明確な遺構は確認されなかったものの、弥生時代の墓域であった可能性が指摘された。その東側の丘陵裾から低地に向かう位置にある中山遺跡は、奈良時代から平安時代の集落跡が見つかり、その年代の土器が出土した。さらに南側の低地には高橋遺跡があり、弥生時代から古墳時代の土器や石器、木製品が数多く出土し、弥生時代から古墳時代の集落跡の埋蔵文化財包蔵地であることが判明した。

平成29年度（2018年）には、高橋遺跡から南へ0.6kmの丘陵上に、坊之谷古墳群・坊之谷横穴墓が新たに発見され、菊川市教育委員会により古墳2基と横穴墓1基の本発掘調査が行われた（註3）。

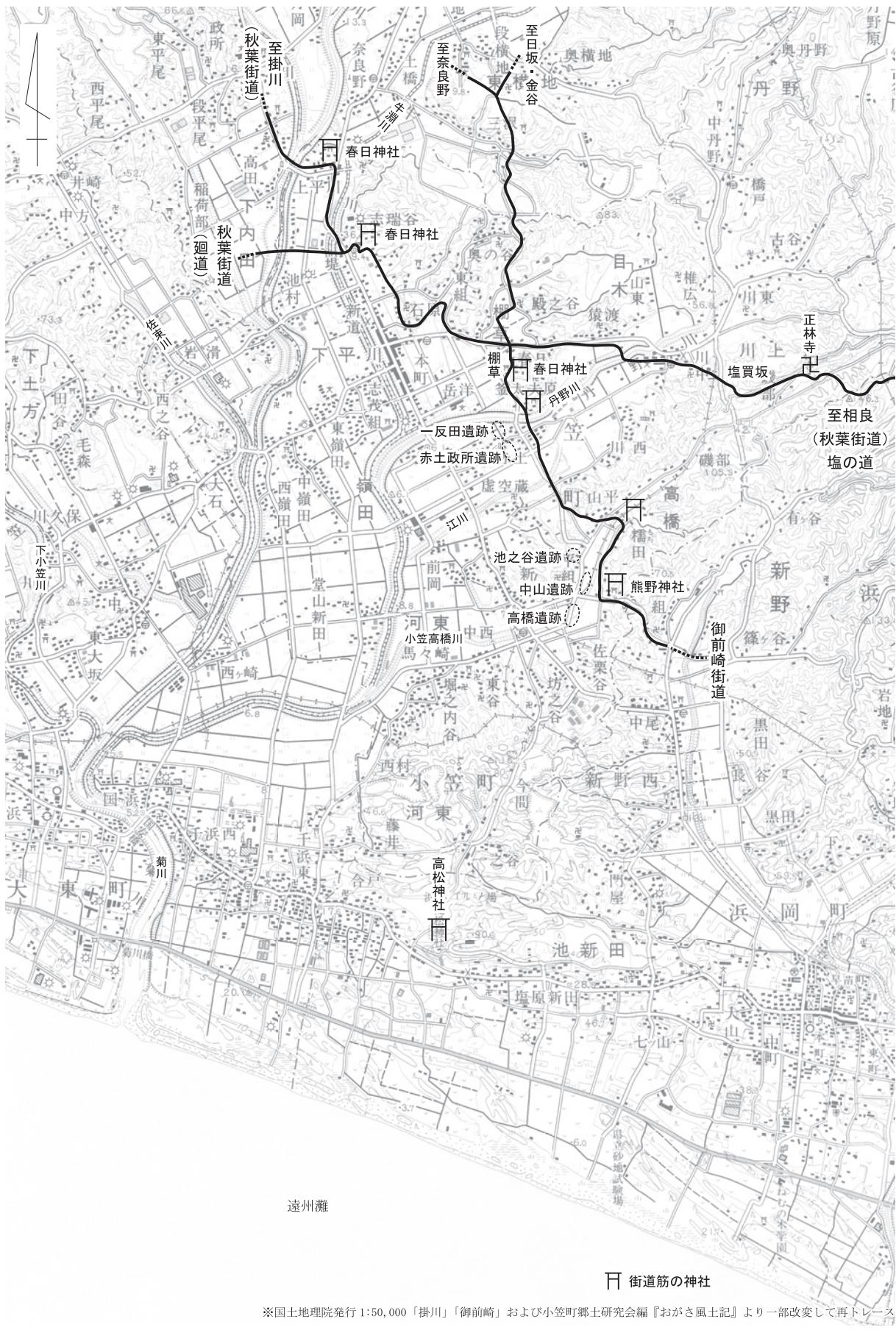
高橋地区では、近年、相次いで埋蔵文化財の発掘調査が行われたものの、当地周辺での開発行為は極めて少なく、今後に続く発掘調査も当面行われる可能性は薄い。これまでの発掘調査で当地区の歴史の全容が明らかとなったとは言い難く、今回の中山遺跡や高橋遺跡の発掘調査では、集落の一部が見つかっては過ぎない。

菊川市南部域（旧小笠町）では、近年の開発行為に伴い、東原田遺跡の集落跡や、宮ノ西遺跡、八幡ヶ谷古墳、赤土政所遺跡・一反田遺跡等で集落跡や古墳の発掘調査など、まとまった面積の発掘調査が行われてきた。また坊之谷遺跡のように、これまで埋蔵文化財包蔵地となっていたところでも、新たな遺跡が見つかった。こうした意味では、今後、埋蔵文化財が新たに発見される可能性が高い地域であることは間違いない。

#### 2　遺跡周辺の河川と街道

こうした遺跡が数多く存在するのは、この地域が、かつて交通の要所であったことも、その一因であろう。高橋地区は菊川水系の範囲にあり、菊川から枝分かれした丹野川から、さらに東側へ枝分かれした小笠高橋川流域にある（第149図）。平成20～24年に発掘調査を行った赤土政所遺跡・一反田遺跡も、丹野川流域に展開した集落跡であった。菊川市南部域では牧之原台地から派生した低丘陵が児の手柏状に広がり、その裾部には低地と河川が入り組んだ地形となっている。無数に枝分かれした河川は、合流を経て菊川に至る。こうした複雑な地形を利用して、弥生時代から現代に至るまで、人々は当地に集落や水田を築き、墓域などを展開していったのである。本遺跡もそのひとつと言える。

河川伝いの経路のほかに、丘陵部では、御前崎市（旧浜岡町）側からは御前崎街道が高橋地内を通り、棚草を経由して奈良野または日坂・金谷方面の東海道に至る。牧之原市（旧相良町）から信州に塩が運



第 149 図 遺跡周辺の河川と主要街道

※国土地理院発行 1:50,000 「掛川」「御前崎」および小笠町郷土研究会編『おがさ風土記』より一部改変して再トレス

ばれた道は「塩の道」と呼ばれるが、相良から川上までに至る途中、ちょうど高橋地区の北側は「塩買坂」と呼ばれる。塩の道は、市場を経由して、棚草で御前崎街道と交差し、さらに秋葉街道から信州街道へと繋がっている。主要街道沿いには古い起源を持つ神社等が複数存在している。高橋地区には高橋熊野神社がある。御前崎市（旧浜岡町）門屋の高松山には高松神社があり、大宝年間（8世紀初）の創建とされる。このような主要街道からほど近い立地条件があり、当地への人々の往来と定住があったのだろう。

## 第2節 出土木製品の樹種選択と製作

### 1 高橋遺跡出土木製品の樹種選択

高橋遺跡では総計165点の木製品が出土した。その大半は、埋没した小笠高橋川の流路と考えられるSD 8より出土した。数量としては必ずしも多くはないが、菊川市南部域（旧小笠町）では、赤土政所遺跡・一反田遺跡、東原田遺跡等に次いで、まとまった数量の木製品が見つかっている。器種としても様々な用途の木製品があり、農耕土木具、紡織具、容器、武器のほか、柱や垂木、扉、蹴放しなどの建築材が多く出土した。

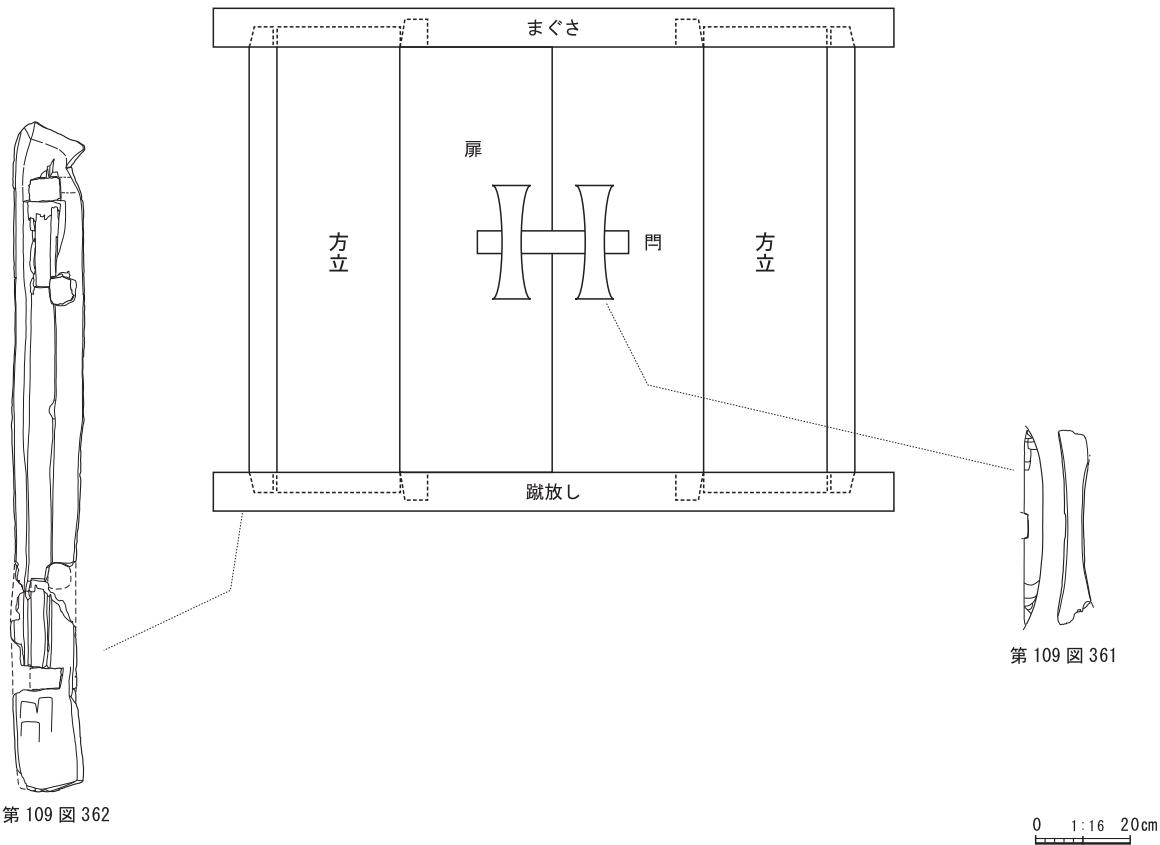
農耕土木具は、曲柄平鍬の鍬身（第106図355）が流路中層より出土した。使われている樹種は同定の結果、コナラ属アカガシ亜属であった。「農耕土木具＝カシ」という傾向は、菊川流域でも変わらないと言う結果であった。豎杵（第106図354）はスダジイ、鎌柄（同図353）はコジイを使っているが、これらも県内では一般的な傾向の樹種選択と言える。

製品としては少ないが、紡織具の軸受台（タタリ台）にはクヌギ節、脚付きの方形容器はスギ材が使われている。特殊なものとしては、鞘尻はメギ属？であったが、この場合は製品として持ち込まれた可能性が高い。

建築材は静清平野や志太平野の遺跡で見つかるものとは樹種選択が異なっていた。その傾向は牧之原～御前崎の沿岸部の遺跡と同様であった（西尾2008）。最も参考となる遺跡は、御前崎市（旧浜岡町）下朝比奈に所在する南谷遺跡である。南谷遺跡は新野川の支流である朝比奈川の中流域に位置し、沖積平野の標高16～17mの低湿地に立地する。遠州灘からは4kmほど内陸にある。年代は弥生時代後期から古墳時代初頭で、狭い範囲ながらも集落跡や自然流路を検出した。木製品はこの自然流路から大量に出土した。ここでの建築材の樹種構成は、イヌマキが6割以上を占めるほど多用していたことが分かっている。この傾向は、小笠郡南部域では「建築材＝イヌマキ」と言えるほど、主体的に樹種選択していることに他ならない。

高橋遺跡出土の柱はイヌマキ属（第109図364・365、第110図368・369、第111図370等）が主流で、次いでコナラ属コナラ節（第110図366）、サカキ（同図367）がある。垂木はイヌマキ属を多く利用（第111図371・372）していた。壁板材はサワラ材（第109図363）であった。用途不明ではあるが、第109図359も妻壁と考えれば、サワラ材を用いている。栓（同図360）や用途不明だが面調整された板（第113図392）はツガ属で作られていた。扉はイヌマキ属（第109図381）で、蹴放しはネムノキ材（同図362）であった。

高橋遺跡の建築材である柱は約6割がイヌマキ属であったことから、菊川市南部域でもイヌマキ材を多用している傾向が明らかとなった。ただし、いずれも芯去材ではなく丸木であることから、柱に要する直径を持つ木を伐採てきて、集落内で使用していたのであろう。壁板や妻壁などに使われているサワラ材は、本州中部の山地帯上部に広く分布する常緑高木である。スギ材と同じように板材として使わ



第150図　掘立柱建物の扉部分模式図

れているが、杭（第112図383）のような樹皮の付いた小径木があるところをみると、遺跡の近隣に雑木が自生していた可能性がある。

## 2 木製品の製作

高橋遺跡より出土した木製品を見る限りでは、完成された製品であり、木製品を製作していた遺跡ではないように思える。ただし第110図366・367の柱や第111図371の垂木等に見られるように、樹皮が付いたままの状態の製品も散見される。そのことからも建築材については集落内で製作されていた可能性がある。出土した木製品は、大径木を分割したような大規模な製作ではなく、径10～20cm程度の丸木を調達している傾向が見て取れる。強いて大径材があるとすれば、脚付き容器（第107図357）だが、これも分割材として持ち込まれたか、製品として持ち込まれたか、どちらとも考えられる。

今回の調査で出土した木製品には、樹皮が付いた製品や、耐久性が疑わしい木材を使っている製品など、特に建築材にそういった傾向が見られた。第110図366は頭部を二又に加工して横架材を架ける部分を作り出しているが、所々に樹皮が残っており、未完成品であったか、そのまま使用したかは明らかではない。第109図362の蹴放しは、第6章でも述べたとおり、材質の「ネムノキは東北地方中部以南の全国の山野、沢沿いの陽光地に普通に生育する落葉小高木で、幹径30cm、樹高8mくらいになる。材の成長は早く、軽軟で脆く、保存、耐朽性も低く、各種器具材に使われる程度である。」とある。つまり建築材としてネムノキは不向きであり、長期間使われる建築物に選択された材とは考えにくく、一時的な使用を目的とする掘立柱建物等の建築物が存在した可能性もある。一時的な使用であるならば、手近な材木を使ったり、樹皮を取り去らずに使用したりすることもあり得るかもしれない。なお、掘立柱建物

に使われた扉（第109図361）と蹴放し（第109図362）の使用箇所を第150図に模式図として示した。

## 註

1. 1970年の発掘調査での記録類・出土品は静岡大学に保管されている。
2. 第3図参照。菊川市教育委員会松下徳男氏のご教示による。
3. 菊川市教育委員会社会教育課文化振興係「静岡県菊川市 坊之谷古墳群・横穴群発掘調査現地説明会資料」平成29年5月21日による。

## 参考文献

### 【報告書・県史・市町村史等】

- 小笠町教育委員会 1977 『小笠郡小笠町舟久保古墳の調査』
- 小笠町教育委員会 1982 『嶺田遺跡』 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・小笠町教育委員会
- 小笠町教育委員会 1983 『嶺田遺跡』 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・小笠町教育委員会
- 小笠町教育委員会 1984 『池ヶ谷横穴群発掘調査報告書』
- 小笠町教育委員会 1985 『二ノ谷古窯跡発掘調査報告書』
- 小笠町教育委員会 1990 『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』（静岡県小笠郡）
- 小笠町教育委員会 1991 『寺の谷3号墳発掘調査報告書』
- 小笠町教育委員会 2001 『川田・東原田遺跡』
- 菊川市教育委員会 2006 『祢宜屋敷遺跡調査報告書』
- 菊川市教育委員会 2007 『大鹿横穴群B群発掘調査報告書』
- 菊川町教育委員会 1985 『三沢西原遺跡』
- 菊川町教育委員会 1999 『横地城跡－総合調査報告書一』
- 菊川町教育委員会 2000 『横地城跡－総合調査報告書一』
- 菊川町教育委員会 2001 『土橋遺跡』（静岡県小笠郡）
- 菊川市教育委員会 2006 『赤土政所遺跡発掘調査報告書－第1次調査－』
- 菊川市教育委員会 2012 『広原遺跡発掘調査報告書』
- 菊川市教育委員会 2015 『宮ノ西遺跡発掘調査報告書－第4次調査－』
- 浜岡町教育委員会 2002 『南谷遺跡遺物編2』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『平尾野添横穴群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『恒武西宮・恒武西浦遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『菊川市下平川の遺跡群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『法明寺古墳』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『白岩遺跡・白岩下遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『合代島丘陵の古墳群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011 『七社神社遺跡他』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2016 『赤土政所遺跡・一反田遺跡』
- 明星大学考古学研究室 1986 『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦』
- 龍昌山安興寺本堂建設委員会 2004 『釜太夫横穴群E群発掘調査報告書』
- 龍昌山安興寺本堂建設委員会・小笠町教育委員会
- 浜松市教育委員会 1998 『山ノ花遺跡 木器編（図版）』（財）浜松市文化協会

【論文等】

- 伊藤隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学-出土木製品用材データベース-』 海青社
- 小笠町郷土研究会 1988 『おがさ風土記』 小笠町教育委員会
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」『物質文化』43
- 斎藤あや・田村朋美 2013 「小田部古墳出土のガラス玉の再検討」『西相模考古』第22号
- 斎藤あや 2014a 「関東地方における玉類の流通と画期—ガラス小玉を中心に—」  
『久ヶ原・弥生町期の現在 —相模湾／東京湾の弥生後期の様相—』 西相模考古学研究会記念シンポジウム資料
- 斎藤あや 2014 b 「関東地方における玉類の流通と画期—ガラス小玉を中心に—（補遺）」『西相模考古』第23号
- 鮫島和大 1994 「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第12号
- 静岡県教育委員会 2003 『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
- 静岡県考古学会 2005 『静岡県における原史・古代の木製祭祀具』
- 静岡県考古学会 2006 『古代の役所と寺院』
- 鈴木敏則 1999 「遠江における原始・古代の紡織具」『浜松市博物館報』第12号 浜松市博物館
- 浜岡町史編纂委員会 1975 『浜岡町史』 浜岡町
- 西尾太加二 2008 「遺跡から出土する建築材の樹種構成」『研究紀要』第14号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊川シンポジウム実行委員会 2005 『陶磁器から見る静岡県の中世社会』
- 藤田 等 1994 『弥生時代ガラスの研究』 名著出版
- 文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき』 同成社
- 大谷宏治 2010 「上平川大塚古墳の研究」『静岡県考古学の研究』41・42合併号 静岡県考古学会

## 第8章 自然科学分析

### 第1節 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材等の樹種

鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県菊川市高橋所在の中山遺跡・高橋遺跡から出土した木製品・木材等165点（材163点、炭化材2点）の樹種を調査した。材は常法に則つとり剃刀刃を用いて木口、板目、柾目の徒手切片が作成され、これを生物顕微鏡で観察して同定した。炭化材は徒手で試料を割り取り、破断面を金属反射顕微鏡で観察し、また1点については金属反射顕微鏡、デジタルマイクロスコープでの観察後、パラフィン包埋してセラミックナイフで切片を作成し、生物顕微鏡で観察同定した。

中山遺跡・高橋遺跡は菊川の支流の牛淵川の支流小笠高橋川の右岸にあり、現況水田で標高は約8mの沖積地にある。木製品・木材等の大部分は1区と2区の自然流路の旧河道SD 8と3区の杭列で、前者は古墳時代中期～後期と看做され、他の出土資料も弥生～古墳時代のものであると考えられている。

#### 1 樹種同定結果

①アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科

写真5-1 a～c（番号プレパラート番号17047）

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道を持つ。早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行はややゆるやかであるが晩材部は明瞭な幅広の帯となり、多くの場合垂直樹脂道は晩材部にある。放射組織は単列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む薄壁の分泌細胞からなる。放射組織の上下に1～数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には顕著な歯牙状肥厚がある。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個ある。以上の形質よりマツ科のマツ属複維管束亜属のアカマツの材と同定した。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する針葉樹で、痩せた土地、陽光地、二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、心材の保存性は良く、特に水湿に強いので、建築材（特に基礎、土台回りなど）、土木用材、器具材などに幅広い用途があるほか、坑木などの特用がある。

本遺跡出土材は杭3点、用途不明の木材等4点、合計7点である。

②マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科

写真6-2 a～c（プレパラート番号17032）

本州～九州にあるマツ属複維管束亜属（二葉松類）はアカマツとクロマツで、両者とも広く分布する普遍的な種類である。解剖学的にはアカマツの放射仮道管の内壁の歯牙状肥厚が顕著で、クロマツ*Pinus thunbergii* Parl. ではゆるやかであることで区別されるが、遺跡出土材では細胞壁が劣化して「顕著さ」が明瞭に観察できないことがしばしばある。本遺跡出土材にもそのようなもののが多数あり、これを「マツ属複維管束亜属」とした。ただし、本遺跡からは明らかにアカマツと同定できる材が7点出土しているのに対し、明らかに「クロマツ」と同定できるものは1点もないことから、ここで「マツ属複維管束亜属」としたものの大半はアカマツであると考えられる。「マツ属複維管束亜属」としたもののは杭16点、そのほかの木製品2点、合計18点で、用材もアカマツと変わらないことから、マツ属の材全部がアカマツであると考えられる。

③ヒメバラモミ *Picea maximowiczii* Regel マツ科

## 写真6-3 a～c (プレパラート番号17066)

水平・垂直の両樹脂道をもつ針葉樹材で、早材から晩材への移行はかなり急激で晩材部は幅のある帯状となる。早材の仮道管径は薄壁で比較的太く、晩材仮導管は厚壁で細胞内腔は非常に狭い。仮導管内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は単列と紡錘形があり、柔細胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む分泌細胞からなる。放射組織の上下縁辺には放射仮道管があり、孔口の狭い有縁壁孔が見られ、内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射柔細胞の垂直及び水平壁は厚く、多数の単壁孔がある、いわゆるモミ型壁孔となる。分野壁孔はトウヒ型で小さく、1分野に2～5個ある。これらの形質からトウヒ属のヒメバラモミの材と同定した。

我が国にはトウヒ属はトウヒ、ハリモミ、イラモミ、エゾマツなどいくつかの種類があるが、材構造においてヒメバラモミのみが仮導管内壁に顕著ならせん肥厚を持つことで容易に区別される。ヒメバラモミは長野県南東部の八ヶ岳～南アルプスにかけての地域とそれに接する山梨県西部のいくつかの限られた地点にのみ生育する希少な針葉樹である。樹高20m以上、幹径70cmに達する常緑高木で、材は軽軟で弾性強く、木目が整って美しい。他のトウヒ属の材と同様の用途があり得るが資源量が少なく、利用例は少ない。本遺跡出土材は成形された長方形の板片1点である。上述のごとく遺跡より遙か北の山中に生育する希少な樹木であり、それをわざわざ静岡の地に運んで何の目的に用いていたのかはわからない。

④ツガ属 *Tsuga* マツ科

## 写真6-4 a～c (プレパラート番号16837)

水平・垂直の両樹脂道をもつ針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急、晩材部は幅のある帯状となる。軸方向要素はほとんど仮道管のみからなるが、年輪界付近にまれに樹脂細胞が混じる。放射組織は単列、背はあまり高くなく、柔細胞と放射仮道管からなる。放射仮道管の有縁壁孔は小さく、内壁に鋸歯状突起やらせん肥厚はなく、なめらか。樹脂細胞と放射柔細胞の垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔を持つ、いわゆるモミ型壁孔である。分野壁孔は小さいトウヒ型～ヒノキ型で、1分野2～6個程度ある。以上の形質からマツ科のツガ属の材と同定した。

ツガ属は本州から九州の山地帯にツガ *Tsuga Sieboldii* Carr.、温帶上部から亜高山帯にかけてコメツガ *Tsuga diversifolia* (Maxim.) Masters. が分布している。静岡県でも標高500mほどの山地にはツガがあり、富士山や南アルプスなどの山岳地帯にはコメツガが分布している。いずれも樹高20m以上、幹径1mになる常緑高木で、いずれの材も木理通直で緻密、軽軟あるいはやや重硬で、建築材、各種器具材、土木材、パルプに用いられる。本遺跡出土材は建築材と用途不明の木材各1点である。

⑤イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科

## 写真7-5 a～c (プレパラート番号16844)

材が均質で年輪の境がはっきりしない針葉樹材で、早材から晩材への移行は非常に緩やかで、年輪界附近の晩材部細胞は径がやや小さく壁がやや厚い。樹脂細胞は薄壁で、横断面で扁平な四角形、量が多く、年輪内全体に均一に散在するが、ヒノキ科の木材のように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることはないので、横断面では見つけにくい。また樹脂細胞の水平壁はイヌガヤと違い、非常に薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみからなり、分野壁孔は小さく、ヒノキからトウヒ型、1分野あたり1～2個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

イヌマキ属には関東地方南部以南、南西諸島までの沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Lambertと、紀伊半島南部より南西に分布するナギ *Podocarpus nagi* (Thunb.) Zoll. et Moritzの2種があり、静岡県地方では後者もしばしば植栽されているが、その自然分布か

ら本遺跡出土材はイヌマキと考えられる。イヌマキの材は木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強い。本遺跡出土材は柱、垂木、扉などの建築材、鍬(柄?)などの他用途不明等合計36点ともっとも出土数が多い。弥生時代～中世の時期のイヌマキ材の多用は東海地方の特徴である。

**⑥ヒノキ** *Chamaecyparis obtusa* Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真7-6 a～c (プレパラート番号16853)

水平・垂直の両樹脂道を欠く針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で年輪は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものはあまり目立たない。樹脂細胞は接線方向に緩く集まって散在し、細胞内に黒褐色物質を含み、細胞の水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、1分野に1～2個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帯域に広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。また、古くから植林が行われ、現在では天然分布域を超えて植栽されている。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の畿内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。本遺跡出土材は用途不明の木製品等12点である。

**⑦サワラ** *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真7-7 a～c (プレパラート番号16863)

ヒノキ、スギによく似た針葉樹材で、水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、1分野当たり普通2個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは本州中部の山地帯上部に広く分布する常緑高木で、樹高30m、幹径1mに達する。静岡県では北部山中に多い。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に強いので桶類に、また、匂いが無いので飯びつや箸に用いられる。ヒノキに比べ材質は劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は壁板、用途不明の木材等7点である。

**⑧スギ** *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don ヒノキ科

写真8-8 a～c (プレパラート番号16879)

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は明瞭で、早材から晩材への移行はゆるやか～やや急で、年輪幅は広いものから非常に狭いものまでの変異がある。年輪幅が狭く、早材から晩材への移行が急激な材(おそらく高樹齢材)ではヒノキ、サワラに似た木口面となるが、仮道管径がそれより一回り大きい。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。樹脂細胞の水平壁はやや厚くなり、微小な単壁孔があるが、通常は数珠状に肥厚することはない。放射組織は単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は長軸が水平方向に近い橢円形で、大型のスギ型、1分野あたり通常2個あり、開孔部の長軸も水平に近い方向になる。以上の形質より、ヒノキ科のスギの材と同定した。

スギは青森県南部から九州屋久島まで全国に広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。登呂遺跡では海拔ゼロメートルに近い低地にスギの天然林があったことが知られている。成長が早く、幹径1m、樹高30mを超える大木になり、大材が得易いことから、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。本遺跡出土材は剣物容器、用途不明材など18点である。

⑨アスナロ *Thujopsis dolabrata* (Lin. Fil.) Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真8-9 a～c (プレパラート番号17048)

水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急、幅の狭い年輪ではヒノキ同様晩材部は少ない。早材部仮道管はヒノキ、サワラより細い。樹脂細胞は晩材部付近に接線方向にまとまって散在し、水平壁は数珠状を呈する。放射組織は柔細胞のみから成り、分野壁孔はヒノキ、サワラより小さく、ヒノキ型～トウヒ型で、1分野当たり2～4個ある。以上の形質からヒノキ科のアスナロの材と同定した。

アスナロは日本特産の樹種で、基準変種の狭義のアスナロと変種のヒノキアスナロがある。いずれも樹高30m、幹径80cmになる高木で、狭義のアスナロは東北南部以南の本州、四国、九州に分布する。変種のヒノキアスナロは道南から東北地方、佐渡、能登半島に分布し、青森では「ヒバ」、能登では「アテ」とよばれる。静岡県では山梨、長野両県に接する北部の山中にアスナロが分布するが量は多くはない。材は木理通直で肌目は精、やや軽軟で割裂容易、芳香を持ち、加工性は良く、仕上がりは美しい。特に水湿に強い。建築材の骨格部分のみならず装飾的部分、各種器具材、特に桶など水回りに使うものに特用され、土木用材としても重要である。当遺跡出土材は製材された長方形の板片1点である。

⑩メギ属? *Berberis*? メギ科

写真8-10 a～c (プレパラート番号16893)

年輪が不明瞭な散孔材で、薄壁で角が丸みを帯びた多角形の小道管が数個～10数個、接線～放射方向に複合して塊となったものが年輪内にまばらで均一に分布している。放射断面の切片が得られなかつたが接線断面での観察から道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。らせん肥厚は見えない。放射組織は幅が10細胞以上、高さは1mmを超える大きなものが横断面ではほぼ等間隔に多数ある。構成細胞の大きさは様々で異性である。以上の形質からメギ科のメギ属の材である可能性が考えられた。

メギ属は落葉または常緑の低木で、東海地方にはヘビノボラズ*Berberis sieboldii* Miq.、ヒロハヘビノボラズ*B. amurensis* Rupr.、メギ*Berberis thunbergii* DC.などが分布する。ヘビノボラズは高さ1mにもならない小低木で茎の直径は1cmにもならず、出土資料では写真8の10aに見るように少なくとも直径数cm以上の材であることから、これには該当しないといえる。ヒロハヘビノボラズとメギは樹高3mほどになることがあり、幹の直径は数cmになり、出土資料と矛盾しない。ただし、ヒロハヘビノボラズではかなり明瞭な環孔材で、メギも年輪はじめに大きめの道管が配列する傾向にあるのに対し出土資料は写真8の10aに見るように、年輪はじめに大きな道管が存在する傾向は認められない。このことからメギ属ではない可能性も考えられる。

出土資料は「鞘尻」と看做される木製品の一部分である。この資料の道管の複合形態、道管の様々な形質、巨大な放射組織の存在などメギ科の材とよく一致することから、メギ属以外にその可能性を探すと、可能性として別属のヒイラギナンテン*Berberis japonica* (Thunb.) R.Br. が候補になる。ヒイラギナンテンでは年輪はじめに大きめの道管があることはなく、散孔材であり、材構造は本資料とよく一致する。しかし、ヒイラギナンテンは中国南部からヒマラヤの暖温帯に広く分布する常緑小高木で、現在では公園等によく植栽されているが古代以前に日本列島に移入・植栽されたことは考えにくく、本資料がもしヒイラギナンテンの木材製だとすると製品あるいは製品原材としての大陸南部からの移入を考えなければならない。

⑪ネムノキ *Albizzia julibrissin* Durazz. マメ科

写真9-11 a～c (プレパラート番号16841)

丸い大道管が年輪始めに1～5層ほど並び、順次径を減じて晩材部ではやや壁の厚い丸い小道管が単独あるいは数個が主に放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材で、道管の穿孔は单一、木部

柔組織は周囲状及び翼状で、特に晩材部で目立つ。放射組織は2～4細胞幅くらいの同性で、接線断面での形状は紡錘形だが、輪郭はやや不整である。以上の形質からマメ科のネムノキの材と同定した。

ネムノキは東北地方中部以南の全国の山野、沢沿いの陽光地に普通に生育する落葉小高木で、幹径30cm、樹高8mくらいになる。材の成長は早く、軽軟で脆く、保存、耐朽性も低く、各種器具材に使われる程度である。本遺跡出土材は杭と蹴放しか眉庇と思われる建築材が各1点である。

#### ⑫サクラ属 *Cerasus* バラ科

写真16-33 a～c (炭化材 1)

資料は炭化した木材の小片である。資料の片側に樹心があり、資料中に年輪界2つを含むことから2年生(以上)の枝材が炭化したものと思われる。径 $100\mu\text{m}$ 以下で断面が丸～楕円形の小道管が単独から数個、主に放射方向に複合して年輪内に散在し、年輪はじめの道管はやや径が大きく、密度が高い。道管の穿孔は单一、側壁はやや大ぶりの丸い孔紋で交互状、側壁には顕著ならせん肥厚が間隔を開けてほぼ水平に近く明瞭にある。放射組織は1～4細胞幅程度で構成細胞は接線断面では径が小さく楕円の細胞と径が大きく縦長の細胞が混じって粗雑である。以上の形質からバラ科のサクラ属(狭義)の材と同定した。

サクラ属(狭義) *Cerasus*にはヤマザクラ *C. jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H. Ohba (=*Prunus jamasakura* Siebold ex Koidz.)、カスミザクラ *C. leveilleana* (Koechne) H. Ohba、オオシマザクラ *C. speciosa* (Koidz.) H. Ohbaを始め多数の種類があるが、本資料は炭化しているため材形質を詳細に検討出来ないことと、若齢部であるため樹種本来の材形質がまだ十分に表われていないことにより種を絞り込むことは難しい。本遺跡出土材は炭化材1点である。

#### ⑬エノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai ニレ科

写真9-12 a～c (プレパラート番号17028)

出土材は淡黒褐色となることが多く、保存性は低い。材は年輪始めに丸～楕円の大道管が1～3層ほどに並び、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって斜め接線方向に長い塊をつくり、全体として波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は单一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管内壁には微細ならせん肥厚がある。放射組織は3～7細胞幅、時に10細胞幅近い大型の紡錘形で鞘細胞を持ち、異性である。これらの形質からニレ科のエノキ属の材と同定した。

エノキ属には東北地方南部以南の暖帯に広く分布し、特に二次林や屋敷林に多いエノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakaiと、それより冷涼な北海道から九州にかけての温帯に多いエゾエノキ *C. jessoensis* Koidz. があり、両者の材構造での区別は困難であるが、その分布と、普遍性から本遺跡出土材はエノキである可能性が高い。エノキは成長が早く時には幹径2m、樹高30mの大木となり、材は比較的堅硬で柔曲性に富み、割裂困難で、建築材、ラケットなどの器具材、農工具の柄などの用途がある。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

#### ⑭ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

写真9-13 a～c (プレパラート番号16878)

年輪はじめに丸い大道管がほぼ1層に並び、孔圈外では薄壁多角形の小道管が多数様々な方向に複合して全体として接線方向に伸びる波状の紋となる環孔材で、道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に配列し、小道管内壁には堅調ならせん肥厚がある。放射組織は8細胞幅くらいになり背が高く大型の紡錘形で上下辺にしばしば大型の結晶細胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県～九州の鹿児島県を除く本州、四国、九州の平地～山地帯に普通に生育する落葉広葉樹で、幹径2m、樹高30mを超える大木となる。材は肌目やや粗で堅硬、強靭、弾力があり、加工性良く、

時に美しい杰が出る。大材が得られるので大型建築物の構造材、彫刻材、和太鼓の胴、漆器木地等の特用の他、家具、器具などあらゆる用途がある。本遺跡出土材は用途不明の加工材1点のみである。

**⑯イタビカズラ類** *Ficus sarmentosa* Buch.-Ham. ex Sm. subsp. *nipponica* (Franch. Et Sav.) H. Ohashi or *Ficus pumila* L. クワ科

写真10-14 a～c (プレパラート番号17007)

年輪界が全く目立たず、大きめの道管が密にある散孔材である。道管は放射方向に長軸を持つ楕円形で、単独あるいは放射方向に2～4個ほどが複合し、全体として細長い楕円形となる。道管相互の壁はやや厚くなる。道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は交互状で密にあり、らせん肥厚はない。幅広い帯をなす帶状の木部柔組織と纖維組織塊が交互にある。木部柔組織は層階状となる。放射組織は同性で1～6細胞幅程度で背は非常に高い。以上の形質からクワ科イチジク属のうち、つる性のイタビカズラあるいはオオイタビ（これをイタビカズラ類と仮称）の材と同定した。

静岡県地方にあるイチジク属のつる性の樹木はイタビカズラ *Ficus sarmentosa* Buch.-Ham. ex Sm. subsp. *nipponica* (Franch. Et Sav.) H. Ohashi、オオイタビ *Ficus pumila* L.、ヒメイタビ *Ficus thunbergii* Maxim. などがある。このうちヒメイタビは茎が細く、直径が数mmにしか成長せず、二次木部の蓄積が非常に少ないとから候補から外れる。イタビカズラとオオイタビは茎が樹上あるいは岩上を登攀して繁茂し、茎は時に直径10cmに達する。しかし茎は屈曲しながら登攀するため、ある程度以上の長さの通直な幹を作ることはないと木材としての用途は知られていない。また、つる性であるので材はやわらかく脆弱である。本遺跡出土材は用途不明の木材W341が1点である。これは丸木を両端切断し、中央部分を小鼓状に削りを入れたもので両端側には樹皮が残っている。木錐、あるいは編み具のおもりの可能性が考えられる。

**⑰クリ** *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

写真10-15 a～c (プレパラート番号16883)

年輪のはじめに円～卵形の大道管が1～3層に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の 小道管が周囲状仮道管や木部柔組織と共に集合して火炎状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は单一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び单細胞幅の独立帶状で、後者は晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管～放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径1m以上、樹高30mほどとなる。材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得られるので大型建造物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材（くれこば）などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。本遺跡出土材は杭材6点である。

**⑱コジイ** *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科

写真10-16 a～c (プレパラート番号16882)

年輪の始めに丸い中～やや大型の道管が間隔を置いて1～3層に並び、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の 小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪はやや明瞭である。道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び单接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の2型がある。集合放射組織は時に放射組織細胞の割合が高くなり複合状となるがアカガシ亜属のように幅広にはならない。道管～放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に柵状に並ぶ。これらの形質からブナ科シノキ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合

放射組織が存在することで区別される。

コジイ（別名ツブラジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、コジイは内陸部に多い。樹高20m、幹径1mの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材（柄物など）、下駄、薪炭材などに用いる。本遺跡出土材は鎌の柄1点と用途不明の木材4点である。

#### ⑯スダジイ *Castanopsis Sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科

写真11-17 a～c (プレパラート番号17051)

写真16-34 a～b (炭化材2)

横断面での道管配列はコジイと同じで、年輪の始めに大～中型の丸い道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪はやや明瞭である。木部柔組織は接線状で晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性である。コジイと異なり、集合状～複合状の放射組織を持たないことからシイノキ属のスダジイと同定した。また、炭化材2は横断面で年輪はじめに間隔を置いて大きい道管があり、晩材部では小道管が火炎状に配列し、集合放射組織が観察されないことからこれもスダジイと同定した。

スダジイは東北南部～南西諸島までの照葉樹林帯に広く分布し、特に海岸部に多い。樹高20m、幹径1m以上となる常緑広葉樹で、特に海岸部では幹は高くならず横枝が発達する。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。用途等はコジイと区別されない。本遺跡出土材は杭が4点、用途不明の木材などが8点で、うち3点は炭化している。

#### ⑰イチイガシ *Quercus gilva* Blume ブナ科

写真11-18 a～c (プレパラート番号16859)

丸～楕円形の単独道管が緩く集まって放射方向に配列する放射孔材で、大きな道管は接線径が $220\text{ }\mu\text{m}$ を超える。道管の穿孔は単一、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大きな複合放射組織がある。これらの形質からブナ科コナラ属アカガシ亜属のイチイガシの材と同定した。

アカガシ亜属の材は道管が放射方向に配列する形質で他の樹木から区別されるが、アカガシ亜属にはアカガシ*Quercus acuta* Thunb.、シラカシ*Q. myrsinaefolia* Blume、ウラジロガシ*Q. salicina* Blumeなど多数の種があり、材構造が互いに似ていて個々の種を区別するのは困難である。その上でイチイガシは道管径が他の種に比べて一回り大きく接線径が $220\text{ }\mu\text{m}$ を超えることで区別できる。イチイガシは関東地方南部以西の太平洋側及び瀬戸内地方、四国、九州に分布する常緑高木で、幹径1m、樹高30m以上になる。有用な木材が得られるので古くから植栽されており、現在の分布域は元々の天然分布域を越えて拡がっていると考えられている。材は堅硬緻密で、木理通直、割裂自在で弾性強く強靭である。床柱、硬い材質を活かした各種器具、柄物、舟の櫓、櫂、車輪、歯車など広い用途がある。イチイガシは関東から九州の弥生～古墳時代の木製農具に特に多用されたが、本遺跡出土材は農具と思われる木材1点である。

#### ⑱コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

写真11-19 a～c (プレパラート番号16877)

接線径が $120\sim180\text{ }\mu\text{m}$ 程度の中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材で、木部柔組織は独立帶状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管～放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属（イチイガシを除く）の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、アカガシ、シラカシ、イチイガシなど常緑の樹種からなる亜属で、東北地方以南の全国の暖帯に広く分布し、照葉樹林の主要素である。多数の種があり、材構造による個々の種の識別は困難である。いずれの材も硬く緻密で強靭で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輌材、柄物など広い用途がある。本遺跡出土材は平鍬1点と用途不明の木材3点である。平鍬はイチイガシである可能性もあるが、道管径からはイチイガシとは言い切れないかった。

**㉑ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray ブナ科**

写真12-20 a ~ c (プレパラート番号16876)

直径が100~150 μm程度の中（～小）型の丸い道管が緩く放射方向に集まって配列する放射孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は单一、道管～放射組織間壁孔は柵状になる。木部柔組織は接線状で1~数細胞層である。放射組織は単列同性と集合～複合状で、後者はかなり大きい。以上の形質からブナ科コナラ属コナラ亜属の常緑のウバメガシの材であることが分かる。アカガシ亜属からは道管径が小さいことと集合状の放射組織をしばしば持つことで区別される。

ウバメガシは関東地方南部以西、四国、九州の沿岸部に生える常緑亜高木～低木で、幹の根元径30cm、樹高2~8 m程度になる。材は極めて硬くて重く、割裂、折損困難である。各種柄類、独楽などの細工物、櫓の柄やヘソ、車軸などに使われるが、その極めて硬い材質から備長炭としても重用される。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

**㉒コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科**

写真12-21 a ~ c (プレパラート番号17055)

年輪の始めに丸い大道管が1~数層配列する環孔材で、孔圏外では丸い単独の中～小道管が緩く放射方向に配列する。道管の穿孔は单一、らせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で孔圏外でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織内には大きな結晶細胞が混じる。これらの形質からコナラ亜属クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には東北中部以南から九州までの全国に広く分布するクヌギ*Quercus acutissima* Carr. と関東北陸以西から九州北部まで分布するアベマキ*Q. variabilis* Blumeがあり、これら両者の材構造は互いによく似ていて識別は困難である。両者とも暖帶性の落葉高木で、幹径60cm、樹高20m以上になる。静岡県地方ではクヌギは普通にあるが、アベマキはややまれである。いずれも材はやや堅硬、木理は粗く、割裂自在で、ミカン割り材をつくりやすい。各種柄類、車軸、櫓の柄などの用途があるが、椎茸のほど木としてよく使われる。本遺跡出土材は杭かと思われるもの1点と用途不明の木材3点である。

**㉓コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科**

写真12-22 a ~ c (プレパラート番号16838)

年輪の始めに丸い大道管が1~数層並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状～放射状となる環孔材で、道管の穿孔は单一、木部柔組織は2~3細胞幅の独立帶状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状があり、道管～放射組織間の壁孔はカシ類と異なり、いびつな橢円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。コナラ節の材は晩材部の小道管が火炎状に配列することでクリ、シイノキ属に類似し、更に複合放射組織を持つことでコジイと非常に似てくる。クリとの識別は、横断面、接線断面の切片を大きくつくることで複合放射組織の存在を確認する一方、スダジイ、コジイとの識別は年輪はじめの大道管が隙間なく配列することに注意を払って行う。

コナラ節には全国の山野に普通で特に二次林に多いコナラ*Quercus serrata* Thunb.、青森県から九州の温帯から温帯に分布するナラガシワ*Quercus aliena* Blume、全国の温帯に多いミズナラ *Quercus*

*mongolica* Fish. var. *grosseserata* Rhed.、暖帯、温帯から亜寒帯にあるカシワ *Quercus dentata* Thunb.などがあり、静岡県地方ではコナラが普通にあり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希にあるがナラガシワはあまり見かけない。コナラは幹径60cm、樹高20mくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、特に柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。ミズナラは幹径1m、樹高20mを超える大木となり、材質もコナラより優れていて、特に家具材に重用される。本遺跡出土材は建築材（柱）1点と用途不明の木材2点である。

㉔ タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. サクラソウ科

写真13-23 a～c (プレパラート番号16873)

薄壁でやや丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは2～4個が放射方向に複合したものが量少なく均一に散在する散孔材で、道管径は年輪内でほとんど変わらず、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は微少孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、繊維細胞は隔壁を持つ。放射組織は単列と多列があり、前者は極めて背の高い直立細胞のみからなる。多列放射組織は3～8細胞幅程度で極めて背が高い。構成細胞は大振りで不整形、時に結晶を持つ。以上の形質からサクラソウ科（旧ヤブコウジ科）のタイミンタチバナの材と同定した。

タイミンタチバナは関東地方南部以南西の照葉樹林によく生える常緑小高木で、幹径20cm、樹高8mくらいになる。材はやや堅硬で耐久力強く保存性も高いが反りやねじれが出やすい。建築の内装材、家具、器具（箱物など）などの用途がある。本遺跡出土材は杭1点と両端が折損した当年枝の樹皮の剥がれた丸棒1点である。

㉕ ミズキ *Swida controversa* (Hemsl.) Sojak ミズキ科

写真13-24 a～c (プレパラート番号16842)

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪はあまり目立たない。木部柔組織は散在状で黒褐色の物質を持つことから横断面で見つけやすい。道管の穿孔は横棒の多い階段状、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。放射組織は1～5細胞幅くらいの典型的な異性で、単列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキ科のミズキの材と同定した。

ミズキは北海道から九州の暖帯～亜寒帯の山地、丘陵、平野に広く分布する落葉高木で、成長が早く、樹高15m、幹径40cm以上になる。材はやや軽軟だが肌目は緻密、切削加工が容易で材の白さもあって各種器具材、特にこけしなどの彫刻材の特用がある。本遺跡出土材は農具の部分と思われるもの2点である。

㉖ カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

写真13-25 a～c (プレパラート番号17053)

中型～小形の楕円形の道管が単独あるいは時に2～数個が主に放射方向に複合して密度低く均一に散在する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管壁はやや厚く、穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で交互状で密にある。木部柔組織は周囲状と接線状で後者は幅が1細胞で量が多い。放射組織は1～2列の異性で背は低く、層階状に配列する。これらの形質からカキノキ科のカキノキ属の材と同定した。

静岡県地方に生えるカキノキ属には、伊豆半島以南の本州～琉球の暖地に生えるトキワガキ（トキワマメガキ）*Diospyros morrisiana* Hance、北海道を除く各地に植えられる中国原産のカキノキ*D. kaki* Thunb. とその変種で山野に自生するというヤマガキ*D. kaki* Thunb. var. *sylvestris* Makino、古くに柿渋を採るため中国から移入されたと言われるマメガキ*D. lotus* L.、関東地方以西～九州琉球に分布するリュウキュウマメガキ*D. japonica* Siebold et Zucc. がある。いずれも材構造はよく似ていて個々

の種を区別することは困難である。カキノキ属の心材はいずれも黒色を帯び、黒檀同様となる。材は堅硬緻密で工作容易、床柱などの建築材、簾筈、机、書棚など和洋家具、調度品類、箱物、細工物、彫刻、ゴルフのウッドの頭など幅広い用途に使われる。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

**㉗ヤブツバキ** *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

写真14-26 a～c (プレパラート番号17042)

微細な薄壁多角形の道管がほとんど単独で均一に分布する散孔材で、年輪始めに一回り大きい道管が並び年輪界に向かってゆっくりと径を減じ、年輪界付近では纖維細胞等とあまり径が違わないくらいになる。道管の穿孔は横棒が10本くらいの階段状で、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状、放射組織は2～4細胞幅で異性、背は低く、直立細胞がときどき大きく膨らんで中に大きな結晶を持つ。以上の形質からツバキ科のヤブツバキの材と同定した。

ヤブツバキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、東北地方以南の沿岸部から、関東以西では内陸部まで広く分布し、幹径30cm、樹高10mくらいになる。材質は堅硬強韌で粘りがあり、割裂、加工は困難だが、柄物、滑り台、滑車、轆轤部品など強度を必要とする部分によく用いられる。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

**㉘サカキ** *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科

写真14-27 a～c (プレパラート番号17080)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、道管径は年輪内でほとんど変化しない。道管の穿孔は横棒の多い(40本ほど)階段状である。木部柔組織は散在状で均一に分布する。放射組織はほぼ單列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州琉球に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径20cm、樹高8mくらいになる。材は堅硬で肌目はやや粗く、強韌で割裂困難であり、萌芽枝がまっすぐによく伸びることから柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫛等に用いられる。本遺跡出土材は建築材(柱)が1点、杭と思われる材が1点、そのほか用途不明の木材が7点である。

**㉙ヒサカキ** *Eurya japonica* Thunb. モッコク科

写真14-28 a～c (プレパラート番号16862)

薄壁多角形の微細な道管が単独あるいは2個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の数が多い(40本ほど)階段状。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は1～4細胞幅で異性、単列部は直立細胞と方形細胞から、多列部は平伏細胞で構成される。これらの形質からツバキ科のヒサカキの材と同定した。

ヒサカキ東北地方以南～九州琉球の暖帯に広く分布する常緑小高木で、幹径15cm、樹高8m程度になる。材は堅硬緻密で粘りがあり割裂折損困難でサカキ同様の用途がある。本遺跡出土材は杭1点である。

**㉚イボタノキ属** *Ligustrum* モクセイ科

写真15-29 a～c (プレパラート番号16855)

年輪のはじめに薄壁で丸い小道管が断続的に1列にならび、その外側ではそれより一回り以上径の小さい丸い道管が単独で均一に分布する散孔材で、年輪界に向けて直径がわずかに小さくなる。木部柔組織は散在状で目立たない。道管の穿孔は单一。放射組織は異性で2細胞幅、背は低く、道管との壁孔はやや小型の橢円形でやや疎ら。これらの形質からモクセイ科のイボタノキ属の材と同定した。

イボタノキ属には本州から琉球まで分布する常緑小高木のネズミモチ *Ligustrum japonicum* Thunb.、全国の丘陵、原野に普通に分布する落葉小高木のイボタノキ *L. obtusifolium* Siebold et Zucc.を始め多くの種があるが材構造での識別は困難である。材が小さいためその用途はほとんど知られていない

が材質は堅く緻密で粘りがある。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

**③ウコギ属** *Eleutherococcus* ウコギ科

写真15-30 a～c (プレパラート番号17073)

角が丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が多数複合して接線～斜上方向に連なった波状の紋となる散孔材で、道管径は年輪はじめで大きく、そこから年輪界に向かって緩やかに小さくなつてゆく。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋でやや大ぶり、らせん肥厚はない。木部柔組織は目立たない。放射組織は2～8細胞幅で背が非常に高く大型で、大部分は平伏細胞からなるが、上下辺の細胞は方形～直立細胞となる。以上の形質からウコギ属の材と同定した。

静岡県地方に自生するウコギ属には、本州（岩手県以南）の低地の山野に自生するヤマウコギ*Eleutherococcus spinosus* (L.f.) S.Y.Hu、関東南部～紀伊半島の山野に自生するオカウコギ*E. spinosus* (L.f.) S.Y.Hu var. *japonicus* (Franch. et Sav.) H.Ohba、関東西部～紀伊半島の山地に自生するミヤマウコギ*E. trichodon* (Franch. et Sav.) H.Ohashi、北海道～九州の山地に自生するケヤマウコギ（オニウコギ）*E. divaricatus* (Siebold et Zucc.) S.Y.Huなどがあるが、いずれの種も幹は10cm程度以下、樹高2～5mほどになる落葉低木で、材構造も互いによく似ており、種を識別することは出来ない。本遺跡出土材は用途不明の木材2点である。

**④ニワトコ** *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* (Miq.) Hara レンプクソウ科

写真15-31 a～c (プレパラート番号17058)

年輪はじめに薄壁で橢円形のやや径の大きい小道管がほぼ1層に並び、年輪の前半部ではほぼ橢円の小道管が単独もしくは数個複合しておよそ均一に配列し、年輪の後半部では徐々に径を減じた道管が斜上方向に2～数個複合したものが全体として斜上方向に配列して波状の紋となる散孔材。年輪の終わりには、多数の小道管が複合して帶状に配列している。道管の穿孔は単一。側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状に配列する。放射組織は異性で1～5細胞幅程度、鞘細胞を持つ。以上の形質により、レンプクソウ科（旧スイカズラ科）のニワトコの材と同定した。

ニワトコは北海道～九州奄美大島の温帶～暖帶の山野に広く分布する落葉低木～小高木で、特に人里近くに多い。幹根元径20cm、樹高8mになるがしばしば根元から株立ちとなる。材は軽軟緻密で、小細工もの、寄せ木などに用いられる。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

**⑤ガマズミ属** *Viburnum* レンプクソウ科

写真16-32 a～c (プレパラート番号17046)

薄壁で断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪のはじめにやや大きめの道管が断続的に1層に並ぶ傾向がある。道管の穿孔は横棒が多数(40本以上)の階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は1～3細胞幅ほどで直立細胞からなる背の高い単列の翼部と平伏細胞からなる多列部からなる。これらの形質からレンプクソウ科（旧スイカズラ科）のガマズミ属の材と同定した。

ガマズミ属には全国の平地の山野に普通のガマズミ*Viburnum dilatatum* Thunb. を始め、多数の種がある。多くは落葉低木だが、常緑のサンゴジュ*V. odoratissimum* Ker-Gawler var. *awabuki* (K. Koch) Zabelや落葉小高木となるゴマギ*V. sieboldii* Miq. などがあり、それらの材構造は互いによく似ていて種の識別は困難である。ガマズミは落葉低木で地際からまっすぐで徒長枝を出し、長さ1mほどの間に横枝が出ず、5年ほどで直径3cmくらいになり、まっすぐな棒が得られる。材は非常に堅くて強靭で粘りがあるので、玄翁の柄や輪かんじきの環に用いたりする。本遺跡出土材は用途不明の木材1点である。

## 2 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材等の樹種組成

中山遺跡・高橋遺跡から出土した弥生時代～古墳時代の木製品・木材等165点（炭化材2点を加えてある）のうち同定不可であった1点を除いた164点から33の樹種が同定された。針葉樹は9樹種が認められ、全体の62.2%と約2/3を占める。もっとも多かったのはイヌマキ属で36点、ついでアカマツ+マツ属複維管束亜属が25点、スギが18点、ヒノキが12点、サワラが7点などである。これらの針葉樹は静岡県地方の弥生時代～中世にかけての様々な遺跡でよく利用された針葉樹であり、それらの結果と整合する。残り4点はツガ属が2点、アスナロが1点、そしてヒメバラモミが1点である。ツガは静岡県地方では標高500mほどの山地に、コメツガは1500mを超える冷温帶～亜高山帯に分布しており、出土材が静岡県内で調達されたものとしたら一定程度の遠距離の移送が必要になる。また、アスナロも冷温帶に分布するものであり、ヒメバラモミも同様である。ヒメバラモミは冷温帶の樹種であるとともに現在では生育量が非常に少ない絶滅危惧植物の一つである。現在の分布地も山梨、長野両県に限られることからあるいは特別な意味を持ってこの材が当遺跡にもたらされた可能性も考えられなくはない。

広葉樹は常緑広葉樹が10種35点（21.3%）、落葉広葉樹は10種24点（18.2%）、そのどちらか不明なものは3種3点（1.8%）であった。常緑広葉樹で最も多かったのはスダジイ（10点）で、コジイが5点あり、シイノキ属は合計で15点あり、半分近くを占める。次いで多かったのはサカキ（9点）で、それに同じツバキ科のヒサカキ、ヤブツバキを加えると11点になる。これらは常緑小高木で長さ1mを超える通直な枝のない丸木が得られ、材質が強靭で粘り強いので柄物に適している。そのような材質を活した用材であることが考えられる。さらに照葉樹林の主要構成要素として常緑のカシ類があるが、アカガシ亜属が3点、それにイチイガシ、ウバメガシは各1点であった。イチイガシは農具と考えられ、弥生時代以降の九州～関東地方にかけての用材と一致し、静岡県でも普遍的といえる。常緑樹の中でちょっと奇異なのはイタビカズラ類である。イチジク属の蔓植物で樹木の幹や岩を這い上る。幹は肥大成長することから「木材」の利用は可能だが蔓植物の性質として材は非常に柔らかい。こうした材を切り取つて木錘としての利用を図ったことが考えられ、これは用材を選ばない、たとえば蓆編み具のおもりとかであったのではないかと推測できる。なお、タイミンタチバナが2点出土したが、これも決して材質を選ばないような用材に手近に生えていたこの木を使ったのではないかと推定される。

落葉広葉樹は10種24点が出土したが最も多かったのはクリで6点あり、クヌギ節が4点、コナラ節が3点、ネムノキ、ミズキ、ウコギ属、サクラ属が2点で、二次林で普遍的な樹種が多かった。他にエノキ属、ケヤキも二次林に多い要素であり、自然林である常緑広葉樹林を伐開したところではこれらの二次林要素の落葉広葉樹が繁茂し、それらを利用したものと考えられる。そのほかカキノキ属、ニワトコが各1点あり、いずれもこの時代の樹木として矛盾はない。

常緑、落葉の判別がつかなかったものには3種類あるが、イボタノキ属（1点）、ガマズミ属（1点）は暖温帶の平野部ではごく普通の植物であり、奇異なものではない。問題は「鞘尻」とみなされる木製品の「メギ属？」である。これについては記載の項で検討したとおりである。

以上、総括すると、本遺跡ではイヌマキ属を中心としたヒノキ科（スギ、ヒノキなど）とマツ（アカマツ+マツ属複維管束亜属）の用材が中心で、植生を反映したものとしてシイノキ属を中心とした照葉樹林が遺跡周辺に発達しており、それらの自然林を伐開して出来た落葉広葉樹の二次林が遺跡周辺にあり、それらの木材を利用したことが見て取れた。しかし、静岡県地方の弥生時代～古墳時代前半ではスギが圧倒的に利用されているのとは少し様相を異にし、スギ一辺倒から変化した用材がこの遺跡では見られた。また、遺跡周辺にはないアスナロ、ヒメバラモミなど、自生地が遠隔地である樹種の木材が出土しており、山間部からの木材の供給があったこともわかった。

第9表 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材の樹種

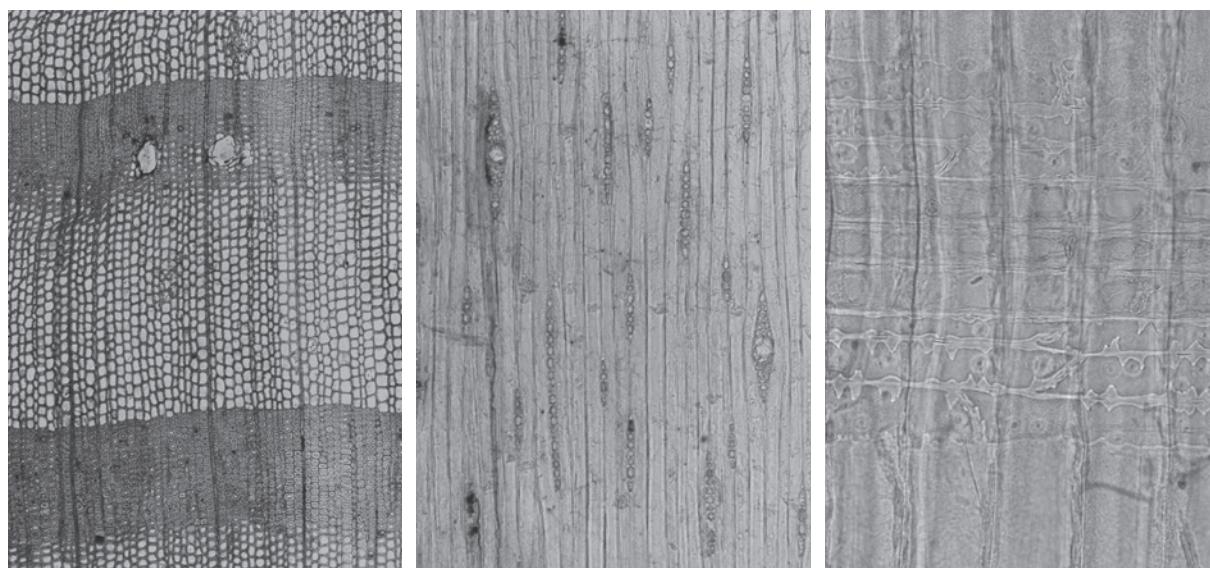
プレバラートNo.	取上No.	挿図No.	地区名	遺構名	器種名	樹種
16829	549	386	2-1区N	SD8	用途不明	スギ
16830	144	576	1-1区N		建築部材 柱	イヌマキ属
16831	240	360		SD8	建築部材 桁	ツガ属
16832	280	385	1-1区S	SD8	用途不明	イヌマキ属
16833	285	365	1-1区S	SD8	建築部材 柱	イヌマキ属
16834	286	361	1-1区S		建築部材 扉	イヌマキ属
16835	287	369	1-1区S	SD8	建築部材 柱	イヌマキ属
16836	288	364	1-1区S		建築部材 柱	イヌマキ属
16837	294	392	1-1区S	SD8	用途不明	ツガ属
16838	295	366	1-1区S	SD8	建築部材 柱	コナラ属コナラ節
16839	300	373	1-1区S	SD8	建築部材 梁・桁	イヌマキ属
16840	299	367	1-1区S	SD8	建築材 柱	サカキ
16841	301	362	1-1区S	SD8	建築材 蹴放し	ネムノキ
16842	289①	391	1-1区S	SD8	用途不明	ミズキ
16843	308	363	1-1区S	SD8	建築部材 壁	サワラ
16844	307	381	1-1区S	SD8	加工材	イヌマキ属
16845	309	357	1-1区S	SD8	容器 槽	スギ
16846	310	379	1-1区S	SD8	加工材	コナラ属クヌギ節
16847	325	368	1-1区S	SD8	建築部材 柱	イヌマキ属
16848	326	393	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
16849	333	405	1-1区S	SD8	加工材	スギ
16850	338	394	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
16851	339	390	1-1区S	SD8	用途不明	イヌマキ属
16852	342	353	1-1区S	SD8	農耕土木具 鎌柄	コジイ
16853	344	380	1-1区S	SD8	加工材	ヒノキ
16854	348	400・401	1-1区S	SD8	加工材	スギ
16855	343	389	1-1区S	SD8	用途不明	イボタノキ属
16856	350	402	1-1区S	SD8	加工材	サワラ
16857	289②	396	1-1区S	SD8	農具?	ミズキ
16858	354	399	1-1区S	SD8	用途不明(加工)	サワラ
16859	351	387	1-1区S	SD8	加工材	イチイガシ
16860	362	398	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
16861	359	404	1-1区S	SD8	加工材	ヒノキ
16862	416	384	2-1区N	SD8	加工材	ヒサカキ
16863	418	359	2-1区N	SD8	建築部材 壁か	サワラ
16864	420	388	2-1区N	SD8	用途不明	ヒノキ
16865	474	356	2-1区N	SD8	糸巻具 台	コナラ属クヌギ節
16866	476	384	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
16867	494	407	2-1区N	SD8	加工材	イヌマキ属
16868	473	355	2-1区N	SD8	農耕土木具 曲柄平鋤	アカガシ亜属
16869	475	371	2-1区N	SD8	建築部材 垂木	イヌマキ属
16870	477	370	2-1区N	SD8	建築部材 柱	イヌマキ属
16871	478	377	2-1区N	SD8	土木材 杭	イヌマキ属
16872	481	375	2-1区N	SD8	建築部材 柱	コナラ属アカガシ亜属
16873	482	376	2-1区N	SD8	土木材 杭	タイミンタチバナ
16874	484	374	2-1区N	SD8	建築部材 柱	イヌマキ属
16875	489	354	2-1区N	SD8	農耕土木具 壓杵	スダジイ
16876	490	406	2-1区N	SD8	加工材	ウバメガシ
16877	492	382	2-1区N	SD8	加工材	コナラ属アカガシ亜属
16878	501-1	403	2-1区N	SD8	加工材	ケヤキ
16879	509	397	2-1区N	SD8	用途不明	スギ
16880	534	384	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
16881	539	372	2-1区N	SD8	建築部材 垂木	イヌマキ属
16882	541	395	2-1区N	SD8	用途不明	コジイ
16883	614	496	3区N	杭列1	土木材 杭	クリ
16884	545	378	2-1区N	SD8	加工材	ヒノキ
16885	618	495	3区N	杭列1	土木材 杭	クリ
16886	626	503	3区N	杭列2	土木材 杭	ネムノキ
16887	634	500	3区N	杭列2	土木材 杭	アカマツ
16888	619	497	3区N	杭列1	土木材 杭	マツ属複維管束亜属
16889	625	501	3区N	杭列2	土木材 杭	マツ属複維管束亜属
16890	628	499	3区N	杭列2	土木材 杭	マツ属複維管束亜属
16891	627	502	3区N	杭列2	土木材 杭	マツ属複維管束亜属
16892	629	498	3区N	杭列2	土木材 杭	マツ属複維管束亜属

第9表 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材の樹種

プレバラーントNo.	取上No.	挿図No.	地区名	遺構名	器種名	樹種
16893	311	358	1-1区S	SD8	刀 鞘尻	メギ属?
16995	631	-	3区N	杭列2	杭	マツ属複維管束亜属
16996	345	-	1-1区S	7層	木製品	スギ
16997	347	-	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
16998	593	-	3区N	包含層	杭	マツ属複維管束亜属
16999	335	-	1-1区S	SD8	用途不明	イヌマキ属
17000	609	-	3区N	杭列1	杭	アカマツ
17001	293	-	1-1区S	SD8	用途不明	ヒノキ
17002	617	-	3区N	杭列1	杭	マツ属複維管束亜属
17003	497	-	2-1区N	SD8	杭?	サカキ
17004	278	-	1-1区S	SD8	用途不明	イヌマキ属
17005	632	-	3区N	杭列2	杭	マツ属複維管束亜属
17006	501-2	-	2-1区N	SD8	用途不明	ヒノキ
17007	341	-	1-1区S	SD8	用途不明	イタビカズラ
17008	615	-	3区N	杭列1	杭	マツ属複維管束亜属
17009	624	-	3区N	杭列2	杭	マツ属複維管束亜属
17010	612	-	3区N	杭列1	杭	マツ属複維管束亜属
17011	543	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17012	363	-	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
17013	329	-	1-1区S	SD8	用途不明	サワラ
17014	496	-	2-1区N	SD8	用途不明 (加工木)	スギ
17015	542	-	2-1区N	SD8	用途不明	サカキ
17016	444	-	2-1区N	SD8	自然木?	ヒノキ
17017	499	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17018	361	-	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
17019	355	-	1-1区S	SD8	用途不明 (加工)	サワラ
17020	W-5	-	1-2区		木製品	スギ
17021	428	-	2-1区N	SD8	杭	アカマツ
17022	352	-	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
17023	360	-	1-1区S	SD8	用途不明	ヒノキ
17024	623	-	3区N	杭列1	杭	マツ属複維管束亜属
17025	500	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17026	630	-	3区N	杭列2	杭	マツ属複維管束亜属
17027	535	-	2-1区N	SD8	用途不明	サカキ
17028	327	-	1-1区S	SD8	用途不明	エノキ属
17029	383	-	2-1区N	SD8		スダジイ
17030	330	-	1-1区S	SD8	用途不明	イヌマキ属
17031	328	-	1-1区S	SD8	用途不明	アカマツ
17032	610	-	3区N	杭列1	杭	マツ属複維管束亜属
17033	324	-	1-1区S	SD8	用途不明	スダジイ
17034	357	-	1-1区S	SD8	用途不明	コナラ属コナラ節
17035	491	-	2-1区N	SD8	用途不明	コジイ
17036	622	-	3区N	杭列1	杭	マツ属複維管束亜属
17037	622	-	3区N	杭列1	杭	クリ
17038	364	-	1-1区S	SD8	用途不明	イヌマキ属
17039	353	-	1-1区S	SD8	用途不明 (炭化)	アカマツ
17040	365	-	1-1区S	SD8	用途不明	スギ
17041	544	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17042	421	-	2-1区N	SD8	用途不明	ヤブツバキ
17043	334	-	1-1区S	SD8	用途不明	コジイ
17044	485	-	2-1区N	SD8	用途不明	コナラ属コナラ節
17045	419	-	2-1区N	SD8	用途不明	スダジイ
17046	297	-	1-1区S	SD8	用途不明	ガマズミ属
17047	W-4	-	1-2区		木製品	アカマツ
17048	W-7	-	1-2区		木製品	アスナロ
17049	493	-	2-1区N	SD8	杭か	コナラ属クヌギ節
17050	633	-	3区N	杭列2	杭	クリ
17051	620	-	3区N	杭列1	杭	スダジイ
17052	547	-	2-1区N	SD8	用途不明 (丸木)	イヌマキ属
17053	336	-	1-1区S	SD8	用途不明	カキ属
17054	536	-	2-1区N	SD8	用途不明	コジイ
17055	483	-	2-1区N	SD8	用途不明	コナラ属クヌギ節
17056	332	-	1-1区S	SD8	用途不明	サワラ
17057	548	-	2-1区N	SD8	用途不明	アカマツ

第9表 中山遺跡・高橋遺跡出土木製品・木材の樹種

プレバラートNo.	取上No.	挿図No.	地区名	遺構名	器種名	樹種
17058	429	-	2-1区N	SD8	用途不明	ニワトコ
17059	504	-	2-1区N		用途不明	イヌマキ属
17060	621	-	3区N	杭列1	杭	スダジイ
17061	488	-	2-1区N	SD8	用途不明	サカキ
17062	616	-	3区N	杭列1	杭	クリ
17063	538	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17064	546	-	2-1区N	SD8	用途不明	スダジイ
17065	446	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17066	W-8	-	1-2区		木製品	ヒメバラモミ
17067	569	-				サカキ
17068	537	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17069	52	-	1-1区N	SF1	用途不明	イヌマキ属
17070	611	-	3区N	杭列1	杭	クリ
17071	487	-	2-1区N	SD8	用途不明	サカキ
17072	503	-	2-1区N	SD8	用途不明	サカキ
17073	540	-	2-1区N	SD8	用途不明	ウコギ属
17074	445	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17075	W-1	-	1-2区	SP1	柱根	同定不可
17076	331	-	1-1区S	SD8	杭?	ヒノキ
17077	W-6	-	1-2区		木製品	タイミンタチバナ
17078	479	-	2-1区N	SD8	用途不明	イヌマキ属
17079	337	-	1-1区S	SD8	用途不明	ウコギ属
17080	486	-	2-1区N	SD8	用途不明	サカキ
17081	346	-	1-1区S	SD8	用途不明	ヒノキ
17082	498	-	2-1区N	SD8b	用途不明(炭化)	イヌマキ属
17083	W-2	-	1-2区	土器集中箇所②	木製品	イヌマキ属
17084	613	-	3区N	杭列1	杭	スダジイ
17085	296	-	1-1区S	SD8	用途不明	コナラ属アカガシ亜属
17086	480	-	2-1区N	SD8	用途不明	スダジイ
17087	349	-			木製品	ヒノキ
17088	358	-	1-1区S		木製品	ヒノキ
17089	356	-	1-1区S	SD8	用途不明(炭化)	スギ
17090	W-10	-	3区		木製品	マツ属複維管束亜属
17091	W-11	-	3区		木製品	マツ属複維管束亜属
17092	W-13	-	3区		木製品	スギ
炭化材1	W-3	-	1-2区		木製品(炭化)	サクラ属
炭化材2	340	-	1-1区S	SD8	用途不明(炭化)	スダジイ



1a. アカマツ 17047 木口 × 30

1b. アカマツ 17047 板目 × 60

1c. アカマツ 17047 柱目 × 240

写真5 出土木材顕微鏡写真1

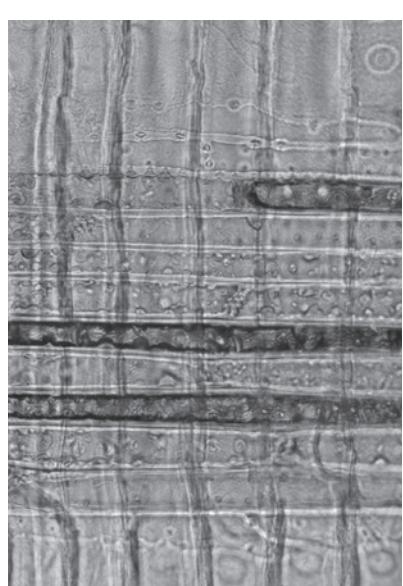
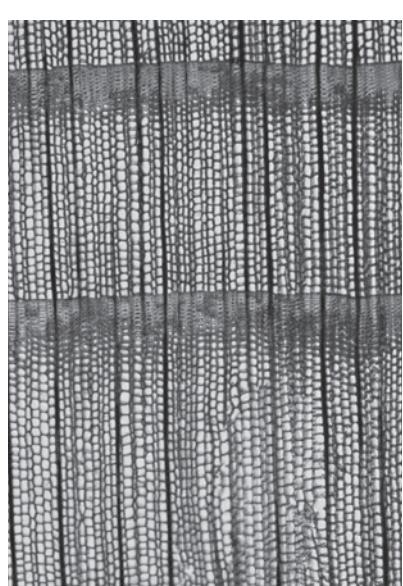
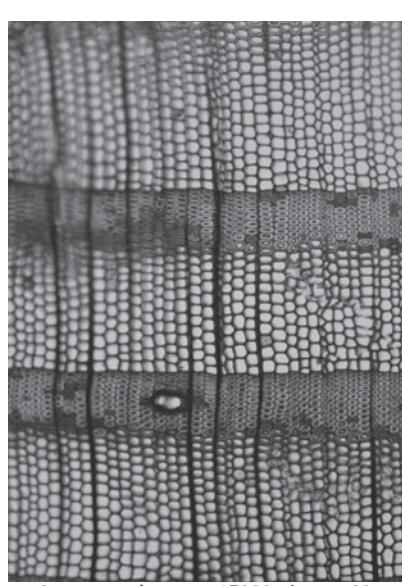
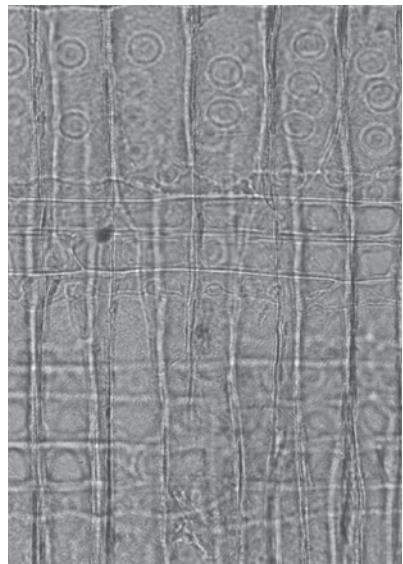
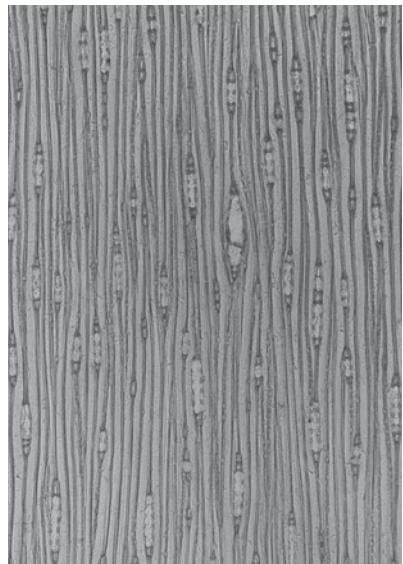
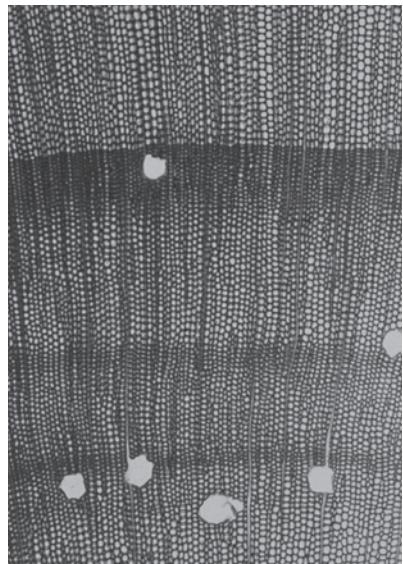
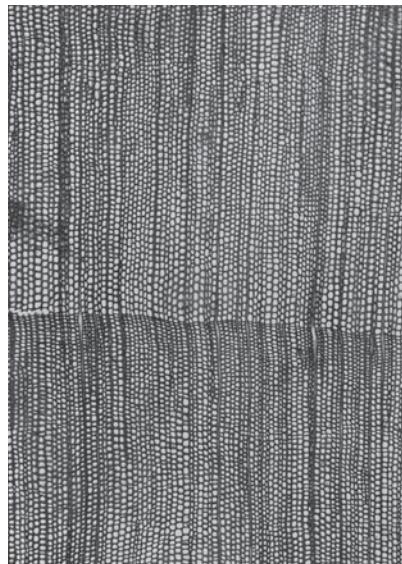


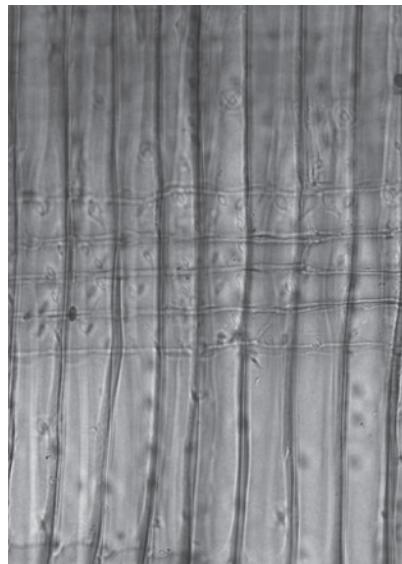
写真6 出土木材顕微鏡写真2



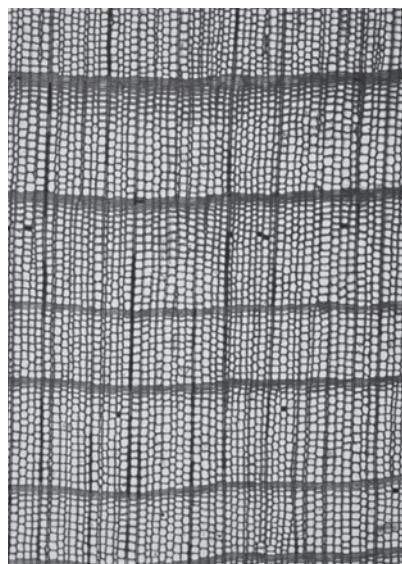
5a. イスマキ属 16844 木口×30



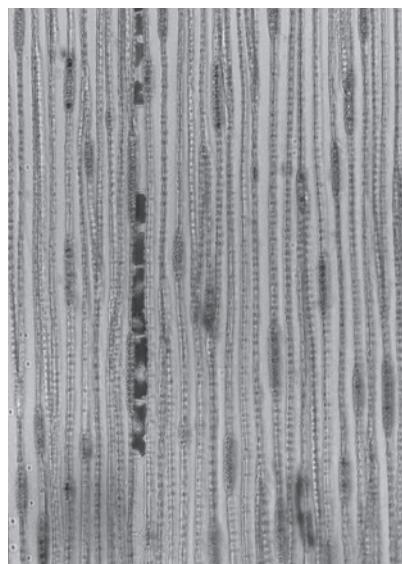
5a. イスマキ属 16844 木口×30



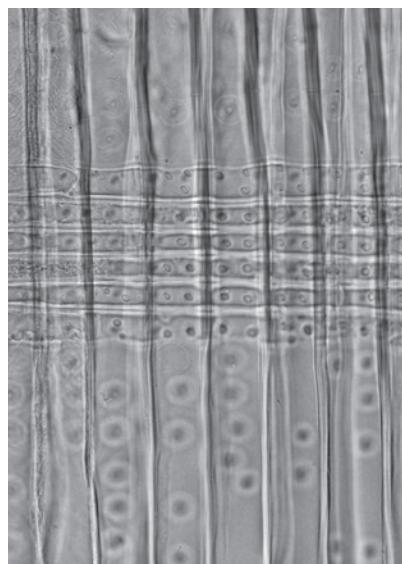
5c. イスマキ属 16844 柄目×240



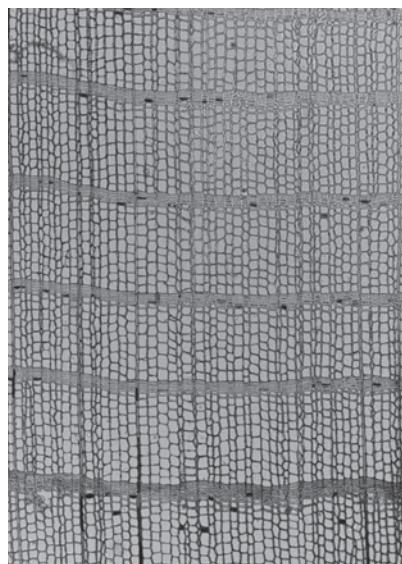
6a. ヒノキ 16853 木口×30



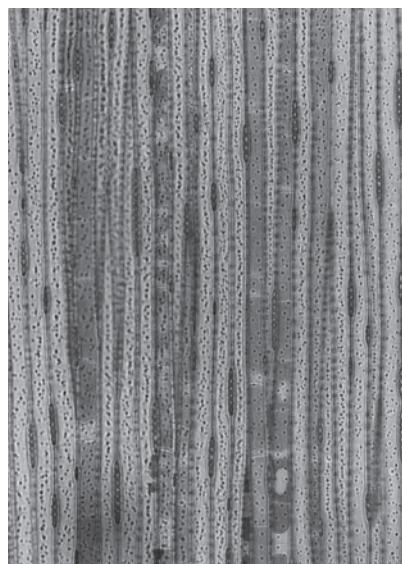
6b. ヒノキ 16853 板目×60



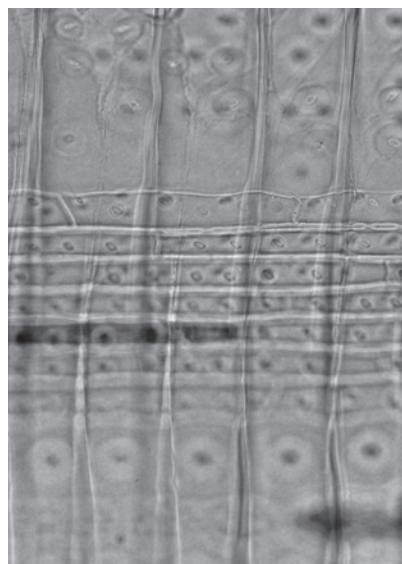
6c. ヒノキ 16853 柄目×240



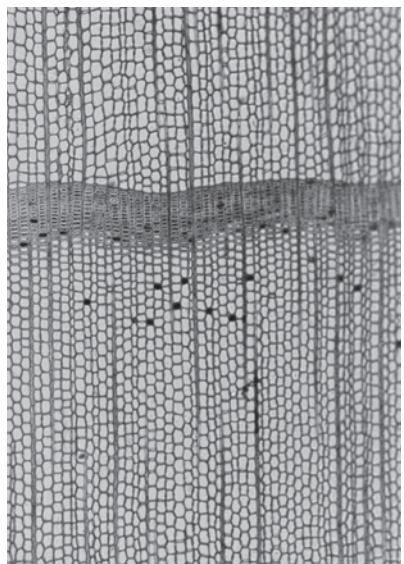
7a. サワラ 16863 木口×30



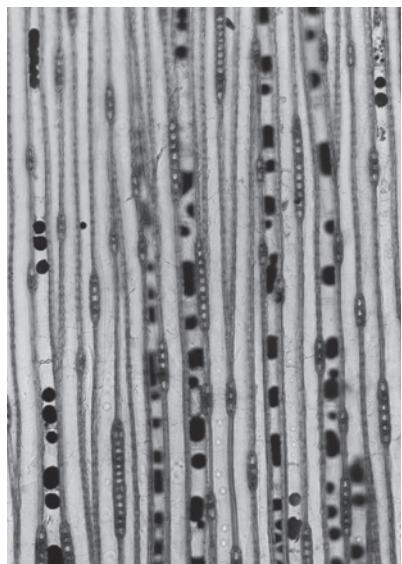
7b. サワラ 16863 板目×60  
写真7 出土木材顕微鏡写真3



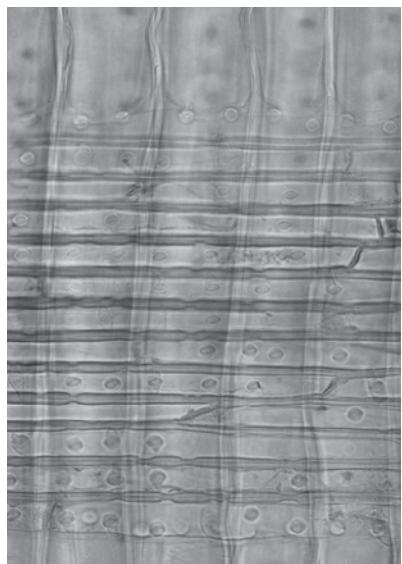
7c. サワラ 16863 柄目×240



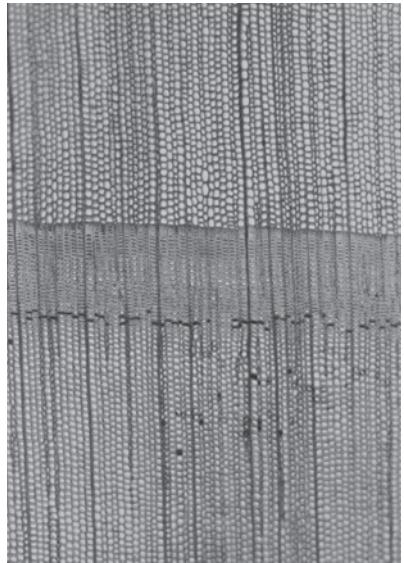
8a. スギ 16879 木口×30



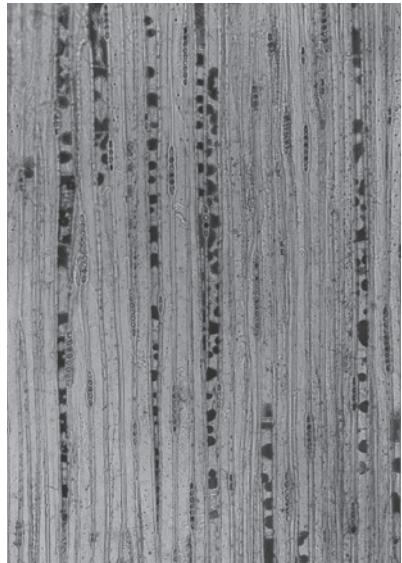
8b. スギ 16879 板目×60



8c. スギ 16879 柄目×240



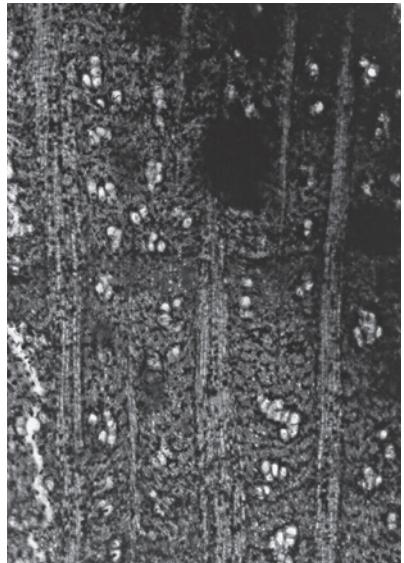
9a. アスナロ 17048 木口×30



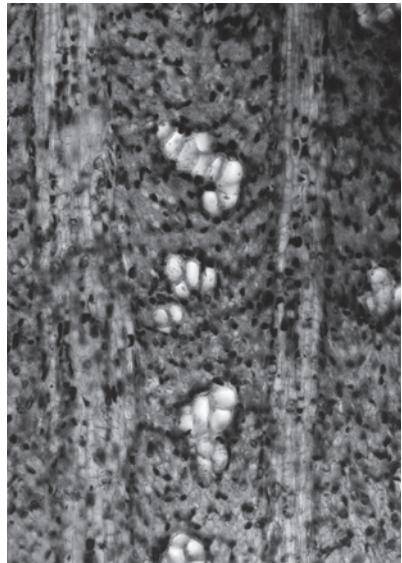
9b. アスナロ 17048 板目×60



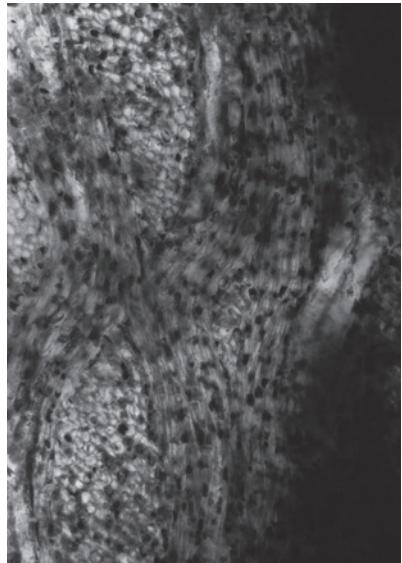
9c. アスナロ 17048 柄目×240



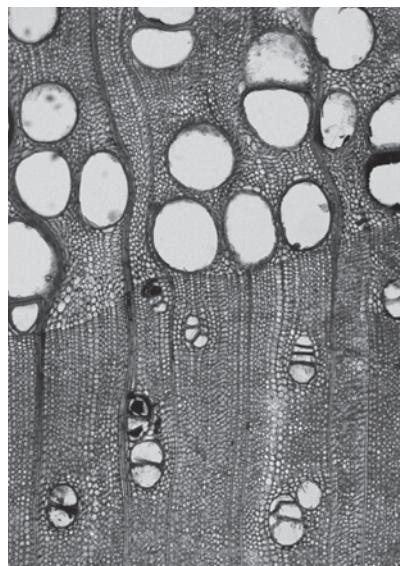
10a. メギ属? 16893 木口×30



10b. メギ属? 16893 木口×60  
写真8 出土木材顕微鏡写真4



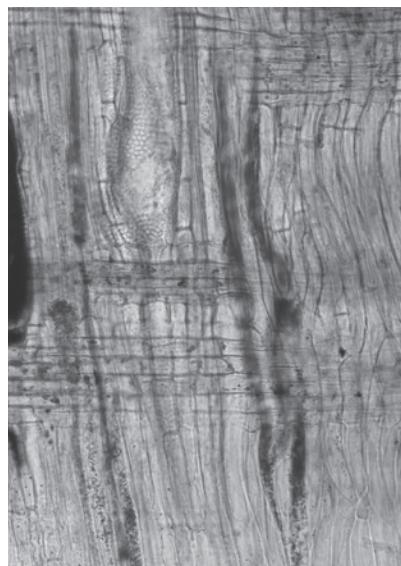
10c. メギ属? 16893 板目×60



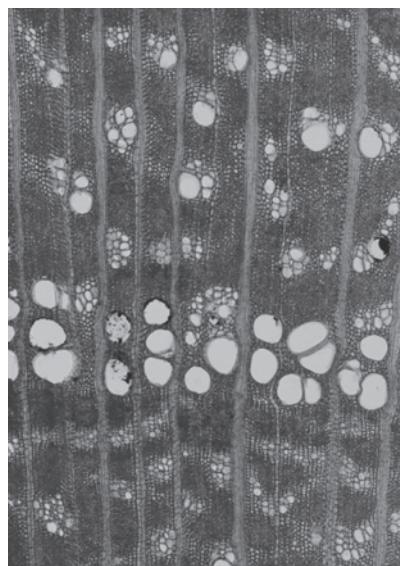
11a. ネムノキ 16841 木口×30



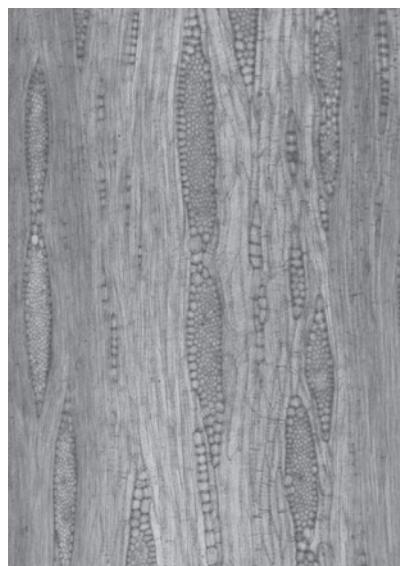
11b. ネムノキ 16841 板目×60



11c. ネムノキ 16841 桟目×120



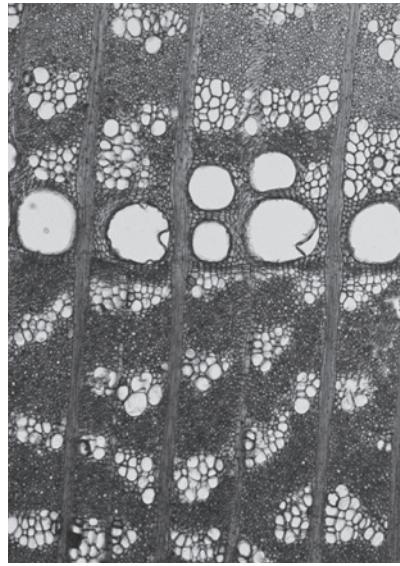
12a. エノキ 17028 木口×30



12b. エノキ 17028 板目×60



12c. エノキ 17028 桟目×120



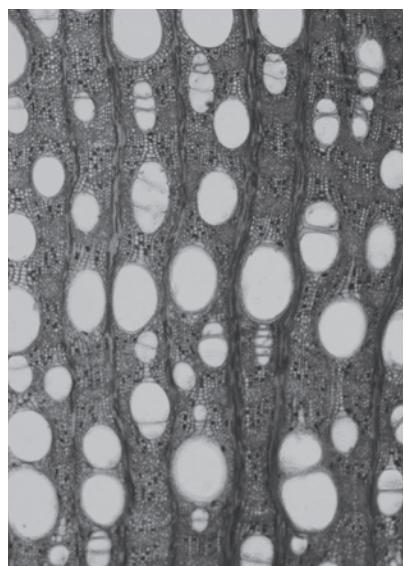
13a. ケヤキ 16878 木口×30



13b. ケヤキ 16878 板目×60  
写真9 出土木材顕微鏡写真5



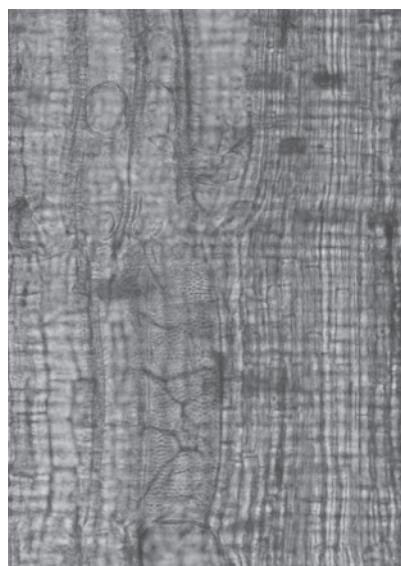
13c. ケヤキ 16878 桟目×120



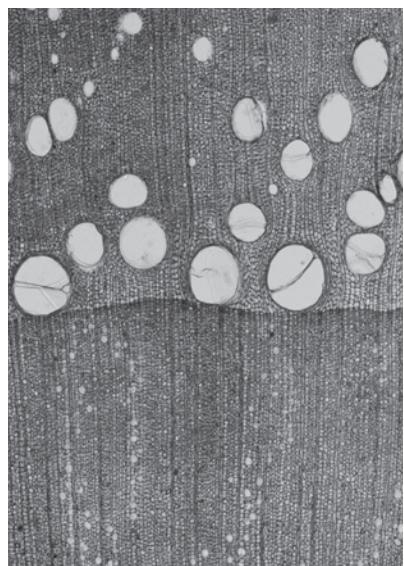
14a. イタビカズラ類 17007 木口×30



14b. イタビカズラ類 板目×60



14c. イタビカズラ類 柄目×120



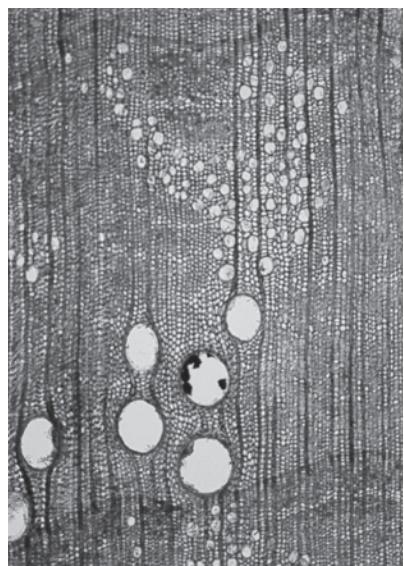
15a. クリ 16883 木口×30



15b. クリ 16883 板目×60



15c. クリ 16883 柄目×120



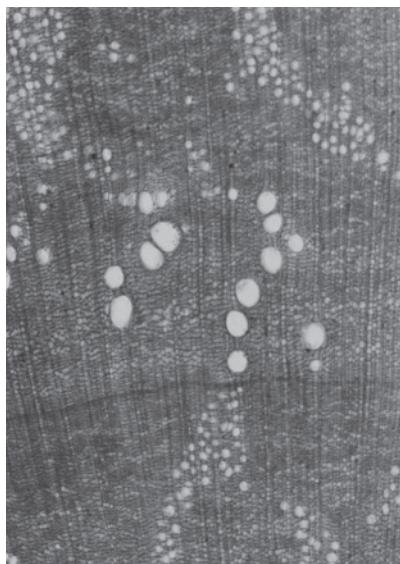
16a. コジイ 16882 木口×30



16b. コジイ 16882 板目×60  
写真10 出土木材顕微鏡写真 6



16c. コジイ 16882 柄目×120



17a. スダジイ 17051 木口×30



17b. スダジイ 17051 板目×60



17c. スダジイ 17051 桟目×120



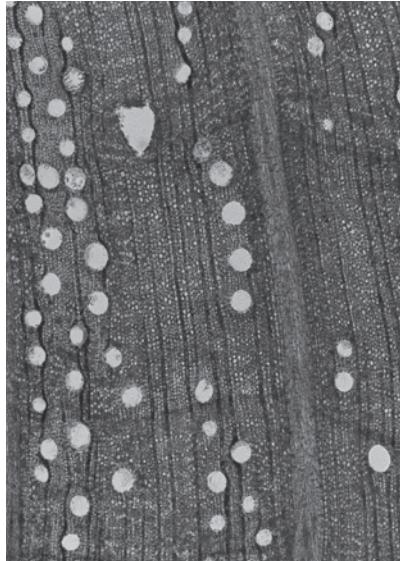
18a. イチイガシ 16859 木口×30



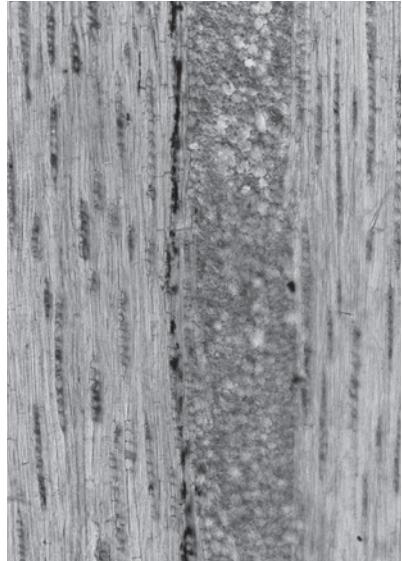
18b. イチイガシ 16859 板目×60



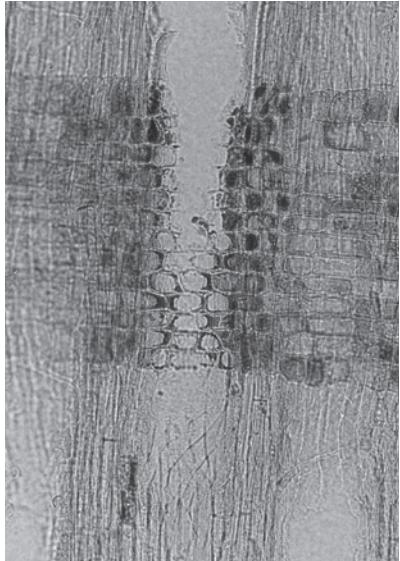
18c. イチイガシ 16859 桟目×120



19a. アカガシ亜属 16877 木口×30



19b. アカガシ亜属 16877 板目×60  
写真11 出土木材顕微鏡写真 7



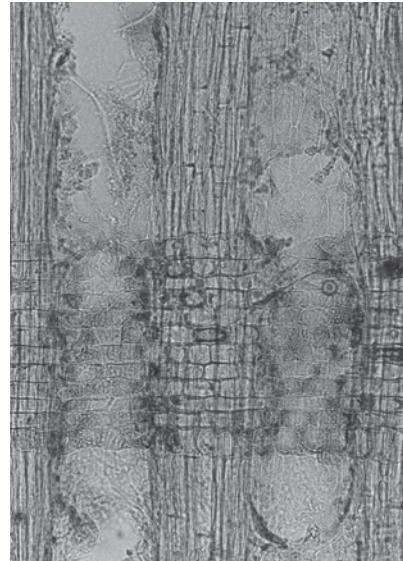
19c. アカガシ亜属 16877 桟目×120



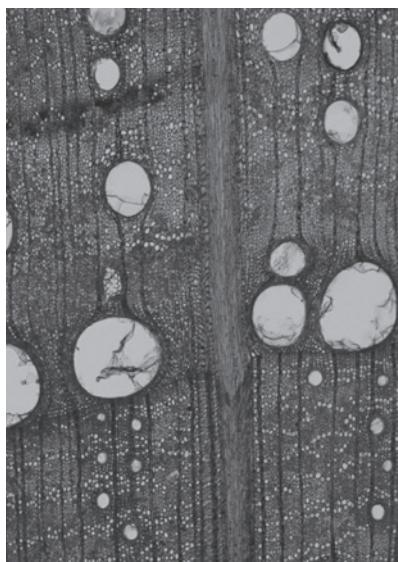
20a. ウバメガシ 16876 木口 × 30



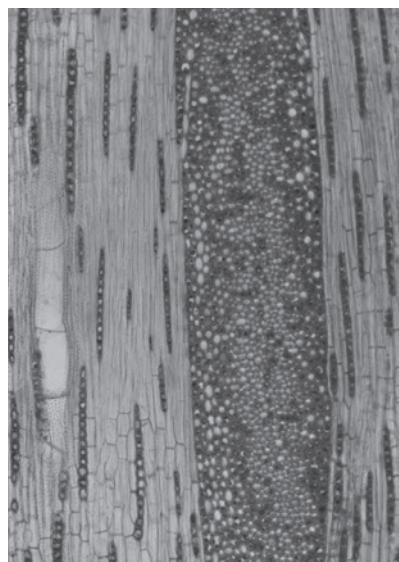
20b. ウバメガシ 16876 板目 × 60



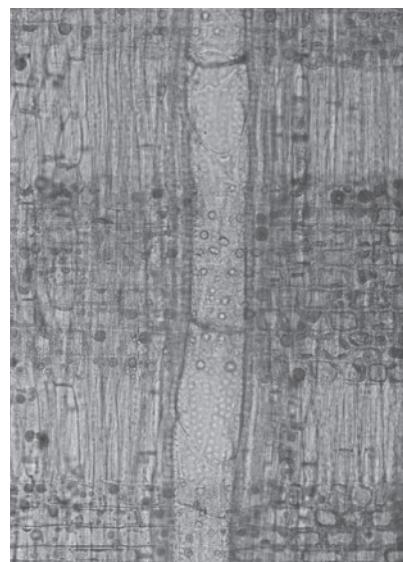
20c. ウバメガシ 16876 横目 × 120



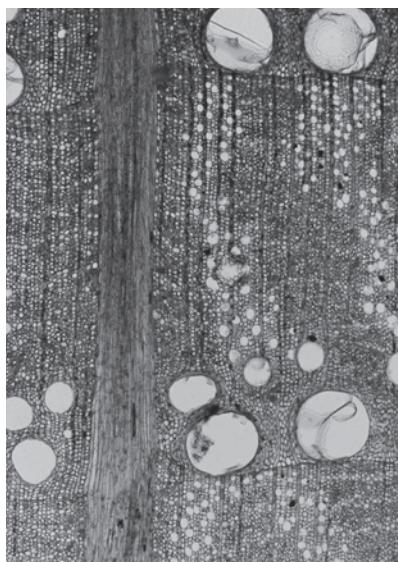
21a. クヌギ節 17055 木口 × 30



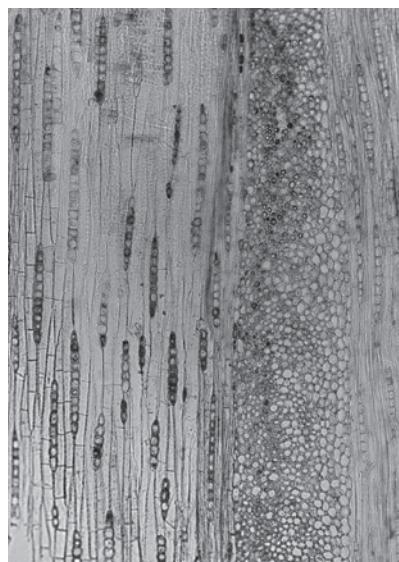
21b. クヌギ節 17055 板目 × 60



21c. クヌギ節 17055 横目 × 120



22a. コナラ節 16838 木口 × 30

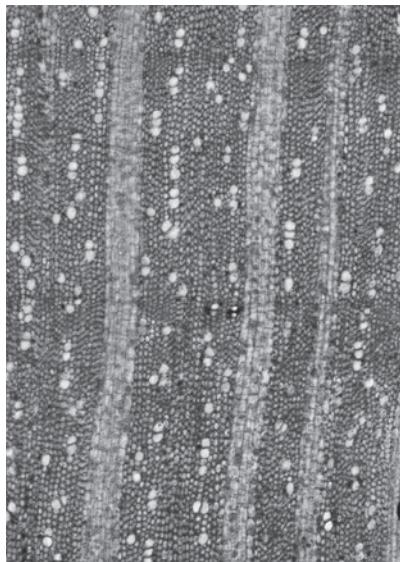


22b. コナラ節 16838 板目 × 60



22c. コナラ節 16838 横目 × 120

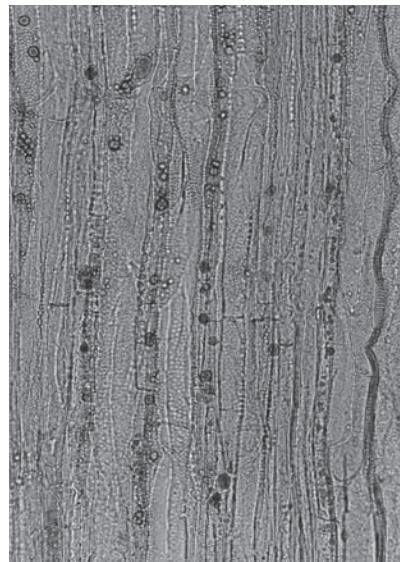
写真12 出土木材顕微鏡写真8



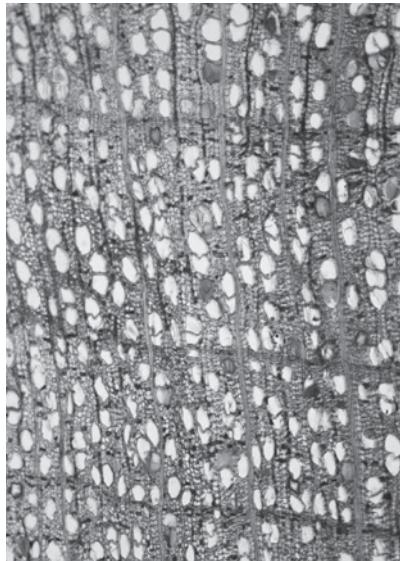
23a. タイミンタチバナ 16873 木口×30



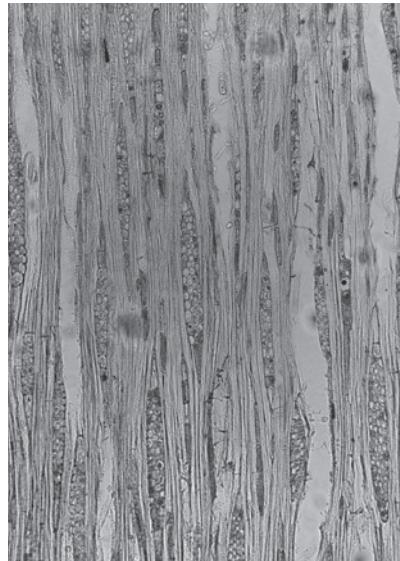
23b. タイミンタチバナ 板目×60



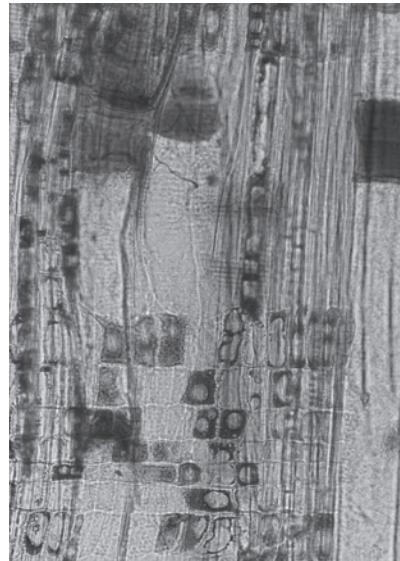
23c. タイミンタチバナ 桢目×120



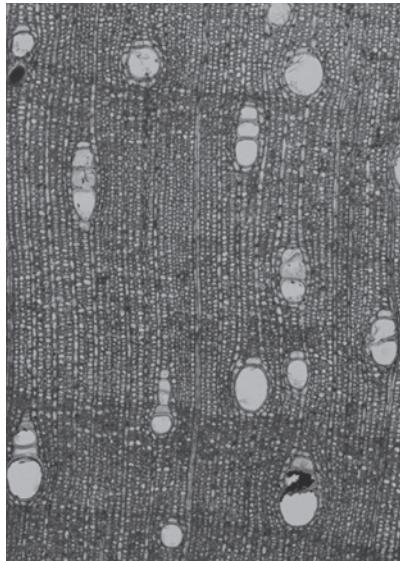
24a. ミズキ 16842 木口×30



24b. ミズキ 16842 板目×60



24c. ミズキ 16842 桢目×120



25a. カキノキ属 17053 木口×30



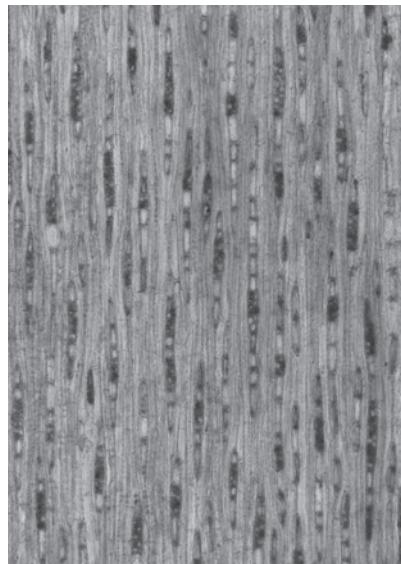
25b. カキノキ属 17053 板目×60  
写真13 出土木材顕微鏡写真9



25c. カキノキ属 17053 桢目×120



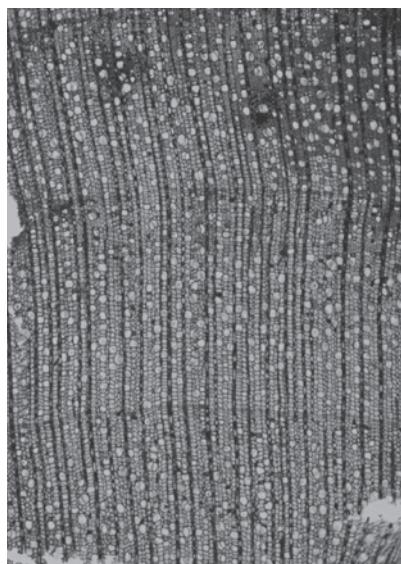
26a. ヤブツバキ 17042 木口×30



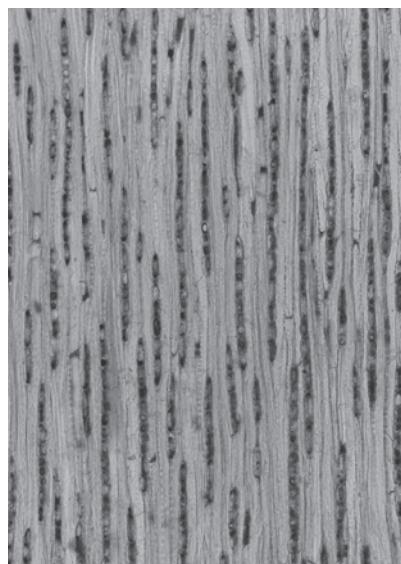
26b. ヤブツバキ 17042 板目×60



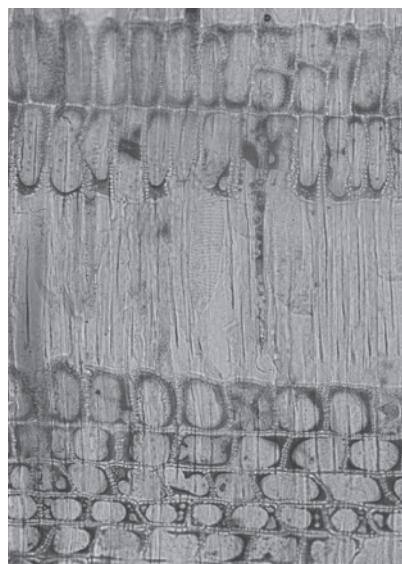
26c. ヤブツバキ 17042 柄目×120



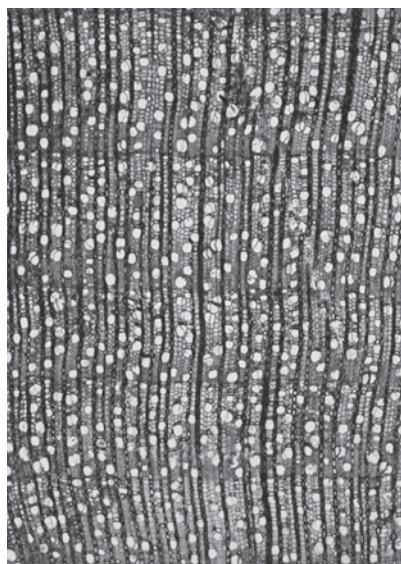
27a. サカキ 17080 木口×30



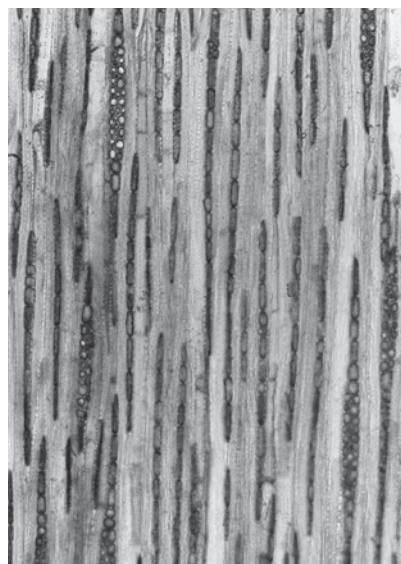
27b. サカキ 17080 板目×60



27c. サカキ 17080 柄目×120



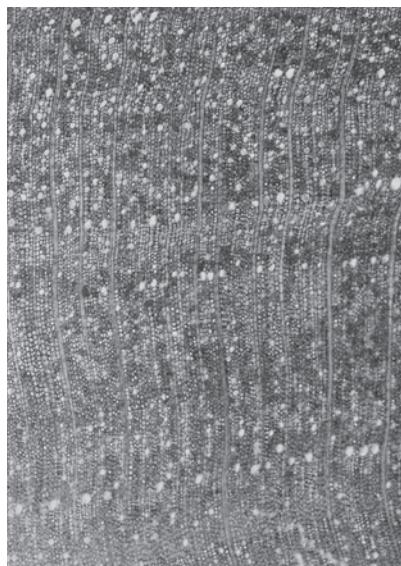
28a. ヒサカキ 16862 木口×30



28b. ヒサカキ 16862 板目×60  
写真14 出土木材顕微鏡写真10



28c. ヒサカキ 16862 柄目×120



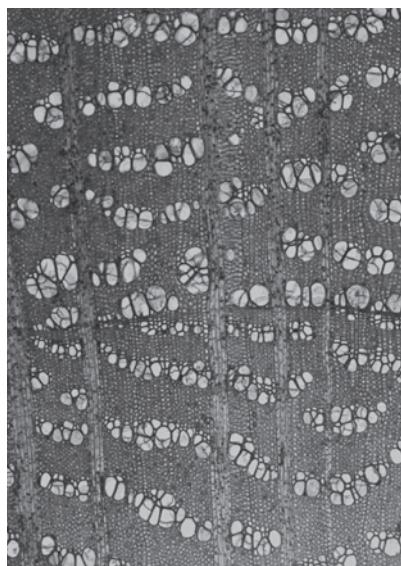
29a. イボタノキ属 16855 木口 × 30



29b. イボタノキ属 16855 板目 × 60



29c. イボタノキ属 16855 横目 × 120



30a. ウコギ属 17073 木口 × 30



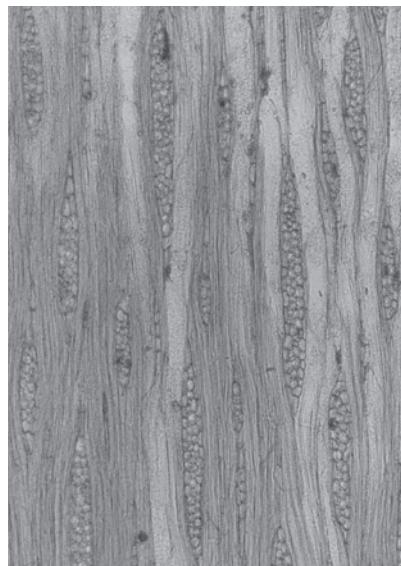
30b. ウコギ属 17073 板目 × 60



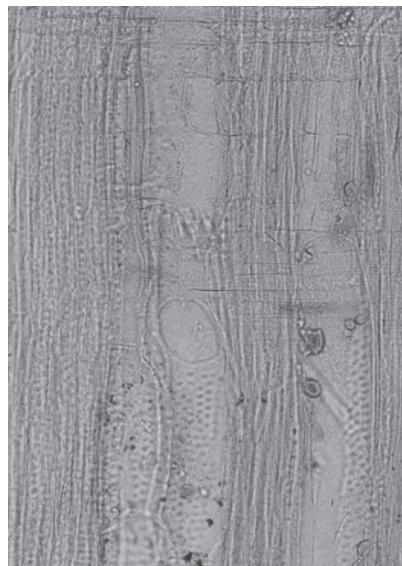
30c. ウコギ属 17073 横目 × 120



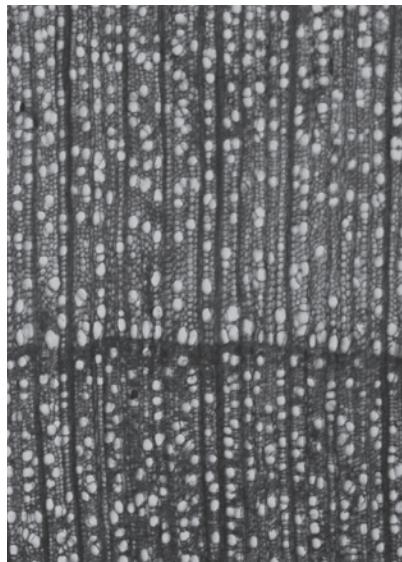
31a. ニワトコ 17058 木口 × 30



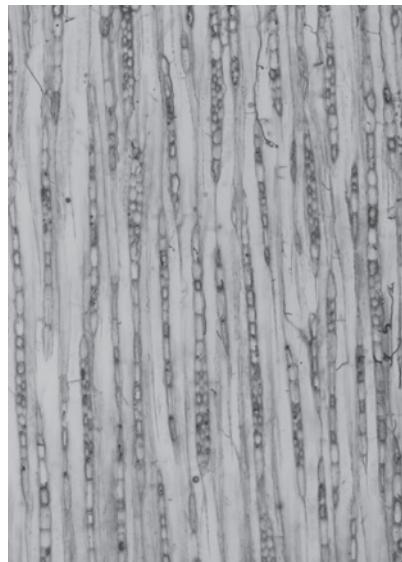
31b. ニワトコ 17058 板目 × 60  
写真15 出土木材顕微鏡写真11



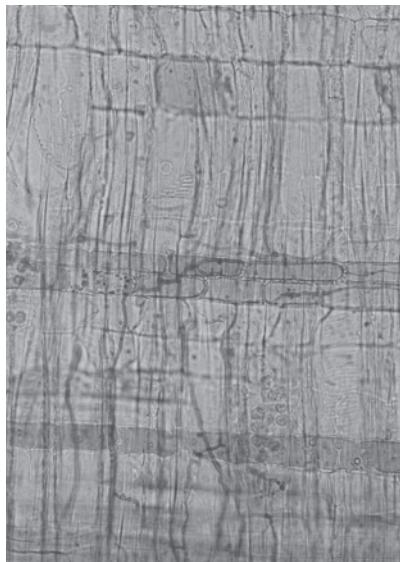
31c. ニワトコ 17058 横目 × 120



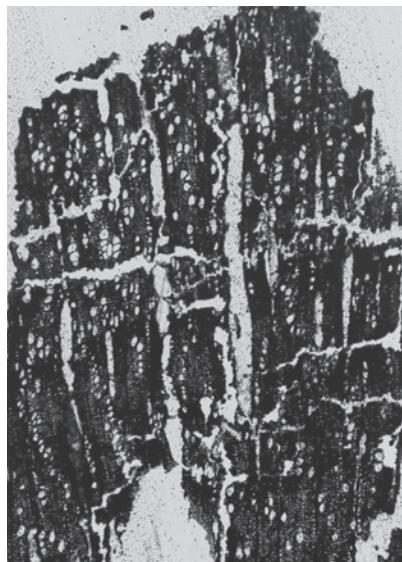
32a. ガマズミ属 17046 木口 × 30



32b. ガマズミ属 17046 板目 × 60



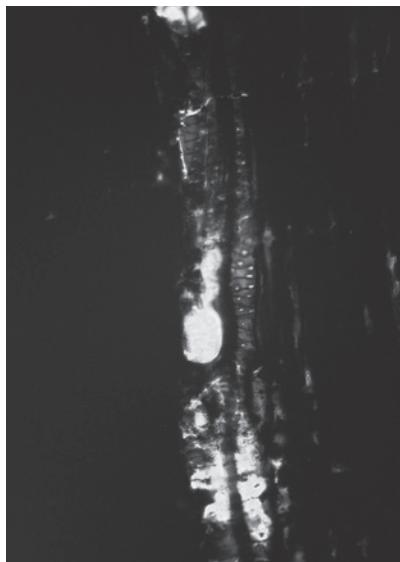
32c. ガマズミ属 17046 横目 × 120



33a. サクラ属 炭化材 1 木口 × 30



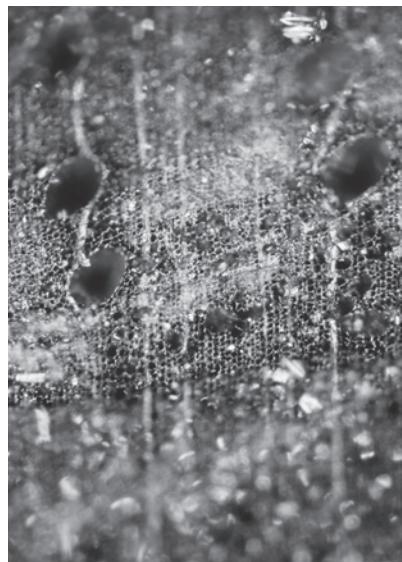
33b. サクラ属 炭化材 1 板目 × 60



33c. サクラ属 炭化材 1 横目 × 240



34a. スダジイ 炭化材 2 木口 × 30



34b. スダジイ 炭化材 2 木口 × 60  
写真16 出土木材顕微鏡写真12

## 第2節 高橋遺跡出土鞘尻および周辺遺跡出土柄頭他の 漆の自然科学的分析

明治大学理工学部応用化学科

准教授 本多貴之

### 1 高橋遺跡

#### (1) 漆薄片作成観察

##### ア 作業手順

試料薄片の作成は試料をプラスチックサンプルクリップ (Buehler) で挟んで垂直に立て、透明な53型埋込用エポキシ樹脂 (Pelnox) で包埋した。次に27×46 mmスライドガラス（松浪工業株式会社）に接着し、粒度の異なる耐水性サンドペーパー (Buehler, #400, 600, 800) とアルミナパウダー MasterPrep Polishing Suspension 0.05 μm(Buehler) を用いて自動研磨機AutoMet 250 (Buehler) で層構造が観察できるまで研磨した。

透過光、反射光、偏光下での断面の光学像を得るために偏光顕微鏡Eclipse LV 100 POL(Nikon)に接続されたデジタルカメラILCE-7M2(SONY)を用いた。倍率は50～500倍まで適宜変更し、透過光および反射光にて撮影を行った。

なお、今回の試料はPEG（ポリエチレンゴリコール）にて保護処理をされていたが、エポキシ樹脂に対して溶解などを引き起こさないため、除去等の作業は行わずそのまま包埋を行った。

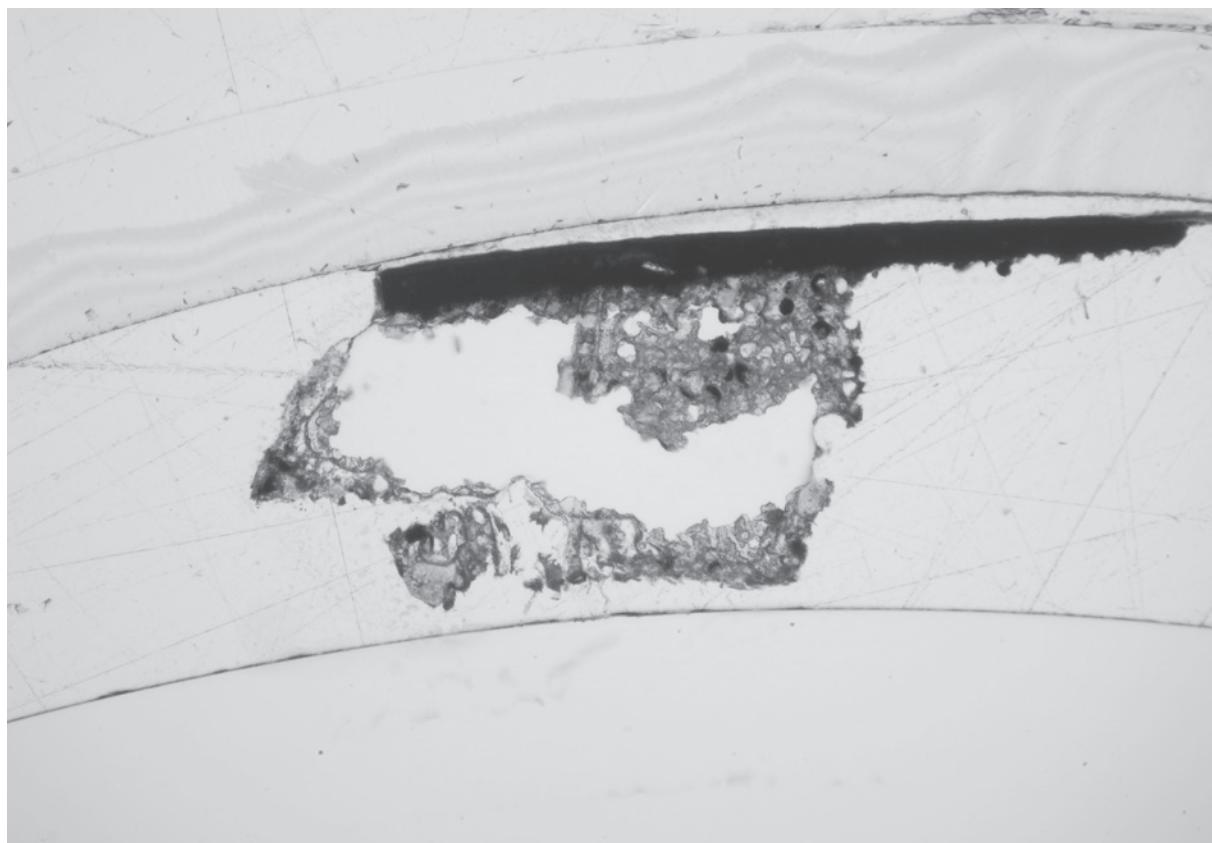


写真17 200倍 透過光（木胎部存在時）

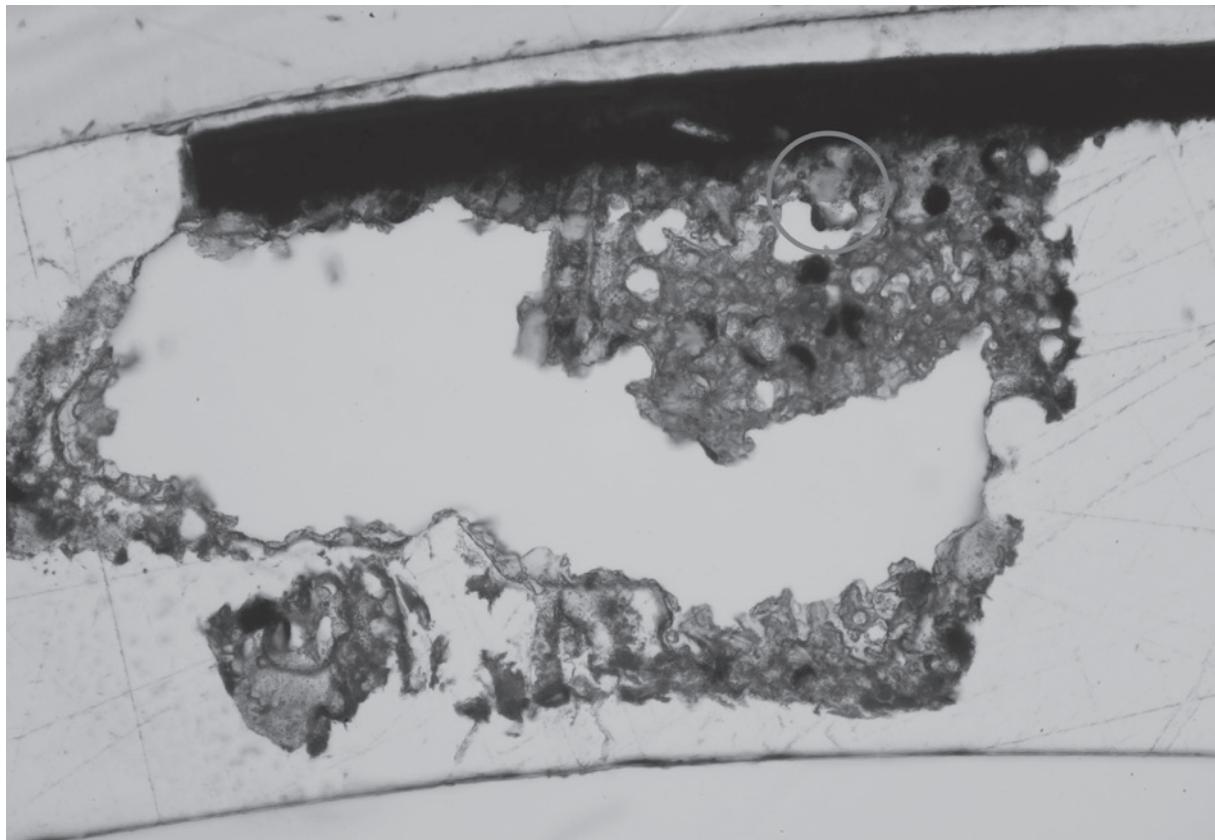


写真18 500倍 透過光（木胎部存在時）

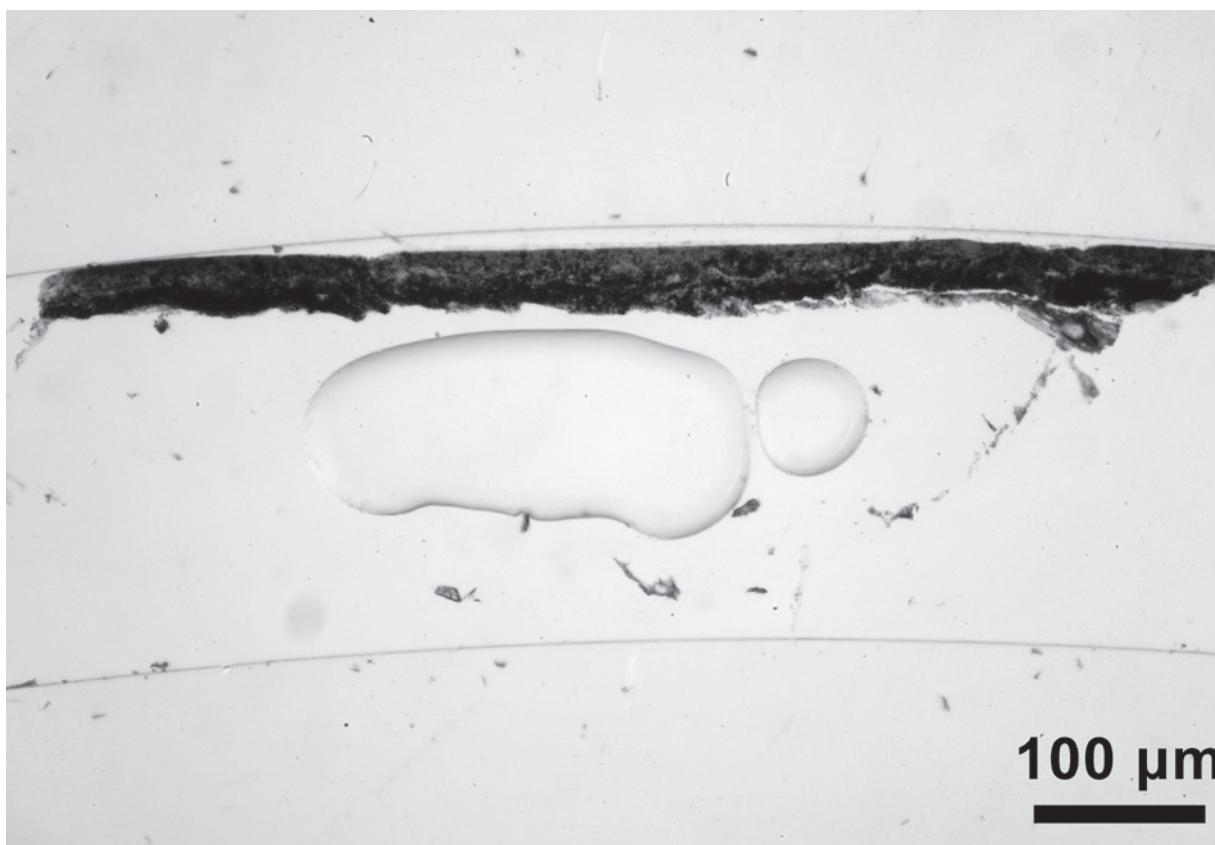


写真19 透過光 200倍

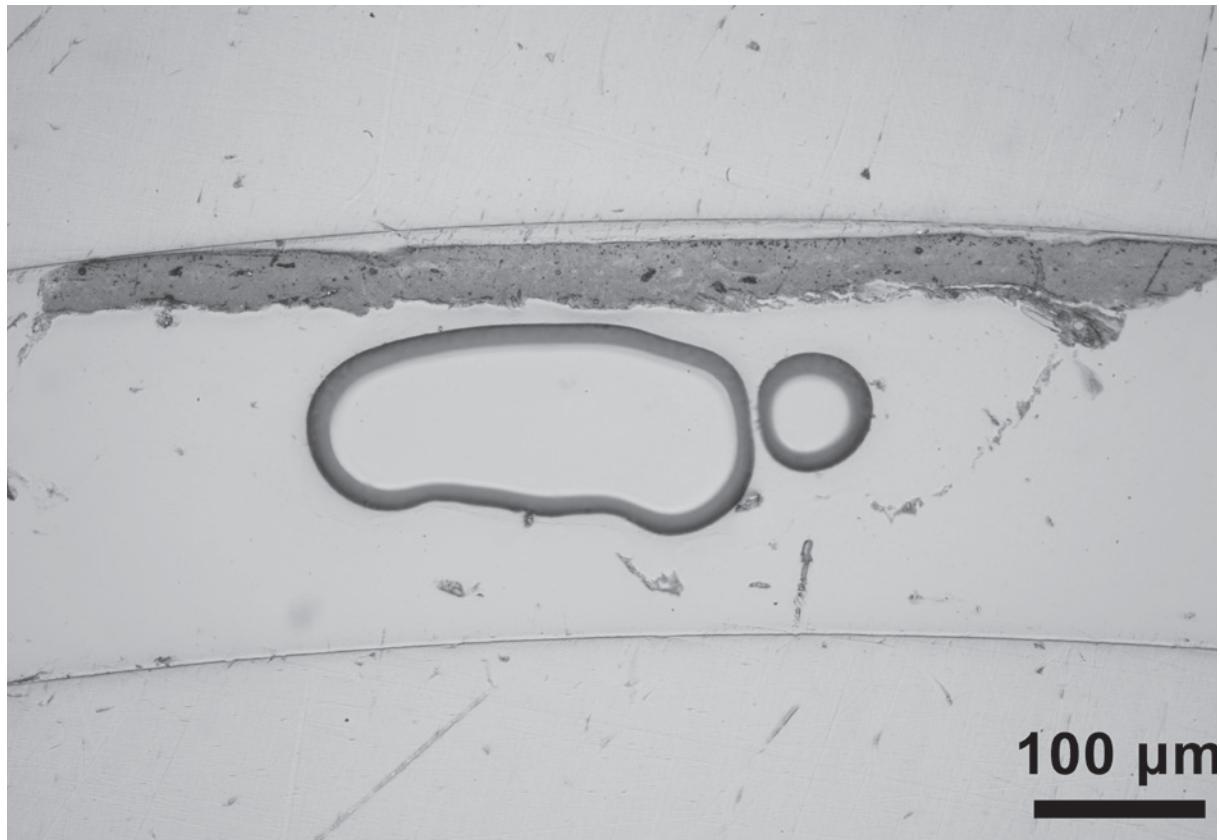


写真20 反射光 200倍

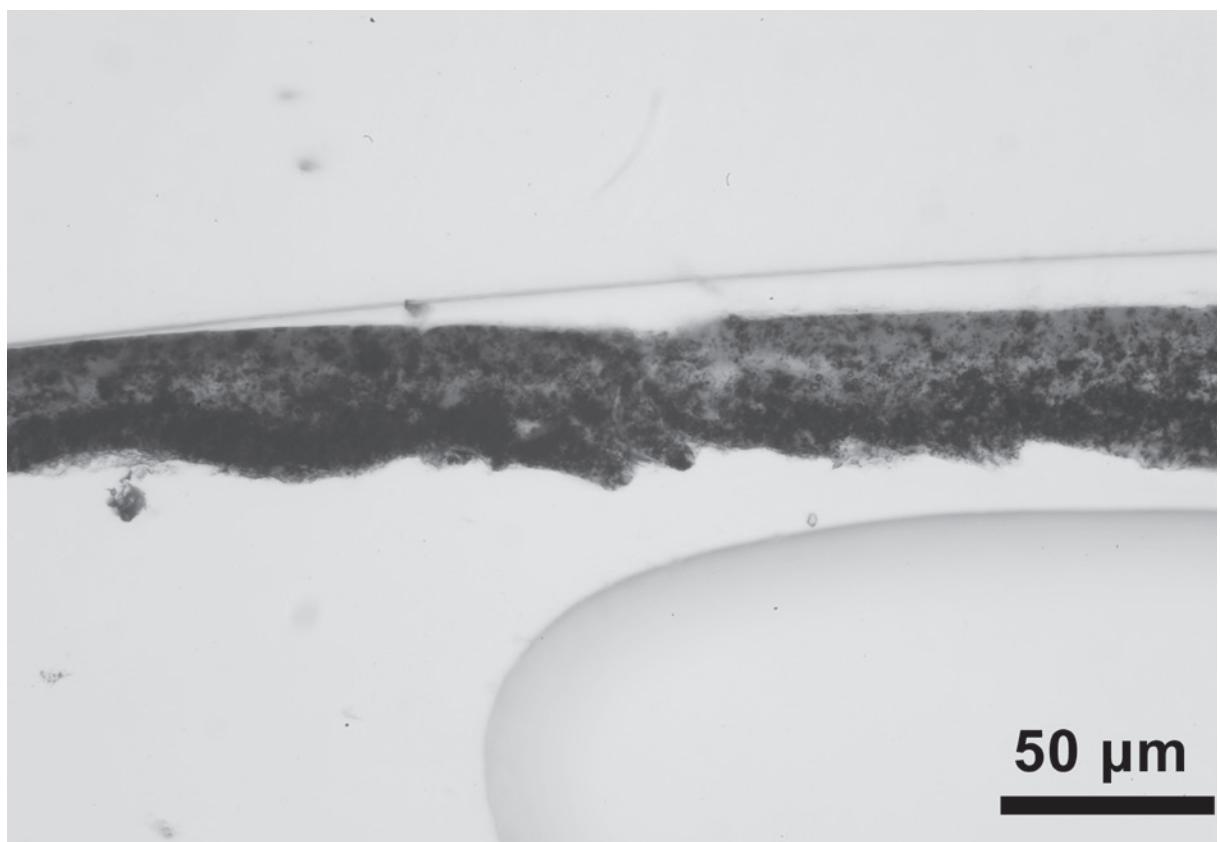


写真21 透過光 500倍

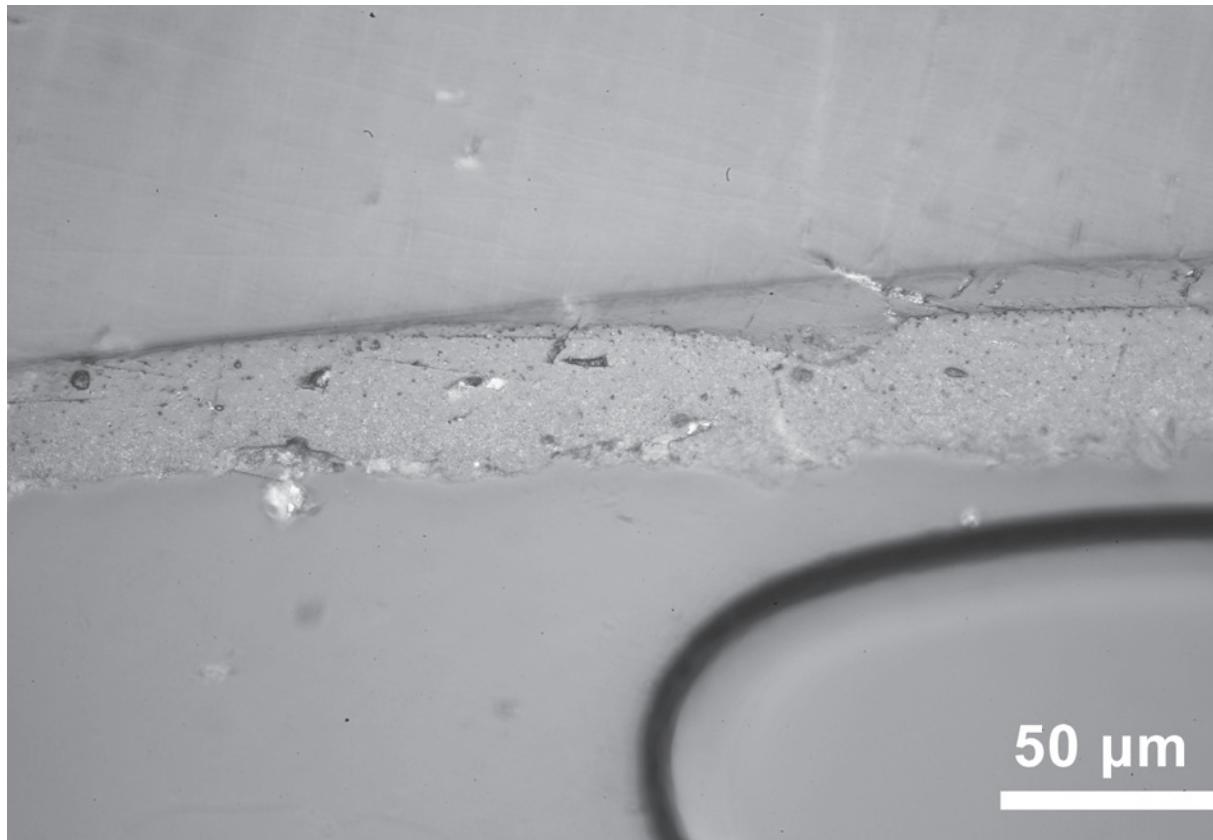


写真22 反射光 500倍

#### イ 観察結果

研磨の初期段階（写真17・18）では木胎部が残っており、漆塗膜は直接木に塗布されている事が見てとれる。また、色の濃い層の下に混合物を含まない漆が塗られていることが分かる（写真18 丸部）。さらに研磨を行い、塗膜部分が透過する状況まで薄くした（写真20～22）ところ今回の黒色片試料はスス混入の塗膜である事が分かった。底部にススが多く溜まっている状況が確認できた（写真21）。一方で、ススの多い層と少ない層の間に明確な界面は確認できなかったためススを混入した漆が乾くまでの間に沈殿してしまったことで、グラディエーションのかかった状態に見えたと判断した。また、ススの混ざっている漆を木に塗った場合には木目にこのススが入り込むことが分かっているため、今回はススの入っている漆の前に混合物のない漆を塗布し塗膜を形成させたと判断した。

\*研磨を行った際にススのある部分の方が堅いためこの部分を薄くしようとすると塗膜層以外は消失してしまう。

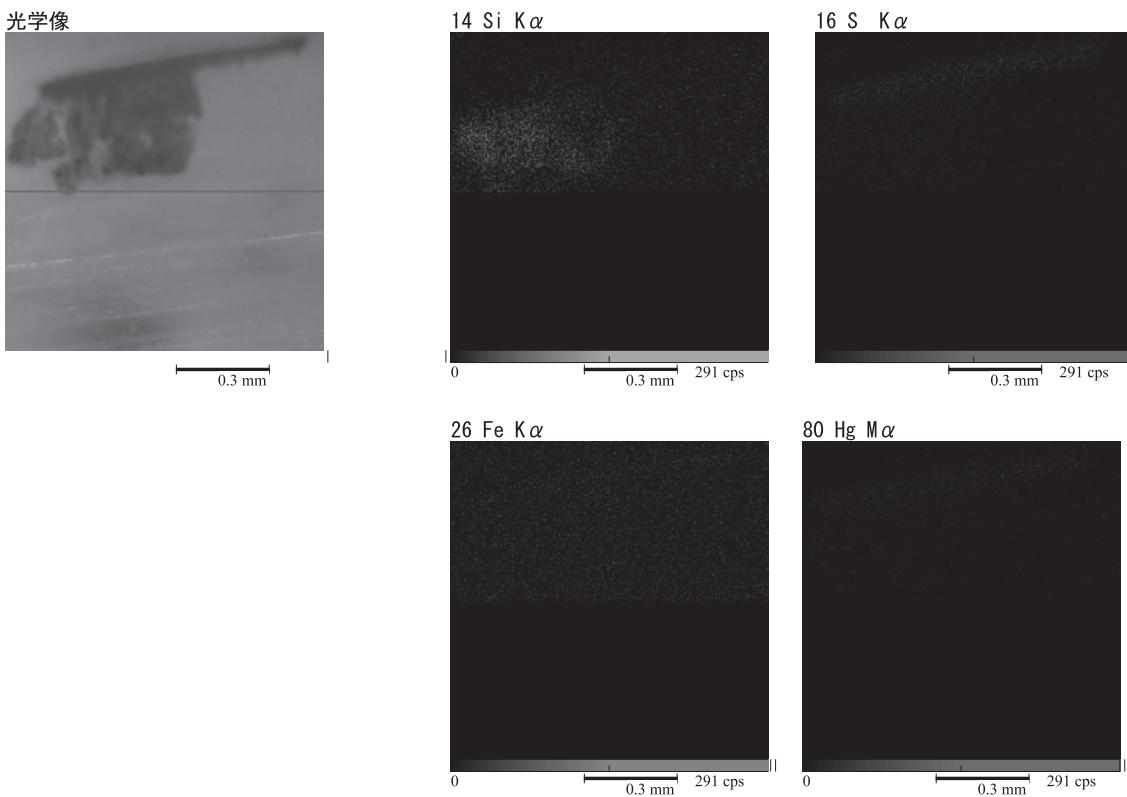
#### （2）蛍光X線分析（XRF）

##### ア 測定の詳細

試料に用いられている無機材料や顔料を特定するために、エネルギー分散型蛍光X線分析システム XGT-5200（株式会社堀場製作所）を用いて元素分析を行った。これはRhターゲットを備えたX線導管（最大50kV、1mA）とシリコンドリフト検出器を備えており、検出可能な元素は周期表11–92（Na–U）までである。測定は定性分析においてX線導管径を100μmとした。

##### イ 結果

ED-XRFによる測定は漆中に含まれる含量を計測する際に広く用いられ、赤色であれば酸化鉄や硫化水銀、酸化鉛などが利用されている。今回の試料からは特に顔料を示す元素は検出されなかった。若干、



第151図 ED-XRF測定結果（ケイ素、硫黄、鉄、水銀）

ケイ素が検出されているが、これはP. 3におけるクロスセクション像において薄くなってしまっている部分に相当することから、ED-XRF分析を行った時点で試料の下に存在するガラス（酸化ケイ素）を検出してしまったためであると判断した。

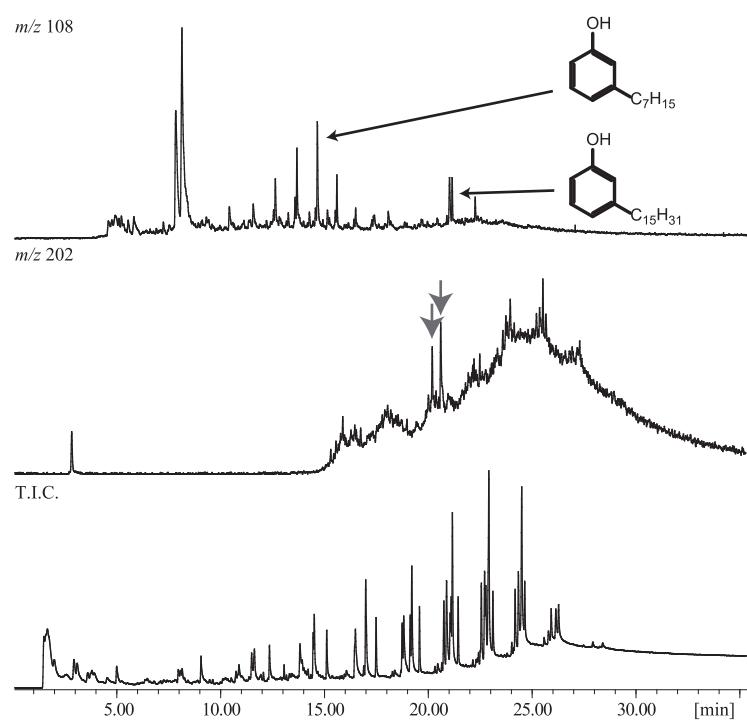
### （3）熱分解GC/MS

#### ア 測定手順

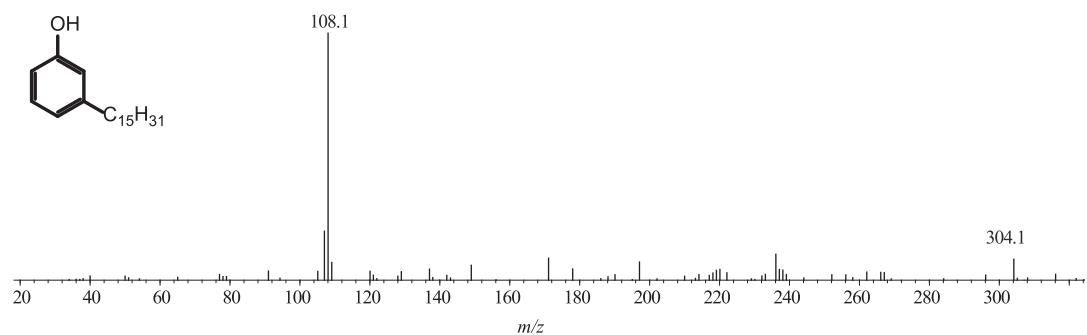
試料に含まれる材料および漆の詳細な成分分析を行うためにPy-GC/MS分析を行った。この測定に供した試料は 0.1～0.3 mg 程度である。測定に使用したのは熱分解装置PY-3030D(株式会社フロンティアラボ)を接続したガスクロマトグラフ質量分析計6890N/5875 GC/MS system(Agilent Technologies)である。使用カラムは30 m×0.25 mm×0.25 mmのUltra ALLOY-1(MS/HT) (株式会社フロンティアラボ)である。測定はスプリットモードで行い、スプリット比は20：1とした。インジェクション温度とインターフェース温度は共に280°Cで維持し、オーブン温度は40°Cで2分間保持した後、12°C /minで昇温、320°Cに達した後10分間保持した。キャリアガスとしてヘリウムを用いて、一定流量として1.0 mL/min を保った。測定範囲は $m/z$ 29—800で、イオン化法はEIである。得られたデータは解析ソフトMSD ChemStationで解析した。

#### イ 測定結果

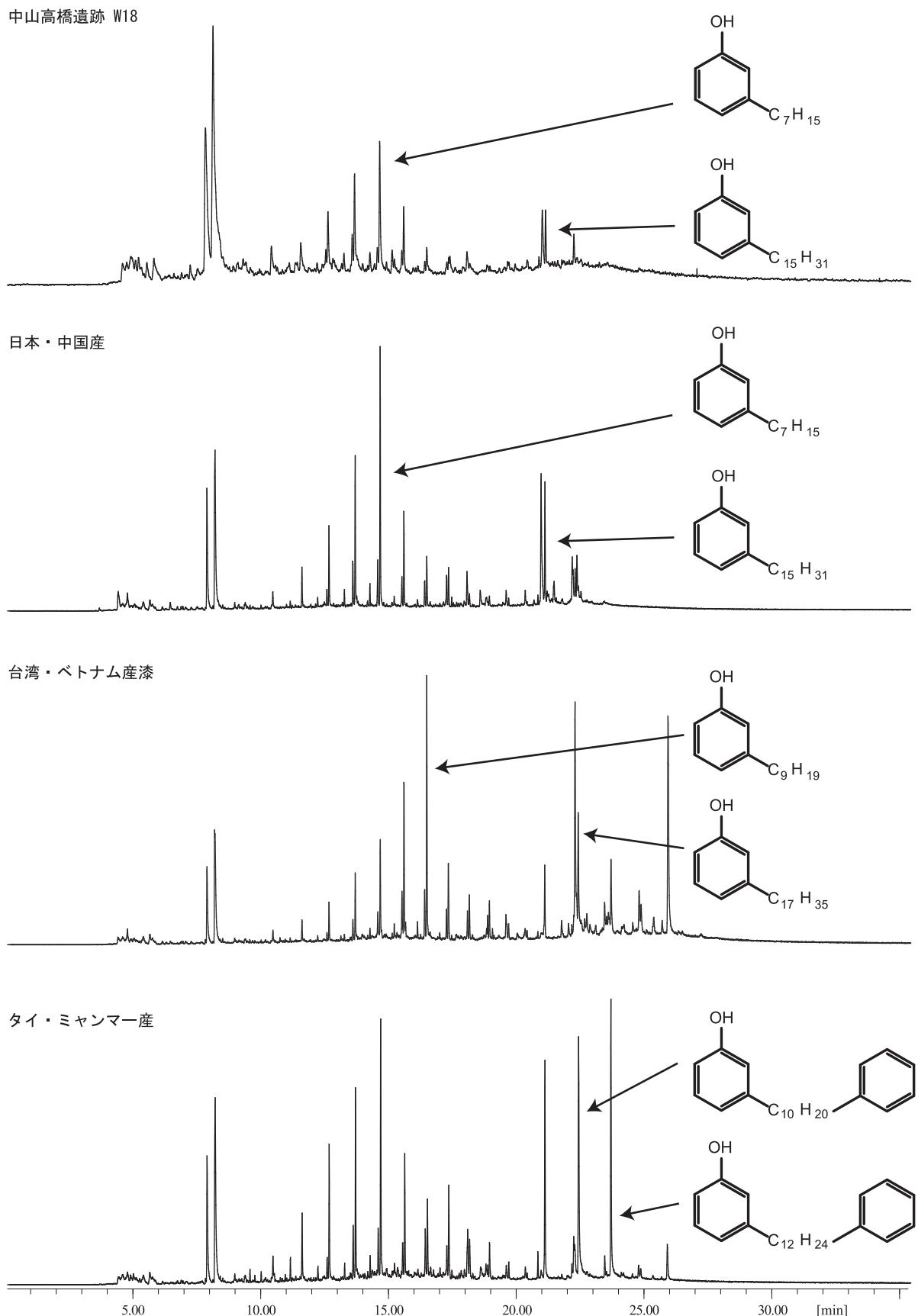
今回の試料はPEGによって保存処理をされていたが、漆の種の判定に用いられる $m/z$ 108のイオン抽出を行う事で3-アルキルフェノールに由来するピーク類を鮮明に捉えることが出来た。本クロマトグラムを日本・中国産漆の標準試料の $m/z$ 108と比較したところ良い一致を示したため、本黒色塗膜は日本・中国産漆を用いた物であると判断できた。さらに、23.144分のピークのマススペクトル（第153図）を確認すると、日本・中国産漆の主成分であるウルシオールに由来する3-ペントデシルフェノールであ

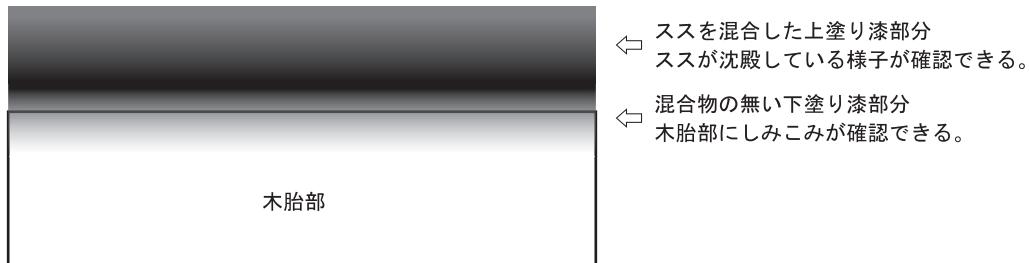


第152図 分析試料の全クロマトグラムと漆およびススに関する抽出クロマトグラム



第153図 漆のバイオマーカー部分のマススペクトル

第154図 標準試料と今回の測定対象試料の $m/z$  108のイオンクロマトグラム比較



第155図 今回分析した試料の塗り工程イメージ図

ることが確認できた。

また、クロスセクション分析から見てとれたススに関してはこれまでの知見から $m/z$  202のクロマトグラフにより確認することが可能である事が分かっている。本試料について確認をしたところススと想定される時間にピーク（第152図 矢印部分）が確認できたが、ポリエチレングリコールの強度が強い部分と重なってしまっており、このピークに関しての構造の特定までは行う事が出来なかった。

#### （4）全体を通しての考察

今回分析した試料は漆を木に混合物を加えていない漆を1層塗布した後に、ススを混合した漆を塗布していることが分かった。この漆は日本・中国に生育している漆（樹種名：*Toxicodendron vernicifluum*）であった。混合物の入っていない漆を木胎に直接塗布する方法は、中塗りになる漆の吸収を防ぐために昔から利用されている方法である。このような塗装手順は中塗りに混合物の入っている漆を塗る際、直接漆を塗布すると漆が木に吸い込まれてしまい色味が変わったり、漆が一部無駄になってしまったりするデメリットがあるため、このような手法が広く用いられるようになったと考えられている。

## 2 八幡ヶ谷古墳

### （1）漆薄片作成観察

#### ア 作業手順

試料薄片の作成は試料をプラスチックサンプルクリップ(Buehler)で挟んで垂直に立て、透明な53型埋込用エポキシ樹脂(Pelnox)で包埋した。次に27×46 mmスライドガラス(松浪工業株式会社)に接着し、粒度の異なる耐水性サンドペーパー(Buehler, #400, 600, 800)とアルミナパウダーMasterPrep Polishing Suspension 0.05 μm(Buehler)を用いて自動研磨機AutoMet 250(Buehler)で層構造が観察できるまで研磨した。

透過光、反射光、偏光下での断面の光学像を得るために偏光顕微鏡Eclipse LV 100 POL(Nikon)に接続されたデジタルカメラILCE-7M2(SONY)を用いた。倍率は50–500倍まで適宜変更し、透過光および反射光にて撮影を行った。

なお、今回の試料はパラロイドB72(ポリエステル)にて保護処理をされていたが除去時に塗膜が破損する恐れがあるため、除去等の作業は行わずそのまま包埋を行った。

#### イ 観察結果

##### ①堅櫛（写真23・24）

下地にあたる部分には、透過偏光下において白く光る部分(A)と褐色の部分(B~D)が混ざって見えている。おそらく、白い部分は漆に土(砥の粉などではなく普通の砂のような鉱物)を混合し、櫛を固定する部分に用いていたと思われる。透過光下での観察からその上に、黒い煤のような物を高濃度で混合した層(B)一生漆と思われる褐色層(C)–黒い煤のような物を低濃度で混合した層(D)の

3層の塗りが存在していた。

鉱物に関しては遺物が包埋されていた土の可能性も存在するが、下地の部分に関しては漆と思われる下地と綺麗に接合しているので下地に混ぜられていると考察した。一方、200倍の像の右上に見える鉱物（X）に関しては表面にのっているだけであり、おそらく試料に付着した鉱物ではないかと考える。

### ②大刀鞘尻（写真25・26）

下地の部分はほぼ確認できないが僅かに混合物の無い部分（A）が見受けられるので、ここが下地では無いかと考える。その上には堅櫛にも存在した黒い煤のような物を高濃度で混合した層（B）－黒い煤のような物を低濃度で混合した層（C）の2層で仕上げている。

### ③盾（赤色部および黒色部、写真27～30）

赤色部はごく薄い下地層（A）の上に黒い煤のような物を高濃度で混合した層（B）－黒い煤のような物を低濃度で混合した層（C）－赤色混合物の入っている層（D）－赤色混合物の入っている層（E）－赤色顔料（F）の5層構造である。最表面の粒子はその色味から水銀朱であると考えられる。200倍像の右には漆内に水銀が食い込んでいる部分も観察される（写真27 丸部）ことから、漆が乾く前に顔料を蒔いたのではないかと考えられる。

一方、黒色部は纖維のような物があったと思われる部分（写真27 点線部）を覆うように濃い褐色の塗装が行われていた。この塗りに関しては1の堅櫛に用いられている技法と類似したものではないかと考える。また、最表面に水銀朱の粒が付着していることから、この部分はちょうど赤と黒の境目に当たる部分ではないかと推察した。

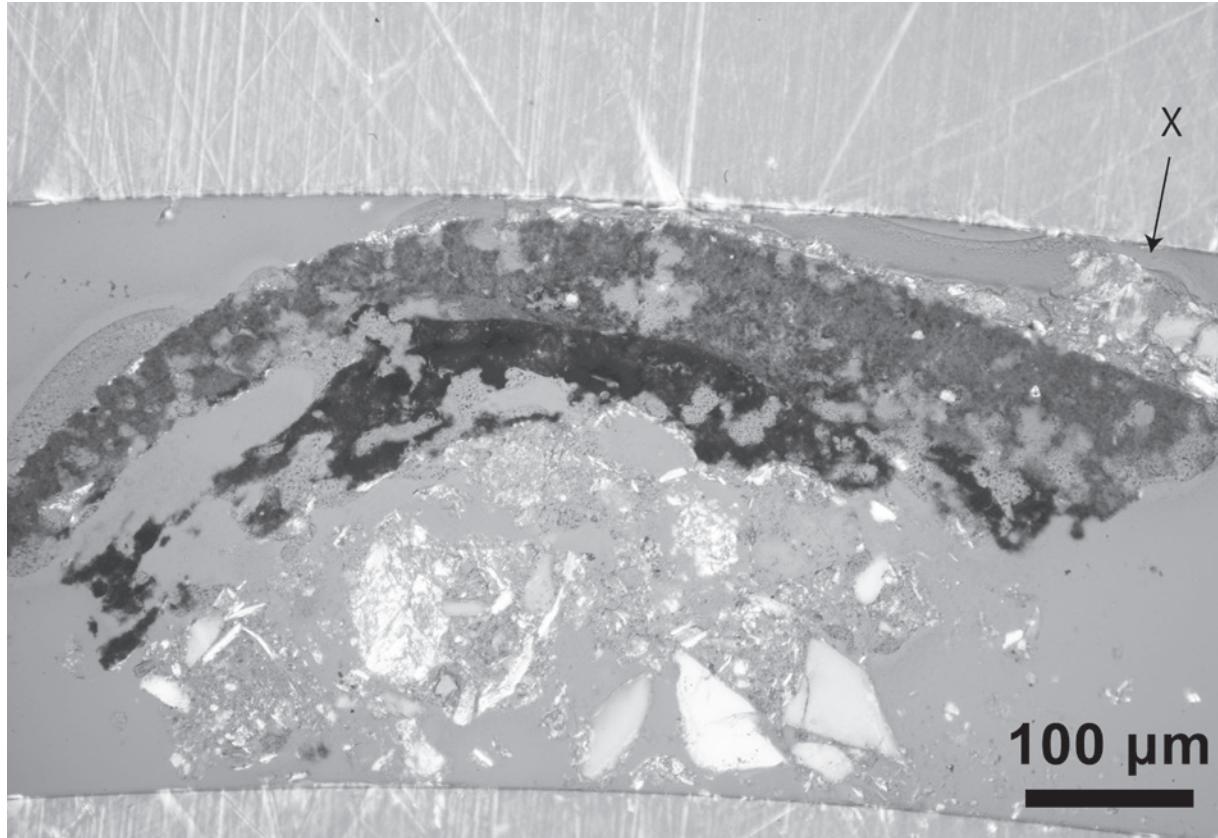


写真23 堅櫛 200倍 透過偏光

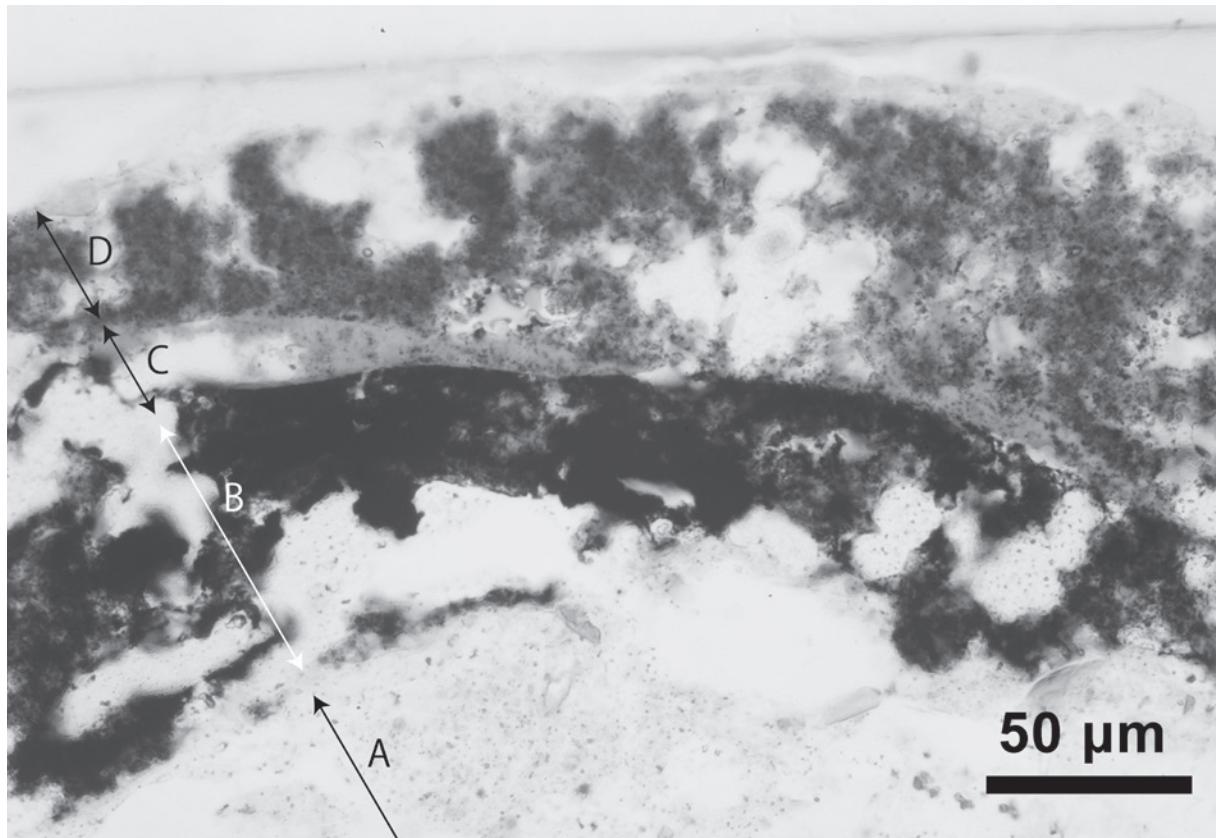


写真24 堅櫛 500倍 透過光

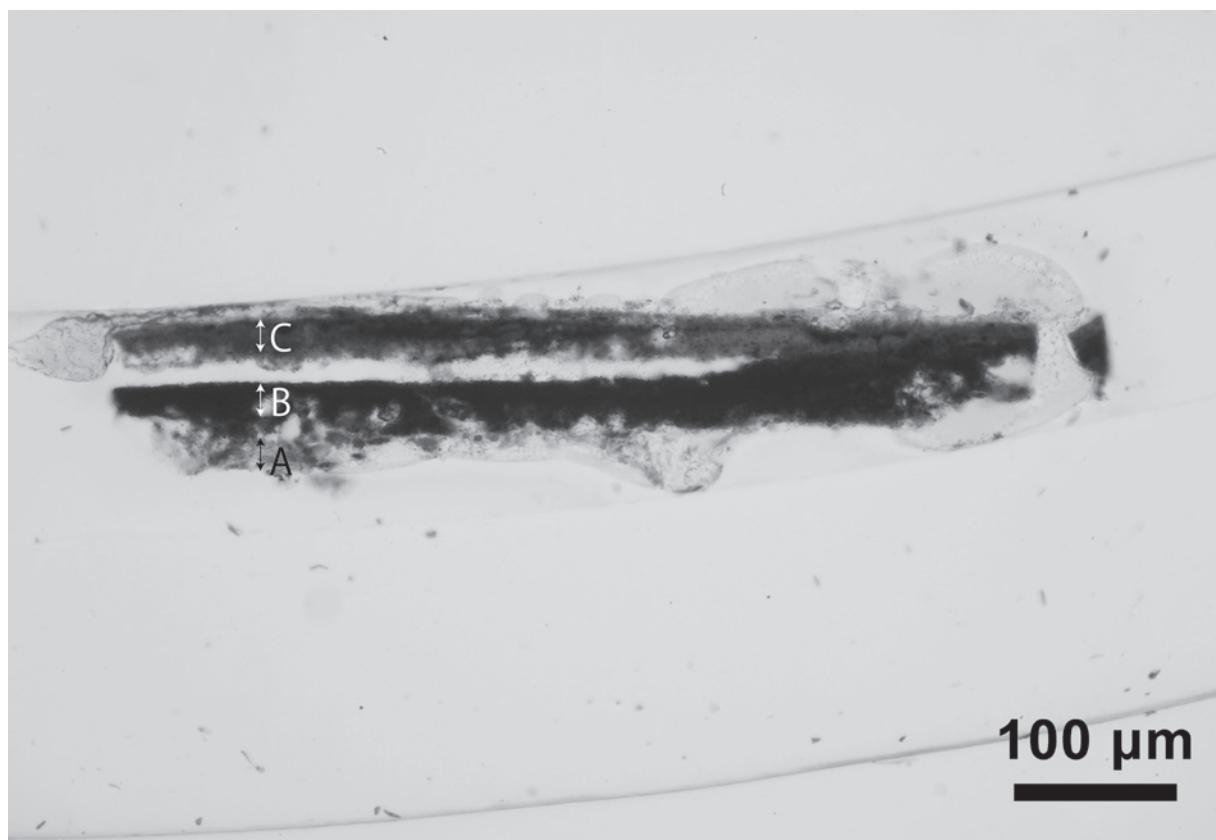


写真25 大刀鞘尻 透過光 200倍

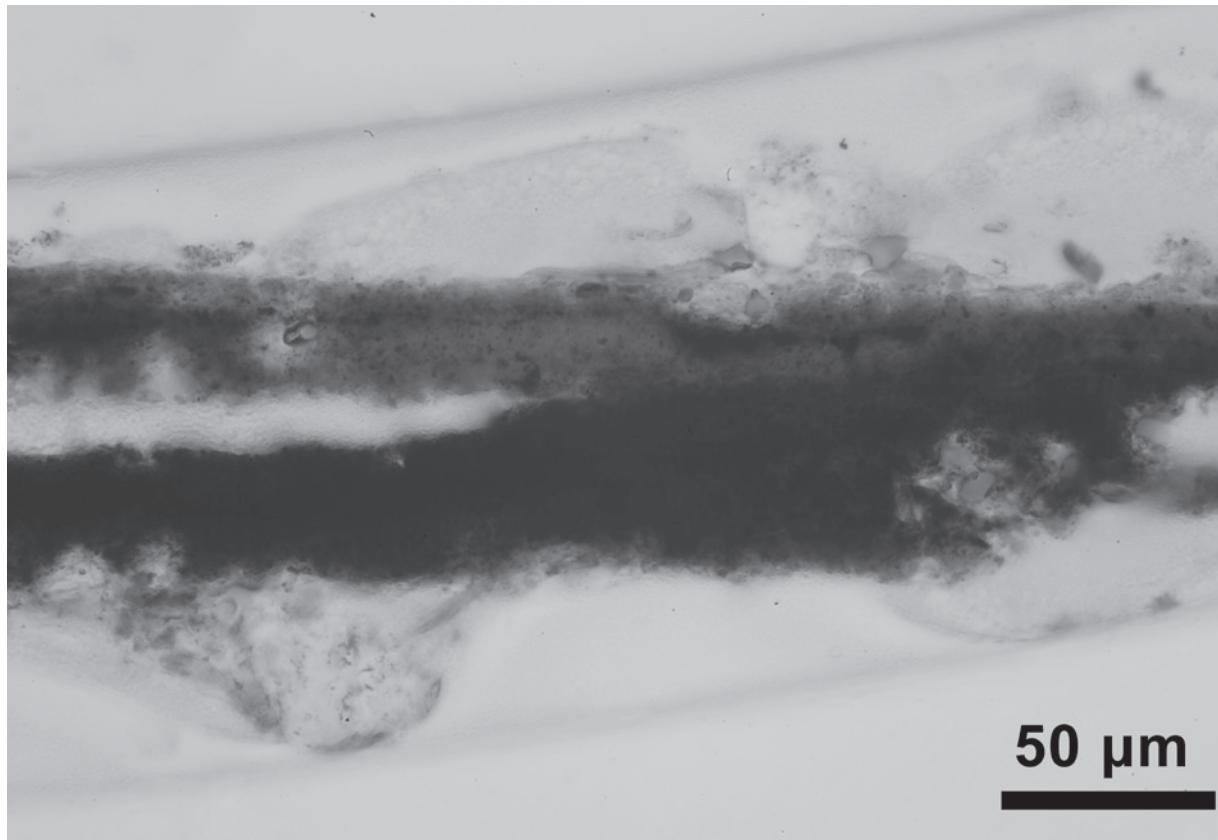


写真26 大刀鞘尻 透過光 500倍



写真27 盾（赤色） 透過光 200倍

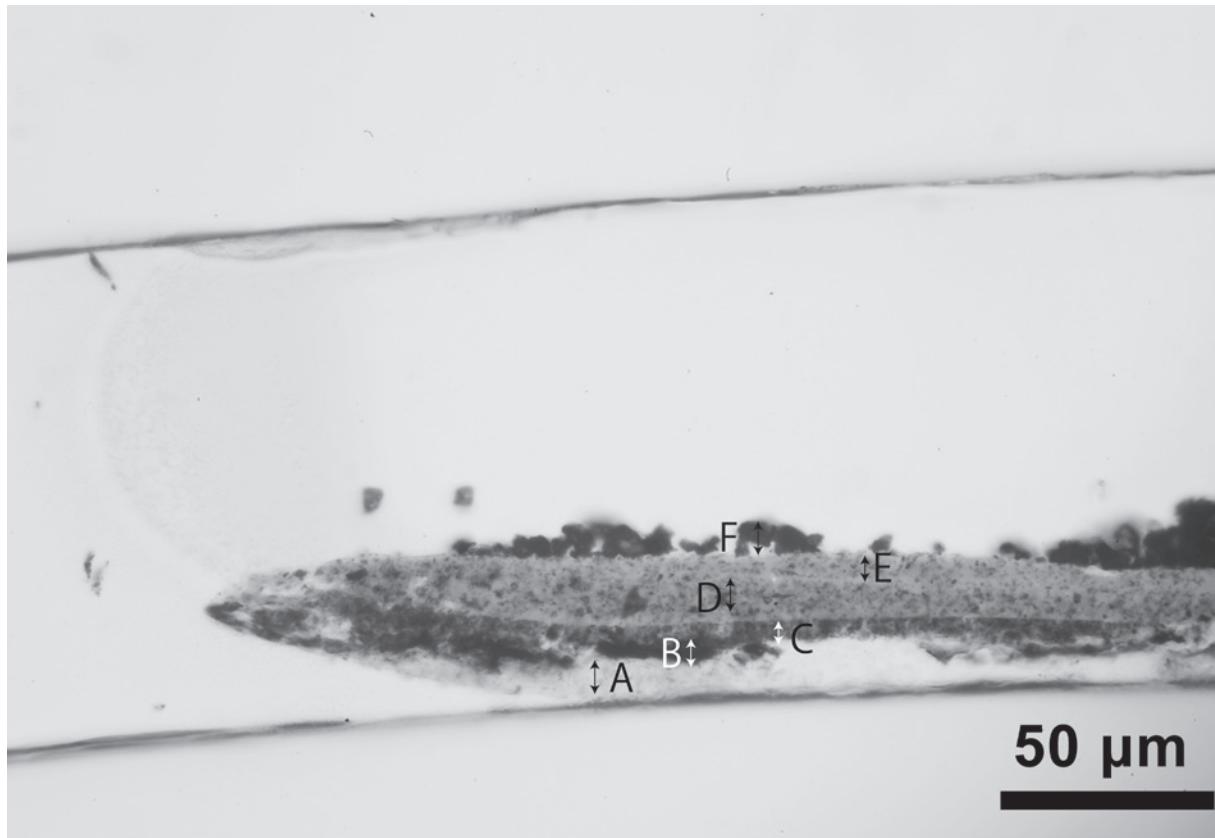


写真28 盾（赤色） 透過 500倍

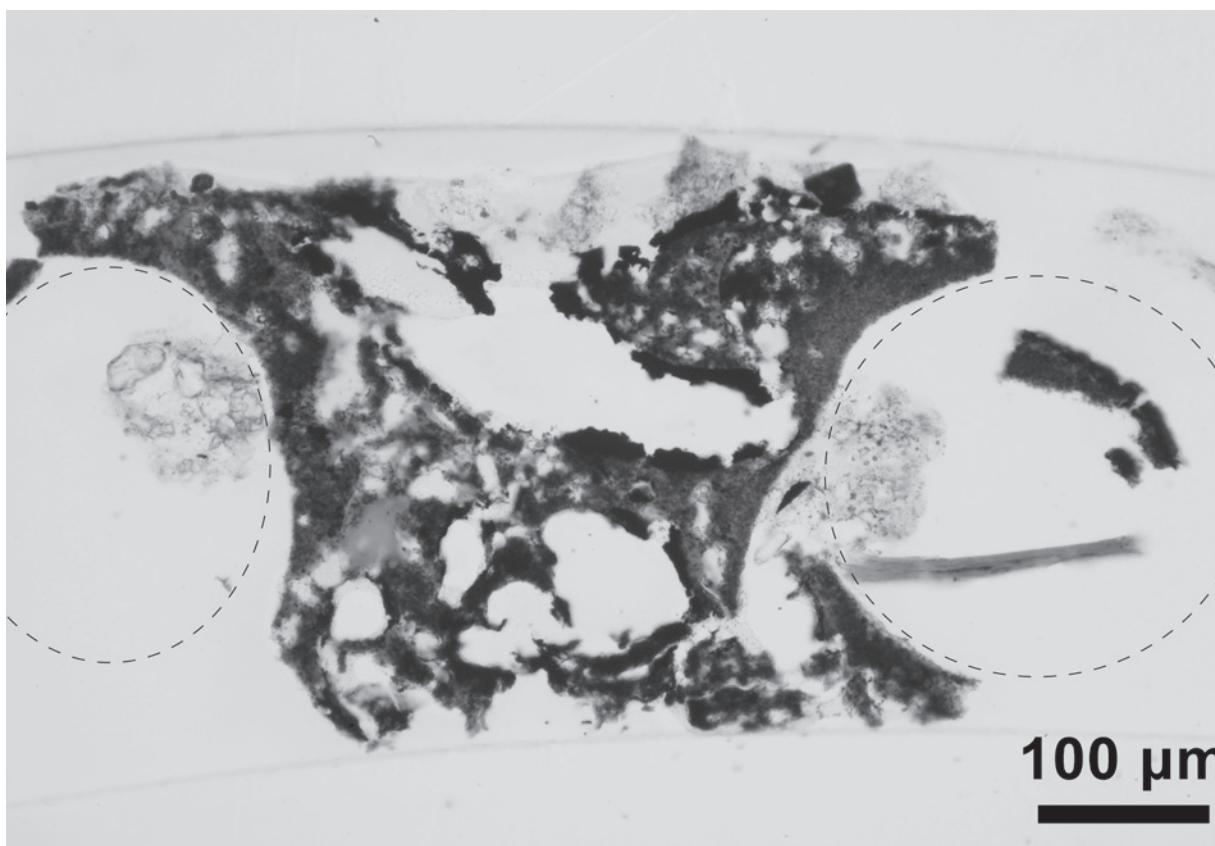


写真29 盾（黒色） 透過光 200倍

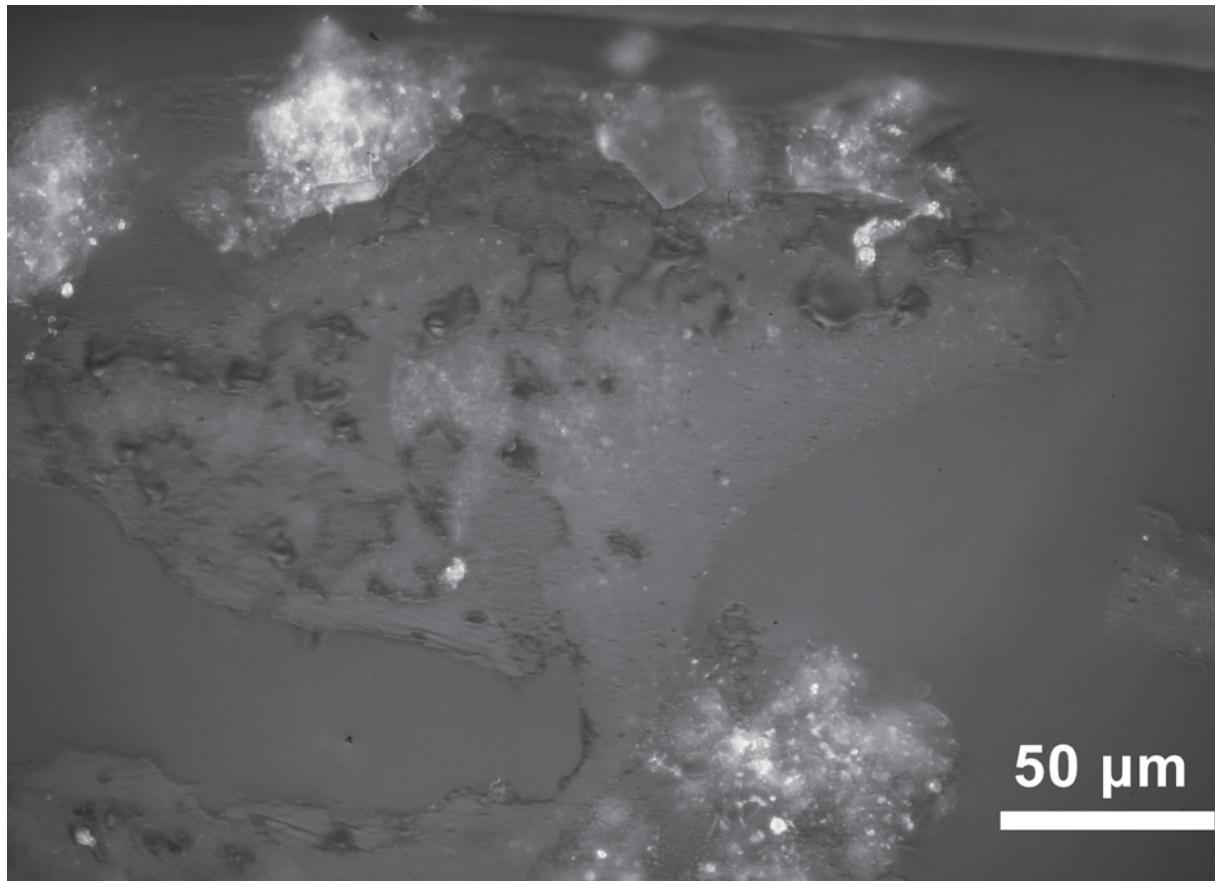


写真30 盾（黒色） 反射偏光 500倍

## （2）蛍光X線分析（XRF）

### ア 測定の詳細

試料に用いられている無機材料や顔料を特定するために、エネルギー分散型蛍光X線分析システム XGT-5200(株式会社堀場製作所)を用いて元素分析を行った。これはRhターゲットを備えたX線導管（最大50kV、1mA）とシリコンドリフト検出器を備えており、検出可能な元素は周期表11-92(Na-U)までである。測定は定性分析においてX線導管径を100 μmとした。

### イ 結果

#### ①堅櫛

下地部分からは鉄とケイ素が、表面の塗膜部分は鉄が強く検出された。このことから、下地は鉱物由来のものを多く含んでいるというクロスセクション像と共に結果となった。塗り部分は赤色塗りではないが鉄が混合されていることが分かった。粒子などの存在は認められないため、どのような形態で混合されているかは分からぬ。

#### ②大刀鞘尻

大刀の鞘尻部分に関しても堅櫛と同様に塗膜内に鉄の存在が確認できた。堅櫛、大刀鞘尻の測定結果から、断面において黒色に見えている部分に鉄が含まれており、濃い茶褐色に見える部分には鉄は含まれていないことがわかった。

#### ③盾

赤色、黒色いずれの箇所であっても上2件と同様に塗膜内から鉄が強く検出された。赤い部分は水銀で構成されていた。

### (3) 反応熱分解-GC/MS

#### ア 測定手順

試料に含まれる材料および漆の詳細な成分分析を行うために 反応熱分解(THM)-GC/MS分析を行った。この測定に供した試料は0.1～0.3 mg程度である。測定に使用したのは熱分解装置PY-3030D（株式会社フロンティアラボ）を接続したガスクロマトグラフ質量分析計6890N/5875 GC/MS system(Agilent Technologies)である。使用カラムは30 m×0.25 mm×0.25 mmのUltra ALLOY-1(MS/HT)（株式会社フロンティアラボ）である。測定はスプリットモードで行い、スプリット比は20: 1とした。インジェクション温度とインターフェース温度は共に280°Cで維持し、オープン温度は40°Cで2分間保持した後、12°C/minで昇温、320°Cに達した後、10分間保持した。キャリアガスとしてヘリウムを用いて、一定流量として1.0 mL/minを保った。測定範囲は $m/z$  29–800で、イオン化法はEIである。得られたデータは解析ソフトMSD ChemStationで解析した。

試料はパラロイドB72で保護されていたため、アセトンへの浸漬と乾燥を繰り返し表面に付着したB72を極力除去したのちに分析に供した。また、漆の成分の同定に有効な反応熱分解法を本試料では用いた。そのため、熱分解時に水酸化テトラメチルアンモニウム(TMAH)を試料と混合して熱分解を行った。

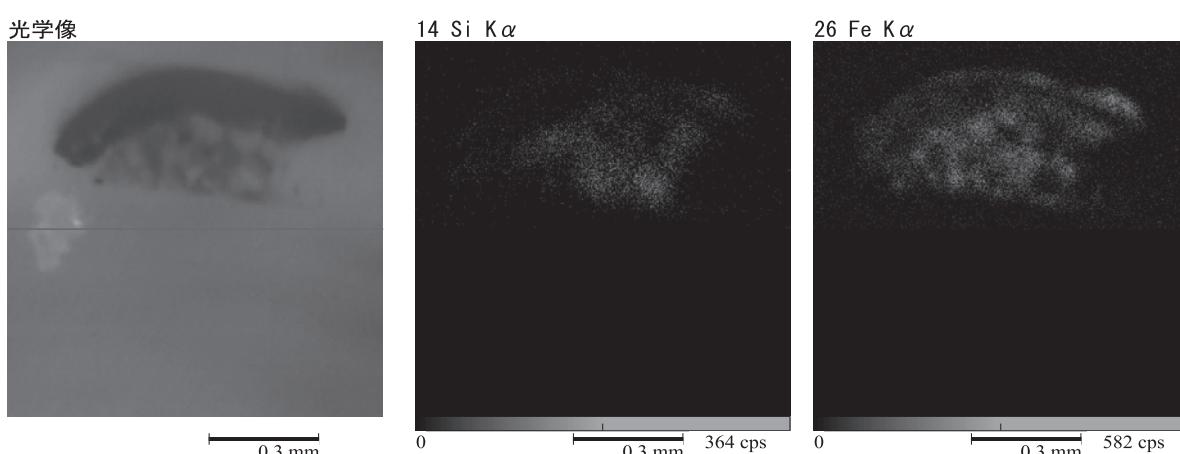
#### イ 測定結果

今回測定した4試料に関しては全てからステアリン酸メチルとパルミチン酸メチルが多く検出された(第160図)。これらの成分は乾性油(菜種油やごま油、アマニ油等)に特徴的なものである。また、 $m/z$  151は漆のバイオマーカーであるウルシオールの誘導体化物の検出に有効であり、今回の試料からはこれらの成分が検出された(第161図)。よって、本試料は漆と油の混合物を塗布された物であると判断した。おそらく、漆にあまり多くの油を混ぜると緩くなってしまうので、今回検出された乾性油は下地に主に混合されたのではと考えている。

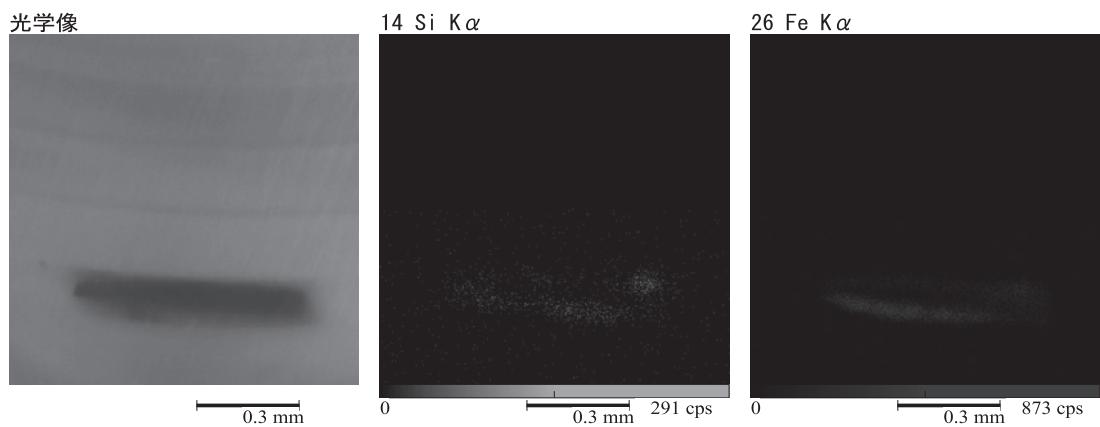
特徴的な成分としては4つのうち3つからスクアレンが検出された。スクアレンは人の皮脂に含まれる成分である。表面に付着した皮脂は洗浄によって洗い落とされているはずであり、塗膜内に含まれていたと考えるのが妥当である。よって、これらの皮脂は漆の塗布の作業中に入ったものでは無いかと推察される。

### (4) 全体を通しての考察

今回の4試料に関しての分析から、同古墳の試料には鉄を利用した漆が利用されていることが明らか

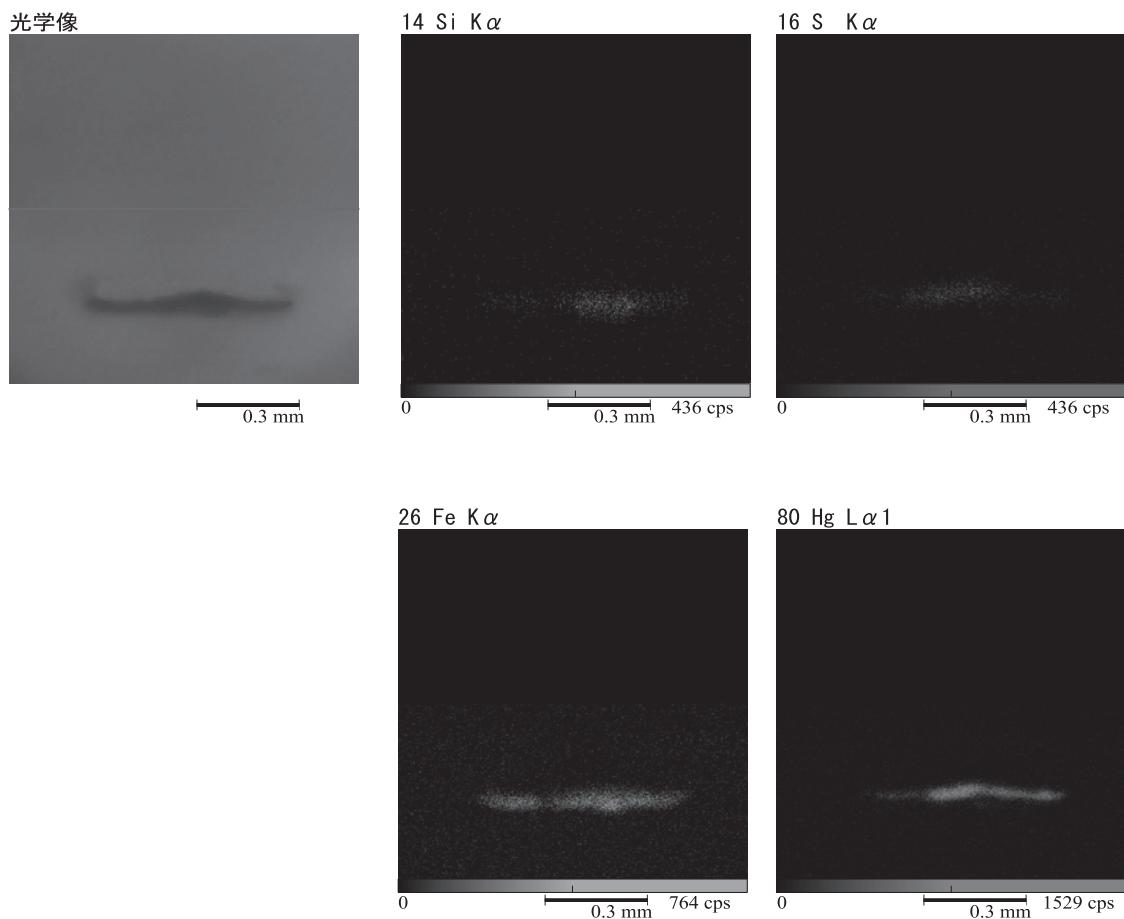


第156図 ED-XRF測定結果(堅櫛、ケイ素、鉄)



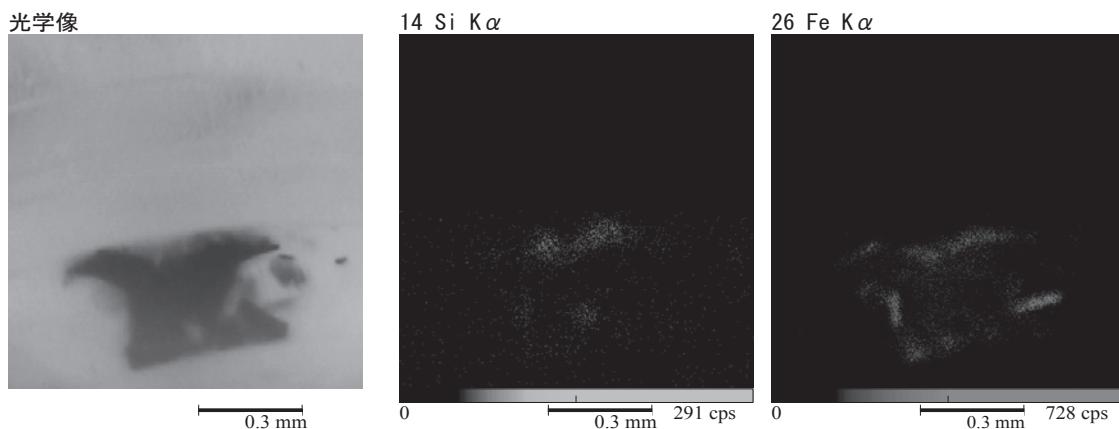
第157図 ED-XRF測定結果（大刀鞘尻、ケイ素、鉄）

八幡ヶ谷 赤色 4-1 CSmap. MPX



第158図 ED-XRF測定結果（盾（赤色）、ケイ素、硫黄、鉄、水銀）

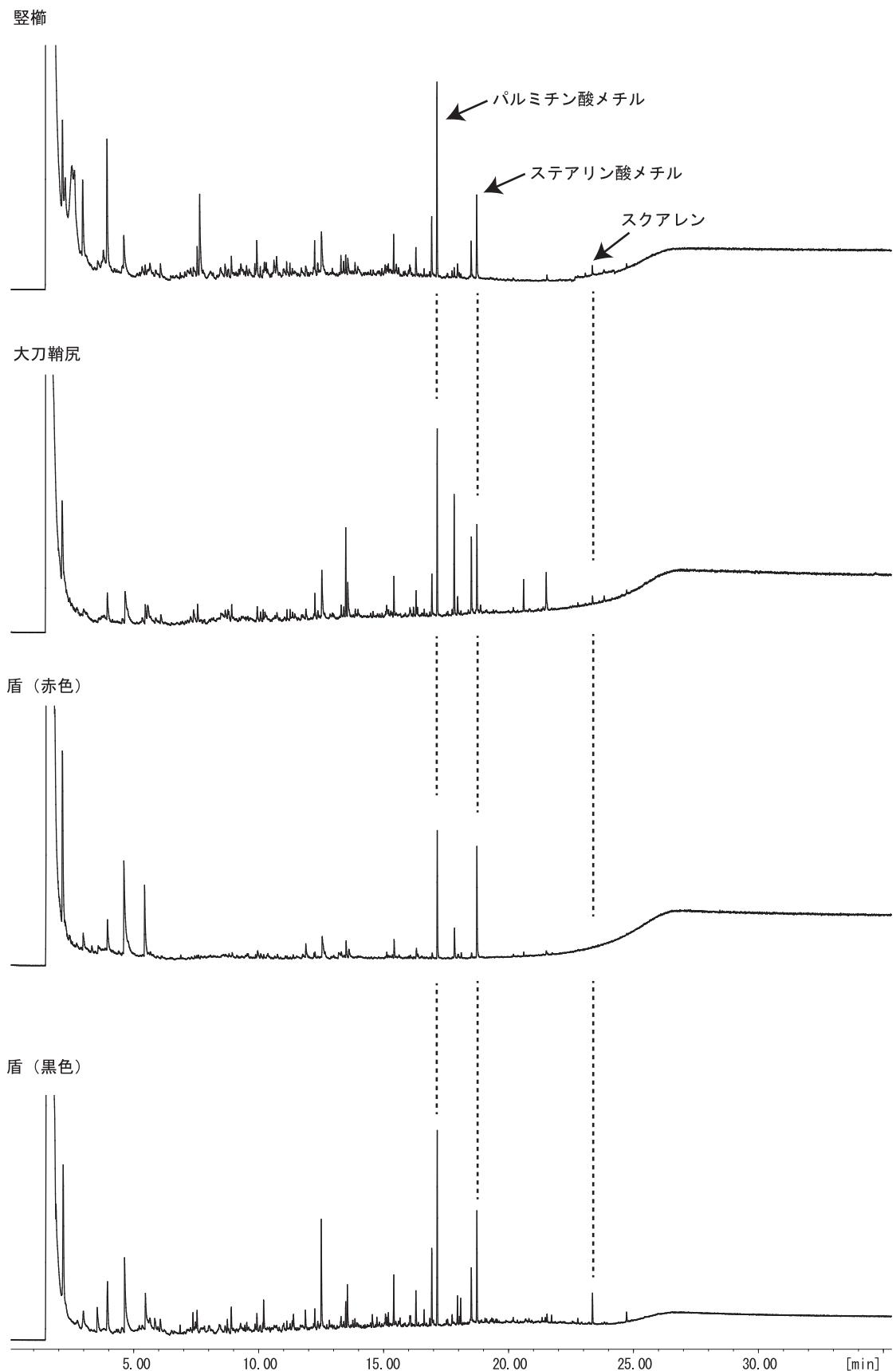
八幡ヶ谷 黒色 CSmap. MPX



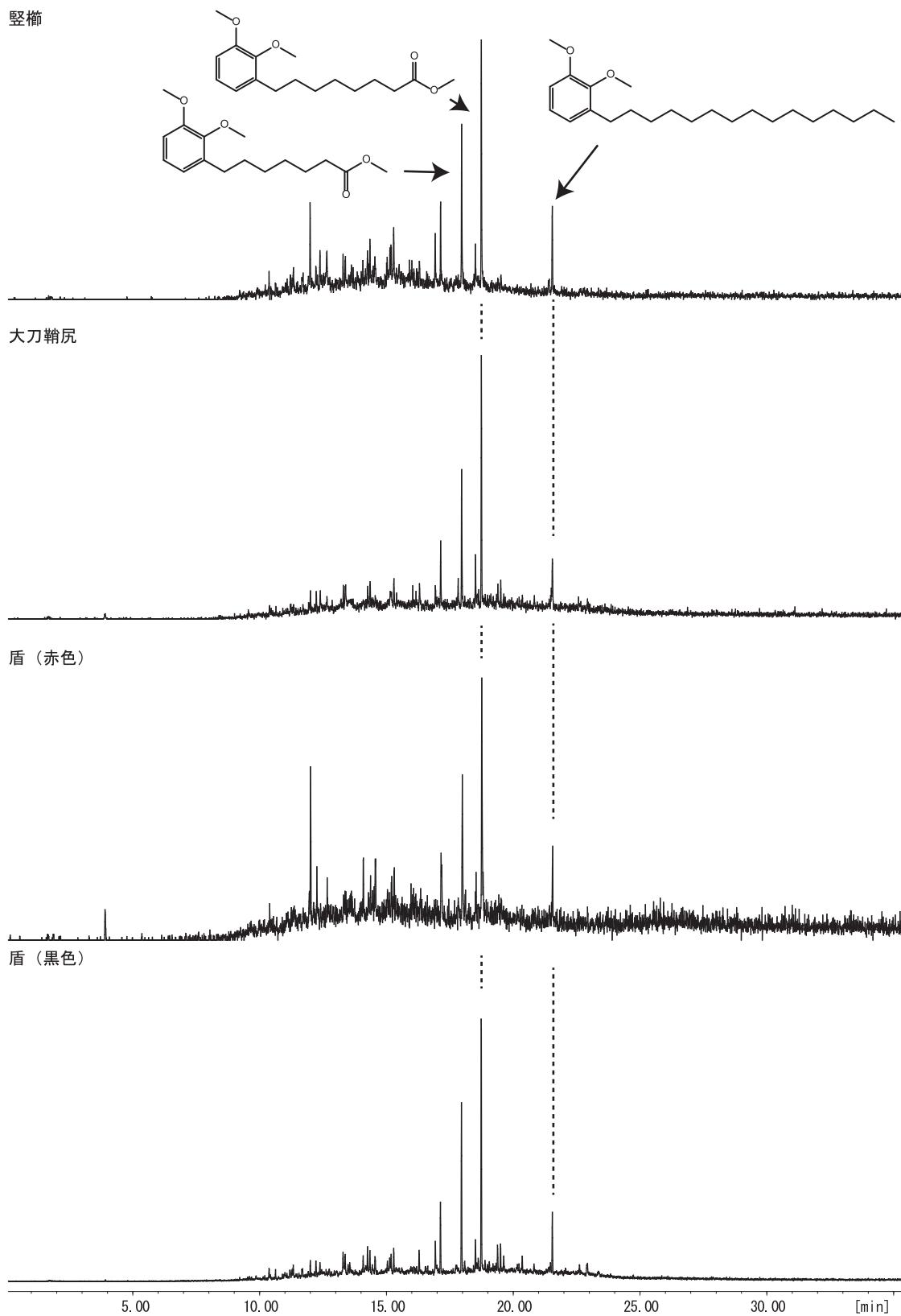
第159図 ED-XRF測定結果（盾（黒色）、ケイ素、鉄）

となった。鉄は通常、弁柄（酸化鉄）＝赤色顔料として利用されることが多いがこの古墳ではそのような利用ではなく何らかの方法で鉄を漆液内に混入していることが分かった。この点に関しては油が非常に多く検出された部分と併せた検討を行う予定である。

また、水銀朱による赤色の塗装も漆が固まる前に粉末の水銀朱を押しつけることで調整が行われていた。1つの可能性として、漆に顔料を混ぜて硬化させた場合には漆の褐色が顔料と混ざり合ってしまい鮮やかな色を出しにくいので、より鮮やかにする工夫として水銀朱を漆に混ぜずに塗布する方法を考案したのではないだろうか。



第160図 八幡ヶ谷古墳のトータルイオンクロマトグラム



第161図 八幡ヶ谷古墳のイオンクロマトグラム ( $m/z$  151)

## 第3節 高橋遺跡出土大型植物遺体・土器顔料蛍光X線分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

静岡県菊川市高橋地区に所在する高橋遺跡では、弥生～古墳時代にかけての溝や掘立柱建物跡、自然流路が確認されている。

本分析調査では、溝から出土した種実について同定を行い、当時の植物利用や植生について検討するとともに、遺物包含層から出土した赤彩土器について、赤色顔料の種類を調べるために蛍光X線分析を実施する。

### 1 種実同定

#### (1) 試料

試料は、1-1区のSD 8より出土した種実遺体2個（No.1・2）と、2-1区北のSD 8 bより出土した種実遺体4個（No.3～6）の、計6個である。各試料の詳細は、同定結果とともに第10表に示す。

#### (2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、種実遺体の写真を添付し、大きさをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に併記して同定根拠とする。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。

#### (3) 結果

同定および計測結果を第10表に、種実遺体の写真を写真31に示す。SD 8の2個（No.1・2）は針葉樹のイヌガヤの種子に、SD 8の4個（No.3～6）は栽培種のモモの核に同定された。以下、形態的特徴等を述べる。なお、学名は佐竹ほか編（1989a,b）に依拠した。

- ・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch) イヌガヤ科イヌガヤ属 写真番号1・2  
種子は暗灰褐色、長さ14.9mm、幅9.4mm、厚さ8.1mmと、長さ16.5mm、幅9.6mm、厚さ7.8mmのやや偏平な倒卵形。基部はやや尖り、基部から半ば付近の両側に稜がある。種皮は硬く木質で、表面は粗面。
- ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクランボ属 写真番号3～6  
核（内果皮）は灰褐色、長さ21.8～30.0mm、幅20.0～23.3mm、厚さ16.6～18.0mmのやや偏平な広楕円体。頂部は尖る個体（No.3・5・6）と丸い個体（No.4）がみられる。内果皮表面には縦に流れる

第10表 種実同定結果一覧表

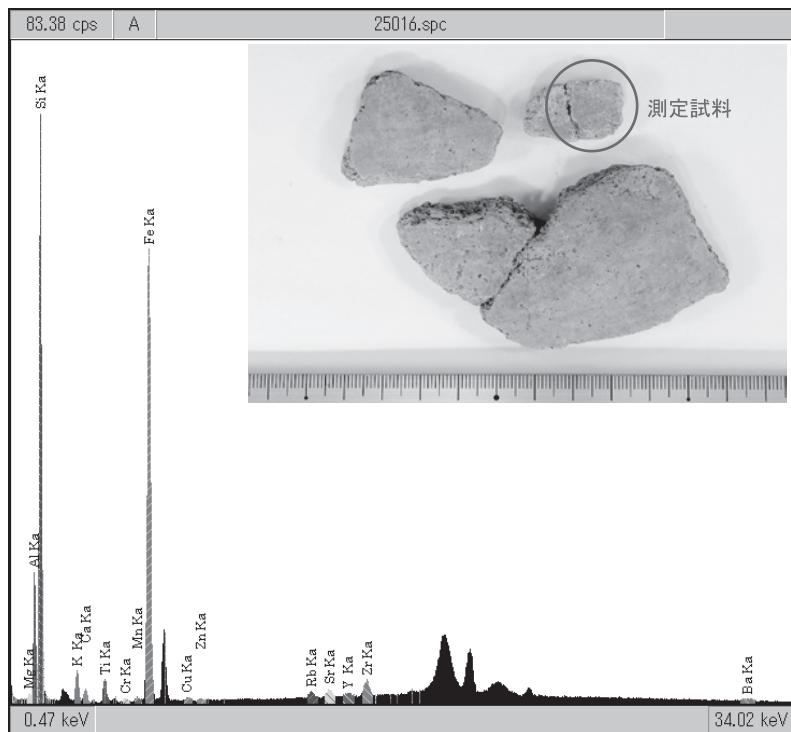
No.	地区名	グリッド	遺構名	層位	取上No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	分類群	部位	状態	個数	図版番号	備考
1	1-1 区 S	V33S	SD8	下層	248	14.90	9.35	8.07	イヌガヤ	種子	完形	1	1	
2	1-1 区 S		SD8	粘土～砂礫 まじり 6層	303	16.47	9.62	7.81	イヌガヤ	種子	完形	1	2	
3	2-1 区 N		SD8	中下層	425-1	25.66	20.03	16.59	モモ	核	完形	1	3	頂部尖る
4	2-1 区 N		SD8	中下層	425-2	21.77	20.44	17.13	モモ	核	完形	1	4	頂部丸い
5	2-1 区 N		SD8	中下層	505	30.01	23.26	17.98	モモ	核	完形	1	5	頂部尖る
6	2-1 区 N		SD8	下層	514	25.19	19.38	7.63	+ モモ	核	半分	1	6	頂部尖る 内面種子瘤み：長さ 17.49, 幅 11.18mm

注）計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「+」で示す。

## [測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	218
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 ( $\mu$ A)	9
フィルタ	なし
マイラー	OFF

## [スペクトル]



## [結果]

Z	元素	元素名	ライン	積分強度 (cps)	R O (keV)
12	Mg	マグネシウム	K $\alpha$	10.601	1.15 - 1.36
13	Al	アルミニウム	K $\alpha$	97.004	1.38 - 1.59
14	Si	ケイ素	K $\alpha$	437.792	1.63 - 1.85
19	K	カリウム	K $\alpha$	29.263	3.19 - 3.44
20	Ca	カルシウム	K $\alpha$	16.840	3.56 - 3.82
22	Ti	チタン	K $\alpha$	25.038	4.37 - 4.65
24	Cr	クロム	K $\alpha$	7.725	5.27 - 5.56
25	Mn	マンガン	K $\alpha$	9.796	5.75 - 6.05
26	Fe	鉄	K $\alpha$	463.954	6.25 - 6.55
29	Cu	銅	K $\alpha$	11.161	7.87 - 8.21
30	Zn	亜鉛	K $\alpha$	9.976	8.46 - 8.80
37	Rb	ルビジウム	K $\alpha$	26.100	13.17 - 13.58
38	Sr	ストロンチウム	K $\alpha$	30.113	13.93 - 14.35
39	Y	イットリウム	K $\alpha$	25.506	14.72 - 15.15
40	Zr	ジルコニウム	K $\alpha$	46.235	15.53 - 15.96
56	Ba	バリウム	K $\alpha$	17.497	31.76 - 32.36

第162図 赤彩土器（1-2区Ⅱ層）の蛍光X線定性スペクトル

不規則な線状の深い窪みがあり、粗いしづわ状にみえる。No.6は縫合線に沿って割れた半分で、内面には、種子1個が入る長さ17.5mm、幅11.2mmの広卵状の窪みがある。

#### (4) 考察

種実同定の結果、栽培種のモモと針葉樹のイヌガヤが確認された。

2-1区北のSD 8より出土したモモは、栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や種子が食用、薬用、祭祀等に広く利用される。出土核は、近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、遺構内への投棄等の人為的行為が推測される。また、頂部が丸い核や尖る核が確認されたことから、複数の系統の利用が示唆される。

1-1区のSD 8より出土したイヌガヤは、山地の暗く湿った広葉樹林内に生育する常緑低木～小高木である。周辺の森林に生育していたと考えられる。また、イヌガヤは種子が油料に、種子を包む外種皮が食用に利用可能である。出土種子に利用痕跡は確認されないが、食物質食料として利用された可能性は充分に考えられる。

## 2 土器顔料蛍光X線分析

#### (1) 試料

試料は、1-2区 II層出土の赤彩土器（第141図576）1点である。なお、赤彩は土器外面にのみに認められるが、付着量は乏しい。

#### (2) 分析方法

調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）である。本装置は、下面照射型の装置であり、X線管球はRh、コリメーターサイズは10mm $\phi$ である。なお、分析は赤色顔料が付着する土器外面を対象に実施した。測定条件の詳細は結果とともに図中に記した。

#### (3) 結果および考察

蛍光X線定性スペクトルを第162図に示す。

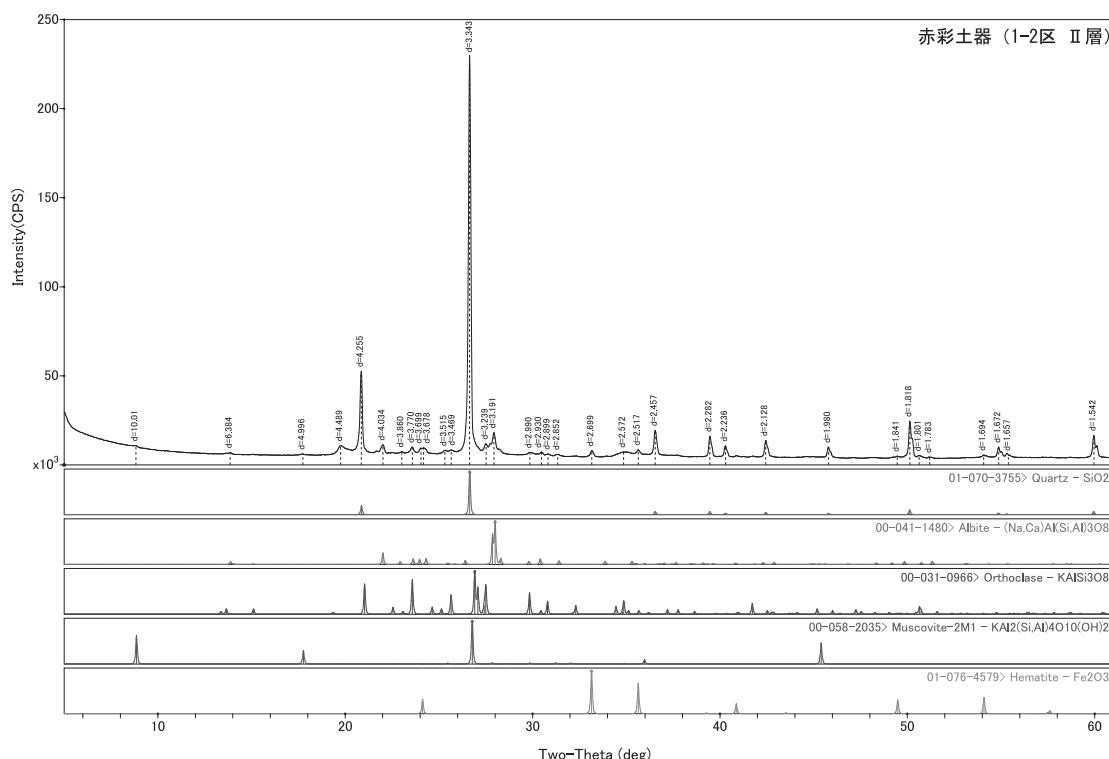
赤色顔料として利用される代表的な顔料鉱物としては、ベンガラ（赤鉄鉱；hematite[ $\alpha$ -Fe2O3]）のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar[HgS]）、鉛丹（鉛丹；minium[Pb3O4]）がある。これら顔料鉱物の科学的調査法としては、蛍光X線分析法等を利用して鉄(Fe)や水銀(Hg)、硫黄(S)あるいは鉛(Pb)を検出することによって顔料を識別する手法と、X線回折法を利用して得られる結晶構造の特徴から赤鉄鉱、辰砂、鉛丹などの顔料鉱物を同定する手法があり、非破壊分析を前提とした調査では蛍光X線分析法が選択されることが多い。

調査結果では、赤彩面においてMg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Cr（クロム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Cu（銅）、Zn（亜鉛）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）、Ba（バリウム）を認めた。これらの検出元素は、基本的に土器胎土の構成元素と捉えられるが、水銀と鉛が検出されていない点から、赤彩に水銀朱や鉛丹を用いている可能性は低い。鉄は土器胎土にも含まれる元素ではあるものの、消去法で考えれば酸化鉄系顔料であるベンガラの可能性が高い。

確認までに、赤彩土器から削取した赤色顔料試料をX線回折分析に供試したところ（第163図）、石英（quartz）、斜長石（曹長石；albite）、カリ長石（正長石；orthoclase）、雲母鉱物（白雲母；muscovite）のほか、赤鉄鉱（hematite）を認めた。赤彩には狭義のベンガラにあたる赤色顔料が利用されていることが確認されるとともに、他の検出鉱物と比べて赤鉄鉱の反射強度が低いことより、ベンガラとしての純度が低い可能性が考えられる。

## 引用文献

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編, 1989a, 日本の野生植物 木本 I . 平凡社, 321p.
- 佐竹義輔・原 寛・亘野俊次・富成忠夫編, 1989b, 日本の野生植物 木本II, 平凡社, 305p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック  
草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—. 誠文堂新光社, 272p.



第163図 赤彩土器（1-2区 II層）の蛍光X線回析図



1. イヌガヤ 種子(No.1)  
2. イヌガヤ 種子(No.2)  
3. モモ 核(No.3)  
4. モモ 核(No.4)  
5. モモ 核(No.5)  
6. モモ 核(No.6)

写真31 種実遺体

## 第4節 中山遺跡・高橋遺跡出土石器・石製品の石材

株式会社 古環境研究所

### 1 はじめに

本報告では、菊川市高橋に所在する中山遺跡と高橋遺跡から出土した石器について、肉眼観察および実体顕微鏡観察を行い、岩種の同定を行った。

### 2 試料と方法

試料は、中山遺跡と高橋遺跡より出土・採取された石器 28 点である。試料の詳細を第 11 表に、試料の写真を写真 32 ~ 36 に示す。同定は、肉眼ならびに 20 倍の実体顕微鏡で観察して行った。

第 11 表 中山遺跡・高橋遺跡石材一覧

整理番号	種別	員数	遺跡名	番号	挿図No.	長さ(径) (cm)	幅(高さ) (cm)	厚さ(孔径) (cm)	重量 (g)	備考
1	臼玉	1	高橋遺跡	TTH190	113	0.50	0.37	0.20	0.09	
2	臼玉	1	高橋遺跡	TTH649	114	0.53	0.36	0.20	0.15	
3	臼玉	1	高橋遺跡	TTH651	115	0.56	0.37	0.23	0.11	
4	臼玉	1	高橋遺跡	TTH650	116	0.60	0.47	0.20	0.19	
5	臼玉	1	高橋遺跡	TTH646	347	0.49	0.46	0.16	0.17	
6	臼玉	1	高橋遺跡	TTH648	348	0.42	0.29	0.15	0.08	
7	臼玉	1	高橋遺跡	TTH647	349	0.43	0.33	0.19	0.07	
8	臼玉	1	高橋遺跡	TTH229	350	0.51	0.19	0.21	0.05	
9	臼玉	1	高橋遺跡	TTH S-3	598	0.54	0.35	0.18	0.16	
10	有孔円盤	1	高橋遺跡	TTH S-2	490	2.10	3.85	0.50	6.68	孔 2 箇所
11	有孔石製品	1	高橋遺跡	TTH317	351	3.05	2.40	0.55	5.25	孔 1 箇所
12	有孔円盤	1	高橋遺跡	TTH184	575	3.35	3.50	0.40	6.85	孔 2 箇所
13	有孔円盤	1	高橋遺跡	TTH248	352	2.20	2.80	0.35	2.56	孔 2 箇所
14	紡錘車	1	高橋遺跡	TTH16	574	3.90	—	1.40	23.95	
15	打製石鏃	1	高橋遺跡	TTH S-7	489	2.18	1.66	0.42	1.16	
16	砥石	1	高橋遺跡	TTH S-22	599	6.20	7.70	4.30	163.76	
17	砥石	1	中山遺跡	TNK145	51	3.10	3.25	1.55	16.90	
18	砥石	1	中山遺跡	TNK S-41	115	6.60	3.65	2.80	81.78	
19	砥石	1	中山遺跡	TNK S-54	116	5.50	5.20	3.00	59.42	
20	砥石	1	高橋遺跡	TTH S-23	600	7.65	3.35	4.65	120.27	
21	石皿?	1	高橋遺跡	TTH S-4	602	16.60	11.00	4.90	1147.10	
22	敲き石	1	高橋遺跡	TTH S-1	603	14.70	6.35	3.10	477.69	
23	敲き石	1	高橋遺跡	TTH S-24	601	10.45	4.10	1.35	92.22	
24	敲き石	1	高橋遺跡	TTH S-6	493	9.95	4.95	2.80	205.84	
25	敲き石	1	中山遺跡	TNK S-21	121	6.80	5.60	5.10	257.81	
26	軽石か	1	高橋遺跡	TTH S-18	491	4.30	3.95	3.10	14.52	
27	軽石	1	高橋遺跡	TTH S-19	492	4.05	3.35	2.00	8.84	
28	敲き石	1	高橋遺跡	TTH S-20	494	9.65	7.55	4.70	503.42	

### 3 所見

石材同定結果を第12表に示し、以下に判定の基準となった特徴を記載する。

#### ①滑石：白玉（1～9）、紡錘車（14）

硬度1と極めて柔らかい。樹脂光沢で、ガジリ部分が白く粉っぽい様子を示す。手で触ると手に粉がつきすべすべな感じとなる。

#### ②クリノクロア（緑泥石の一種）：有孔円盤（10～13）

硬度は2～2.5、緑色・青緑色・灰緑色である。1方向の劈開が完全で、真珠光沢を示す。滑石に似るが滑石より硬く、触った手のすべすべな感じが滑石と比べ弱い。平らな面で剥がれる性質が明瞭である。

#### ③珪質頁岩：打製石鏃（15）

黒色で鋭い割れ口、弱い光沢および透明感が認められる。

#### ④流紋岩：砥石（16、18、20）

白色～明灰褐色で、石英結晶が点在する。

#### ⑤変質流紋岩：砥石（19）

淡帶緑明灰色で、石英結晶が点在する。淡く緑を帯びていることからグリーンタフ変質を受けていると判定される。

#### ⑥人造砥石：砥石（17）

黒い粒子（カーボランダム；炭化珪素）と推定される微粒子とそれを埋める明灰色の部分から構成される。天然の砥石には認められない様相を呈する。

#### ⑦砂岩：石皿？（21）、敲き石（22、24、28）

砂粒子の集合体である。

#### ⑧頁岩：敲き石（23）

極めて細粒で均質であり、粒子が全く認められない。

#### ⑨閃綠岩：敲き石（25）

粗粒でごま塩状な外観を呈する。有色鉱物（黒っぽい鉱物）3割程度に対し、無色鉱物（白っぽい鉱物）が7割程度を占めている。

#### ⑩軽石：軽石（27）

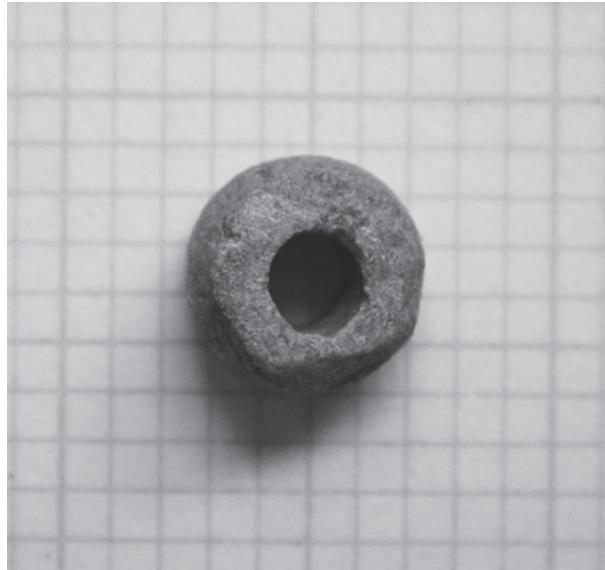
極めて多孔質で軽く、色は本来は白色だが被熱により灰色に変化している。石英や黒雲母の結晶が点在している。

#### ⑪鉱滓：軽石か（26）

極めて多孔質であるが、色は黒く、鉱物の結晶が全く認められないことから、人工的なものと判断される。

第12表 中山遺跡・高橋遺跡石材同定結果

整理番号	種別	番号	岩石種名
1	白玉	TTH190	滑石
2	白玉	TTH649	滑石
3	白玉	TTH651	滑石
4	白玉	TTH650	滑石
5	白玉	TTH646	滑石
6	白玉	TTH648	滑石
7	白玉	TTH647	滑石
8	白玉	TTH229	滑石
9	白玉	TTH S-3	滑石
10	有孔円盤	TTH S-2	クリノクロア（緑泥石）
11	有孔石製品	TTH317	クリノクロア（緑泥石）
12	有孔円盤	TTH184	クリノクロア（緑泥石）
13	有孔円盤	TTH248	クリノクロア（緑泥石）
14	紡錘車	TTH16	滑石
15	打製石鏃	TTH S-7	珪質頁岩
16	砥石	TTH S-22	流紋岩
17	砥石	TNK145	人造砥石
18	砥石	TNK S-41	流紋岩
19	砥石	TNK S-54	変質流紋岩
20	砥石	TTH S-23	流紋岩
21	石皿？	TTH S-4	砂岩
22	敲き石	TTH S-1	砂岩
23	敲き石	TTH S-24	頁岩
24	敲き石	TTH S-6	砂岩
25	敲き石	TNK S-21	閃綠岩
26	軽石か	TTH S-18	鉱滓
27	軽石	TTH S-19	軽石
28	敲き石	TTH S-20	砂岩



試料No. 1 滑石



試料No. 2 滑石



試料No. 3 滑石



試料No. 4 滑石



試料No. 5 滑石



試料No. 6 滑石

写真32 石材同定試料写真 1



試料No. 7 滑石



試料No. 8 滑石



試料No. 9 滑石



試料No. 10 クリノクロア



試料No. 11 クリノクロア



試料No. 12 クリノクロア

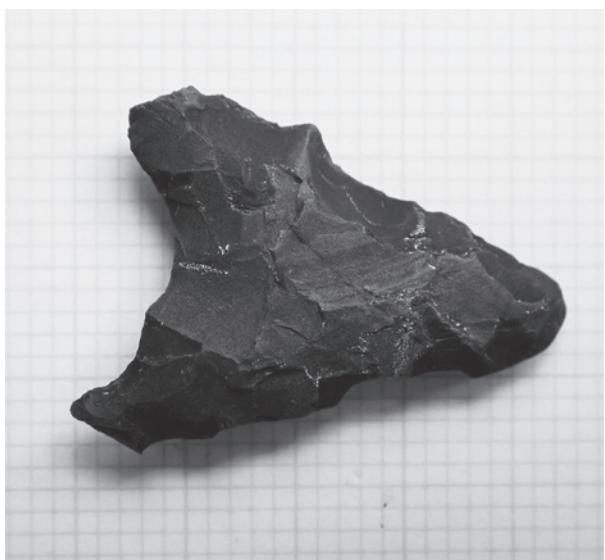
写真33 石材同定試料写真2



試料No. 13 クリノクロア



試料No. 14 滑石



試料No. 15 硅質頁岩



試料No. 16 流紋岩



試料No. 17 人造砥石



試料No. 18 流紋岩

写真34 石材同定試料写真3



試料No. 19 変質流紋岩



試料No. 20 流紋岩



試料No. 21 砂岩



試料No. 22 砂岩



試料No. 23 貝岩



試料No. 24 砂岩

写真35 石材同定試料写真 4



試料No. 25 閃綠岩



試料No. 26 鈦淬



試料No. 27 軽石



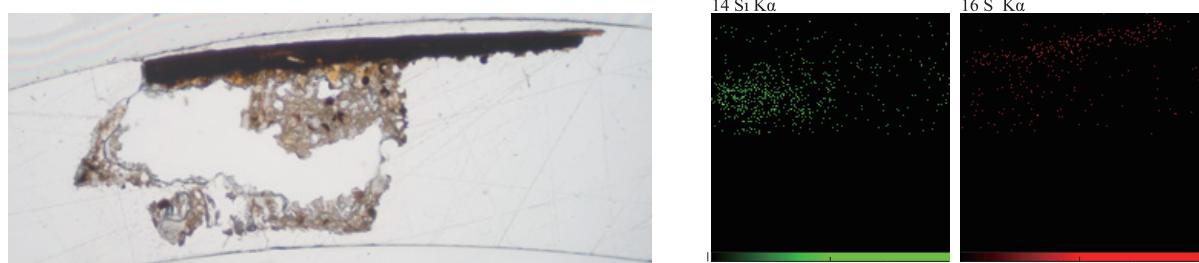
試料No. 28 砂岩

写真36 石材同定試料写真5

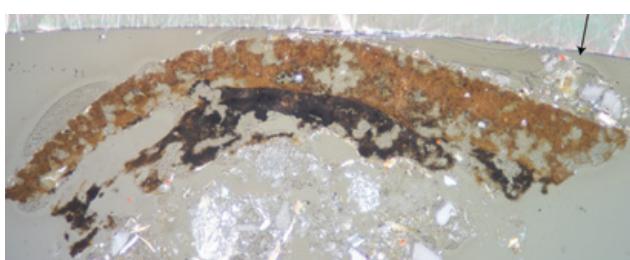
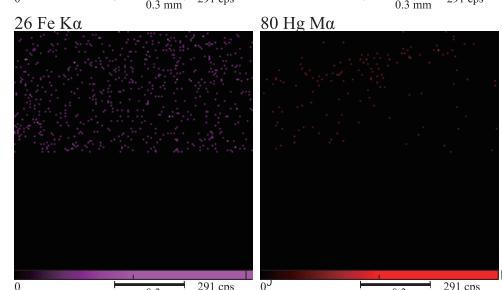
## 写真図版



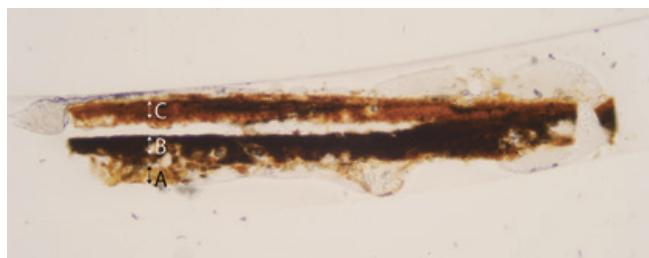
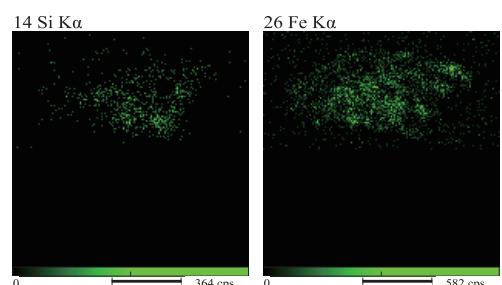
高橋遺跡 1-1区 SX 8遺物出土状況



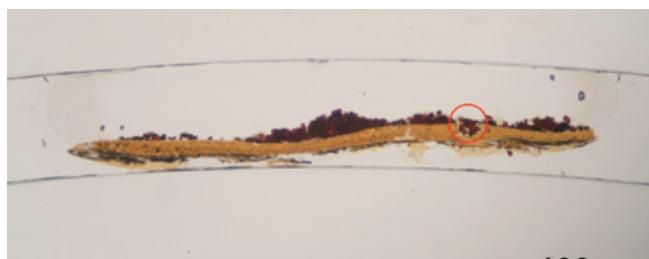
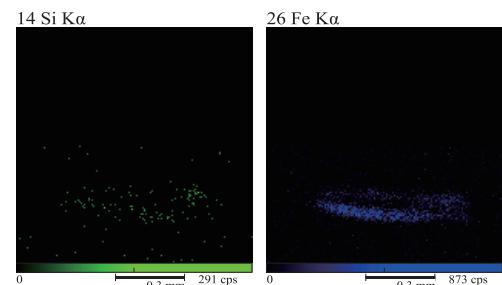
高橋遺跡 鞘尻



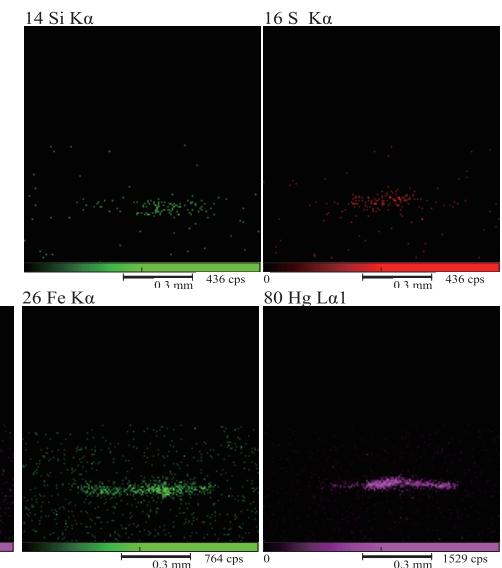
八幡ヶ谷古墳 豊櫛



八幡ヶ谷古墳 柄頭

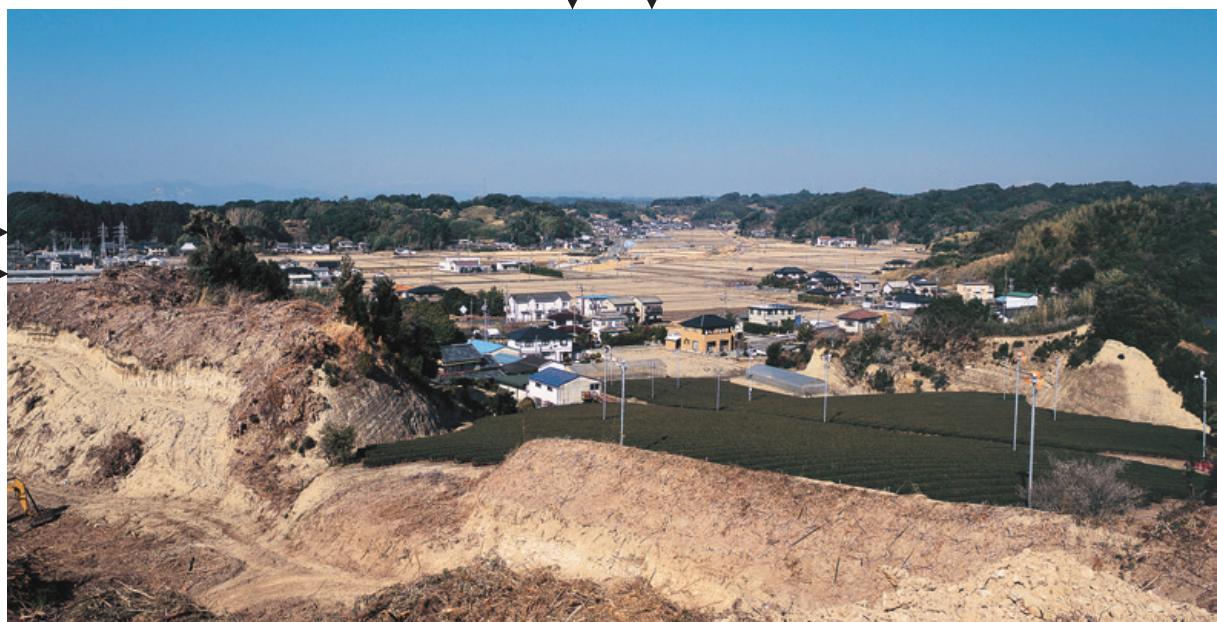


八幡ヶ谷古墳 盾



第8章第2節分析写真

図版1



1 池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡遠景（南西から）

▲の交点が調査対象範囲

池之谷遺跡 中山遺跡 高橋遺跡



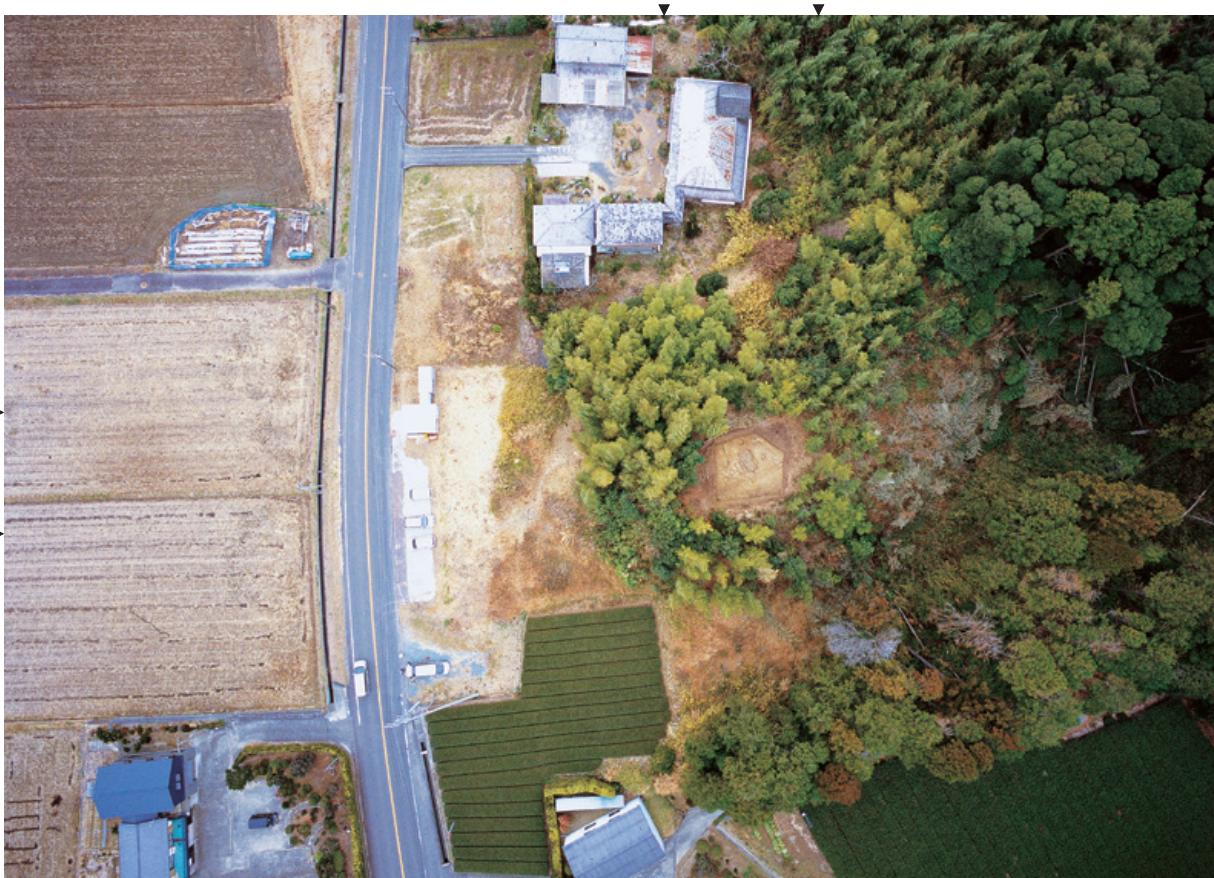
2 池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡遠景（南から）

## 図版2



1 池之谷遺跡遠景（南から）

▲の交点が調査対象範囲

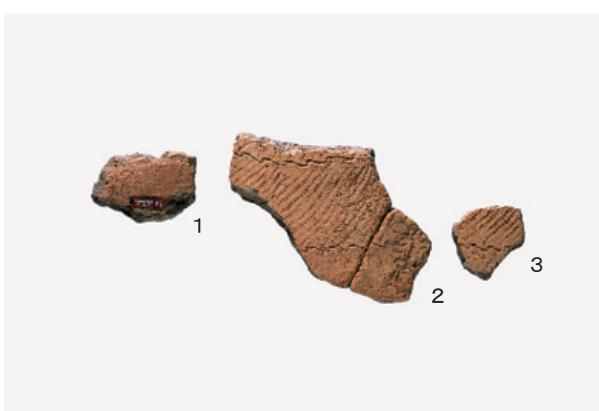


2 池之谷遺跡全景

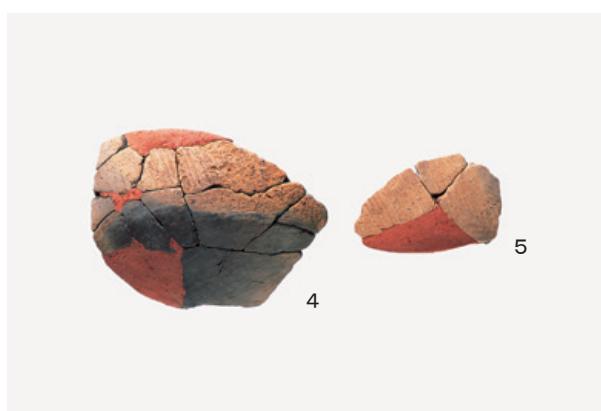
▲の交点が調査対象範囲



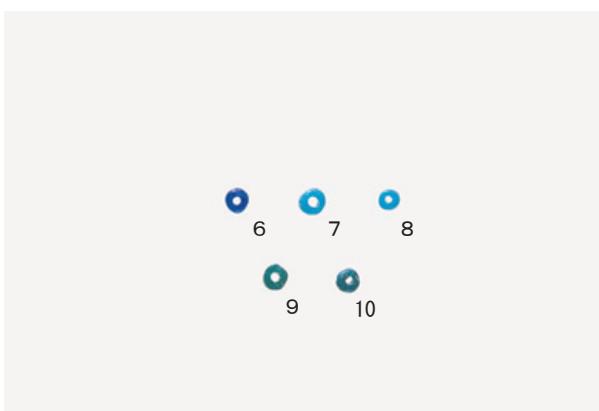
1 池之谷遺跡 完掘状況（北東から）



2 池之谷遺跡 出土土器 1



3 池之谷遺跡 出土土器 2



4 池之谷遺跡 出土ガラス小玉



5 池之谷遺跡 出土鉄製品

## 図版4



1 中山遺跡遠景（南東から）



2 中山遺跡遠景（北東から）

図版5



1 高橋遺跡遠景（北から）



2 高橋遺跡遠景（北東から）

図版6



1 高橋遺跡 1-2区 SR 2出土土器



2 高橋遺跡 1-1区 SX 8出土土器



1 高橋遺跡 1-1区・2-1区 SD 8出土土器



2 高橋遺跡 1-1区・2-1区 SD 8出土木製品

図版8 中山遺跡



1 1区 全景（北から）



2 1区 全景（南から）

中山遺跡 図版9



1 1区 全景



2 2区 全景（北から）

図版 10 中山遺跡



1 2区 全景（北から）



2 2区 全景

中山遺跡 図版 11



1 3区 全景（南から）



2 3区 全景

図版 12 中山遺跡



1 2区 SD 1~4完掘状況（南から）



2 2区 SD 1~4完掘状況（北から）

中山遺跡 図版 13



1 2区 SX 2 完掘状況（南から）



2 2区 SX 2 土器出土状況



3 1区 SX 7 土器出土状況



4 2区 包含層土器出土状況



5 2区 包含層土器出土状況

図版 14 中山遺跡



1 2区南 完掘状況（南から）



2 2区 SH 1 完掘状況（北から）



3 2区 SH 1 全景（南から）

中山遺跡 図版 15



1 2区 SD 9~11 完掘状況（南西から）



2 1区 SD16·17 完掘全景（西から）



3 1区 SD19·20 完掘状況（北西から）



4 1区 SD21·22、SP20~27 完掘全景（南東から）



5 1区 SD19、SX 7 完掘状況（南から）

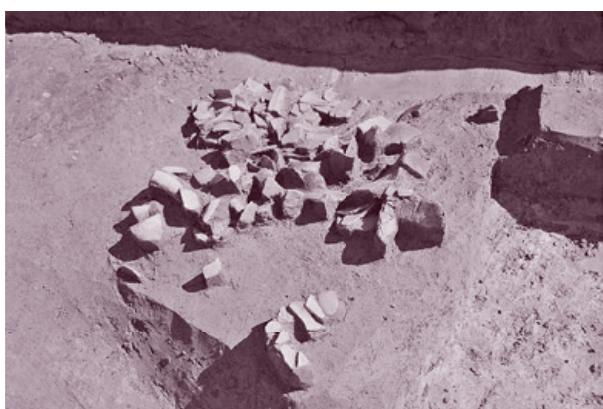


6 1区 SD20 遺物出土状況

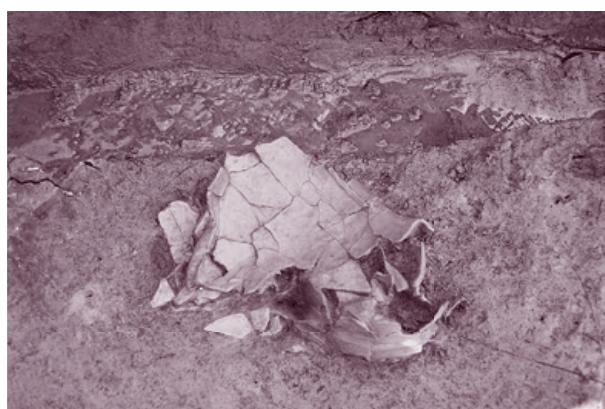
## 図版 16 中山遺跡



1 1区 SD23～25 完掘状況（北西から）



2 1区 SD23 東端遺物出土状況（北から）



3 1区 SD23 東端遺物出土状況（西から）



4 1区 SD23 東壁土層断面

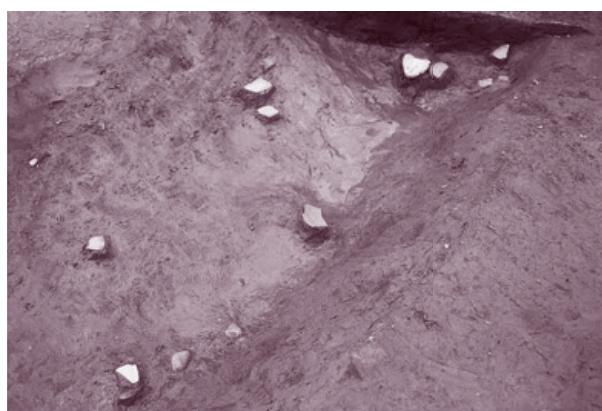


5 1区 SD24・25 付近完掘状況（北から）

中山遺跡 図版 17



1 3区 完掘状況（南から）



2 3区 SR 1 遺物出土状況



3 3区 SR 1 完掘状況（東から）



4 3区 SD 1 完掘状況（東から）



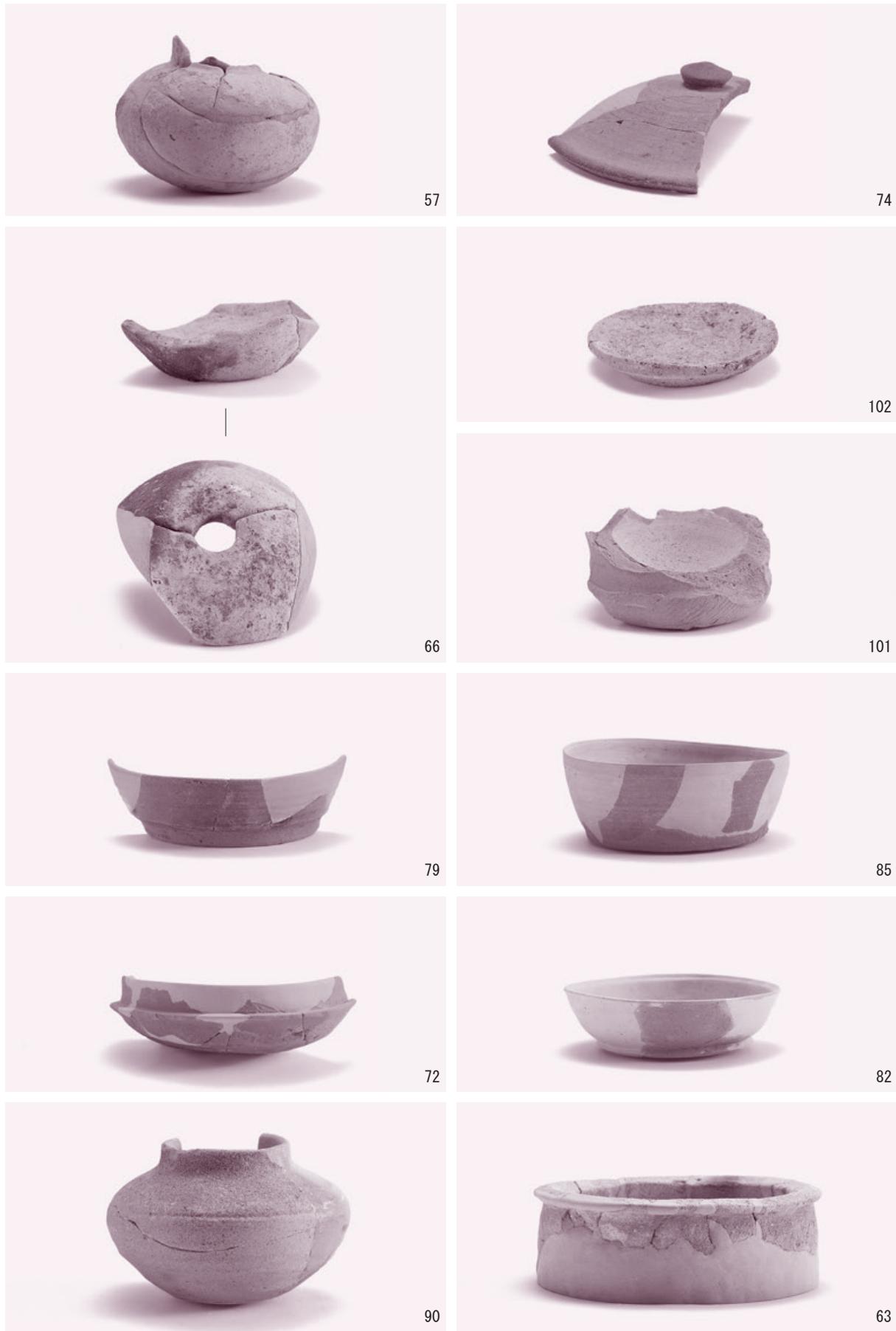
5 3区 SD 2・3 完掘状況（南から）

図版 18 中山遺跡



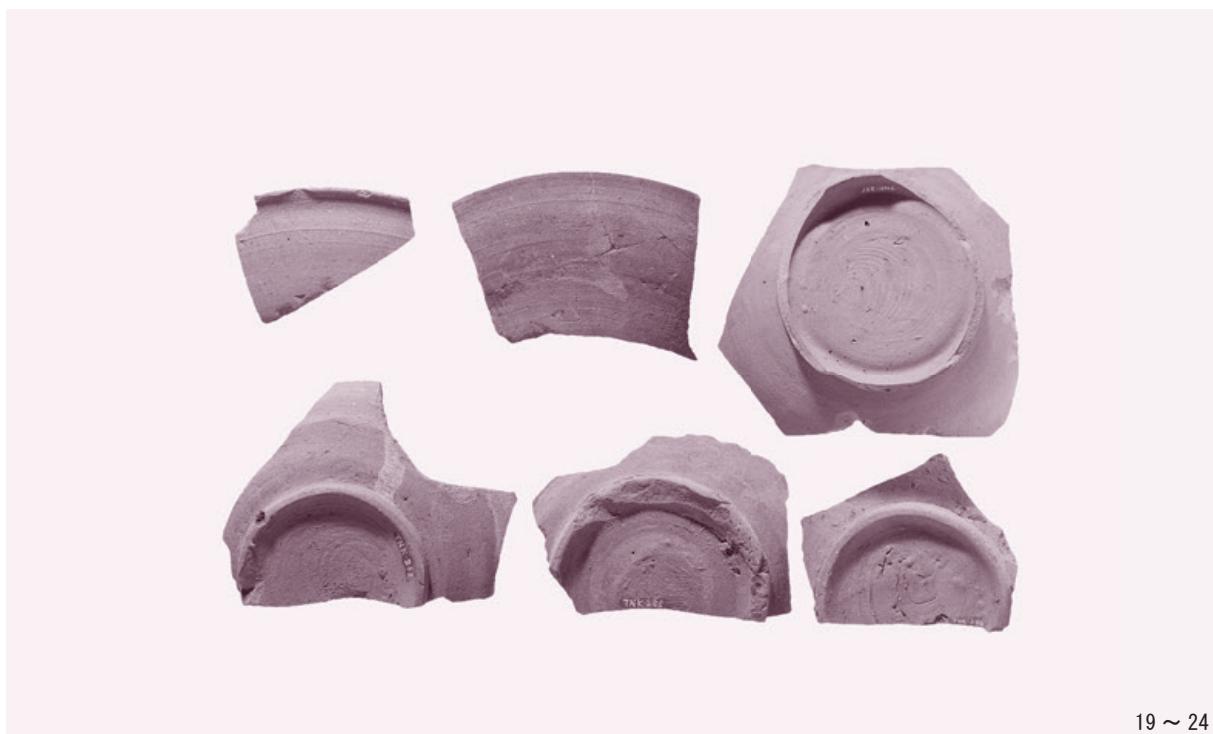
出土遺物1

中山遺跡 図版 19



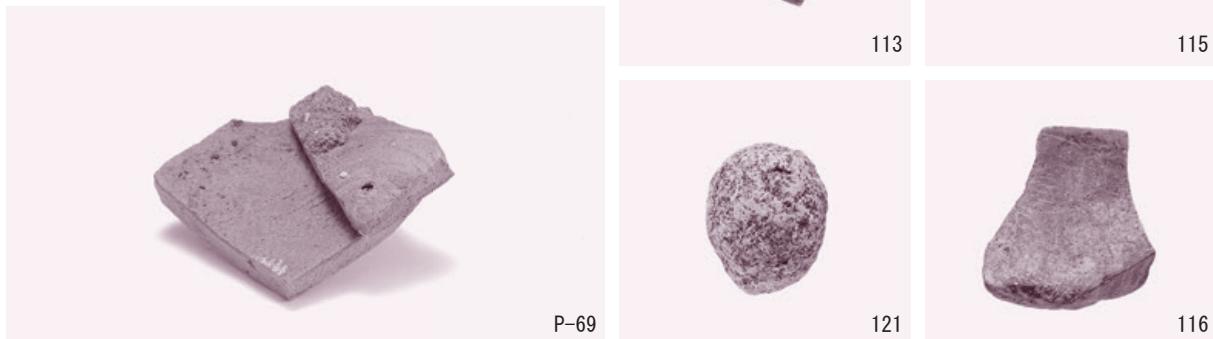
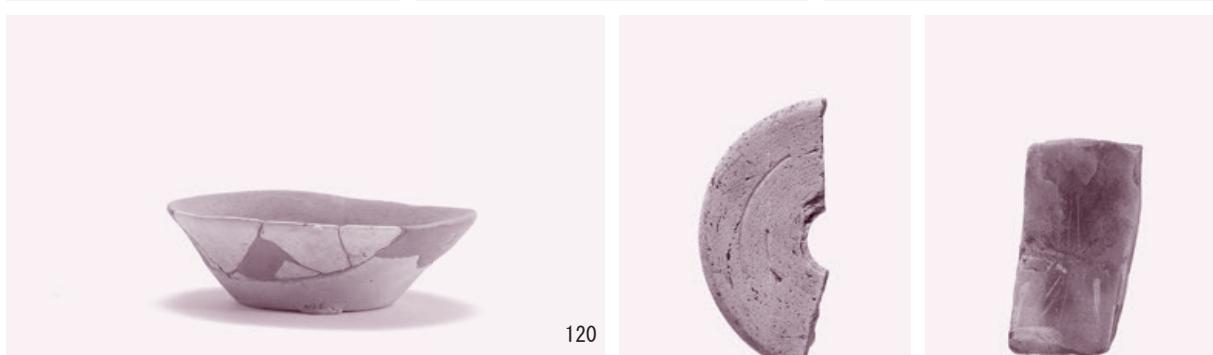
出土遺物2

図版 20 中山遺跡



19 ~ 24

1 3区 SR 1出土土器



2 出土遺物3

高橋遺跡 図版 21



1 1-1区北上層 SD 1、SF 1・2完掘状況（南から）



2 1-1区北上層 SD 1 遺物出土状況（東から）



3 1-1区北上層 SX 2 遺物出土状況（西から）



4 1-1区北上層 SF 1 遺物出土状況



5 1-1区北上層 SF 2 遺物出土状況（東から）

## 図版 22 高橋遺跡



1 1-1区北 完掘状況（南から）



2 1-1区北 w 29 グリッド周辺完掘状況（南西から）



3 1-1区北 SX 8周辺完掘状況（南西から）

高橋遺跡 図版 23



1 1-1区北 完掘状況（北から）



2 1-1区北 SD 5 遺物出土状況（東から）



3 1-1区北 SD 7 完掘状況（南西から）



4 1-1区北 SD 3 遺物出土状況



5 1-1区北 SP 7 遺物（柱）出土状況（東から）

図版 24 高橋遺跡



1 1-1区南 完掘状況



2 1-1区南 w 33 グリッド杭周辺完掘状況（南西から）



3 1-1区南 SD 9周辺完掘状況（南西から）



4 1-1区南 完掘状況（北から）

高橋遺跡 図版 25



1 1-1区南 SD 8周辺完掘状況（南から）



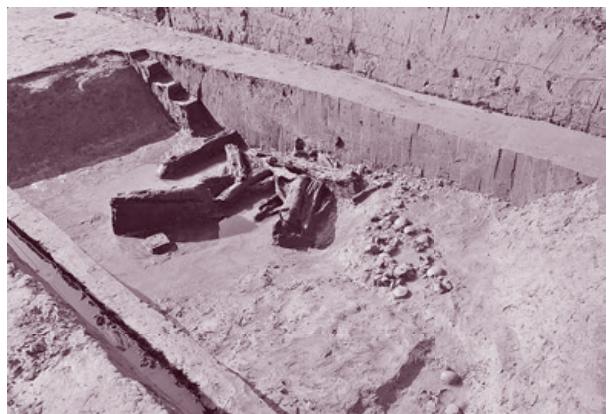
2 1-1区南 SX 9 (SD 8最上層) 遺物出土状況（東から）



3 1-1区南 SX10 (SD 8最上層) 遺物出土状況（西から）



4 1-1区南 SD 8遺物出土状況（南西から）

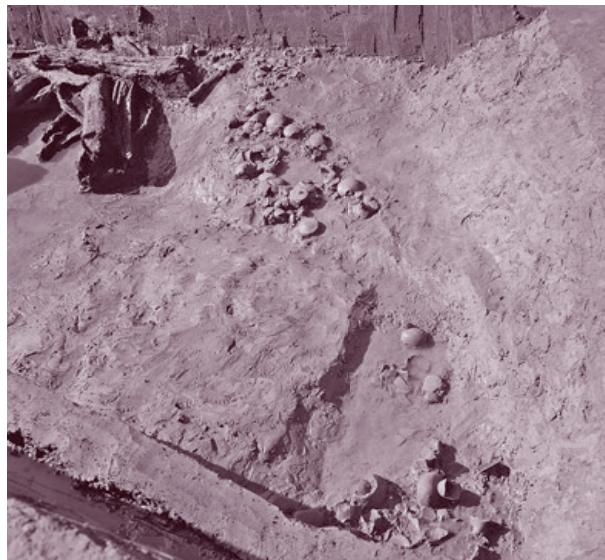


5 1-1区南 SD 8遺物出土状況（北東から）

## 図版 26 高橋遺跡



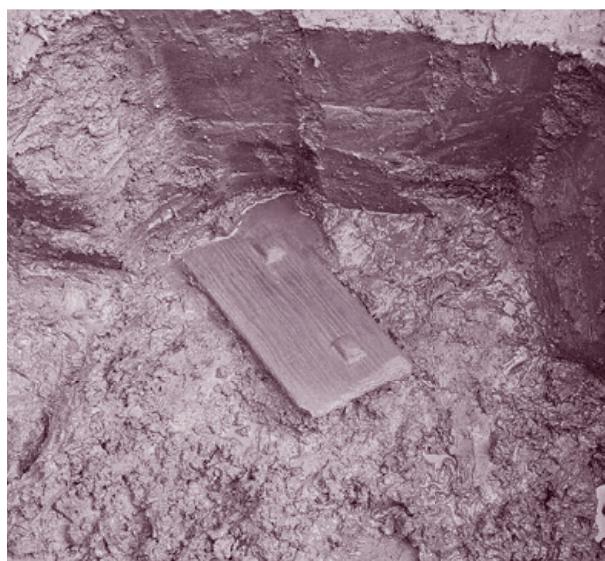
1 1-1区南 SD 8 遺物出土状況（東から）



2 1-1区南 SD 8 遺物出土状況（北東から）



3 1-1区南 SD 8 下層木製品出土状況（東から）



4 1-1区南 SD 8 下層木製品出土状況（西から）



5 1-1区南 SD 8 完掘状況（南西から）



6 1-1区南 SD 8 完掘状況（南東から）

高橋遺跡 図版 27



1 1-2区・2-3区 遠景（南西から）



2 1-2区・2-3区 全景

## 図版 28 高橋遺跡



1 1-2区 完掘状況（北から）



2 1-2区 完掘状況（南東から）

高橋遺跡 図版 29



1 1-2区 SD 1~3完掘状況（東から）



2 1-2区 SD 2土器出土状況



3 1-2区 SD 4完掘状況（東から）



4 1-2区 SD 4土器出土状況



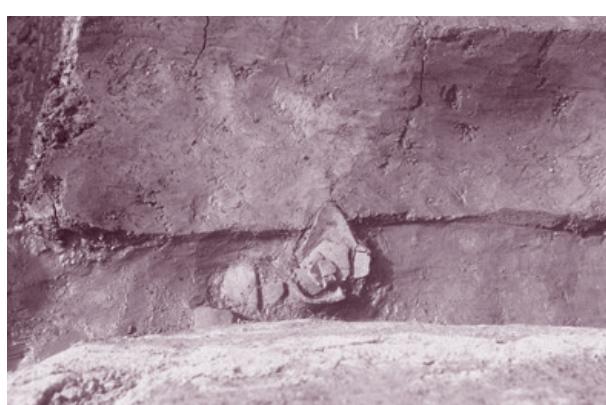
5 1-2区 SR 1完掘状況（東から）



6 1-2区 SR 1土器出土状況



7 1-2区 包含層土器出土状況

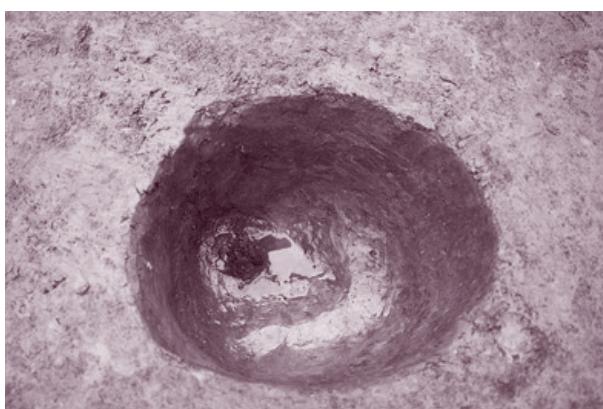


8 1-2区 SX 1土器出土状況

## 図版 30 高橋遺跡



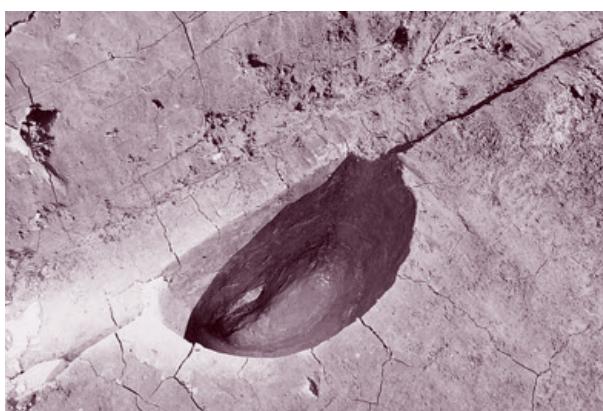
1 1-2区 SH 2 完掘状況（東から）



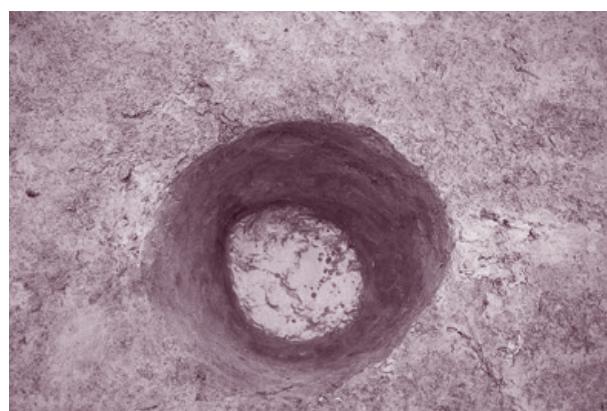
2 1-2区 SP 1 (SH 2) 完掘状況



3 1-2区 SP 3 (SH 2) 完掘状況



4 1-2区 SP 9 (SH 2) 完掘状況

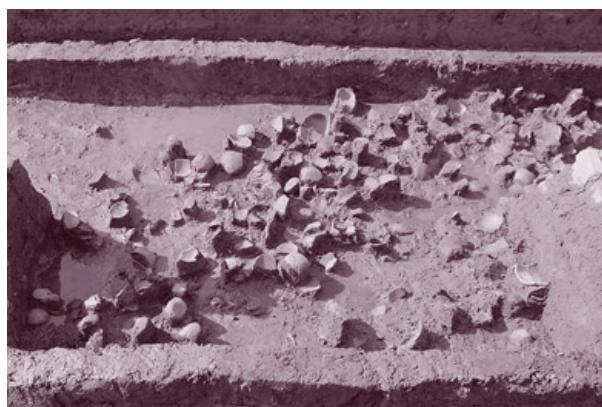


5 1-2区 SP 2 完掘状況

高橋遺跡 図版 31



1 1-2区 SR 2土器出土状況（東から）



2 1-2区 SR 2土器出土状況



3 1-2区 SR 2土器出土状況



4 1-2区 SR 2土器出土状況

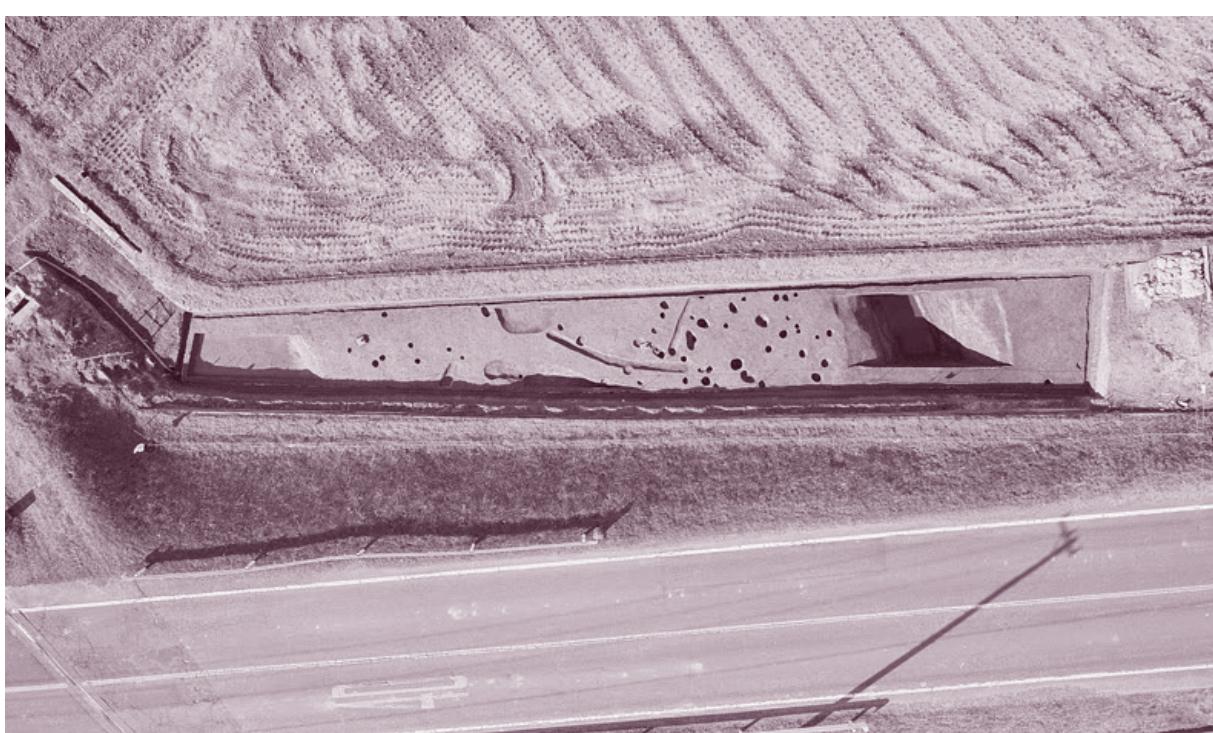


5 1-2区 SR 2完掘状況

図版 32 高橋遺跡



1 2-1区北 全景（東から）



2 2-1区北 全景

高橋遺跡 図版 33



1 2-1区北 完掘状況（南から）



2 2-1区北 SD 8付近完掘状況



3 2-1区北 t 35+4杭周辺完掘状況（南西から）



4 2-1区北 SX13・14周辺完掘状況（南西から）



5 2-1区北 t 36杭周辺完掘状況（南西から）

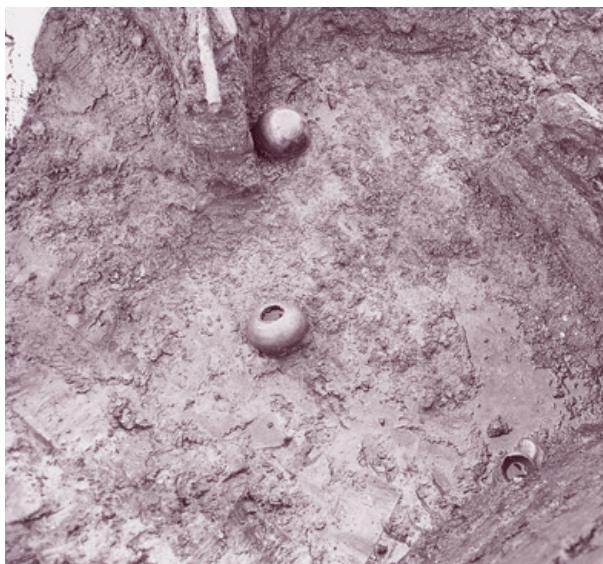
## 図版 34 高橋遺跡



1 2-1区北 SD 8 木製品出土状況（北東から）



2 2-1区北 SD 8 木製品出土状況（北西から）



3 2-1区北 SD 8 土器出土状況（東から）



4 2-1区北 SD 8 完掘状況（北東から）



5 2-1区北 SD10 土器出土状況（西から）



6 2-1区北 SX13 土器出土状況（南西から）

高橋遺跡 図版 35



1 2-1区南 全景（南西から）



2 2-1区南 完掘状況（東から）



3 2-1区南 SD13 完掘状況（南東から）

## 図版 36 高橋遺跡



2 2-2区 SD14 完掘状況（北東から）



3 2-2区 SD15 土器出土状況（東から）

高橋遺跡 図版 37



1 2-3区 全景（南から）



2 3区北 全景（北東から）

図版 38 高橋遺跡



1 3区北 全景



2 3区北 完掘状況（北東から）



4 3区北 完掘状況（南西から）

高橋遺跡 図版 39



1 3区南 完掘状況（北から）



2 3区南 完掘状況（南から）

## 図版 40 高橋遺跡



1 3区北 桁列1・2検出状況（北東から）



2 3区北 桁列1・2検出状況（南西から）



3 3区北 桁列1検出状況（西から）



4 3区北 桁列2検出状況（東から）

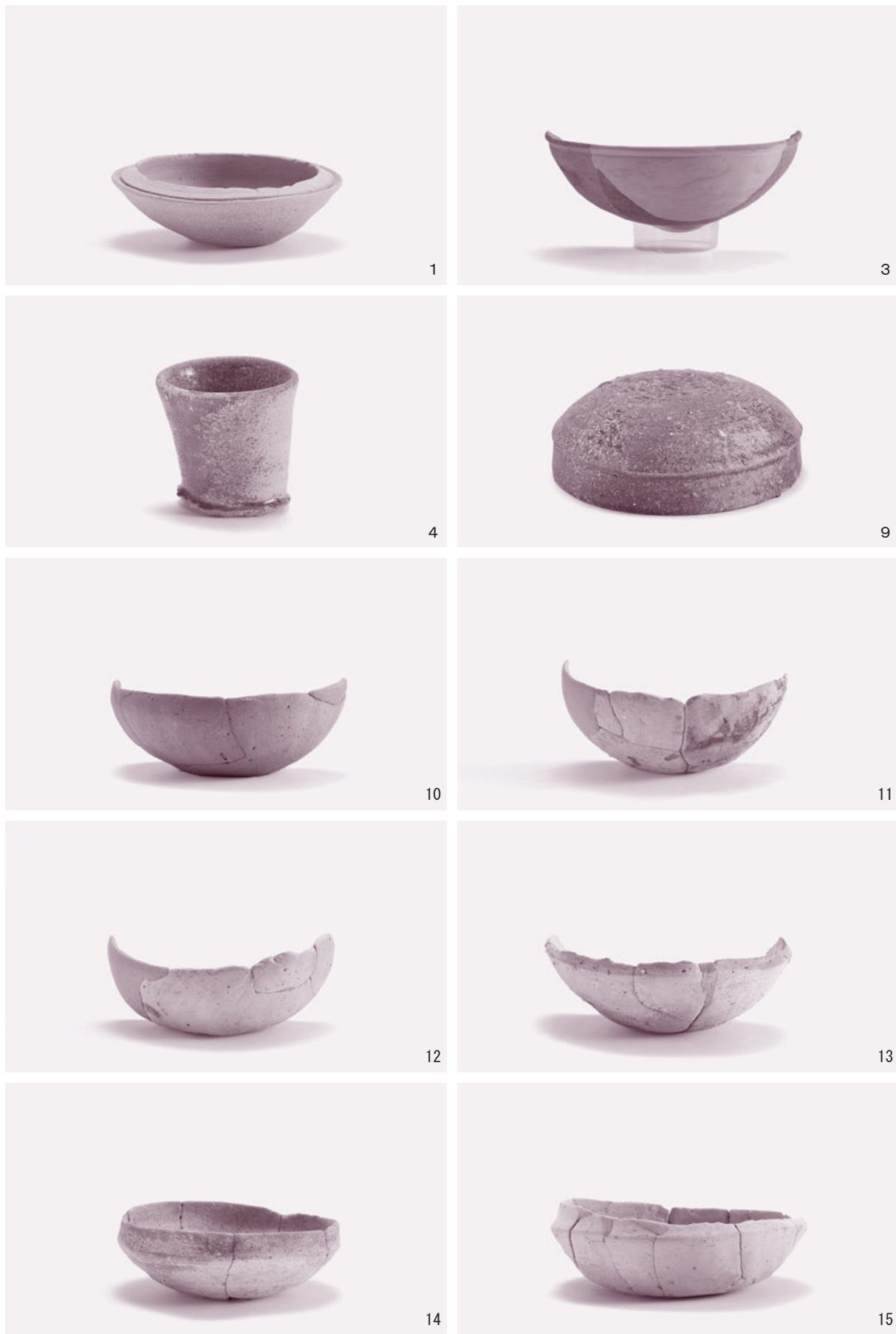


5 3区南 中央部完掘状況（西から）



6 3区南 南端部完掘状況（南西から）

高橋遺跡 図版 41



遺構出土遺物1

図版 42 高橋遺跡

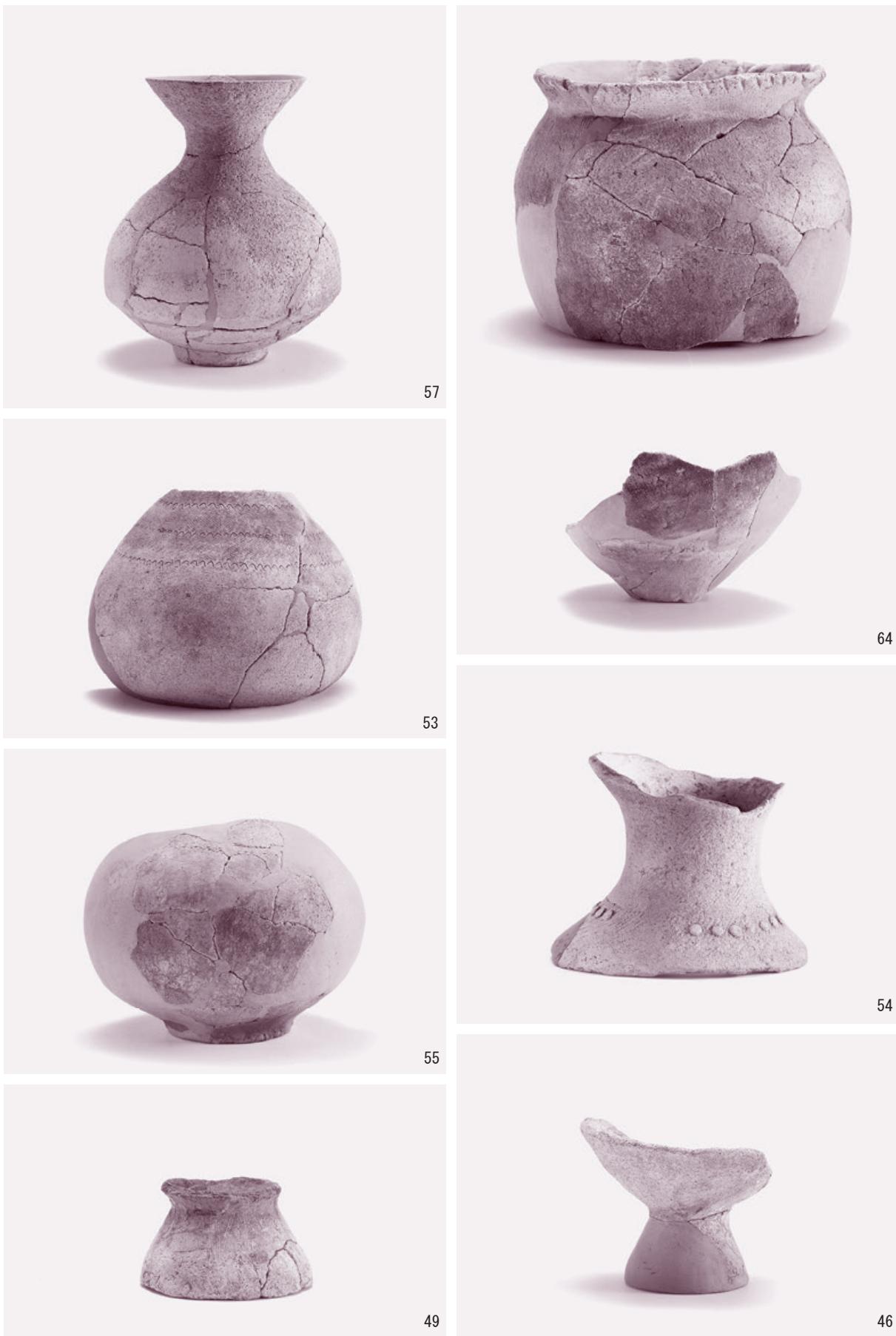


遺構出土遺物2



遺構出土遺物3

図版 44 高橋遺跡



遺構出土遺物4

高橋遺跡 図版 45



遺構出土遺物5

図版 46 高橋遺跡



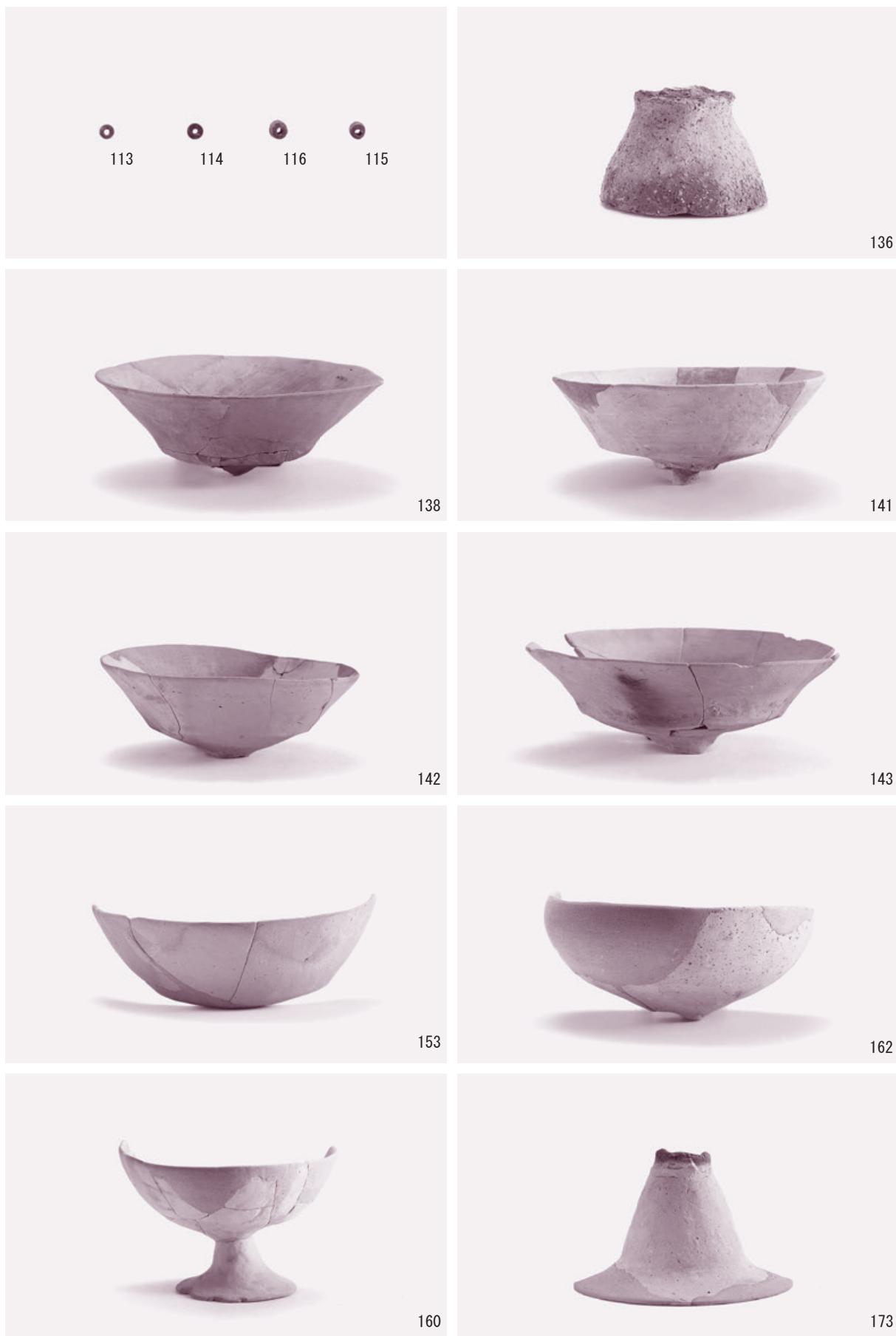
遺構出土遺物6

高橋遺跡 図版 47



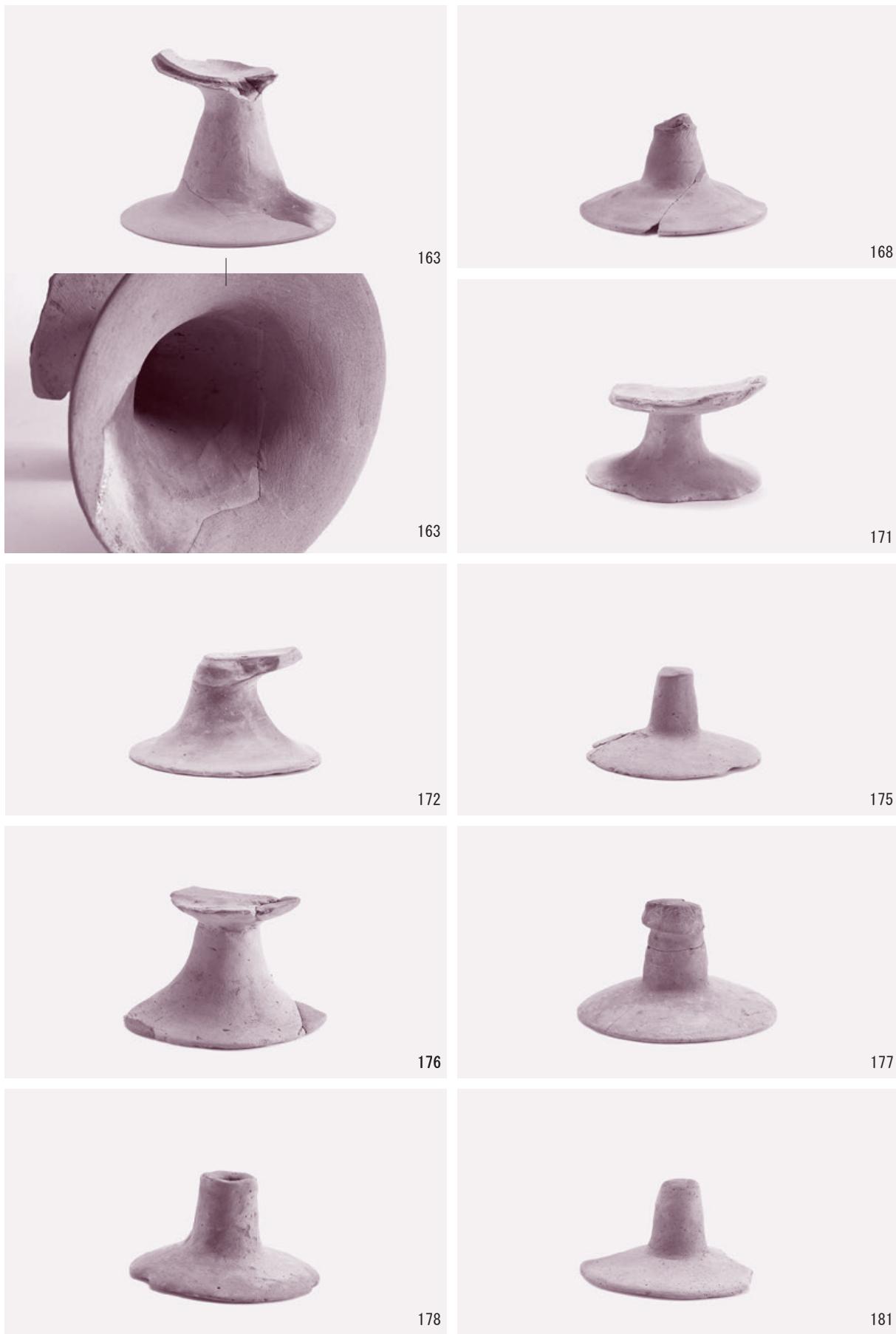
遺構出土遺物7

図版 48 高橋遺跡



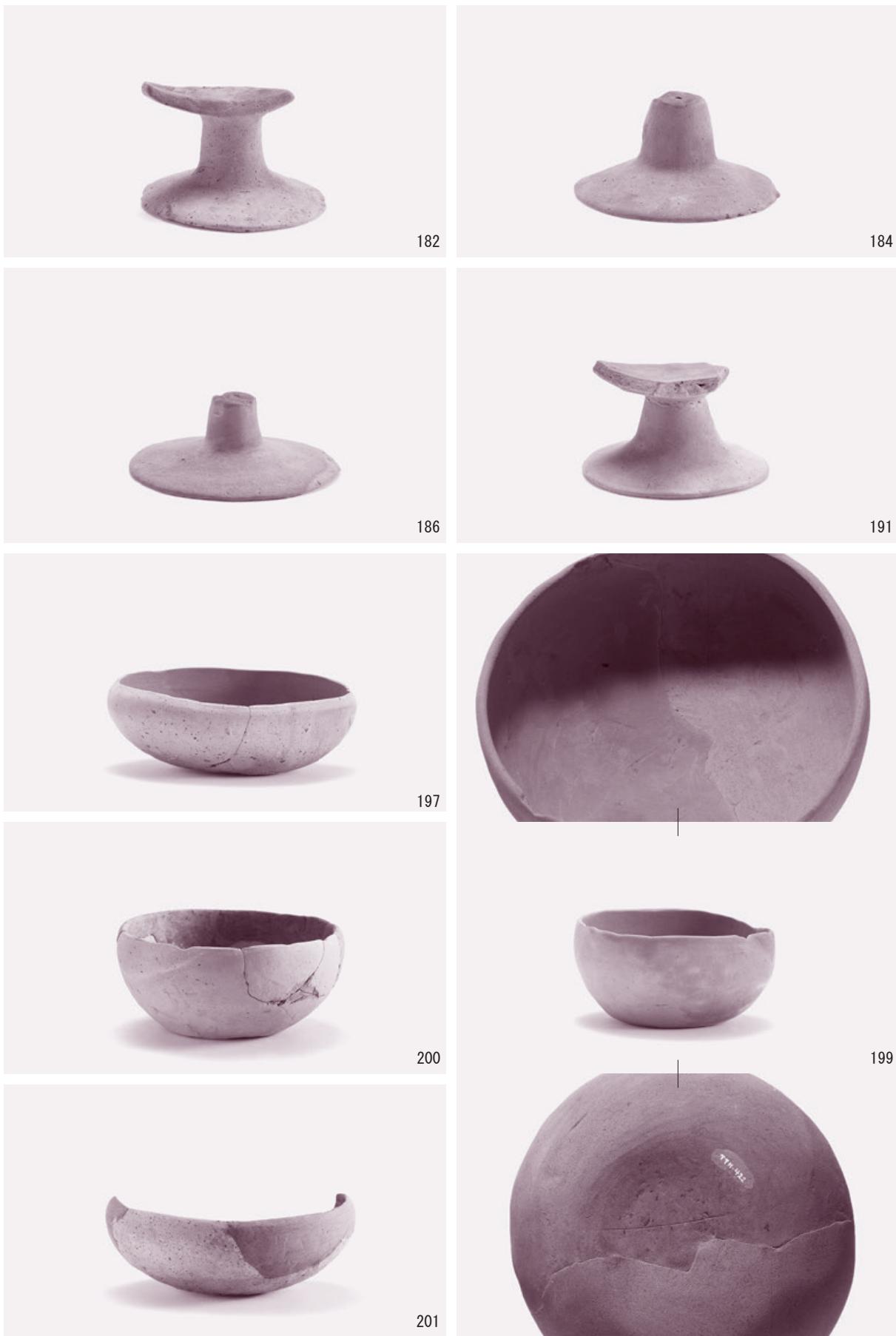
遺構出土遺物8

高橋遺跡 図版 49



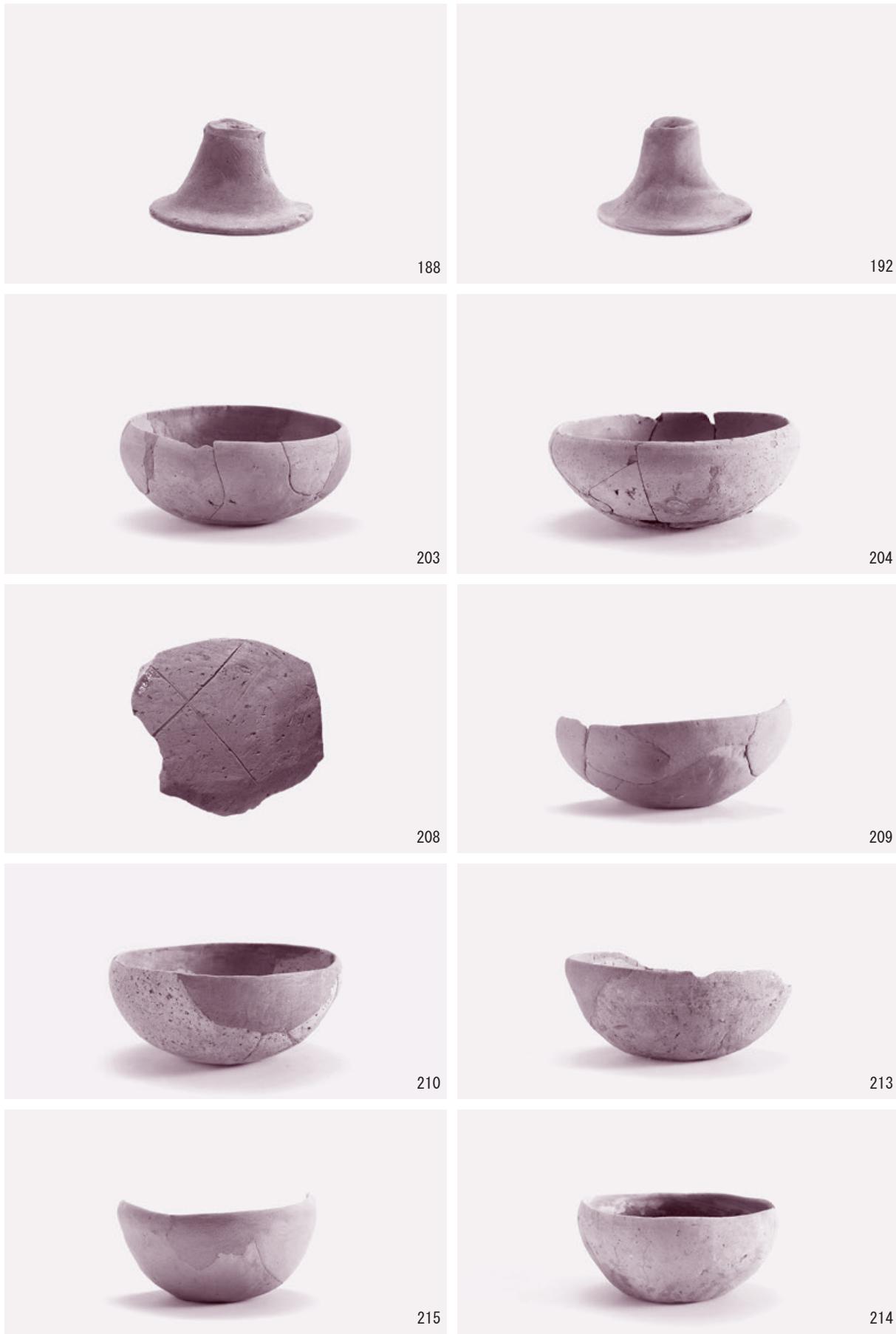
遺構出土遺物9

図版 50 高橋遺跡



遺構出土遺物 10

高橋遺跡 図版 51

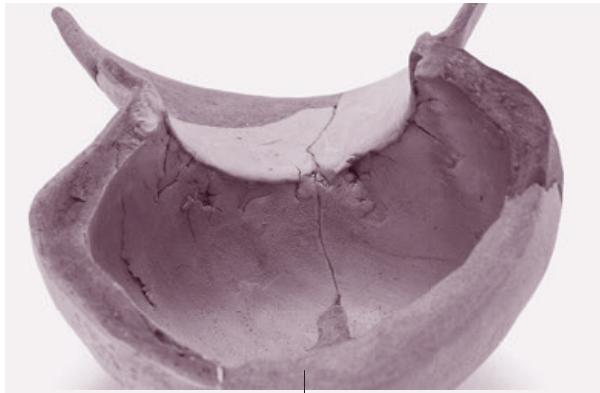


遺構出土遺物 11

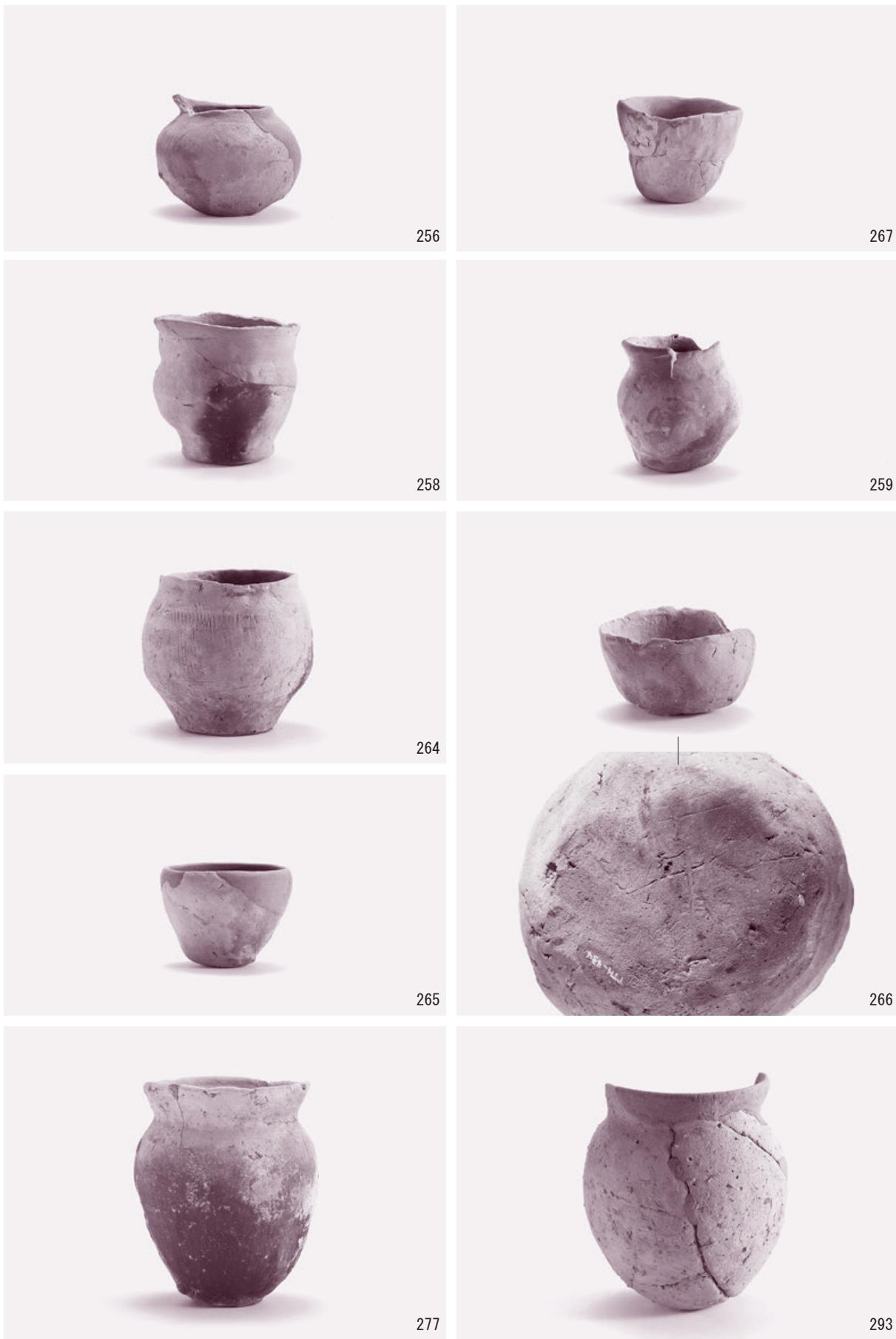
図版 52 高橋遺跡



遺構出土遺物 12



図版 54 高橋遺跡



包含層出土遺物 14

高橋遺跡 図版 55



遺構出土遺物 15

図版 56 高橋遺跡



319



320



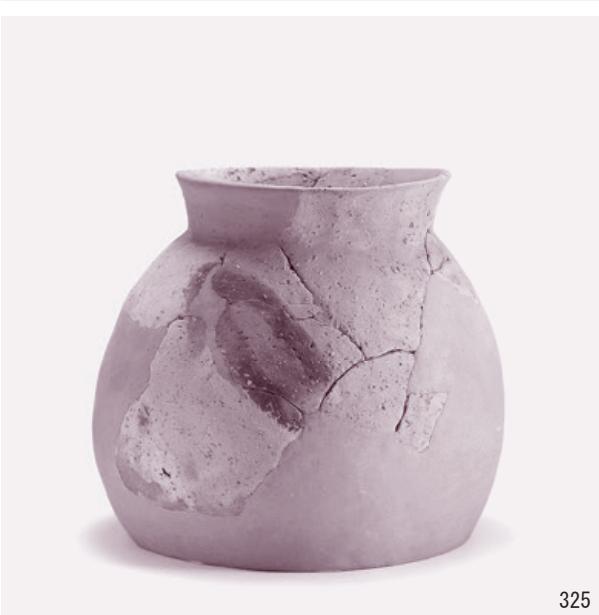
326



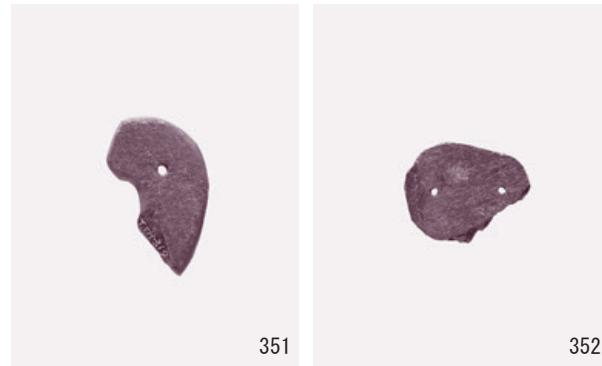
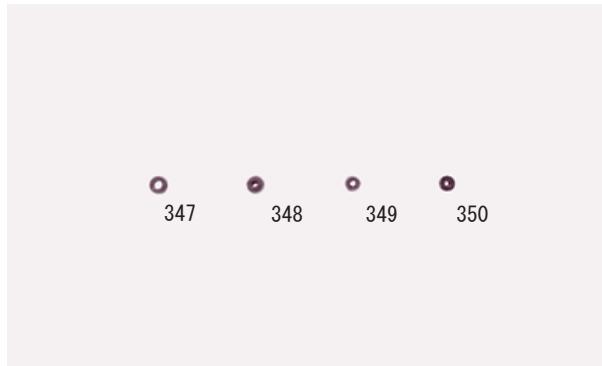
322



318

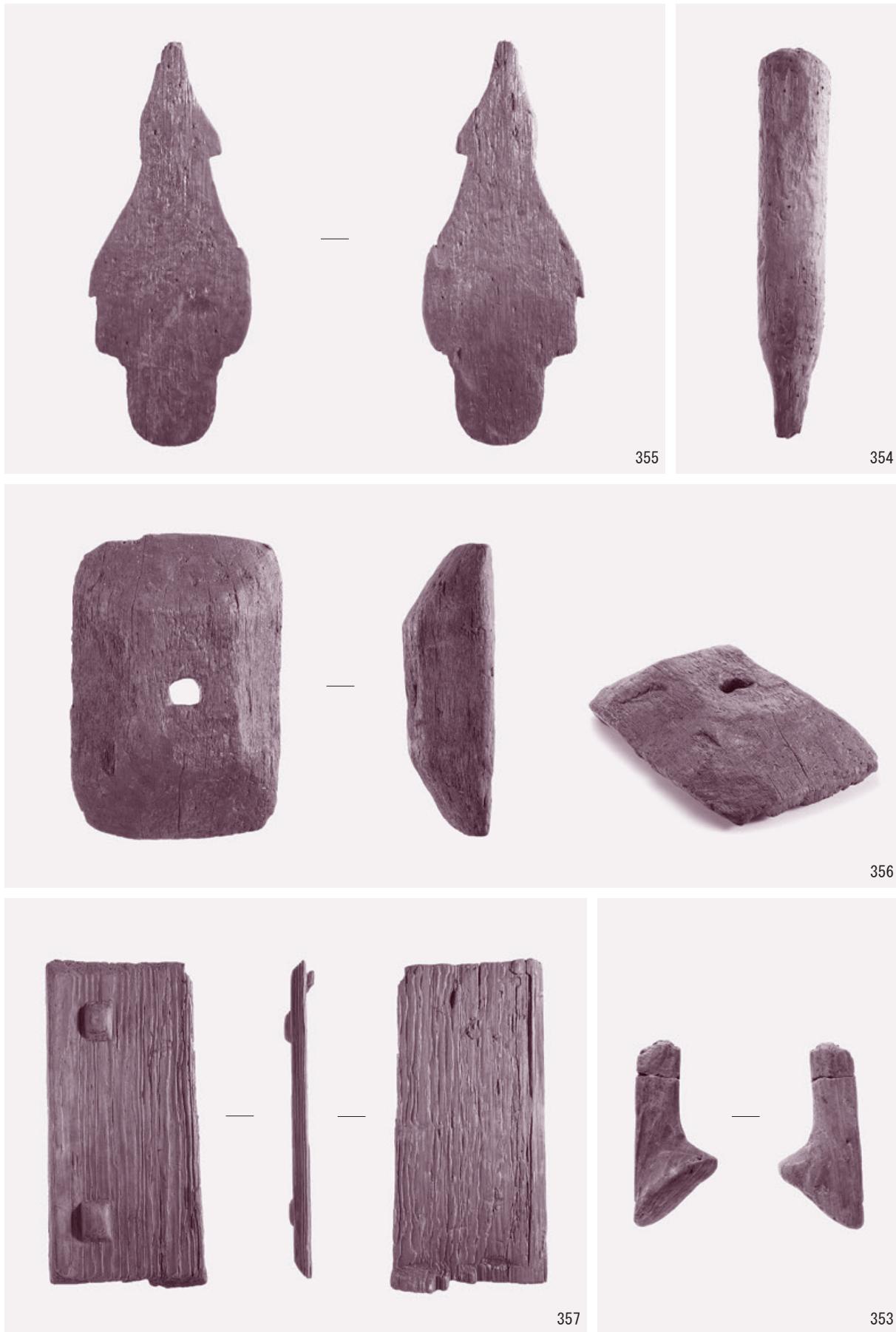


325

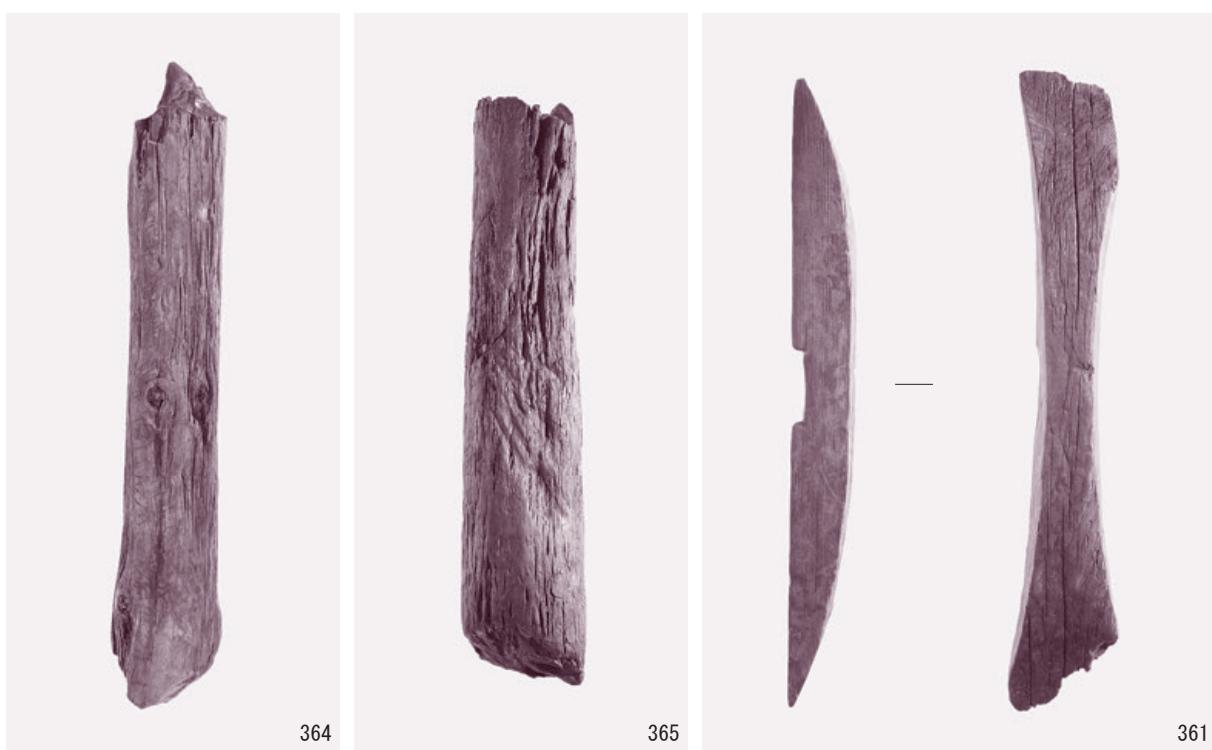
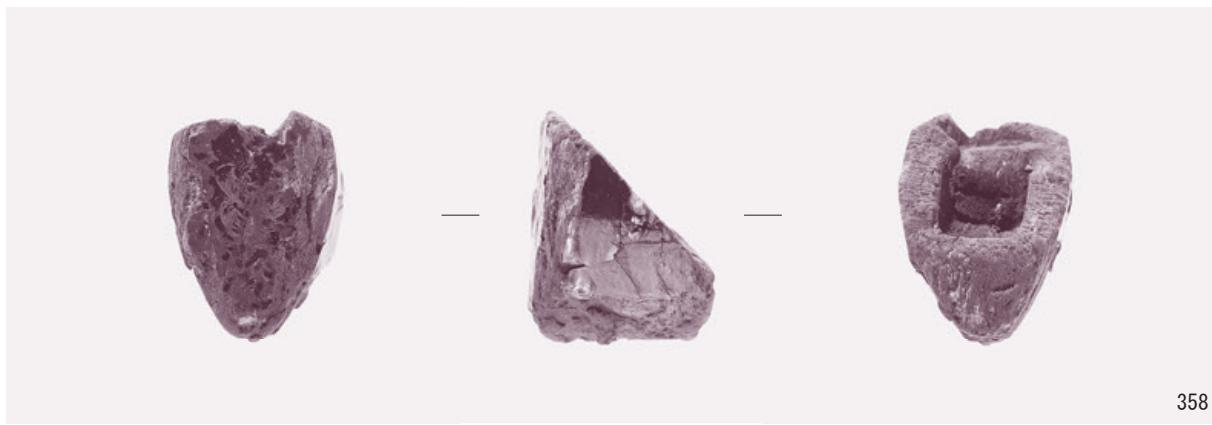


遺構出土遺物 17

図版 58 高橋遺跡



遺構出土遺物 18

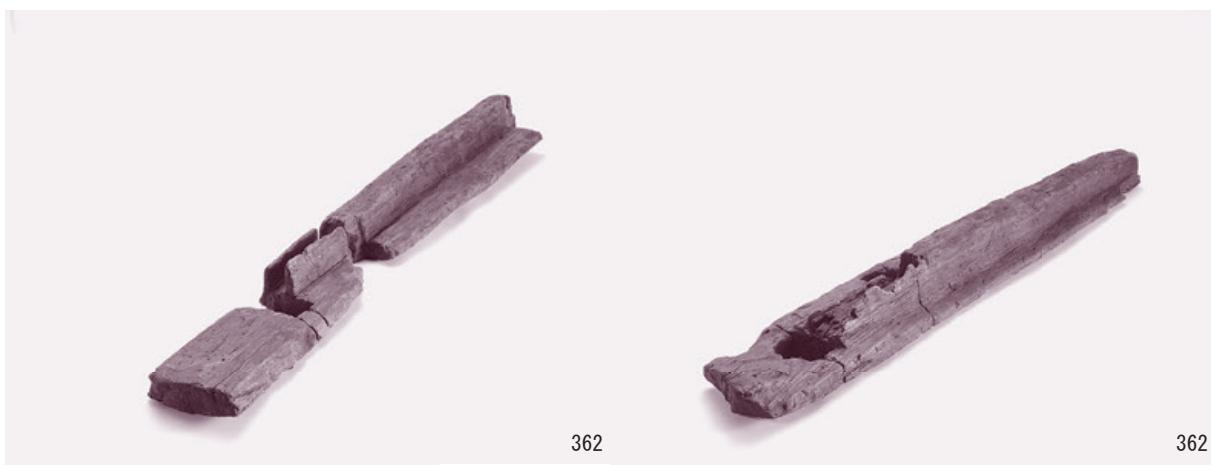


図版 60 高橋遺跡



362

363



362

362

遺構出土遺物 20

高橋遺跡 図版 61

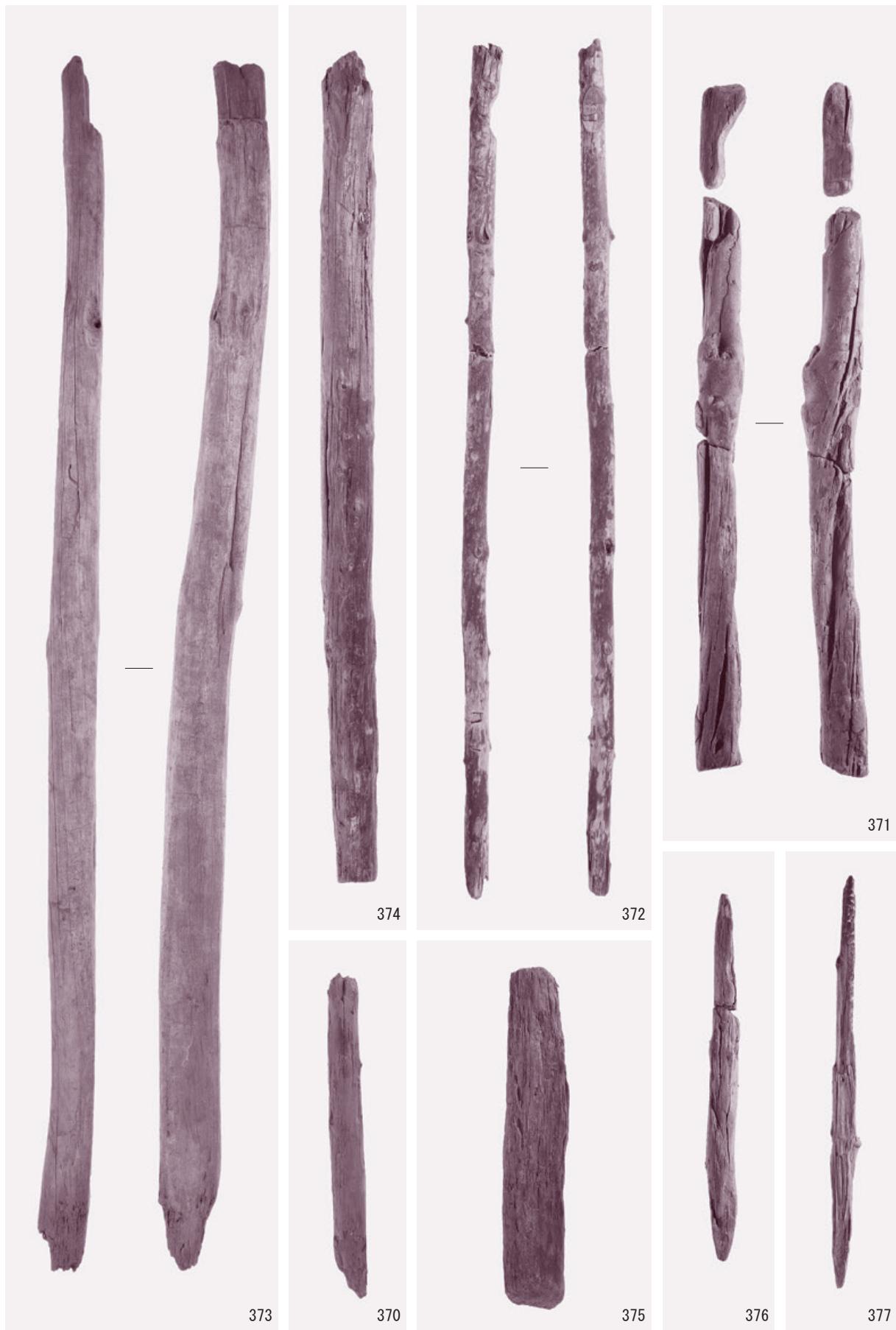


367

366

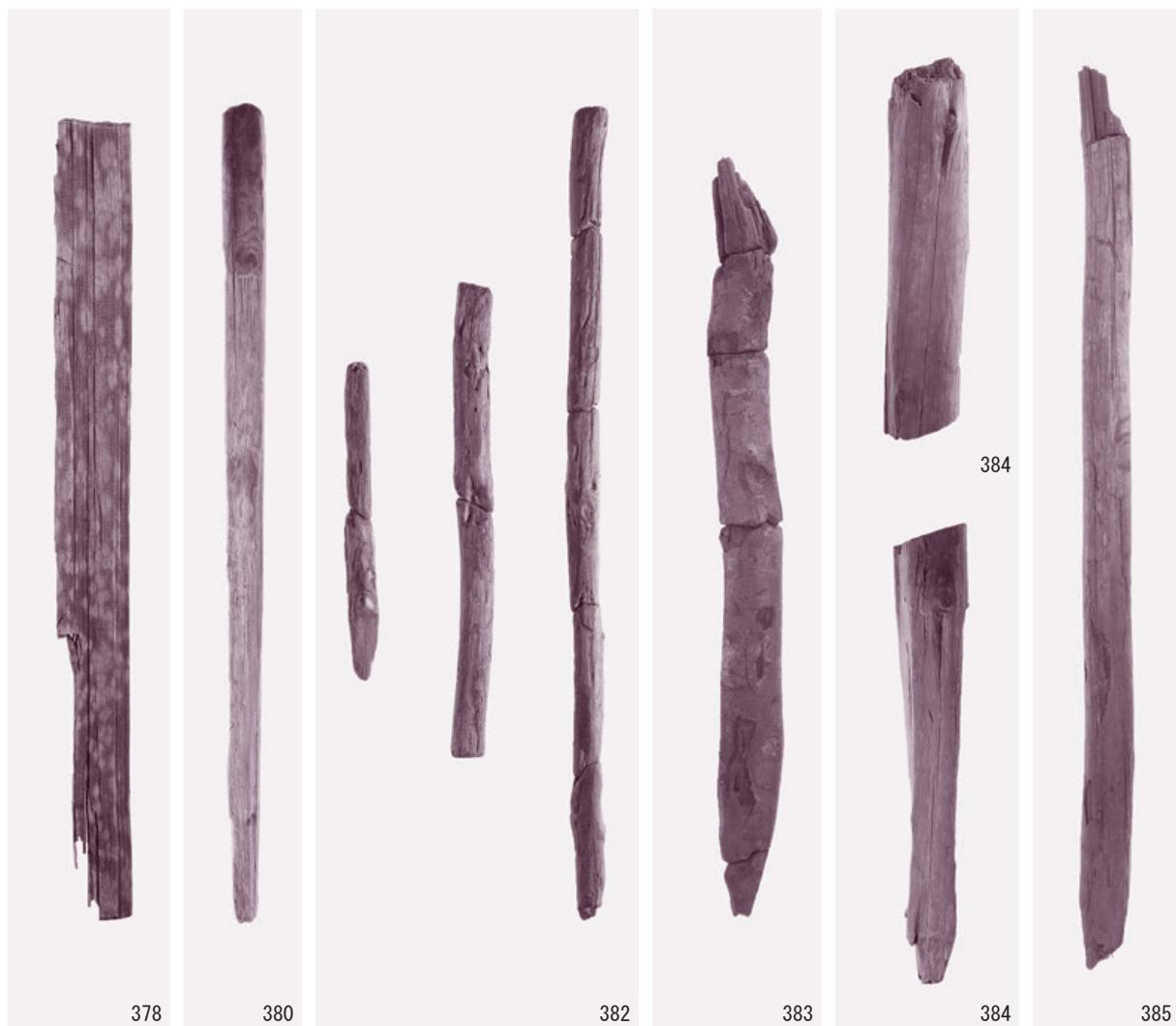


図版 62 高橋遺跡



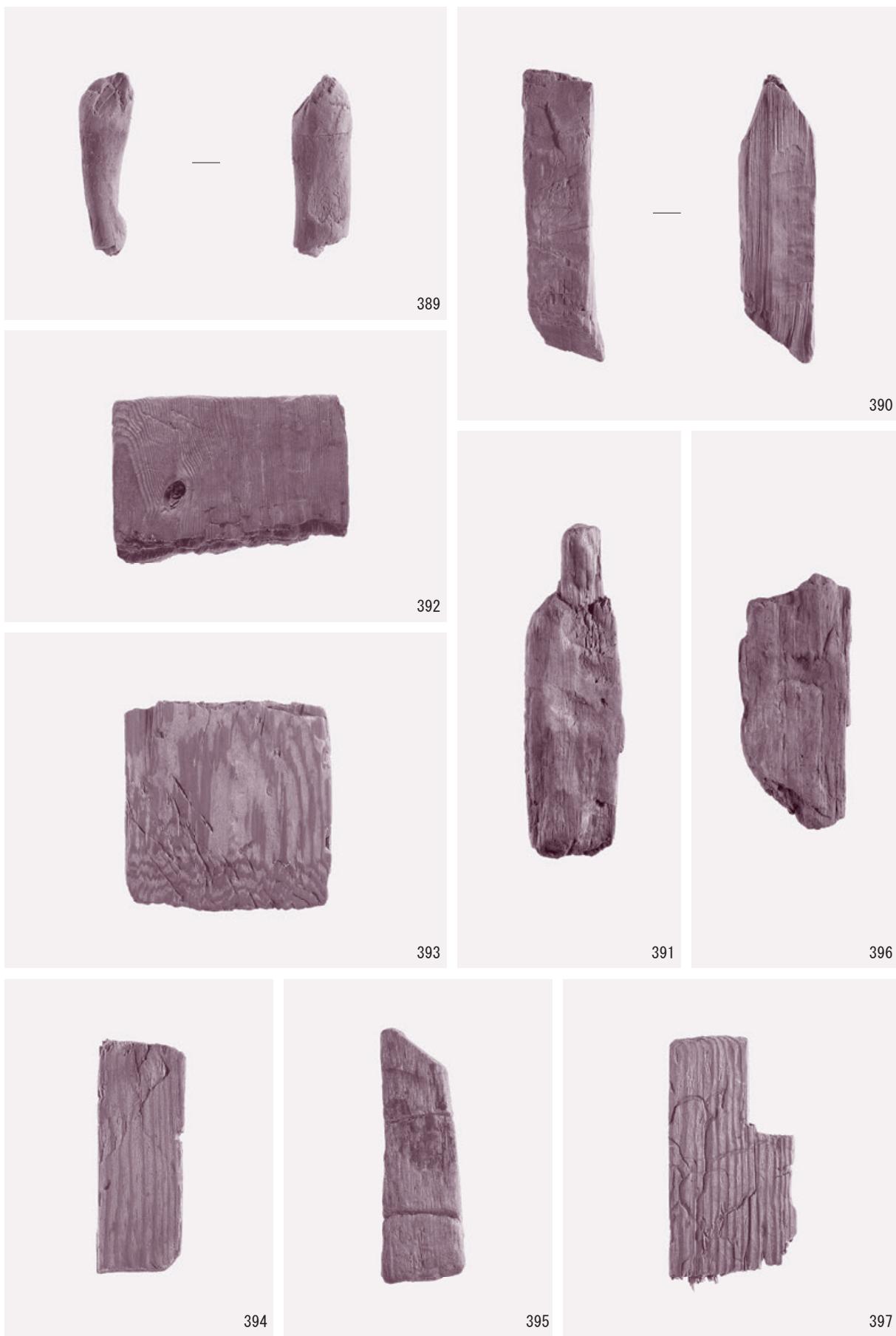
遺構出土遺物 22

高橋遺跡 図版 63



遺構出土遺物 23

図版 64 高橋遺跡



遺構出土遺物 24

高橋遺跡 図版 65



遺構出土遺物 25

図版 66 高橋遺跡

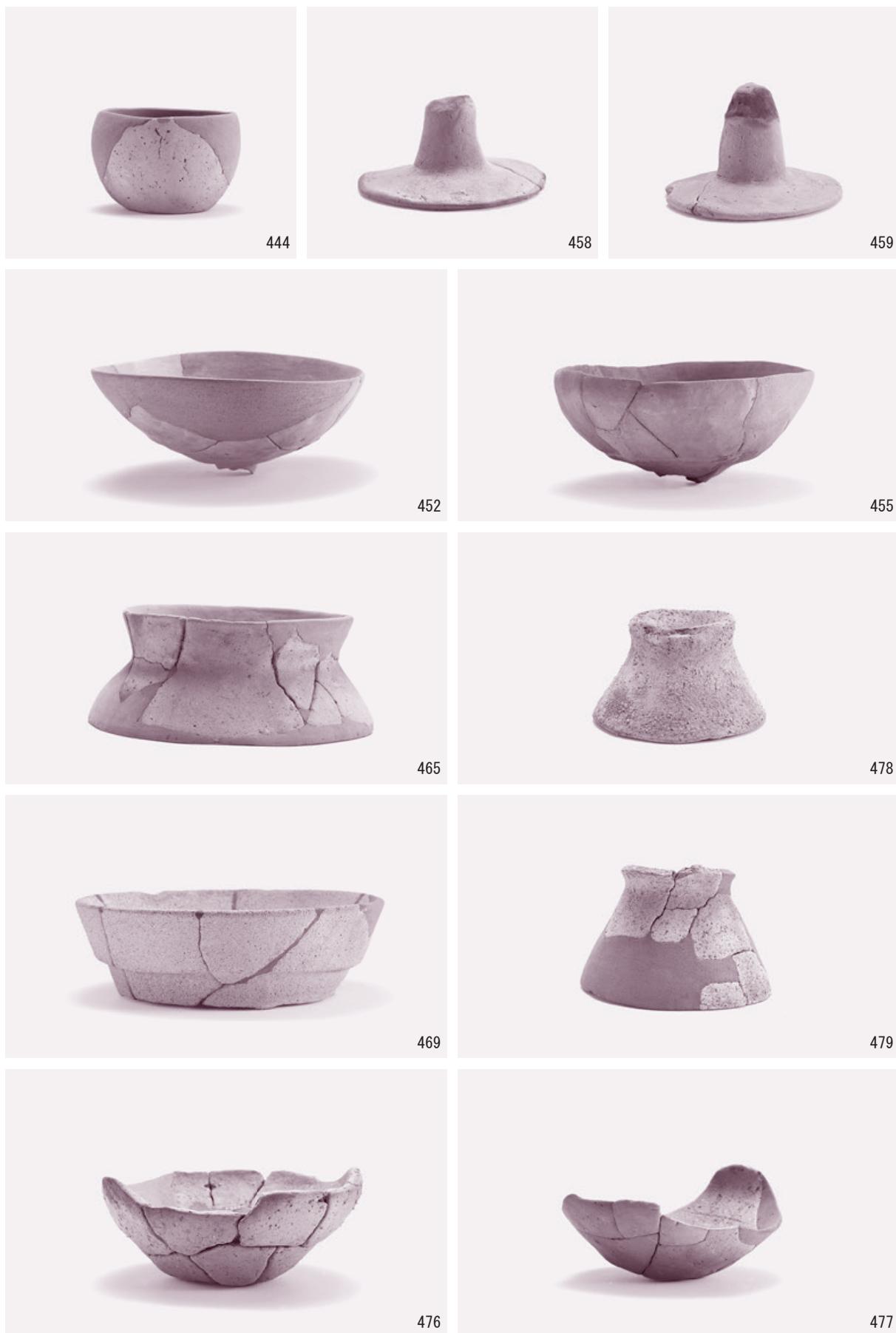


遺構出土遺物 26



図版 68 高橋遺跡





遺構出土遺物 29

図版 70 高橋遺跡

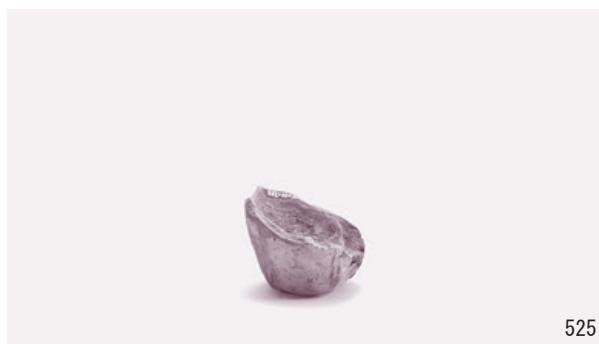


遺構出土遺物 30



包含層出土遺物1

図版 72 高橋遺跡



包含層出土遺物2



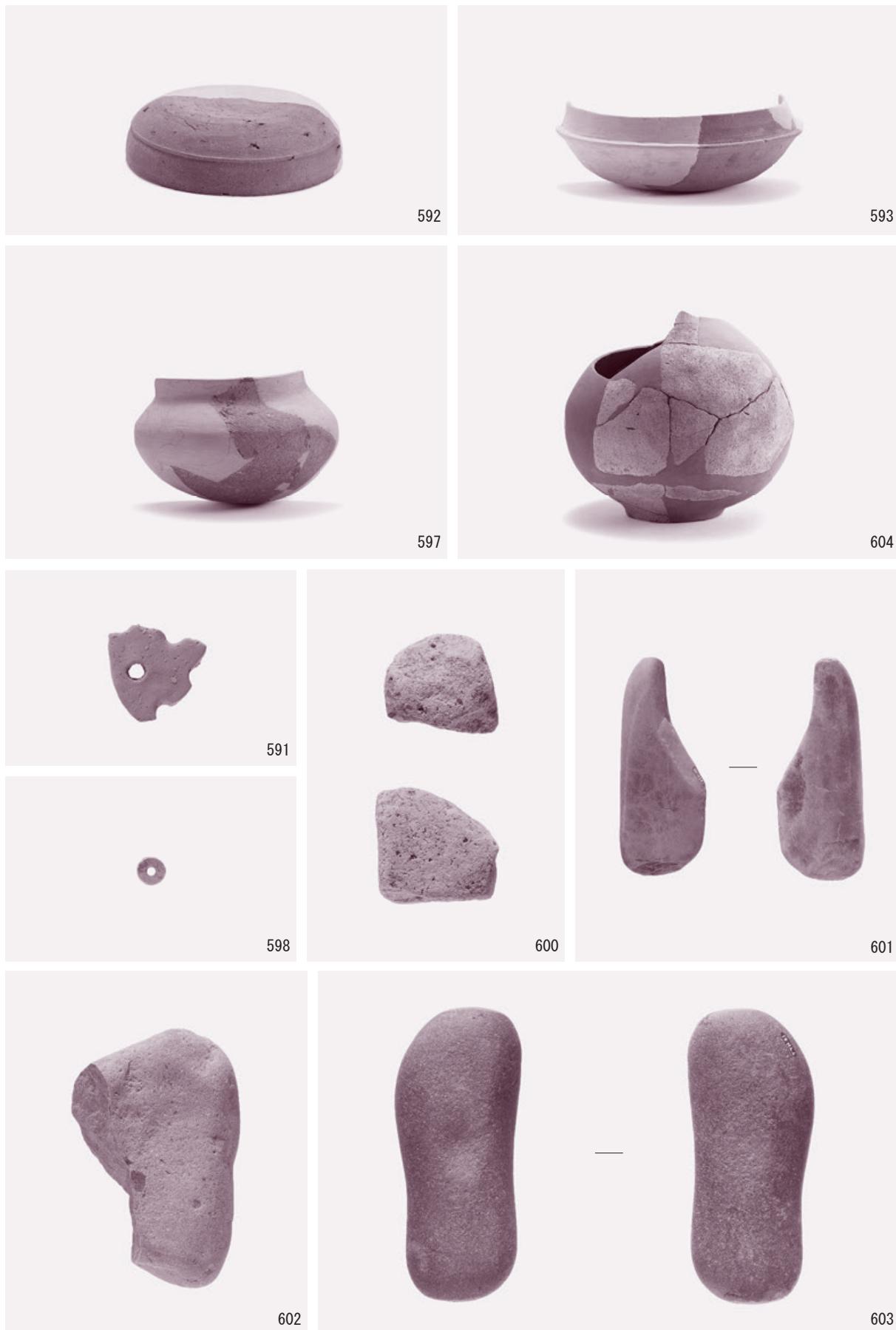
包含層出土遺物3

図版 74 高橋遺跡



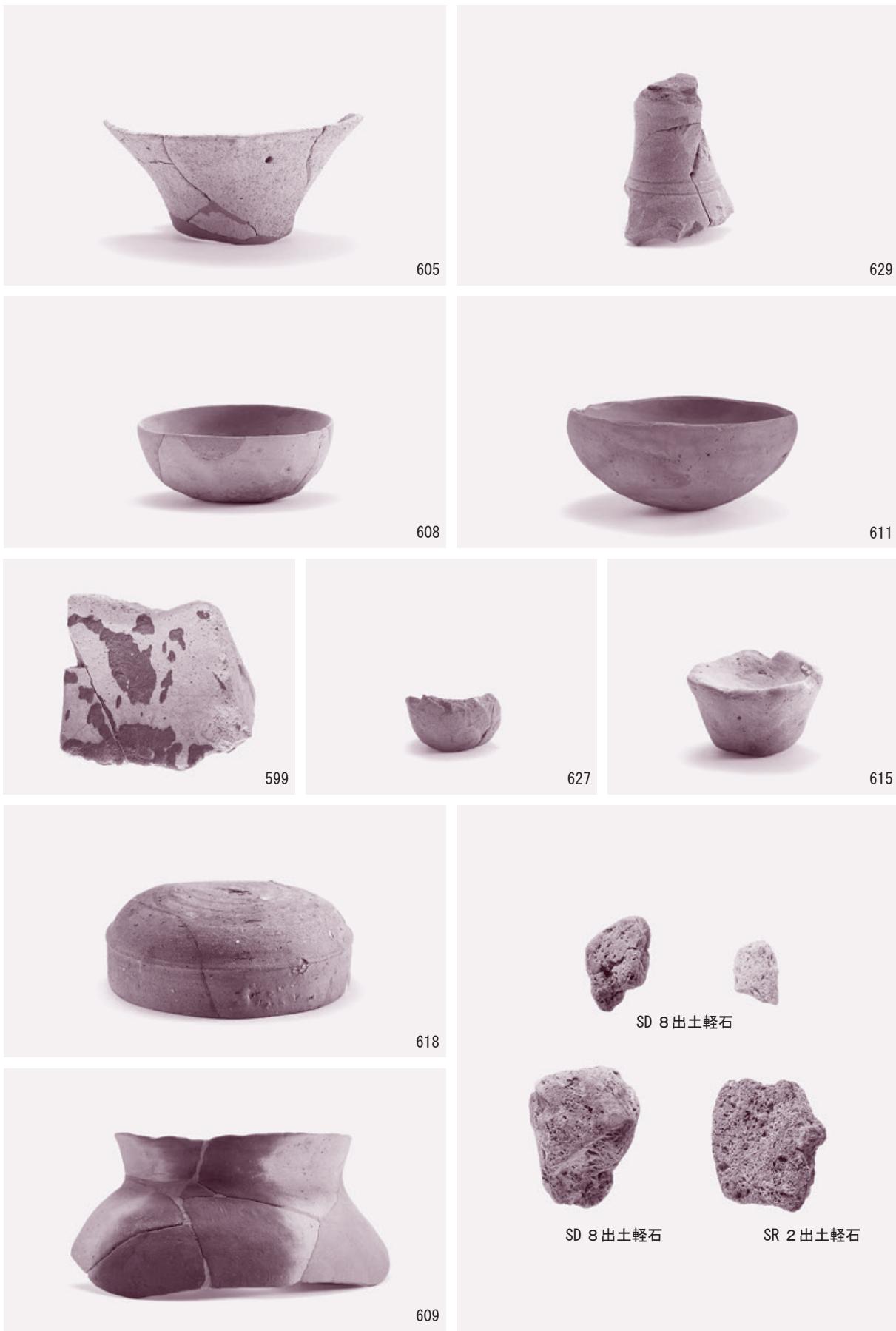
包含層出土遺物4

高橋遺跡 図版 75



包含層出土遺物5

図版 76 高橋遺跡



包含層出土遺物6

# 報告書抄録

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第61集

池之谷遺跡

中山遺跡

高橋遺跡

菊川市

平成24～令和元年度掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備に伴う

埋蔵文化財発掘調査

令和2年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300-5

TEL 054-385-5500（代）

FAX 054-385-5506

印 刷 所 文光堂印刷株式会社

〒410-0871 静岡県沼津市西間門68-1

TEL 055-926-2800

FAX 055-926-2855